

---

# MONSTER HUNTER**最終章** ~ 太古の巨龍と戦旗の王女 ~

後藤正人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MONSTER HUNTER 最終章〜太古の巨龍と戦旗の王女〜

### 【Nコード】

N0755P

### 【作者名】

後藤正人

### 【あらすじ】

文明が栄える度、王龍はそれを呑み込んだ。人が抵抗をする度に、テラドミヌスはそれを踏みにじる。これは幾度となく繰り返されてきた宴。五〇〇年の時をまたぎ繰り返されてきた滅び。殺戮され続けた命。そしてそれは意味する。何度でも、何度でも、人は、命は抗い続けたことを。戦い続けたのだということ。王龍テラドミヌス。七人の魔女。すべての命がすべてを賭けて、古龍はその殺戮の衝動に従い、この大地を奪い合う。

## 第一話「少年と海」Night Before Armageddon」(前)

いよいよ始まりました後藤正人のモンハン小説5作目。これまで短編を書きながら培った世界観を完結させるべく見切り発車することになりました。

よって、不定期投稿になることをお約束します。

これまでは10話前後で完結していましたが、総集編ということで、この作品は大体25話予定です。ということは30話くらいで完結することでしょう(結局、35話でした)。

1話辺り6、7000字で終わらせるつもりです。だからきつと1話1万字くらいで落ち着くことでしょう(後半には2万字も……)。

そんな作品です。

## 第一話「少年と海」Night Before Armageddon」

南方の強い日差しが、湿った潮風を突き抜けて海中に光の柱を落とすとした。

ロックラック諸島の村々　モガ島もその中に含まれているでは、ドンドルマを中心とするレムリア大陸では行われていない特殊な狩猟が行われている。

ハンターが直接水中に潜り、狩りを行うのである。

水深二〇m程度の浅い海。海底にまで差し込む光はわずかな海藻の茂る岩肌を見せて、立ち上る土煙が海を適度に濁していた。もはや山と言っているほど小高い丘を有するモガ島は波が打ち寄せるような海岸というものが乏しく、崖の開けた間を通り抜けた河口が数少ない海岸の役割を果たしていた。

このような汽水域では川から流れ込む栄養によって植物プランクトンが発生することが多い。草食種が数多く集まる場所でもある。

よって、草食種を狙うモンスター、もしくは、ハンターにとってここは格好の狩猟場なのである。

複雑な海流に削られてできた天然の柱　一〇人がかりでようやく囲めるほどである　の立ち並ぶ海底を、土煙を巻き上げながらモンスターが泳いでいた。

丸い体に、優しげな丸い顔が首の先についている。黄ばんだ白の体についた苔。手足は平たく、水中に適応した種であることがよく

わかる。

草食種エピオス。アプトノスと並んでロックラック諸島の重要な淡泊源である。

エピオスは怯え、その全身をくねらせながら全力で泳いでいた。その理由は考えてみるまでもない。ほんの少し、怯えた顔から目を離し背中を見れば事足りる。

どこことなくアプトノスとの近縁を感じさせる背鰭に掴まった、一人のハンターがいた。

まだ駆け出しの少年なのだろう。あどけない顔つきに、革製の防具 レザーと呼ばれる、市販されている程度のものである。を、それでも腕だけはジャギイ・アームと呼ばれる鳥竜種ジャギイのものを身につけている。

肉食種であるジャギイを一人でも狩ることができる。そんな少年なりの自己顕示は、同時にまだドスジャギイを狩ったことがないことを証明していた。他の部位を生産するためには、ジャギイのボスとも言えるドスジャギイの頑丈な素材が必要だからである。

少年の名はアポロ。最も暑い季節の、最も暑い時間に生まれた少年は、太陽にあやかかって名付けられ、太陽の光を模したような金髪をしていた。

よもすれば美少年と呼ばれてもよい顔つきながら、今は台無しである。

少年は左手だけでエピオスに必死にしがみついている。必死で逃

げようとすするエピオスは力の限り泳いだ。すると、顔面に叩きつける水圧は頬を押しつぶし、食いしばる口から空気の泡が漏れている。美少年を気取るには、少々泥臭い。

「くづぶ……、がる……」

水中であり、まともに開くことのできない口。通訳するなら、この野郎、である。

アポロは必死に体を引き寄せ、エピオスへと近づいていく。残された右手には片手剣。左手にあるべき盾は途中で落としてしまった。が握られている。水圧に負けぬよう力み、剣を一息にエピオスの広く丸い背中へと突き立てる。

水中に響く苦悶の声。流れた血はすぐに海水に希釈されたなびく煙のように見えなくなる。

突如力を失ったエピオスの背中から投げ出されながらも太陽の光を頼りに体の向きを整えた。手足を器用に動かしながら向きを変えると、手、足、首を力なく漂わせたエピオスがゆっくりと海面へと浮き上がっていた。

今回のクエストの目的は、モンスターのキモ三つの納品である。ドンドルマ地方では砂竜ガレオスから取れるものが重宝されているようだが、このロックラック諸島ではエピオスから取れるものを珍味として珍重している。

アポロは足の力だけで海面に浮かび上がり、海を突き破って太陽の下に顔を出した。普段は感じられない酸素のありがたみを胸いっぱい吸い込んだ後は、首だけを海上に出しながらエピオスの亡骸

へと向かった。

エピオスは完全に死んでいるようであった。身動きがなく、手で皮膚に触れてみても鼓動というものを感じない。

「ごめんな。お前たちの死は無駄にしないからな」

腰から取り出したのは剥ぎ取り用のナイフ。肉厚でありながら鋭く、モンスターの解体に適している。

腹を見せて浮かんでいるエピオスの腹部にナイフを突き立てようとして、アポロは慎重にならざるをえなかった。肝心のキモ 洒落ではない を傷つけてしまつてはもともこもないからである。

また、嫌な緊張というものを感じていた。ナイフを構えたままの姿勢であたりを見回す。湾内の静かな波は、普段と変わらぬ表情を見せていた。

しかし、それでも、アポロは嫌な感覚から解放されないでいる。

何かがいる。

ハンターとして まだまだ駆け出しだが 培った経験が、アポロに危機を告げていた。ナイフを手にしたまま、アポロはエピオスから離れた。逃げた方向に根拠があつたわけではなく、とにかく動かなければならないと感じたからだ。

その瞬間。水がへそを曲げた。低いところにとどまっているのが嫌で、空を目指した、周りの水とは水の合わない水がいたのである。水柱はエピオスの亡骸を高く跳ね上げ、やがて、力つきたように落

ちた。はがれ落ちる水の下には、やはり青が広がっていた。

海竜種の多くに見られる細く長い体。コブラのように左右に広がった頭の先、鋭く長い口がエピソードの首に食らいついていた。背鰭なんて優雅なものは持っていない。敷き詰められた角が背中を覆っている。

そして、全身の鱗は青。

「ラギアクルス！」

アポロの声は、着水した二頭分のモンスターのあげた水しぶきにかき消された。生じた波に押し流され水を飲んでしまわないように口を閉じた。すると背中に強い衝撃を覚え、結局口の中に塩辛い味が広がった。

この入り江にいくつも並んでいる石の柱。それは、水上にまで顔を出している。にアポロは背中をぶつけたのだ。いまだ続く海面の荒波に耐えるために必死にしがみついた。

「こ、こんな浅瀬に……、どうして……」

口を開けると波が侵入してこようとするため、なかなか声が言葉にならない。

海竜ラギアクルスは海竜種の中でも特に優れた遊泳力で知られ、普段はもつと沖合に生息しているはずである。しかし、同時に淡水への適性を持ち、川を遡上して水没林に姿を見せたとも聞いている。

剥ぎ取り用のナイフは落としてしまった。背中には、ハンターナ



イフが一本だけ。

勝てるはずがない。

ラギアクルスはエピオスを平らげている最中らしい。海面に血溜まりが出来、周囲の水が荒立っていた。

海中を覗き込むと、ラギアクルスがエピオスに食らいついている。足をちぎり、腹に食らいついては流れ出る血を堪能している。歯の一つ一つが、アポロのナイフよりも鋭い。

恐ろしい光景に目が離せないでいると、足を水が撫でた。何かに触れたわけではない。ただ、何か大きなものが側を通ったのだ。

それはラギアクルスだった。

宴に興じるラギアクルスとは別のラギアクルス。さらに別の方向からやってきた三体目のラギアクルスがエピオスの足に噛みつき、引きちぎるとそのまま口の中へと放り込む。

三頭のラギアクルス。さらに海面にはこれらとは別の背鰭が浮かんでいる。少なくともこの狭い海域に四頭ものラギアクルスがいることになる。

ラギアクルスたちはエピオスに夢中なようだ。今なら逃げられる。しかし、足も、手も、まったく動いてはくれない。柱に抱きついたまま、呼吸を静かにすることに努める。それが、鋭敏な感覚を持つモンスター相手には無駄だと知りながら。

いつ足を喰いちぎられるかわからないまま、アポロは身動き一つ

できずにいた。

それはラギアクルスたちの群が、沖の方に泳ぎ去っていくまで続いた。

生きた心地がしなかった。それがようやく解消されたのは、木を踏みつける、独特の感触が足から伝わった時のことである。

モガ村は、モガ島の南に浮かんでいる。正確には、崖の一部を足がかりに、海底遺跡の上に立てた柱の間に木製の床を並べる形で海上に構成されているのである。

よって、踏みつけると波の些細な動きが返ってくるような感触は、ほかではなかなか味わえない、モガ村独自のものと言えた。

足取りは重い。村人の憩いの広場　ここでは水揚げされた魚が並ぶなど、村の中心である　を、それでも足早に通り抜けようとする。それでも、全身ずぶぬれで、もっているはずのナイフさえ持っていないハンターの帰還が、人目を引かないはずがなかった。

「よく戻ってきたな」

しわがれて、くぐもった声がした。首が反射的にそちらの方を向く。そこには、木でできた丸椅子に腰掛ける老人がいた。南国らしく腰みのに薄い上着を羽織っただけという老人は、モガ村の村長である。昔はハンターをしていたと聞く老人は、髪がすべて白く染まっってしまったもなお毅然とした眼力は失われてはいない。

まるで、モンスターを前に怯えて何もできなかったことを見抜かれるようで、嫌だった。

「いや、俺……」

モガ村は、村とは言ってもぎりぎり村と認定されているだけの小さな場所にすぎない。よって専属のハンターはアポロ一人だけ。そんなハンターがこれでは、村長に合わせる顔がなかった。

村長は、首を振ってアポロを制した。

「ラギアクルスが現れたことは聞いておる。それも、群でだ。こんなこと、今までになかったことだ。一頭でも強力なモンスターの群を狩れなどとは言わん。生きて帰ってきてくれただけで十分だ」

そうは言われても、モンスターを狩るハンターがモンスターを相手に怯えたなんてこと、不名誉以外の何者でもない。

どうしても、気持ちは上向かない。

そんなアポロの様子に、村長は厳しい顔をして怒鳴りつけた。

「もつと胸を張れ！ お前は生きて帰ってきた。また次の機会に恵まれたということだ。生きて帰ってくるということは、ハンターにとって最も大切な資質だ。わかったか！？」

「う、うん」

わかったというより、剣幕に押されただけだ。ただ、気分を入れ替えはできた。

今日の村長は忙しい。そんなアポロの様子に顔を綻ばせたかと思うと、次の瞬間には難しい顔に戻ってしまふ。

「だが、ラギアクルスが群れるなど、これまでになかったことだ。一体何が起きているのか」

「詳しくは私が説明します！」

村の奥　船着き場がある方角だ　から声がした。村長の家の直ぐとなり、ハンターズ・ギルドの出張所がある。普段ギルドからの依頼はそこで受け付けてもらえるのだが、まだまだ駆け出しのアポロにはまともな依頼がなく、受付嬢が暇そうにしているのが常である。それにも関わらず、横着な受付嬢はカウンターに上半身を乗り上げて手を振っていた。

来いということなのだろう。仕方なく、村長と並んでカウンターを目指す。

カウンター越しに見えたのは一人の少女である。ギルドの制服である赤いスカートに白いベスト、赤い帽子を身につけた受付嬢は、手のひらを上に向けて胸の横へときだしていた。この娘が話し出す時の癖である。

「現在、ギルドではセクメーア砂漠を中心とした広大な範囲に緊急事態警報を発令しているのです」

営業スマイルでとんでもないことを言ってくれる。これも、この受付嬢の癖のようなものである。

「たとえば、一つの群にドスジャギイが四頭確認されたり、通常の倍はあるようなイビルジョーが観察されたりと、これはのっぴきならない事態が進行中なのです」

イビルジョーはただでさえ見上げるほどあると聞いている。そんな怪物の倍といたら、もう想像もできない。体が震えたのは、それでも単に体を冷やしすぎたからだ。

「特に、モガ村はロックラック諸島の中でも一番セクメーア砂漠に近い。ギルドの方でも警戒の度合いを強く設定しているという寸法なのです」

ギルドでは、仕事よりも先に笑顔の作り方を教えるらしい。受付嬢は見事なスマイルで、やはりとんでもないことを言っただけ。

「そんなの、俺の手には……」

「大丈夫です。誰もハンターさんにそんなに期待してませんから」

大して歳も変わらないくせに、この受付嬢はいつもこんな調子である。いつか見返してやろうと常日頃狙っているが、なかなかそんな機会には恵まれないでいる。

「お、俺だつてな！ 今はまだ駆け出しだけど、いつかはラギアクルスの一頭や二頭……!!」

「群れておつたんだろ」

そう、村長の言うとおりである。一頭や二頭では、あの群は撃退できない。

「心配には及ばんぜよ。心強い助っ人を連れてきたからのう」

独特の口調が後ろから聞こえた。確認してみるまでもない。しかし、振り向かないわけはいかない。

村に定期的に訪れる交易船が入港していることは知っていた。そして、船長とはまだ顔見知りというほどではないにしろ、すっかり覚えてしまった。港に停泊中の大型船を背景に、ゆったりとした独特の衣服を身につけた男性が両腕を広い袖の中にしまっていた。なかなか忘れられない格好と話し方をする男性である。

船長が首で示した先、そこには木でできた棧橋の先に停泊している船と、船から下りてくる三、四人の人の姿があった。

船員ではない。ハンターだ。それも、極めて優秀な。身につけている防具は、アポロがまだ見たこともないようなモンスターの素材で作られたもので、その実力がうかがいしれる。

こんな小さな村に大勢のハンター。村長も息を吹いてうなっていた。

「どつやら、並大抵のことではないようだな」

「ああ、これはまさに五〇〇年に一度あるかないかの大事ぜよ。何せ相手は……」

「五〇〇年もの間休眠していた古龍だというの？」

暗い闇の中。蝋燭の明かりに照らされた少女。

純白のドレスを身につけ、座るは飾られた椅子。白磁の肌と紅玉の瞳を持つ少女の名は、ミスカトニツク王国第二王女、セントポリア。

第一話「少年と海」Night Before Armageddon」(後

モンスターのキモを取りに行つてラギアクルスに遭遇する。トライをしたことがある人なら誰もが避けて通ることができない出来事です。友人の家で少し触らせてもらったとか言う人以外は。

まあ、さすがに四頭も登場するわけではありませんが。

なお、モガ村はトライですが、基本的な設定はフロンティアを採用するつもりです。ご注意ください。



第二話「王籠テラドミナス」Terra Dominus」(前書き)

わかる人にはわかって欲しい懐かしいキャラクターが登場します。

## 第二話「王龍テラドミナス〜Terra Dominus〜」

レムリア大陸。東西に長いこの大陸のほぼ中央にドンドルマの街は位置している。その南側には絶えず雲煙をあげるインスマス火山帯が存在し南西にはセクメーア砂漠が広大に広がっている。北西に目を移せばンガイの森、南東には密林が豊かな自然の景観を演出している。

加えて、西には海を挟んでロツクラツク諸島が存在し、そこにはレムリア大陸にはない命の世界が広がっている。

それほど、レムリア大陸は豊かな狩猟場であり、その中央に位置するドンドルマが経済、交流の中心として発展するのは至極当然であると言えた。

舞台はここレムリア大陸西岸。そして、異変はセクメーア砂漠を中心に生じていた。

日光を浴びることができない姫を気遣って部屋にはカーテンが敷かれ、間接照明のかすかな光と蠟燭の火が視界を照らしている。

セントポーリア。ミスカトニツク王国の第二王女は、しかし、王女としてここに座っているわけではなかった。王立古龍観測隊を率いる者として、ドンドルマの街を訪れているのである。

その頭を占めているのは次の舞踏会に着ていく衣装ではない。古龍。そんなお伽話の中から這い出た悪夢たちの姿である。

「すでにご承知とは思いますが、レムリア大陸西岸ではセクメーア砂漠を中心として様々な異変が起きています」

セントポーリアが見つめる先 壁に様々な資料が張り付けられている で、熱弁をふるっているのは二人の魔女である。七人の魔女と呼ばれる王女の側近、その内の二人であった。

神託の魔女フィロソフィア。普段格好に気を使う女性であると感じているが、仕事柄ろくすっぽ化粧をしている姿さえ目にしたことはない。今も資料片手に、長い髪には櫛もいれられた形跡がない。

博識の魔女グラジオラス。もう四〇にも近いこの魔女の方が、力加減というものを心得ているように思える。髪を髪留めでまとめ、最低限ほどこされた化粧はその年齢を引き下げているように思える。

年寄りも老けて見えるフィロソフィアと、若く見えるグラジオラス。結果として、一〇の歳の差がある二人は、ほとんど同年代なような印象を与えると、セントポーリアは考えていた。そんなことを考えたのは、二人 七人の魔女の知恵袋である が、あまりに詳細なデータを明示することに終始し、まるで結論が見えてこないことに原因があった。

学説や学会で動きなど聞かされても、セントポーリアにはわからない。

「古龍の発生はもちろん深刻ですが、古龍を除いた場合でも、異変にはある共通点が確認されます」

お話のテーマはここ一〇年に渡る異変について。そのことの二つ

の結論が出たと来てみれば退屈な話の連続である。

「私が短気なことは知ってるでしょう？」

熱心に話していたフィロソフィアの動きが止まる。少し、悪いことをしただろうか。

こんな時、グラジオラス 最年長の魔女 は決まって微笑む。他の魔女はセントポーリアと姉か友人のように接するが、博識の魔女だけは母親のように触れてくる。

「では姫様、少し、ペースを上げましょうか。フィロソフィア、この際、細かいところは省いて」

「は、はい！」

場の雰囲気をもたせて、そして、解決策も示す。こんなこと、セントポーリアにはできそうもない。

フィロソフィアが軽く咳払いをしてから、話を再開した。

「たとえば、アマランサス特務騎士が発見した異変は繁殖期、角竜ディアブロスが子育て期間をすぎる前に巣立ちを促したことでした。これを、私は当初餌の不足かとも考えましたが、どうやら、地下に異変が起きているようなのです」

フィロソフィアが叩いた壁には、大きな紙の資料がつけられている。そこには、七人の魔女が集めた、あるいはハンターズ・ギルドから寄せられた異変の内容が並べられている。

「他にも、インスマス火山帯ではグラビモスが群をなしていることが確認されています。多くのモンスターは群れることがなく、繁殖期や子育ての際に番をなすのが原則です」

「私たちはそれを、防衛本能として結論づけました」

急にグラジオラスが声を上げたのは、フィロソフィアがまだまだ例を並べるつもりだと察したからだろう。

「危機を感じたモンスターたちが群を形成して、それに備えようとしているということ？」

「恐らくは。モンスターたちは、人間と違って敏感です。いえ、失礼しました。私たち人間も環境の変異を感じ取っていますが、モンスターとは違い、確信があるまで動けません。しかし、モンスターは異変に素直に反応しているのです」

「ここで、でもその原因はわかりません、なんて肩すかしはないでしょうね？」

グラジオラスを見たまま笑ってみせる。普通ならプレッシャーの一つでも感じそうなものだが、そんな様子はない。亀の甲より何とやらだ。

「これはアマランサス特務騎士が砂漠で見つけたものとフィロソフィア特務騎士が峡谷で発見した壁画の無事な箇所を繋ぎあわせることで再生したものです」

一際大きな紙を、フィロソフィアと協力しながら広げてくれた。そこに描かれているのは一枚の壁画である。それを、丁寧に指さし

ながら、グラジオラスが説明を引き継いでいる。

「風翔龍クシャルダオラ、そして、炎王龍テオ・テスカトル。長年の研究によって、ハイパーボリア文明は古龍と戦っていたことが明らかになっていきます。しかし、その滅亡の原因については、わかりませんでした。峡谷で壁画が発見されるまでは」

左に描かれた風を纏う古龍。右に描かれた炎を操る古龍。

「となると、こいつが原因ってこと？」

そして、セントポリアが指さした中央。そこには強靱な四肢に巨大な翼。3本の角を備える龍の姿があった。

「研究班の方で勝手に銘々させていただきました。ハイパーボリア文明語で、大地を意味するテッラ、そして、主を意味するドミヌス。よって、王龍テラドミヌスと」

アマランサスが壁画を見つけた時、肝心の中央部分が欠落していた。それが明らかになったのは、フィロソフィアたちが見つけた壁画のおかげである。

王龍テラドミヌス。

それは、やはり不気味な姿をしていた。顔料で全身が黒く染められ、角は寒気を覚えるほどの青。

「これまで、ハイパーボリア文明は水源であったハリ湖の枯渇によって、水源を失ったことで滅びたとされてきました」

クシャルダオラやテオ・テスカトルは周りで戦っている人と同じ縮尺で描かれている。では、壁画の中央。城と同じ大きさがあるこの古龍の大きさはどれほどのだろう。

「それが支配的であったのです。ですが、では何故湖が枯渇したのか、その原因は明らかではありませんでした。そのことが学術的決着が遅れに遅れている理由です」

セントポーリアがテラドミヌスに気を取られている間にも、ゲラジオラスの話は進んでいる。

「砂漠に乾いた大地で覆われていますが、地下深くには水脈が通っています。ところが、現在、その地下水脈が減少していると言うのです。その理由は、無論不明のままです。私たちはそれを、このテラドミヌスと関連づけました」

そろそろ、冗長になってはいないだろうか。そうセントポーリアが考え始めた頃。

「そう考えることで様々なものの説明がつくのです」

最古参の一人に数えられる魔女は、この言葉を意識して強調した。もう結論は近い。そう、セントポーリアに釘をさしたのである。

「水は生命に欠かすことができません。恐らく、テラドミヌスにとってもそれは例外ではないでしょう。テラドミヌスは五〇〇年の休眠の間、地下で地下水をすすりながら眠っているでしょう。しかし、地下水が減少すると、それを敏感に感じ取り覚醒するものと思われます」

ここで、フィロソフィアがテラドミヌスが吸い尽くすから地下水が減少するのか、それとも定期的な地下水の減少がテラドミヌスの覚醒を促すのかはわからないと付け加えた。

「その度に水を求め、ハリ湖を目指したのではないのでしょうか。そして、そこに栄えていた文明を滅ぼした」

巨大な龍が人々を、家屋を蹂躪していく姿を想像して、それは決して気持ちのいいものではなかった。

「ハリ湖のことは聞いたことがあるけど、あれはさまよえる湖と呼ばれるくらい、流れを頻繁に変えると聞いているけど？」

まだ残されている疑問。それは、湖の枯渇が果たして古龍の仕業であるのかわからないということ。だが、自然環境の変化でたまたま湖が枯渇したとすれば、テラドミヌスが描かれた壁画の意味がわからない。

湖が定期的に位置を変えてしまうため、ハイパーボリア文明は滅亡した。そう聞かされていたからだ。

ところが、ここに一つの事実がある。ハイパーボリア文身とドリムランド峡谷のムー文明との間に連続性があることの蓋然性は高い。そうすると、湖が枯渇したとして、住み慣れた砂漠を離れ、あえて厳しい環境に逃げ延びた意味がわからないのである。

「ハイパーボリア文明以前に、セクメーア砂漠で興った少なくとも2つの文明が滅亡しています。それも、まるで示し合わせたように五〇〇年おきにです」



グラジオラスは言葉に妙な含みを持たせた。まるでこちらを試しているような。すべては状況証拠にすぎない。しかし、つじつまはあう。異変がセクメーア砂漠を中心に発生していること。五〇〇年おきに文明が滅んでいること。そのどちらも。

苦笑いするほかない。七人の魔女に調査を命じていた時は、まさか古龍が、それも王龍の名の通り、王者の古龍と言える化け物がかわっているなど考えもしなかった。

「そいつは、今どこで眠ってるの？」

「ドリームランド峡谷、その地下かと」

なんて皮肉だろう。テラドミヌスを恐れて高台に逃げ込んだハイパーボリアの人々の真下で、その元凶が眠っていたなんて。

「また、目覚めると思う？」

ハイパーボリア文明滅亡から、約五〇〇年を経た現代に。二人の魔女は顔を見合わせると、答えたのはフィロソフィアの方である。

「はい。明日かもしれないし、明後日かもしれません。もしやすると、今、この瞬間にも」

神託の魔女。それは、フィロソフィアの鋭い感覚の他、情報処理のうまさ由来する。過去の記憶と現在の状況を符合させる力に優れる。わかりやすく言い換えるなら、大変勘がきく。

よって、フィロソフィアの推測は、まるで予言のような不気味さがあった。

砂漠は完全な死の世界ではない。時折まばらな木に囲まれたオアシスが存在しては、そこに集落や村が構成されることもある。

ダンウィッチ村は、そんな村の一つである。

オアシスを囲むような低い岩山を掘削したもののほか、質素な木造の家屋が並ぶ、辛うじて村と呼べるような小さな村である。人口はわずかで、ハンターは二名しかいない。

ティルテュはそんなハンターの一人であった。

砂漠の民に多い褐色の肌をして、女性にしては高い身長をしている。手足腰を守るのは砂漠に生息する角竜ディアブロスの重厚な甲殻であり、耳にはピアスがつけられているだけである。そのため、愛らしいだとか、そんな誉め言葉は似つかわしくない凜々しさを覚える顔をさらしたまま、太陽の沈んだ村を歩き、家路についていた。

その背にはところどころ穴が開くほどに傷みきった外套を、ティルテュはそれでも誇らしげにまとっている。それが、ある女性とともに戦い、そして勝利した証であるからだ。

村の広場から少しはずれた場所に、ティルテュの家はあった。この村でごくありふれた、木造の家である。

「母さん、ただいま」

扉を開くなりティルテュは母の姿を探した。年老いた母 探検

家であった父が行方不明になって以来、すっかり元気をなくしてしまった。ほとんどベッドから起きあがることもできずにいた。今夜もそのことは変わらない。母はベッドの上に上体を起こして座っている。

「おや、ティルテユ、今日は遅かったね」

「思ったよりもガレオスの数が多くて手こずった。まあ、これで当分は村の周囲は安全になると思う」

防具を外しながら、専用のラックに次々と固定していく。禍々しい布で拵えられた外套を有する胴の防具。デスギアと名付けられた。を脱いで、続いてディアブロスの砂色の装備を放り込む。最後に、漆黒の、斧と見紛うばかりに刃が短く切り詰められた大剣をしまい、ラックを閉じた。

これで、ティルテユは胸元と腰回りのインナーだけになった。直射日光のきつい砂漠でこのような格好は大変危険だが、今は夜間。問題はない。

モンスターの一定数の狩猟を終えている。普段、砂漠の奥地に生息しているはずの砂竜ガレオスが何故こんな人里近くにまでやってきているのかはわからないが、とりあえず、当面の間は問題ないだろう。

それよりも、何故ガレオスがその行動パターンを変えているのか、何とも気になってならない。

まさか大地が答えを示そうとしてくれたわけではないのだろう。

突然、テーブルにおかれた花瓶が揺れる音がした。何事かと振り向いている内に、何かに掴まっていなければ転んでしまいそうな横揺れが襲った。

すぐに収まるだろう。しかし、棚から落ちた額縁が土がむき出しになった床に落ちた。被害はその程度のものである。

「また地震かい。怖いねえ」

母は落ち着いた様子で、というよりも驚くこともできないくらい疲れた様子であった。まだ決して老人と決めつけていいような歳ではないが、白髪交じりの髪が、ずいぶんと老けた印象を強調している。

別にそんな母から目を背けるきっかけが欲しかったわけではない。単に落ちてしまった額縁が気になって仕方がない。

「ギルドの発表によると、地下水脈だとか、地下水だとかの変化が原因らしい。群発性だが、極端に大きな地震は起きないそうだから、大丈夫じゃないかな？」

額縁を拾い上げる。そこには、一枚の絵が飾られていた。とある壁画を描き写したもので、損傷の具合も綺麗に再現されている。

幸い、絵そのものは無事であるようだ。

「綺麗な絵だね」

「母さんには話したろ。一緒に狩りに行ってくれた女性がくれたもので、父さんが見たかったものだ」

父のことを出したのは失敗だっただろうか。母は気分が沈んだように顔を伏せてしまった。

遺品である双眼鏡は未だにベッド脇の棚に飾られている。いつも仕事ばかりで家のことを省みなかった父は、ある日いつものように探検に出かけて、それ以来帰ってくるのがなかった。

そのこと聞いた時、ティルテユの胸には怒りの感情しかわいてこなかった。しかし、父がその命をかけて見ようとした壁画を見た時、素直にそれが美しいと感じられたのだ。

怪物と戦う人々と、鮮やかな赤にたなびく雲が描かれたその壁画は、今、絵となってティルテユの手元にあった。

父のことをどう考えているのか。自分でも自分のことがわからないう。だから、母にかけるべき言葉がなかった。

「ちよつと外の様子を見てくる」

地震の様子を確認してくる。そう言い訳して、ティルテユは額縁を棚に戻しながら立ち上がった。母はとめようとはしなかった。

扉を開けた途端、事態は予想以上の推移を見せていた。

広場の方が慌ただしい。ティルテユ以外にも多くの村人が外に出ているようだ。

意識して早足で、広場を目指す。すると、すぐに人垣が出来上がっている様子が見えた。近くににいる女性に声をかけた。

「どうした？」

この村に駐在しているギルドナイトであるその女性は全身を赤い派手な服を着込んでいたため、探すのに労はなかった。また、人垣から離れている位置にいてくれたことが幸いした。ギルドナイト名はイリス　は中年女性らしい人に慣れた笑い方をしながら手を軽く振った。

「それがよくわからないんだよ。ただね、ギルドがわざわざ飛行船を送り込んできてるくらいだ。ただごとじゃ、ないんだろうね」

イリスは夜空を見上げた。釣られて上を見ると、月を背景に黒い塊がゆつくりと降りてきていた。村の篝火に照らされて、それが飛行船であることはすぐにわかった。

気球にはこれまでに何度も乗ったことがあるが、自ら推進力を有する飛行船は見たことさえなかった。ハンターには無用の長物であるからだ。空に浮かぶ船は、家をかすめない程度にまで高度を下げると、一本のロープが投げ降ろされた。

ロープを伝い、降りてきたのは赤い服を着た一匹の猫である。正確には、赤いミニチュア・サイズのギルドナイトの制服を着たアイルーであった。

村に降り立ったアイルーは、それはそれは恭しく頭を下げた。そして、その人の腰ほどの高さしかない小さな体からティルテユの元にまで届くほどの大きな声をあげた。

「私はラファエルと申しますにや。ギルドの命により、この村には

緊急避難命令が発令されていることを伝えに参りましたにや」

語尾が独特なのはアイルー族の発声器に原因があるそうだ。今、特に必要な情報ではないが。

重要なのは、これまで一度も発令などされたことのない避難命令が発令されたことである。

ラファエルを眺めている人垣　元々人口の少ない村だ。その密度は高がしれている　の間をぬって、人間のギルドナイト、イリスは獣人のギルドナイトの前に出た。ティルテユも便乗して後に続く、人に見下ろされる形でありながら、ラファエルはまるで物怖じした様子もなく帽子を外して胸の前で持つ。

すいぶんと礼節を尊ぶアイルーであるようだ。

「あたしはそんな話聞いてないけど、訳くらい聞かせてもらえるかい？」

肉球を持つ小さな手を口元にあてて咳払いを一つ。ラファエルは声を整えてから話しを始めた。

「古龍が目覚めましたにや」

ドリームランド峡谷の東。セクメーア砂漠から押し寄せる砂が岩を覆い隠し、砂と岩の区別が曖昧な境界を描いている。

何も遮るもののない砂漠にしては珍しく、今日は風がない。月が

寒々とした大気を演出し、岩が悲鳴を上げていた。

まるで、砕けているかのような、乾いた岩の音が響く。砂が、風もなく巻き上がった。

響く轟音。それはまるで巨龍の足音のように轟き渡る。

巻き起こる突風。それは巨龍の息吹そのものか。

大地は身悶えし、砂は我先に逃げ出す。砂漠を引き裂きいびつに隆起した石塔は自らの重さに耐えかね砕けて落ちた。山の背に亀裂が走り、傷跡は幾重にも折り重なっていく。その度に砕け落ちた破片が重力に引かれて大地へと叩きつけられる。

やがて、大規模な崩壊。山の一角が崩れ落ち、岩を砕き砂として、砂を叩き嵐として巻き上がらせた。一面立ち上る砂煙がすべてを呑み込む。

砂に覆われ何も見えない。音にかき消され何も聞こえない。

砕かれた岩肌が残されているだけ。舞い上がった砂も、徐々に落ち着きを取り戻しつつあった。

何も変わってなどいない。崩壊した山を除けば、苛まれた砂を除けば。そして、月明かりに青く照らされる三本の尖塔が、天を貫かんばかりにそびえ立っていることさえ除けば。

尖塔は揺らぎ、互いの距離を維持したまま勢いよく倒れた。それは振り下ろされた剣のように砂を裂き、水面のように砂が割れて飛び散る。



そして、弾ける黒い雷。龍が龍を殺すための毒、龍毒の輝きが爆ぜた。

弾き出された膨大な砂。再び巻き起こる膨大な砂煙に覆い隠されながら、それはたしかに見えていた。月の青さを映すのは角。夜の闇を示すのは体。

漆黒の胴体から突き出された角が荒々しく振り回される。地を払っては砂を砕く。岩をかすめれば空へと放り出された岩が地表に落ちるまでもなく砕け散る。

文字通り、ほんの欠伸程度の暴威が、峡谷を、砂漠を、世界を破壊していく。

それはゆっくりとその口を開いた。たえようもないほど巨大な口。鈍く、しかし巨大な牙が幾本も並んでいる。吐き出されたのはごくありふれたものであった。人にもできれば、アプトノスのような草食種にも、轟竜ティガレックスにもできてしまう。

声である。

その咆哮は、しかし度を超していた。アプトノスの悲鳴も、ティガレックスの怒号も大差ない。所詮、それを大きく下回る、声と一くくりにしてしまえるのだから。

音は球形に広がる。そのことを証明しながら、声の届く範囲の砂が次々と飛び跳ねる。それは、それを中心として綺麗な円を描く。たとえるならば、王に一齐にひれ伏す群衆のよう。

それに名などなかった。そもそも、名という概念は人間の特権である。

よって、人は名のない王に様々な名を付けた。

よって、王には複数の名が与えられた。

その数は踏みにじってきた文明の数と、そして、これから蹂躪する文明の数との和に等しい。

滅ぼされた文明がそれぞれに名前をつけ、それを知らぬ後の文明が新たな名を与えた。今の民が、ハイパーボリア文明が王をどう呼んでいたのかを知らぬように。今の民が、その名を新たに決めたことと等しく。

その名は王龍。 王龍テラドミヌス。

第三話「小春日和、C a I M B e f o r e t h e S t o r m」(前書き)

王龍が覚醒しましたが、まあ全三〇話くらい。のんびり行きましょう。

### 第三話「小春日和」Calm Before the Storm」

砂嵐が突き進む。伝説の古龍が砂漠を疾走する様を表現するには、これ以外の言葉は思いつくことはできない。山が動いているような、そんな巨大な古龍が砂をまき散らしながら進んでいるのである。まるで泳ぐように軽やかに、とても人の足では追いつくことができないほどの速度で。

その様子を見下ろして、空には三隻の飛行船が浮かんでいた。通常の船が軽量なガスを満載した気球に吊り下げられる形で浮遊している。船尾に取り付けられたプロペラの生み出す推進力が古龍に辛うじて追いつくことのできる速度を維持している。

しかし、船としては中規模の大きさを有する飛行船でさえ、古龍と見比べたならあまりにちっぽけに見えて仕方がない。

その甲板の縁に、豪華な衣装を身につけた青年が立っていた。白を基調とした、礼服にも法衣のようにも思えるその服には赤い刺繍で彩られ、如何にも高貴な存在であることを演出していた。ミスカトニック王国に仕える特務騎士の証である制服を、しかし青年は単に作りが複雑なだけの服として着こなしていた。

その顔に奢りや過度なプライドというものはなく、ただ静かに眼下の古龍を眺めている。

「これが、あの壁画に描かれていた古龍……」

遙か眼下に見える古龍は、それでさえその大きさと迫力を如実に顕していた。

ワニのように細く長い顔に逆三角形に生える青い三本の角が砂を裂く。背中に獣竜の牙よりも大きく鋭い突起がいくつも並び構成される背鰭が立ち上る砂煙を裂く。

そう、すべてを引き裂きながら古龍は進んでいた。

「特務騎士殿」

声が聞こえてはいた。しかし、その声が自分に対してかけられたものとは考えていなかった。つい反応が遅れて、そのまま古龍を眺めていると、業を煮やして大きな声が聞こえた。

「ジェイナス特務騎士殿！」

ジェイナス。それが青年の名前である。ジェイナスは、慌てて後ろを振り返った。しかし、そこに相手の姿はない。少し視線を落とすところ、ようやく相手を確認する。

水夫を思わせるような白い上着に、帽子を被っただけのアイルーであった。獣人種の中でも人語を解する二足歩行の猫は、人間顔負けの姿勢の良さで直立していた。

それが自分の指示を待っているのだとジェイナスが気づくまでの間、アイルー　名はメタトロン。この飛行船の機関士であるは姿勢を崩さなかった。

「ああ、引き続き観測を続けて。姫様への報告は、もう行ったよね？」

「はいですニヤ！」

語尾が独特なのはアイルーたちの特徴であるらしい。それにしても見事な敬礼で、その職務への忠実さが伝わってくる。

尻尾を振り動かしながら四本足で立ち去っていく様子は、仕草としてなんともかわいらしい。それでも、メタトロン機関士はこの飛行船の中ではベテランで、駆け出しの特務騎士ではないジェイナスとは、年季の違いは明白であった。

体の向きを古龍の方へと戻しながら、ジェイナスはため息をついた。

ただのハンターとしてモンスターを相手にしていればよかった時間が遠い昔のように思える。

古龍なんて実在しているとさえ知らなかったジェイナスは、恋人の仇を探して峡谷へと分け行った。そこで見たものは、世界の裏側に絶えず存在する、まさに悪夢とも言うべき古龍との遭遇であった。

風翔龍クシャルダオラ。

あの体験以来、何もかもが変わってしまった。特務騎士だなんて呼ばれて、ミスカトニック王国に仕えることになるなんて、以前は考えもしなかったのに。

「まだ慣れないかい？ ジェイナス特務騎士殿？」

声の主は、どこかおどけたような調子でジェイナスの隣に並んだ。ジェイナスと同じデザインの服。ただし、刺繍は金色で、近衛兵

である七人の魔女の一人であることを示している　を着た女性は、赤い髪を風になびかせ笑っていた。

この娘との出会いも、峡谷であった。七人の魔女の一人で、神速の名を与えられたソフィアである。

「うん。ただの田舎者がいきなり王国お抱えのハンターだからね。やっぱり、戸惑いの方が大きいよ。それに、この服も落ち着かない」

胸のあたりを掴んでみる。ずいぶんとゆったりとし生地は手触りこそいいが、動きにくいことこの上ない。

ソフィアは袖を掴んで回って見せた。動き易さの証明というより、全身を見せるために。

「指揮権を与えられた人間は、多少見栄も必要だよ。偉い人が偉そうな格好していた方がわかりやすいからね」

特務騎士。それがここまで様々な権限を与えられるものとは正直考えていなかった。狩りにしてもいつも少数人数で、指揮というものとは無縁の生活を送っていたジエイナスにとって、職務内容はあまりに重いものである。

「やっぱり、君についてきてもらってよかったよ。僕一人じゃとてもじゃないけど無理だから」

「僕って、いつもこういう役回りなんだよね」

とある事情から一人では活動できない結界の魔女スノードロップのお供をしていたことを言っているのだ。実際、ソフィアの朗らか

な人柄は、争いの仲裁や厄介事の処理に向いている。

ジェイナスも同じく、ソフィアがいてくれたことでどれほど助けられているのかわからない。

「その、ありがとう。君には、感謝しているよ」

隣に立つソフィアの手にそっと触れてみる。すると、ソフィアの方でも軽く握り返してくれた。

二人寄り添って眺める先には、砂しぶきをあげて泳ぐ巨龍の姿がある。五〇〇年もの長い眠りから目覚めた古龍は、取り囲むように浮遊する飛行船のことなど気にもとめてはいない。

「この龍、姫様はどうするんだろうね？」

太陽の光が、その漆黒の体に照り返しまぶしい。その甲殻はクシヤルダオラ同様、金属の光沢を持つ。

「セントポリア様なら、きっと徹底抗戦を主張するだろうね。こんな怪物が人口密集地にも行くことがあれば、目も当てられないほどの被害が出てしまうから」

「でも、まだそうなると決まったわけじゃないし、戦うとしたら、それこそどれほどの被害が出るかわからない」

セクメーア砂漠の地図　一面起伏の乏しい砂原で、海図にも近いものである　に点々と記されている古龍の軌跡は、その針路が砂漠のほぼ中央を指していることを示している。人口の多いドンドルマの街は砂漠の北東に位置する。このままなら、被害はセクメ



「ア砂漠の中に押し込めることも可能ではないだろうか。」

戦う必要なんてないかもしれない。

「そこなんだよ。だから、戦うにしても、戦わないにしても、少し面倒なことになると思うよ。」

嵐は過ぎ去るまで耐えればいい。これまで誰も、嵐に挑もうなんて考えたことなどないのだから。

「古龍、ですか？」

アポロは、話をよく飲み込めていなかった。

モガ村の、決して広くはないのに広場にイスと丸テーブルを並べて、この村専属のハンターであるアポロは、交易船が連れてきたハンターたちと夕食をとっていた。

木製の板で作られた床の下には、板の隙間から海の波そのものが覗いている。聞けば、新しくこの村にやってきた三人のハンターは皆北の凍土の出身で、海どころか川で泳いだことさえない人もいるらしい。そのためか、食事中、落ち着かない様子を続けている人もいた。

アポロと話しているのはリーダー格の大柄な男性で、凍土から離れていたことも多いらしく、水中での狩猟にも慣れているのだそうだ。そのため、板一枚の下が海だとしても気にした様子はない。純朴そうな様子で、そのためか、アポロは選んでこのハンターと話を

した。

「そつだ。王国やハンターズ・ギルドはひた隠しにしていたが、古龍は実在する。そのくせに、まるで神話や伝説の中にしかないような力を持っている」

名前はヒュプノス。今は着ていないが、火竜リオレウスの装備を使用していた。ヒュプノスは一度話を区切るとスプーンでスープを口に運んだ。普通の大きさのスプーンが、ヒュプノスの手には小さく見えてしまう。

その間に声を挿入したのは、テーブルとは離れたところに座っている村長である。もう夜だというのに、普段通りの半裸同然の格好で、寒くはないのだろうか。

「にわかには信じられんな」

「無理もない。だが、古龍は実在する。セイレム山を知っているか？」

ロックラック諸島の最北に位置する凍土。そこに位置する山は有名である。寒冷地の貴重な狩猟場である以上にセイレムの魔女と呼ばれる特殊な狩りの技術を身につけた女性ハンターたちで特に知られている。

「俺の故郷なんだが、そこに古龍が現れたという事実がある。古龍は討伐され、標本はミスカトニツク王国が保管している」

古龍の話よりもつい気になってしまったのは、セイレムの里出身のハンターなのに、ヒュプノスが男性であるという点だ。ただ、そ

のことを聞いていいものかと悩んでいる内に、そんなこと気にしない少女がいることを忘れていた。

赤い制服を身につけた受付嬢が、テーブルの脇に立ったまま話に加わった。

「セイレムの里って言うと、セイレムの魔女で有名ですけど、男の人もいるんですか？」

ヒュプノスのスープを飲む手つきがとまった。

「……いや、別に女性ハンターしかいないというわけじゃない。ただ、優秀なハンターに女性があまりに多くて男が目立たないだけなんだ……」

「どうやら、この話は鬼門であるらしい。やってきた三人のハンターの内、男性ハンターがヒュプノス一人だけということも、そういうことなのだろう。」

村長が気をきかせて、話を強引に戻そうとする。

「では、お主たちは古龍と戦ったことがあるということか？」

「いや、残念ながらない。古龍を倒したのは、なんとミスカトニツクの姫様と、里一番のハンターの二人だったからな」

話では、ヒュプノスは出稼ぎで里にさえいなかったのだそうだ。

ただ、ミスカトニツク王国と言えば、確かに様々な研究を行っていることで有名だが、その王女様が古龍を倒したというのは作り

話とまでは言わなくても誇張された話だろう。偉人の逸話は後から作られる。そんなことは常識だ。

少なくともわかったことは、古龍は存在するということと、そして、この場に古龍と戦ったことのある者はいないということだ。

アポロが気づかれないよう、軽く息を吹く。そんな気遣いなど構いもしないで、ずいぶんと荒い鼻息が聞こえてきた。

「ヒュプノス、誰か忘れてない？」

女性ハンターの一人が、大きく胸を張ってテーブルの一角に座っていた。氷牙竜ベリオロスの防具を身につけていた女性は、上半身はともかく偉そうに胸を張っているが、足は床から離され落ち着く場所なくふらついている。

まさか、も海竜ラギアクルスが床を食い破って襲ってくるでも考えているのだろうか。

モガ村は海底遺跡の上に築かれている。そのため、太古の遺物が海底を複雑なものに変えており、ラギアクルスほどの大型種では非常に進入しにくい入り江となっているのだ。他に栄養満点で捕食もしやすいエピオスが住む海域がいくらかでもあるのに、わざわざ危険を犯してまで突入りの少ない村を襲うラギアクルスなんているはずもない。

こう、教えてあげてもいいが、女性は自分の話で夢中なようなので、放っておこう。

「悪魔と戦った魔女がもう一人いたってことをね!!」

女性の力強い指が自分の胸元を指し示している。明らかに自信満々の様子だが、何か頼りない。

アポロはヒュプノスに顔を近づけて、声を潜めた。

「あの、イシュタルさんでしたっけ、あの人本当に？」

「まあ、戦ってないわけじゃないんだ。ただ、古龍に奇襲されてね。はじめの一撃でなされて、姫様たちが戦っている間中のびてんだ」

寒冷地の草食種ポポを狩ろうと仲間と二人で里を出て、そこを古龍に奇襲されてしまったのだそう。仲間に何とか里にまで連れ帰ってもらったそうだが、古龍の生きている姿をただの一度も確認はしていないらしい。

要するに、嘘ではないけれど、本当でもないということだ。

失礼ながら、アポロは凍土出身らしい色白の女性ハンターのどうだとも言いたげな顔に、不安を感じざるにはいられなかった。他のみんなも同じような印象を抱いているのだろう。古龍と戦ったことのある女性を前にしながら、盛り上がりはいまいちである。

イシュタルも、ようやく気づいたらしい。どこか気まずそうに口を唇を歪めながらも、その目は鋭くヒュプノスを捉えていた。

「ヒュプノス、余計なこと話したんじゃないでしょうね？」

「いや、ただ君が古龍と事実上戦ってないのは、その、事実だろ…」

…」

雰囲気だけで人はこうも変わるものだろうか。体格的には女性として平均的でしかないイシュタルよりも大きいはずのヒュプノスが萎縮して小さく見えてしまう。

「一撃とは言っても、戦ったことも事実でしょ！」

怒りが不安感を上回ったのだろう。イシュタルは床一枚下は海だと言っことも忘れて、勢いよく立ち上がった。

「そ、そうかもしれないけどな……」

何とも不毛な争いである。結局痴話喧嘩なのではないだろうか。ヒュプノスには遠慮が見られて、反対にイシュタルは相手が暴力に打って出ないことを知っているからこそまくし立てているような気がするのだ。

凍土から来た二人のハンターのそんな様子を、最後のハンターは笑いながら見ていた。

手は達人ビールがなみなみと注がれたジョッキを離さない。海のことを気にしてはいるようだが、それを隠すことができるくらいに落ち着きを持った女性ハンターである。ハンターたちの中で最も年上と思われる女性は、アルル。

「ごめんなさいね。イシュタルは魔女の一人なのに古龍相手に遅れをとったことを今でも気にしている。実際、古龍は恐ろしい相手だ。気にすることないと言っても聞いてはくれないの」

やはり笑いながらジョッキを傾ける。まだ酒なんて飲んだことも

ないアポロにとって、ビールのような苦いものをさもつまそうに飲み干していくアルルの様子は理解しがたい光景である。

夜風が肌寒い。話が途切れると、夜の闇が徒に気になって仕方がない。ハンターとして夜の狩りを経験しているのだ。それなのに今は夜が怖い。幼い頃、夜が怖かった。その闇の中に、得体の知れない怪物が潜んでいるのではないかと怯えて、蟲の声さえ魔物のそれのように思えた。今、夜に恐怖を覚えるのは、得たいの知れない怪物が潜んでいると知ってしまったから。

「古龍は、この村にも来るでしょうか？」

風が水を運び、波が水音を立てる。大型モンスターは進入してこないと確信しているはずだが、それでも、水中から何かが這い出てきそうな不安があった。

「怖いんですか？ ハンターさん？」

そんなアポロの心境を完全に無視し、逆なでし、構いもしないのは受付嬢である。いつもこうだ。馬鹿にされているのか、からかわれているのか、揚げ足を取るようなことばかりしてくる。

怒りに任せて振り向くと、案の定、受付嬢は楽しそうに笑っていた。

「仕方ないだろ。俺はまだドスジャギイとも戦ったことないんだからさ。それに、ハンターとは呼ばないでくれ！」

このロッキラック諸島では、名前を名乗らないハンター　ただハンターとか名乗らない　は嫌われる。その明確な理由は知らな

いが、そんな人物に限って礼儀知らずだとか、身勝手な人が傾向として多いからなのだそうだ。

抗議をしても、受付嬢は相変わらず笑っているだけだ。早く火竜リオレウスでも狩ってみせなければいつまでも見返してやることはできそうにない。

「なあ、今度からはちゃんと名前で呼んでくれよ」

「わかりました。アポロさん」

ずいぶんとあっさり受け入れてもらえたが、何か釈然としない。顔がどうもにやけていて、それは呼び方を変えたくらいでは解消されるものではないようだ。口元を歪めていると、受付嬢はどこか楽しそうにそれを眺めていた。

ヒュプノスとイシュタルはまだもめている。もっとも、イシュタルが一方的にまくし立てているだけで、ヒュプノスは防戦一方である。

そんな様子を見眺めて、アルルはまたビールに口をつけた。

「やれやれ、独り身は私だけ？」

ジョッキに音をふさがれてしまい、その声はアポロの耳に届くことはなかった。

「こんな小さな村にハンターが四人もそろうとにぎやかだな」



何やら狩猟以外のことに忙しげなハンターたちを離れたところから眺めていた村長に声をかけたのは村長の息子である。ここ数日島の様子を見て回っていたため、村には滞在していなかった。ハンターたちが来た時もないかったため、彼らとは初対面である。

村長同様の薄着で、村長の若かりし頃を思わせる屈強な体を惜しげもなくさらしていた。海の男と言われて、多くの人が連想するよくな無骨ながら顔つきながら、なかなかの男前である。もっとも、親馬鹿なだけかもしれないが。

「どうだった？」

数日島を歩き回ったにしては疲れた様子を見せない。多少衣服が汚れている程度だろうか。

「古龍とか言われてもすぐに納得できる訳じゃない。それに、セクメーア砂漠の古龍がここまで来るはずもない。正直言って、対岸の火事だと高をくくっていたが……」

髪をかきながら、にが虫を噛んでしまったようにせがれは顔を歪める。

「どうやら、悪い報告のようだな」

「火竜の番が山頂に巣を作った形跡がない。まるで、モガ島を避けるようにしてやがる」

「ラギアクルスの群れと言いつつあることに間違いないようだな。皆には有事の備えをしてもらった方がよさそうだ」

夜は次第に深みを増し、また明日が訪れる。いつもと変わらぬ日常が、明日もまた訪れる保証など、もはやどこにもないのだ。

小春日和って、春のことではないんですね。

第四話「会議は踊る。されど進まず。」 Mad Tea Party」(前書)

まだ古龍とは戦いません。

#### 第四話「会議は踊る。されど進まず。」 Mad Tea Party」

ドンドルマの街は、その中心部に街を象徴するとも言つべき城を有していた。複数の建物を巻き込む形で増築されたように輪郭はいびつであり、交易の中心として様々な地方の文化を吸収する形で発展したこの街を象徴しているようである。

その最上部には丸い屋根を有するドームが置かれ、必要最低限の柱以外に視線を遮るものは何もない。全周が開かれた作りとなっていた。元々は講義堂として設計されたものであるため、中心に向かって席と机が並べられ、中央はそのすべてを見渡せるよう高い床の上にあつた。

壁を持たないため、差し込む光をその身に浴びながら、セントポーリアは熱弁をふるっていた。太陽の光を受けることは許されない体である。純白のドレスの他に手袋から顔を覆い隠すヴェールまで身につけていた。

日の光の下に身を置くということは不愉快以外の何者でもなかったが、ここで王立古龍観測隊の責任者が顔を見せないわけにはいかない。

セントポーリアは、聴衆へと大げさな手振りさえ交えて語りかけていた。

「皆様の中には未だ、古龍の存在を信じていることさえできない人もいることでしょう。しかし、古龍は目覚め、今危機的状況にさらされていることは紛れもない事実なのです！」

聴衆は時折手元に置かれた資料に目を落としながら、しかしミスカトニツク王国第二王女の話に耳を傾けていた。

皆、集落、村、町、街、国の代表者、あるいはその代理たちである。全三六三の内、二〇〇を超す里の代表たちが集まっていた。

「ミスカトニツク王国王立古龍観測隊研究班によって王龍テラドミヌスと命名された古龍は現在、セクメーア砂漠を横断しようとしています！」

セントポリアの言葉に、代表たちがそろって資料を眺める。そこには、現地の観測隊から送られている王龍テラドミヌスの一日おきの針路が記載されているからだ。もともと、伝達時間のラグが存在するため、最新の情報さえ、二日前のものである。そして、そこには今後予測される針路が扇形に描かれ、その中に含まれてしまう里のことも資料として添付されているはずだ。

「その向かう先には二三の集落と五つの村、一つの町が存在し、三万を超える人々が危機にさらされているのです！」

どよめきが走ったのは、太陽の指す方向から。この講義堂は地理的な関係と席を同様になるよう設定されているため、南側ということとは、そのままドンドルマの南側、セクメーア砂漠近辺の民ということになる。彼らの中には、自分の里が危険区域にあると名指された者も含まれているのだろう。

しかし、その他の地域の反応は鈍い。そんな一抹の不安を振り払うように、セントポリアは一際声を張り上げた。

「現在、我々のすべきことは、その全勢力を結集し、巨大な古龍に

立ち向かうことです！」

風が吹き込んできて、聴衆の資料があらわれる音がした。その風はセントポリアのヴェールを撫でて取り払おうとする。それを押さえるために意識を取られて、聴衆の反応をうかがうことができないでいた。

まるでそのタイミングを見計らったかのように、太陽とは反対側の区画から、男が野太い声とともに立ち上がった。

「いいだろうか？」

男の名はディオニュソス。シュレイド王国の事務次官である。

大柄な体に、豊かな髭は老いというよりもたくましさを感じさせる。政治家というよりは屈強なハンターを思わせる体つきをしている。こんな男が立ち上がったということは、その肩書きもさることながら、存在そのものが人々の注目を集めるに十分であった。

「貴君等の報告書は読ませてもらった。実によく調べられている」  
その手には束にされた資料。古龍観測隊の方で用意したレジюмеである。

その力強い声からは皮肉な様子はうかがわせない。その反面、言葉をそのまま受け取ってよいという保証もない。体を、どうしても固くしながら次の言葉を待つ。

「この研究によれば、砂漠のハイパーボリア文明が滅亡したのはこの古龍のためであると結論づけられているが、私もこれは実に説得

力のある結論であると考えている」

資料を見ていた目 体の割に小さく思える がセントポリーアを捉える。

それが、宣戦布告の合図であった。

「しかしだね、その後、テラドミナスがセクメーア砂漠東部にまで進化したとされる証拠がまるで挙げられていない」

そして、ハイパーボリア文明は砂漠のほぼ中央にあるのだとも、ディオニュソスは油断なくつけくわえた。

さきほど、セントポリーアがテラドミナスの予測針路を示した時よりも、聴衆が大きくざわめく。

これは重大なことを意味していた。

セクメーア砂漠西部はドリームランド峡谷、ルルイエ山脈など標高の比較的高い山が連なり、それが南側を経由してインスマス火山帯と合流することで三日月状に砂漠を取り囲み、海から遮断している。そのため、砂漠に入るには東側、ドンドルマ地方から踏み入るしかない。結果として、砂漠西側は完全な深奥となっており、人の領域は東側に集中している。

仮にテラドミナスが砂漠中央までしか到達しないのだとすれば、多くの里は被害を受けずにすむのである。

「これの意味するところはすなわち、テラドミナスはセクメーア砂漠を抜けることはなく、よって、このドンドルマへの影響は少ない



ということではないかね？」

ディオニュソスはご丁寧にごそのことを解説してくれた。

「しかし、現在もテラドミヌスの針路は予測できません！」

王龍テラドミヌスが砂漠の中央で引き返してくれれば、一体誰が保証してくれるのだろうか。

「君たちはハイパーボリア文明を滅ぼしたから王龍テラドミヌスを危険だと言っている。しかし、必ずしもその文明の跡地を目指さないというのなら、針路が予測できないと言つのなら、それは矛盾ではない」

つい歯を食いしばる。端からでは表情をうかがうことができないヴェールが、幸いそれを隠してくれる。顔を隠していてもよい体質に生まれたことを、生涯で初めて感謝した。

セントポリアの論旨では、テラドミヌスがハイパーボリア文明を目指していること 事実、その針路の先には文明の遺跡が密集する区画がある が重要なファクターとなっている。そのことでテラドミヌスの周期性を説明し、その危険性を主張しているからだ。

だが同時に、それはハイパーボリア文明以東に危険が及ばない可能性にも言及してしまっている。それは喜ばしいことであったが、セントポリアは納得していない。

口を開いて息を吸い込んで、そのことを先回りするように、先に発言したのはディオニュソスの方であった。

「確かに、このような巨大な生物が動き回れば、危険なことに変わりない」

ペースを完全に握られてしまっている。

「しかし、現在もセクメーア砂漠各地、及び影響が出ると考えられているロックラック諸島の一部にはすでにハンターズギルドが避難命令、あるいは支援に動いている」

セントポリアが声を張り上げて危機を強調しようとしていたのに対して、ディオニュソスはあくまでも粛々と事態を把握していると演出していた。

下手に反撃しようとする、子どもが感情的になっているだけだと片づけられてしまう恐れがあった。

「テラドミヌスが覚醒するのが五〇〇年に一度なら、それは大きな地震のようなものだ。常識はずれの嵐のようなものではないかね？ 私は、いたずらに王龍を刺激するよりも、古龍が再び眠りにつき、その後の復興支援に尽力すべきではないかと考えている」

「それでは対処が間に合いません！」

つい声を張り上げてしまった。

確かに、船団を組もうとすれば莫大な費用がかかり、その間召集されたハンターの人件費からその期間狩りが行えないことへの補償も必要となるだろう。だが、迎撃準備をしないということは、仮に王龍が一線を踏み越えようとした場合、戦力を集めている時間が無いことを意味する。

この会議では、全会一致を期待していたわけではない。しかし、消極的な対応にまともってしてしまうことだけは避けなければならない。

ディオニュスは息を吹いた。単なる演出である。さも、持論に固執する子どもを諫めているように周りに見せたいのだろう。

「だが、古龍は未知の存在だ。下手に手を出すとどのようなことが起きるかわからない。それも、万が一の可能性の話ではないかね？」

「今こうしている間にも、砂漠の民は危険にさらされています。それを黙って見過ごすことはできません」

「だからこうして、ギルドが避難命令を発している。無論、生活の基盤を失ってしまうことは大変手痛いだろうが、それは王龍を放っておこうが迎え討とうが変わることではないだろう」

三つの王国の中で最も巨大なシュレイド王国はそれだけで周辺の里に多大な影響をもたらす。会議の流れは、決して王立古龍観測隊の意図した通りには、セントポリアの思惑に応える形では進んでくれなかった。

講義堂の外周部には参列者の関係者に限り、見学が許可されていた。とは言え、あくまでも通路を公開しているというだけであり、狭く、手すりのすぐ外にはドンドルマの街並みが広がっている。椅子のようなものは用意されていない。そこには様々な立場の人が、会議の行方を注視していた。

王立古龍觀測隊であり、特務騎士の白い制服を着た四人もそんな中に分類される。

「何だか、嫌な流れですね」

小柄な女性シギユンは、サイズが整えられているにも関わらず布の多い制服を持て余しているように着ている。刺繍された色は赤。特務騎士ではあるが、七人の魔女には数えられない。

そもそもシギユン自体、まだ特務騎士に選ばれてから日が浅く峡谷で古龍撃退に貢献した功績が認められた、現場の特務騎士ジエイナス同様制服というものに慣れてはいなかった。

反対に、額から右目にかけて古傷を持つ男 四人の中で唯一の男性である、アレスは、余裕を見せて会議の様子を見守っていた。

「被害がセクメーア砂漠に留まるのならば、それ以东に暮らす人々には関係のない話だ。それに、砂漠の民の中には復興支援で十分だと考える者も少なくはないだろう」

「でも、古龍は恐ろしい存在なんですよ」

すぐ隣に立つアレスに横目で視線を送るシギユン。別に直視できないほど嫌っているということではなく、会議を邪魔しないよう、気を使っているのだ。

「それを知っているのは俺たちだけだ。会議の連中の大半が古龍を知ったのは昨日今日の話だろうからな」

「自分たちの常識が相手にも受け入れてもらえるとは思わないことです、シギユン。そして、それは無理解ではありません」

三人目。この女性、スノードロップは金の刺繍が施された制服を身につけることが許された七人の魔女の一人である。会議の様子を眺め、誰とも目を合わせようとしないのは、ある種、癖のようなものである。

「俺たちが、及び腰なあいづらのことを理解できていないようにな人にはそれぞれ立場というものがある」

多くの里にとって、セクメーア砂漠で何が起ころうと大きな影響はないだろう。このレムリア大陸の東側は豊かな森や湿地が広がり、大陸人口の半分以上が東側に集中している。アレスたち四人が仕えるミスカトニツク王国もセクメーア砂漠とは火山と大きな入り江を挟んだ東側にある。

「でも、姫様は……」

シギユンは言葉を途切れさせたが、この場の多くがその続きを理解していた。

古龍の恐ろしさを知り、その脅威から人の世界を間守ろうとしている。

そんなことは特務騎士ならば誰でも理解しているのだと気づいているからこそ、シギユンは言葉を最後まで紡ごうとはしなかった。

アレスの目には、理路整然と話を組み立てるディオニユス事務次官と、それに対して時折反論するしかできていないセントポーリ

アの姿が写っていた。

この会議、七日間の行程を終えた後、各集落、村、町、街、国がそれぞれ一票ずつ投票する投票が行われる。どの規模の里でも同等の権限が与えられているのだが、実際問題、王国に近い里はその意向をなかなか無視できるものではないだろう。

「あいつは、根回しだとか多数派工作ができるような奴じゃないかな。ディオニユソス事務次官はその点切れ者だ。切り崩しはすでに始まっていると見ていい」

半数を果たして確保できるだろうか。特務騎士たちは誰も答えられないでいた。

その中で気炎を上げるのは最後の一人。金の刺繍が施された七人の魔女、フィリアは如何にも不機嫌といった様子で制服を着崩していた。会議を見ようとせず、離れた手すりによりかかっている有様などを見るに、主への忠誠心の低さが見受けられる。

「そもそも国が古龍の存在を隠していたのが原因だろ！」

アレスとスノードロップ。古くからセントポーリア王女に仕える二人はその理由を知っている。

情報を独占し、古龍のような危険な存在を隠匿し続けていることに、フィリアは公然と不満を露わにしていた。制服こそ着ているが、そのことを原因として特務騎士をやめている。それでも七人の魔女の一人ではあるという複雑な立場の持ち主である。

現在ではこのドンドルマの街を拠点とする獵団「聖堂騎士団」の

獵団長を務めている。ちなみに、名前は特務騎士への未練を示すものではなく、単に格好がいいと安易な理由でつけられたそうだ。

講義堂とは反対側の手すりに寄りかかっているフィリアを見ようと、スノードロップは振り返る。ただし、動いたのは首だけで、横目で眺めるだけである。

「古龍の素材からは強力な武器が作り出せてしまいます。そうそう、口外していいものではありません」

そうとだけ言つと、またすぐに講義堂へと首を戻す。フィリアは無言のまま、手すりを離れ歩きだした。

「スノードロップ」

「はい？」

スノードロップが振り向くタイミングに合わせて、フィリアは同僚の体の向きを自分の方へと力づくで変えた。すると、スノードロップとフィリア、二人の魔女の視線が、至近で混じり合う。

そして、何とも名状しがたい声を出して、顔をこれ以上ないほどに真っ赤にして、スノードロップは跳びのくように倒れた。その様子は、講義堂内の代表の一部がつい後ろを振り返るほどであった。

勝ち誇つたように鼻息を強めるフィリア。その足下ではスノードロップがまだ身悶えている。

特殊な環境で育つたため人と目を合わせることのできないスノードロップのあしらい方なら、特務騎士の誰もが知っている。アレス

もシギユンもおかしな声を出して倒れるスノードロップのことよりも、講義堂から立ち去ろうとするフィリアへとその視線を注ぐ。

「どこに行く？」

「砂漠だ。獵団員召集して、ソフィアたちと合流する」

フィリアは振り向きもしないで手を振るだけである。とめても聞かないだろうと、アレスは黙って、階段に姿を消す魔女を見送った。

スノードロップもやがては自然に回復することだろう。とりあえず放っておくことにしよう。

「アレスさん、もしも、もしもですよ。もし、静観するって決まっ  
てしまったら、私たちどうするんですか？」

「あいつのことだ。ミスカトニック王国、いや、王立古龍観測隊  
だけで動くことになるな。覚悟はしておけ。それが、特務騎士の務め  
だ」

「わ、わかりました」

表情を真剣なものにして会議を見入るシギユン。アレスもまた、  
自らが仕える主の姿を真剣な眼差しで捉えていた。

「さて、姫様。この苦境を打開してみせる。誰も、お前を甘やか  
してはくれんぞ」

ちなみに、スノードロップが快復するまでには、まだまだ時間か  
かかるようである。



第四話「会議は踊る。されど進まず。」 Mad Tea Party」(後書

今回は少々短めですが、新たに登場したキャラクターが五人……。

第五話「レムリア大陸」Law of the Jungle」(前書き)

まだ戦闘が始まりません。

## 第五話「レムリア大陸」 Law of the Jungle」

繁殖期を迎えたばかりの砂原は徐々にその気温を増しつつあった。それでも直射日光の当たらない場所では適度な気温が保たれ、汗ばむほどではない。

そうでなければ、飛行船の船室にこもっているなんてとてもできなかったことではないだろう。

作戦会議室。

名前こそ仰々しいが、単に広めの船室に大きなテーブルが置いてあるだけ。窓さえない。倉庫とは詰め込まれているものが人か物かの違いでしかない。

狭苦しいわけではない。それどころか、テーブルを囲む多くがアイルーであり、圧迫感を感じない。が、ジェイナスは窮屈さを覚えていた。そもそも会議などとは無縁な生活を送っていた。横目で見やると、そんなジェイナスとは異なり、会議の進行を主導しているソフィアの姿がある。

「とりあえず、王龍君はこちらの予測通りに進行してるね」

テーブルの上に敷かれた地図にはレムリア大陸西岸のドリームランド峡谷を発した王龍テラドミヌスが予想進路通りに移動している様子が記載されている。

その向かう先、ある文明の残り香が漂っている場所がある。

「ハイパーボリア文明の遺跡だね」

五〇〇年前にテラドミヌスによって滅ぼされた文明は、今なお古龍の王を引きつけようとしていた。

「まったく歯がゆいよ。この船には武器も搭載されているのに、手出しは厳禁だなんて」

「武器、弾薬の数には限りがありますにや。とてもグツフルファクシ級飛行船三隻ではあの大きさのモンスターはしとめられないにや」

口元に手をやって渋い顔をするソフィアに答えたのは、メタトロクン機関士である。このグツフルファクシ級飛行船の艦長は形式上ジエイナスが特務騎士として就任しているが、備品や人員の管理など、実質的な責任者はこの優秀な黒毛のアイルーが務めている。

残念なことに、できることなんてほとんどなかった。

「フィリア姉さんたちもこっちに来るみたいなんだ。どうやら、会議の方は思わしくないらしい」

明らかにジエイナスに対してかけられた言葉は、そんな境遇を考えてくれたソフィアなりの気遣いだったのかもしれない。とは言え、ジエイナスには状況分析どころか感想程度のことしか口にするにはできない。

「でも、テラドミヌスがここで止まってくれるなら、それに越したことはないと思うけど」

指さしたのはハイパーボリア文明の跡地である。幸い、危険と判

断される場所にはすでにギルドの飛行船が避難命令を伝えに行っているらしい。きつと会議で意見が割れているのは、そんなことに原因があるのだろう。

ソフィアは渋い顔を崩していない。それが自分のせいでないことを、ジェイナスは祈った。

「そうなんだけど、何か気になってるんだよね。王龍君がハイパーボリア文明を滅ぼした。でも、今ここに新たな文明は存在していない」

「だったら安心なんじゃないかな？」

「でも、違和感があるんだよ」

よくわからない。新しい街がないのなら、それは被害が拡大しないことを意味しているのではないのだろうか。

「女の勘て言うのかな、そういうの？」

「それは偏見だよ。別に女性は感性の生き物じゃないよ。だからちよつと待ってほしいんだ。ジェイナスにもわかるように説明できると思うから」

ソフィアは少し笑って、それからほんの少し怒ったようだった。一時期は婚約者までいたジェイナスだったが、それは女性の扱いに慣れているというよりは、女性の優しさに甘えているだけであつたのかもしれない。

男としても特務騎士としても、まだまだ駆け出しのようだ。

場所は砂原から北東に位置するドンドルマの街へと移る。しかし、その部屋の狭さ、緊迫した雰囲気というものは何ら変わってはいない。

街のホテルのフロアを貸し切って、ミスカトニック王国の拠点として利用していた。本来ならば庶民にはなかなか手のない豪華な部屋が、積み込まれた様々な資料に埋め尽くされ、さながら倉庫のよう。せつかくのソファもそのすぐわきに資料がうず高く詰まれ、ベッド代わりに利用されてしまえば豪華さの演出にはまるで役立たない。

フィロソフィアは、現場へと出向いた妹二人　フィリア、ソフィアの二人である　のことをうらやましくさえ思っていた。瞼が重く、目にはクマが出来ている。

里の代表者が集う会議の資料作りに追われて、ここ数日ともに睡眠をとっていないのだ。

「グラジオラスさんは、どう見ます？」

首を動かすのも億劫で、つい寝そべったままグラジオラスの姿さえ確認してはいない。それでも、きつと咎められはしないだろう。グラジオラスもまた、どこかで崩れているに決まっているからだ。そんなことを、無駄に　この状況ではそうとしか思えない　豪華な天井を見上げながら考えた。

本当は、七日に及ぶ会議の結果について頭を巡らせなければなら

ないのだろうが、うまく考えがまとまらない。

「そうね。何だかんだ言っても、砂漠の人々の中にはいつ眠りにつくかもわからないテラドミヌスを放っておきたくはないと考える人がいることでしょうから、五〇は固いわ」

漠然とした意識の中でグラジオラスの言葉を聞いている。意見こそいつも通り、七人の魔女最年長らしく牢乎だが、その声には明らかな疲労の色が覗かせていた。

「でも、シュレイド王国は反対票を投じるでしょうから、それに追随する場所も含めると、七、八〇票は持っていていかれて……」

しばらく待って、グラジオラスの分析を待ちかまえる。

「浮動票を除けば、現状は七〇対二一〇といったところかしら」

里はすべてで約三六〇。その内の過半数をミスカトニック王国が獲得するためには一〇〇を超える里を味方に付ける必要があるが、流れは完全にシュレイド王国に傾いている。

そして、その流れを一気に変えることができるような材料もないことも事実である。

「正直、大変不利ね。姫様は、多数派工作とかできる人には見えな  
いから」

白い髪に赤い瞳を持つ白いドレス姿の愛らしい主の顔　現在、  
会議にて熱弁をふるっている最中だろう　を思い浮かべた。

「何というか、文官というより武官なんですよ」

「頭よりも先に体が動くタイプよ」

「おまけに短気で、わがまま。気にいらなければ太陽が西から昇ってくることさえ許せないような人ですよね」

こんなこと姫様には聞かせられない。できないことだからこそ、妙に楽しく心躍る。疲れて切っているはずの体が、それでも笑うことができた。それはグラジオラスと同じであるらしく、決して大きなものでない声ながら一笑した。

「私たちもとんでもない人にお仕えしてますよね」

「そうね」

そうやって笑い合っていると突然開かれた扉の音に、声がかき消されるとともに二人の魔女はそろって体を強ばらせた。噂の主が入ってきたからである。そのことは声からわかった。

「ああもう、ムカつく!!」

明らかにご立腹な様子である。この分だと、またディオニソス事務次官に言いぐるめられてしまったらしい。

ご機嫌斜めな姫様にまた付き合わされることになる。ため息をつきながらソファから体を起こす。その間にもセントポーリア女王は地団太踏んで暴れている。

「何、あの髭親父！ 人の揚げ足ばっかかって何様!？」



アルビノであるため、色素のまるでない頬はその分、赤みを帯びた色を如実に示している。

グラジオラスは机について、さも何か大切な資料を扱っているように顔を下に向けていた。それが姫と付き合うための処世術であるのだとフィロソフィアが気づいた時には、すべてが遅かった。

博識の魔女があくせくしていると見るや、さすがの王女も気をきかせたようだ。首をくるりと回すや、その赤い瞳は、ソファアの上で寝転がっている暇そうな獲物を捉えたのである。

「フィロソフィアは話、聞いてくれるよね？」

笑顔を作りながら歩いてくる。逃げられない。もう諦めるしかない。数時間愚痴を聞いてあげれば、満足することだろう。

そう、フィロソフィアが覚悟を決めたタイミングで救いの声が聞こえてきた。

「失礼ですが、セントポーリア様はいらっしゃいますか？」

男性特有の野太い声である。しかし、わずかながら声には戸惑いを示す抑揚が含まれていた。豊かな髭をたくわえた男性が、一人で扉のところ立っている。行儀の悪い姫様が開けっ放しにしたままの扉から遠慮がちに室内を覗いているのは、ディオニュソス事務次官その人であった。

立ちこめる酒の匂いとハンターたちの体臭で見事にブレンドされた喧騒が立ちこめる。女性を食事に誘うような場所では決してないが、それはディオニュソスの責任ではない。

女性を呼ぶどころか、会談に適した場所であるとも思えない大衆酒場である。こんな場所を、会談相手は会場に選んだ。

せいぜい三人掛けの小さな丸テーブル。並べられたでさえ料理はどれも見たことのないもので、ディオニュソスの思い描くどの光景とも異なっていた。

ついでが落ち着かなくなる。視線は、あたりの様子を観察するように動いた。文官であるディオニュソスにとって、ハンターの世界とは未知のものであったのである。

「それで、お話とは？」

そんなディオニュソスを見かねたのか、会談相手であるセントポリア王女は話を切りだした。

テーブルの向かい側に、ドレス姿のまま王女は座っている。そうであるにも関わらず、その態度は落ち着いたもので、周囲の雰囲気完全にとけ込んでいた。ハンターたちの身につける防具には様々なデザインのものがあることも、ドレスを際立たせていない要因であるようだ。

それ以上に、かつてはハンターとしてセイレムの里で過ごしたこともあると噂されるセントポリア王女の仕草一つ一つが酒場の空気を完全に捉えているようである。

王女とは思えないほど豪快に骨つき肉を食いちぎる様子は、噂が単なる噂でないことを教えてくれる。

話が合わぬ訳だ。会議での紛糾ぶりを思い出しながら、ディオニユスは髭に隠れた口元から息を吹いた。

「勘違いしてもらいたくはないのですが、私とて、古龍を野放しにせよと言っている訳ではありません。しかし、今回はやり過ぎるところが得策と考えているにすぎません」

こんなこと、他のハンターたちに聞かれてもしたらどうするのか。そう考え、つい声を潜めてしまったが、周りにこちらのことを気にする者はいなようだ。時折、場違いな雰囲気発するディオニユスを給仕が盗み見る程度である。

言葉を区切ったのはあたりの様子を確認するためであったが、姫が選んだこの場所は、最適かはともかく、決定的外れな場所でもないらしい。人に話を聞かれるような場所ではない。何より、密室での会談というものを、姫は嫌ったのだ。

「現在、我々の世界はモンスターを狩ることなしには成り立ちません」

「それはわかります」

それでも敢えて説明を続ける。姫は不快に感じた様子もなく、肉をかじっていた。

「我が国でも、少なくともあと三〇のリオレウスを狩らなければなりません。その素材を売ることによって資金を稼ぎ、それを他の里への支

払いへとあてねばなりません。また、火竜の頑丈で軽量の翼膜は気球、飛行船に欠かすことができない以上、配給が滞ればハンターたちが足として利用する気球の運行にも支障が出てしまいます」

レムリア大陸の東側から人々が移り住んできたのはほんの三〇〇年ほど前。その当時は、それぞれの里である程度の自給自足が行われていたらしいが、流通が確立し現在ではそれでも揺らいでいる。

寒冷地で狩られたモンスターの素材は南方では高値で取り引きされる。そして、その逆もまたしかりである。そうして里は地方でとれるモンスター素材、特産品で現金収入を得て、それを頼りに必要なものを揃える生活様式が形成されているのである。

「そんな折り、ハンターたちを召集することはシステム全体への大打撃となることでしょう。あなた様になら、それはわかるはずです」

セイレムの里は、寒冷地のモンスターを狩るためいわば前線基地として機能していた。作物の育ちにくいあの里では、モンスターの素材を売り、その収入で食料を確保しているのである。逆を言えば、このような流通の仕組みがあるからこそ、凍土のような場所に里を構築することができるようになったのである。作物の育たない土地でも、安定した食糧供給ができるからである。

姫はその赤い瞳を、ランプの弱い明かりでさえ眩しいそうに瞬きを頻繁に繰り返す。

「それもわかります」

「今ここで古龍の迎撃に出た場合、どれほどの人員とどれほどの予算がかかるかわかりますか？　そして、飛行船が大量に投入され

てしまえば、ハンターを狩猟場に送り出すことさえままならない」

流通のシステムが深刻な段階で止まってしまっている。すると、システムそのものが麻痺してしまうことになる。

「それがどれほどの経済損失を生み出すことになるのか、あなた様にはわかりますか？」

両肘をテーブルの上に置き、無礼にはならない程度に身を乗り出す。セントポリア王女はもはや骨だけになってしまった肉を皿の上に置くと、ナプキンで軽く口元を拭う。

まるでそれが合図であったかのように、一人のハンターは王女という立場に戻ったように鋭い視線を飛ばした。

「王龍テラドミヌスがハイパーボリア文明の遺跡で止まってくれる保証はありません。仮にセクメーア砂漠東部にまで進出した場合、その被害は計りしれません。もしかすると、ドンドルマの街にさえ、壊滅的な被害がもたらされる恐れもあります」

「確かに」

「ドンドルマの街が破壊された場合、流通の中心を失うことになります。それはすなわち、東西南北の地域が分断されてしまうことにも等しい。違いますか？」

小柄な少女から見たなら、遙かに大柄な男相手にも王女はまったくひるんだ様子を見せることはない。まったくもって大したものだ。

どちらも引く気配というものを見せない。所詮、文官と武官の争

いなのだ。戦わずに物事を解決しようとする人種と、戦うことでしか護ることはできないと考える人種の違いである。

それは会議の場で明らかなことであり、また、決着はこのような非公式の場ではなく会議でつけるべきものだろう。ディオニュソスが会談を求めたのは、説得のためではない。

「私にもあなたくらいの娘がいます」

「それで？」

いつまでも顔をつき合わせているのは得策ではない。場の雰囲気を変えるつもりで、ディオニュソスは首を振る。

「結論に入りましょう。我々は敵同士ではありません。ただ、この世界を守るために最善と考える手段が異なっていると言っただけの話です。違いますか？」

「いえ、その通りだと思います」

そうは言いながらも、王女の視線は厳しいままである。

「投票の結果が出たなら、それはこのレムリア大陸の総意であるということになります。無論、少数派の意見を握りつぶすにも等しいことであるとは重々理解していますが、そのため、我らは七日に及ぶ議論の時間を設けました」

その結果、流れは完全にディオニュソスの、シュレイド王国へと傾いている。

被害が少ないと予測される東側の里はシュレイド支持で固まりつつある。地域ごとの投票拘束など存在しないが、わざわざ周りと異なる行動をしようとする里も少ないことだろう。

そして、仮に王龍と戦うことが支持されたとしても、まだ難関は残されている。ハンターでもある王女は、そのためかハンターズ・ギルドと強い繋がりを有している。しかし、里とハンターズ・ギルドの他に第三の勢力とも呼べる象牙の塔は易々とそれを認めようとはしないだろう。学者の集まりである象牙の塔は、それこそ文官の勢力であるからだ。

王女の前には二つもの難関が待ちかまえているのである。

今のままでは王女は古龍との戦いの支持を得ることはできない。だからと言って、あっさりと戦いを放棄するような娘だろうか。

様子をつかがってみると、口元はしっかりと結ばれ、睨まれていると感じるほど、瞳はしっかりと見開かれている。娘がへそを曲げた時と同じ顔だ。意地を張って、なかなか言うことを聞いてくれなくなる時のそれであった。

「もはや、争いは、終わりにしませんか？」

「意志が決定されれば、異論を述べることなく勝者に従う、そういうことですか？」

「その通りです」

たとえ王国単独、いや、王立古龍観測隊だけでも古龍と戦うというのであれば、それは無謀以外の何者でもない。

そしてディオニュソスは戦いそのものを回避したいと望んでいるのである。セントポーリア王女の瞳から、少しは敵意が抜けただろうか。それはこちらの希望的な観測でしかないのかもしれない。

「わかりました」

厳しい顔こそ崩さなかったものの、王女はしっかりとした声で返事をするともちに立ち上がった。その手元におかれた皿はあらかた空になっている。

「では、支払い、お願いします」



## 第六話「北風と太陽」Ancient Dragons」

### 進化論

それは、生物は偶然と必然の学問である。

ある集団の中から、偶然に発生した突然変異が特殊な個体を生み出すことがある。新たな形質を得た種は、しかし、種として弱くことが多く、その多くは子孫を残すことなく死に絶える。

だが、仮にその新しい力がその集団が抱える難題を解決する足がかりであったとしたら、その種は集団の中で優位に立ち、子孫を多く残すことができる。そして、子孫の中からも新たな形質を持つ多数の個体が登場する。

その子孫たちもまた、新しい力の下、さらに多くの子孫を残すことができる。その子孫は、さらに多くの子孫を残す。それはやがて集団全体にあまねく広がり、種の形質は書き換えられるのである。

偶然から生じた突然変異が、必然として子孫を増やし、やがて種を書き換えていく。

進化とは、途方もない時間をかけた、この試行の繰り返しである。

よって、突然変異は化け物を生むことはない。仮にあまりに異質な個体が誕生したとしても、残念なことではあるが、子孫を残すことはできないためすぐにその形質は途絶えてしまうだろう。

どの種も自らの生態的地位を守るため、絶えず進化と退化を繰り返す。

返し、その形質を変えていく。走り続けることをやめることができない、赤の女王のように。しかし、それは異端を生み出すことは決してないのである。

空を舞う飛竜も、海原を泳ぐ海竜も、地を踏みしめる牙竜も、四肢を備え、脊椎を有するという構造に変化は見られない。皆、同じ形質を抱きながら、様々な試みとしてその体を変化させ続けているのである。

それは人も変わらない。等しく大地に息づく生命は、誰もが同じ始祖を持つ。

では古龍とは何か。

四肢の他、その背には翼を羽ばたかせ、生物としては規格外の能力を有する。その性質は残忍にして残酷。火竜でさえ、満腹の時は子どもの草食種アプトノスを襲うことはない。しかし古龍は、獲物を求め、破壊を好み、その際限ない力を奮う存在である。

龍毒と呼ばれる、龍が持つ毒を、龍を殺す毒を持つ。

風を操り、光をねじ曲げ、炎の主である。

そして、生きとし生けるものすべての敵である。

セクメーア砂漠は通常、乾いた風と照りつける太陽の他、何ら代わり映えのない光景が続くのが常である。それがこの砂漠の常であるのだが、五〇〇年に一度のお祭り騒ぎの最中であるらしい。

繁殖期の初期。比較的気候が安定しているはずの時期でさえ、その常識は通用していない。

双眼鏡を覗きながら、フィリアは遠く砂漠の空を覆う黒雲を見ながら、そして不必要に輝きを強める太陽を感じていた。

セクメーア砂漠北側に発生した嵐は、あり得ないほどの規模で砂の大地の上半分を占めている。この嵐を迂回しようと南に針路をとると待っていたのは季節外れの暑さであった。

フィリアは幸い飛行船に乗っている。高所の風が体感温度を下げ、太陽が真上にある時には気球が甲板に影を落とすためうだるほどの暑さではないのだ。もっとも、このヒミンブリュード級飛行船は元々輸送船であるため、快適な船旅とは言い難いが、贅沢は言えない。

双眼鏡を外し、体ごと振り返ると、併走する飛行船があった。この二隻の飛行船の積載量を総動員して、フィリアが団長を務める獵団、「聖堂騎士団」の団員たちを運んでいるのである。

未だ、七人の魔女の証である金の刺繍の施された礼服こそ身につけているが、特務騎士の役職からは退いているフィリアが騎士団の団長を務めているのは、何となく語呂がよかったから、その一言に尽きる。

要は気分の問題なのだ。

総勢約四〇。規模として中堅どころである。もっとも、これだけ団員が集まることは珍しい。

「猟団員がこれほど集まるのも久しぶりだな、エール」

フィリアのすぐそばに、まるで付き添うように立つのは一人の男である。背が高く、声を荒らげる様子を想像しにくい優男は、名前をエールといい、この猟団の副団長を務めている。こんな暑い中、長袖を着ていても文字通り涼しい顔をしているような男であった。

「ええ。みんなほかに仕事がある人もいますから。それより、そろそろ話してくれてもいいんじゃないありませんか？」

「何を？」

軽く笑いながら、まるで近所の優しいお兄さんが子どもを諭すような声で、エールは言葉を続ける。

「私たちを召集した理由です」

話しながら、ふとエールは下を向いた。うなだれているのではない。床に開けられた、甲板から格納庫に通じる入り口を見ているのだ。そこには転落防止用に木製の木枠が格子状にはめられている。そのため、まるで牢獄のように見えなくもない。

「話していただかないと、そろそろ限界ですよ、みんな」

「横暴だ！ 俺たちは荷物じゃないんだぞ！」

床から聞こえたのは若い男の怒号である。木製の格子にかじりつき、それこそ罪人が何かのように目を血走らせている。そのすぐ後ろには、如何にも不満たらたらと言った様子の団員の顔があった。

「私、つい三日まで雪山にいたんですよ。それなのにこんな暑い中に放り出されるなんて！」

まったくどいつもこいつもうるさくて仕方がない。ちょっと誘拐紛いに連れ出して、場所がないため日中夜、本来ハンターの待機場所 武器防具が置かれているため、決して広くはない に押し込んだだけで喚き散らすなんて。

フィリアは団長として、配下のこらえ性のない有様に嘆息する。

「仕方がないだろ。飛行船の重量ぎりぎりまで飛んでるんだからな」

そもそも、船の部屋なんて立って半畳寝て一場と与えられないものである。まともな空調設備がないからと言っても、甲板で優雅に過ごすフィリアと違って暑さにやられるとは言っても、不満を言われる筋合いはない。

それでも、団員どもは口々に不満を口にする。鬼、悪魔、くず、人でなし、冷血女、筋肉バカ。

少々、わからせてやる必要があるようだ。

貫かん勢いで格子を踏みつける。木とは思えないくらい、いい音が響いた。途端、団員どもは静まり返る。

「がたがたぬかすな。お前たちは私の命令が聞けないとでも言うのか？」

当たり前だ。恐らく、こんなことでも言おうとしていたのだろう。息を深く吸い込み、抗議の構えを見せていたハンター一人を睨みつ

けて黙らせる。

「アン。お前がどうしてもドドブランゴを倒せないと泣きついてきた時、助けてやったのは私だったな」

「そ、それは……」

強靱な四肢と極めて強い統率力を有する雪獅子ドドブランゴを倒した時のことを思い出させると、まず一人の女性ハンターの顔から勢いが消失する。

「ツヴァイ。初めて狩りに連れて行ってやった時、お前はその場の勢いだけで血判状まで書いて私に忠誠を誓ったな」

「あ、あれは……」

続いているターゲットは、猟団内でも若手の部類に入る男ハンターである。血判状を見せつけてやるまでもなく、しとめることができた。

「サン。私は、お前に晩飯をおごってやったことがあったな！」

「くっ、確かに……」

「いや、その程度なら断れ！」

一人苦悶に表情を歪めるハンターに対して、周りのハンターは意外に冷静であった。もっとも、何人かの出鼻をくじいてやったためか、反対は先ほどではない。

余裕を見せつけるように見下しながら、フィリアは自らの目に異様な光が宿ることを感じていた。

「ともかく、もう少し辛抱しろ。そうすればくれてやる。逃げ出しなくなるほどの、とびっきりの相手をな」

古龍。フィリアとて一度しか戦ったことはないが、その戦闘力は飛び抜けて高い。忘れることができないほどの圧倒的な絶望と死への恐怖。そして、戦っているのだと、生きていることの実感を与えてくれる存在はない。

そんな相手と巡り会わせてやろうと言うのだ。感謝されてしかるべきではないだろうか。

団員たちは神妙な面もちで顔を見合わせていた。何やら無言の相談をしているようで、しばらくすると、一人のハンターがゆっくりと手を挙げた。

「団長、……俺たちを戦闘狂か何かと勘違いしてませんか!？」

不満を漏らす団員に対して団長としてすべきこと。それはわかりきっている。フィリアはエール副団長の方を見ながら一言。

「しかし暑いな。エール、扇いでくれ」

よくよく考えてみると、聖堂騎士団において独裁者として君臨するフィリアにとって、団員の不満にいちいち反応する必要はなかった。

「団長……!?!」

配下の悲痛な声を聞き流しながら、フィリアは初めて見る古龍へ  
と思いを馳せていた。その全員が古龍との戦闘経験を持つ七人の魔  
女総出で作戦に当たるなどこれまでになかった。

これが、果てしないデカイ戦いにならないと期待しない方が間違  
いである。

王龍テラドミヌス。相手にとって不足はない。

昼だと言うのに、厚い雲に覆われた北の砂漠では暴風が吹き荒れ  
ていた。高空はそれが顕著になり、飛行船が飛ぶことができない。  
そのため、近隣の集落、村から避難していた人々が乗る飛行船は碇  
を降ろし砂の上に停泊していた。

砂に碇を降ろすとは言っても、まだ気球は展開されたままである  
ため飛行船は宙に浮いている。風を真横から受けると、船は大きく  
揺れた。

木が軋む音。船が揺れる度に母不安気にティルテユの手を掴んだ。  
与えられた船室は雑居のもので、すぐ上に二段目のベッドがある狭  
い寝床の上で、母は疲れた以前にも増して疲れているようであった。

「母さん、大丈夫だから。心配はいらないよ」

そう話しかけては見たものの、ティルテユ自身とて古龍を見たこ  
とがあるわけではない。そんな不安を隠す意味もあって、手を握り  
返す。すると、母は安心したように目を閉じた。



どうやら、寝てくれたらしい。自分と同じく褐色の手　ティルテュと比べるべくもないほど細いが　をそっと布団の中へとしま  
う。

暗いとは言え、まだ時間としては夕刻。そんなに寝ている人もいないため、そこまで気遣う必要もないのだろうが、せめて母を起さないため、ティルテュはゆっくりと立ち上がった。

ランプの最低限の光を頼りに歩く。寝室のすぐ外は食堂としても利用される休憩室となっており、同じ村から脱出してきた見知った顔がいくつもあった。軽く手を振って挨拶を交わしてから、廊下へと出る。

風が吹く度船が左右に揺れ、それは歩くことにも慎重を求められる。幸い、廊下は細く、手すりに掴まりながら目的の場所へと行くまでにはさして苦労はなかった。廊下の突き当たり。扉はなく開け放たれた部屋を覗き込むと窓のない部屋はランプに照らされた武器が雑多に置かれた場所である。

会議室として利用される他、ハンターたちの待機場所としても機能するこの部屋に、ティルテュはハンターとして立ち入りを許可されていた。中には村のハンター数名が武器の手入れをしている他、中央のテーブルには二人のギルドナイトがついている。

ティルテュに気づいたのは、ギルドナイトたちであった。

「お袋さんはどうだい？」

ティルテュよりも母の方に年齢が近い妙齢のギルドナイトは席に

つくように促す。促されるままテーブルにつくと、上に敷かれた海図に目を落としながら答えることにした。

「寝たよ。やはり急なことで疲れがたまっているらしい」

海図は、この船の現在地 砂漠の北側、ドリームランド峡谷と繋がる山脈の麓のあたりである を示すとともに、古龍の針路を大ざっぱに描いていた。広大なセクメーア砂漠全体に影響が及んでいるため、情報伝達がなかなかできず正確な情報が得難い状態にあるのだそうだ。ただ、幸いにもこの仮設停留所を王龍とやらが襲う確率は極めて低いそうだ。

そう教えてくれたギルドナイトは現在テーブルの上に座っている。人間なら大変行儀が悪いのだが、二足歩行の猫殿が座る様子はかわいらしくさえある。どこそのメイドが見たなら喜びそうな光景である。

「しかし、アイルーのギルドナイトがいたとは知らなかった」

「駐在はしてませんからにや。でも、権限は人とほとんどかわりませんにや。気球や飛行船のように体重制限が厳密な職場が中心ですにや」

なかなか丁寧な答え方はアイルーの間ではなかなかの美形にあたるのではないか、そんなことを考えさせる。

そういえば、気球も多くはアイルーの手で動かされていた。その時は特に気にとめることはなかったが、適材適所、なかなか重要な役割を担ってくれていたようだ。

人語を解し独自の文化さえ有するアイルーたちは、体格云々さえ除けば人と何ら遜色ない働きをすることだろう。

「ところで、古龍なんて、本当に存在しているのかい？」

「もちろんですよ。ミスカトニツク王国の王立古龍観測隊では、すでに何年も前からその情報を掴んでいますよ」

ラファエル。村に来た時にそう名乗ったギルドナイトはテーブルの下から大きな紙　小柄なアイルーと相対的に、そう見えてしま　う　を取り出すと、海図の上に広げた。

それは、何かの図である。見覚えがあつて、しかし見覚えのないもの。ラファエルは滔々と説明を述べる。

「ハイパーボリア文明から発見された壁画の復元図ですよ。ここに、風翔龍クシャルダオラ、炎王龍テオ・テスカトル、そして、今回目覚めた王龍テラドミヌスですよ」

向かって左手に風を纏う古龍。右には炎の意匠に包まれる古龍。そして、見覚えのない、ハイパーボリアの城と赤い雲の間に描かれた巨大な古龍の姿。

二頭のディアブロス亜種との死闘の末かつて見た、王墓に描かれた壁画であった。

何故、完全な復元図をハンターズ・ギルドが所有しているのか。瞳孔が自然と拡散し、驚きを隠しきれないとはまさにこのことだろう。特に慌てた様子を見せたつもりはなくとも、ラファエルは気づいたようである。

「ご存じですかにゃ？ ミスカトニツク王国お抱えの特務騎士が地元のハンターの協力のもと発見したものらしいですにゃ」

ということとは、あのメイドが特務騎士であつたということだろう。確かに優れた狩りの腕を持ち、壁画を凶に残したのもメイドである。しかし、少々ではすまないほど変わった性格の持ち主であつた。とてもではないが、特務騎士といった様子ではない。

そもそも、ティルテュが発見した壁画は中央部分、王龍の絵は欠損していた。恐らく、別のところにあつた壁画　より完全な状態のものを発見した特務騎士がいたのだろう。

「いや、何でもない。気のせいだつたようだ」

ともかく、ハイパーボリア文明の人々は古龍と戦つていた。そのことがわかつただけで十分である。

「しかしこんな化け物が本当にいたんだね」

「セクメーア砂漠はドンドルマ地方からしか入れにゃいから、西側は深奥として誰も足を踏み入れたことなんてにゃいいのですにゃ。そこにどんな生物が生息していても、誰も知りませんにゃ」

「確かにね」

二人のギルドナイトが話をしていると、一際大きな突風が叩きつけたのだらう。テーブルに掴まらなければならぬほど大きく揺れて、どこからともなくどよめきが聞こえてくる。

嵐は収まる気配さえない。

「すごい揺れだね。本当に大丈夫なんだろうね？」

「嵐が徐々に強くなっているにや。これは、気球を畳んだ方がいいかもしれないにや」

言うが早いか、ギルドナイトはテーブルから飛び降りるなり、甲板へと通じる階段を駆け上がる。扉が開かれると、雨粒の混ざった風が吹き込み、嵐の激しさを予感させた。

風に煽られ、壁画を描いた絵が飛びそうになるのを必死に押さえた。

王龍テラドミヌスと、その左右に描かれる二頭の古龍の姿。人々が戦っている様子が描かれる。それは、ハイパーボリアの人々と古龍との戦いの様子を現代へと伝えていているものである。

かつて、国を、民を、仲間を守るために王と風と太陽に挑んだ人々の戦いが、今の時代へと五〇〇年の時を超えて伝えられている。

同じく、王の呼ばれた古龍と戦う者たちへと。

甲板に出たラファエルは、まず手すりを乗り越え碇の鎖を伝って砂へと足を降ろした。雨に固められ、風に吹き荒らされた砂はその感触を変え、砂漠以外の何かへと変わっていた。

見回すと、同じように嵐を避けて停泊する飛行船の中にはすでに

気球を畳んだものから、その準備にかかっているものもある。

自分が指揮する飛行船も風に煽られ、状態は思わしくない。すぐにでも気球を畳んで嵐に備える必要があった。

「やはり、このままではもちそうにありませんにゃ」

全身の毛が、突然逆立った。ギルドナイトとして、時にはモンスター対峙することもあったラファエルは、鋭敏に敵の接近を感じたのである。

腰からレイピアを抜く。バクエンブレイドと呼ばれる元々人間が片手剣と使用している通常よりも細長い刀身が特徴の剣を、ラファエルは太刀のように扱う戦い方を好んだ。マカライト鋼を高熱で鍛えたその静かな刀身は薄紅がさす。降り注ぐ雨を瞬く間に蒸気に変える刃を押さえ込み、その大きな瞳は闇の向こうを貫く。

黒い嵐の中から、それはゆっくりと現れた。

細く、しなやかな体つきである。鋼の光沢を有する四肢は砂を踏みつけ、その背には、翼が広く強く広がっていた。

「古龍……、クシャルダオラ……」

かつてハイパーボリアの文明を滅ぼした伝説の龍が今一度、獲物を見つけた歓喜に打ち震える。暴風をものともせず、鋼龍の雄叫びが黒い空を響き渡った。

第六話「北風と太陽」Ancient Dragons」（後書き）

ようやく次話から戦闘を始められますね。いくらストーリー優先とは言え、戦闘のないモンスターハンターでは、モンスターハンターを題材にした意味があまりありません。

ところで、現在のところ、セクメーア砂漠西の海を越えたところではアポロたち、中央ではジェイナスとソフィアが王龍を追い、北ではティルテュが飛行船で非難し、南東にはフィリアが獵団とともに乗り込みました。そして、北東のドンドルマでは現在も会議が続いています。

五箇所で同時に話が進行している上、登場人物も数多い。一応、それぞれの場所で視点をできるかぎり同じ人物に固定しようとしてはいるのですが、そうしたところで人数の多さがネック。

この小説を読んでいる方々がそれぞれのキャラクターを認識できているのかが気がかりです。

できましたら、ご意見お聞かせください。

## 第七話「我が名はレギオン」Starting of End」

その体は鋼にして纏うは風。飛竜がその腕を犠牲として大空を得たことを嘲笑い、広げた翼は金属の光沢。黒い嵐のその下に、風翔龍クシャルダオラの雄叫びが響く。

ラファエルは太刀を構えた。アイルー族の小さな体にその刃は大きく、古龍はさらに巨大にそびえ立つ。赤熱する刃は雨粒を瞬時に蒸発させ、白い蒸気がまとわりついた。

強靱な爪と鋼の体軀。借り物の刃と小さな体。

アイルー族のギルドナイトに、しかし怯えた色はない。被った深紅のテンガロンハットの下で、眼差しは雨粒をつけようと瞬き一つ行うことはない。

ちっぽけな影が動く。

クシャルダオラは軽く右腕を薙いだ。どんな武器よりも鋭い爪は、過剰とも思える破壊力で立ちほだかる相手へと向かう。

深紅の帽子　ギルドナイトの象徴でデザインが優先されている  
とはいえ、補強が施された歴とした防具である　が引き裂かれ空を舞う。

小さいが故の優位。ラファエルは爪を四つん這いになることでその身を低く、爪の下を通り抜けたのである。四足歩行にも適応した小さな体を持つアイルーならではの回避術。小さなギルドナイトは古龍の懐へと滑り込んだ。



突き出される深紅の刃。突き刺すのではなく、穂先で斬るように古龍の体表を撫で進む。モンスターの肉を裂き、高熱を浴びせかける剣は、しかし鋼鉄の甲殻の上を滑るように流されるだけで傷一つつけることができない。

甲高い金属音だけが唯一の成果である。

もう一度。ラファエルは歯と歯を噛み合わせて気合いを込める。右足が強く湿った砂を噛み、太刀を振りあげる。狙いは、クシャルダオラの後ろ足、その付け根である。

関節ならば弱いのではないか。そんな淡い期待を裏切ったのは、金属音。

懐にまで入り込みながら満足なダメージを与えることができない。ラファエルは人がするのと同じように転がり、距離を開けようとする。

しかし、アイルーは小柄である。人ほど距離を開けることができず、そこは、風の領域から外れてはいなかった。

体に痺れと、目にはかすかに赤黒い光が体にまとわりつく様が見えた。その途端、その小さな体は宙へと投げ出されていた。

風翔龍が纏う龍毒　龍が持つ未知の毒　を含む風、龍風。それは人の足を麻痺させ容易に転倒させるが、体重の軽いラファエルではそのまま高く投げ出されてしまった。自分の体が古龍の翼ほどの高さまで達したところで、ラファエルはようやく体の自由を取り戻す。猫らしくうまい着地を試みるが、完全に体勢が崩れた状況

ではそれもままならない。

水を吸い重くなった砂へと受け身もとれないまま叩きつけられ、二、三度転がったところでようやく止まることができた。

打撲の痛みはあるが、大した傷ではない。

それでもラファエルが立ち上がることはできなかつた。古龍は何もしていない。爪はかわした。こちらの攻撃は確かに急所を捉え、関節を打ち抜いた。だが、倒れているのは他ならぬラファエルである。

古龍は何もしていない。それでありながら、その恐ろしいまでの戦闘力の一端をラファエルに叩き込んだ。

「こ、これが古龍……」

古龍の細く長い顔は、笑っているように見えた。まるで、戦うことを、いや、殺すことを楽しんでるようにゆっくりとした足取りで近づいてくる。では、これは余裕を見せつけることで獲物を弄んでいるのだろうか。

動かなければならない。立ち上がらなければならぬ。ここでこんな化け物が暴れ出してしまえば、どれほどの人的被害が出るかわからない。

立ち上がる。太刀はまだこの手の中にある。

風が強さを増し、その分だけ古龍が近づいてくる。世界が嵐に包まれ、音が風で満たされる。古龍が、世界を浸食しようとしていた。

「お前が古龍か？」

たった一人の女性の声が、風を裂く。

振り向く古龍。黒い嵐の中から、まるで鉄塊のような黒さと重さを兼ね備えた一撃がその額を打った。

斬るのではない。叩くのではない。その刃の重量を力任せに振り降ろした、まさに砕くための一撃。一瞬聴覚がおかしくなってしまうほどの金属音が轟き、火花さえ散った。

さすがの飛竜もそれにはたじろぎ、後ずさる。するとそこには、角竜の守りを四肢に受け、暴風になびく外套を羽織ったティルテュの姿があった。ピアスだけの簡素な守りの頭部からその自信に満ちた瞳は古龍を見ていた。

ティルテュは元々ハンマー使いであった。それが大剣を持つと決めたのは、かつての狩りでの影響が大きい。わずか二人で双子のデアアブロスを狩ったこと。その時得られた素材を生かすことができるとハンマーがなかったこと、そして、自分のスタイルに合致する大剣に巡り会えたことが、武器を変える決意を固めさせた。

黒縛王斧。黒角竜の素材で頑強に固められた大剣は、剣とは思えないほど刃が広く、短い。リーチを犠牲に単純な破壊力を求めたこの剣は、一撃の威力を重視するティルテュの手にはよく馴染む。

この剣を一撃の前には、さすがの古龍の額にもかすかな傷がつい

ている。本当は角の一つでも砕いてやるつもりであったが、さすがは伝説の怪物である。一筋縄ではいかないものだ。

だが、この程度の堅さ、角竜の角で体験している。

「騒がしいと思えば、まさか古龍がいるとはな。こんな時間とは言え、寝ている人もいるんだ。少しは静かにしてもらおうか」

「この年でこんな化け物と戦うことになるんてね。冥土の土産にならないといいけどね」

遅れてやってきたイリスもティルテュに並ぶなり軽口に付き合ってくれる。その背には蒼火竜の鱗が張り付けられたガンランス太い銃身に申し訳程度の銃剣が取り付けられたハンターの武器の一種である。を背負っている。

クシャルダオラとか言う古龍は、完全にティルテュに狙いを定めたようであった。雨を浴びながら、同じく湿った砂を踏みつける。その途端、古龍を中心として風が起きた。赤黒い毒を含む風が。

古龍はティルテュを本気を出せる相手と認めたのである。その体から龍毒を垂れ流し、その体の回りに赤黒く瞬く。

漆黒の斧を、ティルテュは強く握りしめた。

「ラファエル、船を出せ！」

アイルーのギルドナイトの声を聞いてはいない。そんな暇なく、古龍が駆けだした。細く、しなやかでありながら鋼。それはまさに弾丸にも等しく、二人のハンターがいた場所を突き抜ける。

ティルテュは左へ、イリスは右へ。古龍はその間を砂を苛み、雨を砕きながら進む。すべてを蝕む毒を纏いながら。

「それじゃ、こいつを抑えるとするかね」

先に反撃に打ってでたのはイリスの方である。かつてはハンターとして火竜を専門に狩っていたと聞かされているギルドナイトは、ガンランスの折り畳まれた銃身を展開するとともに突きを繰り出した。

蒼火竜銃槍【焦天】。蒼火竜の鱗が丁寧に並べられた銃身はまさに火竜の首である。その首の先に頭の代わりに取り付けられた銃剣が鋭くわき腹へと突き刺さる。金属音は、その一撃が薄皮一枚剥ぐこともできずに止められてしまったことを意味している。

しかし、中年のギルドナイトの目に、焦りはない。

「どんなに堅い甲殻でも、砲撃は効くだろ。衝撃が内部にまで伝わるからねえ！」

指が引き金を押し込むと、ガンランスの真骨頂、砲撃が銃口より吹き出す。火竜の息吹を模した構造を持つ 残念ながら強度の關係上、威力は本家に遠く及ばないそうだ ガンランスからは二度三度と砲撃が繰り出される。火薬の焦げ臭さと、古龍のうなり声。

効いている。

砲撃の反動を受け止めため、すぐには動くことができないイリスを狙おうとする古龍。その顔面へと、ティルテュは再び斧を叩き

つけた。とても剣のものとは思えない音がして、頭部の甲殻がわずかながらはげ落ちた。

これで完全に注意を引いてしまったのだろう。しかし、狙われているとわかれば労はない。薙ぎ払う爪の一撃を、その下を潜り抜けるように地面を転がりながらかわす。その隙に、イリスがさらに轟音を響かせた。

古龍とは言え、所詮モンスターであることに代わりはない。用心さえしてさえいれば、これまでハンターとして培った技術と経験でいくらでも対処できる。

飛行船が次々と嵐の空へと飛び立ち始め、その時初めて、テイルテュは事態の深刻さを思い知った。嵐の中、視界は暗い。それでも、テイルテュたちが搭乗している飛行船のみならず、複数の飛行船が飛行の準備に入っていた。

古龍の存在に気づくには早すぎる。

風の合間を縫うように、古龍の咆哮が轟いた。しかし、目の前の古龍は、その爪をイリスが構える盾に叩きつけていた。

吠えてなどいない。

先に上空へと上がっていた飛行船が、突如真つ二つに折れてしまった。嵐の中、無理をしたから。それは現実的な回答ではあるが、現実逃避でしかない。

黒い風の中、赤黒い光に輪郭を浮か上がらせる大きな翼が揺らいでいた。嵐の空に、それはいくつも見えては、点滅を繰り返してい

る。

古龍は、目の前のものだけではなかった。

「古龍の群だと……」

古龍と人の戦いは、まだ始まってさえいなかったのである。

セクメーア砂漠南東。ここでは避難が遅々として進んではいなかった。ハンターズ・ギルドが王龍テラドミヌスの針路に重なる恐れのある北側を優先し、十分な数の飛行船を準備できなかったからである。

そのため、住民は徒歩での移動を余儀なくされていた。日差しが強い日中は日陰で休み、夜間に距離を稼ぐのである。ルートはセクメーア砂漠とインスマス火山帯の間。砂に紛れる岩が点在し、休憩に適した木陰が多いことがその理由である。このまま山脈に沿って北上を続ければドンドルマ地方へと到達できる。

しかし、先は長く、そして、太陽は容赦なく照りつけていた。岩の日陰でさえ、暑さを禁じ得ないほどである。まだ繁殖期の初頭でありながら、まるで太陽が気まぐれを起こしたかのように。

一人の若者が、日陰から這い出た。何か考えがあったわけではない。ただ、仲間たちの様子 皆、日陰や木陰で体力を消耗しないよう、体を丸めている を眺めてから、ふと憎たらしい太陽を見上げた。

丸く、膨大な光と熱とを降り注がせる太陽は、しかし、今に限ってその光を和らげていた。黒く、大きな影が若者に落ちていた。

影は翼を持つ。赤い甲殻に紫の翼膜。荒唐無稽な色をしたそれは、若者の知るどのような生物とも違っていた。翼がありながら、しかし四肢がある。その顔は大きく、首の周りにはたてがみ状に毛が密生している。短い巨大な角を見せびらかし、鋭く並ぶ牙をむき出しにして笑うその様は、決して友好的なものではない。

毛並みを確認できる程度の低空から、それは若者を見下ろしていた。

若者は叫ぼうとした。周りの仲間に危険を伝えるためである。しかし、その必要はなかった。

見知らぬ怪物の吐き出した灼熱の炎が、若者を燃やし尽くし、その熱を辺りにまき散らしたからである。砂は焼け焦げ、急な熱を加えられた岩は膨張し変形の限界を超えた段階で亀裂を走らせる。

人々は我先へと逃げ出した。

怪物に呵責というものはない。別に誰でもよいのだ。

時折振り返りながらその恐怖が張り付いた顔を見せてくれる男でも。逃げまどう人々に倒され、踏みつけられる老婆でも。幼い我が子を守るうと、必死に抱き寄せる母親であつても。

殺すことができるなら。壊すことができるなら。

炎王龍テオ・テスカトル。そう呼ばれる古龍は、人が残忍と覚え



る形で口元を歪めると、歯と歯の間に炎がちらつく。

殺したい。壊したい。

テオ・テスカトルは人々を見下ろしながら、その灼熱の息吹を浴びせかけようとした。怯える人々の眼差しを、その身に浴びながら。

この悪魔の所業を、魔女は許しはしなかった。

風を裂いて近づく何か。それは速く、かつ正確。かつてハイパーボリア文明を襲った古龍がそのことに気づいた時には、それはテオ・テスカトルの体を弾き飛ばしていた。

伝わる強烈な衝撃。その力を、フィリアは甲板に突き立てた足の力のみで踏みとどまった。副団長であるエールは手すりに掴まって辛うじて体勢を維持している有様である。無理もない。飛行船を古龍に直接ぶつけるなんてことしかすのは、七人の魔女の中でもフィリアくらいなことだろう。

さすがに無理が祟り、飛行船は浮力を喪失し、その船体で砂に轍を刻んでいた。墜落同然の軌道で古龍に突っ込んだが、地面に激突寸前で機首を持ち上げたことによって、ソフト・ランディングに成功しているのである。無茶な注文を、その類まれな技術で実現した操舵手にフィリアは言葉ならず感謝した。

今言葉にできる余裕などない。事は何も終わっていないければ、成功といえるほどの成果も出ていないのである。

手すりから眺めると、避難民からほどよく離れた砂上に古龍は倒れていた。さすがに飛行船にひかれたことは効いたらしく、翼の爪は折れ、すぐには立ち上がってこない。

しかし、死んではない。

ゆっくりとその四肢を使い立ち上がり、そして、その後ろには別のテオ・テスカトルがゆっくりと翼をはためかせていた。晴れ渡った空には他にも炎王龍どもの姿が見えている。

とっておきの化け物が、とっておきの絶望引っ提げてやってきた。

しかし、死んだ目をしている奴なんて誰もいない。

船体横に向けられたハッチが開き、砂へと倒されることで通路の代わりとなる。そこから出てきた奴らは聖堂の騎士団である。聖堂なんて入ったこともないような不信心の集まりである。騎士なんて気取った役職に興味なんてない。普段いいかげんですばら。武具のメンテナンスさえ怠っている奴もいる。

だがどうだ。いざ戦いが始まると、武具に身を包んだなら、自分たちの力が必要とされていると知ったなら、皆見違える目をするようになる。

船の上から砂上の戦士たちへと、フィリアは声を張り上げた。

「あたしたちが火山の深奥で戦った奴は化け物だった。今お前等が見てるのも化け物だ！ 爪は鉄より堅い。巻き起こす風には毒が含まれる。奴の顔を見ろ！ 奴の声を聞け！」

インスマス火山でテオ・テスカトルと戦った日のことを、そのことがきっかけとなって七人の魔女に姉妹三人で選任されたことを思い出す。

あの時の絶望と、あの時の恐怖と。何より、人類に敵がいると知った時の決意を。

「あいつを生き物と思うな。火だ！ 炎だ！ 一方的にすべてを焼き尽くす業火が意志をもって動き出した！ それがお前たちの相手だ。全人類の敵だ！」

炎王龍テオ・テスカトルの雄たけびと、戦士たちの上げる鬨の声とが拮抗する。

今日もまた会議が始まる。ディオニユロス事務次官と会談したところで、何かが変わるということでもなかった。セントポリアも、ディオニユロスも、結局意見の隔たりというものを確認したかっただけにすぎなかったのだ。

王龍を迎え撃たなければならない。王龍を迎え撃つことは危険である。

そんなことを言い合って、一日が過ぎていく。結局、今日の会議も無意味な時間の浪費になってしまっただけではないだろうか。

現地で古龍に怯えている人たちのことを考えると、それだけで足取りは重くなる。

普段から長い、そんな印象を与える廊下　　絵画の一つも飾られておらず、殺風景なものである　　が、ずいぶん長いもののように感じられた。

このまま会議がシュレイド王国の意向を汲む形で終わってしまったら、王籠に対して攻撃を仕掛けることさえできない。そして、それを好転させる材料は何一つとしてなかった。

「連絡が途絶えた？」

長い廊下を歩いている間、付き添っていたフィロソフィアが口にしたことも、決して好材料ではない。

「はい。砂漠の北部に嵐が発生しています。それを迂回するため、時間がかかっているのだと思いますが……」

そうは言いながら、フィロソフィア自身、その説を支持しているわけではないらしい。しかし、他に思い当たるものもないのだろう。歯を食いしばり、余計なこと　　根拠のない話題をすることを、フィロソフィアは無意味な発言だと考えている　　を言っまいと努力しているらしかった。

砂漠はよくも悪くも気候が安定している。寒冷期ともなれば話は別だろうが、こんな季節はずれの嵐が、よりによってこんな時に偶然発生するだろうか。できすぎた偶然は質が悪い。しかし、根拠など何もない。

「連絡があつたらすぐに伝えて」

そう言い残して、頭を下げるフィロソフィアを残して、今のセン

トポーリアにできることは、一日一日を浪費することだけであった。

第七話「我が名はレギオン」Starting of End」（後書き）

古龍との戦闘がついに開始しました。

やはり、以前苦戦した相手がそろそろ出てくるのはアニメの基本ですね。

群れなす古龍は何故現れたのか？

王龍との関わりは？

人は果たして、一丸となって挑むことができるのか？

そして、古龍とはそもそも何か？

こんなことをこれからゆっくりと展開していく予定です。すいません。ともかく設定や説明しておかねければならないことが多く、戦闘シーンを削ってでも紹介を優先させます。おまけに、五つの舞台が入れ替わり立ち代り登場しますので、今後輪をかけて読みにくい小説になってしまうかもしれません。

それでも、最終話のタイトルはすでに決定済み。現在まだ秘密ですが、このタイトルをお披露目できるよう、これからも小説を書き続けます。

## 第八話「戦闘開始」Not Hunting」

「頑張ってくださいね」。村の中から応援してまゝす」

受付嬢からそう見送られて、アポロは軽く手を振ってすませた。頭上高く手を振るギルドの看板娘は嘘偽りなく村の広場から、モガの森へと向かうための坂道を登っているアポロに声をかけてきたのだ。恐らく微笑んでいるのだろうが、ここからでは動作くらいしか判別できない。

村を出る時は何も言ってくれなかったのに、波音が聞こえなくなるくらい離れたらこれである。

「普通、心の底から、だろ。村の中じゃなくて……」

不満を口にしながら、アポロは振り返る。正面には狩猟場へと繋がる坂。その坂の上にはモガ村と森とを隔てる門が開け放たれている。そして、黒ずんだ赤い鱗を敷き詰めた鎧　レウスG　を身につけたヒュプノスが、兜の下で笑っていた。大柄な男性であるためか、牙獣種アオアシラのことをふと思いつかべた。この青熊はユクモ地方にしか生息しないため、見たことなんてないが。

「なかなか可愛い子じゃないか」

「そんなことはありませんよ。だってあいつ、今みたいに変なことしか言ってくれないんですよ」

足は止めない。するとすぐにヒュプノスに追いつくことができた。

「じゃあアポロはもつとちゃんと応援してもらいたいのか？」

そうだと言おうとして、開かれた口はつい力なく縮んでしまった。肯定してしまうと、おかしな勘違いを招いてしまうことに気づいたからだ。

「いや、別に、そんなんじゃ……」

ヒュプノスはやはり嫌みのない顔で笑う。無理に否定しようとして、妙に顔が火照ってしまったことが気恥ずかしい。わざわざ遠く離れた凍土からやってきたハンターは、まさかこんな若造をからかに来たわけでもないのだろうに。

結局、釈然としない思いを一方的に押しつけられたまま、アポロは坂道を黙々と歩いた。木製の門　こんな小さな村にしては、なかなか立派なものである　をくぐり抜けると、小さな丘の上へと出る。

途端に、潮風が吹き抜けた。海を見下ろす丘の上。一拳に開けた視界はこの島の豊かさとその自然のすべてを見せてくれる。左手には山。右は切り立った崖から覗く広大な海。モガ島の自然を一望できるのだ。

ここに来る度、はじめてこの島を訪れたことを思い出さずにはいられない。

「いい場所だな」

「モガ島は決して大きくはありませんけど、高い丘があつて火竜も巣を作ることもあるし、海岸は適度な深さがあつてルドロスの群が



住み着くこともあるんです」

つい自分のことのように自慢したくもなる。

「それはすごいな。それに比べたら凍土なんて寂しいところだ。ギネブラやベリオロスくらいしかいないからね。後は時々、イビルジョーなんて厄介な客が居着くくらいだ」

川に氷が浮かんでいるような極寒の地なんて想像しただけで震えてくる。生息しているモンスターも偏っているやしく、草食種なんてポポと呼ばれる分厚い体毛を持つ種類がせいぜいらしい。この島のようにアプトノスやケルビ、エピオスと上質な蛋白源には恵まれてはいないのだ。

普段はこの丘にケルビがその小さな体の割に立派な角を見せびらかすようにたむろしているのだが、今日は姿がない。誰にも邪魔されないということだ。

「さて、太刀の扱いを知りたいんだつたな」

手頃な岩の上に腰掛けると、ヒュプノスはアポロへと向き直る。

「はい。俺もいつかは太刀を使いたいです。なのに、工房のじいちゃんはお前にはまだ早いつて作ってもくれなくて」

「まあ、実際、太刀は扱いやすいように見えて、その実癖が強い。大剣ほどの破壊力もなければ、片手剣ほどの機動力もない。スラッシュアックスほどのリーチもないしな。一撃一撃が軽いから手数を重ねなければならぬが、動きを速い相手にはなかなかそんなこともできない」

ヒュプノスは、やはり笑いながら話を始める。

「結局、畏にはめるか、元々動きの鈍いモンスターを相手にするくらいしかできない武器さ」

これもやはり、からかわれているのだろうか。まるで、太刀を、単に格好よさそうだからと何となくイメージで選択していることを見透かされていていようで気分が悪い。それが怒りに繋がらないのは、ヒュプノスの人柄故だろう。

「だが、太刀には太刀の利点がある。まずは、それを君に教えよう」

立ち上がった大男が背中から抜きはなったのは一振りの太刀。よく想像されるような金属の刃ではなく、赤い鱗を丁寧に重ねたような作りをしていた。ヘルフレイムダンサーと呼ばれる、溶岩にさえ耐えるアグナコトルの力を借りた灼熱の太刀なのだそうだ。

抜かれただけで周囲の空気が暖められ、刃の周りが揺らいで見えた。その刃が空気を裂く様子は、想像しただけで興奮を煽られる。

「気刃斬りですね！」

太刀がその呼吸を整え、流れを読み、その決して軽くはない刃を縦横無尽に振り回す、太刀にのみ許された、まさに必殺技である。

自信に満ちた不敵な笑み。ヒュプノスはそれを、気の抜けた微笑みに戻して答えた。

「いいや、突きだ」

風が、やや強めに吹いて、体感温度を引き下げた。まるで、アポロの心の中を象徴しているように。そんなこと、凍土の凍てつく空気に慣れたハンターは構いもしない。

「気刃斬りは確かに威力は高い。しかし結局一撃の威力は軽く、また相手の動きが速いとダメージが乗らないどころか手痛い反撃を受ける。そんなものは後回しでいいんだ」

邪魔になるものがない広い位置にまで、ヒュプノスは歩く。アポロは、それをただ見送った。

「突きは、大剣やスラッシュアックスのような重たい刃や、片手剣のような短い武器にはできない」

「でも、ランスの方が……」

よほど素早い突きを連続できる。そんなことは言うまでもない。

ヒュプノスは刃を右下に向けるようにして軽く構えた。

「そこは発想の違いだ。太刀は大剣やランスより速くて、片手剣よりも威力の高い一撃を見舞うことができる。確かに突きは威力は低い、その分、出が速く、そして、一点を正確に攻撃できる！」

踏み出されたのは左足。これこそが攻撃ではないかと言っくくらい強い踏み込みは、より大きな力を支えるためでしかなかった。刃が加速し、大柄な体はその軌道を整える。長く扱いにくいはずの刀身がまったくぶれることなく虚空を差し貫いた。

何よりも驚かされたのは、溜めがないことである。大剣のように重厚な刃を体の勢いを乗せて振り回しているわけではない。ランスのようにしっかりと構えてから突き出しているわけではない。

どんなに動きの速いモンスターでさえ、これをかわすのは困難なことだろう。始めてみる太刀の動きに、アポロは感想を述べることさえできないでいた。

「こんなものかな」

いつもと変わらない調子で、ヒュプノスは構えを解く。それから、背負われていたもう一振りの太刀をアポロへと差し出した。ヘルフレイムダンサーに比べれば、鞘の段階からそのみすばらしさがわかる。

「これは昔俺が使ってたものだ。工房のおじいさんには怒られるかもしれないが、事態が事態だからな。大目にみてもらおう」

見たこともないモンスターの皮で作られた鞘は、これまでにならない手触りであった。受け取った途端、片手剣とは比べものにならないくらい重たい感触があった。

抜いてみる。まるでそう言われているようなヒュプノスの視線を受けて、アポロは抜刀する。丘のでこぼことした地面に足を取られ、ついつんのめつたのは、それだけ太刀の重心に慣れていないということだ。

だが、今はそんな失態でさえ嬉しく思えた。太刀が、今この手にある。

足をしっかりとつけ、息を吸い、そして吐く。体を前へと飛ばす気持ちで、突きを放った。刃が重い。穂先は狙いよりも下にそれ、刀に引つ張られるように踏み出した足には不必要な力がこもった。

「はじめはそんなものでいいさ。後は体に馴染ませるしかないから、ゆっくりやっていこう」

「はい！」

もう一度、突きを放つ。

まるで、この島に初めて訪れた時のようだ。広大な自然を見せつけられて、そこに暮らすモンスターたちの姿を見て、そこに到達する日が楽しみで仕方がない。太刀を持つということも、それと同じこと。目標を見つけて、ただそれに走っていくことができるのだから。

砂原を王龍が泳ぐ。砂を嵐のようにまき散らし、立ちふさがる岩を粉碎しながら。そして向かう先には、キャラバンの隊列があった。

セクメーア砂漠の奥地を探検中であつたのだろう。そのため、緊急避難命令の発令が伝わっていなかったのだ。積載量こそ大きい、足の遅い草食種アプトノスがひく竜車を中心とした中規模キャラバンはさらに慌てふためいているようであった。

無理もない。山が突っ込んでくるのだ。驚かぬ方がどうかしている。

そして、王龍に衝突されてしまえばどうなるか、どんな最悪の事態さえ驚くには値しない。

「各船に伝達！ 武器使用許可！ これより王龍を攻撃する！」

ソフィアはグッフルファクシ級飛行船のブリッジにて、決断を下した。艦長代理であるソフィアを除けば操舵手と艦長補佐のアイルーしかないような手狭な艦橋に、魔女の音が響く。

「武器使用許可！ 王龍を攻撃目標に設定！ 了解にゃ！」

送声管を通じて、補佐役のアイルーの声は甲板に立つ別のアイルーへと届けられる。すると、アイルーは旗を振り始めた。手旗信号によって、他二隻の飛行船へと伝達されると、タイミングを合わせるように三隻が高度を下げ、両舷から王龍テラドミヌスを取り囲む。ブリッジからでもキャラバンの遅々として進まない避難の様子は見えていた。なんと少しでも時間を稼がなければならぬ。

「左舷、スリット解放！ 拘束用バリスタ、発射準備急げ！」

「スリット解放。左舷よしにゃ！」

船底の一部が解放し、片側五門のバリスタが展開される。ソフィアの近くに備えられた管から、攻撃甲板からの声が届く。

「バリスタの準備は整ったよ」

妙に緊迫感のない声は、こんな現場に不慣れなジエイナス特務騎士のものである。だがここで重要なことは、バリスタを発射できる

ということ、ただそれだけである。

「狙い任意。タイミングはこちらの発射合図で！」

「撃ち方自由！」

響く復唱。見ると、他のグツフルファクシ級も王龍側の壁を展開し、そこから巨大なボウガンを覗かせていた。固定式ではあるが、巨大な矢がある程度の可動範囲で発射できるバリスタは要塞にも取り付けられることのある兵器である。

だが、ソフィアは険しい顔をする。普段微笑みを絶やさないよう気を使うソフィアであったが、今は状況が違う。ここで王龍をとめなければキャラバンが壊滅してしまう。そして、バリスタが有効である保証などどこにもない。

同時に、迷っている時間もない。

「撃て！」

ソフィアの指示の元、三隻の飛行船から矢が同時に放たれる。

人の腕ほどの太さのある矢が突き刺さり、あるいは弾かれる。どうやら、王龍にまとわりついていた岩には有効であっても、古龍の甲殻を貫通することは不可能であるらしい。それでも、弾かれた矢も、その複雑な形状の矢尻が王龍の体に引っかかる。効果としてはそれで十分である。

拘束用バリスタ。その矢頭には太いロープが括りつけられ、各飛行船と接続される。これで王龍は三隻の飛行船の重みに耐えなければ

ばならないことになる。少しは時間稼ぎができるだろうか。

結果はまもなく。緩んだロープが張りつめられ、その瞬間、飛行船が大きく揺れた。ソフィアは手頃なもの、近くの送声管に掴まりながら、同時に指示を出す。

「機関室、全速全開！ このままではもっていかれる！」

機関室では、汗を流している屈強な男。これは人間であるがスコップで大量の燃石炭を炉へとくべている。熱に対して極めて高い耐性を示す鎧竜グラビモスの甲殻を惜しげもなく使用した炉の放つ高熱が大量の蒸気を発生させ、飛行船のプロペラを加速させる。

次第に落ち着く揺れ。しかし、テラドミヌスの勢いは一向に衰える気配がない。

やはり、飛行船三隻で抑えられる大きさではないのだ。

止められないなら壊すまで。

「大砲、ありっただけ撃ち込め！」

新たに大砲がその銃口を見せつける。重たい鉄の塊が轟音とともに発射されると、それは投射軌道を描いて王龍の体で炸裂した。それは岩を砕く程度で、王龍のものには被害が及んでいない。

やはり大きすぎるのだ。正確な全長はわからないが、尻尾まで含めれば少なくとも七、八〇〇m。一〇〇mにも満たないグツフルフアクシ級ではそれこそ、針で引っかいた程度の攻撃でしかない。



「王龍、なおも推力を拡大。このままでは危険ですよ」

舵を握るアイルーが振り向きもせず報告する。それだけ、余裕がないということだ。

単純な速度ではひけはとらないが、ロープで繋がった状態での力比べでは分が悪いところではない。

「だめですよ！ 身動きがとれませんよ！」

「大砲がほとんど効果がないなんて……」

ジェイナスはアロー・スリットから覗く王龍テラドミノスの健在な様子に、つい弱音を吐く。

攻撃甲板の中では、何人も人が一抱えもある大砲の弾を手に武器庫と大砲の間を行き来していた。大型兵器であるため、アイルーでは持ち運びができないのだ。アイルーたちは専ら発射後の大砲の簡単な整備か、人の補佐にあたっていた。

誰一人として弱音を吐いている人なんていない。ジェイナスは気恥ずかしささえ覚えて、自分を奮い立たせる。大砲の弾を運ぶことくらい、自分にでもできるのである。

その時。

音がした。乾いた、小動物が絞め殺される時のか細い悲鳴のような音。それから、暖炉にくべ木が弾ける音とよく似た音。

最悪の想像が、ジェイナスの脳裏をよぎった。

「バリスタを切り離せ！ これ以上もたない！」

ジェイナスの声は、攻撃甲板内部へと吹き付けた風によって完全にかき消されてしまった。

王龍テラドミヌスがその身をくねらせる。それは、まわりつく蠅を払う、そんな程度の軽いものでしかなかった。

しかし、拘束用バリスタによって繋がれた飛行船には甚大な被害をもたらした。

バリスタが、その土台ごと引き剥がされたのである。人ではとうてい持ち運びできないほどに大きなポウガンが一斉に壁を突き破って宙に舞った。木片が飛び散り、土台を固定していた床もろとも、壁は一面にわたって切り開かれた。

傾くグツフルファクシ級。その開いた壁の穴から、人とアイルーどちらも、王龍の前にはあまりにちっぽけな存在である。が投げ出された。そのまま、テラドミヌスが起こす砂嵐に飲み込まれ、姿を消す。

そして、まだ終わってなどいない。

引きずり出されたバリスタははまだ王龍とロープによって繋がっていた。王龍の膂力を最大限に吸収したバリスタはそのまま対岸、

拘束用バリスタによって身動きとれない別のグツフルファクシ級へと飛び込んだ。

木造の壁がこれでもかと柔らかさを強調し、バリスタが鉄球のように船体を抉り取る。船体後部。機関室を直撃したバリスタはグラビモスの甲殻によって封印されていた炎を解放する。爆発が、まずは機関室に発生する。やがて、全部の武器庫へと飛び火すると、グツフルファクシ級は墜落することさえ許されず、炎の中へと消えた。

バリスタをその土台ごと引きちぎられたことで、ブリッジは静寂を取り戻していた。船が安定した航行を取り戻したからである。

しかし、艦長代理であるソフィアの顔は冴えない。呆然と、ブリッジから見える光景を眺めていた。

「リザード・ビル爆沈されました。乗員の生存は、……絶望的ですよ……」

報告は、聞くまでもなかった。僚機が炎の中に消えたことははっきりと見えていた。

この船の装備と、現在使用が許可されている武装ではこれ以上手の打ちようがない。姫様のことを疑うわけではない。対応に不備があるとも思わない。それでも、憤りというものは止めようがなかった。

壁を力任せに叩く。王龍の力にいと簡単に屈した壁は、ソフィアの手を痛めさせた。

「ソフィア、五人落ちた！　すぐに船を止めるんだ！」

「そんな余裕はないよ」

送声管から聞こえるジェイナスの声に、ソフィアはついぶっきらぼうな返事をしてしまった。

言い訳はいくらでも思いつく。高速で弾き出された砂嵐の中に突っ込めば、その時点で深刻なダメージを受ける。そして、この高さから落ちて助かる見込みはそもそもない。そんなわずかな希望にすがって船を止めることなんてできるはずがない。

「ソフィア、君は……！？」

「ジェイナス！　これは狩猟なんかじゃない。戦争なんだ！」

いつもの狩りのように決まった場所で、ギルドの補佐を受けながら、安全な狩猟を目指すことなんてできはしない。

そして、たとえ救助に出向かなかったとしても、今のソフィアにできることなんて、何一つとしてない。

「王龍、依然推力衰えず……」

補佐が報告してくれる通り、王龍テラドミヌスは行進を続けていた。王の行く手でひれ伏さぬすべてのものを踏みにじりながら。

赤黒い光を纏う漆黒の甲殻。青い三本の角は、不気味なほどの青さを湛えている。その行く手に見えるキャラバンは誰もが持つもの

とらず駆けだしていた。少しでも逃げようと。誰もが、そんなことは無駄だとうすうす気づきながら。

三本の角が薙ぎ払う。押し寄せる巨山が押し潰す。まき散らされた砂嵐が通り過ぎると、そこには巨大な轍が残されるばかりで、他には何もなかった。

悲鳴を上げながら逃げまどう人々の姿も。怯えて鳴くアプトノスの影も。

ただただ、王の通り道であることだけが、事実としてそこには在った。

第八話「戦闘開始〜Not Hunting〜」（後書き）

五箇所で同時進行なんてしていると、なかなかお話が進みません。

## 第九話「誰がため〜Decresc〜」

部屋は静かなものだった。元々、ホテルのフロアを借り切っているため、ここにはミスカトニツク王国の関係者しかいない。ここに限っては、特務騎士三名が思い思いのやり方で時間を潰していた。

顔に傷を持つアレスは椅子にゆったりと腰掛けたまま、目を閉じている。ただし、眠っている様子ではない。スノードロップは離れた位置に座っていた。本を片手に頬杖をつく。読書をしていれば人と自然に顔を合わせずにすむ。そんな打算も働いているのだそうだ。

誰もが静かで話す者はいない。そんな空気に耐えられないのはシギユン一人である。怯えたウサギのように床に乱雑に並べられた椅子の一つに、シギユンは座ったまま、その視線は落ち着きなく動く。

することなんてなく、それでも時間の浪費はしたくない。そんな焦りと、慣れない沈黙にシギユンは耐えられないでいた。

「あの……」

誰も反応しない。スノードロップは本から目を離さず、アレスは目を閉じたままである。ただ、無視するような人たちではないと、無理に言葉を続ける。

「会議、やっぱり思わしくないみたいですね……」

「皆、王龍がハイパーボリア文明跡地で止まることを期待しているからな」

「現在すべての証拠がテラドミヌスが砂漠以東には進出したことがないことを示しています。それは仕方ありません」

アレスはやはり目を閉じたまま、スノードロップは 当たり前であるが 顔を向けてはくれない。それでも、期待していたことは十分に得られた。

「本当に、そうなんでしょうか？」

シギユンを焦燥に駆り立てるのは王龍テラドミヌスが事実上野放しになっているという事実には他ならない。そんな不安を払拭してくれることを期待しているのかもしれない。

「はつきりとしたことは誰にもわからない。だから、皆で話し合っているんだ」

古参の特務騎士の重苦しい言葉は出鼻からそんなシギユンの甘い期待を裏切ってしまう。冷静な判断力が頼りになる先輩は、どんな時でも冷徹である。

「もし、過半数をとれたとしたら、みんなで戦うんですね？」

「いや、象牙の塔の反応しただいな」

象牙の塔。聞き覚えこそあったが、その意味するところはわからない。たしか、法だとか、法律だとか、そんなことを担当する場所であったらどうか。そんな疑問が顔に出ていたらしい。見ていないようで、寡黙な同僚は気づいていた。



「象牙の塔は、里、ハンターズ・ギルドに並ぶ政治の最大単位の最後の一つです。いわゆるところの立法を担当し、ハンターズ・ギルドに強い影響力を有しています」

スノードロップが、やはり本を眺めたまま説明してくれたのである。詳しいことはわからないが、要するにとても強い力を持つ場所であるらしいことはわかった。

「レムリア大陸の政治体系くらい、覚えておいても損はない。まず、村、街、王国などの里は今会議が行われているように集合体として行政を担当している」

そして、司法はハンターズ・ギルド。各里にギルドナイトを配置し、モンスターの狩猟の管理など、法を運用している。象牙の塔は、そのための法を制定する立法機関として機能しているのだそうだ。

ハンターズ・ギルドは生活必需品であるモンスター素材を取り扱うことで里への影響力を持ち、里は資金提供をしていることから象牙の塔へと意見できる。また、象牙の塔はギルドに幹部として人員を送り込む慣例から、ギルドに対して優位に立つ。

このような三すくみの関係を、専門的に言うところと権力分立と呼ぶのだそうだ。どの機関も弱みがあり、独裁的な権威を公使できない。モンスターの狩猟を通じて自然とできあがったこの仕組みでこのレムリア大陸の政治は長らく安定し、そのために王国や街と言った大規模な里が発展できた。

そう、アレスは説明し終わると、ようやく目を見開く。しかし、その顔はシギユンが期待していたようなものとは違う。現状を打破できる材料がまるでないことを示していたからだ。

「確かに里から象牙の塔に影響力を公使できるが、それも単に過半数を獲得したというだけでは難しいだろうな。結局、総意であるという演出が必要になる」

顎に手を当てて、考える風な仕草を挟む。

「たとえば、すべて、とまでは言わなくとも多くの地方で過半数を獲得する、とかな」

「それはまず不可能でしょう。代理投票制は欠陥を抱えています。会議に参加できない里は、もっとも近くの里に投票権を譲る。しかしこれは、危険な里の票を、安全な場所にいる人が公使できてしまうことを意味します」

現在、セクメーア砂漠を中心として多くの里が集落、村、町を問わず欠席している。会議では、このような場合、他の里が代理で投票権を持つ。どの里が代理を担当するのは地理的要因を省みず、距離で決められてしまう。たとえば、セクメーア砂漠の里の投票権を山一つ挟んだ里が持つこともある。それはすなわち、危機に直面している者が危険の度合いを計るということになる。

スノードロップは淡々と事実を並べる。それは横暴だと、そう言おうとして、シギユンは口を閉ざした。ぬるま湯に漬かっているという点においては、シギユンも何ら変わらない。

「それじゃあ、私たち、どうしたらいいんですか……？」

こんな場所で、それこそ嵐が過ぎ去るまで待っているしかないのだろうか。古龍の恐ろしさを知りながら。

「あのじゃじゃ馬を信じるしかないな」

「私は信じてませんけれど」

本を読みながらわかりやすく不機嫌を露わにするスノードロップ。一見表情に乏しいように見えて、その実、この人は感情的である。

「お姉さんの、ことが原因ですか？」

「姉は誰より気高く、そして強い人でした」

「でも、アマランサスさん、今でもいい人ですけど……」

少々感覚がずれていて、いつも笑っていて、何だか話し方が特殊なことは認められる。ただ、それでもスノードロップが嘆くほど悪い人には思えない。もちろん、初めて会った時には面食らって、その射撃の腕には驚かされた。

凶眼の魔女の名を与えられた最初の魔女を、そういえばこの頃見ている。ドンドルマの街にいることは間違いないはずだが。

結界の魔女である妹を盗み見ると、スノードロップはすでに視線を本に戻していた。かつてのアマランサスがどんな人であったのか、聞いても話してくれた試しがない。

シギユンはあらゆる意味において新米である。知らないこととわからないことがあまりに多い。そして、できることは何も無い。

「どつして皆さん、セントポリア様にすべてを任せてくれないの

でしょう?」

ため息とともに出るのは愚痴でしかない。

「誰かに権力や力が集中するとしたら、その暴走を誰が止める?」

「でも……」

セントポーリア様はそんな横柄な人ではない。そんなことはシギユンよりもアレスたちの方がよほどわかってのことだろう。

「自分は腐敗しないから大丈夫。そんなことは傲慢な独りよがりすぎない。町中でナイフを持ち歩いても私は誰も傷つけるつもりはないから、みんなが怯えるはずがないと言えるか?」

アレスは意地が悪い。冷静な表情を崩さないまま、まっすぐにシギユンを見てくる。その眼差しは有無言わせぬ自信に満ち、それだけ事態の深刻さと現実的な対応の難しさを告げていた。

「三権分立もそうだ。確たる証明と保証がなければ、誰も安心して力を委ねはしない」

古龍の恐ろしさも王龍の拳動も状況証拠から来る推察でしかない。それを特務騎士たちは確信をもっていても、だから他人もそれをわかって当然だと考えることはまさに傲慢でしかない。

結局、シギユンは渋い表情をなかなか崩せないでいた。そう体を固くするシギユンを眺めながら、アレスは息を鼻から吹いた。

「今セントポーリアに求められているのはそんなことだ」

今日もまた砂漠に日が沈む。太陽が西側の分厚い嵐の下に隠れてもなお、夕日の強烈な光を乾いた大地に鋭角に投げかけていた。

それもしばらくのことで、まもなくすれば砂漠はまた夜を迎える。

停泊する飛行船の群の中、その中央に人々は集まっていた。正確な人数はわからないが、五、六〇名の大所帯がそろって沈んでいく夕日を眺めていた。正確には、こちらを追うように迫ってくる嵐の動きから目を離せないでいる。

ティルテユもそんな一人だった。

砂に片膝を立てて座り込み、角竜ディアブ羅斯の素材で作られた防具が適度に砂の熱さを軽減してくれる。周りには布を敷くなどして砂を遮断している者もいれば、ティルテユ同様ハンターが用いる防具を身につけている者も、皆座っている。

誰もが一樣に疲れた顔をしていた。

嵐の中、風翔龍クシャルダオラの攻撃にさらされた船団は一路東へと逃げた。しかし、古龍の群は幾度となく船団を襲撃し、徐々に損害と披露は浸透していったのである。ティルテユの防具にも細かな傷が目立ち始め、包帯を巻いた者も散見されている。

そろそろ、限界であるのかもしれない。

嵐が来れば、また古龍が襲撃してくる。怯えているのか、それと

も疲れきっているのか、皆、嵐を虚ろな眼差しで眺めるだけであつた。

「これ以上の負担には耐えられない！」

そんな倦怠感を吹き飛ばそうと立ち上がったのは、若いハンターであつた。まるで礼服のような防具　デザインが燕尾服を意識しており、ところどころに水晶が取り付けられている　を身につけている。砂漠に生息する尾晶蠍アクラ・ヴァシムの素材を用いたもので、それだけでこの男が決して口だけではないと教えてくれる。

「四〇隻はあつた飛行船も、一〇隻以上落とされた。とてもじゃないが、動けないものまで連れていく余裕はない。けが人や病人はここにおいていくべきだ」

何を言い出すのか。皆がそう考え、それを代表したのはやはり若い男である。こちらはセクメーア砂漠ではありきたりのゆったりとした服装をしている。要するに、ハンターではない。

「馬鹿なことを言つな！　そんなこと許されるはずがないだろう！」

男は立ち上がるなり、猛然とハンターの男を避難した。現在立ち上がっているのはこの二人だけであるため、必然的に目立つことになる。

ハンターは若者に向き直るなり吐き捨てたように言った。

「戦えもしない臆病者は黙っている！」

「なんだと！」

「ここは今後の方針を決定するための合議の場であり、言い争い、果てには殴りたいのための場所ではない。何より、今人と人が争っていられる余裕などない。」

「やめないか！」

ティルテュは立ち上がる。本来なら女一人と見くびられる危険性もあつたが、ディアブロスの強靱さを知る者はティルテュの姿を確認しただけで一目置いた様子であつた。ハンターの男も暴言で押し切ろうとはしない。

「徒に不和の種を蒔くな。それに、お前も安っぽい挑発に乗るな」

暴論よりも暴力の方が尊いということはない。もつとも、傷病者を置き去りにするという意見に賛成している訳ではないと、ハンターへ一睨みきかせておくことは忘れなかつた。

ハンターは涼しい顔で大仰に手を振つた。

「俺を悪役にしたいならそれでかまわないが、みんなもわかつていることだろう。助けが来るかなんてわからない。このままでは皆死ぬことになる」

「まだ助けがこないと決まつたわけじゃない……」

「東側の連中に、セクメーア砂漠のことなんてわかるものか！」

若者の反論に被せるようなハンターの一言に、場はどよめきさえ起こらなかつた。誰もが心の奥底では覚悟していたことなのだ。

ハンターズ・ギルドはすでに動いていてくれるが、レムリア大陸東側の里に動きは見られない。そして、嵐を振り切ることはできないでいる。後何度古龍の襲撃に耐えられるかわからない。

「今、ここで決めるべきだ。助けを期待せず、助かる可能性を少しでも高めるか？ それが助かる可能性が低い人を見殺しにしてもだ。それとも、来るかもわからない助けを期待して全体を危険にさらすか？」

ティルテユの腹は決まっている。母は自分では満足に動くこともできない。しかし、そんな母を見捨てるつもりにはなれない。ただ、事態がそれほど深刻であることも事実である。先程までは噛みついてきた若者も、歯をきつく噛み合わせているような表情のままつむんでいた。

皆で死ぬ訳には行かない。やむを得ないのではないだろうか。そんな空気が場を支配しようとしていた。このままでは母は置き去りにされてしまう。

ティルテユは声を上げようと口を開き、しかし、それよりも先に声を上げた老人がいた。

「その話、儂が預かるう」

人々が座っている中、立っているはずだがそれでも自立たない。背が低く、また腰を折っているため抜きんできた高さというものがないのである。それを補うように声は通り、そして誰もがこの老人のことを知っている。



フォーマルハウトの町の代表であり、そのことはこの場で最も大きな里の代表者であることを意味する。誰も、その意向を無視することはできない。

皺に沈んだ眼が集まった人々を眺める。人々の期待と不安の入り交じった視線を一身に浴びながら、その老獪な気配は微塵も損なわれることはない。

「皆で逃げ、そして皆で助かるのだ」

「しかし！」

ハンターの抗議を、老人は片手をあげて制した。

「確かに、お前さんの意見は一理ある。しかし、いつまた奴らが襲撃してくるかわからん。そんな今、残していく者と連れていく者をどう分ける？ 基準なぞありやせん。それこそ長い話し合いが必要となるだろう。だが、儂等にそんな時間はないはずだ」

すると老人は、如何にも腹黒い笑みを見せた。

「それとも、儂が独断と偏見だけで決めてしまっても、許されるかね？」

そして、すぐに柔和な微笑みに戻る。ハンターの男はすっかり毒気を抜かれたように頬をかいていた。

「確かに、東側の里が重い腰を上げてくれるかはわからん。だが儂は信じることにする。必ず、助けは来るとな。それまで皆で協力し、少しでも遠くへ逃げ延びるのじゃ」

足手まといを置いていくという理屈は確かに道理にかなっている。しかし、そのために必要な時間は用意されていない。そして、どの手段をとったとしても、所詮確率の問題でしかないのだ。置いていったところで全滅しない保証はなく、全員で逃れようとしたところで全滅してしまうとは限らない。

確率の天秤を見眺めて、皆の心は決まったようだった。

「助けが来ることを前提とした、分の悪い賭だが、我ながら合理的と考えている。如何かな？」

反対する者　ハンターの若者もこれ以上口を挟もうとはしなかった　は誰もいない。ただ、1人でも多くの逃げ延びようという決意が場に浸透する。

その様子を見て、老人は笑った。

「よし、皆今日は休め。これからまだまだ、諸君等には働いてもらわなければな」

その老人のはげ上がった額に、一粒の雨が落ちた。

嵐が近い。それは、死と滅びの使者の先触れを意味する。

「クシャルダオラだ!!!」

誰かが叫んだ。見上げると、夜の闇に隠れるように頭上を多い尽くした黒雲の中から、かすかな光に金属光沢を見せつける古龍が矢のように降下している姿があった。

人々が散り散りに逃げる。しかし、クシャルダオラは速く、そして残忍。急降下しながら口を開き、放たれた風の塊が砂を巻き上げながら地表を削り取る。直撃を浴びた幾人かが悲鳴を上げながら空へと舞い上げられた。その中には、先程ハンターに反論した血気盛んな若者の姿もあつた。体を守る防具もなしに一〇mも放り上げられれば一般人ではひとたまりもない。

砂に轍を描きながら降り立ったクシャルダオラは、すぐさま次の犠牲者を物色しようと細い体から突き出た首を捻る。

だが先に、落とし前くらいつけさせていたどころ。

力任せに背中から大剣を抜き放つ。ディアブロス亜種の漆黒の体をそのまま体現した斧は風を裂く音さえさせてクシャルダオラの頭部を捉えた。

甲高い金属音と腕の鈍い痺れ。さしものクシャルダオラも首を縮めてうめいた。

まだだ。まだ終わらせない。

湿った砂を踏みしめて、かつて友情とともに得た刃に懇親の力を乗せて、テイルテュはあらん限りの声で叫ぶ。

「貴様等は！ そんなに人が憎いのか！」

振り上げられる剛斧は、捉えた古龍の顔に細い亀裂を刻み込む。

飛行船が我先に飛び立つ。嵐の中の飛行は危険である。しかし、そんな理屈は何の役にも立たない。多少の危険を冒さなければ、より大きな危険にされされてしまうからである。

これまでこの船団はそうして嵐の追撃と風翔龍の猛攻に耐えてきた。

しかし、疲労は確実に疲弊として船体を蝕んでいた。

逃げ遅れた船があったのである。

飛行船は膨大な圧力に耐えうる魚竜種などの貯水袋を加工して作られた気嚢を頑丈な火竜の翼膜で包んだ気球によって吊り下げられている。そのため多少の衝撃程度で航行不能になることはないが、それはあくまでも揚力の問題である。推力は船体に取り付けられたプロペラに依存している。

よって、船体が傷つけば、自ら動くことのできない風任せの航行はたやすく嵐に絡めとられてしまうこととなる。

現在、一隻の飛行船が身動きがとれないでいた。嵐に煽られ、船体が軋む。やがて気球もまた偏った圧力から翼膜が裂け、気体が急速に漏れ始めた。揚力を失った飛行船はそのまま降下を始め砂漠へと叩きつけられる。

砕けた船体。まだかろうじて揚力を維持していた気球は船体から解き放たれ、嵐の空へと消えていった。

船体から投げ出された人の影。その多くは身動きを見せることは、

もはや永遠にない。だが、中にはかすかな息を吹き、弱った腕で必死に上体を起こす人物の姿があった。

その事実は喜びをもって迎入れられた。

その人物の目の前。まだ生きている獲物を見つけた愉悦に口元を歪ませるクシャルダオラの姿があった。細く長い顔。そこにびっしりと並べられた歯が犠牲者の肩に食い込む。防具をまもっていない人の肌はあまりに弱く、瞬く間に血の味は古龍の口腔を満たす。

だが、古龍をつき動かすのは血の渇きでもなければ食欲でもない。殺戮であった。

殺したこと。それでもはや興味を失ったように、クシャルダオラは犠牲者を放り投げる。その後、犠牲者がどこに落ちたのかも確認しようともせず、砕けた船体へと体を向ける。

鋼の体。その軀に圧縮された膨大な大気を一気に吐き出すと、飛行船の亡骸は単なる残骸と化した。

災厄は嵐とともに訪れ、そして災いは、人の命をいとも容易く吹き飛ばしていく。

## 第一〇話「彷徨える湖〜H a l i L a k e〜」

雨粒が強く頬を叩く。吹き付ける風は飛行船を揺らす。

「ラファエル！ もっとスピードは出ないのか！？」

嵐の中を、ティルテュは声の限りに叫んだ。頭上に気球が存在するとは言え、横殴りの雨を防いではくれない。ヒミンブリユード級輸送船の剥き出しの艦橋で、ラファエルはその小さな体に見合わない大きな舵を必死に操っていた。

「これが限界にや。これ以上無理をすれば、炉が吹き飛びますにや！」

アイルー族特有の高い声は騒音の中でもよく通る。ティルテュは、残念ながら事態が好転する材料が何一つないことがはっきりと聞こえてしまった。

細い隙間に空気を無理矢理通したような音がする。古龍クシャルダオラの声である。

飛行船にすでに二頭のクシャルダオラが追いつこうとしていた。嵐の中を構うことなく突き進むその姿は、文字通り鋼の肉体と相まって放たれた矢にしか思えない。

体の大きさの比べ合いでは、せいぜい二倍強しかない飛行船に、クシャルダオラがしがみついた。甲板に爪が食い込み、壁が軋む音とともに船体が大きく傾こうとしていた。

「離れる！」

何度も味わった、岩でも叩いているかのような感触を、ティルテユは今一度味わうことにした。ほどよく甲板に突き出す形となっている古龍の頭めがけて、大剣を振り下ろす。

甲高い金属音。しかし、古龍は怯まない。

すると、ティルテユの脇から、青い鱗を纏った銃身が突き出された。

ガンランス。

内部に爆薬が充填された槍がその先端から火を噴く。単発的な爆発が三度ほど古龍の顔めがけて叩き込まれると、さすがの風翔龍も船の一部を引き剥がすように離れていった。

お手柄だ。見ると、中年のハンターはガンランスを中腹で展開し、空薬莖を放出するとともに新たな弾丸を装填している最中であつた。

「これさえなけりゃ、ガンランスは完璧なんだけどねえ」

その顔は、まるで子の悪戯をたしなめる母のようである。文句を言いながらも、決して悪意を感じてはいないからだ。もちろん、このギルドナイト イリス がすでに子どもがいてもおかしくない年齢であるという意味ではない。

「何かに掴まるにゃ！」

ラファエルの突然の声。

クシャルダオラはもう一頭いる。大気が揺らいでいた。不規則に、勝手気ままに吹いている風が突如整列した。それは一目散に古龍を目指す。クシャルダオラが大気を吸い込んでいるのだ。強靱すぎる肉体にため込まれ、限度を超えて圧縮される気弾。

防ぎきれるものではない。

クシャルダオラが首を前へと投げ出す動作とともに、気弾が飛行船へと放たれる。それは雨粒を纏い、視覚として空気の塊を捉えることができた。

同時に、ラファエルが操船マニュアルなんて無視して大きく舵をきった。船が大きく傾き、ティルテュは危うく放り出されそうになるところを、柵に掴まることで辛うじて踏みとどまる。

飛行船は、直撃を避けることができた。しかし、圧縮された空気の塊は船体の側壁を巻き込むと、材質を引き剥がしながらえぐり取る。その破壊は甲板の一部にまで及び、ティルテュにもその深刻さを確認することができたのである。

左の側面が、大きく破壊されていた。この船の構造が頭をよぎる。二階立ての構造で、上は船の機関が集中し、下には居住区が設けられている。そして、ティルテュの母親が寝ている船室は、ちょうど気弾の直撃を受けた場所にあったはずであった。

「母さん！」

自分が数少ないハンターの一人であることを忘れ、ティルテュは駆けだした。船内につながる床の扉を開けても、誰もティルテュを



止める者はいない。すぐ下は格納庫になっている。得物を整備しながら待機していたハンターの一人が何が起きたのかと不安げな表情を送ってきたが、ティルテュはそれを無視して先を急ぐ。廊下を抜け、階段を下り、食堂として機能する広間へ出ると目的の扉を勢いよく開ける。

すると、風が勢いよくティルテュの体を押しした。そこには部屋はなく、荒れ狂う空が、風と雨とを演出しているばかりであった。

「母や……ん」

瞳に飛び込んだ雨水が涙と混ざり合い、雫となってティルテュの頬を伝った。

燃え盛る太陽が戦場を照らす。

「こいつらの近くに長く留まるな。高熱を帯びている。体を焼かれるぞ！」

聖堂騎士団猟団長フィリアの声が飛行船の上から響く。

辺りを一望するその視線は、時とともに険しさを増している。

相手は炎王龍と呼称される古龍、テオ・テスカトルである。深紅の体毛は炎をそのまま体現しているようであり、黒ずんだ青の頭には王冠よろしく大きく広い角が生えている。その翼が振るわれる度飛び散る火の粉は、吹き付けた砂がテオ・テスカトルの体熱で焼かれたものである。

こんな化け物が避難民を襲っていた。古龍の数に対してハンターの数が足りていない。防波堤の隙間を縫うように古龍は避難民の中に突撃すると、その口から放射される火炎が次々人々を焼いていく。

そんな地獄の光景を、フィリアはただ上空から眺めることしかできないでいる。対古龍用の装備の使用許可が出ていないのだ。このような事態が逼迫してもなお緩慢としている国の対応に業を煮やした、フィリアが七人の魔女ではありながら特務騎士を返上した理由の一つは、こんな目の前の現実である。

船首に立って、事態の把握に務めるしかできないのである。

後ろではガンナーたちがそれぞれのボウガンを手を攻撃に行っている。その指揮をしているはずのエール副団長の声が聞こえないと思えば、それは何のことはなかった。一時指揮をやめ、フィリアの側にまで来ていただけのことだった。

「団長、彼らが古龍なのですか？」

振り向きはしない。それでも、エールがすぐ後ろにまで来ていることは声でわかる。

フィリアは固く噛み合わせた歯を、ゆっくりと離した。

「そうだ。以前、インスマス火山帯で姉さん、ソフィアと一緒に戦ったことがあった。その時は一頭だけだったが、やっぱり、奥地にはまだまだ潜んでいたようだな」

もう二年以上も前のことだ。まだ姉妹が七人の魔女だなんて呼ば

れていなかった頃、フィリアたち三人は炎王龍テオ・テスカトルの襲撃を受けた。

煮えたぎる溶岩と降り注ぐ火花。燃えるものすべてが焼き尽くされてしまったような黒ずんだ大地の上で、炎の王は立ちはだかった。

「私たちは、輸送隊の護衛をしていた。ミスカトニツク王国絡みの、実際やばい仕事だったらしいがその時は輸送隊の協力もあって撃退できた」

輸送隊約三〇人の援護がなければ撃退さえ危うかったことだろう。それでも、姉妹は勝利し、その功績を認められ、輸送隊の依頼主であったセントポーリア第二王女から七人の魔女へと引き立てられた。

だが、もう一度あの戦いを乗り切ってみせろと言われれば、正直なところ自信がない。古龍とは、それほど恐ろしい存在なのである。存在そのものが異質にして異端。そして、規格外の力を持つ。これは古龍に関わる者にとってもはや常識である。

「勝てると思いますか？」

エールが珍しく弱気な発言をしていた。冷静な副団長は、それこそ冷静に戦力差を計算できてしまうのだろう。無理だと言えば団員に不安を招く。勝てるかと断言できるほど自信家でもない。だが、すべきことくらい、心得ている。

「少しでも時間を稼げ。まずは難民たちを少しでも遠くへ逃がす。話はそれからだ」

短い返事が一言。エールは本当に優秀だ。

夜陰が船内をも満たし、廊下に灯されたかすかな灯りが、船が揺れる度に揺らめいた。引き裂かれた横腹は布で覆っただけの応急処置しかしていないにも関わらず、このグツフルファクシ級飛行船は安定した飛行を続けている。

王龍テラドミヌスと戦った。いや、正確には戦いとも呼べた代物ではない。ただ王龍が身じろぎしただけで、グツフルファクシ級は壁を引きはがされ、僚機を撃沈させられてしまった。助けようとしたキャラバンさえ全滅という現実をまざまざと見せつけられてしまったのだ。

そして、また一つ、癒えていないものがあつた。

ジェイナスは扉の小さな隙間から室内の様子をうかがう。そこには灯火のほのかな光の中、会議用のテーブルに突っ伏すソフィアの後ろ姿があつた。あれから、ほとんど会議室から出てきていない。怒らせてしまったのか、それとも人々を救えなかったことを悔やんでいるのか、どちらにしろ、まともに口をきいてもらっていない。

ため息をつく、小さな弦の音が一つ。扉すぐ脇の棚 人では到底座ることができないほど狭い に座る水夫が自分の髭を引っ張って、そして離れた音だ。

「やっぱり、僕が謝った方がいいのかな？」

この飛行船の優秀な機関士殿は迷いなく答える。

「はいですにゃ。確かに、仲間を思う気持ちも大切ですがにゃ、そのために迂闊な行動をして全体を危険にさらしてしまえば本末転倒ですからにゃ」

メタトロンが言っているのは、前の戦いで、船から投げ出された人の救助をソフィアに要求したことだ。王龍テラドミヌスを見過ごすことはできないし、落ちた人が助かっている可能性は確かに低い。それでも助かる人がいるかもしれない。そう、ジェイナスはソフィアに反発したのだ。

しかし、それは責任のない者の身勝手な意見でしかない。ソフィアはそのことを理解した上で、戦闘の続行を決めた。それを非情だと罵ることができるのは周りが見えていない愚か者か、ジェイナスくらいなものである。

もう一度、扉の隙間からソフィアの様子をうかがう。やはり、背中からではその考えが読みとれるわけもない。

「いや、でもさ……」

「痴話喧嘩で男が意地を張ると大概ろくな結果ににやらないですからにゃ」

メタトロンはまた髭を摘む。猫にとって、髭は重要な感覚器と聞いているが、こんなに手荒く扱ってもよいもののだろうか。しかしその様はどこか髭を誇らしげにさする紳士のように見えなくもない。

「痴話喧嘩って……。メタトロンは経験あるのかい？」

「こつ見えて、妻子持ちですからにや」

ソフィアに気づかれぬよう、声を潜めている。それでも、つい大声を上げそうになって、何とか息を口の中に留めることができた。ゆっくりと呼吸をしながら、できるだけ小さな声を心がける。

「君、いくつ？」

棚に乗ることでジエイナスとようやく視線を合わせることのできるメタトロンは、やはりどこか誇らしげである。

「十七になりますにや。でも、人とアイルーでは成長の早さが違うにや。だから、人間換算で、だいたい三六にや」

「それじゃあ、君の方がいろんな意味で人生の先輩!？」

少し、大きな声をだしてしまい、慌てて口を押さえた。幸い、ソフィアに気づかれた様子はない。

「そうなりますかにや」

「ごめん、いや、ごめんなさい。その……」

アイルーは背が低く、またその独特の話し方からもつい年下の子どもを相手にしているように扱ってしまった。それがジエイナスよりも一〇も年上で、さらに妻子までいるとは思っても寄らなかつたのである。

「別に年上相手だからといって畏まる必要なんてありませんにや」

この言葉自体、メタトロンが大人の男であることを象徴している。何と云うか、余裕というものが違うのである。ここは甘えておくことにしよう。無理に丁寧な表現に努めようとしても、なかなかできそうにないから。

「うん、わかったよ。……あのさ、メタトロンは、奥さんと子どもがいるんだよね？」

「今ドンドルマの街に住んでいますにゃ」

「やっぱり、奥さんと喧嘩とかしたのかい？」

「何度もしましたにゃ。そして、いつも謝るのは私でしたにゃ」

アイルーの可愛らしい微笑みから、すでに家庭を築いているという事実を知ったせいか、ダンディズムさえ感じられる、ような気がする。

「確かに、喧嘩をして腹を立てると、自分が正しく見えてくるものなにゃ。ですがにゃ、そんな時はもう一度考えてみるのですにゃ。では、自分は本当に何も悪くはないのかと」

つい口を尖らせてしまったのは、そんなこと、考えるまでもないと知っているからだ。ジェイナスはこの飛行船の船長でありながら、その役職をほとんどソフィアやメタトロンに押しつけている。そんな無責任な立場こそその言動でソフィアの足を引っ張ってしまった。

謝れないのは、自分が悪いと考えているのではなくて、つい気まぐさから話しかけられないのだ。こんなところも、ジェイナスは自身の子どもっぽさを自覚せざるをえなかった。

メタトロンは優しく背中を押してくれる。

「ソフィア特務騎士はもう怒ってなんかにやいにや。それに、意地を張ってばかりじゃ、損するだけにや」

「そうかな……?」

「先輩からのアドバイスにや」

そう言っつて、メタトロンはウィンクを一つ。

「わかった」

意を決して、ゆっくりと扉を開く。ソフィアがこちらに気付いた様子はなかった。

「ソフィア、話があるんだけど……」

声をかけてもまだ反応はない。

「ソフィア……?」

肩に手を置こうと伸ばして、すると、触れるよりも先にソフィアが突然立ち上がった。

「わかったよ!」

脈絡がまるでない。何がわかったのかわからず、つい助けを求めようと首が後ろを向く。すると、床に降り、子どもくらいの高さ



しかないメタトロンの姿を認めることができた。

「ソフィア特務騎士殿？」

メタトロンの声にソフィアが振り向く。目にはうつすらと隈ができており、満足に寝ていないことがわかった。しかし、その顔は達成感に満ちて、薄暗い中にも関わらず瞳孔が開いているようであった。

「ジェイナス！ メタトロン！ わかったんだ。ドンドルマの街が滅亡の危機にあるってことがね！」

ソフィアはすぐさまテーブル 資料が雑多に並べられているへと視線を戻す。つられるように、ジェイナスはテーブルの横へ、メタトロンは一跳びに上に乗った。

「これを見て欲しいんだ」

邪魔な資料を払いのけ、紙が床に散らばる。ソフィアはそんなこと気にもとめないで、テーブルの上に海図を大きく広げた。

「海図だよね……」

「ですよ……」

レムリア大陸の西側を中心とした地図である。ドリームランド峡谷を発した王龍テラドミナスがセクメーア砂漠中央に向かって進行している様子が、一日ごとに点として表現され線で結ばれている。王龍の監視をはじめから何度も見てきたものである。特に珍しいものではないと、ジェイナスとメタトロンはソフィアの顔をうか

がう。しかし、ソフィアは確信に満ちた表情のままである。

「とても簡単なことだったんだよ。僕たちが気づくことができなかったのは！」

その右手にはペン。砂漠の中央に大きな丸が描かれた。そこは、ハイパーボリア文明の遺跡が集中している場所である。

「まず、王龍がハイパーボリア文明を滅ぼしたことはすでに衆目の一致するところだよね。でも、ここで僕たちは思い違いをしていたんだ。この場所で行くつも文明が滅ぼされている。でも、今ここに街はない。じゃなくて、どうして街がないのかを考えるべきだったんだ！」

「それは、水源がないからだと思うけど……」

当時はここに豊かなハリ湖があり、その水の恵みを頼りに文明が発展したのだそうだ。だが、湖はテラドミヌスによって枯渇させられ、その結果、ハイパーボリア文明は滅びてしまった。

これが、王立古龍観測隊の見解である。

「そう。ハイパーボリア文明時代にはあったハリ湖がないんだ。それは王龍によって枯渇させられてしまったからね」

続いてペンが書き込むのは二つの×印。一つは、かつてハリ湖があったと思われる場所。すでにないことを示しているのだろう。そして、もう一つはドリームランド峡谷に描かれた。

「でも、王龍は地下水の減少が原因で目覚めて、水を求めてハリ湖

「にやってきた」

「どうやら、x印は水の枯渇を象徴しているらしい。現在、ドリームランド峡谷にも、ハイパーポリア文明跡地にも水は存在していない。」

「問題はここからさ。水源を失い、文明は衰退。でも、セクメーア砂漠中央には複数の文明が栄えた証拠がある。これってさ、もしかすると、ハリ湖は枯渇してもまた時間がたてば再生してたんじゃないかな？ 王龍テラドミヌスに枯渇させられ、また再生する。こんなことをハリ湖は繰り返していたんだよ。まさにさまよえる湖さ！」

確かに、それなら王龍テラドミヌスがセクメーア砂漠中央を目指すことも、複数の文明がほとんど同じ場所で発展したことの説明にはなる。

しかし、納得できない。ジェイナスが顎に手を当てて悔しい表情を作っている間に、メタトロンが軽く手を挙げた。

「でも、今セクメーア砂漠にはそんなに大きな湖はありませんにや」

「そう、もしこの理屈でいくなら、今も砂漠中央には湖が存在していなければならないことになる。しかし、ソフィアが自身で海図に書き込んだ通り、そこに湖はないのである。」

「ドリームランド峡谷。あそこで、四〇〇年前に大きな地震か何かで川の流れが大きく変わってしまったって言う話を聞いたことはないかい？」

ソフィアはずいぶん自信たっぷりになっているが、メタトロンは

峡谷など行ったこともないだろし、峡谷出身のジェイナスとて、そんなに昔のことなんて聞いたことはない。

やはり、男二人は煮えきらない態度に終始していることしかできなかった。そこが、かんに障ってしまっただけらしい。

「とにかく、あつたんだよ！ これは単に峡谷に移り住んだムー文明の人々が再び峡谷を離れるきつかけとしか認識されていなかったけど、この川はきつと、昔セクメーア砂漠の地下へと通じていたんだよ。そして、ここから湧き出て湖を作っていたのさ！」

力強い筆跡が描いたのは、峡谷から延びる一筋の線。ところが、それに×印を書き込んで、線を途中から北の方へと曲げてしまう。そして、砂漠には再び×印が書き込まれた。

「それじゃあ、この川がハリ湖を？」

「そう。だから、これまでハリ湖は再生されていて五〇〇年ごとに文明の発展と衰退が繰り返されていたんだ。でも今回初めて湖は復活しなかったんだ。だから、この場所には大きな街が発展しなかった」

指し示されたのはセクメーア砂漠中央。確かに、レムリア大陸の大都市は東側に集中している。この砂漠という環境では、生活用水の十分な確保が難しいため、大規模な都市は発展できなかったのである。もちろん、湖のような大規模な水源があれば別だろうが。

水の話をしていても、唾を飲み込んだのは喉が渴いたからではない。事態の深刻さが、ようやく飲み込めてきたからだ。

ソフィアの握るペンがテラドミナスの軌跡をゆつくりとなぞっていく。

「もし、王龍テラドミナスの目的が潤沢な水であるのなら、ハリ湖が枯渴したままだと気づいた時、どうするだろうね？」

「それは、やっぱり新たな水を求めて……！」

それは王龍がハイパーボリア文明跡地に到達してもなお止まらない。大方の予想を裏切り、ソフィアの指は確信満ちて以東へと突き進んでいく。

「そう。でも、海に出るには東側はインスマス火山が塞いでいる。まあ、浸透圧の関係上、海水から水分を補給できるかは疑問だけでもかく、そうなると王龍が目指すのは、きつとここさ！」

海図に大きな丸が書き込まれた時、ジェイナスはほとんど反射的にそこに書かれた地名を読み取った。

「ブリチエスター湖！」

それは、ドンドルマの街の近傍に位置する、ドンドルマの水瓶である。先程メタトロンが言った通り、セクメーア砂漠には大きな湖はない。そして、北側のドリームランド峡谷に始まり、南のルルイ工山脈を経由して東側のインスマス火山帯に繋がる三日月形の山並みがセクメーア砂漠を綺麗に閉じ込めている。抜けられる道は北東、ドンドルマ地方にしかなく、そして、そこにはドンドルマの街がある。

「街はきつと破壊されるね。それに、ブリチエスター湖は枯渴して

しまじゅ。ドンドンママの街は、確実に終わるよ」

第一一話「票決の時〜Public Opinion」(前書き)

今回は短めです。

## 第一一話「票決の時」Public Opinion」

ドンドルマの街はいつも通りの日常の空気が流れていた。通りには人があふれ、賑わいを見せている。

レムリア大陸の中央に位置するこの街は交易の中心であり、その空気は大陸の総意によって醸成されている。誰かが悲鳴を挙げていても、絶対多数の人が笑っていれば、ドンドルマの街は笑うのである。

現在、セクメーア砂漠で起きている事態がこの街にまで届いていないはずはなかった。ただ、それを危機と感じる者の声が数少ないにすぎない。

講義堂では、今も変わらぬ議論が繰り広げられていた。

「仮に王龍の迎撃に打って出て、不必要に刺激してしまえばどうなるかわからない。古龍はそれだけ未知の存在であるということはみなさまおわかりでしょう」

「しかし、未知と言うならドンドルマの街にまで達しないという保証もないではありませんか」

「実測としてテラドミヌスは以東に達していないことが判明している」

「ハンターを集め、飛行船を用意するだけでどれほどの金がかかるか、わからないことはないでしょう。それなら復興支援にあてた方が遙かに効率的で安上がりなのです」



「金と命を天秤にかけよと申されるのか？」

「だから王龍はここにはやってこないと申しているのですよ」

「すでに大方の避難は実行に移されている。これ以上の被害拡大はあり得ない」

「ディオニユス殿も言っておられた。嵐は、ただ過ぎ去ることを待てばよい」

講義堂の中央。高くなった床の上に椅子を置いてその上に座っていると、それだけで世界の中心にでもいるかのように、セントポリアは感じていた。日光を遮るためのヴェールを被っていると、まるで世界そのものが他人事のように感じられ、現実味に乏しくなる。

しかし、これが現実である。

王龍テラドミヌスの危険性は誰もが認識しているが、その程度には違いがある。セクメーア砂漠の里は危険性を強調し、それ以外の里はそれを軽視する。レムリア大陸の三割を占める広大な砂漠としてそれは過半数に届いていないことを意味していた。声は自然と、王龍に手出しせず、災厄をやり過ごそうとするものが多数を占めるようになっていた。

もはや採決まで時間はない。現在声を上げている人々の比率が、そのまま投票の結果になるわけではない。しかし、その多くは各地域で強い影響力を誇る里の代表である。地域拘束などないが、わざわざ実力者に逆らう理由を、小さな里が見いだしているとは考え難い。

このまま、王龍を見過ごすべきと、総意は固められようとしていた。

セントポリアにもはやできることはなく、そして、何か流れが変わるきっかけがある訳でもない。

「ちよつといいか？」

不躺な若者が声を上げ、立ち上がるとともに手を高くかざしていた。如何にも軽薄そうな若者である。金髪は手入れがほとんどされていないためか好き勝手に伸び、服装にしても会議に参列するようなものではない、ずいぶんとラフなものである。ここにいる以上、どこかの里の代表、あるいは代理であるはだが、毛色があまりに違っていた。

参加者からはどよめきともため息ともつかぬ声が漏れ聞こえる。

若者は、そんなことを構いもせず、自分に注目が集まったことを喜んでいようであった。

「俺は、いや、失礼。私はンガイ村の者です。ご存じの通り、ンガイ村はンガイの森の北側に位置しており、ドリームランド峡谷とドンドルマ地方を結ぶ山岳帯でセクメーア砂漠とは遮断されている。どちらかと言えば、枕を高くして寝ていられる身分の人間だ」

一応、取り繕うとはしたようだが、次第に化けの皮がはがれてしまった。どうやら、あまり形式だとかに拘らない若者であるようだ。

笑いながら自分の身分の安泰を語る若者に、セクメーア砂漠の里

の中には不愉快そうに顔をしかめる者もいる。同時に、他の地域の里の人々も不快を露わにしたが、その中には顔を背けるようにうつむく者も含まれていた。それは、若者が言っていることは自分たちと同じであると気づかされたのだろう。そして、若者は真剣な様子ではなかった。そして、他の里の人々も、セクメーア砂漠の危機を深刻に捉えてはいないのだ。

若者はその軽々しい様子を改めようとはしない。それでも、セントポリアはその若者の話を聞こうと決めていた。こんな重苦しい会議の場でおどけられるのだとしたら、それは周りが見えないくらいバカであるのか、そうでなければよほど自信があるかのどちらかだからだ。どちらにしろ、見応えがある。

「だが、異変を感じていないわけじゃない。一度、森に助燃性の霧がはったことがあった。これまでそんなことは一度もなかったのだ」

紙をめくる音が響く。それぞれの代表の手元に置かれた報告書の中には、ンガイの森で発生した霧について、短くではあるが書かれているのである。

その霧は助燃性を示し、松明の火を炎に変えたそうだ。そして、その霧に呼応するかのようには、樹海の深奥から巨大なヒプノックが姿を現した。

この異変は、セクメーア砂漠から山脈を挟んだ北側の地域でのお話である。

「考えてもみる。異変は各地に散見されている。セクメーア砂漠以外の場所にもそれは生じてるんじゃないか？」

どよめきが起きたのは、それだけ心当たりのある里があるということだろう。セクメーア砂漠は当然として反応は薄いが、他の地域からはざわめきが起きたのだ。

「ユクモ地方では、なんと雷狼竜ジンオウガが大移動しているそう  
だ。しかも、目指すは西側。ドンドルマ地方だ。ポツケ村周辺じゃ、  
雪獅子ドドブランゴが群れていることが確認もされている」

「この若者の言葉に、かすかであるが空気が変わり始めていた。皆  
が皆、よつやくこの異変の当事者としての意識を持ち始めたのだろ  
う。」

どうせ村長の息子だから会議に参列していた程度のぼんぼんだと考  
えていたが、なかなか面白そうな若者である。もつとも、セントポ  
ーリアより年上なのだろうが。

「異変てやつは、各地に広がってる」

「しかし、それが王龍と関連している証拠でもあるのかね？」

声とともに立ち上がったのは、反対派の筆頭であるシュレイド王  
国のディオニソス事務次官である。威厳にあふれた初老の男性の  
姿は、軽い若者と見事に対照的である。

若者はお手上げといった様子で手を上げて答えた。

「ないさ。だが、俺はこれほど重なった偶然と、偶然と片づけてし  
まえるほど勇敢じゃない。できすぎ、だろ」

「あれほど大規模な古龍が目覚めたのだ。異変くらい起きよう。そして予想外に被害が拡大するというのなら、それこそ今の段階から復興の準備を進めなければならぬのではないかね？」

「ここで古龍のことがわかってる奴なんて一人もいやしない。俺やあんた、どちらが正しいなんて誰にもわかりやしないんだ。だが俺は、王龍がセクメーア砂漠で満足してくれるなんて楽観的には考えられない」

ディオニュソス事務次官相手にまったく物怖じしない態度は、会議の空気を少なからず変えたように思われる。しかし、決定打とするには、この伏兵はまだ若すぎる。ディオニュソス次官の影響力を払拭できるはずもない。

そして、時間切れである。

ドンドルマの街に正午を告げる鐘の音が鳴り響いた。長らく続いた会議が終わりを迎えたのである。立ち上がっているのは若者とディオニュソス次官。セントポリアはヴェールの奥で二人を交互に眺めると、椅子の肘掛に手をつけて立ち上がった。

「では、票決に入りましょう」

今日、この場所で、レムリア大陸の運命が決まるのである。

グラジオラスは走った。その手に遅れに遅れていた現地からの報告書を字が読めなくなるほど強く握りしめ、すでに四〇に手が届く体にむち打って人でこった返す廊下を走る。

会議が終了し、評決は非公開で行われる。そのため、見学していた人々がこの廊下に追いやられているのだ。

人を押し退け、会議上に入るための階段の前にいたのは同じく他の七人の魔女たちと特務騎士の姿である。

構わず階段を登ろうとしたグラジオラスを押しとどめたのは、神託の魔女と呼ばれるほどその直感に信頼を置かれているフィロソフイアであった。会議が一段落したことで時間がとれるようになったのだらう、髪型を整え、化粧で決め、魅力的な女性を演出しているこのことについて苛立ちを覚えたのは、まだ何も終わっていないのに何をしているのか、そんな反感が高ぶっていたからに違いない。

「姫様に会わせて！」

「無理です！　すでに票決が始まっています。今入ることはできません」

グラジオラスの行く手を遮るようにフィロソフィアは手を軽く広げていた。その顔に戸惑いが見られるのは、グラジオラスのことを、普段は落ち着いている人だと見てくれているからだらう。

本音を言うなら、グラジオラスとて票決を邪魔したわけではない。それほどのがあったのだ。

「何が、あつたんですか？」

心配そうな声で話しかけてきたのは、自分の娘　グラジオラスに子どもはいないが　ほどの歳の特務騎士である。まだ騎士とし

ては新米に分類されるシギユンは、それこそ不安そうな顔をしていた。まるで捨てられた子犬のように、母性本能をくすぐられる顔である。

文字通り一息ついて、グラジオラスは手にしていた報告書を広げてフィロソフィアに手渡した。

「ワーカー・ホリックたちが命がけで届けてくれたわ」

セクメーア砂漠とドンドルマの街の連絡を受け持つ騎士たちである。

フィロソフィアが報告書を開き、他の特務騎士がそれを覗き込む。それぞれがどの程度まで読み進めているのかくらい、聞かなくとも顔を見れば簡単にわかった。次第に、表情が曇っていくからだ。

「そんな……。古龍が群をなして人を襲ってるなんて……」

「こんな質の悪い冗談を持ち込めるほど度胸のある奴はまずいないだろうな」

普段冷静なアレス特務騎士でさえ、不安を隠しきれないようにうめいた。声が聞こえる範囲にいる他の人々もある者は怪訝な様子を隠そうとせず、ある者は呆れたように笑いながら、しかし、仮にこれが事実であるとするればそれがどれほどの脅威であるのかが胸中を巡っているのだろう。誰も声を上げようとはしない。

「これはもう王龍だけの問題じゃないのよ。今ここで手をうたなければ、大変なことになるわ」

しかし、すでに評決は始まってしまっている。今から踏み込んだところで混乱を招くだけだろう。グラジオラスとてそれくらいわかっている。しかし、気持ちが急いで仕方がないのだ。

つい強引に階段に入ろうとして、フィロソフィアが手で押し止める。上から聞こえる音は、すでに評決を終えたことを示して、静かなものである。

「評決は、やっぱり不利なままです。古龍を見たことがない人は誰も本気にはなれないみたいですから」

フィロソフィアの顔を見たなら、会議の様子など見なくともわかる。

五〇〇年に一度目覚める古龍の危険性を、ついこの間まで古龍を知らなかった人々にわかってもらうこと自体難しいものであることはわかっていた。ただ、王龍に呼応するように古龍の群が出没したことを知らせることができたなら会議の結果も違うものにできたのだと考えると悔やまれてならない。

グラジオラスは他の特務騎士の顔を見回した。

神託の魔女フィロソフィアは不安げに階段を見上げた。長い長い階段は見上げたところで講義堂を目にすることができるわけではない。だが、その心中は察することができる。今できることは我等が主を信じることだけである。

結界の魔女スノードロップは普段通り、表情を作らない顔にその心を隠している。何を見ているわけでもないその視線は、言い換えるなら誰とも目を合わせない場所をうまく選んで漂っていた。その



視線の移り変わりの速さは、普段よりも速い。

顔を傷を負う騎士はすで平静を取り戻している。どれほどの相手であろうと戦い、どのような事態でも受け入れる覚悟など、とうにできているということなのだろう。

ほんの半年ほど前まで単なる村ハンターであった新米の特務騎士の少女はいまだ事態を受け入れられずとも、周りに合わせようと必死に自分を奮い立たせているようであった。握り締めた拳は小さく、しかし力強さを感じさせる。

皆、会議の結果がどうであれ、主であるセントポリア王女が戦うと決めたならその意に背くことはしないだろう。それがどれほど絶望的な戦いに身を投じることになるとしても。

「終わるかもしれないわね。この、世界が……」

セクメーア砂漠は北と南に分かれ、レムリア大陸は東と西とに分かれている。

砂漠の北は嵐。風翔龍クシャルダオラが嵐を引き連れ、自ら暴風を使役しながら飛び回る。その羽音は死神の翼。その心は暴虐にして無慈悲。悪意ある嵐。

砂原の南は灼熱。炎王龍テオ・テスカトルが炎を纏い、無遠慮な太陽見下ろすその下で殺戮を主菜とする宴が催される。それは存在自体が炎と等しい。ただ在るというだけで、触れるものすべてを焼き尽くさずにはいられない。

大陸の東は豊かな自然。湿気を蓄えた沼地が存在し、密林には捨てるも余るほどの水が溢れている。何より王たる古龍の進行から遙か遠い。

大地の西は不毛の砂漠。人が踏み入ることのできないインスマス火山帯を南西に。北西には乾燥した高山帯であるドリームランド峡谷が。そして、これらに守られるように極寒のルルイエ山脈が南西を塞いでいる。

封じられた砂漠を抜けた場所にルルイエ山脈はそびえ立つ。五〇〇m超級の山々が並び、そこは命の源である酸素に乏しく、吐き出す息さえ凍り付く。

人は自然を知り尽くした気でいた。山を切り開き、街を作り出す。かつて人が住むことができなかつた寒冷帯にまで生息の範囲を広げ

ることができたのは人が作り出したシステム故である。

しかし、忘れてはならない。人は知れば知るほど、より効率的な方法を見つけ出せてしまう生き物であるということを。それは一見理想的なようでありながら、一度知ったと思いこんでしまえばもう二度と同じ場所を探ろうとしないということを意味している。

そこに、空白ならぬ空白が生まれてしまう。

ンガイの森を奥地を人は知らない。活火山ひしめくインスマス火山帯の奥地に誰が立ち入っただろう。ドリームランド峡谷の奥地はルルイエ山脈に繋がり、まさに地獄の門である。そして、ルルイエ山脈は生命が存在するにはあまりに過酷である。

世界には既知に姿を借りた未知が潜み、そして、未知はまだ人の英知を遠ざけたままである。

古龍たちは、そんな人の目の届かぬ場所に潜み、その悪意は常に世界を覆っていた。

揺れが激しい。嵐の直下から免れたとは言え、まだ風が強い。そして、ティルテュの搭乗しているヒミンブリユード級輸送船は前の戦闘で左側面を大きくえぐられてしまった。修理している余裕はなく、重心のバランスが崩れた飛行船はふらつきながらも飛行を続けている。

止まれば古龍に追いつかれてしまう。古龍たちは、不思議な動きを見せていた。飛行船が逃げると振り切ることができて、しかし動

きを止めると追いつかれてしまう。クシャルダオラの飛行能力を鑑みたなら、飛行船で振り切れるはずなどない。それでも逃げられてしまえるのは、まるで古龍たちが自らに一定の速度制限を科しているようでさえあった。

馬鹿げた話だ。

しかし、そうでもなければ説明がつかない。古龍は船団が逃げると追いついてはこない。しかし、メンテナンスの必要性から停泊する度に追いついては、断続的な襲撃を繰り返している。これまでに最初の攻撃と合わせて三度の襲撃をかくぐつたが、その度に仲間がどんどん脱落していった。

その中にはティルテュの母親も含まれている。

揺れ動く飛行船の中、古龍について詮無い思索を巡らせているのは、そのことも関係している。

指一本動かすことさえ億劫で、休憩室の椅子から立ち上がることもできない。周りにはティルテュ同様疲れきった顔をした人々が思い思いの場所に座っている。誰もみな同じである。気力が萎えて、隣の人と会話をする余裕もない。

すると、頭の中で考えを巡らせるくらいしかできることがなかった。イリスが隣に座るまで気づくことができないほどである。

「また一隻落ちたよ……」

顔を上げていないため、見ることはできないが、このギルドナイトは恐らく沈痛な面もちをしていることだろう。声からそれは伝わ

ってくる。

「古龍か。あんな化け物がどうして今更……」

テイルテュも現在では村を拠点としていたが、かつてはドンドルマの街でハンターをしていたことがあった。大陸の様々な場所に足を運んだが、古龍など見たこともなかったのだ。

あの街のことを考えるといつもメイドの姿が目には浮かぶ。いつもメイド服を身につけた凄腕のガンナーで、わずか二人で黒角竜デイアブロス亜種二頭と対峙し、見事勝利を収めた。

例の壁画を目にしたのもその時のことである。

古龍たちの姿を初めて目にして、その壁画の雄大さに心奪われた。空を覆うように描かれた赤い雲の鮮やかな色彩は、今なお目に焼き付いて離れない。

「本当に、上は何をしてるんだろうね？ 全部ひた隠しにしていることが起きても何もできやしない」

返事をすぐに返すことはできなかった。ここには他にも人がいる。弱っている人々にこの話を聞かせてよいものか躊躇われた。それでも話す気になったのは、どこか自棄を起こしている証拠かもしれない。

「……また夜がやってくる。私たちは、明日の朝日を見ることはないかもしれない」

飛行船の連続稼働時間の限界が近いのだ。そして、一度足を止め

ると、古龍たちは追いついてくる。

人を憎んでいる。

そうとしか考えられないほど、殺戮のみを目的として。

太陽が照りつける砂場を避けて、人々が日陰に潜むように体を寄せている。太陽の光があまりに強く、陽光に慣れた砂漠の民とて耐えられるものではない。しかし、足を止めるとテオ・テスカトルの群に追いつかれてしまう。

それをわかっていているからこそ、皆恐怖に震え、一塊になることで不安を紛らわせようとしていた。

連続稼動が祟り、現在整備を受けている最中のヒミンブリユード級輸送船　聖堂騎士団を運んで来たものだ　は現在打ち上げられた船のように砂の上に横たわっていた。この船が作り出す影もまた、貴重な日影である。

聖堂騎士団団長であるフィリアも避難民たちとともに、この日影の中にあぐらをかいて座っていた。隣では副団長のエールが立ったまま、船に背中をつけていた。

「何人やられた？」

「五人です。皆、立派な最期でした」

記憶の中から古龍との戦いを探り出す。

炎王龍テオ・テスカトルは炎を纏う。火を吐くだけなら火竜リオレウスにもできることだが、テオ・テスカトルは違う。炎を使うというよりは操るとするしかない。

燃えるように赤い体毛に包まれ、赤黒い光が火の粉に混ざってちらついていた。

吐き出す炎の照射は業火である。ここから砂漠を南下すれば燃えつき消し炭と化した人々の遺体が並んでいる。あまりに高い火力は、生命を瞬く間に炭化してしまうのである。そして、テオ・テスカトルは木炭を食料にしているわけではない。話によれば、燃石炭などの可燃性の鉱物を食料にしているなんて記録もあるらしい。

古龍は人を喰らわない。より正確に言うなら、喰うことはあっても、わざわざ燃やし尽くした肉を口にするのではなく、そして、殺すこと、壊すこと、ただそれだけを目的としているかのような殺戮を繰り返す。飛竜や鳥竜のような動物とは違う。モンスターや怪物というものは、まさにあのような化け物のことを言うのだろう。

仮にあんな怪物がドンドルマの街のような人口密集地に攻め込もうものなら、おびただしい数の死者が出ることだろう。そして、今ここでも死者が増えようとしている。

フィリアは離れた日影に目をやって、おもむろに立ち上がった。

腕の火傷が痛んだ。あの怪物たちの息吹、その火の粉がかすめただけで腕には痣ができていた。傷は熱を持ち、弱い火で絶えず炙ら

れているように痛みが皮膚を浸透してくる。

エリスはただの娘である。セクメーア砂漠の小さな村で、ちよつと年頃の男の子たちにちやほやされて、それをまんざらんでもない様子であしらっておけばよかった。ハンターになろうなんて考えたこともなくて、動物たちに襲われる自分のことなんて想像したこともなかった。小さな村の中で、結婚して子どもを産んで、そんな有り触れた人生を送るつもりでいた。

セクメーア砂漠とインスマス火山帯の間で、古龍とかいう化け物に怯えて日影に隠れることになるなんて考えもしなかったのである。

日光が強烈で寒いはずがないのに震えが止まらない。目を閉じると古龍の恐ろしい形相が思い出されて、満足に眠ることもできなかつた。これはエリスばかりではない。同じ岩陰の中にも、同じように疲れきった顔をした人が背を丸めて座っていた。

もう皆限界なのだ。

エリスは懐からナイフを取り出した。鞘から取り出すと、砂漠からの照り返しが刃を煌かせる。古龍に傷一つつけることもできないちっぽけな刃は、それでも人の肉を貫くくらい易々としてのけることだろう。

不思議なくらい未練だとか恐怖はわいては来ない。これで解放されるかと思うと、返って待ち遠しくさえあった。それでもなかなか実行に移せないのは、まだ何か望みでもあるということなのだろうか。もう、死ぬ以外の道は残されていないというのに。もう自嘲する気力もない。



切っ先を喉元へと向けて、最後の一息をつく。

「いいナイフだな。私にくれ」

気づくよりも振り向くことよりも早く、横から伸びた手がナイフを掴むなり無理やり奪い取った。赤い髪をした若い女性が、不敵な笑みを浮かべてエリスを見下ろしている。金の刺繍がどこさされた如何にも高貴な身分を思わせる純白のローブを着た女性は、確か救援にかけてくれた獵団の代表者である。

そして、エリスが唯一すがりついた希望とも言えるナイフを奪った人物である。

「返して！ 返しなさいよ！」

すがりつくように掴みかかろうとすると、ハンターでもないエリスを、赤い髪の女性はあっさりとおしらう。少し身を翻したただけでエリスは目標を失い、砂に顔から突っ込むはめになった。

「お前死ぬつもりだろ。それなら返すつもりはない」

頭上から声がする。古龍からこれ以上逃げ出す気力もないのだ。人になら抗えるということもない。

「いいじゃない、死なせてくれたって……」

太陽に焼かれた砂を握り締め、上体を起こす。

「駄目だ。お前が死ぬと罅が減る。そしたらその分他の誰かが狙われることになるからな」

「何よ！　じゃあ、死ぬために生きるとでも言うの！？」

せつかく砂があるのだ。振り向きざま、顔にぶつけてやるつもりで投げつけた。赤い髪の女性は軽く手を払って砂を防ぐと、砂の合間から覗く視線は凜としていた。睨まれているわけではない。それでも、まっすぐで、決してエリスから目をそらせようとはしない。

「人は遅かれ早かれいずれ死ぬ。死ぬために生きてるってことだろ」

「でも、私はあんな怪物に喰い殺されるなんて死に方、真つ平ごめんよ！」

「それなら、お前は今までずっと、自分で自分の喉を突いて死ぬことを望んでたのか？」

「そ、それは……」

そんなわけはなかった。それどころか、戻れるものなら一人の村娘として平穩に過ごしていた時間に戻りたい。だが、それは不可能だ。そして、古龍たちは必ずまたやってくる。

「でも！　どの道そうなるんでしょ！　みんなもう限界なのよ！　助けは来ない。それなのに古龍は一向に数が減ってない。それどころか日に日に数が増えてくるくらいじゃない！」

それが他の人の耳に届いていることもわかっていて。不安を掻き立ててしまうかもしれない。一人声を荒げるなんてみっともない。そんなことが頭をよぎっても、もっと大きな思いに打ち消されてしまふ。

「あんたたちには感謝してる。でも、もう……、どうしようもないじゃない……」

起き上がる気力なんてなかった。砂に触れている手が熱い。まるでそれを冷やしてくれるかのように落ちた涙は、それでも火傷の痛みも、焼けつく太陽の日差しも和らげてはくれないのだ。ただ、声をかすれさせるだけであった。

女性は、表情で同情や理解を示してくれることはなかった。不敵な笑みが憚然としたものになり、それが維持されている。表情では、何ら歩み寄ってはくれなかった。まるでその代わりのように、女性は腰を低くした。

「私はミスカトニツク王国にかつて仕えていたことがある。そこのお姫様は、第二の方だがな、どうしようもない。自分勝手に身勝手に、世界が自分を中心に回っていないと気がすまないような奴だ。短気で頑固でどうしようもない」

それでもどんないところがあるのだろう。

「だが、それを可能にする権力を持っているからまったくもって始末に終えない。おまけに……」

「いつまで続くのよ、悪口!?!」

予想を裏切られたことの苛立ちも混ざって、つい怒鳴ってしまった。女性が少し目を細くしたのは、悪口をまだまだ言い足りていないということだろうか。

「そんな姫様がお前たちを、この世界を救いたいと心底願ってる。たとえ誰に邪魔されても、どんな障害があってもだ！」

女性の目から自信に満ちた輝きはまったく損なわれてはいなかった。

「古龍がいる。だから何だ？ そんなことであのセントポリア王女が大人しく引き下がるわけがない。絶望的な状況。そんな生半可なことであの小娘の決意を変えられるなら誰も苦労なんてしてない。諦めるなんて死んでからでも出来るだろ！ 私はあのおてんば姫を説得することは諦めた。だからお前たちは諦めるな！ セントポリア王女は、赤眼の魔女は必ず来る！」

どこにそんな根拠があるのだろうか。どこにそんな保証があるのだろうか。本当に教えてもらいたい。そうでなければ、この女性がどうしてこんなに揺らくことない意志で言葉を伝えられるのかわからない。この女性は本当のことを言っていることに証拠なんて一つもなくて、それでも、この人が嘘をついているという証左は、説得力を持ちそうにない。この人のお姫様への信頼を打ち崩してくれるほどの事実を提示できそうにないから。

この人は本当にお姫様のことが嫌いで、大嫌いで、その嫌いな部分は、嫌いだからこそ良くも悪くも信じているのだろうか。一度会ってみてみたい。これほど嫌われて、それでも人に信頼されずにはいられないお姫様に。

女性は何かわかったように息を吹くと立ち上がった。顔に、もう少し、生きてみようと考えたのが出ていたのだろうか。もう死ぬつもりはないようだ判断されたい。抜き身のナイフを、女性は、女性もあろうにエリスの傍に放り投げた。

「これは返しておくぞ、エリス」

「どうして私の名前を？」

女性はやはり嘆息してナイフを見下ろす。そこには、柄の部分に書かれた名前があった。このナイフは子どもの頃、いたずら書きをしてそれを切っ掛けにいただいたものである。決して、今もなお持ち物に名前を書いているわけではない。

「子どもじゃないんだ。持ち物を名前を書くのはやめておけ」

「ちよっ！」

その言い方では誤解されてしまう。抗議しようと思いをあげたが、その時にはすでに気力なくうつむいているはずの人たちから小さな笑い声が漏れ聞こえていた。

二隻に減ってしまったグツフルファクシ級飛行船の追跡などないかのように、王龍テラドミヌスは悠然と砂の海を泳いでいる。

存在があまりに大きく、人など眼中にないのだろう。しかし、その存在の大きさ故に、人にとって危険であることに変わりはない。

グツフルファクシ級の甲板から見下ろす二人。特務騎士であるジエイナスと、七人の魔女であるソフィア。古龍が持つ猛毒、龍毒がキャラバンを跡形もなく消滅させる光景を目の当たりにした二人も、見下ろす視線に特別怒りを含ませてはいなかった。

漆黒の重厚な光沢を持つ甲殻は美しくさえあった。その圧倒的な力には憧れさえ感じていた。

人が決して手の届かない次元に住む王に対する畏敬の念さえ覚える。まるで手が届かないが故に、現実ではないかのように、目の前の光景は美しい。

「もう、票決はとつくに終わっているね」

「うん。姫様なら、きっと結果がどうであれ来ると思っよ。でも、もし会議の意向を無視するなら、さすがにミスカトニツクの旗を掲げることとはできない」

ソフィアは一度王龍から目をそらし、隣に立つジェイナスの顔を見る。

「知ってるかい？ ミスカトニツクの旗はね、三代前の国王によって決められたんだけど、ミスカトニツクの秘密主義を揶揄してるんだってさ」

その視線を受け止めるジェイナスの脳裏には、特務騎士に任命された際に目にした旗が浮かんでいた。

旗に大きく描かれた三日月の印。その白の鮮やかさと、そして、影の部分に鮮明な黒で施された刺繍があったことが印象的であった。

「確か、三日月だったよね？」

「三日月は、全体を見せているようで、実は影の部分を隠して見せ

ていない。そういってほしいよ」

もう一つは、月の外形を誰もが知っていて、影があったとしても影があることを人は知っている。ミスカトニック王国が多数の機密を保有していながら、そのこと自体公然の秘密として存在していることをともに皮肉っているのだそうだ。

「ちなみに、シュレイド王国は盾と槍が旗に使われてるよ。こちらの意味は知らないけどね」

恐らく、目にすることはない旗である。

太陽が山のドリームランド峡谷の山々に沈もうとしている。夜が訪れることは太古の昔からの約束ごとである。しかし、救援が、古龍との戦いは果たしてどうであろうか。票決が終わり、仮に迎撃案が可決されているとすれば、逆算して明日にでも救援はセクメーア砂漠を訪れる。

「もしも、明日セクメーア砂漠を訪れる飛行船に三日月の旗がなければ、僕たちだけでも戦わなければならなくなる。覚悟はいいかい、ジエイナス？」

「僕が古龍と戦うのは仇を討ちたいからだよ。そして、古龍が人を襲う限り、その条件は充足される。願ってもないことさ」

すべては明日の朝日とともに明らかとなる。

船が、果たして三日月の旗を掲げているのか否か。そんな些細な違いがレムリア大陸の、世界の運命を決定づけようとしていた。

そして、人々は目にするようになる。先陣をきつてセクメーア砂漠に駆けつける飛行船に、三日月の旗がはためいてはいることを。



### 第一三話「人の力」 Kingdoms」

セクメーア砂漠の夜が明けた。遮るものを持たない砂の原に陽光が燦々と降り注ぐ。暖められた大気が膨らみ、生じた風が砂を転がす。自然はひどく無神経であった。ここで何が起きていようと、これまで幾度となく続けてきた日課を変えようとはしない。

嘆いてなごくれない。憐れんでなごくれない。

自然は、大地は命に何の憐憫も示さないのだ。では、命が大地に遠慮をなくしたとしても、それは仕方がないことではないだろうか。

戦いを始めよう。嵐を裂いて、山を砕いて、炎が悲鳴を上げ、大地を打ち砕くほどの戦いを。

西からは古の主の群。それを人は古龍と呼ぶ。

東から舞い降りる飛行船船団。その先頭に行く船には旗が揺らめいている。

王国の秘密主義を擲掄した三日月の旗ではない。

それは強靱な槍。王国の力を象徴する。

それは強固な盾。王国の守りを堅持する。

槍と盾とが描かれた戦旗は、レムリア大陸最大の里であるシュレイド王国の旗である。

最もテラドミヌスに対して消極的であった国の旗である。

戦いの始まりを示す旗である。

シュレイド王国グングニル級機動要塞グングニル。

まさに空飛ぶ城である。大型の船を二隻並べた双胴船を巨大な気球が空へと浮かべている。船体側面には多数のスリットが並び、数え切れないほどの大砲、バリスタが甲板にまで搭載されていた。一般的な戦闘用飛行船であるグツフルファクシ級の三倍を優に上回る巨大な船は、神槍の名にふさわしい。

避難民の誰もが上空を見上げた。その船の巨大さ、そして、何よりの王国が救援にかけつけたという事実が人々の間から一斉に歓喜の声を上げさせる。

その声は遙か空、グングニルのブリッジにまで届くことはない。そして届いたところで、グングニル級艦長は特段の感慨を示すことはないだろう。

ブリッジは二隻の船の連結部分に設置され、何人ものクルーが冷然たる面もちで持ち場についていた。ひどく広いブリッジの最奥、最も高くなった場所に艦長は座っている。

瘦せた、初老の男である。かけられた眼鏡の奥のくぼんだ眼孔は気むずかしさをたたえているかのようである。文官であるディオニユス次官の方がよほど武官らしい。そんな印象を誰しにも与えることだろう。同時に、隙というものを見せようとしなない、そんな張

りつめた空気を纏っていた。

グングニル級艦長であるヘリオス騎士団長であった。

「六時の方角より古龍を確認。数、約三〇！ 炎王龍です！」

双眼鏡を構えたクルーが甲板に立ち、その情報は即座にブリッジへと送声管を伝って届けられる。声を張り上げたのは、その連絡を受けたクルーである。

ヘリオスは眼鏡を指でなおす。それで何が変わるということはない。未知の敵に挑もうとしているヘリオスは、何ら変わった様子を見せない。

「推力三〇を維持」

「推力三〇維持！」

「総員、第2種戦闘配備から第1種戦闘配備へ移行」

「第1種戦闘配備に移行！ 了解！」

騎士団長の指揮を、クルーが復唱を続けながら次々と艦内へと伝えていく。俄然慌ただしさを増す艦内では、巨大な矢、一抱えほどもある大砲の弾を持ったハンターたちがそれぞれの持ち場に張り付いた。

ブリッジの窓から徐々に大きく、その赤い姿を人目にさらす古龍の群が見えている。心なしか、クルーの緊張は高まりを見せ、その中で唯一、ヘリオスだけが瞬き一つない。

クルーの手が、時折動く。早く動かなければならない。しかし、命令は出ていない。そんな葛藤がわかりやすく現れていた。

炎王龍テオ・テスカトルがその沈んだ紫の皮膜が張られた翼を一杯に広げ押し寄せていた。三〇という数の報告は、しかし、いざこつとを構えるとなると誤って思えてくるものである。

まるで、尽きることない軍勢が押し寄せてでもくるかのよう。

「戦闘開始」

前触れなく、静寂に沈みきったブリッジにヘリオスの声が響いた。

しばしの静寂。

「戦闘開始！」

「戦闘開始！」

「戦闘開始！」

飛行船にとって、艦長とは脳であり、クルーとは神経である。命令は即座に艦内すべてに伝えられ、手足たるハンターたちは決然と動いた。

バリスタが一斉に放たれる。矢は、まずは先陣をきるように先頭を飛行していたテオ・テスカトルの顔面をとらえた。強固な装甲はそれだけでは破壊できない。しかし、膨大な運動エネルギーを矢尻の一点に集中され、古龍はついうめきバランスを崩した。その隙に

次々とバリスタが弾かれながらもテオ・テスカトルに確かなダメージを与えていく。古龍は意識を失ったかのようにきりもみしながら落下していった。

大砲がうなる。バリスタと違い、射角に制限の多い大砲は、その多くが飛来する古龍の群を縫うように彼方へと飛び去ってしまう。だが、その弾幕たるや分厚く、顔面を直撃された古龍が飛行するもままならず、火竜の翼膜で守られた気球に激突してあらぬ方向へと落ちていく。

各国が一隻ずつ保有する大型飛行船の中でも最大の攻撃力を誇るグングニル級の圧倒的な攻撃力は古龍さえ寄せ付けることはない。

「古龍と言えど、このグングニルの攻撃力の前には無力と見える。一気に畳みかける」

「了解！」

ヘリオス指示の下、グングニルは古龍の海を割るが如く悠然と突き進む。

「こんな化け物に人々を蹂躪させるわけにはいかないのでな」

グングニル級機動要塞グングニル。シュレイド王国の力と守りを象徴する最大の戦艦である。

ミナガルデ王国フギンムニン級大型輸送船フギンムニン。

ミナガルデ王国は、凡庸な国であると言われている。シュレイド王国ほどの力もなく、ミスカトニック王国ほどの情報機関を有してもいない。そして、地理的にはドンドルマから近くもなければ遠くもなく、何から何まで中途半端な国であるのだと。

会議においても、シュレイドほど消極的でもなければ、ミスカトニックほど積極的な活動をする事もなかった。

しかし、それは裏を返せば、如何なる事態に陥ろうとも対処できるとの自信の現れでもあった。

ミナガルデ王国の力とは人である。シュレイドのように戦いに特化した人々ばかりではない。ミスカトニックのように優秀なハンターを多数抱えているわけでもない。しかし、あらゆる層の人材というものを、ミナガルデは有していた。

人こそが力である。

ミナガルデの意志を、フギンムニンは体現する。

それは奇妙な形をした飛行船であった。大きさこそグングニル級にひけをとらないが、その形状たるや、まさに円である。丸い、独特の船体を気球がつり下げていた。どちらに進むことも出来ない、そして、どちらにも進むことができる形をしている。

フギンムニンの船底から次々と小型の気球が落下する。その行き先は砂の大地。嵐を抜けてきたせっかちな風翔龍が今にも人々に襲いかかるうとしている現場であった。

着地した気球からは別々の装備をしたハンターたちが次々と降り

ては古龍と人々の間に割って入る。

シュレイド王国のグングニル級ほどの戦闘力はない。ミスカトニツク王国のスレイプニル級ほどの速度を出すこともできない。その代わり、搭乗できる人員数では群を抜く。人材の豊富さこそがミナガルデ王国の力であるのだから。

艦体に合わせて円形をしたブリッジではクルーが降下部隊との連絡に忙しい様子で動き回っていた。しかし、その中央、手持ちぶたさで、時間を持て余しているようにさえ見える男が座っていた。

すでに二〇代後半の男性で、決して若造と言える歳ではないが、おどおどと周りをうかがう様子は、何とも若造との誇りが似合う男である。名はマルス。ミナガルデ国王の実弟としてフギンムニン艦長を任せられることになった男である。

「一二部隊まで降下、無事完了！」

クルーが報告のために声を張り上げると、マルスは萎縮した様子でかろうじて声を絞り出した。

「よ、よし、じゃあ、次だ。次を頼むよ」

「第二次降下部隊、用意！」

よりの確な命令を出したのは、座るマルスの横に立つ一人の少女であった。まだ二〇歳にもなっていないだろう。あま色の長い髪を束ねる髪留めにはかわいらしさがかがえる。子どもと女性の間にとどまっている愛らしい様子からは想像できないほど、声には芯が通り、クルーたちの視線はこの少女へと向かっていた。

マルスの妹であるこの少女の名はウエヌス。そして、フギンム二  
ンの実質的な艦長である。

「第二次降下部隊用意！」

クルーが艦長であるマルスではなく、何の役職にもないウエヌス  
の指示を復唱する。

マルスはそばにたたずむ妹の姿を盗み見る。しかし、ウエヌスは  
そんなことを気にした様子もなく、指揮に集中している。

「ハンターどもには熱くならぬよう言っておいてくださいな。ここ  
で徒に戦力を消耗してしまえば、戦後の主導権争いに不利になりま  
すもの」

ミナガルデ王国フギンムニン級大型輸送船フギンムニン。ミナガ  
ルデ王国の思想と力を体現する戦わぬ戦艦である。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動戦艦スレイプニル。

神馬の名にふさわしい優雅な船であった。船体には各所に装飾が  
施され、推進器の形にまで意匠が意識されている。儀礼船のように  
その船は、その一風変わったフィギュア・ヘッドを備えている。

女神でもなければ彫刻でもない。希望でもなければ絶望でもない。

それはメイドである。赤を基調とした制服に、白いエポロン。そ



れは血の通った一人の女性。希望のように儚げで不確かなものではなく、絶望とは無縁。

スレイプニルの船首には、メイドが一人、風を受けながらその眼は乾いた大地を見下ろしている。

そして、ブリッジでは王女が語る。

グングミル級ほどの攻撃システムもなく、フギンムニン級ほど大勢の人員を統制する必要もないブリッジは、決して広くはない。

艦長席にはドレス姿のセントポリア王女が座り、クルーはわずか五名。デザインこそ統一されながら、それぞれが白、黒、青、紫、桃色と異なった色をしている。そして、皆が若い女性である。

クルーたちは不必要なほど注目はしていなくとも、セントポリア王女の言葉に耳を傾けていた。

「私は、光と喧嘩別れして生まれてきた」

その大きな瞳は赤い色を示している。その肌は日の光を浴びたことがないような、異常な白さをしている。まるでお人形のような愛くるしい姿をしておきながら、その目つきはすこぶる悪い。

「だから何？」

ドレスを、その雰囲気全台無しにしているという意味で、まるで平服のように着こなす。

「私はここにいる。一人のハンターとしてここにいる。みんなと何

も変わらない。古龍、こんなとんでもない災害を前に奮起して、武器を取り立ち向かうと決めた大勢の中の一人に他ならないから」

しかし、スレイプニル級を与えられたのは王の娘として生まれたからにすぎない。それを、セントポーリアは、もはや負い目とは感じてはいない。

「私は、ミスカトニック王国王女として生まれた。だから何？ 人々を、里を、命を守りたいと考えていることに変わりないでしょ！ 七人の魔女の一人なんだから！」

言葉は次第に熱を帯び、王女は立ち上がる。

「戦いなさい！ そのすべてをにかけて戦い抜きなさい！ 私もみんなと共に戦う！ だから、みんなも私と一緒に戦って！」

その赤い双眸はブリッジを抜け、日の沈む方向にあるセクメーアの砂漠へと向けられている。その先にいるはずの王龍テラドミヌスと睨み合うかのよう。

「ミスカトニック王国第二王女セントポーリアの名において特務騎士に命じます！ 剛種武器の使用を許可する！」

姫の言葉は、七人の魔女たちへと届けられた。

神速の魔女はまるで歌っているあのような声でその喜びを示した。その足は早足となってグッフルファクシ級の廊下を進む。その先の武器庫を目指して。

その喜びを共有するのはジェイナス。ソフィアのすぐ後ろを、同じくらいの早さで歩いている。

「どんな手品を使ったんだろうね、姫様は!？」

喜びを隠しきれないといった様子でジェイナスの頬は緩い。

シュレイド王国もミナガルデ王国もセクメーア砂漠にかけつけてくれた。それは、不利であったはずの会議が、ミスカトニツク王国支持でまとまったことを意味している。

まさに大逆転である。それこそおとぎ話の魔法でも使ったみたい

に。  
「わかるもんか。でも、これで戦えるんだってことくらい、僕にもわかるよ!」

人は、古龍と戦うことを決めた。

「団長!」

ヒミンブリユード級の甲板で、冷静沈着なエールが押さえ切れないといった様子で声を上げた。背中を向けているため顔は見えないが、どれくらいにやけているかくらい想像がつく。

剛腕の魔女の目には、古龍の群をもともせず突き進むグングニルの勇姿が映っていた。

どういう訳かは知らないが、あのわがままな姫様がしてくれたらしい。そして、待ちに待った武器の使用許可が出た。

フィリアから自然と笑い声が漏れる。これで、好き勝手にしてくれた古龍どもに一矢報いてやることができる。

「ようやく、あれの出番だな。エール、ヒメロSFを出せ！ 呑竜の双剣もだ！」

剛種武器。人が、古龍と戦うために生み出された兵器たち。

「まさかこれを使うことになるとは思いませんでした」

鎖で厳重に封印されている箱の前に、結界の魔女は小さくささやいた。宝箱を思わせる重厚な作りの箱から、鎖を一つずつ外していく。

手伝うではなく、その様子を眺めているだけのシギユンはすねたように口を尖らせていた。

「私はもらえませんでしたけど……」

「そう気に病むことはありません。剛種武器を与えられたのは、七人の魔女を除けば特務騎士の中でも数えるほどです」

答えながらも手は止めない。スノードロップは淡々と鎖を外していく。シギユンが興味深げに箱の様子を覗き込んでいることは気配

と、何より音で発することができる。

「それほどの、武器なんですね」

「ええ。あのセントポリア王女でさえ、使用を制限せざるを得なかったほどのものです」

事態は、それほど逼迫していることを意味している。

朝日を浴びる砂漠を見眺めながら、メイドは船首にたたずんでいた。

赤いメイド服に染みのついたエプロン。その顔には微笑みが張り付いている。

そしてその眼は、凶眼と呼ばれる力を秘めている。

「セントポリア、これからが本当に大変ですよ」

その名はアマランス。メイドであり、セントポリア王女から凶眼の魔女と呼ばれ、全幅の信頼を受ける七人の魔女の一人である。

第一四話「お姫様とメイドさん〜Bonds〜」(前書き)

また、新しく二名ほど登場人物が増えます。

## 第一四話「お姫様とメイドさん」 Bonds」

講義堂へと通じる階段が長く伸びる。評決は終わり、まもなく結果が公表されることだろう。下馬評は、王龍に対して特段の処置を行わず、復興に尽力する決定が下されることである。

セントポーリア王女はたとえどのような決定が出ようともセクメーア砂漠へと向かうだろう。そう、アレスは確信していた。

階段下の長い廊下の脇に、アレスは他の特務騎士ともい立っていた。何もできることがなく、ただ待つことしかできないが故の緊張感が漂う。廊下には他にも代表の付き人と思われる人々がアレスたちと同じように壁際に固まっていた。誰もが落ち着かない様子で体のどこかしらを動かしているのに対して、誰も一言も発しようとならないのである。

やがて、リズムよく階段を降りてくる足音が聞こえ始めた。自然と、皆の視線は階段を見上げることとなる。

降りてきたのは男性であった。小太りの初老の男性で、この手の男はまじめだがどこか間が抜けていると相場が決まっている。案の定、男は階段の最後の最後で危うく躓きかけ、結果を待つ人々を余計にやきもきとさせた。

「では、結果をお知らせします。投票総数二九七。有効票二八二。王龍迎撃案、賛成二〇一、反対八一。よって、可決されました」

一斉にごよめきがたったの言うまでもない。

予測では反対が賛成を大差で上回るとされていた。想定外の事態に、誰もが戸惑う他ない。仲間と顔を見合わせ、誰か答えを持っているであろう相手を探して、そして見つからないと諦める。その繰り返しである。服のすれる音。足の位置を変える音ばかりが響く。誰も何を話してよいものかわからないのである。

そんな緊迫した空気をもともしない鼻歌が、長い廊下の端からゆっくりと浸透してきた。続いて聞こえるのは首を回す音。

誰もがメイドを見ていた。

赤い制服に白いエプロン。重苦しい空気などもしない柔らかい笑顔を浮かべたメイドが軽快なリズムを刻みながら廊下を歩いていた。メイドが歩くにつれ、人々の首がおもしろいように一斉に回る。

メイドはアレスたち特務騎士の前に来ると、スカートを摘んで回ってみせる。このメイドのかわいらしさに、アレスは渋い顔にならざるを得ない。

「どういうことだ、アマランサス？」

特務騎士であり、七人の魔女の一人にも数えられるメイドは、いたずらっぽく笑う。

「きつと、皆さん危機意識を持ってくれたんですよ」

これで、このメイドが何かしたことは確定である。

「お姉様……」



見ると、スノードロップが顔にハンカチを当てて泣いていた。シギユンは驚いた様子であったが、アレスを含む他の特務騎士は慣れたものがある。スノードロップは、アマランサスの顔を見るといつも泣き始める。かつて凜々しかった姉のことが思い出されてならないのだそうだ。

「スノードロップ、私の顔見るなり泣き出すの、そろそろやめましょね」

首を傾けての明るい一言。スノードロップは、より一層泣き出してしまった。

この姉妹のことは放っておくことにする。もう三年も前から何も変わっていないのだ。今更どうなることでもない。

「アマランサス、今までどこに行っていた？」

これは、聞くまでもない問いであったのかもしれない。

廊下が一気に慌ただしくなる。評決を終えた里の代表たちが講義堂を後にしようとしていた。

まず最初に通り抜けた一人が頭を下げてアレスたちの脇を通り抜けていった。ずいぶんと礼儀正しい人物のようだが、それにしても他の人に礼をしている様子はない。続く一人もやはり、何故かアレスたちにだけ頭を下げる。

そして、全員がそうしているわけでない。だいたい二、三人に一人の割合でそんな奇妙な様子が続いた。そして、一人の男性が足を

止めた。

見事に禿げ上がった頭と、それにも増して年甲斐もなく並ぶ白い歯が眩しい。アレスの知らないこの男は、明らかにアマランサスを見ていた。

「これで、王女様も心おきなく戦えますな」

「ありがとうございます、村長さん」

「いえ、これでご恩を少しでも返すことができたならおやすいご用です。それに、我々としても古龍を危険視していますのでね」

短いやりとりを終えると、男はすぐに退場者の列に戻っていた。

その間にも頭を下げる人は続き、そしてすぐに次の人物がアマランサスに声をかけた。

次は女性である。背が高く、服の上からでも鍛えられた体つきがわかる。

「あなたとはまた狩りに行きたいものです。まさかミスカトニック王国の特務騎士とは知りませんでしたか」

「ただのメイドではないとは、わかっていましたか、まさかこのような大事に関わっているとは」

三人目は、残念ながら少し声をかけただけのようで、その姿を確認することはできなかった。

だが、そろそろアレスにも種がわかってきた。

姿を見せなかったアマランサス。そして、アマランサスと面識のある里の代表たち。

「要するに、お前が各地回っていた時のつてを利用して裏工作を画策した訳か」

睨んでやったところで、このメイドがその程度のことでは動じることがない。胸の前で合わせた手を斜めに傾ける、そんないつもの仕事をしながら、やはりその顔は笑っていた。

「人聞き悪いですよ。私はただ、人知れずいろんな人に古龍って怖いんですよ」って教えてあげただけです」

「それを裏工作と言うんだ」

まったく、アマランサスはすぐにセントポリアを甘やかそうとする。そんなことばかりしてはセントポリアのためにならない。顔に手を当ててあの小娘が増長していく様子を頭に思い浮かべる。

そうしているうちに、もう一つの悩みの種が水と肥料を背負ってやってきた。

「ようアマランサス姉ちゃん！」

人々を押し退けるように現れた男は、まだ少年である。ボサボサの金髪頭に、軽薄そうな笑みが張り付いている。どこかで聞いたことのあるような声で、どこかで目にしたことがあるかのような男である。だいたい、去年の繁殖期と温暖期との境目であっただろうか。

アレスが樹海に面するンガイ村を訪れた時、ちょうどこんな若造が何かと足を引つ張った記憶がある。

どこにでもいそうな若造である。そう、自分を騙しきることは、アレスにはできなかった。

「ヴァルカンか！？ どうしてお前がここにいる？」

胸ぐらを掴みあげる。身長差から、軽くつり上げられる形になっているにも関わらず、ヴァルカンの鼻息は荒い。

「俺、ンガイ村の村長の息子だぜ。母さんが今動けないから代わりに来たんだよ。まあ任せてくれ。ンガイ村は全面的に協力することを約束するさ」

状況がまるで見えていない。これが今時の若者というものであるうか。ヴァルカンは目の前で睨みつけるアレスを無視して、アマランサスに手を振っていた。このヴァルカンも、アマランサスに甘やかされた一人である。

「ヴァルカン、立派になりましたね」

「だろ。もつと言ってくれ」

「図に乗るな！」

頭を軽くこずくと、ヴァルカンはカエルのような声をあげた。

評決が終わり、講義堂からは徐々に人の姿が減っていく。セントポーリアはその中央でどこか夢でも見ているような心地でその様子を眺めていた。

結果として、ミスカトニツク王国の大勝である。こんな結果は予想していなかった。本当は負けたら負けたで、ディオニュソス事務次官との約束なんて無視してセクメーア砂漠に乗り込むつもりであった。

事態が好転する材料なんてないはずである。その原因を考えてみると、ふと思いついたのは、思いもかけない材料をどこからともなく持つてくるとあるメイドの笑う顔。

「どうやら、そういうことであるようだ。」

ディオニュソス事務次官が苦笑いを浮かべながら歩いていた。セントポーリアは一段高い場所にいるが、座っているため、その目線の高さはさほど変わらない。

「姫様は、優秀な部下をお持ちですな」

皮肉ではなかった。アマランサスの暗躍を確信するとともに、かえって気恥ずかしさを覚える。そんな裏工作を笑って受け入れることができるディオニュソスの度量を見せつけられてしまったからだ。

「ちょっと優秀すぎるかな……？」

アマランサスは一言の相談もなく、しかしセントポーリアが望む成果を挙げてしまった。文句を言おうにも言えない。あのメイドは、出会った時から捉えどころがない。それでも、お礼くらいは言っ

おこつ。小さく笑つて、セントポーリアはそう心に決めた。

ヴェール越しとは言え、そんな顔をつい見られてしまったのも、気恥ずかしさを覚える理由であるのかもしれない。咳払いして、とりあえず誤魔化しておく。

「ところで、例の約束の件ですが」

ハンターたちがよく利用する酒場で交わした約束。それは、票決の決定が出たならそれがどのような結果であれ相違と認め、その決定に従うというもの。このことを思い出しながら、セントポーリアは口元に手をやった。わからないことがある、そんな時に人がよくする仕草である。

「失礼ですけど、事務次官に政策方針を決定する権限があるようには思えません」

ディオニュロス事務次官は、また苦笑いをしながら首を振った。

「実は、すでにミスカトニック王国との話はついています。票決の結果、迎撃が決定したならこれに全面的に協力する。すでに本国では準備が進められています」

「どうしてそんな……？」

シュレイド王国は反対派の急先鋒である。その国が準備を進めているなど、考えてもしていなかった。

「あなたのお姉様が掛け合われたのです。我が国としてもいくら国王が世襲制ではないとは言え、次期国王の呼び声高いお方に恩を売

「つておくことは悪くないと考えたのでしよう」

脳裏を吹き抜けた言葉が想起するのは麗しい女性。その姿を思い浮かべただけで甘い香りが微香をくすぐる。そんな、花のように優しく美しい姉の姿である。

セントポリアがどれだけわがままを言っても優しく微笑んでくれた姉は、人知れずセントポリアのために働いてくれていたのである。

姉とメイド。セントポリアがどれほどの人に支えられているのか、思うとそれだけで胸がいっぱいになる思いがした。

「お姉様……、アマランサス……」

感謝の念に胸元に手を当てるセントポリア王女を微笑ましく見やりながら、ディオニュソスは恭しく頭を下げる。

「シユレイドは、ともに並び戦うことをお約束いたします」

「ありがとうございます、ディオニュソス次官」

わがまま、身勝手、そう酷評され続けるミスカトニツク王国第二王が素直に感謝することができたのも、そのように支えてくれる人々のおかげであろう。

「いえ、私はあくまでも使者にすぎません。お礼なら我が主として、あなたの姉君に」

票決を受けて、流れは一変していた。里、ハンターズギルド、象牙の塔。人の生活の最大単位であるこの三大勢力の内、ギルドは元々協力的であり、里はその総意として王龍テラドミヌス迎撃を決定した。

残るは象牙の塔である。三権の内、立法を担当する象牙の塔はそれだけ法と秩序を重んじる。裏を返せば、それだけ先例と規律に縛られ動きが鈍いことを示している。

セントポリアが乗り越えなければならぬ最後の壁である。

講義堂を離れ、ホテルの一室に移っている。セントポリアだけが座り、ほかの特務騎士はローブ状の制服を着たまま アマランサスは例外である セントポリアを囲んでいる。

特務騎士の主で王女は、すこぶる機嫌が悪かった。せつかく票決の時に感じた喜びも、今手にしている報告書を眺めれば眺めるほど、眉間に皺が寄る。

古龍が退去して人々を襲っている。これまで古龍が群をなしている様が目撃されたことはない。それどころか、目撃情報はこの五〇年ではんの二〇例ほどなのだ。それこそ、この十倍、五〇〇年分の遭遇が一度に集中していることになる。

まさに五〇〇年に一度の異変が起きているということなのだろう。

「票決で過半数を大きく超えられたのはよい傾向です。これなら象牙の塔を揺さぶることができます」



頬に冷や汗を浮かべているのはフィロソフィア。せつかくの決めたお化粧が台無しになってしまわないか心配だが、この気苦労の絶えない魔女にとって、そんなことよりはセントポーリアが気分を悪くしていることの方が深刻と受け止めているのだろう。

そんな努力を嘲笑うかのように声をとがらせているのはアレスであった。少しは痛い目を見て態度を改めるきっかけになるでも期待していたのだろう。

「だが、時間をかけるわけにもいくまい。セントポーリア、今度こそ、誰もお前を甘やかしてはくれないぞ」

あてが外れた八つ当たりをするなんてみっともない。そもそも、そんなことで変われるなら一五年もわがまま王女やってない。

「うっさい。早く書記長を呼んで」

メイド服のままのアマランサスが、やはり笑顔のまま扉の方へと歩いていった。

象牙の塔の代表者は一癖も二癖もある男性であると聞いている。その噂は特務騎士たちも聞いているらしい。妙に神妙な面もちで扉をうかがっている。

別に荘厳でもなければ重厚でもない扉が、笑うメイドの手によって開かれる。招き入れられた人物は、静かな表情をたたえていた。

癖毛一つない長い髪はくすみのない金。整った顔は精悍さを伴い、男を若くとも凛々しくとも見せていた。

セントポーリアはこの男を知っている。

思わず立ち上がったのは驚きと、それ以上に、この人の前で座っていることは畏れ多いという意識故。セントポーリアが知る中では、アレスに次いで背の高い男は、近寄るなり、その細く大きな手で頬を優しく撫でた。

「寒くは、ないか？」

「あ、ありません……」

「そうか。では、暑くは、ないか？」

「ありません」

ゆったりとした口調と落ち着いた態度は雄大という言葉がとてもよく似合う。

「では、足が疲れているのではないか？」

返事をする前に男はセントポーリアを軽々と抱き上げた。照れるセントポーリアのことを抱き寄せたまま、先程まで王女が座っていた椅子へと腰掛けた。

「お、降ろしてください。セントポーリアはもう子どもではありません、せん、お父様！」

「お、お父様!?!」

驚きの声を上げたのは、シギユンだけであった。結構格好がよくて、少しなれなれしくて、周りの特務騎士がそろって戸惑っている男の正体に驚いたのはただ一人であった。

「そつだ。この方が、現ミスカトニツク王国国王にして我らがお仕えするハデス陛下だ」

隣に立っていたアレスがそつと耳打ちしてくれた。せつかくの気遣いではあつたが、男性が国王陛下であるとわかつた途端、ついでが固くなってしまった。敬礼すべきか頭を下げるべきか、わからず泳いだ視線を陛下に見つけられてしまった。

左手はしっかりと娘であるセントポリア王女を抱きながら、右手を軽く上げてシギユンを制する。

「よい。楽しんでもらいたい。私は、娘の前では国王ではなく、一人の父でいたい」

「どう見ても、普通のお父さんには見えません」

聞こえないよう小声で。

陛下は顔を真っ赤にして普段からでは考えられないくらいしおらしい王女を膝に乗せたまま、不自然なくらい冷静な表情をしている。

「実際、セントポリアは陛下の過保護に反発していたようなものだからな」

「そ、そうなんですか？」

「病的なまでに甘やかしていなければ、わずか一五の小娘に古龍観測隊の責任者を任せるはずがないだろう」

アレスの言葉には妙に納得してしまった。つい、相づちを打ってしまう。

そんなシギユンの一挙手にハデス陛下は気づいた様子は一切見られない。何故なら、娘の顔を眺めはじめてから一向に顔を上げるそぶりがないのである。端から見ていると、まるで恋人の憩いの一時にしか見えない。

「その、お父様、どうしてここに？」

「父が娘の顔を見に来るのに、理由は必要とされない」

驚愕すべきほど、あのセントポーリア王女がいじらしい。

「何だか、見ているとドキドキさせられるんですけど……」

「陛下に一般的な感性を期待するな。あれで親子の触れ合い程度にしか考えてやしない」

特務騎士たちの戸惑いの正体がわかった気がする。

ただ、その中でアマランサスだけはさすがと言うほかない。まるで動じることなく平静、かどわかにはわからなくとも普段と様子が変わらないのだ。

「陛下。でも、今日ここに来たのは理由がありますよね」

アマランサス特務騎士の一声にも、ハデス陛下は娘の鑑賞を続けたまま、顔を真っ赤にしたセントポーリアを思う存分堪能している。「象牙の塔とは話をつけておいた。セントポーリア、ぞんぶんにやるといい」

気恥ずかしくて親子二人の様子から目をそらし気味であった女性陣でさえ一斉に陛下のご尊顔を拝そうと首を動かした。もっとも、娘に必要な以上の熱視線を送る父親以外の何かが見えたわけでもないのだが。

「機密情報をレベル二までの公開と引き替えにしてある。古龍に関する知識の大半だが、娘のためなら安いものだ」

「何だか、髪の毛の触り方がいやらしいです……」

手がセントポーリア王女の白い髪を梳いている。その仕草は丁寧に優しい手つきである。その指が髪を撫でる度、王女の頬が赤く染まっていく。

それでも、ハデス陛下はあくまでも父親であった。

「アマランサス。娘を頼む」

「もちろんです、ハデス様」

アマランサスは満面の笑みを浮かべたまま、二人の主へと深々と頭を下げた。

セクメーア砂漠。ドンドルマの街の南西に位置するこの場所は、あくまでも生活の場であり、狩猟の場の一つでしかなかった。

三日月状に連なる山脈に囲まれ、海から完全に隔絶されたこの乾燥した大地は牢獄である。空立ち上る雲さえ山を越えることはできない。空飛ぶすべを持たぬものにはなおのこと。

ここは牢獄であり、そして、レムリア大陸の二つの力が、そのすべてを集結してぶつかり合う戦いの舞台である。

ここはセクメーア砂漠。すべての始まりと終わりが集う場所。

第一五話「七人の魔女」Seven Sisters」（前書き）

今回の話は一万字超えの最長です。

## 第一五話「七人の魔女」Seven Sisters」

七人の魔女。

この言葉が示す意味は二つ存在する。

雪深いセイレムの里は、長年にわたって悪魔と呼ばれる古龍の襲撃にさらされてきた。悪魔は狡猾にして残忍。弱い獲物を、孤立した獲物を優先的に狙ってきた。そのため、大部隊を組織することに意味はなく、里一番のハンターがたった一人で迎撃する他なかった。里を手薄にせず、そして悪魔を追い返すことができる可能性が最も高い選択である。

そして、それは同時に最も危険な方法でもあった。

優れたハンターであろうと、一人で悪魔に挑むことは危険極まりない。それが、セイレムの魔女として知られるほどに優秀な女性ハンターであつたも変わることはない。

魔女は一人、また一人と命を落とす。悪魔が襲撃してくる度、魔女たちはその命と引き替えに里を守り通したのである。それが、七度続いた。よって、亡くなった魔女は七名。よって、七人の魔女。それは、里を守るために戦い散った七人の魔女のことである。

そして、ミスカトニツク王国にも七人の魔女が存在する。わがままな姫君が優れたハンターを集め作った精鋭たちのことを意味する。

どちらも女性七名で構成されていること、そして何より、人を守ることを至上とする志において共通している。



七人の魔女とは、古龍と戦い、古龍から人々を守ることを誓い合った、七人の女性のことである。

真っ赤なドレスで、フィリアは踊る。パートナーは業火を吐き散らす炎の古龍、炎王龍テオ・テスカトル。その手には絹で作られた純白の手袋ではなく、反り返った刃を呑竜パリアプリアのぬめった皮で支える双剣が照りつける太陽を弾き返す。

赤い、赤いドレスは、魔女としてのとっておきの衣装である。意匠は完全にドレスでありながら、その材質は強化で堅牢、鎧として機能する。

ヒメロスF。

艶やかなデザインと性能を両立させた、七人の魔女が身につけることを許された最上の礼服に身を包み、フィリアは双剣を振り回す。頭にはピアスをつけただけであり、その様は優雅とさえ映る。

意匠と相俟って、踊っているように見えるのだ。

「さあかかってこい！ 貴様等が啜った血をすべて吐き出させてやる！ この剛腕の魔女、フィリアがなあ！」

双剣を突き出しながら突進する。刃が、頑強であるはずの炎王龍の腕に触れると、ドドンシザーと銘々された双剣は白い傷跡を残す。刃表面に微細に開けられた孔から水が滲みだし、高熱を帯びる炎王龍の体表で一斉に気化するのだ。

這い蹲っているだけで人の倍の高さがある巨大な古龍が、ちっばけな刃の一撃にうめいた。

鎧竜グラビモスは、その頑丈な甲殻と特殊な体の構造から溶岩を泳ぐことができることで知られている。それは人にとって驚異に他ならない。とても耐えることのできない環境で生きることができないからだ。しかし、それがグラビモスの強さを証明してはいないのだ。グラビモスから見たのなら、水温一〇度前後の湖を泳ぐ魚竜ガノトトスが驚異に他ならない。自分にはとても耐えられない超低温に身を晒して無事なのだから。

生物は強くなるのではなく、その環境に適応しているにすぎない。それが、進化というものである。

古龍とて例外ではない。

炎を操り、インスマス火山帯奥地に生息していた炎王龍テオ・テスカトルは高温に耐えられる体を得たのではなく、高温でなければならぬ体を得たにすぎない。

フィリアのドドンシザーによる一撃は、内蔵された貯水袋から水を放ち、気化熱が一気にテオ・テスカトルの熱を奪い取る。

峡谷に生息する呑竜パリアプリアはその名の通り悪食である。とにかく喰らい、とにかく呑む。そのために強靱な胃袋を持つ。フィリアの双剣は、そんな呑竜の中でも特に強力な個体を古龍の素材で補強して作られたものである。剛種武器と呼ばれる、そのあまりの性能の高さから使用が禁じられた、兵器であった。

フィリアが舞う。

腕を振り上げ、体をひねり、時に空中で回ってみせる。情熱的なダンスに、炎の王は悲鳴を上げた。

体から見る間に熱が奪われ、蒸気が白く赤い体を包み込む。強固であるはずの甲殻がひび割れ、裂かれ、血が赤黒い光を纏いながら滲んでいた。

龍毒以外の力では傷つけることさえ難しかった古龍の体が切り裂かれていく。

テオ・テスカトルは体を捻り、横でやかましく踊っているフィリアめがけて爪を振るう。

「遅い！」

フィリアの、剛腕の魔女の動きは軽やかで速い。あっさりと軌道の下に滑り込むと、同時に双剣がその太い腕を裂く。腕に沿って切り裂かれた傷は深く、吹き出した血が砂漠に龍毒の血を垂れ流す。

古龍は、すでに悲鳴を上げる余裕も残されていない。

フィリアはテオ・テスカトルの大きな頭の下に入ると、一際速く刃を振る。切り上げ、切り下ろし、左右交互に斬り裂いて頭上で合わせた刃を同時に降り下ろした。厚いたてがみに守られたテオ・テスカトルの喉元がいとまたやすく裂け、返り血がフィリアの体に降り懸かる。

崩れ落ちた古龍の屍のすぐそばで、赤い鎧をさらに血で汚した魔

女は吠えた。

「この程度か!？」

その視線の先には炎王龍の群が遠巻きにフィリアを眺めていた。人を殺す時は嬉々として、ものを壊す時には楽しみながら殺戮していた古龍のそんな姿に、フィリアは血を拭うこともせず吠える。

「この程度なのかと聞いている!」

龍毒が含まれているその血を浴びながら、ヒメロスFは何ら損傷を見せない。ヒメロスFは通称キノス・シリーズと呼ばれる、対古龍のために生み出された魔女のための鎧であるのだから。

結界の魔女。この名前は聴覚に由来する。音を聞くだけで、その反響から距離と方角、時には形さえ判別してしまうスノードロップの耳は、音の聞こえる範囲であれば音を発するすべてのものを逃さない。まさに結界を統べる魔女なのだ。

「あなたたちの姿は、聞こえてる」

目を閉じていても、周りを飛び交う風翔龍クシャルダオラの羽音、風を切る音、人々の戦いの声が聞こえている。それは、目を開けているにも等しい情報をもたらす。

荒れ狂う嵐の中、黒雲が覆い隠そうと結界に捕らわれた古龍に逃れる術はない。

スノードロップは弓を構えて立っていた。その姿は緑のドレス。袖、スカートの端にフリルを思わせるような装甲が張られ、視認性を優先した兜はメイドが身につけるようなヘッド・ドレスとよく似た形状をしている。

ルディアF。

フレームには強固な古龍の骨格。番の狼、響狼オルガルの体毛の中でも特に稀少な真紅の毛の中から選りすぐった剛毛を寄り合わせて作られた弦が力強くしなる。この強弓のみが、天狼弓「村雨」のみがスノードロップをハンターであると証明してくれている。

訂正しよう。弓のみではない。結界の魔女の周りにおかれた矢筒には、幾本もの矢が置かれている。この矢もまた、スノードロップをハンターとして認め、その出番を待っていた。

「龍毒を持つあなたたちにはわかってはいるはず。古龍を殺すには、古龍の力が最適であることを」

取り出される一本の矢。矢尻がなく、代わりに小石ほどの塊が先端には取り付けられていた。弾頭。この言葉ほど、この奇妙な矢を説明するに適した単語はない。

ゆっくりと開かれる瞳。その目は、ミナガルデ王国所有のフギンムニン級大型輸送船の甲板の情景を映した。

船全体が円形であるという独特の形状のフギンムニンは、もう一つの特徴として張り出したブリッジというものを持たず、甲板が全体が平たい構造をしているということが挙げられる。人員の動き易さと視界の確保を優先したこの特殊な構造は、スノードロップにと

って恰好の舞台であった。

この空中戦はフギンムニンを中心に進んでいる。そして、スノードロップは甲板の中央に立っていた。それはすなわち、戦場を中心に聞くことができることを意味する。三六〇度、すべての方角を聞く。

強力な個体から得られた響狼の素材を古龍の素材が束ねる。現在の時点で唯一古龍のサンプルを確保しているミスカトニツク王国にのみが所有する矢を、力強く引き絞る。

「私は姫様を憎んでいます。あの人が私から大切な人を奪ったからです」

放たれた矢は、バリスタ、ボウガン、思い思いの武器でまとわりつく古龍の迎撃に当たるハンターたちと甲板を通り越して、一直線に風翔龍の額を捉える。

そして、一瞬の閃光の後の轟音。弾き飛ばされる雨水。炸裂した炎が古龍を呑み込み、生じた黒煙から吐き出されるように古龍の体が落ちていく。

爆撃ビンと呼ばれる特殊なビンが、矢に取り付けられた弾頭の正体であった。弓には通常、強撃ビンなど、ニトロダケの粉末を詰めたビンを取り付け威力を増すことがある。ビンの強度不足からその爆発力に限界があった。それを、古龍の素材は軽々超過してしまったのである。もはや、武器と呼ぶことがおこがましいほどに。

「でも、私は姫様に仕えます。それが愛しいお姉さまの願いであるからです」

誰もがその威力に呆気にとられ、古龍たちは皆怯えた。

それでも奮い立った古龍が一頭、手を止めた人々の間を縫うようにスノードロップを指す。風纏う細い体はその身をくねらせながらフギンムニン級の甲板の上に躍り出る。そして、思い知ることとなる。

ミスカトニツク王国の力とは、七人の魔女ばかりではないと、剛種武器ばかりではないと。

スノードロップを襲撃するために高度を下げたクシャルダオラの腹を雷が這う。奇襲を受けた古龍は思わず身を翻し甲板上に降りる。すぐさま振り向く風翔龍が最期に目にした光景は、赤い鎌の形をした太刀を構え、舞雷竜ベルキュロスの深緑の甲殻に身を包むシギユンの姿と爆撃ビンを装填した矢尻。

直撃を受けたクシャルダオラは、原形こそ残しながらも焦げ、甲殻の上に火がくすぶったままの頭部をフギンムニンの甲板に横たえていた。

シギユンが長柄に鎌状にいくつもの湾曲した刃を持つ太刀、ミエドサイスを構え直す。猛毒と電流を発する石から鍛え上げた刃はそれ自体が毒を放ち、毒怪鳥ゲリヨスのような毒に耐性を持つモンスター素材しか用いることはできなかった。その結果、ゲリヨス独特のゴム質の皮の質感と毒々しさを得るとともに絶縁体でもある皮の性質を生かし石の電流そのものを制御可能とした太刀である。そして鎧はベルキュロス。高電圧に耐えうるその装備はミエドサイスの性能を解放する。全身を包む、あるベルキュロスの鎧はその顔さえ覆い、守る。気弱でありながらも優しげなその顔を隠し、その姿

は戦士のそれである。

「だから私は、あなた方を撃ちます」

峡谷のハンターに守られながら、スノードロップは再び弓を引き絞る。誰よりも強く、誰よりも愛しい姉の力となるために。

作戦は順調であった。

グングニル級機動要塞は順調に進攻を続けている。問題なぞあるはずもない。しかし、艦長であるヘリオスは気むずかしい顔。それが普段通りであるとは言え、を崩そうとはしない。ブリッジの最も奥からクルーたちの様子を見回して、しかしその関心は視界に映らない女性へと向いている。

「グラジオラス殿、貴公は七人の魔女の中でも最古参と聞いているが」

「それは違います。元々、七人の魔女はセントポリア様がアマランサス特務騎士を迎えて始まったものです。ただ、特務騎士としては、ずいぶん長く務めてしまいました」

若い女性にはない落ち着き払った抑揚は、加齢を感じ始めたヘリオスの耳には聞き取りやすい。ヘリオス座る艦長席のすぐ脇に特務騎士の制服のまま立っている。

「では聞くが、古龍とは何なのだ？ 彼らは何から何まで異質だ。まるで楽しむかのように人を襲う」



それは生物としてはありえない。残酷や残忍という概念は知恵あるものの特権なのである。時にモンスターとて残忍と思える行動をすることもあるが、それは本能がそうさせたことを人が勝手に残酷だと判断しているにすぎない。

モンスターは純粹なのだ。

武官がわからぬ問いを、学者として王立古龍観測隊に参加していた才女にはわかるのではないだろうか。そんな期待を、グラジオラスはあっさりと打ち砕いた。

「理由は私にもわかりません。古龍に関しては、すべてが推測の段階です。諸説別れているとしか申せません」

「簡単でよい。聞かせてもらえるかね？」

話し出すまでに間が空いたのは、もったいぶっているというよりは喉の調子を整えるためであるのだろう。軽い咳払いをすませた後、グラジオラスの声が聞こえる。

「古龍は太古の時代より生きてきました。そして、ごく稀に発見される化石から推察するに、その姿を変えていません」

「進化をしていないということかね。何とも奇妙な話だ」

進化とは終わることがない旅であると聞いている。進化そのものが環境に適した体に変化させることで以上、環境が変異すれば、体も自然と書き換えられる。

「我々はそれを、進化し尽くしてしまっただと考えました。この大地はかつて、現在の生命では生きられないほど過酷な環境であったことが地質学の観点からすでに明らかです。古龍とは、そんな地獄のような時代に繁栄を極めた種ではないかと考えています」

「では、大地の旧き支配者どもが主導権を取り戻そうとしている、そういうことかね？」

「わかりません。ですが、古龍は、我々とは根本から違う存在なのです」

地獄からの使者が何故今更この世界を訪れたのか。そのことの本的な答えを持つ者は、この場には誰一人としていなかった。

ミスカトニツク王国から海を越え、インスマス火山帯を乗り越えてセクメーア砂漠に入る。それがスレイプニル級高機動艦の航路である。砂漠に入るまでは極めて順調であった航路は、決戦の舞台に立ち入った途端に一変する。

炎王龍の群が飛び交っていた。軍勢のただ中に進んだスレイプニルはバリスタを放ち、大砲を轟かせ、空は瞬く間に戦場と化した。

甲板上でハンターたちの指揮を執る神託の魔女フィロソフィアは純白のドレスに身を包んでいた。無論、衣装ではない。装束である。

カリエンF。

ヒメロスFと同系統の装備であり、こちらはガンナー用に製作さ

れたものである。フィロソフィアは自らもライトボウガンを手  
に、弾幕をすり抜けた古龍を狙い撃つ。怒髪髯級「海猫」。蛮竜とまで  
呼ばれるほどに獐猛なグレンゼブルの黒ずんだ緑の甲殻を重ねて繫  
いだ銃身はそれ自体が竜の背のようであり、先端に銃口が開いてい  
る。古龍の柔軟ながら頑丈な素材でフレームそのものを保護し、通  
常のボウガンでは銃身が焼け付いて動作不能になるほど連続して弾  
丸を発射可能としている。

やや腰を下げ、一直線に甲板を目指していたテオ・テスカトルの  
額へと向けられる銃口。フィロソフィアは左手でボウガンを支えな  
がら、右脇の下に固定した状態で引き金を引く。

細く固いハリの実をカラの実を加工して作った薬莢に仕込むこと  
で完成する通常弾LV2。それが次々と炎王龍の額に弾ける。通常  
のボウガンの連射速度をはるかに超えた超連射。二〇発を超える弾  
丸をまともに浴びてしまった古龍は大きく軌道をそらし甲板の縁に  
消えていく。その様を確認してから、フィロソフィアは一度に撃ち  
尽くしてしまつた次弾を装填する。

ガンナーにとって射撃の次に隙の大きい弾込という作業。自然と  
神経は張りつめ、それゆえに、船を大きく揺らす衝撃にはつい声を  
荒らげる。

「ちょっと、誰？ こんな乱暴な接岸するなんて」

スレイプニルの甲板のやや上。飛行船の気球が見えた。そこから  
垂れる鎖の下にあるはずの飛行船の本体は甲板に隠れて見えていな  
い。甲板同士を接岸させようとするそれぞれ気球が接触してしま  
う恐れがあるため、相手の船が低い軌道で接触を試みたのである。  
方法こそ間違いないが、急いでいるのだろうか、そのやり方は乱暴

の一言に尽きた。

まったく、こんな操舵を命じた人の親の顔が見てみたい。そんなフィロソフィアのささやかな希望は、あっさりと叶うこととなる。

甲板に立てかけられた梯子を上って来たのは女性が一人。ブレシスFと呼ばれる同じキノス系のドレスを着たその女性の親は、フィロソフィアが見知った人物であった。

「フィロソフィア姉さん！」

「ソフィア、あなたなの……？」

三姉妹の末妹はフィロソフィアの姿を見つけるなり声を上げた。普段から明るく目立つ言動の多い妹だが、今回はそれに焦りが含まれているように見えた。動作の一つ一つのテンポが早く、フィロソフィアの元に駆け寄るまでさほど時間を必要としなかった。

「聞いてよ。王龍はハイパーボリア文明の跡地をすぎても止まらない、止まらないよ」

何があってもまず冗談が飛び出すような妹がずいぶんと真面目な様子である。それだけ、事態の深刻さを物語っているようである。

「どういうこと？」

「王龍は水を求めてるんだ。でも、もうハリ湖はないんだ。だって、もう何百年も前に峡谷で河川の流れが変わってしまったからね」

確かに、以前の調査でも峡谷にかつて大きな河が流れていたこと

は確認されている。峡谷に存在したムー文明はその河の水を頼りに生活をしてきた。しかし、約四百年前に流れが変わり、ムーの民は峡谷を離れた。ただ、そんな歴史的事実でしかないと考えていた。

同時に、ハイパーボリア文明を栄えさせたハリ湖は通じる河川というものが存在せず、砂漠の地下を流れる湧き水によって成り立つ湖だとも知られているのだ。そして、峡谷を流れた河は地下へと流れ込み、そのまま地下水になることも確認されている。

もちろん、これだけでテラドミヌスに枯渴させられたハリ湖再生が阻害されている理由を河川の変更だと判断することはできない。しかし事実としてハリ湖は現在完全に枯渇している。砂漠にオアシスこそ点在しているが、それはどれも小規模なもので、王龍の巨体を潤すことはできないだろう。

消去法で、王龍が求めるだけの水量を誇る湖を導き出すことは容易であった。

「まさかマンチエスター湖が……！」

ドンドルマ地方最大の水瓶である。そして、山岳に囲まれたセクメーア砂漠唯一の出口の先にあるのである。人口密集地であるドンドルマの街のすぐそばに。

「そのまさかだよ」

事態は想像以上に深刻であった。まさにソフィアが心配する通りに。ドンドルマの街が破壊されれば東西南北の交流が断絶させられてしまう。そして、現在の社会は横のつながりなしには成立しない。大陸全体が甚大な被害にさらされることは想像に難くない。そして

何より、一体どれほどの被害が出るのか、想像の範囲でさえ、鳥肌が体を撫で回す。

「姫様はどこ？」

「今、船首でアマランサス特務騎士と談笑中よ」

事態のあまりの深刻さから、つい事実をありのまま伝えてしまった。言葉を選んで、少しでもやんわりと伝えるということができなかったのである。炎操る古龍が襲撃しているただ中で、メイドとお姫様がそのままの格好で船首でたむろしているなんてことを、そのまま教えてしまったのである。

「ねえ、アマランサス。どうして古龍が突然現れたんだと思う？」

アマランサスは船首に立ち、遙か眼下の砂漠から目を離すことはない。この凶眼の魔女にとって、見るということは単に見るということを意味しない。獲物を見定めるその目つきは、いくら笑顔で取り繕っても光衰えるものではな決してない。

信頼を寄せるメイドが振り向いてくれなくとも、セントポーリアに不満はなかった。セイレムの里にで修行した者にとって、見るという行為はそこまで重視されないのである。

「セントポーリアは知ってるはずですよ。だって、私たち、悪魔さんと戦ったじゃないですか」

もう三年も前の出来事である。ハンターを志すセントポーリアが

アマランサスの故郷であるセイレムの里を訪れ、そこで悪魔と呼ばれる古龍、霞龍オオナズチと戦い、そして勝利した。

たった二人だけの戦いであったが、それは二人だけの勝利では決していない。だが、その出来事が、セントポリアとアマランサス、この二人を強く結びつけるきっかけとなったことは紛れもない事実である。

「悪魔はとても、とても強い嵐の日にはしかやってきません。きっと、そんな環境の方が居心地がいいからなんでしょうね。それとも、怖がってるのかもしれませんがね」

「怖がる？ あんな化け物たちが？」

光を操り姿を消す。風を操り嵐さえ引き連れる。このような能力でさえ、古龍たちの力のほんの一部でしかない。

それでも、アマランサスの言う通り、悪魔は激しい嵐の日を選んで出現した。唯一の例外が、三年前の戦いである。あの日は、嵐がどころか、比較的天気の良い日であった。

悪魔はあらゆる生命を蹂躪する力を持ちながら、それでも出現する日を選んでいる。そこには矛盾がある。

「古龍さんはとても臆病なんですよ。だって、体がとても弱いんですから」

アマランサスはいつも脳天気　そうなってしまったのは、たぶんにセントポリアのせいであるが　である。ついため息をつく　が、それは、呆れではなく、答えをみんな知っているくせに小出し

にしかしてこない意地悪なメイドさんへの軽いいらだちにすぎない。

「覚えてますよね？ 私とセントポリアが悪魔を倒した時、その体には無数の傷があったこと。あれ、全部昔の七人の魔女がつけた傷です。古龍さんは受けた傷をなかなか癒すことができないんですよ。だから、私とセントポリアの二人だけで倒すことができました」

あの戦いの後、サンプルとして確保された古龍の体からは無数の傷が確認された。どれも古いもので、しかし完全には塞がってはいなかった。アマランサスの言葉通り、古龍は体の傷を癒す力が乏しいことが判明している。強固な甲殻は、それだけ作りにくいということだろうか。

「古龍の体が特殊なことはわかったけど、それがどうして今回の騒動につながってるのさ？」

「古龍さんたちは臆病だからです。外の世界には出たい。でも、他の人にはできる限り会いたくありません。だから、いつも決まって、他の人が出歩かないような日や時間を選んじやいます。嵐の日や、とても大きなお寝坊さんが起きた時とか」

傷つくことが怖くて、でも外に出たい。その結果、嵐の日など、極力他の生物と関わることをない日を選んでいるということだろうか。

つい首を傾げる。

嵐の日を比較的安全な環境であると判断している。では、古龍たちは王龍テラドミヌスの影響下を嵐と同義と判断しているということ



となのдарろつか。

「王龍の侵攻と古龍たちが安全と見なしている地域が合致してること？」

アマランサスが手を叩いた。何やら楽しそうに話し始める時、メイドの癖である。そして、その内容が必ずしも楽しげに語られるべきとは限らないことも、いわば癖のようなものである。

「まだまだ古龍さんたちのお散歩は増えますよ。それに、もっと慎重で賢い古龍さんたちも羽を伸ばしにやってきました」

王龍の侵攻に合わせるように古龍の群が現れたことの説明がつくことになる。そして、その範囲は時間とともに拡大し、やがてセクメーア砂漠を飛び越えることになる。

あんな怪物が一頭でも襲撃すれば、小さな里などひとたまりもない。

拳に力を入れて握りしめると心地よい。こんなちっぽけな人の手で、あまりに巨大な怪物を押し留めなければならぬことを教えてくれるから。

「王龍を倒さないと、世界がまとめてひっくりかえされるってこと？ まったく、とんでもない相手に喧嘩売られたみたいね」

背中しか見せないメイドは、それでもきつと笑っているのだろう。三年前もそうだった。恐ろしい敵にたった一人で挑むという時でも、アマランサスは恐怖を見せることなんてなかった。

当時は大きく見えた背中が、今はずいぶん小さく見えてしまう。元々、アマランサスは小柄である。ただ、幼かったセントポリアにはそれでも大きく見えた。それに、魔女への信頼と憧憬が、視覚にも働いていたのだらう。今、その背中は決して大きくはない。セントポリアも成長し、そして、力をつけた。

もう、魔女は手の届かない存在ではない。

それでも、その背中にかつて覚えた信頼と安心は微塵も潰えてない。どいない。

「でも大丈夫。セントポリアは一人じゃありませんから」

メイドは首だけで振り向いてくれた。その横顔には微笑みと、見たものすべてを写し取る瞳が澄み切った光を湛えている。

ひねくれ者のお姫様は赤い瞳でその眼差しを受けとめる。決して涼しいわけではない。太陽は燦々と降り注ぎ、スレイプニルの巨大な気球が遮ってくれてるとは言え、気温は高いままである。そんな状態では語弊があるかもしれないが、セントポリアは涼しい顔で微笑んだ。

「古龍なんか好き勝手させる訳がないでしょ。私の目の赤い内はね」

ハンターたちの怒号。古龍の咆哮。放たれるバリスタは風を裂き、吐き出される炎は大気を焦がす。そんな戦場の中、二人のハンターは互いの信頼を確認しあつた。

たとえどんな敵とでも戦えるように。たとえどんな相手からでも

勝利できるように。

## 第一六話「夜空の星〜Heroes〜」

「王龍の周囲、それとその轍を古龍たちは安全と見なしてる。これはアマランサスの意見だけど、フィロソフィアはどう思う?」

セントポーリア王女の声が響くのは、自らが艦長を務めるスレイプニル級のブリッジである。古龍の攻撃が一段落したとは言え、船体から突き出る形のブリッジは安全とは言いがたい。加えて、スレイプニルにも会議室というものは存在する。それを敢えて曲げて、ブリッジを会議の場と選んだことにはもちろん意味があった。

会議室は狭苦しくて嫌だったのである。

持ち込まれた机の上にセクメーア砂漠の海図が広げられている。セントポーリアは艦長席の上から頬杖をつきながらそれを見下ろしていた。

ここには神託と神速の魔女。肝心のメイドは今も船首に立ち砂漠を眺めている。

「そんなことありえませんか、と、言うのは二重の意味で希望的観測になります」

第二種戦闘配備が維持されているため、フィロソフィアは白いカリエンFを身につけたまま、机についていた手を軽く持ち上げた。手振りでも否定と、どこか軽いおどけた調子を示す。

「第一に、否定するだけの根拠はありません。それにそんなこと、考えたくもありません」

それはセントポリアとて同じである。王龍テラドミヌスが進めば進むだけ、古龍が出没する範囲が時間とともに拡大していくことを示しているからだ。

海図では、王龍がすでに砂漠を半分ほど渡りきった様子が一日ごとに点で示され、線で結ばれた航路図によって書き記されている。まもなく東側の里の多くがここで止まると期待しているハイパーボリア文明の跡地に到達する。

セントポリアがどこか投げやりな様子で話を聞いているのはそのためである。単純に機嫌が悪いのだ。

「ただ、そうだとすると、飛翔力に優れているはずのクシャルダオラから船団が逃げられたことや、足を止める度に襲撃されたことの説明が付きません。王龍に足並みを揃えていたということですから」

フィロソフィアの妹であるソフィアも黒いブレシスFを身につけたままであった。その手はせわしなく動き、王龍を中心とする円を描きながら、古龍の襲撃があったとされる地点との距離を計測している。

同じ日の王龍の居場所と古龍の襲撃があった地点をいくつか調べること、その範囲とその広がり把握できるのである。そして、いつまでも顔を上げないところを見ると、否定できるだけの材料が見つかってはいないらしい。

「仮にアマランサスさんの意見が正しいとすると、こういうことかな？」

ソフィアが体を翻したことで、セントポリアにも海図が見下ろしやすくなる。そこには、王龍を中心とした円がそれぞれの日ごとに描かれている。それは昔の地点を中心とするものほど大きく、最近のものほど小さい。時間とともに影響力が広がると判断した場合の広がり方を、こえまで得られたデータから類推したものであるらしい。

セクメーア砂漠西のドリームランド峡谷を王龍テラドミヌスは発した。影響力が一番最初に発生したその場所からはすでに大きな円が描かれ、それは峡谷を飛び越え海に、そして、西にあるロツクラツク諸島の一部にまでかかっていた。

「もうセクメーア砂漠だけの問題じゃなくなってるってこと？ 会議で私のことさんざんバカにした奴らに額でもつけておくってやりたいものね。おまけにソフィアの意見じゃ、ドンドルマにも行くかもしれないでしょ。セクメーア砂漠の中で足止めしないとね」

寒くもないのに歯が痛いのは、聞こえてこない吉報に業を煮やしているからだ。

「いえ、姫様、ことはそう単純ではありません」

そして、フィロソフィアの口からはいつまで経っても耳に触りのいい言葉は聞こえてこない。

「王龍の位置と古龍の襲撃から鑑みますと、その影響力は王龍がすでにいないはずの地域でも拡大を続けています。恐らく王龍が倒されれば消失するものと考えられますが、反対に、王龍が到達しない地点でさえ、古龍の驚異にさらされてしまうことを意味します」

「たとえドンドルマの街に王龍が到達する以前に止められとしても、古龍が街を襲撃することもありうるということになります。それを逆算して考えると、だいたいこのくらいまでに王龍をとめなくちゃならないことになる」

ソフィアが海図に示した文字通りの絶対防衛線は、ドンドルマの遙か西、砂漠東側の中腹ほどの場所にあった。会議でさんざん時間を浪費している間、王龍はすでに砂漠を半分越えてしまった。絶対防衛線に至るまでには、三、四日もあれば足りることだろう。

「上等。やってやろうじゃない。とりあえず、二人はフィリアと合流して。南部はそれだけ古龍の密度が濃くなりそうだから」

王龍は下弦の弧を描くような進路をとることが予測される。どちらかと言えば砂漠北西にあるドリームランド峡谷を出発し、中央やや南のハイパーボリア文明跡地を経由してから北東のドンドルマを目指しているからだ。砂漠の南側を通ることが予測されるのである。

七人の魔女の内、三人を南部に集めるといふ指示は、奇しくも三姉妹を集めることとなった。

「三姉妹そろつての狩りなんていつぐらいぶりだろう」

「二年前ね。何の因果か、今回もまた炎王龍がお相手なんてね」

ドレスを着て戦艦にいるセントポーリアに言えた義理ではないが、優秀なハンターと言えども姉妹が揃うということに喜びを隠そうとはしない。

北部にはミナガルデ王国のフギンムニン級大型輸送船に同乗させ

てもらう形でスノードロップを送っている。後はセントポリアとアマランサス。同様に王龍を目指しているはずのシュレイド王国のグングニル級機動要塞にはグラジオラスが乗っている。南に三人、北に一人。そして王龍には三人。割合としては悪くない。

残された時間は少ない。そして、セントポリアはまだ王龍の姿さえ目にしていないのである。決意と戦意が高ぶりながら敵の姿は見えていない。意味は違うが三年前の古龍との戦いを思い出さずにはいられない。

あの時は勝つことができた。アマランサスの力を借りて。今回も負けるつもりはない。

セントポリアは椅子から腰を浮かせた。ブリッジに設けられた窓からは、すっかり日の落ちた砂漠の夜が見えていた。そして、ブリッジ・クルーである五人の少女たちの姿も。

「私はこのまま王龍を目指すから。ユニス、聞こえた？」

「……了解」

まず中央。舵を取るのは寡黙な少女である。皆同じ制服を身につけているが、役割によってその色は異なっている。操舵を担当するユニスは黒。妙にかわいらしいデザインと、妙に短いスカートを身につけているが、ユニスはそんなこと気にせず、言葉少なに応じた。

続いて、火器管制と通信を兼任する少女は青。

「デメトリアは今の情報をグングニルやフギンムニンにも伝えて。さも根拠がありますって装ってね」



「了解ですわ」

ロールを巻いた髪が特徴で、王女であるセントポリア以上にデメトリアは慇懃である。そのためか、他船との通信を正確ではなくうまく伝える技術に優れている。セントポリアの悪巧みを知りながら、その顔は穏やかに笑っている。

今更根拠のあるなしでもめている時間はないのだ。

「アネット、ソフィアの船が離れるから、他の船に道を開けさせて」

こちらは管制を担当するアネット。桃色の制服と、丸い眼鏡が特徴である。これは偏見であるが、眼鏡をかけているためか真面目で丁寧な対応ができる優秀な管制官である。特に飛行船のようになかなか進行方向を変えられない乗り物が密集している場合、アネットの力が不可欠となる。

「わかりました」

「ねえ、私は？」

アネットの返事を耳にするか否かというタイミングで、白い制服の少女が元気よく手を挙げた。艦内の状況把握を担当するこのクルーの名前はヒルダ。左右に伸ばされたツイン・テールがその潑刺さをよく表している。

「ヒルダは特になし」

もちろん、元気娘のヒルダはあからさまに不満を明らかにした。

「え〜」

そして、もちろん無視する。現在まだまだこのスレイプニル級の損害は小さい。ヒルダの真価は戦闘時のダメージ・コントロールにおいて発揮されるのだから。

最後は紫色。ほかのクルーたちと同じように並んで座っている操舵を担当するユニスは別である。が、セントポーリアの補佐を務める実質的な副艦長であるエフィー。

「エフィー、着替えるから手伝って」

指示している時にはすでに振り返り、ブリッジ出口に体を向けている。

「わかりました。セントポーリア様」

エフィーの声を聞く頃には、すでに艦長席後ろ側にある扉へとたどり着いていた。扉を開ける前にちょっと一呼吸。吸い込んだ息を肺にためたまま、セントポーリアは横顔を見せる形でブリッジを振り返った。

「古龍の王様の横っ面、ひっぱたいてやろっじゃない」

これを命令ととったのか、それとも共感してもらえたのか。クルーと二人の魔女の声で了解と返事があった。

王国が参戦してくれたことで、戦いの帰趨は明らかに変わった。いくらか古龍が強大であろうと、数では人の方が確実に多いのである。

一頭のクシャルダオラに一〇人規模のハンターたちが群がり、それぞれの武器で挑みかかっていた。もちろん、頑強な甲殻に阻まれ、なかなか傷つけられるものではないが、その分、ハンターたちは慎重に立ち回った。クシャルダオラが爪を振るうと、正面にいたハンターが一斉に散り、後ろからハンマーを持ったハンターが重たい塊を叩きつける。急いでクシャルダオラが振り向くと、今度は斬撃が尻尾を襲う。

古龍はまわりつく蚊をいつまでも払えないでいた。

そして何より、今の人には勢いがあった。古龍は強い。古龍は堅い。だが、それでも戦うハンターたちの顔におびえなどない。誰もが勝利を信じ、世界を守ると決めているのだ。

ティルテュは人の力を見ていた。

「人も捨てたもんじゃないね」

すぐ後ろに着地しているヒミンブリユード級輸送船から、赤い制服を身につけたギルドナイトが塗れた砂地に降りる。年齢をしわとして顔に刻んだイリスの顔は、すいも甘いも噛み分けた、そんな捉えどころのない顔をしている。

それはティルテュ自身、この光景をどう評価していいものか掴みかねているため、そう見えてしまうのかもしれない。

「もっと早く来てもらいたかったと言うのは、贅沢がすぎるだろう

か？」

王国がもつと早く古龍の危険性を認識していれば死ななくていい人が大勢いた。もしかすると、ティルテュの母親も助かったかもしれない。

吹き付ける風と雨が、ティルテュの顔を濡らす。災厄は嵐とともに訪れ、そして、ティルテュたちは嵐のただ中にいる。

まだ、何も終わってはいない。

「今は、こぼれたミルクを嘆くより、残ったミルクを大切にしようじゃないか。ティルテュには、酷なことだと思うけどね」

そうだ。上層部を罵倒するにしても殴りつけるにしても、今はまだすることがある。背中にかかる大剣の重さがひしひしと伝わる。

戦わなければならない。

「ラファエル。飛行船を少しでも遠くへ逃がせ。私たちはミナガルデ王国の船に乗せてもらう」

張り上げた声の先には、飛行船の甲板に立つギルドナイトのアイルーの姿がある。これまで、このヒミンブリード級飛行船を足として利用してきたが、元々戦闘用でないこの船はすでに限界が近い。左舷は大きくえぐられ、細かな傷など数え切れない。これまでよく保ってくれたと誉め称えたいくらいである。

ラファエルは振り向き、甲板の作業員と短い会話を交わした気配があった。そろそろ飛び立つのかと思いきや、ギルドナイトの衣装

を身につけたアイルーは颯爽と甲板から跳び降りた。着地に関して、猫の右に出るものはいない。あざやかに着地するなり、ラファエルはテングロン・ハットを片手で直す。

「私も残りますにゃ」

「しかし、君はアイルーだろう。人のために命まで……」

かける必要はないのではないか。

ラファエルの髭がそろって跳ねる。

「それは傲慢な考えですにゃ。アイルー族も種族は違うとは言え、世界で生きてますにゃ。世界を守りたいと思う気持ちに多寡なんてありませんにゃ」

このちっぽけな隣人はそういうと、ウィンクを一つ。ずいぶんと様になっている。ティルテュは、ラファエルがアイルーの間では色男なのではないかという確信をさらに深めた。何ともその気にさせてくれる顔なのである。

「戦おう、共に」

相手は古龍。嵐を引き連れ、風を操る。そんなおとぎ話にしかないような怪物がティルテュの前にはいる。飛び立っていくヒミンブリュード級の起こす風が嵐の起こす風とぶつかって消えた。

「うまい晩酌の飲める世界のために」

蒼火竜のガンランスを背負うギルドナイトは盾を左手に構え、右

手でいつでもガンランスを抜くことができるよう身構える。

「あまたの命が息づく世界のために」

小さな体に不釣り合いなくらい大きな誇りを抱いたアイルールのギルドナイトは人が片手剣として利用している剣を太刀の構えで抜きはなつ。

大剣に構えは必要ない。納刀と抜刀を繰り返す武器であり、太刀やガンランスほど武器を保持している状態を維持しないからだ。

ティルテュは、二人とは違った。イリスのようにおどけることもできなければ、ラファエルのように気取った言い方も好まない。

「私は……、命を踏みにじることを許すことができない」

ただ頭の中に思いついた言葉を漠然として繋いで、そうしている内に考えが一つにまとまっていく。

ティルテュはハンターであった。自然に立ち入り、その恵みをいただく。それは命を奪うことへの言い訳では決してない。誇りなのだ。命をいただくことへの矜持なのである。

「命の尊厳を守るために」

殺したいから殺す。そのような古龍のあり方を、許すことはできない。

セクメーア砂漠から北に離れた村の中、停泊するヒミンブリュード級の周りで人々が慌ただしく動いていた。

ここはンガイ村。セクメーア砂漠とはドリームランド峡谷とドンドルマ地方の山岳帯に加え、ンガイの森と呼ばれる樹海を隔てた場所にある。そのため、セクメーアの影響など及ぶはずもない、安全な場所であるとされている。

しかし、ここでも戦いは行われていた。

本来ならば市が並んでいるはずの村の中央広場には、現在五隻の飛行船が錨を降ろし、篝火に照らされていた。ヒミンブリュード級輸送船の中に次々と物資を運び入れている人の姿が揺らめく炎に照らされる。

バリスタの矢、大砲の弾から、ハンターたちが使用する回復薬、砥石、携帯食料まで。さらには燃石炭、強燃石炭と、飛行船を動かすために必要なあらゆるものが積み込まれていく。

「燃石炭の扱いには注意しろよ。ちよつとした火ですぐに燃えるからな」

陣頭指揮を執るのは、ただ村長の息子であるというだけの若造である。軽薄な印象を取り繕おうとさえしていない。村長の息子だから指揮を執ることが許されているという事実は、あくまでも事実である。ヴァルカンは、その事実をありのまま受け入れるだけの強さを兼ね備えていた。

眠鳥ヒブノックの体毛でこしらえられた防具を身につけたハンターとして、その腰には先端にヒブノックのデフォルトされた人形が

とりつけられた片手剣を下げている。ヴァルカンはハンターであった。

かつてこのンガイ村でも数少ない上位ハンターとして樹海に生じた異変の調査に向き、そしてその未熟さを思い知った。自分が弱いということを知った分だけ、ヴァルカンは強くなったのである。

その指揮官ぶりに弱さはなく、しかしヴァルカンは自分が弱いと知ってる。だからこそ、その態度に奢りは見られない。

「ヴァルカン、で、俺たちは何をするんだ？」

話しかけてきたのは草食種の皮を張り合わせた基本的な防具、ハンター装備を身につけた若者である。名はヘルメス。かつて森に異変が起きた際、交易商人としてその兆しに一番に巻き込まれた一人であった。その後、見事に異変を調査、解決したハンターたちに憧れて剣をとった人物である。まだハンターとして日が浅いためか、その眼差しは柔らかく、傷一つない顔つきは純朴と言えば聞こえはいいが、頼りなげな若者であった。

年齢こそヘルメスの方が上だが、先輩ハンターとして、ヴァルカンは気取った様子で息を吹いた。

「最重要任務だ」

「マジかよ!？」

色めきたつのはヘルメスばかりではない。ヴァルカンが村を救った英雄であると信じる若いハンターたちが雑踏の中目ざとくその言葉を見逃さなかった。飛行船に積み込むための大きな樽を抱えたま



ま足を止めた者もさえいた。

ヴァルカンは注目を集めていることを意識しながら、ギャラリーを見回す。

「聞いて驚け。後方補給部隊だ！」

反応は、決して芳しいものではなかった。誰もが戸惑ったように、瞬きを繰り返す。それは、ヴァルカンも同じである。喝采かと思いきや、あまりに反応が鈍いのである。

「どうした？」

「……何だよ、補給って！ 俺たちハンターだぞ。武器もってなんぼだろ！」

動き出したヘルメスは声を張り上げた。群衆はヘルメスを支持するようにその視線をヴァルカンへと集める。

とうのヴァルカンは気を抜いている。積まれた木箱に背を預けて、両手を頭の後ろで組んでリラックスする姿勢さえ見せた。

「その武器を作ったのは誰だ？」

誰もその言葉の意味を理解できないでいた。武器を作るのは武器工場の職人。この村ではウウルカヌスのじいさんのようなに決まっている。それは確認するまでもなく誰もが知っていることである。

誰がも怪訝な眼差しを形作っていく中、それでもヴァルカンはヴ

アルカンである。

「どんなに優秀なハンターだって素っ裸でモンスターを狩れるわけじゃない。武器や防具、道具のサポートが必ず必要になる。それとも、モンスターを狩るのにいちいち薬草やアオキノコ、砥石を狩りにかける何倍の時間をかけて集めるか？ 絶対にどこかの誰かが栽培したのもや採集してきたものを買うだろ。武器だって誰かに作ってもらったもんだ」

誰もが自分が身につけている防具を、アイテム・ポーチに見下ろした。そして、誰もが首を上げようとはしない。

「人は一人じゃ戦えない。これは別に比喩的でもなければ心情でもない。厳然たる事実なんだよ」

木箱を離れる。そのことに、どんな意味があるわけでもない。何故なら、ヴァルカンの思いと意志はどのような姿勢をしていようと変わることなどないのだから。

「俺たちが戦いを支えるんだ。目立つことじゃないさ。賞賛だってもらえないかもしれねえ。だが、俺たちが、優れたハンターもそうでない奴らも、そのすべてを支えるんだ。これほどかっこいい仕事がないにあるかよ」

ヴァルカンは人々の間を縫うように歩く。その先には、補給物資を満載した飛行船が今や遅しと出番を待ちかまえている。かつて自分の弱さに涙した少年は、今は確かな眼差しでそれを見上げていた。

離れた場所である。広場の隅にまで来たなら、物資の山もなく、運び込む人の姿もない。音こそ漏れ聞こえているが、中央の熱気に比べたなら閑散としている、そんな表現がよく似合う。

そこには、一組の男女がたたずんでいた。蒼火竜の鎧を身につけたハンター、アレスである。女性は、ンガイ村の村長であり、ヴァルカンの母親でもあるユーノーであった。遠く息子を見るその顔は憂いを帯び、妙齡の女性特有の色香を漂わせている。

鎧が鳴る音。アレスはユーノー村長の横で、視線を合わせた。

「ご息は、変わりました。いえ、成長したと言ってもいい」

かつてアレスはアマランサスとともにヴァルカン先導の下、樹海へと足を踏み入れた。単なる調査のつもりであったが、そこで遭遇したのは、通常のヒブノックの数倍もの高さを持つ、見上げるほどに巨大な樹海の主との遭遇であった。

ヴァルカンは戦うことができなかった。恐怖に負け、戦いから逃げだそうとしたのである。アレスをあれではハンターは無理だと思限った。しかしアマランサスは違った。ヴァルカンの長所を見抜き、ほんの少し後押しするだけで、臆病な若造は見事に化けた。クエストの本質を見抜き、そのための解決法さえ示したのである。結果、巨大なヒブノックの撃退に成功し、村に被害が及ぶことはなかった。

「これもあなた方のおかげです。あの子は、自分の戦いというものを見つけました」

ヴァルカンは一度たりとも武器を使うことはなかった。ただ武器を振り回すだけがハンターではない。その典型的な例である。狩獵

経験豊富なアレスにさえできないことを、思いつかなかったことを  
ヴァルカンはやってのけた。

アマランサスに支えられながら、しかし、自分の力で。

「厳しい戦いになると思いますが、ご子息は必ず乗り越えることで  
しょう」

アレスの目には、軽薄ながらハンターとして大きく成長したヴァ  
ルカンの姿が映っていた。ずいぶんと立派になったものだ。そんな  
率直な印象を抱いたその時、理由はわからないが、ヴァルカンの周  
りが急に慌ただしさを増したようである。よくはわからないが、人  
々が沸いている。飛行船を見上げるヴァルカンの後ろで若いハンタ  
ーたちが口々に樹海のハンターを讃えているようなのだ。すると、  
振り向くなり、まんざらでもない様子で人々をなだめるような仕草  
を見せた。最も、その顔は明らかに得意げであるのだが。

「私がこのように話していたこと、くれぐれも内密にお願いします。  
あの小僧、少し誉めるとすぐに調子に乗る癖ばかりは抜けていない  
ようですね」

アレスが兜に隠されたこめかみに力を込めていると、ユーノー村  
長は口元に手をやって、上品な様子で笑ってみせた。

「メタトロン、目的地まではどれくらいだい？」

もうすっかり日が落ちてしまったというのに、特に明かりを必要  
としないで、だから暗い場所にジェイナスは座っていた。

鎧はすでに身につけている。特務騎士として与えられた新たな大剣を肩にかけ、くつろいだ様子で座っているのだ。しかし、その周りに闇に包まれ、その姿を確認することはできない。

「もうまもなくですよにゃ」

返事をしたアイルーは、わずかな明かりを頼りに机についていた書類を作成しているらしく、机をつつく音が定期的に響いている。それが突然止まったことで、メタトロンが手を止めたことがわかる。ペンを置き、この小さな機関士はため息混じりにジェイナスの様子をうかがう。

「ジェイナス特務騎士殿は気を張りすぎですよにゃ」

「……ごめん。ちょっと、緊張してたかな」

その声からは、先程とはずいぶん印象が変わっていた。闇の中に身をおいているとは思えないほど気さくな声である。

ジェイナスは気が張っていたのである。その原因はわかりやすいものであった。

「古龍と戦えるからですかにゃ？」

メタトロンに見抜かれてしまっていると、ジェイナスは苦笑した。

「メタトロンは知ってると思うけど、僕は元々特務騎士なんかじゃなくて、峡谷のそばにある小さな村でハンターをしていたんだ。一応、舞雷竜ベルキュロスを狩ることに慣れていてね、雷を落とすな

んて言われてたんだ。でも、大切な人を守るだけの力はなかったんだ……」

狩猟に出かけている際、村に迷い込んだモンスターに婚約者を殺されてしまった。モンスターは灰色をしたベルキュロス、冥雷竜ドラギュロス。

仇をとりたくて、守れなかった自分が許せなくて、ジェイナスは葬式に出ることもなく峡谷を目指した。

その時は、ジェイナスは考えてもいなかった。世界の裏側に潜む悪意と遭遇することになるとは。

「ドラギュロスを追いかけて峡谷に入って、その時僕は知ったんだ。古龍が実在しているということ、それが危険な存在だってことをね」

大剣を支える手が強さを増す。この手に握られている剣は、身を守る鎧は、龍を殺すための兵器であるのだから。

「最初はヘステイアが死ななければならなかった直接の原因を作った存在として古龍を憎んでいたけど、でも、他の誰かに僕みたいな思いをしてもらいたくないと思うようになったんだ」

それなのに、古龍は人を襲うことをやめようとしなない。まるで、殺すことを楽しんでいるみたいに。

声は、自然と付近の明度を反映する抑揚を染み込ませる。

「古龍が人を襲い続けるなら、僕にとって古龍は仇になる。またへ

ステイアみたいな人を作り続けようとしているということだからね」

特務騎士とは、王立古龍観測隊に所属するハンターのことである。そして、その中から特別な七人が魔女と呼ばれ、セントポーリア王女に仕えている。特務騎士と七人の魔女との違いは形式的には存在しない。権限は同様であるからだ。せいぜい、王女が信頼をおく度合いとでも考えておけばいい。

だが、ジェイナスはそうとは考えていなかった。七人の魔女は王女の側近である。すべてにおいて王女の安全と願いを優先するだろう。しかし、特務騎士は違う。あくまでも騎士なのだ。王国に仕えるハンターなのである。それは必ずしも王女を優先する必要はないことを意味する。

ジェイナスは王女のためには戦わない。七人の魔女が、他にも王女を守ってくれる人たちがいるからだ。

だからジェイナスは決めていた。

「僕は、古龍を討つ」

龍を狩る騎士になるのだと。

ロックラック諸島はレムリア大陸とは海を挟んだ西側に位置する。セクメーア砂漠が大陸西側に存在するとは言え、間にはドリームランド峡谷がそびえることで砂さえ飛来することはない。

東からやってくるのは太陽。今日もまた、朝日がモガ村を照らす。

穏やかな波音。揺られる船。いつもと変わらぬ朝の光景。村のハンターとギルドから派遣された受付嬢の痴話喧嘩も、日常そのものである。

広場脇のカウンターをはさんで、赤い制服の受付嬢と金髪の若者が対峙してた。村人の多くはいつものことと、特に気にとめた様子もない。

関心を払うのは、まだ慣れない新参者ばかりである。

「何だ、またやってるのか？」

たくましい体を見せつけるように上半身裸の男が欠伸をつきながら呆れたような 実際呆れている 声を出した。凍土から派遣されてきたヒュプノスは、しかし見事な適応力を見せてモガ村の空気にとけ込んでいた。半裸で動き回ることなどその好例である。

そのすぐそばでは、なじめないアルルが若い二人の様子を微笑ましく眺めていた。凍土からほとんど出たことのないアルルは、そのためか長袖のシャツを着ている。肌を露出する習慣に乏しいのだ。

異変に備え、派遣されたこの三人 最後のイシユタルはまだベツドの中である は毎日のようにハンターと受付嬢の夫婦漫才を見せられてきた。

「ええ。まったく、飽きないものね。いいわね、若いって」

ハンター、アポロは口を大きく開けて、もちろん声も大きい。

「だから、俺も練習を続けて、腕もだいぶあがったんだよ！」



その手には一振りの太刀が握られ、それを誇示するように胸の前でかざされている。ヒュプノスから贈られた太刀を、あれからアポロは幾度も振り回し練習を重ねたという自負があるのである。

「わかってます。ちゃんと信じてます」

受付嬢は朝日以上に眩しい微笑みを絶やさない。アポロの顔は見る間に崩れていく。歯をむき出しに眉を潜め、猜疑的を通り越して疑惑を確信している。

「いいや、絶対信じてない！」

「あら、依頼がこんなに。ギルドにすごく信頼されてる証拠ですね」  
カウンターに置かれた受付庁がめくられると、その大半のページが空白である。あつたとしても、鳥竜種ジャギイを狩れなど、初級のクエストばかりであった。

歯は、今度はきつく食いしばられる。反論しようと顎の筋肉が緊張し、しかし何も言うことができず余った力が歯を強くかみ合わせているのである。まだまだ駆け出しのハンターであるアポロはまだまだハンターズ・ギルドからの信用がなく、そのため大した依頼も舞い込んでこないのだ。

実績というものが何もない。

「み、見てろよ！俺だってなあ、ドスジャギイくらい簡単に狩ってやる！」

こうして、アポロは初めての狗竜ドスジャギイの狩りに出ることが決まったのである。

村から狩猟場へと続く坂道を歩きながら、アポロは後ろが気になつて仕方がなかった。別に受付嬢の見送りを期待してる訳ではない。ただ、頼んでもいないのについてきている人がいるのだ。

振り向こうか振り向くまいか悩まされる。アポロは現在鎧を身につけていた。アロイと呼ばれる金属板を張り合わせた装備である。本来レザー装備しかもっていなかったアポロだが、場合が場合だと防具屋さんが出世払いでいいとつておきの装備を出してくれたのだ。

アポロにはすぎた一張羅であるのだが、まだ着慣れていない。そのため、振り向く動作もいままでのようにはいかないのだ。それでも振り向こうと決めるときには、丘の上にたどり着いた時のことであつた。

「それで、どうしてついてくるんですか？」

ギギネブラと呼ばれる毒怪鳥の装備を着たアルルであつた。ブヨブヨとした独特の質感を持つ黒い皮を用いた防具は、見かけ以上に頑丈であり、アポロのアイを上回る防御力を持つ。しかし、体のラインを浮き立たせていたり、妙に露出の多い お腹が見えているなど 服装で、目のやり場に困る。このこともあって、アポロは振り向くやすぐに首を前に戻してしまった。

聞こえてくるのは楽しげなアルルの声。

「私たちがいるのはこの村が君一人では守りきれないと判断されたからよ。あの娘の口振りを借りるなら、あなたはそれだけ信頼されてないって寸法なのです、ってどこかしら」

声まねが妙に似ているところがアポロの脱力を誘う。丘の起伏激しい地面につい足を取られそうになるも、なんとか踏みとどまる。

「凍土って、そんなに娯楽がないんですか……？」

「あら、よく知ってるわね。私の里では、人をからかう術を覚えることは、いい女の必須条件よ」

尊敬するハンターも人をからかうことに関しては天才的であったと、アルルは聞いてもいないことを言ってくる。何でも悪魔を退けたハンターなのだそうだが、なかなか剛毅な人で、どんな時でも人をからかうことを忘れない人であつたらしい。

「まさに魔女の里ですね……」

「褒め言葉よね、それって」

だめだ。この人にはかなわない。そう、アポロは諦めるしかなかった。

そうしている内にも、足は進み、丘を北上していく。緩やかな下り坂を降りるとそこには谷間である。左手には小さな滝と、そこから流れ落ちる水が浅い川を作って右側へと流れていく。川の向こう側にはすぐに崖がそびえ、その足下に洞窟の入り口が開いている。もう、山道に入っているのである。

時折ケルビなどの草食種が水を飲みに来ているはずの場所であるが、今その姿はない。そんなこともあるだろうと、川を無遠慮にわたって、洞窟へと入る。洞窟は入り口から下り坂になっているが、天井の穴から光が射し込み、足下ははつきりと見えている。

それでもアポロが慎重な足取りをせざるを得なかったのは、ここがジャギイたちの生息範囲であるからだ。巣が近く、いつドスジャギイに出くわしても不思議ではない。

ところが、坂を抜け、飛竜が自由に飛び回れるほどに広い空洞に出てもドスジャギイどころか、キノコを探す甲虫種オルタロスの姿もない。オルタロスは人の胴体ほどもある大型の虫で、見落とすことができない大きさではない。

「おかしいな。この辺りにいるはずなのに……」

せめてジャギイの姿でもあるのではないかと期待したが、見回しても首が疲れただけであった。

「ちょっと危険ですけど、巣を通り抜けて、川辺に出てみませんか？」

つい言葉を区切ってしまったのは、アルルの顔から笑みが失われていたからだ。普段ふざけた人が深刻な顔をしていると妙に焦らされるものだ。

「気をつけて。何かがおかしいわ」

もちろん、生き物の姿がないのはおかしい。もし巣にドスジャギ

イがいたら、ジャギイたちの群に囲まれてしまう恐れもあって、大変危険である。しかし、どちらも上位ハンターを恐れさせるほどのこととは思えない。

もしかしたらまたからかわれているのではないだろうか。そんな勘ぐりは、アルルが無言のまま、先頭を歩き始めたことで潰えてしまった。

何かが起きている。

アポロはアルルの後に続く。空洞を東に抜けるとジャギイたちの巣がある。実際は巣穴の出口がつながっている広場というだけなのだが、食べ残しや獲物の骨が散乱している谷の光景は、死の谷を思わせる不気味さがある。最初の頃は絶対に足を踏み入れたくないと思っていたことを思い出した。

天井が途切れ谷となって、巣はアポロたちの前に姿を現した。

散乱した骨。腹を喰い破られた状態で腐敗している草食種アプケロスの死体。散らばる骨。それらはそのままあって、しかし、それしかない。

ジャギイヤ、巣を守っているはずの雌であるジャギイノスの姿はなかった。

何かが起きている。

谷には足音しか響かない。ジャギイたちは巣穴にこもって出てくる気配がまるでない。ではどうして。

答えなんて出せないまま、アポロとアルルは巣を通り抜けた。

すると、途端に開けた視界の中に、その答えの一つが横たわっていた。

ここは広場である。谷間で横切った川が流れ込み、浅いながらも幅の広い河川となっている。このまま川に沿って北上すれば海岸にできることができる。以前　ちょうど、アルルたちがモガ村を訪れた日のことであった　、そこでアポロは海竜ラギアクルスの群と遭遇した。

山からの湧き水は清流となって平野を横切っている、はずだった。この光景を目にするまでは。

「ドスジャギイが……」

川に体を浸して倒れていた。ジャギイを一回り大きくしたような立派な体が、まるで小さくなってしまったかのように見えた。流れる血が川の色を変えてしまっている。ドスジャギイばかりではないのだ。他にもジャギイやジャギイノスの死体が辺りに散らばっている。

思わず上空を、周りを見回してしまう。ジャギイたちは殺されているのである。何者かに。

「これ、リオレウスがやったんでしょっか!？」

アルルは無言で歩きだしていた。周りを警戒しながら、アポロは一人にされてしまうことも恐ろしいとつい早歩きになってしまう。

一〇を越す死体。一番大きなドスジャギイの体には、大きな爪痕

が残され、肉が削げ落ちていた。その象徴とも言える頭の後ろを取り巻くように生えている扇状のトサカは引きちぎれ見る影もない。

アポロがやや離れた位置から見下ろしている間、アルルはそばに屈んで死体の様子を観察していた。

「強烈な熱量にさらされた形跡があるわ。でも、何かが違う……。いくら獰猛なことで知られる火竜とて、こんな、まるで殺すことが目的とするような殺し方はしないはずよ」

手で触れている部分。確かに焦げたような後と、この痕跡に縁取られるように皮、肉、脂肪、体のあらゆる組織が溶かされ混ざり合ってしまった爛れた傷跡がはつきりと残されている。

これが火竜の仕業でないのだとしたら一体どんな化け物が。化け物という単語が思いついた途端に、アポロの思考は止まった。

アルルが息を飲む。

「それに……！」

ドスジャギイの傷口に触れたアルルの指には、粉がついていた。一度も見たこともないものである。赤くて、黒くて、不気味な輝きを放っている。

「何なんですか……、その粉？」

「悪魔の毒よ。悪魔が持ちながら悪魔自身を蝕む毒よ……」

慌てたように指から払い落とすアルル。

悪魔と戦ったことがあると嘯いていたイシュタルが熱っぽく語っていたことがあった。悪魔は龍毒と呼ばれる腐食性の猛毒を持っている。しかしそれは悪魔自身を蝕むほど強烈な毒なのだ。それは赤黒い光を放ち、触れるものすべてを蝕む。

「悪魔……、それじゃあ……」

セイレムの里の人々が悪魔と呼んだ、呼ばざるを得なかった怪物がいた。それはあまりに残忍で狡猾で、殺すということを楽しんだ。だから悪魔と呼ぶ以外の呼び名が見つからなかったのである。その悪魔のまたの名を、古龍。

死体を洗う川のせせらぎを羽音が叩く。落ちた影は大きく翼を広げ、屍をなお冒流する。

東から来訪するは太陽。



## 第一七話「王の箱庭（Killing Field）」

太陽降り注ぐ砂漠を黒曜石の光沢を放つ古龍が悠然と砂をかきわけ泳ぐ。もしもそれが脅威でさえなければ、人を脅かしさえしなければ、それは何とも雄大で美しいとまで思える光景であった。

黒曜の輝きは刃では貫けぬ堅牢な鎧に他ならない。時折爆ぜる赤と黒の輝きは龍さえ蝕む猛毒。突き出される三本の剛角は人類が持ち得たどの兵器よりも頑強にして強力。その体躯は王国が保有するどの大型飛行船よりも巨大であった。

街そのものが、いや、要塞そのものが疾走する様は、美しくも、しかし対峙する者には絶望のみを与える。

そして、生きた要塞に挑む不幸な敵対者もまた、要塞であった。

シユレイド王国グングニル級機動要塞グングニル。バリスタ、大砲で完全武装した双胴船をその倍はあるような巨大な気球が支えている。三隻のみ存在する大型飛行船の中で最大の戦闘力を有する戦艦が、その影を王龍テラドミナスに重ねるように落とした。

クルーの喧噪慌ただしいブリッジにて、様々な声が飛び交う。

「王龍テラドミナスとの針路同調を確認。相対速度〇」

動力炉では屈強な男たちが半裸の状態で次々と燃石炭を炉へと放り込んでいる。燃えることで放たれる膨大な熱量を利用した蒸気機関が熱を力へと変える。船尾、船底、船側に配置されてプロペラが勢いよく回転する。生み出される推進力がグングニル級の巨体をテ

ラドミヌスに食らいつかせる。

最大船速をもつてしても、グングニル級は王龍と歩幅を合わせるだけで精一杯であった。船体に負荷をかけるまで高められた速度はグングニル全体に小刻みな振動を引き起こし、木の軋む音がブリッジに響きわたる。

この船の艦長の名はヘリオス。厳めしい面構えをした初老の男性である。痩せ型で、決して屈強には見えない。しかしその存在感はブリッジに適度な緊張感を与え、そしてヘリオス自身、直下に古龍の王がいることなど構った様子なく艦長席に腰を下ろす。

「すでにミスカトニツクの姫君は我々を視野に捉えている。無様な真似は見せるな」

「了解！」

艦長の言葉に重なるクルーたちの声。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦スレイプニルはすでにこの空域に到達している。出発は出遅れたはずであるが、スレイプニル級の速度はグングニル級を遙かに凌駕していた。その事実がヘリオスの自信を揺るがせることはない。それどころか、グングニルの力を示す恰好の舞台であるとさえ考えていた。

ヘリオスは艦長席のすぐ脇に立つグラジオラス特務騎士をかすかに盗み見た。

「右船武器床より連絡。降下準備完了！」

「左船武器床、同じく準備完了！」

右船、左船という表現は双胴船であるグングニル級独特の表現である。両側の船で船底に備えられた兵器の使用準備が整ったことをクルーが伝えてきたのだ。

その兵器に名前などない。名付ける必要がないほどに単純明快な兵器であるからだ。

ハンターが狩猟に用いる大タル爆弾、その中でも特に強力な大タル爆弾Gを船底を展開して落下させるのである。その数、総数にして百。

「グラウンド・ゼロ標準を維持」

「標準維持！」

直下に爆撃するこの標準は、本来ならば空中に制止し続けることを指示するためのものである。しかし、今回は移動する標的が目標であるため、相対速度を零に、テラドミヌスの直上を維持することを命じたのである。

グングニル級も最大船速を維持したまま長時間の飛行を行うことはできない。決着は、早いに限るということだ。

「シユレイド王国の力、カビの生えた古龍どもに教えてやれ。貴様等が極地に籠もっている間、すでに覇者は変わったのだということな」

グラジオラス特務騎士の言葉を借りるなら、古龍とは、時代遅れ

の覇者にすぎない。

「爆撃開始！」

「爆撃！」

「開始！」

ヘリオスの言葉をクルーた復唱する。その指示は送声管を伝わり船底の武器床へと届けられる。

開かれるは地獄の蓋。グングニル級の底が開かれ、整然と並べられた大タルの赤い色が砂からの照り返しに映える。あまりに過剰な火力から狩猟には厳しい持ち込み制限が設けられている大タル爆弾G。左右に五〇ずつの大タル爆弾Gが並ぶ光景などどのような熟練ハンターとて目にしたことなどないだろう。大タルを支えるロープが端から切り落とされ、爆撃が開始される。

大タル爆弾を起爆するには、必ずしも火を必要としない。わずかな衝撃で爆発するのである。そのため、移動中に爆発などしないよう安全装置が取り付けられているが、設置と同時に取り外される。安全装置をつけ直すことは構造上できないため、一度設置した大タル爆弾を持つことができないのはそのためだ。

そう、落とすだけでよいのだ。

グングニル級の船尾側から降下を始めた爆弾の列は王龍の背を順に叩く。生じる爆発。続く炸裂。火は火を呑み込み、音は互いの反響を吸収し合い濃密な大気を震わせる。上空に位置するグングニルの船体さえ震わせるほどの衝撃が砂漠の砂を吹き上がりさせ砂煙が立

ち上る。

砂の煙幕の中、巨大な影が蠢いた。爆発のそのものを消し飛ばさ  
んばかりの怒号が、音もまた衝撃と圧力を持つ者であるのだとい  
ことを確信させる。グングニル級が振動し、クルーたちは、腹の底  
にまで響く声に歯を食いしばり各々何かに掴まりながら必死に堪え  
なければならぬ有様であった。

そこに王龍の姿はなく、どのような生物でも耐えられるはずのな  
い圧力と高熱にさらされた世界がグングニルの真下には渦巻いてい  
る。

最後の爆弾の投下を終えた時には、炎はグングニルをかすめんば  
かりに勢いを増す。

途端、王龍の声が途絶えた。轟音のみしか聞こえない、矛盾に満  
ちた静寂がブリッジを包み込む。

グングニルが揺れた。突然何かが爆煙の中から飛び出し、大気を  
かき乱した。大気を押し退け、退けられた風がグングニルを揺らし  
たのである。

ほんの数瞬。船を揺らす風が落ち着くと、ブリッジに設けられた  
窓からは外が見えた。太陽の光を受け鈍い青のそれは宙を舞ってい  
た。巨大で、鋭いという表現が似つかわしくないほど太いながらも  
その先端はやはり鋭いと表現するほかない。太かろうと長く、その  
先端は鋭く尖っている。

王龍テラドミヌスの三本の角、その一本が根本からへし折れ、飛  
行船の高さにまで跳ね上げられた後、まさに塔のごとき大きさを砂

漠へと突き刺さる。それはグングニルが、人の力が巨大な古龍さえ揺るがせたことの証であった。

「角の部位破壊を確認！ 効いています！」

興奮気味なクルーの声。ヘリオス艦長は努めて平静を装うも、軽口を話すほど気分は上向いている。

「効いているなど曖昧な報告はやめたまえ」

「失礼しました！」

強い調子でたしなめるものではなく、クルーとて笑いながら返事をするほどであった。

古龍とてグングニルの、シュレイドの力の前には屈服せざるを得なかったのである。

まだ爆煙は晴れない。王龍の惨状を眺めることはできないでいる。しかし、この時気づくべきであった。グングニル級は推力を落とすていない。そして、それでもなお、王龍は直下の煙に紛れているという事実だ。

王龍は、まだその巨体をつき動かす力を、微塵も衰えさせてはいないのである。

甲板から眼下を監視するクルーがまず異変に気づいた。煙が晴れるとともに砂漠が弾けた。そうと表現する他ない。突然王龍を中心として砂が煙りが巻き起こる。

このことは即座にブリッジへと伝えられた。

「テラドミヌスに動きが！」

ただこの一言を、ヘリオスは反射的に判断した。ここにはならない。そんな直感に従ったのである。危険があるとすれば王龍の直上に違いない。艦長のひらめきが、この船を救うこととなる。

「回避！」

操舵手は舵の手順など無視した荒々しい手さばきで車輪を力任せに回す。突然進路を変られたことで慣性に取り残された物品、人々が船内を転げる。船体に大きく負担をかけながらグングニルがその身を動かし始めた時、それは起こった。

あまりに荒唐無稽で、信じられないような絵空事。学者に言わせればそんなことあり得ない、理になっていない、不可能だと断言するだろう。これまで、そのようなことが起きたことなどないからだ。科学が先例の集合である以上、その結論は当然であると言えた。だが、たった一つの例外によって脆くも覆されてしまうことも、科学と理論の宿命である。

王龍がその全身を初めてさらした。力強さを感じさせる四肢。絶えず砂中に埋もれていた尾には無数の突起が生え、背と繋がるその様は荒々しい山脈を思わせる。何よりその大きさは、全長三〇三mもの大型飛行船であるグングニル級の倍を優に超えている。

そのような規格外の大きさが、跳び上がったのである。砂が弾けたのは王龍の踏み切り。こぼれ落ちた砂がグングニルの甲板にさえ降りかかる。それほどまでに両者は接近していた。

王龍の体が左舷をかすめる。あらかじめ回避行動をとっていたこと、王龍の到達した高さがグングニルの高度とほぼ一致していたことからその衝撃は弱い。

しかし、それはあくまでも比較の問題でしかない。

体当たりを受けた左舷は壁が広範囲にわたって引き剥がされ、内部の構造が露出する。揚力確保のための気囊が露出し、人、物資、弾薬、壁を頼っていたものが投げ出された。

「左船、火災発生！ 航行可能！」

「消火作業を急がせろ！」

損害確認に慌ただししいブリッジでは、ヘリオスが顔のしわをさらに深く刻んでいた。

「まさかあの巨体が飛び上るとはな。これが、古龍なのかね？」

「いえ、古龍の力はまだまだこの程度ですみません」

この船の中で最も古龍の恐ろしさを知っているであろう七人の魔女の一人は、床に片膝をついた状態で答える。巨大な船を揺るがせるほどの衝撃とて、古龍の真の力を示してはいないのだ。

自らが仕える王国の船の上で、メイドはすべてを目撃していた。降下する大タル爆弾のもたらす爆発と、その結果、王龍の三本ある



角はその一角を崩した。

しかし、王龍は止まらない。その巨体で空を目指し、まるでグニル級機動要塞を押し退けるかのように空に陣取る。その姿は異形にして頂点。人が目にしたどの生物よりもそれは強い、そして理解を超えている。

翼なく空を我がもの顔で闊歩しながら、それでももう飽きてしまったのだらう。王龍の体は再び砂を求め下り降りる。

膨大な質量を受け止めた砂は砂煙を高く遠く立ち上らせる。それを裂くように王龍がその青い角 二本に減ってしまった を高らかに突き上げた。さも、空を独占したがる暴君かのように。

尖塔としか思えないほどに巨大な角はしばらく天を貫かんばかりに突き上げられていたかと思うと、次第に水平に引き倒されていく。やがて、王龍の針路と角の角度が一致した時、王龍テラドミンスは何事もなかったかのように砂の海を突き進む。

砂漠に突き立てられた砕けた角を塔として残して。

最大火力を有する史上最強の戦艦を大きく傷つけて。

そのすべてを、メイドは目撃していた。

微笑みに縁取られた瞳は大きく開き、エプロンが風に揺れている。

「凶眼は、魂さえ写し取る」

モガ村は孤島にある。そのため、普段手に入れることができない物品を運んできてくれる交易船は欠かすことができない存在であった。そのため、定期的に村を訪れては、船が村に接岸する光景はすでに生活の一部として馴染んでいる。

それがどこか違和感をもっているように感じられる。村人の多くが感じていることであった。以前村を訪れた時のように、凍土からハンターたちを連れてきた訳ではない。ごく当たり前の物資が接岸した狭い栈橋を通って村の広場に積まれている。ごく当たり前の光景であるはずなのだ。

「船長、今回は早いな」

モガ村村長のせがれが何気なく問いかけた一言が、その違和感の一端を示しているようであった。

ゆつたりとした、独特の上着を羽織った船長は出納長を片手に持ちながら、筆を振って応じた。

「気になってしょうがないぜよ。古龍が襲うとすれば、モガ村が最も危険じゃけえの」

口の端をつり上げ不敵な笑みをつくる。普段の船長らしい表情である。しかし、船長はその顔を敢えて見せているようであった。事態はそこまで逼迫してはいないのだと示す意図がそこにはあった。

がたいがよく、上着を羽織っただけのほぼ半裸の肉体逞しいせがれ殿が萎縮でもしているかのように腕を組んでいた。肩幅が押さえられている分だけ、小さく見えてしまうのである。もっとも彼の場

合、有事の際には年老いた父に代わって村をまとめなければならぬ立場にある。その責任の大きさを受け止めていると好意的に判断することができる。

セクメーア砂漠での出来事はロックラック諸島では対岸の火事であった。しかし、事態が事態であるだけに、誰もが安心しきるといふことはできないのである。

いつ、何が起きても不思議ではない。

よって、島の反対側からまず光が届いた。そして、破裂音がモガ村の地面とも言える木の板を震わせる。誰もが一斉に視線を送る丘の向こう側から、黒煙がもうもうと立ち上っていた。煙の中に覗く火の粉が、尋常ならざる事態が発生したことを告げていた。

「何事だ!？」

広場に面した家から村長が飛び出す。すでに足腰に衰えが見られる年齢であるが、その動きは機敏であり、しかし慌てた様子ではない。

モガ島にいれば誰でも気づかずにはいられない轟音はさらにハンターたちを家から追い出す。ヒュプノスとイシュタルの二人である。防具こそ身につけていないが、その行動は迅速である。

「村長! 村人を集めてくれ。女、子どもを中心に戦えない人は安全な場所に隠して、戦える者は武器を持たせて警戒にあたらせてほしい」

ヒュプノスの言葉頷く村長。村長指揮の下、村人が一斉に行動を

開始する様を確認してから凍土の男性ハンターは仲間の方へ振り返る。

「イシユタル！ 覚悟はいいか？」

大して厚くもない胸を張って、イシユタルの鼻息は荒い。

「当たり前でしょ。私はこの中で唯一古龍と戦ったことがある……」

「そのネタはもういい」

「ネタって何よ、ネタって!?!」

事態は緊急を要する。そう、自慢話を切り上げることを決めたヒュプノスの思惑は裏目にでた。イシユタルが目を釣り上げて大柄なヒュプノスに体格差考えることなしに突っかかってきたのである。こう言う時、凍土の男は女性をなだめることしかできない。セイラムの魔女で知られるほど、女性が様々な意味で強い里なのである。

「お、落ち着け……」

無論、この程度で言葉でなだめられるくらいであればはじめから激高などしていない。イシユタルは悪魔と戦った時の様子を並べ始める。もっとも、初撃でのされてしまったイシユタルは、同じような話題を繰り返すばかりである。

村人はこの場違いな二人をどうしたものかと遠巻きに眺めていたが、ただ一人だけ、沈んだ声で話しかけた。

「あの、ハンターさん……!」

それが途中で意を決したように声が強さを増す。それはイシュタルの剣幕をかき消し、ハンター二人は声の主を捜す。

この地方特有の赤い制服を身につけた受付嬢の少女が今にも泣き出しそうな顔をしてうつむいていた。

たじろいだ表情を元に戻しながら、ヒュプノスにはこの少女が心配していることが容易に推測できた。アポロ少年のことである。普段喧嘩している。それは、いつもそばにいてくれるという安心感ゆえの行為に他ならない。アポロが異変のただ中に投げ出されていることが心配にならないはずはない。

さて、こんな時どんな言葉をかければいいのか。女心にヒュプノスよりも詳しいはずのイシュタルは、救いを求める眼差しを気まずそうに、しかし顔を逸らす。仕方なく、ヒュプノスが前にでる。「アポロのことなら心配しなくていいよ。アルルもいるし、彼もハンターだ。生き延びる術というものを知っている。だから、心配しなくていいよ」

嘘ではなかったが、一抹の不安を感じていないはずもない。それでもこんな大男が不安げな表情を見せることはできない。

「はい……」

少女はそう答えてくれたが、本当にその不安を解消できたのかは、ヒュプノスにはわからないでいた。

「皆それがしの船に乗るぜよ。今は一度島を離れた方がいいけえの

う

不安を取り去る方法がわからないでいる内に、村に響いたのは交易船船長の威勢の良い声であった。棧橋の根本に立ち、その後ろには立派な交易船が停泊している。

「船長、恩に着る。戦える者は武器を持って村を守ってほしい。俺たちは様子を見てくる」

遠巻きに感謝の意を伝え、ヒュプノスはもう一度島の反対側に目をやる。そのタイミングに合わせるかのように、もう一度爆煙が立ち上る。戦いが続いているということは、まだアポロたちが無事であるということだが、それが安心感を与えるわけではない。

モガ村の人々は自らに災難が降り懸かったことを思い知りながら、遠く戦っている仲間の身を案じていた。

受付嬢の手が胸元で強く握られ、その口からは戦っているであろう少年の名がこぼれた。

「アルルさん、あれが、あれが古龍なんですか!？」

薄く張った水を蹴る音にアポロの声が混じる。声を張り上げているのは水音に邪魔されまいという抵抗ではなく、その興奮の度合いを示している。

ドスジャギイを狩る。この地方でハンターを志す者なら誰でも一度は経験するような通過儀礼とも言えるようなクエストである。と

ころが、狩猟場にやってきた時、すでにドスジャギイは死んでいた。殺されていたのである。

犯人は得体の知れない怪物。本来、クエストにはかのモンスターが乱入してくる可能性がある場合、事前に環境が不安定であると通達される。それが今回なかったのは、ギルドの怠慢か、受付嬢の悪戯だろう。

川に浸る足を動かしながら、アポロは首も動かす。受付嬢がそんな悪質なことをするはずないと自らの考えを否定したのだ。

今、アポロはアルルと並んで逃げている。ドスジャギイたちの死体があつた場所を北上し、海岸線へと出るため川の中を走っているのである。この川は左右を壁に挟まれており、ひたすら川の流れに沿って行くほかない。

「凍土のとは違うものだけど、火を操る古龍のことは先輩から聞かされたことがあるわ。たしか赤いのが雌で、青が雄……、いえ、逆だったかしら。そう、青が雌で、確か名前はナナ・テスカトリ」

「名前なんてどうでもいいですよ！」

難しそうな顔をしながら、アルルはそれでもずいぶん余裕があるように見えた。つい、声を荒らげてしまう。

足が暖かいのだ。いくら温暖な気候で知られるモガ島とて、水温まで暖かいわけではない。その事実が、アポロをただ焦らせていた。

これは古龍のせいだからだ。

風が吹く。それはアポロの背を叩くと、その暖かさを伝えてくる。そして白い湯気。アポロは思わず足を止めて振り向いた。

古龍が、炎妃龍ナナ・テスカトリがすぐそこにまで来ていた。

アポロがこれまでに目にしたことのあるどんな生物よりも大きくて、どの生物とも違う。全身をくすんだ青で包み、人の胴体ほどもある立派な四肢を持ちながら、その背には翼がはためいていた。大きな顔には鋭い歯が並び、その口元とはうれしそうに歪んでいるようにも見える。王冠を叩いていびつな形にわざわざ潰したような角が赤黒い光を纏っていた。

炎を操る古龍の周りは歪んで見えた。高熱を纏い、足を浸す川の水が暖められ湯気を放つ。アポロの足を暖めてくれる温水はその力に由来する。一歩歩くだけで高熱を帯びた歪んだ大気が移ろい、水面を揺らした。近づかれた分だけ、アポロの体を熱が叩く。

対峙している。そういえば聞こえはいいが、アポロは動けないでいた。翼を除く体の高さだけで人の倍ほどもある。その顔は人の胴体よりも大きい。腕みたいな太さの牙の間から、ちらちらと火がくねっていた。

「伏せなさい！」

後頭部を強く押す力。アポロは瞬間的に膝を折り、抵抗することなくその顔面を川の中へと押しつけられた。兜の隙間から水が入り、全身を濡らす。浅い川が、それでもアポロの体を包み込んだかと思うと、途端に背中を焼け付くような痛みが通り過ぎる。

古龍が口から炎を吹き出したのだ。水の中から盗み見た光景は、



ナナ・テスカトリが首を右から左へと動かし、炎が薙げ払う様であった。火竜リオレウスのように可燃性の体液に引火させた玉を吐き出すのとは違う。炎を直接吐き散らすその姿は、古龍という存在の異質さを物語る。

炎がやむなり、アポロは弾けるように体を起こした。

「アルルさん！」

アポロが炎の直撃を免れた理由は明らかであった。そして、アポロに覆い被さるように身をていして庇ってくれたアルルの方がより深刻なダメージを負っているであろうことも。

川に両膝をついたアルルの背からは、白い煙が立っていた。

「かすり傷よ、気にしないで……」

顔からは汗まで吹き出ているというのに、アルルはすぐに立ち上がろうとする。ここで倒れていられる余裕なんてないということ、そして、古龍は何故か火炎放射の射角を高くしており、炎が直接触れることがなかったのだらう。

「海岸の方に抜ければ、海岸の断崖に山頂への抜け道があります。そこからなら、村に戻れます」

肩を貸そうとしても、アルルは一人で立てるからと断った。仕方なく、また走り出す。本心では、逃げきれないのではないだろうかと考えていた。体が大きければそれだけ歩幅も大きい。また炎を吐かれれば左右を壁に挟まれたこの場所では避けようがない。

それでも、アポロは一向に訪れない攻撃を、怪訝とさえ感じていた。走ってしまるのだ。逃げてしまえるのだ。しかし、古龍との距離は一向に変わらない。

「何なんだよ、あいつ……」

「あれが悪魔よ。まるで獲物をいたぶること自体を目的としてるみたいに残酷で、狡猾。だから私たちは古龍を悪魔と呼んでいた」

どうやら、炎を一定間隔あけなければ放てないということでもなく、人の走力と古龍の歩幅が偶然一致したという訳でもないらしい。

川を走り、海岸線が見えるとともに一気に視界が広がる。壁が途切れ、そこには水面に突き出るいくつもの柱が立っていた。かつてモンスターのキモを目当てにエピオスを狩った場所である。

太陽が水面に乱反射し、そして、その輝きの中に火の粉が混じっていた。火の粉。こんな場所に火なんて、古龍くらいしか考えられない。そう、古龍しかない。

何をしようとしているのか。アポロが振り向いた時、ちょうどナナ・テスカトリが顎と顎を噛み合わせていた。火打ち石のように歯と歯をぶつけ合い、生じた火花が、気づけばあたり中に満ちていた火の粉を伝い一気に燃え広がる。初めは視界が赤くなっただけに見えた。その炎が瞬時に広がり、爆発が起きた。

熱と衝撃が体を飛ばす。自分がどうなったのかわからない。気づいた時には川の中でうつ伏せに倒れていた。体中痛むが、深刻なダメージを負わされた様子はない。アルルもまた、離れたところに倒れているが、致命傷ではないのだろう、すぐに立ち上がるうとする。

水がクッションになってくれたから。その程度のこと爆発の衝撃から解放されるはずがないと思いつながら、真つ先に思いついたのはその程度のこと。実際は、爆発に直撃されなかっただけのことであつた。

実際、古龍の周りにはいくつか爆発の後が見られた。何か爆発性の粉を撒いて、それを一齐に爆発させているのだろう。その密度によつて爆発する場所としない場所に分けられる。

もし、古龍がその区別を意図的にできるのだとしたら。

古龍は、アポロたちをいたぶつてるのだ。ドスジャギイたちをあつさり殺してしまつたから殺し足りないのだろうか。残酷だとか残酷だという概念は知能ある者の特権だと誰か言っていなかつただろうか。

それなのに、古龍は殺すことを明らかに楽しんでる。

「こんな奴が村に行つたら……」

川から立ち上がりながら、アポロの脳裏には嫌な想像がよぎつていた。村が燃え、人々が殺される。何故だか受付嬢の笑顔が浮かんできて、アポロの心は定まつた。

太刀を抜き放つ。鞘を走る独特の金属音が大気に染み込み、陽光が一筋刀身に浮かぶ。

狩猟経験はエピオスが七頭に、ジャギイを十頭と少し。大人しいアプケロスやケルビを入れても五十に届くことはないだろう。そん

なハンターが古龍に挑もうとしている。

「何してるの!?!」

アルルの疑問は至極当然でさえあった。

「俺たちが逃げたらこいつが村を襲うかもしれない。そしたら、みんなが危険にさらされる!」

「勇気と無謀を取り違えないで。新米ハンターであるあなたに何ができるっていつの?」

「はじめから諦めてちゃ、何もできませんよ!」

アルルは声こそ大にしながら、近づいてはこない。古龍の出方をうかがっており、不用意に動くことができないでいるのだ。

ナナ・テスカトリは、二人のことを交互に眺めている。まるで、獲物としての品定めでもしているかのように。

「私たちの故郷ではね、嵐の日はどんな人も里を出ないものよ。その人がどれほど優れていると、立派であろうと、嵐は等しく押し流すと知っているから。思いだけで何とかできるほど、現実甘いものではないわ」

わかっている。勝てないことくらい。

「でも!」

ここで足止めしなければ村を目指してしまうかもしれない。こい

つは火竜とは違う。リオレウスなら崖から吹き付ける風が複雑な気流を作り出す村をわざわざ襲撃しようとはしないだろう。アプトノスなどの草食種が豊富であれば、わざわざ村を襲う理由はないからだ。

だが、古龍は違う。人がいるとわかれば、殺すことができるのであれば襲ってくるかもしれない。

ここで止めなければならない。太刀を握る手には、自然と力が籠もった。すると、別の金属音。見ると、アルルが片手剣を構えていた。毒々しい皮が張り付けられた盾と刃。防具と同じくギギネブラの素材を用いて作られた毒を宿す剣なのだそうだ。トキシックフアングと呼んでいた。

「危なくなったらすぐに逃げる。イシュタルたちが駆けつけてくるまでの時間稼ぎに徹する。約束できる？」

「はい！」

アポロとてハンターである。せめて生き延びる術くらいなら体得している。勝算なんてあるわけではない。ただ村を守らなければならないという使命感がアポロをつき動かす。

すると、ナナ・テスカトリが顔をしかめた。そんな表情を作ったのである。腹立たしげに歯を噛みしめ、その首はふと上を見る。その視線の先で、羽音が次第に大きさを増していた。

「そんな……」

「古龍が希少だなんて奴がいたら、今度からひっぱたくことにする

わ

対峙しているナナ・テスカトリとは別のナナ・テスカトリが、今降り立とうとしていた。古龍が二頭いる。

「まあ、今度があればの話だけれど」

アポロはつい足が後ろの地面をこする。アルルでさえ、その顔に余裕はいっさい見受けられない。

古龍はまだその真価を見せず、人の絶望は始まりを告げたにすぎない。

そして、アポロは気づいてはいなかったが、もう一つの来訪があった。ハンター二人の後ろに広がる海。そこに、青白い稲妻に帯電する背鰭が水を裂いていたことを。

「せ、船長！」

声を飲み込むように立ち上る水柱。膨大な熱量を受けた海水が一気に膨れ上がり波として船底を叩いた。

まだモガ村を見ることができるとほど近い海域で交易船は古龍の襲撃を受けていた。四肢有翼の青い古龍が吐き出す炎は海面をかすめただけで船の自由を奪うほどの波が起こる。

船員の多くはなす術なく手すりに掴まり、荒波に耐えていた。その中に、船長の姿もあった。

「あれが、古龍……」

炎妃龍ナナ・テスカトリはモガ村をロツクラツク諸島第一の獲物と定めていた。その口には炎がちらつき、しかし、決して直撃させようとはしない。海水に炎が着弾する度発生した波力が船を強打し、剥がれ落ちた木片が波に吞まれて消えていく。

交易船の船室は不自然な揺れに混乱の極みにあつた。モガ村から避難した子どもや女性の悲鳴が、揺れに合わせて引き起こされる。古龍が襲ってきた。そんな声が甲板の方から伝えられると、混乱は絶望へと変わっていく。

子どもは母にすがりつき、母は子どもを抱きしめて離そうとしない。

無情にも、船を一際大きな揺れが襲つた。船室の村人が一斉に投げ出され、体をそこかしこに叩きつけられた。壁に叩きつけられ身動き一つできない人。床を勢いよく転がされて子どもを離してしまつた母親。気を失っているらしく、子どもが一人で泣いている。

船室には人々の苦悶と慟哭、そして、うなり声がさらなる阿鼻叫喚を招来する。弾け飛んだ壁は大きく開き、海上を飛び回る異形の怪物の声を流し込んでいるのだ。

考えられないほど軽々と飛び回る。それは、どのような飛竜さえも上回る。

その爪は人の肌などたやすく斬り裂く。それは遙か遠くの物語ではなく、目の前の現実。

すぐそばに倒れる母の元にさえたどり着けないほど子どもは怯えている。古龍の声が聞こえる度に体を震わせ、小さくなった体は、見ている痛々しいほどである。誰も手を差し伸べることさえできない中、小さな手が子どもの体を抱きしめた。

子どもはその温もりを与えてくれた人物のことを、白いカフスで理解する。ギルドの受付嬢であった。子どもに手を差し伸べられたことは、受付嬢の強さを意味してはいない。受付嬢も震えていた。今、目の前に展開される現実の恐ろしさと、この恐怖と対峙している少年のことを思い浮かべると震えは止めようがない。

「アポロ……、どうか、無事でいて……」

涙が滴となって落ちる。それでも止めどない涙は目に溜まり、受付嬢は涙で濁った瞳を大きく見開いた。

海面が輝いたかと思うと、水面を突き破ってその首を白日の下にさらした青い竜とつき従う雷の光。その存在を誇示する咆哮とともに高電圧に達した雷が弾ける音がする。

人が知る海洋生態系の頂点に立つ王の名前を、受付嬢は口ずさむ。

「海竜ラギアクルス……」

地に堕ちた太陽と大海の王。人が対峙するにはあまりに大きな姿が、少女の瞳には映し出されていた。



嵐の空を燃え盛る火の玉がゆっくりと落ちていく。風翔龍クシャルダオラに破壊された動力炉から漏れだした炎が船体を燃やしながら気球を徐々に焼き破っていた。グツフルファクシ級飛行船が撃沈された。このことはフギンムニン級大型輸送船フギンムニンのブリッジに、より深刻な情報とともに届けられた。

「依然、古龍の数が減りません！」

「このままじゃ、押し切られてしまつよ……」

方円を描くブリッジの中心部では艦長が気弱な態度を一時も崩せないでいた。ミナガルデ王国王弟であるという立場以外、ここにいる理由のないマルス艦長は、すぐ脇に立つ妹の毅然とした態度に絶えず気にかけている様子である。

「古龍とて無尽蔵ではありません。グツフルファクシ級を三隻ほど、左舷側を守らせるように指示なさい」

「了解！ グツフルファクシ級、三隻に伝達！」

本来何の権限も持たない少女の言葉が即座に命令としてこの空域に展開する飛行船に伝えられる。しかし、それは単なる決定的な打開策になるはずもないことを誰もが理解していた。

古龍は、嵐が産み落としているかのように次々と沸いてきては、前後の区別ないフギンムニン級を遠慮なく取り囲んでくるのである。

まず疲弊した飛行船が落とされ、手薄になった場所を中心に古龍

は攻勢を強める。押し切られないためには、一時も気を抜くことなく戦力を絶えず均一に分布させる必要があった。しかし、それもいつまで持つことか。誰もが、最悪の事態が想定していた。絶望が染み込むようにブリッジを支配しようとしていたのである。

まずは艦長から。

「ねえ、ウエヌス、この戦い、勝てるかな……？」

ウエヌスは睨みつけているほどに鋭い視線を兄に向ける。凡庸な男はそれだけで妹から視線を逸らした。

「勝てるかどうかではありません。勝つのです、兄上」

誰もが絶望に呑み込まれまいと踏みとどまっていた。どのような嵐も、やまないはずなどないのだから。

だが、太陽は決して燃え尽きることはない。

フギンムニンが守る北部の嵐とは対照的に南部では太陽が光を尖らせ照りつける。

炎王龍テオ・テスカトルはハンターが集まる地域を避け、戦力が手薄な場所を好んで襲撃した。

避難民たちが必死に逃げまどう中、その後ろでは鋭い爪に引き裂かれた人が血を流しながら宙へと放り投げられる。ハンターが挑むも、数は十分ではない。吐き出され灼熱の炎をまともに浴び、放射

が終わったその場所には炭化した柱だけが残される。

古龍は試しているのだろうか。人は何度絶望から立ち上がることができるのだろうか。何より、一体どれほどの絶望に押し潰されてしまふのだろうか。

火傷が、傷が、何より絶望が人々の足を鈍らせる。もう助からないそれなら苦しむよりはいつそのこと。終わりのない恐怖よりも、恐怖のある終わりを求めて、人は一人、また一人と砂に膝をつける。

そんな一人を無理に立たせて、少女が叫んだ。

「歩いて！ みんな歩いて！」

少女はエリス。かつて絶望し、自殺まで考えた少女は、七人の魔女フィリアに救われた。フィリアは誓ってくれたのである。教えてくれたのである。最後まで戦うということと、自分たちを救うために諦めないお姫様がいるということ。

フィリアは今も戦っている。燃え尽きない太陽を相手に。

だから、エリスも諦めるつもりはなかった。生きることが諦めた人の肩を担ぎ、無理にでも歩かせようとする。その足取りは遅く、古龍に簡単に追いつかれてしまふほどであることは明白であった。

それでも、エリスは決して足を止めようとはしない。諦めようとはしていなかった。

どれほど深い闇も、斬り裂くにはたった一つの灯火があればこと足りる。そして、灯火ある限り、人は歩いていくことができる。

「王龍、ハリ湖跡地で停止」

空にはシュレイド王国グングニル級機動要塞とミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦、そして、複数のグツフルファクシ級が見守るように浮かんでいる。

王龍テラドミヌスは着地の際にそうであったように、二本に減ってしまった角を空高く突き上げ、砂を押し退けながら制止した。首を上曲げ、頑丈な下顎を接地させることで巨体を動かしていた勢いを殺しているのだろうと推測される。この動きは、さも角を見せつける示威行動と言っても差し支えない。砂を大きくえぐるその強靱さ、角の巨大さは、グングニルのブリッジ・クルーの心胆を寒からしめる。

「随時、報告を続けよ！」

ヘリオス艦長の命令にも、クルーからの返事はない。それは非服従ではなく、王龍に動きが見られないことを意味する。大地の主は角を天に突き刺したまま、足が強く砂を踏みしめる。牙が並ぶ巨大な口が開かれ、静まり返ったグングニルのブリッジに声が響きわたる。

王龍はまるで泣いているようであった。咆哮とはとてもではない方がいいがたい、細く、小さいとまで感じられる声である。

そのような声でさえ、空の船にまで届き、人々を震えさせるには事足りる。

「ここでお帰り願いたいものだ……」

ヘリオスらしからぬ弱気な発言を気にとめるものはいない。

「テラドミヌスが動き出しました！ これは……」

「報告を急げ！」

「王龍、東へ移動を開始！ 進行、止まりません！」

動力炉に火が再び燃え盛り、発生した推力が船体をひとしきり震わせたところで前進を始める。砂を泳ぎ始めたテラドミヌスを追いかけて、飛行船の群が一斉に移動を開始する。

「ディオニユソスの当ては外れたようだ。まったくもって腹立たしい！」

同じ国に仕える男は王龍の進行をハイパーボリア文明の跡地で止まるものと予測してミスカトニック王国の姫君と言い争ったそうだ。見事に破れたことになる。王龍討伐の暁には、酒の一杯でも奢らせねば気がすまない。

「王龍の進行方向には点在するオアシスがあります。恐らく、それらの水を求めているのでしょうか」

「それで満足すると思うかね？」

博識と呼ばれる魔女は、しかし不安を和らげる術を知っている訳ではないようである。

「いえ。それどころか、道しるべになりかねません。オアシス渡り歩いて移動すれば、その先にはドンドルマの街があります」

「古龍というのは何かね、存在そのものが人への害意でできているとでも言うのかね？」

ヘリオスの顔に初めて焦りの色が浮かんでいた。

第十八話「幾千の希望〜Life〜」(前書き)

第一章で悪い方向に反響があつたアマランサス型一人称をまたしてしまいました……。

今回はちょっと短めです。

## 第十八話「幾千の希望(Life)」

ここはミスカトニツク王国王女の衣装部屋である。シルクにレースをあしらひ、実用性など皆無のドレスがところ狭しと並んでいる、わけでは決してない。

動力炉に由来する駆動音が耳の奥に軽い余韻を残しながら、それを持続する。

空飛ぶ戦船に設けられた衣装室に並べられたクローゼットははずかに二つ。鎖で嚴重に封印された一つと、すでに開け放たれた一つ。開かれたクローゼットのすぐそばには純白のドレスが無造作に脱ぎ捨てられていた。クローゼットに仕舞われていた衣装が、ドレスの代わりにセントポリアの体を包んでいる。

座る王女のすぐそばに、紫の制服を身につけた従者は控える。

「王龍がさらに東に移動を始めたようです、セントポリア様」

スレイプニル級の実質的な副艦長を務めるエフィーは優しく王女の髪を梳く。白く、しかし艶やかな髪は柔らかい香りをはらむ。冠を思わせる兜の中を通してツインテールに分けられた髪を、エフィーは優しく梳いた。

「最初からわかってたことだっ」

なげやりに振られる王女の小さな手は、少女の肌の白さには負けるものの、それでも汚れない純白をした手袋がしっかりと守っていた。



「大丈夫でしょうか？」

「切り札も出さない内から投了する奴なんていないって」

薄い胸を王女なりに精一杯に張っても、残念なことに覆い隠されている。鎧と呼ぶことは無粋。芸術品とも神々しいとも賞賛できる金属製の衣装。スカート状の腰装備から覗かせる小さな足は、女性に対する誉め言葉の一つである美しさよりもかわいらしさを感じさせる。

「セントポリア様は、本当にアマランサス様のことを愛されているのですね」

「ちょっと、その言い方……」

王女の白い頬は、紅を添えるとすぐにそれがわかる。その様子に髪を愛でる副官は微笑みをこぼす。このかわいい主はまだ子どもで、感情を素直に示す。ため息をこぼしたのは、やはり呆れたから。

「エフィーはさ、誰かと一緒に命がけで戦ったことってある？」

からかわれているということ、セントポリアは起ころうとは思わない。

「その時はさ、こう思うんだ。この人となら、何でもできる気がするって。この人なら、信頼しても大丈夫だって。それに、もしだめでも、この人となら、死んでもいいって」

王女の脳裏には、肌を指す冷気と体を打つ雪に覆われた凍てつく

大地の様子が描かれる。

セイレムの里。セイレムの魔女と呼ばれる優れた力を持つ女性ハンターで知られる里で、セントポリアは悪魔と戦った。勝てるはずなどなく、何度も心が挫けた。それでもその度に立ち上がる事ができたのは、アマランサスがいてくれたから。

「でも、アマランサスはきっと違うことを考えてたと思う。この人のためなら何でもしよう。この人の信頼に応えよう。だめになるなんて考えない」

アマランサスは一人で悪魔と戦うつもりでいた。たとえ一人であったとしてもアマランサスなら悪魔に勝てたかもしれない。霞龍オナズチに。

「私はまだアマランサスに甘えてる。でも、それはアマランサスがそれだけすごい人だったこと」

セントポリア王女が身につける鎧は、芸術品であり、神々しくもあり、少女のかわいらしさを残す純白の法衣。

「別にアマランサスは最強のハンターってわけじゃないよ。ただ強だけのハンターなら他に何人でもいるよ、きっと。でも、アマランサスが一番強い。だって、アマランサスには見えてるんだから。どうしたら勝てるか、どうしたら一番いいかってこと」

今なおスレイプニル級高機動艦の船首に立ち、アマランサスは砂漠と王籠テラドミヌスのことを眺めていることだろう。セントポリアが凶眼と讚えたその瞳にはどんな世界が映し出されているのだろうか。

ただ一つ言えることは、絶望なんて絶対に見えてなんていないこと。

「アマランサスが絶望したら、その時は私もすべてを諦める。だって、アマランサスが諦めてるなら、その前に世界中のすべての人が諦めてるだろうからね」

唇は軽やかに動き、紡がれるは信頼と絆。その小さな口元にエフィーはそつと手をそえる。筆に乗せられた紅が少しずつ、王女の唇に彩りを添えていく。

「古龍との戦いが、楽じゃないってことくらい、はじめからわかってるんだしさ」

かまわず話を続けていたセントポリアは、自分が話したいところまで続けたところで、その大きな瞳で瞬きを繰り返した。

「ところでエフィー、どうしてお化粧までするの？」

「セントポリア様が余りにかわいらしかったものでつい」

「あのね……」

純白の衣装は鎧と呼ぶにはあまりに優雅で、王女は戦士と見るにはあまりに見目麗しい。

しかし、どれほど美しく輝こうとも刃は刃にすぎない。鑑賞の対象となることはあるうと、その本質は変わることはない。

「まあ見てなさい。古龍がすべての力を出していないように、私たちがだつて、まだまだ力を残してゐるんだからね」

赤い瞳には意志の輝きが宿り、その眼差しは部屋の奥へと向けられている。クローゼットと同様に二つ。どちらも太い鎖に嚴重に取り巻かれ、その姿を確認することはできない。

古龍は強大である。人よりも、飛竜よりも何よりも。それでも、まだ絶望と諦観が支配するには早すぎた。まだ絶望は、何も包み切つてなどいない。

嵐の中を古龍が飛び交い、稲妻がその影を追う。稲光に追いつかれた風翔龍クシャルダオラが苦痛にうめき、動きを止めた隙に次々と雷が古龍を打ちつける。

ハンターたちは古龍の攻撃にさらされ傷だらけとなつた飛行船上で、その光景を眺めていた。

古龍を憎む雷が、人に加勢しているのだ。

「あれは……、ベルキュロスの群だ！」

ミナガルデ王国フギンムミン級大型輸送船の円形甲板で戦う誰かが叫んだ。

雨粒が視界を塞ぐ。しかし、人々の目にははっきりとその姿が見えていた。雄大に翼を広げ、翼から伸びる鍵爪は天女の羽衣のごとく優雅。纏うは雷の輝き。舞うように優美。雷こそが力。よつてそ

れはこう呼ばれる。舞雷竜ベルキュロスと。

防衛線の切れ目を狙おうと広く展開していたクシャルダオラの背後をついたベルキュロスはその翼に嵐を受けながら古龍へと襲いかかった。

体中に帯電しての体当たりはクシャルダオラを弾き飛ばす。口から放たれる雷球は顔面に直撃すると、風翔龍をひるませるには十分な力であった。

人は古龍の猛攻を捌けないでいた。徐々に戦力を削られてきたのである。それが、ベルキュロスの登場によって一変した。

「ドラギユロスの姿もあるようですね」

スノードロップの目は、灰色の甲殻を捉えていた。古龍に対抗するために古龍と同じ毒を持つに至ったベルキュロスの亜種は、冥雷竜ドラギユロスと呼ばれる。ベルキュロスの放つ雷の白い輝きに混ざり、黒い雷がその煌めきを主張して譲らない。

一体何が起こっているのか。呆然と嵐を見上げるでしかないハンターたちに、スノードロップは風音に負けまいと叫んだ。

「味方ではありません。ですが、敵でもありません。同じ敵を共有する者です!」

「仲間ですよ。ベルキュロスたちもこの世界が危ないって駆けつけてくれたんですよ!」

シギユンの楽観的な言葉が重なってしまった。そのせいかわから

ないが、ハンターたちは困惑したように動きを止め、しかし、誰かがその流れを変えた。

誰かが叫び声を上げながら放ったバリスタの矢がクシャルダオラの翼を傷つける。その隙を逃さず、ベルキュロスの鍵爪が電流を帯びながら振り落とされる。くしくも行われた人とモンスターの共闘。人々は理解した。敵は誰なのかということ。

自らを鼓舞し合うように巻き起こる闘いの声。呼応するようにベルキュロスの咆哮が響く。

そんな様子を冷やかに眺めるスノードロップ。ため息が自然とこぼれ落ちる。

「モンスターが仲間だなんて、おとぎ話でもないでしょうに。でも、つい頼もしく思えてしまいますね」

かつて峡谷でドラギュロスと肩を並べて戦ったことを思い出しながら、スノードロップはつい微笑んでしまった。クシャルダオラと戦うドラギュロスの中に、綻びた包帯の切れ端を翼に残した者がいた。

クシャルダオラの体が宙を舞う。飛んでいるのではない。飛ばされたのだ。

一対のねじれた角が天を目指して砂を突き破った。湿った砂が弾かれ、雨がそれを洗い流す。明らかになるその姿は砂漠の飛竜、角竜ディアブロスそのものである。飛ぶことを忘れつつある飛竜が、

その対価として得た膂力を見せつけるように空飛ぶ力持つ風翔龍を地中から突き上げたのである。

一頭だけではない。地中から次々と這いだしては、人のことなど見えていないかのようにクシャルダオラを睨みつける。

その中にまだ人の背丈に毛が生えた程度の高さしかない二頭のディアブロスが身を寄せ合うように並んでいる姿があった。

この光景は、ティルテユにかつて、メイドと二人で狩猟に出向いた時のことを思い出させる。

「あの二頭、まさかあの時の……」

本来一頭で子育てをするディアブロス。しかし、ティルテユの父は双子のディアブロスが二頭で協力しながら子育てをすることを突き止めた。二頭のディアブロス亜種の狩猟を終えた時、二つの巣にはすでに巣立ちを終えた形跡しか残されていなかった。仮にその時のディアブロスが生き延びていたとしたら、まだまだ幼竜であろう。ちょうど、ここに並ぶ二頭のディアブロスのように。

「まさかな」

もつとも、そんな偶然がそうそうあるはずがない。かつて死力を尽くして戦った相手の子どもと、こうして肩を並べて戦う機会など。

樹海上空をヒミンブリュード級輸送船が船団を組み飛んでいる。

ンガイ村ばかりではない、各地の里から補給物資を満載した飛行船

が南を目指しているのである。

その内の一隻が発した警報が、周りの船に引き継がれることで伝播する。やがて空全体がけたたましい銅鑼の音で支配されるに至る。

針路上に古龍の群を見つけたのだ。

「古龍の侵攻が想像以上に早いようだ」

木箱に腰掛けたまま、アレスはつぶやいた。歴戦の特務騎士に焦りは見られず、しかし、人として焦燥は自然な心の機微である。その不自然さを解消するかのように、ヘルメスが代わりに大いに慌てていた。頭を抱え、甲板の上をのたうつ。

「どうすんだよ、ヴァルカン!? このままだと群の中につっこむぞ!」

名指しされたヴァルカンはちょうど食事時であった。棒状に加工された携帯食料を啜えたまま、古龍の方を見る。まず、食料を噛みちぎってから、ヴァルカンは咀嚼しながらの気楽さで答えた。

「問題ねえって。よく見てみるよ。あいつらどれも俺が以前戦ったデカノツクの半分もない奴らばかりだぜ」

「こいつ、感覚が麻痺してやがる……」

かつてヴァルカンが戦った樹海の主たる巨大なヒプノックに比べれば巨大なことで知られる水竜ガノトトスでさえまだ小さいだろう。そもそも基準が間違っているのである。



ハンターを初めてまだ間もない身空で古龍なんて化け物と戦わなくてはならない。ヘルメスが時世の句を考え始めたその時、鳥たちの声が轟いた。そう、轟いたのである。さえずりなどでは決してない。

「鳥竜たちが飛んでる……」

樹海から次々と鳥竜たちが飛んでいた。怪鳥イヤンクツクに眠鳥ヒプノック。この地方では珍しい彩鳥クルペッコの姿もあった。

薄い赤をした甲殻のイヤンクツクは火竜ほどではないにしろ火を吐くことができる。その独特の嘴からはすでに炎が覗かせている。

全身を体毛で覆ったヒプノックは基本茶色である。しかし、何故か一頭だけ、白い体毛をしたものが混じっている気がしたが、ヘルメスにはそれが意味することはわからなかった。

クルペッコはまるで笛のように膨らんだ嘴を誇らしげに膨らませ、まるで音楽でも奏でているかのような鳴き声をした。

「主さまも来たみたいだな」

携帯食料を食べ終えたヴァルカンが目にする方向をつられて目にしたヘルメスは、思わず後ろ向きに甲板を転げた。

「あ、あれが例の巨大ヒプノックなのか!？」

辛うじて体勢を取り戻したヘルメスの指の先、巨大な嘴が浮かんでいた。大ききこそ桁違いながら、その姿は紛れもなくヒプノックそのものである。それが、ほんの少し大ききだけであった。そう、

ヒミンブリユード級よりも。

「自分の庭先で暴れられたんじゃ、怒鳴って出てくるに決まってるだろ」

もう牙ハシは完全に修復されているようだ。ヴァルカンはただ冷静に手に着いた携帯食料の粉を払った。

敵が千の力で打ち込んできたならば、千の力で打ち返せばいい。敵がの力で打ち込んできたならば、万の力で打ち返せばいい。

灼熱纏う炎王龍テオ・テスカトルに叩きつけられたのは一塊の火球。上空から飛来した爪が、古龍の強靱な甲殻を削り、そこから猛毒を流し込む。

テオ・テスカトルと追われる人々との間に羽ばたきが介入する。火竜リオレウス。雌火竜リオレイア。赤と緑の火竜たちがテオ・テスカトルと睨み合う。

この光景を、避難民たちは驚きをもって見上げていた。

「飛竜たちが私たちのこと、助けてくれるの……？」

砂にまみれ、火傷、擦り傷だらけの人々の中で、エリスは惚けたように呟いた。

助ける。この表現は必ずしも適切ではない。火竜にとって、自らの世界を脅かす存在を排除しようとしているにすぎない。そして、

火竜は必ずしも人をその対象とは見ない。ことが火急であればなおさらであった。

火竜は決して人を襲わず、ただ古龍へと襲いかかる。

この世界を守ろうと戦っているのは人ばかりではない。この事実は光景として、セクメーア砂漠遙か西の海上でも展開されていた。

海を割り、海竜ラギアクルスの鋭い首が喰らいつかんと伸びる。炎妃龍ナナ・テスカトリが身を翻しそれをかわすと、反撃として炎を吹き付ける。しかし、海に守られたラギアクルスにまで炎は届くことはない。

「ラギアクルスと古龍が戦ってる……」

交易船の誰もがその光景に呆気にとられていた。その中で船長だけが事態を冷静に活かそうと声を張り上げる。

「今のうちに引き返すぜよ！」

ナナ・テスカトリはラギアクルスに完全に気をとられ、交易船には目もくれることはない。ラギアクルスとて、交易船を守ろうとしているわけではないのだらう。しかし結果として、二頭は船から遠ざかり、炎と雷、空と海とが激しい鏖迫り合いを演じている。

船は救われたのだ。

この光景を、ギルドの受付嬢は他の村民とともに眺めていた。船

側にあげられた風穴から、外の様子を目にすることは可能なのである。受付嬢は穴のすぐそばに立ち、遠く戦う海竜の横顔に、涙を頬に伝らせる。

「ありがとう……、ありがとう……」

たとえ海竜の意図がどうであれ、人とともに戦ったくれるという事実には、感謝せざるにはいられなかった。

立ち上る水しぶき。ラギアクルスがその巨体を勢いよく海から飛び出させると、その細く整った体を陽光にさらしながら着地する。川がしぶきをあげ、その四肢が川底を掴んだ。

うなりをあげながら睨み合う古龍と海竜。動いたのは炎妃龍の方である。右腕を振りかざし、まるで猫のような その凶暴さ、残酷さは非ではないが 仕草で爪を払う。それに対して、海竜は思いも寄らない行動を見せた。とぐるを巻くように首を曲げ爪をかわすとともに、体をひねった反動を利用して尻尾を横薙ぎに払った。まるで槍の穂先のように鋭い突起が並んだ尾がナナ・テスカトリの横顔を打ちつける。

海中にはまだ他の海竜が帯電する背鰭で水を裂いていたかと思うと、突然海上に首を持ち上げては口から雷の球を放つ。青白く発光しながら突き進む雷球は地面を伝い、古龍へと殺到する。

人も負けてはいない。アポロは骨刀を大きく振りかぶり、雄叫びとともに古龍の翼を打つ。鈍い音がして、弾かれた太刀に振り回される形で少年ハンターは体を後ろにもっていかれる。

「とつと、と……」

「アポロ、無理だけはしないでくれ。戦いは、まだ始まったばかりなんだからな」

火竜リオレウスの甲殻と鱗で作られた鎧を着た大柄なハンターはアポロの太刀とは比べものにならないほど立派な炎の刃で切りかかる。その太刀筋ははるかに洗練されているとはいえ、物性を無視できるはずもない。甲高い音。しかし弾かれることはなく、ヒュプノスは一息に斬撃を重ねていく。

気刃斬りと呼ばれる太刀独特のこの攻撃法は、自らの呼吸を整え、相手と呼吸を合わせ、重ねて攻撃を続けることにその特徴がある。その性質は、相手の動きに合わせて攻撃することから、弾かれない角度で攻撃でき、またその手数はすべての武器の中でも十指もつとも、近接用武器種はそもそも九しか存在していないのだが に入る。

アポロにとって師にあたるヒュプノスの動きは見事であった。太刀を握る手に力がこもる。

「俺だつて！」

正面から斬りかかることはとてもではないができないので、横から後ろ足のあたりを狙って攻撃を仕掛ける。甲殻ではなくて体毛に覆われたナナ・テスカトリの体は、一見すると決して固くは見えない。それでも鈍い音は変わらず、太刀は弾かれてしまう。崩された体勢を必死に直そうとするアポロの背中を何かが強打し、思わず両手が川底の泥を掴んだ。別に攻撃されたわけではない。ヒュプノス

に攻撃を仕掛けようと体を動かしたナナ・テスカトリの尻尾がたま背中に当たっただけのことだ。

「ほらほら、立ちなさい」

アルルは笑いながらアポロの脇を走り抜けていく。手にしたサーベルは決して十分な鋭さを保持しているようには見えないが、それでもアルルの攻撃は弾かれることはなく、見事な剣捌きで古龍に斬りつけていく。

彼らは皆、このような事態に備えるためにわざわざ遠い凍土から派遣されてきたハンターたちなのである。

あのイシユタルとて、氷牙竜ベリオロスの装備 凍土で主に用いられる装備であるはずなのに、肩が露出しているなど、アルル同様何故か露出が多い に大きな刃を備えた長柄の戦斧、スラツシユアックスを振り回して、何故かアポロ同様弾かれていた。しかし、妙なかけ声とともに何度も刃を古龍の額に叩きつけ、根負けしたナナ・テスカトリを怯ませるほどである。すぐくはないのに、何かすごい。

ここには二頭の古龍がいる。それをモンスターと人間とが示し合わせることもなく分業し、各一頭ずつと戦っている。そうすることによってやうやく戦力は拮抗しながら、それでも着実に人が、いや、モンスターが、この世界に生きる命が古龍を押しつつある。

「きつと、ラギアクルスたちも同じなんだな。この世界を守りたくて、世界を脅かす敵が古龍だったことを知ってるんだ」

この場所であつてラギアクルスが群れている光景を目にしたこと

があった。それは異常行動ではあっても、謂われのない行為では決してない。

人がハンターを集め戦いに備えていたように、ラギアクルスたちもまた来るべき決戦に馳せ参じたのだ。

負けている訳にはいかない。アポロは立ち上がる。たとえ微力であるとしても、この戦いに加わる一人として。

皆で戦わなければならない。力ある者もそうではないものも。皆で戦わなければ、皆で死ぬことになるのだから。

ユクモ地方南端。カダス溪流。

流れるせせらぎを毒持つ太陽が苛み、稲妻の怒りが轟く。

迷い込んだ炎王龍テオ・テスカトルの発する高熱を浴びた水が湯気を放ち、その水には死が浸る。大猪ドスファンゴがその象徴たる牙を折られたまま血を混ぜる。牙も爪も持たない丸鳥グーガアがそのすぐ横に並んでいた。

他のモンスターたちが怯えたように遠巻きに眺めているしかなかったも、ただ一頭、雷狼竜ジンオウガだけが挫けることない戦意をたぎらせていた。

屈強な四肢。盛り上がった胸部は鍛え上げられた筋肉を見せつけている。その背中にはナイフと見紛うばかりの突起が整然と生え並び、その間を青白い稲光が行き交っている。この牙竜種の電流を受

け活性化された帯電性の虫である超電雷光虫がこれでもかとその輝きを増し、ジンオウガの周囲を飛び回る。

その様は万軍の王とそれに従う精兵。

空気が重苦しさを増していく。それは比喩などでは決してない。

ジンオウガの放つ王威が大気を引き裂き、従者の鬨の音が共鳴する。

ジンオウガの電圧に大気がイオン化を起こし、電気の通り道が形成されたのである。帯電していた超電雷光虫は我先にと電気を放出し、それは落雷のように降り注ぐ。

炎の王は羽ばたく。翼から火の粉が飛び、落雷の最中でさえ充滿する。テオ・テスカトルが歯を噛み合わせた。喰いちぎられたのは溪流の光景そのもの。爆発が炎王龍を中心に群発する。

炎と雷とが混ざり合い、二頭の獣の高らかな咆哮が響きわたる。

その声が途絶えた時こそ、戦いの始まりであった。

二頭の王が互いの全身全霊をもって、最強と認めた獲物へと飛びかかる。

草食主は弱い。肉食種のような爪もなく、ただ怯え逃げまどうことしかできはしない。それでも挑みかかってくるのだとすれば、肉食種は諸手をあげて歓迎するだろう。

獲物がわざわざやってくる。



レムリア大陸北西。ムナール雪山。

分厚い雪を風が舞い上げ、吹雪として視界を塞ぐ。そして、生臭い血の臭いもまた、風には混ざる。

草食種ポポは人の半倍も高い体軀をしながら、その顔を覆い隠すほどに厚い体毛はどこか優しささえ感じさせる。実際に、北方に暮らす人々にとってポポは大切な食料であり、労働力であり、欠くことができない友人である。

かけがえない友人が、今は体毛の上からでもわかるほど深々と斬り裂かれ、雪を血に染め倒れていた。

そばで雪を踏みしめるのは捕食者ならぬ殺戮者の姿。鋼の光沢に包まれた鋼籠クシャルダオラである。

クシャルダオラは倒れるポポに興味を失っていた。腹が減っているわけではない。もう殺してしまった。それでもまだ殺したりない。もつと殺したい。もつと壊したい。

喜びに歪むクシャルダオラの目にはすでに次の獲物が写し出されていた。これも同じポポである。親子であるのか、二頭の内、片方は小さい。親とおぼしきポポが子どもを庇うようにその巨体で隠そうとする。

また殺せる。まだ殺せる。その喜びだけがクシャルダオラの感情を支配する。

親のポポがあくまでもあらがおうと前足を高く上げ、クシャルダオラを踏みつけようとする。しかしその動作は緩慢であり、当たる

ことはない。ほんの一息。風翔龍がその鋼の体で圧縮した風を吐き出すと、ポポの大きな体は軽々と吹き飛ばされる。剥き出しの岩肌  
に叩きつけられ、子どものポポは親を失うこととなった。

クシャルダオラの胸中に飛来したのは後悔。簡単に殺してしまっ  
た。もっと楽しめたはずなのに。

親が稼いでくれた時間を、幼いポポは逃げることに費やす。その  
動きは遅く、残酷な怪物はこの哀れな獲物をじっくりとしとめよう  
と決めていた。すぐには殺さない。時間をかけて追いつめ、そして  
殺してやるう。

逃げるポポの背中を追っていた古龍の視線が、突如揺れ動く。何  
かが起きたわけではない。何かを感じたのだ。首を高く持ち上げ、  
辺りをうかがう。

すると、いつまでも姿を捉えられない愚鈍さに痺れを切らせたよ  
うにそれは雪を踏みつけクシャルダオラの目の前に降り立った。

張りつめた胸筋から伸びる翼は申し訳程度についているにすぎず、  
飛竜にはあるまじき頑強な腕をしていた。肌を走るしま模様はあか  
らさまな警戒色。噛み砕く為だけに生まれてきたかのようなその顔  
には、その巨大なアギトには鋭い牙が立ち並んでいる。

人が呼ぶ轟竜ティガレックスが、クシャルダオラの前に立ちふさ  
がっていた。

楽しみを邪魔された。しかし、また新たな獲物が目の前にはいる。  
クシャルダオラが叫ぶ。すると風は巻き起こり、雪を巻き込みなが  
らその周囲に展開される。古龍種のみが有する超常的な力を見せつ

け、クシャルダオラは楽しい殺戮を始めようとしていた。

ティガレックスは怯まない。クシャルダオラを困惑させるほど威風堂々と上体を起こし、息を吸い込む。風を吐き出すような優雅さなど無縁。ティガレックスが吐き出したのは単なる音である。生まれたばかりの赤ん坊から、死ぬ間際の死にたいにまで共通し備わる、声を出すということ。それは何ら珍しいものではなく、それ自体何ら賞賛に値しない。だが仮に、それが果てしない高みにあつたしたら。

轟竜の聲はまさにそれであつた。誰もができることを誰もができないほどに高めた驚異。

吐き出される声は声にして、しかし暴力であり、暴威であり、音の打撃である。とにかく大きい。とにかく激しい。誰もができることを誰よりも強力に行う。故に、その力は最上位。雪が吹き上がり、古龍の甲殻さえ奮わせた。

世界はみんなが手を取り合つて成り立っています。草やお花の皆さんが芽吹いて、それを草食種のみんながおいしくいただきます。そんな草食種さんを肉食のモンスターさんが食べて、残つたお肉はまた土に還つて草木を養います。それから肉食の皆さんもやがては亡くなって、やっぱり土に還ります。

世界はみんなの命で回っています。これを食物連鎖とか、生態系と呼ぶこと、知ってますか。

植物さんだけでも世界は成り立ちません。虫さんがいないと、雄

しべさんと雌しべさんがくつつけません。すると植物さんは困ってしまいます。

草食種さんがいなくなると、肉食のモンスターさんたちはお腹が空いちやいます。だって、ご飯がいなくなってしまうすもんね。

肉食のモンスターさんがいないと困るのは植物さんです。草食種の皆さんが増えすぎてしまうと、全部食べられちゃいますから。

世界って、不思議ですよ。

皆さんが皆さん、必死に生きて、そして死んで、そうすることで世界を守ることに繋がってるんですよ。

殺す。抗う。喰う。喰われる。それは敵対しているのではなくて、あくまでも一緒にこの世界を守りましょうというお約束です。

だからハンターさんは時々、モンスターさんに叱られてしまいます。勝手に自分たちが守っている自然に入ってくるんですから当然ですよ。

砂原のベリオロスさんの亜種さんは草食種のリノプロスさんをご飯にしますけど、ベリオロスさんを狩りに来たハンターさんに、リノプロスさんも必死になって抵抗しますよね。それは、ハンターさんがその環境にとって招かれざるお客さんだからです。

でも、それは違います。勘違いです。

ハンターさんだって、その環境からすべてを持ち出したいなんて考えてません。ちょっと必要な分だけもらって、残りはちゃんと環

境に残すんですよ。その場所だけ見たらいけないことしてるように見えても、大陸全体ではハンターさんを最高次の消費者として生態系は成り立ってるんです。

だから私たちも仲間です。モンスターさんと一緒です。

ともにこの世界を、命の循環を担う一員です。

でも、古龍さんたちは違います。だって、古龍さんたちはずっとずっと昔の世界の人たちですよ。もう、今の世界に関わってません。それなのに今さら世界に干渉したいなんてだめですよ。

それじゃあハンターさんと一緒です。だって、普段その生態系にいないのに、ふらっと現れて命を持ち出していくなんであんまりです。それじゃあ、普段追いかけてたり、逃げたりしてても、一緒に戦おうとしますよね。

ベリオロス亜種さんとリノプロスさんが共通の敵に手を取り合うことと同じです。みんな、自分たちの世界を守りたいですもんね。

だから守りましょう。

私たちとモンスターさんは同じです。同じ、今形作られた世界の担い手で、ともに生きる命です。時には殺し合っても、時には傷つけあっても、それはこの世界を形作る約束です。

もし外からそれを壊したいなんて乱暴な人が来たら、みんなで戦いましょう。

環境を、生態系を、この世界を守る者として。

もし古龍さんを放置すれば、レムリア大陸の西側の生態系はずたずたにされてしまいますよ。モンスターさんたちも知ってますよね。古龍が、種の垣根を超えて戦わなければならぬ相手だってこと。

だから私たちは、同じ世界に生きる仲間です。

## 第十九話「幾億の絶望」E.V.I.L」

モンスターたちの介入は、古龍の侵攻を押しとどめる為の大きな力となった。人と連携をとることはないが、それぞれが目の前の敵に全力を傾ける、そうすることで古龍の厚みのある連携を封じている。結果として、この世界の命たちは旧き支配者を圧倒しようとしていた。

北の嵐ではミナガルデ王国のフギンムニン級大型輸送船フギンムニン見守る中、風と稲妻とが激突する。風翔龍クシャルダオラと舞雷竜ベルキュロス。

南の焦土では地上の太陽と空の王者が互いの隆盛を競い合っていた。炎王龍テオ・テスカトルと火竜リオレウス。

西の大海では業火の女王と海原の主がせめぎ合う。炎妃龍ナナ・テスカトリと海竜ラギアクルス。

そして人もまた、その戦いを続けていた。

嵐の中を揺られながら、ティルテュはフギンムニンの甲板に降り立った。ここまでの足として利用したヒミンブリュード級輸送船からは他にもハンターが船から船へと飛び移る。その中にはイリスやラファエル、二人のギルドナイトの姿もある。

下で人員不足と聞かされているだけあって、丸く、見通しのよい甲板の上では人が疎らであった。負傷者は船を降ろされ、代わりに

ティルテュたち有志のハンターがフギンムニンに上げられたのだ。バリストの撃ち方などわからないが、戦うことくらいならできるつもりである。

一緒に上に上がったハンターたちが手薄と思われる場所に散っていく中、ティルテュはふと甲板の中央を見た。そこには緑色のドレスを身につけた射手が弓を構えていた。ずいぶんと立派な弓だが、そんなことよりもアマランサス以外にあんな洒落た格好で狩猟に出る者がいるとは考えたこともなかった。心なしか、顔もアマランサスに似ているように見える。

着飾った射手は弓を放つ。すると、大型の矢尻を備える矢は一直線にクシャルダオラを指し、そして爆発した。

手を止め呆気にとられているのはティルテュをはじめとする今来たばかりのハンターばかりである。

格好は特異な癖に意外な力を隠し持っている。そんなところもアマランサスによく似ている。

「たまげたもんだね」

イリスの発言を無視する形で、ティルテュはドレスの射手に駆け寄ろうとする。まさかとは思いが、確信を得たい。ティルテュが近づくと、相手も気づいたようである。

「あなたは？」

「救援に来た。ダンウィッチ村の者で、名はティルテュだ」



一言交わしただけでもわかる。この娘はアマランサスでもないし、単に他人のそら似である。こちらのことを見ようとせせず、その顔は無愛想極まりない。あのメイドにこんな顔はできない。それどころか名乗ろうとさえしない。別にそのことに不満があるわけではなかったが、慌てたように話しかけてきたハンターがいた。

毒怪鳥ゲリヨスの独特の質感を張り付けた鎌を握り、鎧は舞雷竜ベルキュロスのものであろう。そこらを飛び回っているベルキュロスとそっくりの材質をしている。武装から察するに、相当腕利きのハンターなのだろうが、小柄であること、またその声は若い女のものである。

「わ、私はシギユンと申します。ミスカトニツク王国の騎士です。あちらはスノードロップさん。ちょっと人見知りなだけで、基本的にはいい人ですよ」

シギユンと名乗ったハンターは落ち着きない様子で仲間の弁護をしている。とうのスノードロップはすでに次の弓をつがえ、狙いを定めようとしていた。本当に愛想がない。

しかし、愛想の善し悪しで古龍と戦っているわけではない。

「ああ、よろしく頼む」

どうやら、アマランサスとこの二人は関係ないようだ。スノードロップは、アマランサスの面影こそあるが、あのメイドがこんな顔をしている様はやはり、どうしても想像できない。そして、王国の騎士と関係しているとは思えない。

アマランサスもきつと、どこかで戦っていることだろう。メイド

服を着たまま、いつも通りの笑顔で。

ティルテュも負けてはいられないと、敵の姿を求めて首を回す。

炎王龍テオ・テスカトルが壁のように並んで突進する。砂を蹴る度龍毒が赤黒い光を放ち、纏う熱は陽炎にさらされる砂漠の光景をさらに歪ませている。

迎い撃つのも壁である。ランス、ガンランスを構えたハンターたちがその盾を並べ、強固な壁を作り出していた。突き出されるのは槍と銃。ランスの間を縫ってガンナーたちが思い思いのボウガンで狙いを定める。

指示を行う者もガンナーである。白いドレスのような装備を身につけ、その手には蛮竜の甲殻を重ね合わせた剛種武器がテオ・テスカトルへと向けられている。

フィロソフィアの眼差しは鋭く、古龍を見つめていた。

「狙いは各人に任せます！ 一斉に！ 発射！」

ボウガンから大型の弾頭を持つ弾が一斉に打ち出される。その反動は大きく、衝撃を受け止める装備をしていない者は体を大きく仰け反らせるほどである。

拡散弾。内部が空洞である骨、カラ骨に通称竜の爪と呼ばれる爆薬を積めたもので、その攻撃たるや、地味の一辺倒に尽きる。一斉に放たれた拡散弾は命中こそするが、大した衝撃もなく、テオ・テ

スカトルの突進は変わらない。

それで終わりではない。拡散弾の弾けた弾頭は、わずかな衝撃で爆発する子爆弾を辺りにばらまいていた。一つの弾頭につき五つ。それを大勢が一度に。

簡単なかけ算として子爆弾は大量にばらまかれ、そして一斉に爆発する。一つ一つは小さなものだとしても、百を超す拡散弾の一斉爆発は古龍の巨体さえ覆い隠すほどの爆発を引き起こす。拡散弾の爆発は衝撃そのものを武器とするため、甲殻の頑強さに影響されない。さしも絶対の鎧に身を包む古龍とて、うめかずにはいられないのだ。

しかし、古龍は古龍である。人の全力をなおも上回り、そして、人はさらにそれを上回ろうとする。

テオ・テスカトルはなおも突進を続行する。そして、人は次の一手へと移行する。

「弾切れした人はすぐに入れ替わって！」

博識の魔女の指揮の下、ガンナーのたちは後ろへと引き下がり、新たなガンナーが前へと出る。ボウガンは弾込に一定の時間を必要とする。その間、攻撃できなくなるのである。それをフィロソフィアはボウガンを三人一組にして、射撃、待機、弾込に分けることで攻撃の隙をなくす戦法をとった。残念ながらフィロソフィア・オリジナルではないが、その効果は絶大である。

間断なく放たれる拡散弾は絶えずその爆発で古龍を苛む。中には耐えきれず転倒し、押し寄せる壁から離脱するテオ・テスカトルの

姿もあつた。しかし、まだ古龍たちは突進を続けている。

炎王龍の壁はまだまだ多くの古龍を残したまま人の群へと突撃する。

ランスを構えたハンターたちは砂を強く踏みしめ、その突進に備えた。人と比べたなら、あまりに古龍は巨大である。人の力で抑えられるはずがないと絶望できるほどに。

それでも、人は逃げようとはしない。盾が、古龍の突進を受け止める。一人では不可能ならば三人が盾を並べる。三人で足りなければ、ランサーたちの背中を大勢のハンターたちが支えていた。

「押さえる！　押さえる！　押さえる！！！」

誰かが叫ぶ。ハンターたちは全員が力の限り踏ん張り、盾はそれに応えるかのように古龍の突進を、龍の毒を耐え続ける。

龍に挑む人の無謀な試みは、しかし人を見限りはしなかった。

砂が幾人もの轍を刻む。その轍の分だけ、深さだけテオ・テスカトルの勢いは削ぎ落とされ、ついには制止されてしまったのである。

人は耐えた。同様の光景が各所で繰り広げられていた。

反撃の開始である。古龍の甲殻は固い。しかしまったくダメージが与えられない訳ではない。ハンターたちはそれぞれの武器で、弾かれにくい特性を持つ攻撃を選んで攻撃を仕掛ける。

ハンマーを持つものは力強く振りかぶり、自分ではどうしようもできないほど高めた一撃を得物の重さに乗せて叩きつける。重すぎ

る一撃は弾かれようなどない。

ガンランスはその銃剣を備えた大砲から次々と爆発を浴びせかける。拡散弾同様、相手の堅さに影響されない攻撃である。

そして、あるいはもっと大雑把な攻撃を仕掛ける者もいる。

赤いドレスがランスを構えるハンターの肩を踏み台にして宙を舞う。その手には双剣の輝き。剛腕の魔女フィリアはテオ・テスカトルの背中へと躍り出て、その両の腕を振るう。

水が弾け、血が吹き出す。

古龍の素材によって初めて可能となった、鋭さと強度の両立。炎王龍は翼を裂かれ、背中を切り開かれ、まるで魔女の重さに屈したかのようにひれ伏し、起きあがることは二度となかった。

「フィリア！」

次の獲物に向かおうとする妹へ、フィロソフィアはたしなめるような声を届けた。いくら剛種武器とは言え、古龍を相手に一人で戦えるはずもない。それでも妹は、軽く姉のことは見ただけで走り出してしまふ。

「今が無理のしどきだろ、姉さん！」

あれで猟団の代表を務めているのだそうだ。行動力がある反面、どこか自分勝手に、人の上に立って行動するようには思えなかった。ただ、決して人を犠牲にするようなことはしないことが、せめてもの救いであろう。

「まったく」

仕方のない妹である。

フィロソフィアは笑みをこぼしたかと思うと、すぐにその表情には敵意と殺意がこもる。その目は敵へと、古龍へと向けられていた。

照りつける太陽の下。火竜リオレウスと炎王龍テオ・テスカトルが空を舞台に戦っていた。リオレウスの火球が古龍を捉えるも、空の王者の高熱に耐えきったテオ・テスカトルは炎を吹き出し、リオレウスは身を翻しそれをかわす。

そして、戦っているのは火竜ばかりではない。

グツフルファクシ級飛行船が竜たちとは比べものにならないほど乏しい機動性ながら戦場を共にしていた。

「君たちは出てくるべきじゃなかったんだ。極地にこもっていればよかったんだよ」

その一つの甲板の上で、ジェイナスは言葉とともに黒い雷を手繰る。

身につけた鎧は漆黒。舞雷竜ベルキュロスの鎧と同じデザインをしながら、その色は明らかに異なっている。それもそのはず。冥雷竜ドラギュロスの素材をベルキュロスの素材で繋いだもので、ミスカトニツク王国がジェイナスのために用意したものである。

ベルキュロスたちが生息するドリームランド峡谷はそのすぐ南に古龍の生息地の一つとされるルルイエ山脈を抱えている。そのため、ベルキュロスは時折、風翔龍クシャルダオラの襲撃を受けていた。そのためか、龍に対抗する力を持った個体が生まれたのである。

それが、冥雷竜ドラギュロス。

龍にとって猛毒である龍毒を自らも身につけ、また同時にある程度の耐性を身につけた。

ジェイナスはかつて冥雷竜ドラギュロスとともにクシャルダオラを撃退した。その時、ドラギュロスが傷つき落とした素材を下に、古龍の素材と繋ぎあわせることで、かつてベルキュロスが龍に挑む力として生み出した力を、今はジェイナスが纏っているのである。

振り下ろされた大剣は赤黒い雷を放ち、甲板にしがみついていたテオ・テスカトルの頭部を打ちつける。剛種武器として鋭さを与えられた大剣、は古龍の角に深々と切れ込みを入れ、傷跡を龍毒が踊る。

「そんなに殺したかったのかい？ そんなに奪いたかったのかい？」  
続けざまに薙ぎ払われる大剣。破損していた角を砕く。

古龍にとっても、龍毒は猛毒である。そのため、古龍たちは体のため込んでおくことができず、定期的に放出するか、でなければその角を制御のより所としているらしいことが確認されている。

角を破壊された古龍は、突如全身を龍毒の光に包まれたらうつ。

甲板に爪を突き立ててしがみついてこそいたが、痛みにつめくように頭を大きく持ち上げた。

「でも、僕たちは奪わせたくなんてないんだ」

その喉元へと、ジエイナスは大剣を切り上げた。赤黒い、龍毒を発している証を軌跡として残しながら剣はテオ・テスカトルの喉元を裂く。

セクメーア砂漠を目指す輸送船の船団は古龍の攻撃をかいくぐりながら南下を続けている。すでに徹底を余儀なくされたもの、撃墜されてしまった船が出始めていたが、森の鳥竜種に加勢もあり、補給物資を満載したヒミンブリュード級は森を抜け、西のドリームランド峡谷と東のドンドルマ地方とを結ぶ名もなき山岳帯へとさしかかろうとしていた。

「ガンナーは近づいてくる奴から優先的に狙え！ 剣士は爆弾でも投げてろ！」

ヴァルカンの声が甲板に響く。自身もまた片手剣を使うハンターであるヴァルカンは、握るにはやや大きいながらも、なかなか掴みやすい大きさをした小タル爆弾を勢いよく放り投げた。

本来、小タル爆弾は時限式である。それは反対に、時間がこなければ多少の衝撃では爆発しないこととなっているのである。それに着目した職人が、小タル爆弾の時間を調整し、放り投げたなら適度な距離で爆発するように改良を加えた小タル爆弾を開発した。



手投げ小タル爆弾の完成である。

ヴァルカンが次々と小タル爆弾を投げつける度、空中で爆発が生じた。爆発は拡散弾やガンランスと同じく衝撃そのものが武器であるため、古龍の装甲の堅さを問題とはしない。加えて、部位を選ぶこともない。どこに当てても同じだけの効果を得ることができる。

ンガイ村は近くに強力なモンスターが存在しないため、若いハンターが多い。そんなハンターでも爆弾を古龍の近くで爆発させるくらいにはできるのである。

ヒミンブリユード級のそばに来ていたクシャルダオラが新米ハンターたちの投げた小タル爆弾で追いつかれる姿は、古龍の面目を丸潰れの光景であった。

「おらおらおらおらおら〜！」

ヴァルカンの威勢のいい声。熟練ハンターでさえ苦戦する古龍を相手に、武装も満足にないヒミンブリユード級が互角以上の戦いをしている。

確かに、ことアイテムに関しては熟練ハンターが使用すれば効果が倍になることもなければ、新米ならば半分になることもない。

アレスが投げた小タル爆弾も、そのすぐとなりでヘルメスが投げた爆弾も与えるダメージは同じである。ヴァルカンのとった戦法は、熟練ハンターを甲板いっばいに並べると同等の効果をもたらしたのである。

「相変わらず、お前を見ていると武器構えて戦ってるのがばからし

くなるな」

現に、アレスもヴァルカンもまだ一度も武器を抜いてはいない。

「おっさんもそろそろいい歳なんだ。世代交代ってやつだろ」

「アレスだ！」

おっさんと呼ばれ過敏に反応してしまうことこそが中年の始まりであることを、アレスは知らなかった。

人もモンスターたちの己の死力を尽くして戦っている。それは新たな種が古き種に挑みかかることであり、すべての生命が生きていくために経験せねばならぬことである。

かつて、古龍がそうであったように。

この大地は、かつて地獄のような世界であった。燃え盛るような高温が大気を離さず、かと極域では肌貫く極寒。大地は炎の川がのたうつ。多くの生命にとって生息さえ許されぬ、まさに地獄の光景が世界中で繰り広げられていた。

生命は絶滅し、あるいは地獄を避けてひっそりと隠れ棲んだ。

しかし、この時代、自然に挑みかかり見事これを征服した種が存在した。

古龍である。

古龍は自然の暴威にあらがい、その体を変化させつづけた。どのような衝撃にも耐えられるほどに硬く。どのようなものも破壊できるように強靱に。果てには自然そのものを操るほどにその力を発展させていった。

誰も古龍にかなうものはなく、この世界では存在さえゆるされない。古龍が隆盛を極めた、地獄こそが古龍にとっての樂園であった。

それが終わりを告げた。何がきっかけであったのか見いだすことはできない。ただ、徐々に、しかし確実に環境が変わり始めたのだ。

大気は和らぎ、風は優しさを含ませる。大地には緑があふれ、かつての炎の川の痕跡を探すことは難しい。

世界は変わった。しかし、その体を極度に地獄へと適化させていた古龍は変わることはできなかつた。

何よりも硬い鎧がある。しかし、その鎧はその強度を維持するために再生には長い、長い時間を必要とする。傷ついてしまうことは、死への着実な歩みとなる。

あまりに強力な個体であるということ。しかしそれは、繁殖の必要性を自ら否定してしまった。繁殖期のあまりに長いスパンは個体数の回復を大きく遅らせる。

そして、子をなさないことは、遺伝情報の書き換えを、進化への道を閉ざしてしまった。

古龍は地獄に住まう体と引き替えに、地獄に巣くうことしかでき

ない体へとその身を変えてしまっていたのである。

確かに強力な個体ではある。しかし、環境が温暖となり、そこに存在すること自体に大きなエネルギーを必要としない生命たちは爆発的に繁殖し、その数を増やした。古龍が一頭を殺そうとも、その間に五頭のモンスターが生まれてくる。そして、古龍の傷は蓄積されてしまう。

個体としての力を追い求めた古龍は、種としてあまりに脆かったのである。古き大地の旧き支配者は次第に追いやられ、しかし、絶滅することはなかった。

世界には、生命にとってあまりに過酷な環境はなおも残されていた。

すべての命を凍り付かせる水晶の森には悪魔が潜む。

未だなりやまない怒号轟かせる火山には炎の王が根城を構える。

極寒と低酸素。二つの地獄重なる高山には嵐がたむろする。

水が深く、昏く満たされた海の水底を見た人は誰もいない。

古龍たちは人が、生命が入ることさえできない地獄を頼りに生き延びたのである。よって誰も古龍を知らなかった。古龍の楽園は生命の地獄であり、生命の楽園は古龍の地獄であるのだから。

王龍の目覚めはすべてを変えてしまった。地獄が滲みだし、それが命の世界を浸食する。

この大地の旧支配者が今生きるすべての生命を脅かそうとしていた。

これは戦いである新しき時代の命と旧き支配者がこの大地の覇権を巡って戦う争いである。

しかし用心せよ。

地獄の住民は、今なおその力を明らかにしていない。

風翔龍クシャルダオラは嵐と表現される。しかしその嵐とは何だ。所詮、この樂園のような世界のそよ風にすぎないではないか。

炎王龍テオ・テスカトルは炎。それもまた、この世界の現象として表現できてしまう。

かつての地獄の光景を知らぬ者がどれほどの言葉を並べたところで、それは地獄を示すことはできない。

嵐の中の嵐が存在する。灼熱の中の灼熱を知らなければならぬ。もはや神と呼ぶしかないほど、それらは巨大であり、そして、王は悠然とその歩みを止めることはない。

古の龍は、地獄に棲んでいたのである。

嵐のただ中、一隻のヒミンブリユード級が横殴りの風にさらされていた。

孤立しているのではない。

人は知恵こそが力であり、そのために情報は欠くことができない。そして、セクメーア砂漠は広大である。

そこで人はヒミンブリユード級輸送船を点在させ、光や音を用いたモールス信号を伝言させることでその情報をあまねく伝える手法をとっていた。

無論、広大な砂漠をカバーするには飛行船がいくらあっても足りない。そこで、ヒミンブリユード級は光、音を正確に判断できる限界の距離を維持しながら砂漠中に散っているのである。

孤立ではなく孤高。しかし、どちらも危険極まりないことでは共通している。すでに何隻もの飛行船が落とされ、それでも情報網が崩壊していないのは、名もなきハンターたちの尽力のたまものであった。

「持ちこたえろ！　ここで落ちれば通信網が分断される！」

嵐はなおも激しさを増していた。まるで意志でも持つかのように船を揺らし、徐々に東へと進行している。それはまるで、王龍テラドミヌスに従い、侍るかのように。

飛行船のクルーたちは、ただ甲板の縁にしがみついていることしかできない。その時、誰かが気づき、声を上げた。

あまりの雨音に、声を発した当人でさえ、何と言ったのか聞き取ることができなかった。しかし、その時には誰もが異変に気づいていた。

渦巻く黒雲。その中央に灯る一对の輝き。誰の目にも、それはモニスターの双眸に写った。しかし、誰もがそれを否定する。このような暴風の中、自由に飛び回ることができる生物などいるはずがない。

では、あれは一体なんだ。

「何だ……、あれは……？」

当人ののみが聞き取ることができる言葉は、あまりに味気ないものであった。人の最期を飾るにしては。

嵐の中、それでも響きわたる龍の鳴き声。その時何が起きたのか、もはや語るものはない。激しさを増す漆黒の嵐に飲み込まれる船の残骸だけが、しかしそれも、すぐに消えて失せる。あまりに激しい暴威と殺戮の凶器は、その痕跡そのものを消してしまう。

傷の上に傷を重ねるように、嵐はさらに吹き荒れる。

「風速、二〇を突破。航行に支障が出ています！」

ミナガルデ王国フギンムニン級大型輸送船ブリッジにて、王弟は何が起ころうとも普段通り不安げな表情を変えないという偉丈夫ぶりを見せつけていた。

「何が起きてるのかな……？　ねえ、ウエヌス？」

フギンムニンのブリッジは円形の飛行船の中央にあるため、艦内で最も安定した場所に配置されている。それでもなお、船を伝わる嵐の揺れは、ブリッジを震わせる。

落ち着かない様子の兄とは異なり、威風堂々とした態度を崩さな  
いまま、ウエヌスは実質的な副艦長としてマルスの傍らに立つたま  
ま離れない。

「知りません。ですからお覚悟を。予想もつかないことが起きよう  
としています」

「グツフルファクシ級ドーマウス、航行不可！」

「ベルキユロスたちも飛行に支障を来している模様！」

気丈なウエヌスであったが、その膝は震えていた。それを船が揺  
れているせいだと自身に思いこませながら、それでもなお、事態は  
深刻な方向へと推進を続けていることばかりが耳に入る。

一体何が起きようとしているのか。その答えを教えてくれる者が  
いるなら、自分に代わって兄をしっかりとつける権利を与えてもよい。  
しかし、そんなウエヌスの特権をちらつかせたところで、誰も今起  
きつつある何かを説明できる者などいなかった。

渦巻く雲はまるでとぐろを巻く龍のようであり、轟く雷鳴はその  
咆哮。では、雨粒は獲物を前にした古龍の涎であろうか。

それは優雅とも流麗とも美麗とも形容することができる姿をして



いた。美しいのである。

純白の体は、四肢有翼。手足それぞれに飛膜を持ち、翼は明確な形を持たず風に揺れる衣のよう。その角は髪飾りのような落ち着いた色調を帯びている。

嵐の中を風を纏いながら、クシャルダオラよりもなお二周りほども巨大なその姿は飛ぶというよりも泳ぐようにその身をくねらせる。

その姿は、天衣無縫の衣を纏った天女が下界に遊んでいる様を思わせる。

それが、嵐という名の悪意と暴虐を引き連れていた。

地獄の山。悪魔の棲む山。そう恐れられるルルイエ山脈に巣くうすべての古龍の王にして嵐の主。

その姿は古龍に対して最大の情報積載量を誇るミスカトニツク王国立図書館にさえわずかに記載が残るだけである。

執筆者は東方に故郷を持つ特務騎士である。この特務騎士はこれを名付けた。

東方の言葉で天を意味するアマツ。忌み言葉であるマガツヒ。そして、神の名であることを示す接尾語、ツチ。

そう、天なる荒神、アマツマガツチと。

嵐龍アマツマガツチ。それが美しくも残忍な嵐の王の名である。

「ソフィア、フィリア。私たちの地方の言い伝え、覚えてる？」

太陽が暑い。まるで鉄板の上に置かれてしまったかのように、体力を奪い取っていく。

「もちろん。悪魔の山の番人のことでしょ」

白の姉の言葉に真っ先に反応を示したのは黒の妹である。デザインこそ同じながら、ブレシスFその背には大剣を背負い、性能はまるで違うことを示していた。

白と赤と黒。同じキノス・シリーズと呼ばれる装備に身を包んだ姉妹たちの故郷はセクメーア砂漠南東のインスマス火山帯と呼ばれる一帯である。たえず自然の猛威にさらされる場所であるためか、いまだ迷信深い者が多く、言い伝えの類は多く残されている。

その内の一つが、インスマス火山帯東に位置するルルイエ山脈のことである。

ルルイエ山脈。セクメーア砂漠南西のこの山は五〇〇〇m級の山々が立ち並び、最高峰は予測値ながら七〇〇〇mを超えるとされている。そんな、飛行船でさえ近づけない前人未踏の山が今なお残されているのである。

「ルルイエ山脈なんて、好き好んで行く奴もいないだろ」

海からでは切り立った崖が邪魔をする。セクメーア砂漠を横切るには、山にたどり着く前に体力どころか命を使い果たしてしまうだ

ろう。北にはドリムランド峡谷があるが、まだ開拓されていない場所を通るほど危険なことではない。どのようなモンスターや生態系が構築されているかわからないからだ。そして、東側は活火山の巣窟であるインスマス火山帯を通らなければならない。

その挙げ句、待っているのは雪と酸素不足、そして古龍という三重の地獄が待ちかまえているだけである。

フィリアが投げやりに答えると、フィロソフィアは驚きを演じてみせた。

「あら、グラジオラスさんは若い時登ったそうよ。まあ、キャラバンの半数が亡くなるほど過酷な旅だったそうだけど」

七人の魔女の中で最年長の博識の魔女には、さすがのフィリアも一目置いていた。嘘だとも思わなければ、その努力を否定するつもりもない。ミスカトニツク王国が秘蔵する希少古龍のデータは、そんな旅の末に得られたものであるからだ。

「番人が……。確か、第一の関門にして最後。その姿は……。何だっただけな？」

話に応じるつもりでいたが、言い伝えなんて興味を持ったこともないフィリアはあっさりと挫折し、妹のソフィアが引き継ぐ。

「それは始まり。しかれど終わり。開かれた門は一つなれ、行く先は三つが並び立つ。それはどれも靈山に通じるものならず、黄泉へと通じるものなり」

悪魔の山に入ることを拒むような火山には番人が棲んでいる。そ

のことは、子ども部屋のボギー・ビーストとして使われるおとぎ話でしかない。早く寝ないと番人が子どもを食べにきますよ。そんな、しつけに使われる脅し文句でしかなかった。

そう、この三姉妹は考えていた。特務騎士になるまでは。

「だからあれは名付けられた。始まりを意味するアルバ。三つを意味するトリ。終わりはオン。アルバトリオンってね。報告書に一度だけ名前が挙がってたけど、本当にいたのね……」

実際の汗に冷や汗が混じり込む。

それはゆっくりと歩いてきた。しかし、テオ・テスカトルの倍はあるつかという高さである。その歩幅は大きく、見る見る内に姿が拡大されていく。

四肢有翼はもはや古龍にとって約束である。

全身を黒く染め、開かれた巨大な翼には雷が爆ぜながらまとわりついている。まず一つ。

まるで内側から膨れ上がったかのような不格好な一對の角をその頭に乗せ、口からは炎が舌のようにちらついている。これが二つ。

歩く度、強強度の龍毒が砂を荒立て、その太く、棘のように鋭い背鱗が並ぶ尻尾には冷気が霜となって降りていた。これが三つ目。

始まりは一つ。それは、全身が龍毒に満ち満ちていること。

終わりは三つ。それは、この古龍が炎と氷と雷とを操ることがで

きることを意味している。

そして、それと対峙する者の末路もまた、言い伝えには語られている。

「古龍たちが勢いづいてやがる。ここが踏ん張りどころだな」

一にして三。そして終わりを意味する獣の名はアルバトリオン。

黒煌龍アルバトリオン。それが人を恐れさせるいくつもの悪意をその身に宿した灼熱の暴君の名である。

王の影響はセクメーア砂漠の外にまで波及している。そのことは周知の事実であり、そして、地図の空白はあまりに多い。

わざわざ危険な場所に立ち入る人はいない。安全なルートが確立されてしまえば、それを敢えてずらす者もいないだろう。

人里からそんなに離れているわけではなかった。しかし、南を砂漠に、北を深い樹海に囲まれる山には誰も興味を示さなかった。別に何もないだろう。わざわざ危険を犯す価値はない。

誰もが知らないはずのことを、誰もが知っているかのように思いこもつとした。

それが明らかでないという事実を看過して。

「何だよ、あいつ……」

新米のハンターであるヘルメスは何に対しても驚きを示す。しかし、こればかりはどんな熟練ハンターでもそのことを責めることはできないであろう。

特務騎士であるアレスとて、船団の向かう先に目を奪われたまま、身じろぎ一つできないでいた。

そこにあつたものは、何かである。一言では説明のしようがないのだ。

それは全身を緑色の苔で覆われていた。四肢と呼んでよいものかわからない。気球か気囊のように膨らんだ腹部を覆うように背中が、そして、そこから伸びる四肢　触手のようにも見える　が垂れ下がっている。蛸を思わせるその姿には大きな顔が張り付き、とにかく巨体である。そのような巨体が、平然と浮かんでいた。

「ヤマツカミだ。古龍観測隊には東方出身の熱心な奴がいてな。そいつが名付け親だ。山の邪神を意味するんだそうだ。観測隊でも存在を確信できんほど希少な古龍だったが、まさか、こんな奴まで出てくるとはな……」

「ど、どうするんですか……?」

「決まっているだろう。どうせ見逃がしてはもらえない。戦闘を行いなから最短距離で突破する」

「最短距離……?」

アレスは指先をただまっすぐ前に向けながら、躊躇なく言うての

けた。

「このまま進めということだ」

もちろん、その指先の延長線上には巨大な古龍の姿がある。ヘルメスは驚きのあまり言葉をなくし、それでも必死に抗議しようとする喉元からかすれた声ならぬ声を漏らす。

しかし、いつの世も声の大きい者の意見がまかり通ることは快々として存在するものである。

「そこなくっちゃな」

ヴァルカンが手を叩いてアレスの意見を肯定する。これで、針路はほぼ定まった。

危うく過呼吸を起こす一歩手前までの興奮状態にあるヘルメスの両肩に、ヴァルカンは手を置いた。

「大型飛行船は大量に燃料を喰う。物資を届けられれば、俺たちヒローだぞ」

しばらくの間が開いた。その間に、ヘルメスの脳裏では恐怖と功名心とがせめぎあい、そして、勝利を納めたのは名誉への欲求であった。

「全速力で突っ込め！」

俄然やる気になったヘルメスは船首に立ち、その指を古龍へと向けて突き出した。

その様子を、ヴァルカンはなま暖かく笑いながら見ていた。

「若いつていいもんだな、おっさん」

もちろん、アレスはしつかりアレスと呼べと即座に反応した。

山とはヤマ。のをツと言い換えるそして、神とはカミ。よってヤマツカミ。

富岳龍ヤマツカミ。その巨大さゆえに神と呼ばれ、しかしその性質は邪悪。ゆえに、山の邪神のことを指し示す。

西の孤島でも、命と古龍の戦いは続けられていた。

「スラツシユアックスの大きな秘密！ へ〜んけい！」

凍土のハンターらしく、氷牙竜ベリオロスの鎧に、同じく氷牙竜の素材を用いたスラツシユアックスを扱うイシユタルが斧を剣へと変えて振り下ろす。

スラツスアックスが備える最大の特徴は、武器自身の変形機構にある。通常は大きな刃を斧のように使用するが、斧の刃を根本へと引き寄せ、先端に新たな刃が展開することで剣としても使用できるのである。刃は結果としてその大きさを増し、威力を増大させる他、堅い部位にぶつかった場合でも刀身が勢いを吸収し、手元に衝撃が伝わらないため弾かれれないという特性がある。



その秘密は武器に内蔵されたビンにあった。スラッシュユアックスによってビン内部の薬品の種類は違うのであるが、それらは共通して気化しやすいという特徴がある。ビン内で気化することで内圧が増し、その圧力が武器を変形させる際の動力として機能する他、刃が堅いものに触れた際に衝撃の緩和材として同時に機能するのである。

このような機構であるため、剣を振る度に気体が漏れだし内圧が減少する。変形させるためには一定量以上の圧力を必要とすることから、一度圧力を切らすと、新たなビンを外部から取り付け無理矢理内部気圧を高めるか、薬品が気化するのを待たなくてはならなくなる。

そのため、絶えず剣の状態を維持できるわけではないが、その分、その攻撃力は高い次元に存在している。

イシユタルは大きな刃が縦に並んだベリオロスのスラッシュユアックス、ゴアフロストアンバーを炎妃龍ナナ・テスカトリの顔面に叩きつけたかと思うと、堅い感触も気にせず振り上げ、また振り下ろす。

ただし、変形を妙な抑揚で発音することに関しては、ヒュプノスから注文がついた。

「変なかけ声いつている暇あるなら手を動かせ！」

「こつした方が切れ味がよくなるのよ、きつと！」

おかしい言い合いを続けながらも、二人は熟練したハンターである。古龍の体には徐々に傷が増えていく。

いくら古龍の飛来を受けたからと言って、ここはセクメーア砂漠から遠く離れた孤島である。やや離れた場所では海竜ラギアクルスが戦っているように、モンスターに加勢を受けられる今、その戦闘には余裕さえ見受けられた。

「ラギアクルスか。格好いいモンスターじゃない」

ナナ・テスカトリの高熱にさらされすぎないよう距離を開けて体を冷やしている間、アルルはアポロに話しかけた。これは余裕であるというよりも、新米ハンターの緊張を解くための行動であるという意味合いの方が強い。

アポロは自然体で戦っているつもりでありながら、しかし緊張した筋肉は徐々に疲労を蓄積し、少年の体力を奪っていた。

「まさか、並んで戦うことになるなんて思いもありませんでしたけどね……」

そろそろこの少年は限界ではないだろうか。そう、アルルが考え始めた頃、遠くで爆発音がした。

古龍でさえ戦いを止め、そちらの方向を眺める。島の反対側であった。イシュタルとヒュプノスには二度目にあたる光景である。かつては村の中から島の反対側を。今は島の反対側から村の方を見ている。

「村にも行った奴がいるのか!？」

つい大きく叫んでしまったことを、ヒュプノスは後悔した。反射

的にアポロが飛び出したからだ。

「俺、行ってきます！」

止める時間はなかった。

「アポロ」

「ヒュプノス！ あなたまで抜けたら保たないわ！」

追いかけてようとして、しかし今は戦いの最中である。追いかけて穴を開けるわけにはいかなかった。アルルの言葉に従う他ないのだ。

新米ハンターが一人で何ができるといっただろうか。村が心配なのはわかるが、あの少年にできることなんてないのだ。

「馬鹿野郎！」

果たして、この言葉は誰に対して放たれたものなのだろうか。

何もできないくせに自らを危険にさらす少年に。あるいは、そんな少年を救ってやれない自分自身に対して。

アポロは川を遡る。川づたいに丘を目指せば、その先にモガ村がある。

モガ村は海底が複雑な地形であり、崖のそばにあることから特殊な気流も吹いている。そして、そこにいるのは人間だけである。こ

の豊かな島の自然の中で村を襲うメリットはほとんどない。栄養価豊かな草食種を狩る方がより安全で確実だからである。

実際、アポロがハンターになってから、村がモンスターに襲撃されたなんて話はほとんど聞いたことがない。

あつたとしても村に迷い込んだモンスターが混乱して、暴れてしまったところ人を殺害してしまったとかそんな事故ばかりで、少なくとも人を積極的に襲うモンスターなんて耳にしたことはない。

それなのに、古龍は人を襲う。モンスターも襲う。

「何なんだよ。古龍って……」

疲れた体にむち打って、アポロは村を目指した。祈るように、村の仲間たちの身を案じながら。受付嬢は、果たして無事でいてくれるだろうか。

## 第二〇話「嵐の中で輝いて」Erliking of Fimbul」

アマツマガツチは嵐の中で踊っていた。翼は存在する。しかし、それは飛膜でしかなく、飛竜のように濃密な大気を叩いて体を持ち上げているわけではない。まるで風の方が進んでこの大古龍の体を持ち上げているように、嵐龍の体は空を飛ぶ。

黒雲と雷鳴の中、その赤い双眸が輝きを放つ。

天なる荒神は身をくねらせる。奏でられるような鳴き声が嵐の中を響き渡る。まるで水中を泳ぐような仕草でアマツマガツチは空を目指した。

その眼下にはミナガルデ王国フギムニン級大型輸送船の姿を捉え、風がアマツマガツチへと殺到する。雨水さえ飲み込み、風が圧力を高めていく。古龍の中で濃縮される災いと暴力。

嵐の王は、その体躯に溜めたすべてを、一息に吐き出した。

魚竜ガノトトスをご存じだろうか。貯水袋という器官を用い、体内で圧縮した高圧の水を放つ。しかし、その肉体はあくまでも常識の範疇にあり、その体で圧縮された水圧など高がしれている。その肉体が破壊されない程度の圧力までしか高めることができないためだ。

しかし、ここで一つの仮定が存在する。では仮に、強靱な体躯の持ち主が同様のことをすればどうなるか。

かつて、峡谷に出向いた特務騎士は語っている。風翔龍クシャル

ダオラは、響狼オルガロムと同様に圧縮した空気の塊を放つが、その威力は桁違いであったと。

では嵐の王ではどうか。

嵐龍アマツマガツチが吐き出したのはあくまでも水である。しかし、圧縮された膨大な大気とともに吐き出されたそれは、水鉄砲の範疇を遙かに凌駕していた。液体という概念を超過して個体と同程度の密度を獲得した水は刃のように堅く、そして鋭い。重力と圧力とに加速され、弾丸と呼ぶにはまだ足りず、まさに剣であった。

古龍から一直線に落ちる、白刃であった。

飛竜の巨体を支える翼膜を貫き、内部の貯水袋を加工した気嚢を破壊し軽比重の気体を吐き散らさせる。水は気球をたやすく貫通するとフギンムニンの丸い甲板へと突き立てられ、船底を突き破って水が噴き出した。

王国所有の大型飛行船をただの一撃で揺るがせる。これまで誰も想像さえしてこなかった惨状が、そこにはあった。

フギンムニンの反応は早く、そして残酷であった。

「第四区画切り離し！」

ブリッジ内に響くのは少女特有の高い声。

フギンムニンは円形という特殊な形状を生かし、六〇度ずつ六つ

の区画に分けて設計されている。今回のように、一部が深刻な損害を受けた場合、切り離すことで被害を最小限に食い止めるためである。

「でもそれは……」

「第四区画切り離し！ 了解！」

王弟マルスの声はクルーの声に飲み込まれた。

直撃を受けた第四区画ではまだ怪我人や逃げ遅れた人が取り残されている。しかし、悠長に救護活動を行っている余裕などない。

躊躇こそが最大の敵であり、故に、ウエヌスに迷いはなかった。

「これが戦争なのです、お兄さま」

甲板の一角が突如沈みこんだ。まるでホール・ケーキを切ったかのように扇状　中心に円形のブリッジを備えるため、その根元は丸く切り取られている　に床が離れていく。その甲板が被弾して巨大な風穴が開いた場所であったことから誰もが理解した。切り捨てられているのだと。

捨てられる甲板には、まだ古龍の攻撃で傷ついた人が倒れている。内部にも取り残された人がいることだろう。それでも、甲板は無情にもゆっくりと離脱していく。

ティルテュは甲板めがけて走った。もちろん、一人で支えようと

しているわけでもなければ、怪我人を運び出すことさえできない。ただ、目に付いた一人くらい、助けたいという気になった。

切り離された場所の、ちょうど縁のあたりにいる若いハンターが一人取り残されていた。転落防止用の命綱が切り離される甲板に固定され、外すことに手間取っているのである。

このままでは一緒に引きずり落とされてしまう。

「手を伸ばせ！」

ティルテュが差し出す手に、若いハンターはとっさに掴まった。その途端、切り離された甲板が一拳に沈み込む。

命綱が伸びきることで手を繋いだまま、ティルテュは引きずられるように甲板の縁へと投げ出される。ティルテュは命綱をつけている。これは一体何の皮肉であろうか。ことで中空へと放り出されることだけは回避することができた。

また、イリスが胴にしがみついでくれたことで辛うじて踏みとどまることができた。

「何してるんだい!？」

人を助けようとしている。

ティルテュの体は胸から先がすでに甲板から飛び出し、腕一本だけでハンターを釣り下げている状況であった。

フギンムニンは切り離しを行う際、破損した気球ごと切り離すら



しい。まだ残された気球内の気嚢が辛うじて重さを支えてくれているのだろう。女の細腕　　こういうと大概笑われるのだが　　でも、何とかつなぎ止めることができていた。

しかし、同時に気嚢は破損を続けていた。徐々にしかし急速とも思えるほど深刻に腕にかかる負荷が増大している。

「しっかり掴まっっている！　離すな！」

だが、助ける手段を思いついたわけではない。ハンターの命綱が断絶するかしてくれればよいが、そんな柔な命綱があるはずもない。

どうすればいい。

「助け、て……」

繋がれた腕の先で、若いハンターが泣きじゃくっていた。その顔は、まだまだ子どもである。親にハンターになりたいと夢を語り、ハンターになったことの喜びと志を告げたばかり。そんな、夢と希望に満ち溢れた年頃だ。

死ぬには早すぎる。

「助けてやる。だから諦めるな！」

たとえこの手がちぎれたとしても。甲板に押しつけられた胸が痛み、伸びきった腕の筋肉が悲鳴を上げる。切り離された甲板が、眼下の嵐に飲み込まれようとしていた。

雨が体を打ちつける。

ハンターの命綱が引きちぎれるまで耐えてやるつもりだった。しかし、思いもよらないところで、その決意をくじくものがあった。足下ならぬ手元をすくわれたのである。

若いハンターが身につけていたグローブがゆっくりとずれていた。成長を見込んで大きめのものを使用していたのだろう。隙間に水が入り、潤滑剤として機能し始めた。

少しずつティルテユの腕の中からハンターの感触が失われていく。どれほど力を込めようともその力を加える場所が失われていくのである。

やがて、グローブの下から手の感触が完全に抜け落ちた。

ティルテユの手にはグローブだけが取り残された。声を張り上げなければ会話さえままならない嵐の中でさえ、断末魔の悲鳴ばかりは妙に耳に残る。一角が消失した甲板から見下ろす空は暗く、すでに切り離された甲板の姿さえ見えてはいなかった。

イリスに引き上げられる形で、ティルテユは今なお健在である甲板の上に引き戻された。妙な虚脱感から座り込んでいると、ギルドナイトは肩に手をおいてそつと耳打ちした。

「お客さんが来たよ」

見上げると光があった。何のことはなく、ただ純白の体の照り返しがそう見えただけのことである。それは悠然と、美しいとさえ思える動作で大気を泳ぐ。

しかし、その目は邪悪。愉悦に浸り、今なお獲物の品定めをしているように動く。

巨大な古龍が、自ら欠損させた部分を門代わりにしてフギンムニンの甲板上空へと躍り出ていた。甲板の一角を失ったフギンムニンは上から見たなら欠けた円になっていて、それはちょうど丸い何かの口を開いているようであることだろう。古龍はその口を通る形で、ちょうど、ティルテュの目の前を横切ったのである。

甲板と上空の気球との間のわずかな空間であっても、古龍は平然と体を浮かせている。中央部分に居座ったかと思うと、その細く長い首を回し、甲板を一望する。

ここは、古龍の皿なのだろう。獲物が大量に乗せられた皿なのだ。まだまだ喰い足りていないのだ。

こいつは、まだ殺そうとしている。

ティルテュは剥ぎ取り用ナイフを取り出すと、自らの命綱を切断した。

「いけません！ 命綱はつけておかないと！」

シギユンとか名乗ったベルキュロス of 鎧の少女がすぐに気がついたが、ティルテュは自らの手に残された綱を投げ捨てる。

「こんなものがあつては戦えない！」

古龍は風を纏い、その様は水を巻き込み白い軌跡を残して見えていた。

「どうせ負ければ世界はスタボロにされる。我々はハンターだ。必要な素材を求めて自然に分け入ることはあっても無益な殺生はしない！ 我々は狩人だ。自然を尊びその恩恵を感謝しながら受け取ってきた！」

嵐の中、自然と声は大きくなる。

「しかしこいつらは違う！ 化け物だ！ 怪物だ！ こんな殺すことしか考えない化け物が大陸に広がってみる。生態系は切り刻まれてしまう。そうすればそこは命の住めない荒野が広がることになる！」

その再生には何年の月日がかかるか想像もつかない。どれほどの命が失われるのか考えることさえ恐ろしい。

「何があっても、ここで止めなければならぬんだ！」

そのためには、命綱など邪魔にしなければならない。一撃を食らえば甲板の外に投げ出され一巻の終わりだろう。しかし、ハンターとはそういうものだ。モンスターと戦うとはそういうことだ。

どれほど人が手数を重ねようともモンスターの一撃で戦況は覆ってしまう。

恐れなどない。ここでこの古龍をしとめなければ大変なことになってしまうという使命感が、ティルテュを支えていた。

声が甲板全体に届いたはずもなかった。それでも、ハンターたちは次から次と命綱を外し始める。

イリスはため息をつきながら、しかし満更でもない様子で。ラフ  
アエルはきざな剣捌きで綱を切ってしまった。シギユンもまた、丁  
寧に綱を外している。

ティルテユの言葉を聞いた者はその志を知り、聞こえていない者  
たちはそれを理解してくれたのだらう。これは、命をかけて戦わな  
ければならない相手なのだ。

皆が思い思いの武器を構え、思いを等しく古龍と向き合う。

古龍は獲物風情が向かってくることが腹立たしいとも言つのだ  
らうか。人がそうするように口元を歪ませ、不快感を露わにしよう  
とする。

ティルテユもまた不快だった。これはこれまでどんなモンスター  
と戦った時にも抱かなかった感情である。怒りを感じることはあつ  
た。憎しみを覚えたこともあつた。しかし、不快と感じたことだけ  
はなかった。

古龍はあまりに異質であり、そして敵なのだ。

「あなた、ティルテユさんとか言いましたか」

ふと、古龍を睨むティルテユの横には、緑色のドレスを着た射手  
がこちらを見ようとせぜずに並んでいた。

「私には偉大な姉がいました。強くて凛々しくて、心優しいお姉さ  
まです。ヘビィボウガンを扱わせれば右にでる者はいません」

ヘビィボウガンという単語に、つい例のメイドの姿を思い浮かべたが、凜々しいという言葉にその連想を否定する。

「そして、何より誇り高い人でした。もしお姉さまがここにいたとしたら、きつと、あなたと同じようなことを言ったと思います」

「君のお姉さんとは気が合いそうだ」

同じヘビィボウガン使いでも色々な人がいるものだ。おかしくて、つい笑みがこぼれた。しかしそれも、スノードロップの真剣な眼差しに触発されるように、風にぬぐい去られるかのように消えてしま

「戦おう。人の、いや、生きとし生けるものの世界を守るために！」

嵐の中でも、灯火は灯る。

しかしそれは、あまりに儂く脆い。

嵐龍アマツマガツチがフギンムニン級の甲板上に入り込んだことで、人は事実上古龍に取り囲まれることとなった。アマツマガツチと向き合えば、フギンムニンの周りを飛んでいるクシャルダオラの奇襲を浴び、クシャルダオラに気を取られると甲板中央に漂うアマツマガツチの強襲にさらされる。

風にその飛行を頼るベルキュロスたちが、それでも必死に嵐の中を飛んでいた。しかし、動きでは明らかにクシャルダオラに分があった。小回りがきかないベルキュロスたちの間を縫うように、風翔

龍は甲板の上で人の命をかつさらう。

甲板へと飛び込んだクシャルダオラが勢い落とさず降り立つと、数名のハンターが体当たりで弾き出された。命綱を進んでなくしたその体は軽々と嵐の中へと消えていく。

同時に、命綱がないからこそ、ハンターたちの対応も迅速である。すぐにクシャルダオラを取り囲み、応戦する。

風の中、それでも直進していたスノードロップの弓がアマツマガツチの纏う風には軌道を曲げられてしまった。大古龍を苛むはずであった爆発が、あらぬ場所で巻き起こる。

アマツマガツチには傷一つなく、狙いを定めたようにスノードロップの方へとゆっくりと漂っていく。

ガンナーに近づかせてはならない。剣士系の武器を持つハンターがその間に割り込もうとする。

それは、さも蚊でも払うかのような仕草で、嵐龍は衣纏う手でそれを払った。風が局所的に吹き荒れ、甲板がめくれ上がり、人がたやすく宙を舞う。

人と古龍。その基本スペックはあまりに違っていた。

それを諦める理由にも動機にもしてはならない。ティルテュは叫びながら走った。これにはスノードロップに向けた注意を自分へと引きつけるため、そして、巨龍へと挑む気概を高める意味がある。

細長い首の先には、人の体ほどもある頭部が繋がっている。人の

頭ほどの大きさがある目がティルテュを睨み、近づいた分だけ風圧を強く意識する。

踏み込む勇氣はハンターとして培った誇りが。打ちつける大剣は友とともに得た勝利が。

力強く踏みしめる足は前へ。甲板が軋み、破片が舞う。巨大な船から得られる反動をすべて体を通し、剣へと伝わらせる。

黒縛王斧。黒角竜ディアブロス亜種の素材を高密度で圧縮した極短の大剣はその破壊力を一点に集中できる。古龍と睨み合いながら、その目と目の間、額へと戦斧を叩きつけた。火花が散るような、そう錯覚させられるほどに甲高い音が響く。

ティルテュの渾身の一撃は、アマツマガツチの額にたやすく受け止められていた。歯を食いしばり、踏み込む足にどれほど力を込めようとも刃は動かない。

互いに額と刃をつけ合う至近距離での睨み合いは、ティルテュの必死の形相に対して、古龍は笑っているかのようにさえあった。

古龍はあまりに強大であった。

しかし、人は弱いのではない。古龍とは異なる力を模索したにすぎない。単純な暴力と腕力が強さの尺度では決していない。

火竜のような鋭い爪などなくとも、小型の草食種はしっかりとその種を守っている。爪ごときでは破られない強さを持っているので



ある。

人にも人の強さがある。

甲板上でハンターとベルキユロスたちが死闘を繰り広げている中、ブリッジでも慌ただしく戦いの準備が進められていた。

役職なし。単に王の妹であるというだけのウエヌス嬢がブリッジ中央から指示を飛ばしている。

「バリスタ用拘束弾、射出用意！」

その威風は堂々。この場の誰にもひけをとることはない。実質的な艦長はこの少女であると誰もが認め、クルーの復唱に迷いはない。

「射出用意！」

その指示は即座に甲板へと伝えられ、設置されたバリスタに拘束用の矢が取り付けられる。

「気嚢内気圧減圧準備！」

「減圧準備！」

通常、気嚢の内圧を下げることは高度を下げるために行われる。それ自体、バリスタと関係なく、脈絡のない指示であった。しかし、その程度でクルーたちの信頼が揺らぐことなどない。

誰もがウエヌスの狙いを察することができずとも、その狙いの確かさを確信しているのだ。凡庸な兄を除いて。

「何をするんだい、ウエヌス？」

艦長席に座っているだけのマルスを軽く一瞥だけするウエヌスの眼差しは厳しい。

「わからないなら黙っていてください」

ブリッジは甲板の中央に円形に備えられている。ただし、完全に埋まる形になっており、甲板からでは六つの扇を束ねる基部としか見えないことだろう。

そして、この上に、古龍はいる。

ウエヌスは見えもしないと理解しておきながらも、首を上へと曲げた。

「古龍に教えて差し上げましょう。空飛ぶ者さえ落とす落とし穴があるということ。フギンムニンの、ミナガルデの戦い方を！」

王妹ウエヌス指示の下、甲板各所に取り付けられたバリスタが一斉に発射された。叩きつけられる雨粒を弾きながら無数の矢がロ―プを牽引しながら撃ち出される。

古龍は風を纏う。数多くのバリスタが狙いを外しながらも、幾本かは風を突き破り、アマツマガツチへと絡みつく。張りつめるロ―プ。バリスタとロ―プによって古龍とフギンムニンとが繋がり、地獄の釜の口が開かれる。

フギンムニンを支える気球の一部が解放され、巨大な飛行船を空

にとどめていた軽量の気体が外部へと放出される。浮き上がる力を失ったフギンムニンは下降を開始する。

急激な高度低下に、ブリッジでは衝撃に備え姿勢を低く保つ。甲板のハンターの中には足を取られ転倒する者が続出した。自由落下ほどの速度ではないにしろ、まさに地面が崩れるにも等しい現象は古龍を大いに戸惑わせる。

なまじ飛ぶことができるクシャルダオラたちは高度を保とうと羽ばたき、甲板から相対的に離れていった。頭上の気球もまた、甲板に合わせ相対的に落下していることを意味している。高度を変えない古龍と、落下する気球。両者の高度が一致した時、それ自体が大きな質量を持つ気球はそれ自体が鉄槌のごとき破壊力でもってクシャルダオラを強打する。

嵐の中落ちていく古龍たち。一挙に甲板上から古風翔龍が一掃される。

そして、ウエヌスはまだ貪欲に戦果を求めている。

「気圧低下！ 高度、順調に下がっています！」

クルーの言葉を聞きながら、ウエヌスは見てもいない古龍へとその思いを馳せた。

報告では大古龍は不思議な力で浮いているのだそうだ。その力で一定の高度を保っているのだと。では反対に、高度を保たざるを得ないはず。たとえばバリストで身動きを封じられようと、そして、フギンムニスが高度を下げていようと。

「如何ですか？ 現存する全乗組員、装備、バリスタ、大砲、物資、弾薬、艦装、動力炉から燃料に至るまですべての重量がその身にかかる辛さは？」

張りつめたロープはアマツマガツチの体を捉え、そしてフギンムニンは高度を下げようとする力が働いている。嵐龍の高度を保つ能力が優れていればそれだけ、本来この高度にフギンムニンが滞在するには足りない分の浮力を古龍が負担しなければならぬことになる。

アマツマガツチは荒れ狂う。それに呼応するかのように嵐が吹き荒び、雷鳴とともに古龍の悲鳴が雨音さえ弾く怒号となる。

体中にまとわりつく束縛はその身を引き裂かんばかりの力をアマツマガツチに与える。巨大な気球で辛うじて耐えられるほどの重量を、アマツマガツチのみで支えられるはずもない。しかし、今更高度を下げようとすると、拘束弾に引きずり落とされる形で甲板中最も分厚い防備に守られるブリッジ上部へと叩きつけられることとなる。それを理解していか、嵐龍は叫び続けながら全身を引き裂く痛みを耐えていた。

ロープが深々と食い込み、滴り落ちる血は赤黒い。強烈な腐食毒である龍毒が甲板を浸食する。

まだ落ちる。フギンムニンは適正高度を目指し下降を続けていく。そして、その高度に達した時、一人の少女の願いは結実する。

落下するフギンムニンと相対的に上昇しようとしながらもその引きずられて高度を下げるしかないアマツマガツチ。

ここで、仮にフギンムニンが適正高度に達したとしたら何が起るだろうか。フギンムニンは下降をやめようとするのである。直前まで落下を続けるアマツマガツチの落下速度と緩和されるフギンムニンの降下速度の単純な引き算。その値の速さで、嵐の王はフギンムニンへと叩きつけられる。

地獄の釜にくべてやろう。

人もまた落下速度の分の衝撃を受けるため、人々は何かに掴まり必死に相対速度を合わせようとしていた。それはウエヌスも同じである。近くにあった手すりに必死にしがみつき、怖くて目も開けてはいられない。

勝利の確信がウエヌスの心を支えていた。

それは、まさに嵐に挑む人の心境に等しい。嵐に抗うことはできない。できることがあるとすれば、それは、通り過ぎることをただただ耐え、忍ぶことだけである。

そう、人は嵐に勝つことはできない。

嵐龍がその端に血を付けた口を大きく開く。その首は頭上へと向けられ、その鋭い口は血と水とを混ぜ合わせ、強力に圧縮した水弾を放つ。雨粒を弾きながら発射された赤い水弾は、上空の気球を易々と斬り裂いた。

「気球、二番区画で破損発生！ 気圧低下、止まりません！」

それは深刻な事態が発生したことを意味した。気球の気圧が下がれば、フギンムニンは予定していた高度以上に降下を続けてしまう。

その分だけ重力加速度によって船体は加速され、人では耐えきれないほどに速度をつけてしまう。

「バリスタ、限界を迎えています！」

そして、バリスタから解放されてしまえば、嵐龍アマツマガツチにフギンムニンの甲板をぶつけてやることはできない。

「そんな……」

体が浮き上がる感覚に必死に耐えていたウエヌスであったが、一瞬の心の迷いがその手から力を抜き取ってしまった。

空気中ではその形状さえ考えなければ重たい物が速く落下する。フギンムニンに比べればあまりに軽いウエヌスの体は浮き上がり、そして、フギンムニンが降下をやめた瞬間に床へと叩きつけられることとなる。

恐怖のあまりに目を閉じることしかできない。いくら気丈であろうと、ウエヌスは戦いを知らない子どもでしかなかった。

嵐はなおも激しさを増す。

嵐龍アマツマガツチが無理矢理身をくねらせ、とぐろを巻くように姿勢を変えると、突如突風がその体を中心に発生する。それは三つの小型竜巻として渦巻き、古龍がとぐろを解いた瞬間に、さも指示を待っていたかのように甲板へと放たれる。ロープはちぎれ、人は跳ね上げられ、甲板を風が轍として削り取る。次々と破壊されて

いくバリスタ。引きちぎれたロープとともに嵐中へと消えていくバリスタの残骸は、嵐が束縛から解放されたことを意味していた。

アマツマガツチを縛り付けているものは何もない。

フギンムニンが落ちる。その降下は突如として終わりを告げ、下に激しく揺れながらも次第にその高度を維持しようと努める。

気紛れな神の賽は人に味方することはなかった。

ウエヌスが意図せずとも残したもう一つの罠。たとえフギンムニンから嵐龍が離れられたとしても、頭上には気球が残されている。前のクシャルダオラ同様、鉄槌を下すことが可能なはずであった。

しかし、そこに悲しい偶然が横たわっていた。

アマツマガツチがバリスタから解放された時間と、フギンムニンが落下をやめた時間とが、絶妙に符合していたのだ。

後少し解放が遅ければ、ロープに引きずり落とされる形でアマツマガツチはフギンムニンへと叩きつけられていた。後少し早かったなら、いまだ降下を続けていた気球はその鉄槌を下したことだろう。その狭間の時間は、古龍を救ったのである。

甲板と気球とのわずかとも思える隙間に、嵐龍アマツマガツチは飛行していた。その頭上にはフギンムニンの気球がすぐそこにまで来ていたが、それと衝突することは決してない。ロープによって刻まれた全身の裂傷からは血が流れ、それ以上にその眼は赤く輝いている。

その目に光るのは恐怖でも苦痛でもなく、ただ純然たる怒りであった。

嵐の中を、その轟きの声が遠く、遠く響いて渡った。

渦巻く黒雲と降りしきる雨。世界中がそろって黒く塗りつぶされてしまったような光景の中でただ一つ嵐龍アマツマガツチの姿だけが白く栄える。

地上で戦う者たち　人と角竜ディアブロス　空を見上げる。  
雨粒が瞳を打つこともかまわず絶望をただ見上げていた。

ミナガルデ王国の象徴であるフギンムニン級大型輸送船フギンムニンがその死に体をさらす中、無慈悲にも踏みつけるようにその上に漂うアマツマガツチの姿を呆然と見つめる他ないのだ。

「フギンムニンが落ちる……？」

「ミナガルデが沈む……。そんな、馬鹿な……」

古龍とは異端である。常識に外れ、誰もが夢と捉えていた。まさに荒唐無稽な悪夢の使徒に他ならない。人があり得ないと考えていた空想を、飛びきりの形で具現化する。

人とは違い、モンスターとも違う。始源にして異端。それが古龍。



フギンムニンの甲板では、ハンターたちが屍のように横たわっていた。落下に対して辛うじて耐えていたハンターたちであったが、アマツマガツチの起こした竜巻に巻き上げられた者もいれば、下降到耐えきれなかった者も数多い。古龍がやすやす斬り裂く甲板とて人を打ちつけるには十分な強度があるのだ。

それでも人々は立ち上がろうとしていた。その様は、生まれ落ちたばかりの子どもを思わせる。危なげな仕草で、しかし早く立ち上がらなければならぬ。すぐに敵が襲ってくるのだから。

クシャルダオラが再び甲板へと飛来する。ここは危険と学んだのか、一頭一頭がハンターの胸をくわえるとすぐさまここを離れ、そして飽きたようにハンターを空へと放り捨てる。

人の悲鳴だけは、たとえどんな嵐の中でも耳に響いて離れない。

ここは餌場の様相を呈していた。飼葉桶の中には動けないハンターたちがひしめき、それ摘んで行くのは古龍たち。

王龍テラドミヌスを中心とした皆殺しの荒野はすべてを呑み込もうとしていた。

しかし人は、命は毒を持つ。

ただ喰われることを快しとはしていないのである。せめて一矢を、そしてその一矢で相手の命さえ奪ってしまおう。まだ、戦いは終わってなどいない。

ベユキュロスは嵐の中を賢明に飛んだ。人は折れた剣を、それでも相手へと向けることをやめない。

餌にありつこうと降下したクシャルダラを突如バリスタの矢が襲った。体の半分から血を流しているようなハンターが、必死に放った一撃であった。体勢を崩すクシャルダオラ。よろめき、そのまま甲板に叩きつけられるとすぐさまハンターたちが取り囲み、多様な武器 それはどれも、ここにはいなくとも同じ世界に生きるモンスターの素材から作られたものである を震う。

飛べないのなら。そう言わんばかりに、舞雷竜ベルキュロスはその鉤爪を風翔龍クシャルダオラに巻き付け、高度を無理矢理維持する。引きはがそうとするクシャルダオラよりもなお強く絡みつき、ベルキュロスはその口から雷球を打ち出す。

今の時代の命と、旧き時代の命。

互いが互いのすべてをぶつけ合う戦いは、もはや戦争と呼ぶほかない。死なない限り、終わることない戦いが繰り返される。

「まったく、歳はとりたくないもんだね。若い頃は、夜通し狩りをしてても平気だったのにねえ……」

そんな死闘のただ中で、イリスはゆっくりと体を起こした。本来ならすぐにも戦列に加わりたいのだが、体がうまく言うことを聞いてくれないのだ。どうやら、足に折ったらしい。ギルドナイトの赤い一張羅に、それでもわかる黒い染みができていた。まさか骨まで露出しているとは思わないが、傷口を見たいという気にはならない。仕方なく、甲板の縁に背をつけて座った。

足は痛み、雨粒がもたらす冷気がその痛みを深いものへと変えてしまう。船体の倍ほどの気球部分が雨を遮っているはずだが、それ

ならどうして雨が体を打つのだろう。

見上げると、その答えはすぐにわかった。真上の気球が大きく斬り裂かれ、気囊が露出していた。気体が漏れだしているらしい。

「こりゃ、まずいね」

このまま気球が浮力を失えば、ブリッジはここも切り離さざるを得なくなる。そうすれば、イリスごとこの甲板は地面に真っ逆さま。一卷の終わりだ。

しかし、今のイリスでは満足に動くことさえできない。さてどうしたものか。

気球を見上げていてもいい知恵が思い浮かぶことはなかった。それどころか、白い大古龍がゆっくりと降りてくる場面を見せつけられる。

あんな怪物の相手はしてられない。それでも、そんな怪物でも体のそこかしこが傷つき、フギンムニンの重量そのものを利用した攻撃は確かに功を上げている。後、もう一息ではないだろうか。

一つ、博打に出るのも面白いかもしれない。何か掛け金になるものはないかと甲板の様子をうかがう。すると目については、可愛らしいご同業であった。

「無事ですかにゃ？」

アイルー族のギルドナイトであるラファエルが四本足で駆け寄ってきてくれた。制服は至る所に傷が出来、帽子がなくその柔らかそ

うな体毛に覆われた額がよく見える。

「何だい、あんたもぼろぼろじゃ、ないか……」

この小さなギルドナイトも、古龍を相手に必死に戦っていてくれたのだろう。地上では角竜ディアブロスが物言わぬ友として、アイルーはこれまでも人のよき隣人　野良のアイルーは爆弾を投げつけるなど厄介極まりないが　である。

ラファエルがかつて語っていた、この世界を守るためという言葉に、嘘偽りはなかった。

「ラファエル。ところであんた、どうしてギルドナイトに入ったんだい？」

「くだらない理由ですにや。ただ、自分がこの社会を守る一員であるという強烈な自負が欲しかっただけですにや」

つい笑ってしまったのは、おかしかったからだ。ただしそれはラファエルのあまりに真っ直ぐな瞳に愉快さを覚えたわけではなく、あまりに高尚に思える志が、イリス自身とはあまりにかけ離れていることへの自嘲である。

社会を守るだとか、そんなこと、考えもしなかった。思えば、好き勝手に生きていた人生だったのだから。

「私はね、昔ハンターをしていたんだ。寂れた集落のハンターでね、他の里のことなんて見たこともなかった。だから、見識が狭くて、身勝手だったんだろうね」

ハンターになってから、肉食性のモンスターは悪と決めつけ狩猟場で目にしたら追いかけて回してでもこれを討伐していた。こんな奴らさえいなければ、人は襲われないし、草食種も命を落とさずにすむと信じて。

「だけどね、それは大きな間違いだった。肉食種が減るとね、本来食べられるはずだった草食種が増えてしまうのさ。すると、本来いないはずの草食種が草木を食べ始める。狩りに行く度に緑が減っていったことがわかったよ。数が増えれば食う量も増える。当たり前のことだけどね」

その後、イリスは里に駐在していたギルドナイトに泣きついた。どうにかしてくれと。ギルドナイトはイリスとともに狩猟に出かけ、草食種を間引くことでそれに対処しようとしてくれた。

それでも、その頃には草食種の群は他の地域にも餌を求め進出し、様々な被害を起こしていた。

この大地は繋がっている。一人の無知と身勝手が大勢に迷惑をかけ、そしてその帳尻合わせは個人ではできない。

イリスは大勢に迷惑をかけた。しかし、まだ若かったため、嚴重注意にとどめられ、代わりにギルドナイトが監督不行き届きの責任をとって里を離れた。

「ハンターは別に誰かを守る英雄とかじゃないんだよ。ただ、自然と人の社会とを繋ぐ架け橋だからね。不必要な殺しをしちゃならない。勝手な自己満足をそうとも気づかないなんてもつての他さ」

里を離れたギルドナイトは今頃何をしているだろうか。

「あいつらがどうしてこんなことしてるか知らないけどね、あいつらを見てると昔の自分を見てるようで腹立たしいんだ。身勝手気ままに力を震ってることなんかがね。だから、協力してくれないかい、ラファエル？」

「こんなおばさんのつまらない昔話を真剣な眼差しで聞いていたらファエルは、頷いてくれた。

「いい男だ、このアイルーは。」

「あそこにバリスタが見えるだろ。あれには、拘束弾が装填されたままになってる。どこかのおっちょこちょいが発射する前にこけでもしたんだろうね」

「しかし、あの古龍に当てるには風が邪魔ですにゃ」

「フギンムニンが降下攻撃を仕掛ける前にもバリスタはせいぜい三割程度しか命中していなかった。こちらは命をかけようとしている。その勝率が三割では期待値が悪過ぎはしないだろうか。」

「イリスは足の痛みをこらえて立ち上がろうとする。今ほど、背中のガンランスの重さが余計だと考えたことはなかった。しかし、このガンランスの力が必要なのだ。」

「みんな、早くこここの区画から離れな！ もうすぐここは切り離されるよ！」

「イリスはあらん限りの声を張り上げた。別に甲板中に響きわたらせる必要はない。ただ、この付近にさえ声が届けばよいのである。」

声を聞いたハンターたちが急いで離脱しようとする。倒れた仲間を担いでも、命綱がない分、その動きは迅速である。

すぐに、イリスのそばからはささくれだつ甲板と、破壊されたバリスタの残骸、打ちつける雨粒だけが取り残された。そして、小さな小さな相棒が一人残るだけである。

「イリス、何をしている!？」

ティルテユの声が聞こえた。

駐在していた村のハンターは、イリスとは比べものにならないくらいしつかりとしていて、たとえイリスがいなくとも問題を起こすことはないだろう。

イリスがまもなく切り離される甲板から動かない様子を見て、ティルテユは駆けつけようとしているようであったが、クシャルダオラとの戦闘に手が放せない様子である。

好都合であった。こんな大博打、加わる人数は少ない方がいい。

純白の古龍はすでに甲板すれすれにまで高度を下げていた。何とも美しく、不気味な姿である。着飾るかのような飛膜をたなびかせ、傷口からは赤黒い血が風さえ浸食するかのような輝きを放つ。その周りには古龍を取り囲むような風。

「我慢ならないんだよ。身勝手なことばかりして、自然を踏みにじってるあんたらはね……」

歩く度、足が悲鳴を上げ、早く倒れてしまえという誘惑が脳裏をよぎる。それ以上に、この化け物を倒したいという欲求の方が大きい。

通常、銃身が折り畳まれているガンランスを展開しながら構える。蒼火竜の鱗が並んだ青いガンランスは、その先端が小刻みに震えていた。足ばかりでなく、腕も傷ついているのだろうか。

あまり長くては体力が保たない。早めに片を付けて、後はゆっくり酒でも飲むに限る。

「ラファエル。風はあたしが責任もって吹き飛ばす。後は頼んだよ！」

アイルー族特有の高い声で了承の意志が伝わる。

すでに古龍は目の前にいる。イリスのことを気にもとめた様子はない。風が頬を叩くほどに近くとも、その眼中にないということなのだろう。それでいい。巨大なドラゴンと対峙するなんて柄じゃない。

盾を甲板に突き立てるように低く構え、腰を落とす。ガンランスの銃口を水平に古龍へと向ける。銃槍ガンランスのみが有する唯一の攻撃法。その名を竜撃砲と呼ぶ。火竜の火球発射機構を模した一撃である。

火竜は可燃性の液体を火炎袋から吐き出し、歯茎のあたりに仕込まれた発炎器官で引火させるとともに吐き出している。そのため、水上に着弾した場合でも燃え残り、また火竜自身が自身の熱に焼かれない構造となっている。



ガンランスの場合もそれと変わらない。ただ、こちらは可燃性のガスを用いる。銃口に取り付けられたバーナーに一気に放出されたガスが引火し、銃口の外で炸裂させることで銃身へのダメージを軽減させている。ただし、こちらはガスであるため、すぐさま燃え尽きてしまい、その射程距離は短い。

そう、風を直に浴びるほどの距離にまで近づく必要があった。

安全装置解除。バーナー点火。ガンランスの銃身から青白い炎が銃剣そのものであるかのように伸びる。やがて炎がガスの燃焼温度に達した瞬間。古龍が気づいたようにイリスの方を向いた。

「遅いよ」

引き金を引く。銃口からガスが放出され、バーナーによって炎へと変えられながら爆発する。

反動がイリスを襲う。踏みとどまることなど元からできるものではない。浮き上がるように足が甲板をこすり、そのまま後ろへと押し出される。堪えるための足はすでに傷つき、踏みとどまることなどできるはずもなく堅い床の上を転がることとなった。

盾はどこかにいってしまった。ガンランスは届かないところに転がっている。今度こそ、立ち上がれそうもない。

それでも、賭には勝った。

イリスの放った竜撃砲は一瞬とは言え古龍のまとう風を吹き飛ばす。その一瞬を、ラファエルは見逃すことはなかった。

嵐龍アマツマガツチの首に、一本のロープがしっかりと絡みついていた。そこで、ラファエルは張りつめていたロープを、わざと緩ませた。これでは古龍の動きを止めておくことができない。アマツマガツチはロープを引き剥がそうと暴れ、ロープはそれ自体生き物のようにつねる。それはラファエルの足を跳ね上げると、その小さな体はイリスすぐそばの甲板に叩きつけられた。

「イリス！ ラファエル！」

ティルテユの声がする。責任感の強い女性ハンターは、恐らく二人を助けようとしているのだろう。しかし、そんな時間はない。

「あなたも一緒に落ちるつもりですか！？」

冷酷とも言える冷静な声は、スノードロップとか言う着飾った射手のものだろう。恐らくは、ティルテユを止めたのだ。

それでいい。

うつ伏せに倒れたまま、首を動かすことさえ億劫だ。幸い、仰向けに倒れるラファエルの姿は視界に入っている。雨が顔に当たって辛くはないのだろうか。

「すまないね、ラファエル……」

まるですべてを待っていたかのように、甲板が沈み込む。すでに気球が破壊されてから時間が経っているため、その沈降は以前と比べ早い。

「かまいませんにゃ。これが、ギルドナイトの使命、ですからにゃ」  
最期の最期まで、ラファエルは気取り屋であった。体を動かせもしない癖に、ウイंकをするだけの余裕は残っていた。

「あんたが人間で、私が一〇若けりゃね」

フギンムニン級第二区画が切り離された。すでに浮力の大半を失っていた第二区画は急速に降下していく。重力に引かれ加速し、それは、二人の仲間の名を呼ぶティルテユの声さえ追いつけないほどではないかと錯覚させられる。

二人のギルドナイトを乗せたまま。

二人の姿はすでにフギンムニンにはない。そうであったとしても、その思いは決して潰えてなどいなかった。

アマツマガツチの首にかけられたロープは未だにバリスタと繋がり、それは端から急速に下降を続けていた。やがて、第二区画の落下距離がロープの長さを超過した瞬間、ロープが一気に張りつめ、落下によって高められた運動エネルギーが嵐龍の首に集中する。

その力は、フギンムニン全体を用いた時よりも強い。アマツマガツチの飛翔力さえ凌駕していた。

アマツマガツチは甲板に叩きつけられるなり、ロープはすぐさま第二区画がかつてあった場所へとその巨体を引きずり落とそうとする。踏みとどまろうとする足が床を裂き、体全体でフギンムニンを

揺り動かしながらもその体は止まらない。

嵐龍の体は、甲板から引きずり落とされた。悲鳴が波長を間延びさせながら遠ざかっていく。やがて、第二区画が大地に砕かれる、木が割れる音、それに続いて木を踏み砕くかのような音だけがフギンムニンの上に舞い戻る。

この高さから落ちたなら助かっているはずがない。そう誰もが考え、喜びの声が少しずつ広がっていく。クシャルダオラでさえ、王の身を案じ、戦いの手を止めるほどであった。

「やったんだ……」

「俺たち勝ったんだ……」

すぐそばにクシャルダオラがいるにも関わらず座り込むハンターがいた。クシャルダオラは、戸惑ったように、無駄な動きを見せていた。

この両者の区別なく、甲板から吹き出した水がすべてを吹き飛ばした。

落下した第二区画に隣接する第三区画を下から高圧の水が撃ち抜いたのである。側壁は大きくえぐられ、その余波は中央のブリッジさえかすめた。

度重なる戦闘によって疲弊していた第三区画は切り離すまでもなく崩壊をはじめ、人も古龍も、その上にあつたすべてのものが落ちていく。

嵐は、まだやんでなどいない。

それはゆっくりとフギンムニンの甲板に姿を現した。第二から第四まで破壊されたことで、基部で半円状に突き出たブリッジを除けば綺麗な半円状になった甲板を参列席として、嵐の王のその真の姿を露わとする。

満身創痍であった。羽衣のように見えていた飛膜は擦り切れ破れ、朽ち果てた布へと変貌を遂げている。その全身には赤黒い血がこびり付き、純白であった体色は黒く染まっていた。

美しさが禍々しさへと、残忍さがなお一層際だつ。

嵐の王を中心としてなお風が強さを増し、黒雲がそのすべてを覆い隠す。まるで、世界がフギンムニンと嵐だけになってしまったかのような隔絶された世界。

その中で、嵐の王はその瞳を赤くたぎらせていた。

古龍を言い表す言葉は少なくない。

旧支配者。悪魔。怪物。天災。異端。

そのどれもがその力に畏怖し、恐怖を肯定していようと、まだ足りてはいない。

嵐さえ操り、その姿は邪悪。漆黒に染まった体をくゆらせて、その眼は鮮血の色を放つ。旧き大地を統べる支配者。悪魔を超える悪魔の名を、人が言い表すとするなら一つしかない。

魔王と。

どのようなモンスターにも背中を見せたことはない。そう自慢するハンターは恐らくこの場にはいないことだろう。そうでなければ、その者は嘘つきの汚名をかぶることとなってしまふ。

誰もが膝を震わせ、足が勝手に後ろの床をする。逃げ出したいという思いが足を動かし、戦わなければという決意が辛うじてハンターたちを前へと向かせていた。

それでも人の列は次第に後退し、故に、ただ立っただけの者がその勇気を示すことを可能とする。

ティルテュは立っていた。逃げない。逃げ出さない。ただ立ち向かうという意志を示すことで、ティルテュはハンターたちの先頭に立つ。

「後どれくらいだ？ 後どれくらいかと聞いている！？」

風が吹き付ける度、かつて友とともに得た禍々しい布で作られた外套が揺れる。それは穴さえ開き、ところどころが変色してしまうほど朽ち落ちていながら、しかし決して布であることを、それがそれであることをやめようとはしない。

「後どれくらい殺せば気が済む！ 後どれくらい思いを踏みにじれば気が済むんだ、貴様等は！」

ティルテュのすぐそこに、スノードロップとシギユンとが並んだ。二人とも無傷ではない。それでも、どれほど傷つこうともハンターはハンターである。

ハンターが一人、足を前に。また一人、前に。

勇氣とは、恐怖に抗うからこそ勇氣。

かつて古龍に滅ぼされたハイパーボリア文明の遺物である禍々しい布に見守られながら、今を生きる命と、地獄を生き抜いた嵐との戦いは終局を迎えようとしていた。

第二一話「フギンムニン〜Hughson・Muccini〜」(前書き)

本当は、この回でアマツマガツチとの決着をつけるつもりでしたが……。



## 第二一話「フギンムニン〜Hugin・Munin〜」

薄暗い廊下の中、飛行船特有の駆動音に混じり床を叩く杖が鳴る。音は几帳面なほど規則正しい。大きさ、間隔がともに伴い、迷いなく目的地へと響かせていく。

性分というものだ。ヘリオスは例外というものを嫌う。それは不特定要因になりかねず、作戦に重要な支障をもたらす恐れがあるからだ。例外を排し、すべてを予測の範疇に納めることで、ヘリオスはグングニル級機動要塞の艦長を任されてきた。

シュレイド王国が誇る大型飛行船は、しかし五〇〇年の眠りから目覚めた古龍を打ち破ることはできなかった。

鋭い眼差しをさらに尖らせ、ヘリオスは雪辱を誓い杖で床を叩く。少々強く叩きすぎたであろうか。道案内　そう、ここは歩き慣れたグングニルの通路ではない　を務めてくれていたグラジオラス特務騎士がふいに振り向いた。これは単に、目的地についたただけであるようだ。

その手はすでに扉にかかり、準備を促すような視線を向けた後、扉はゆっくりと開かれる。

光が射し込む。すぐに中の様子を見通すことはできないため、脳裏にグングニル級のブリッジ　幾人ものクルーが並べられたまさに司令室と言うべき光景である　を思い浮かべておく。

思えば、古龍との戦いはヘリオスの予想をことごとく裏切るものであった。それは今も変わらないらしい。すべてが例外で、逆説的

だが、例外でないものの方が例外であるらしい。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦スレイプニルのブリッジも例外なく例外であった。

広く開けた空間である。体積そのものはグングニルと変わらないが、座席が少なく、広々としているのである。何よりヘリオスを驚かせたのは、いるのは若い娘ばかりであるということであった。

艦長席には礼装と見紛う防具を身につけたセントポリア王女が、さも玉座であるかのようにくつろいだ姿勢で座っている。噂通り見事な赤眼で、その髪はヘリオスの頭に混じり始めた白髪とは違い、艶めいた白である。

そして、恐らくはクルーと思われる娘が五人。

「スレイプニルは、こんな小娘ばかりで動かされているのかね？」

開かれた扉の前で、立ち入ることもできずにヘリオスは呟いた。幸い、耳に届いたのはラジオラスだけであるようだ。

「ハデス陛下が、歳の近い娘の方がセントポリア様にはよいだろうからと……」

「子煩悩だとは聞いていたが、まさかこれほどとは……」

困ったようなラジオラスの表情に釣られるように、ヘリオスもつい顔をしかめてしまった。ミスカトニツク国王ハデス陛下は名君で知られているが、同時に子煩悩な父親としてもその名は知れ渡っている。

ヘリオスは意を決し、自分の娘ほどの年齢の少女たちの部屋へと足を踏み入れる。

操舵を任せられた黒い制服の少女以外の全員がヘリオスを見る。青い少女は何やら品定めでもするような眼差しを向け、白い少女はどこか楽しげでさえある。紫と桃色の少女はそろって艦長席の前に設けられた机についていた。

そして、艦長席から白と赤の少女が立ち上がる。

「スレイプニルへようこそ。ヘリオス艦長」

思わずかしづきそうになる。まるで謁見を許された心境で、ヘリオスは片手を胸に一礼する。古龍がいつ飛来してくるかわからないこの空域にありながら、王女の態度は堂々としている。

かつて古龍をわずか二人で討伐したという話も、眉唾でもないよ  
うだ。

「堅苦しい挨拶は抜きにして、早く話に入りましょう」

艦長席から降りたセントポリア王女は机につき、ほかの二人の少女とともに広げられた資料に目を落としていた。

そう、ご尊顔を拝しに来たわけではないのだ。

王龍テラドミヌス。五〇〇年に一度目覚め、その度に文明を滅ぼしてきた古龍の王者の存在が、グングニルとスレイプニル、二隻の大型飛行船の艦長を引き合わせたのである。

机に近寄ると、こればかりは予想通り、セクメーア砂漠全域の海  
図　すでにこの呼び方が常態化している　　が広げられていた。

かつて西岸のドリームランド峡谷を発した王龍テラドミヌスはす  
でに東側にまでその歩を進めている。逃げまどう避難民と、それを  
追う古龍の群。あまりに多くの情報が砂漠東側には描かれていた。

「じゃあ、エフィー、話を初めて」

「よろしいですか、ヘリオス様」

王女の言葉を受け、こちらに了承を求めてきたのは紫色の制服を  
着た少女である。軽く首肯し、話を促す。

「まず、これをご覧ください。伝達の方々か命がけで伝えてくれた  
古龍たちの襲撃場所です。見てみると、古龍はセクメーア砂漠に均  
等に出現しているのではなくて、いくつかの群を作っていることが  
わかりました」

「クシャルダオラとテオ・テスカトル。どちらも大きな群を三、四  
個。小さな群は一〇個前後ですわ」

エフィーという少女の言葉を補足したのは机につくもう一人の少  
女、桃色の制服に眼鏡をかけた娘であった。王女はこの娘をアネッ  
トと呼んでから話しかける。

「それが、古龍に襲撃されたりされなかつたりってこと？」

グングニルも砂漠に飛行中は古龍の群と四六時中遭遇していたわ

けではなく、古龍の攻撃は断続的であった。古龍が群を作っている。そのことに異論はない。

「はい。また、避難民がドンドルマの街を目指して固まっていることも問題です。古龍たちも目標を絞りやすく、群の密度が上がります」

しかし、古龍は人を襲い、その命を奪っているという現状に何ら影響を与えるものではない。ヘリオスは杖で床を叩いた。何のことはない。ただ、机に近づいただけのことである。それでも、耳目を集めることはできた。

「王龍を倒さねば古龍どもはやがてドンドルマを目指す。そのことに何ら変わらない。そこで私から一つ提案がある」

ヘリオスは砂漠の南側を弧を描くようになぞって見せた。

「王龍は南に点在するオアシスで水分を補給しながら進んでいる。その分、大回りで足が遅い。我々の技術班が計測したところ、このコースを通ればグングニル級で追いつくことができる」

続いて、スレイプニルの現在地を示す印からほぼ直線で砂漠を横切るように指を動かす。その際、古龍の群　それも、大型の集団である　を示す記号を二つほど横切らざるを得なかった。

案の定、アネットが眼鏡の奥で不安げに表情を曇らせた。

「でも、ここ、両方から挟み撃ちにされる最も危険な場所ですよ」

大型飛行船でも大きな危険にさらされる。グツフルファクシ級に

どれほどの被害が出るかはわからない。そして、群をただ突破できればいいというわけではない。

「よって私は提案したい。ここはスレイプニル級に先行してもらい、道を作っていただきたいと考えている」

「お言葉ですが、スレイプニルに盾になれば、そう言うことですか？」

「セントポリア様にそんな場所に飛びこめって言うの……？」

青の少女と黒の少女である。白い少女は何も言うてはこなかったが、とてもわかりやすく口を尖らせている。

ヘリオスには娘はいないが、同じ国に仕えるディオニユス事務次官にはちょうどこのくらいの娘がいるそうだ。心底同情したくなる。これ程度の反発は折り込みずみである。相手が誰であれ、作戦の理念と合理性を説明するしかないのだと、ヘリオスは心に決めていた。

ヘリオスはその目を王女へと向けた。

まったく、いい目をしている。怯えず、怖じ気ず、確かな自信を胸にヘリオスの視線をまつすぐに見つめ返す。城の奥で蝶よ花よと育てられていただけでできることではない。

「私とて、悪意があって言うていないのではありません。しかし、王龍を討伐するには、グングニル級の攻撃力が必要となる。そして、時間を無駄にはできません」

スレイプニル単独では追いつけたとしても攻撃力が足りなくなる

可能性が高い。グングニルの鈍足では古龍の群を引き剥がすことに労力を余計にとられてしまう。

よって、これが一番合理的である。果たして、王女はこれを理解してもらえるだろうか。

ヘリオスは、すぐに自らの愚かさに気づいた。クルーたちが主を危険にさらすまいと不快感を露わにしたのに対し、当の王女は決して声を荒らげることはなかったではないか。

王女は、すでに判断していたのだ。

「お父様が言ってた。仕事に実直な人間は、多少頑固で偏屈に見えても信頼できるって」

静かに微笑む王女のお顔に、ヘリオスは自らのこめかみに力がこもる感覚を覚えた。頑固と偏屈は、多くの場合褒め言葉ではないのだ。少女たちはそのことに気づかず、唯一グラジオラス特務騎士だけが口元に手を当てて笑いをこらえている様子であった。

「ユニス、航路は決まったよ。ヒルダだって、出番が欲しいんでしょ」

主の意志が固まった時、クルーの行動は早かった。アネットが航路が描かれた資料を操舵手を務める黒いクルー　恐らく、ユニスという名なのだろう　へと送り届けようところを離れる。手を上げ、不必要に元気な様子であるのは白いクルーであり、こちらはヒルダということになる。青いクルーの名前は最後までわからずじまいであった。

「さて、少しはがんばってるとこ、見せておかないとね。みんな、死にもものぐるいで戦ってるんだし」

セントポリーアミスカトニック王国第二王女の言葉通り、古龍と命との戦いはまだ何も終わってはいない。

北では嵐の魔王が荒れ狂う。

嵐龍アマツマガツチは三大王国の一角を担うミナガルデ王国のフギムムニン級大型輸送船の文字通り半身を喰いちぎってた。

船の高度を敢えて下げ、拘束弾でアマツマガツチを道ずれにする捨て身の作戦、及びギルドナイトによる船の一角そのものを質量弾として地面に叩きつける攻撃さえ、決定打にはなりえなかった。

嵐の魔王はその本性を露わにし、純白であった衣を黒く染め挙げ、赤い斑模様が睨みつける目のようにその体表に並ぶ。体中を引き裂かれながら、羽衣を擦り切れた布としながらもなおその目には怒りがほとばしり、戦意とそれを裏付けるだけの力を残している。

風はなおも激しさを増し、黒雲は空を覆う。風と雨とをない交ぜにして、嵐はなおも命を呑み込みまんとその声を響かせる。

ミナガルデ王国には三兄弟がいた。

長男は国王として国を管理する。



次男はフギンムニン級大型輸送船の艦長を任せられながら、しかし凡庸であった。どうしたらいいのかわからず、その指示はクルーたちからことごとく無視されていた。

そんな兄のことを、長女であるウエヌスは歯がゆい思いで見ている。ウエヌスはまだ若い。それでもその指揮能力を認める者は数多い。中にはウエヌスを艦長にすべきではないかという声を挙げる者もいたが、ウエヌスはそれをよしとはしなかった。

それはどうしてだっただろう。ウエヌスはその理由を思いだそうとして、その間にもゆっくりと意識が覚醒してくる。フギンムニンの重さで古龍を倒すという作戦が失敗した際、宙に投げ出されて、そして床に叩きつけられたはずであった。

しかし体に痛みはなく、背中には支えてくれる誰かの手。そして、自分の名を呼ぶ兄の声に、ゆっくりと目を開く。

いつも落ち着きなく視線が泳いで、その気弱さを強調しているはずの目が、今はしっかりと妹であるウエヌスのことを見ていた。

「大丈夫かい、ウエヌス？」

兄の、マルスの額には血が伝い、髪を濡らすほどの量である。それは、体に傷一つないウエヌスとはあまりに対照的で、兄が身を挺して庇ってくれたのだと告げる事実であった。飛び上がるウエヌスの体を抱き止めて、人二人分の落下の衝撃から守ってくれたのだろう。同時に、それが浅からぬ傷を与えたことは想像に難くない。

マルスは小娘一人支えるほどの力もなく、前のめりに倒れた。体

に覆い被さるように倒れてくる兄の体を抱き止めるなり、ウエヌスは悲鳴に近い声を上げた。

「お兄さま!」

もはやそこに冷静な指揮官の姿はなく、兄の大事に泣きじゃくる妹がいるだけ。

「救護班を早く呼んで! お兄さまが、お兄さまが……!」

ブリッジ内では他にもけが人が多数出ており、その中にはマルスよりも重傷を負った者もいる。優先順位が見えなくなるほど、ウエヌスは狼狽していた。

物が散乱し、まともに椅子についている者の方が少ない有様である。そもそもフギンムニン級そのものが半身を削られ、その機能は大幅に低下していた。ウエヌスの声に耳を傾ける余裕がある者は、ここにはいなかった。

うめき声と、咽び泣くウエヌスの声だけが、ブリッジに木霊する。

「撤退しなさい! 撤退して……。これ以上、船もお兄さまも……!」

反対の声は誰からも挙がらない。誰もがこの戦いの敗北を確信し、無事なクルーは重い足取りで撤退の準備を始めるべく所定の座席につく。

古龍に、嵐にミナガルデは勝つことができなかった。

今ではそんな勝利なんてどうでもいい。ただ、失いたくないもの

を失おうとしている事実が恐ろしい。

ウエヌスのこぼした涙は兄の背を濡らす。支える手は、兄によって掴み返された。

「いや、撤退はしない」

ウエヌスの見開かれた瞳は、マルスが手を支えに必死に立ち上がるうとして、それでも力足りず尻餅をつく形で座り込む様をただ呆然と眺めていた。そこに涙を溜ながら。

兄は肩で息をしながら、それでも話すことをやめようとしなない。

「ダメだ、ダメなんだよ……。今もこの下ではみんな戦ってるんだ。それなのに、フギンムニンがここを離れてごらん。きっとみんな不安になる」

傷ついたクルーさえ、うめくことを忘れてマルスの言葉に耳を傾けていた。決して大きくはない声が、ブリッジに確かに染み渡る。

「それに、今戦わないでどこで戦うんだい？」

傷は痛んだのか、歯と歯を噛みしめて、その隙間から漏れる息に声が中断する。思わず駆け寄ろうとするウエヌスを制するかのよう  
に手を上げて、マルスは話を続けようとする。

「古龍はどんどんドンドルマの街に近づいてるよ。ミナガルデ王国は比較的街に近いから、すぐにでも襲われるかもしれない。そんなの、君たちだって嫌だろ？ あ、いや、別に被害がドンドルマですむならかまわないって言うてるわけじゃないんだ。ただその……、

やっぱり、僕たちだけがここを離れる訳には、いかないよね」

何かが変わったわけではない。マルスは普段と同じように気が弱くて、凡庸で、いつもと同じようにしどろもどろとした発言に終始する。威厳などなくて、強さなど感じられない。

たとえ、誰もが絶望に打ちひしがれているような現在でさえ、兄は、フギンムニン級艦長は普段と何ら変わることはない。

そうだった。兄はいつでもこうだった。

何もできない。そのくせ、何をすべきかだけは誰よりもよくわかっていた。シュレイド王国が大型飛行船を出し渋っていた当時でさえ、マルスは艦長としてフギンムニンの出向準備を進めていた。周りにから浪費だ、無意味だと誇られながらも、いつも通りの気弱な様子を維持したまま。

結果として、兄のしたことは正しかった。戦いになれば満足に指示の一つも出せないマルスの英断がどれほどの人を救うこととなったことだろう。

何をすればいいのかわからない。しかし、何をすべきかは誰よりも心得ている。

「それでだね、それが……、古龍をどうしたらいいのかは、わからないんだけど……」

マルスが言葉に詰まると、代わりに笑い声がブリッジを支配した。

「黙って傷の治療でもしていてください。仕事の邪魔です」

「戦い方ってものを艦長にお見せしますよ」

「艦長はそこにいてくれるだけで結構です。後は、私たちの仕事です」

艦長は単なるお飾りにすぎない。クルーのそんな陰口を耳にした時、ウエヌスは憤りを覚えた。しかし、今はそれを誇りとともに聞くことができる。マルスは飾りである。飾りとして、単なる巨大な飛行船にすぎないフギンムニンを、ミナガルデ王国の誇りと信念を担う存在へと着飾らせるのだから。

あなたは実をつけない巨木です。一見何の役にも立たぬようでありながら、その懐にどれほどの人が安心して身を預けることができるでしょう。

いつぐらいぶりだろうか。兄の胸に、妹として飛び込んだのは。

「ウエヌス……?」

戸惑うマルスのことを構うことなく、ウエヌスは兄の温もりの中で、嵐を打ち破る最後の悪巧みを構築していた。

「古龍に、最後の一矢を報いる術があります、お兄さま」

嵐が雨を降らせ、嵐が風を吹かせる。横殴りの雨打ちつけるブリッジの上で、戦いは続いていた。

アマツマガツチが前足を振るうと、それは鋭利な風を纏い甲板を深くえぐる。攻撃をかわしたはずのハンターが風に吹き飛ばされ甲板を転げていく姿を、ティルテュは見送った。

「直撃しなくても体をもつて行かれる！」

誰に向けて言ったのかもわからない言葉を張り上げ、ティルテュは大剣を振り下ろす。擦り切れた飛膜さえも十分な強度を持って刃を弾き返す。

屈強で知られる黒角竜の素材をふんだんに用いた斧でさえ、古龍の甲殻を突破できない。

少しずつ、少しずつ。相手の出血を増やし体力を奪う。そんな戦い方　なんとハンターらしい　を続ける他なかった。

そして、切り札もある。黒縛王斧には雷光虫と呼ばれる発電を行う虫からわずかにとれる蓄電器官が大量に内蔵されている。そのため、刃から微弱な電流が流れ、相手を麻痺させることが可能である。

このまま攻撃を続ければ巨大な古龍とて討伐することができるはずである。攻撃が効いていない可能性もある。

このまま攻撃を続ければ巨大な古龍とて麻痺させることができるはずだ。対モンスター用に電圧を調整されたこの大剣が、古龍の筋肉にも同様に作用するという保証はどこにもない。

この船はまだ保つはず。半身を斬り裂かれ、満身創痍であることは目に見えている。

いくつものはずを積み重ね、現実には目を瞑る。

そうしている内は、ティルテユの心は折れることはない。

「峡谷を思い出しますね、スノードロップさん」

ベルキュロスの素材でこしらえた鎧を傷だらけにしながら、シギユンはなお鎌の形をした太刀を握りしめる。この場で最も攻撃力の高いスノードロップに風翔龍クシャルダオラは狙いを定めていた。シギユンは直衛の騎士のように、スノードロップを切りつけようと爪を振り上げた古龍の足を斬る。甲殻にかすかな傷が入っただけでありながら、クシャルダオラを怯ませるには十分であった。その隙に、結界の魔女の放った矢が古龍の頭を爆発させる。

その衝撃にブリッジが揺れ、雨粒が不自然な角度から甲板に降り注ぐ。

「あの時は剛種武器とルディアFを使わせてもらえなくて不満でした。今は、それを上回る敵戦力に不満です」

響狼の中でも特に強力な個体から得られた素材を古龍の素材で補強して作られた剛種武器。七人の魔女の証であるデザインを統一されたドレス状の防具。これらを使うことで、七人の魔女はその力を発揮できる。

しかし、ここにいる七人の魔女はスノードロップただ一人。そして、古龍は大勢いる。

爆撃ビンはすでに底が見えている。尽きる前にせめて嵐竜アマツマガツチを討伐しておかなければならない。

そのためには、クシャルダオラを引き離し、アマツマガツチの動きを封じ、矢を急所に当てなければならぬ。そんな都合のいい状況を作り出す方法を、スノードロップは持ってなどいない。

よって、すべては唐突に訪れた。

負傷者の運び出しを終え、ブリッジは落ち着きを取り戻しつつあった。艦長であるマルスは艦長席に座り、やはり何もしていない。指揮はいつも通り、ウエヌスが執っている。

ただし、若い指揮官にいつものような厳しい表情はなく、兄の頭に包帯を巻く様はほほえましくさえある。救護班が行うところを無理をして自分が治療すると言ってきたかかったのだ。慣れない手つきで、兄の顔の半分を覆ってしまうほど不格好な治療をそれでも必死に行っている。

「第一区画、損傷率三割を超過。これ以上は耐えられません！」

「まだ切り離すべき時ではありません。堪えなさい」

「了解！」

クルーの声に即座に反応し、的確な指示を送っている時だけは顔を厳しいものに変える。ただ、それでも治療の手を止めることはない。



まるで、治療と称して兄に触れていられることを楽しんでいるように。傷口を見るように装って、ウエヌスはマルスの耳元でささやく。

「お兄さま。このフギンムニンにはスレイプニル級ほどの速度もなければ、グングニル級ほどの火力もありません。ですが、ミナガルデには人の力があります」

「ウエヌス、君の作戦だけど、スノードロップさんはミスカトニツクの人だよ。ミナガルデの人の力じゃ……」

「お兄さま？」

余計なことには気づかないでいい。そう声に含ませると、マルスはあっさりと黙る。本当に、起死回生の一手が見つかるか否かという瀬戸際でさえ、兄は普段とまるで様子を変えようとはしない。

それは美德のようでありながら、同時にウエヌスを苛立たせた。

ブリッジの扉を開けるなり、そのすぐ脇の壁に背をついた無礼なハンターがいた。随分立派な弓を背負い、その鎧はドレスとしか思えない凝ったデザインをしている。ミスカトニツク王国の特務騎士の中で特に王女の信頼厚い七人の魔女の一人は、艦長席に目を向けることさえなくぶつきらばうな調子で名乗った。

「スノードロップ特務騎士、ご命令により馳せ散じました」

ウエヌスを含め、クルーたちはそんな特務騎士の様子を苦々しく見ていた。ブリッジほぼすべての人の視線を集めながら、少しも動

じた様子がないことは誉めるべきかもしれないが。そして、兄はやはり気弱な様子で接しようとする。こんな無礼な女にまで、マルスは普段の通りに接してしまう。それが、ウエヌスには腹立たしい。

「ご苦労だったね。では、その……」

兄を支えているのは自分であるという自負と、そうではない者までもが兄に同じような微笑みを向けられているという事実。

ウエヌスは自負を優先し、打ち合わせておいたマルスに小声でそっと耳打ちする。

「君に頼みたいことがある、です、お兄さま」

「君に頼みたいことがある。そう、頼みがあるんだ。これから、フギムニン最後の戦いを仕掛ける。大変危険な戦いだ。聞いてもらえるかな……？」

「無論です」

壁に背中をつけ、うつむき加減のまま、スノードロップは頷こうとさえしない。

「詳しい説明はウエヌスにさせよう」

これも打ち合わせ通りである。ウエヌスは包帯を巻き終え、その手を離し向き直る。しかし、スノードロップと視線が交わることはない。

「現在、第一区画は損傷激しく、切り離しが余儀なくされています。

そこで、第一区画をそのまま利用することとしました」

今度は以前と逆をしようと言うのだ。以前は気嚢内を減圧し、飛行船そのものの重さを利用した。今回は反対に気圧を高めることで上昇する力を使うことになる。

「作戦の内容はこうです。まず、第一区画の気球の浮力を高めた上でこの区画を切り離します。すると第一区画は急激に上昇を始めることでしょう。その時、あの古龍をフギンムニンから引き離すことが可能となります」

そして、ミスカトニックが秘匿し続けた剛種武器ならば古龍のとどめを刺すことができるかもしれない。

「第一区画に乗り込み、古龍と直接対峙してもらいたいです。あなたの弓の破壊力はすばらしいものです。是非その力を存分に……」

「僕たちはね、君のその弓に期待している。もし、あれほどの爆発を直撃させることができたとしたら、あいつも倒せるんじゃないかってね。でも同時に、その爆発が船にも及んでしまうことを警戒しているんだ」

「お兄さま!？」

ここまででは打ち合わせていない。突然のことに、怒りを含ませる前に口から声が漏れた。いや、たとえ怒ってみせたところでマルスは発言を取り消そうとはしないだろう。いつでも気弱で、そう、いつでも同じような態度しかとろうとしないのである。

「言い方は悪いけど、相討ちでもかまわないとまで考えてるんだ。」

それでも、君は行ってくれるだろうか」

使い捨てにされると聞かされながらも、スノードロップ特務騎士は平然と落ち着き払っている。うつむいたままでこちらの様子を見かねて目が配せ一つない。

ミナガルデにも特務騎士はいるが、ここまで冷静な者はそうはいない。音に聞く王立古龍観測隊は、このような者たちによって構成されているのだろうか。

「条件が一つあります。乗り込む者は、私の方で選ばせていただきますが、よろしいですか？」

マルスは微笑みながら頭を下げる。

「よろしく願いますよ」

誰と目を合わせることもなかった特務騎士は、やはり一切の馴れ合いを見せることなくブリッジを後にする。ウェヌスは思わず息を吹いた。そんなことはないつもりであったが、自分でも考えていた以上に緊張していたのだろうか。

「お兄さま。どうして余計なことまで伝えたのですか？」

「嘘をつく訳にもいかないだろ。それに、スノードロップさんならきつと言われるまでもなくわかっていたさ。背中を壁につけて隙も見せなかったし、僕のことを一度も見なかった。きつと油断なくあつたりの様子をつかがってたんだね。あの張りつめた空気、ちよつとやそつとのできることじゃないよ」

まるで子どもみたいに楽しげなマルスの様子は、ウエヌスをひどく苛立たせた。

「無礼なだけです、あんな女」

妹の気持ちも知らずに、マルスはスノードロップ特務騎士のことを思い浮かべているようであった。そのことが徐々にウエヌスの沸点を下げていく。それが顔に出ているのだろうか。

「ウエヌス、ちょっと機嫌が悪くなつてなかい？」

「知りません！」

その頃、スノードロップはシギユンに抱きつくようにしがみついていた。誤解されてしまいそうな光景であるが、幸い、ここは第一区画の船内である。天井一枚挟んですぐ上にブリッジがあるが、少なくともここに他のハンターの姿はない。

「スノードロップさん、落ち着いてください。大丈夫ですから」

「人が、……たくさん、私を見て……」

ただでさえ人見知りで人の目さえ見られないスノードロップに人が大勢いるブリッジに足を踏み入れることは身が重かったのだろう。呆れているような諦めているような複雑な心境で、シギユンはスノードロップの背を 防具越しであるため、効果は薄いだろすが撫でる。

「真つ暗闇の中なら、すごい人なんですけどね、スノードロップさんて」

セイレムの魔女で知られるセイレム山出身であるスノードロップは幼い頃から闇の中で聴力に頼る戦い方を叩き込まれていたらしい。そのためか、反対に視力に頼ることができず、人の顔を見られない内気な人格が堅牢に構築されてしまっていた。

こうしてシギユンに慣れてくれるまでにも決して少ない時間を必要とした。

「もう大丈夫ですから。それで、今回の作戦はスノードロップさんを中心に、あとは護衛の剣士ですよね」

半径約一〇〇mの区画は決した狭いことはないが、それでもアマツマガツチを乗せると考えた場合、そう大勢が動き回ることはできない。できる限り少ない人数となると、剣士はそれこそ数えるほどでいいことになる。

「もちろん私も行きますけど、ほかの人はどうします？」

フギンムニンには他の特務騎士は乗っていない。ただでさえ数の少ない騎士たちは王籠の進行ルート上に集中させられており、この地区にはそれこそ片手で数えるほどしか動員されていない。今からハンターに声をかけるとなるとどうしたらいいのだろう。強そうな人にすべきだろうか。それとも経験豊かそうな人だろうか。どちらにしる、嵐の中見て回るのは大変そうである。シギユンは口元に手を当てて悩んだ。

そうしている内に、スノードロップの方も落ち着きを取り戻した

らしい。少々呼吸が安定していないが、シギユンから離れることができるくらいには回復している。

「もう、目星はつけています」

「目星？」

突然嵐が音を増す。天井の扉が開かれ、雨水が吹き込んでくる。木製の小さな階段を抜けた先はすぐに甲板であり、誰かが降りてこようとしているのだと容易に想像できる。

稲光に視線を奪われて、先に確認できたのは声であった。

「私に用があるそうだな？」

女性のものとはわかって、たくましさを感じる声だった。階段を角竜の素材で作られた脚装備を鳴らしながら降りてくるのは褐色の肌をした女性で、たしかティルテュと名乗った地元のハンターである。そのすぐ後ろには、防具を身につけていない男性が一人後に続いている。まだ若い男性で、慄然とした紺色の制服は、ミナガルデの特務騎士の証である。

「この方でもよろしいのですね？ スノードロップ殿」

ティルテュと特務騎士の男性は階段を降りるなり横に並ぶ。女性であるティルテュの方が背が高く、失礼ながら、その若さも相まって男性からは頼りなさを覚えてしまった。どこかジェイナスを思わせる優しい微笑みの似合う人なのだ。

「はい。ティルテュさん、でしたね。我々は今からアマツマガツチ

との決着をつけます。大変危険な戦いになりますが、協力してもらえませんか？」

やはり、スノードロップは横目で見ていくくらいが精一杯で、テイルテュと特務騎士の顔を直視できないでいる。テイルテュはどうも扱いづらさを覚えたらしく、困ったような表情で頬をかく。

「それは構わないが、具体的には何を？」

「この区画を切り離し、大型古龍をフギンムニンから引き離します。あなた方にはこのままここに留まり、戦闘を継続してもらいたいです」

「ずいぶん危険な任務のようだが、勝算は？」

テイルテュは説明してくれた特務騎士に対してではなく、スノードロップの方を見る。その視線は、剛種武器である弓へと向けられている。スノードロップとしてもその方が気が楽なのだろう。微笑むほどの余裕があった。

「勝算はあります。ですが、生きて帰ることのできる保証はありません」

こんな時、普通の人なら断ることだろう。シギユンとて、特務騎士としての義務感と、仲間への信頼が死の恐怖を覆い隠しているにすぎない。そして、テイルテュにはどちらもない。断る。他をあたってくれ。死ぬつもりはない。いろいろな断り方を想像して、つい表情が暗くなっていくことを自覚する。

「わかった。それで、決行はいつだ？」



瞬きを繰り返す。そして、呼吸を整える。

「ほ、本当にいいんですか……？ その、死ぬ、かもしれないんですよ……？」

「甲板にいても危険であることに変わりはない。それに、条件に関しては君らも同じだろう」

「そ、そうですね……」

シギユンの方が間違っただことを言っているのだろうか。生物は本能的に死を忌避するはずであって、通説に照らせばシギユンの考えの方が正しいはずである。それなのに、ティルテュの自信に満ちた態度に、確信は揺らいでしまう。

ともかく、メンバーがそろったという事実を喜ぶことにしよう。

「では、我々が奴を追い込みます。上昇時、衝撃が来ますのでできる限り低い姿勢を維持してください」

階段へと向き直る名前も知らない特務騎士へと、シギユンは声をかける。

「よろしくお願いします」

すでに数歩階段を上っていた騎士はわざわざ足を止めて戦いに出向く三人に一人ずつ視線を移す。その目には、一言では言い表せない感情が含まれているようにも思える。

「ミナガルデの特務騎士として最後の戦いの場に立てないことは心苦しいですが、あなた方にすべてを託します」

特務騎士としてのプライドと使命。その高い誇りは決して奢りではなく、任務の達成こそを至上と捉え、そのためには如何なる協力も惜しまない。自分の仕事を奪われたという怒りをより大きな矜持で包んで隠して、ミナガルデの特務騎士は笑って言葉を残す。

「では、ご武運を」

今なおやむことのない嵐の中へ。

どんなに激しい嵐にも必ず終わりは訪れる。

## 第三話「天使の輪の上で Last Shooting」

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦スレイプニルは駆け抜ける。セクメーアの砂漠を、ひたすら東へと。

それぞれの飛行船が最大船速を發揮し、船団は縦に間延びを始めていた。先頭をスレイプニルがひた走り、グツフルファクシ級飛行船がその状態の程度によって様々な速度でその後が続く。

行く先にはいくつもの羽ばたきが重なり合い、遠目には形を変えるいびつな雲が塊を作っていた。

「先発隊より入電。古龍の群、確認しましたわ」

スレイプニルのブリッジでは俄然慌ただしさを増す。管制を担当するアネット　桃色の制服と眼鏡がトレードマークである　が状況の変化を逐一報告する。

普段は艦長であるセントポリアのお友達のようなクルーたちも、今ではそれぞれが持ち場につき、その手際は迅速かつ正確である。

「各員第一種戦闘配備」

白い制服の艦内管制、ヒルダも普段の陽気な様子は今はお休み中である。ユニスは操舵輪をしっかりと握りしめたまま、しかし様子は普段と同じように落ち着いている。あまり変化のない娘なのだ。

「推力四〇を維持。針路、そのまま……」

「安全装置解除。バリスタ、大砲ともに発射態勢を維持」

青いデメトリアは火器管制。スレイプニルの攻撃力を担う。

クルー各員が準備を整えたことを確認するなり、副艦長であるエフィーは艦長席の横で紫の制服を翻す。

「セントポーリア様、戦闘準備整いました」

五人の少女たちの主はゆっくりと立ち上がった。その姿はハンターというよりも王女という言葉がよく似合う。高貴な美しさ。そう表現するしかないほど、その純白の鎧は王女の赤い瞳にそっと寄り添う。

パールFX。ミスカトニックがサンプルとして保管する古龍の素材を使用する形で生み出されたこの鎧は、決して見てくれだけの存在ではない。セントポーリア王女が、一人の少女である前に優れたハンターであることと同じく。

「それじゃ、私、行くから」

王女は散歩にでも出かけるような気楽さで古龍の群に挑もうとしていた。

「おや、お姫様の出陣だね」

つい先程まで真面目に仕事をしているかと思いきや、やはりヒルダはヒルダである。元気よく手を上げて、彼女なりに王女の出陣を盛り上げようとしていた。他のクルーたちもセントポーリアへと視線を向け、セントポーリアはそれに応えるかのようにそれぞれと視

線を合わせる。

最後に、すぐ脇に立つエフィーへと体ごと向き直る。

「エフィー、後のことは任せるから。そうそう、私がない間、艦長席座ってもいいよ」

言うが早いか、エフィーは身の軽さで知られる迅竜ナルガクルガ顔負けの速さで艦長席についた。

「って早！」

エフィーは上機嫌な様子である。

「だって、座り心地に興味がありましたから。それに、セントポリア様が帰ってきたら、すぐに明け渡さなければなりませんもの」

要するに、帰ってくることを期待しています、そう言いたいのだろう。思えば、ハンターになりたいと父に心配をかけ、今こうして大切な部下に心労をかけている。三年前から何も変わっていない自分に、セントポリアはつい笑みをこぼす。

「大丈夫だって。こんなところで死ぬわけにはいかないからね。だからみんな、スレイプニルのこと頼んだよ」

いざ、出陣である。ブリッジを、スレイプニルをクルーたちに任せ、セントポリアはその姿を甲板へと移した。

気球が影を落とし、日光に耐えられないセントポリアに居場所を与えている。風が吹き抜けては、ツインタールにまとめられた白

い髪をなびかせた。

すでにここは安全なブリッジではなく戦場である。セントポリアの背には布で巻かれた大きな武器が背負われ、姿を見せずともその出番を待ちかまえる。衣装部屋に置かれた二つの衣装箆筒と鎖で繋がれた二つの武器。セントポリアとアマランサスのために用意された兵器の片割れは、まだ眠りにについている。

甲板の遠く先、船首ではメイド服のままのアマランサスが砂漠を眺めたまま動かない。きつと何か考えがあるのだろう。確信がアマランサスへの関心を薄れさせ、セントポリアの視線はアマランサスを見るためには障害物でしかなかったものたちへと移される。

多様な姿をしたハンターたちである。その誰もがセントポリアのことを見ていた。ある者は手すりに寄りかかるように座り、さすがに砂漠の気候は暑いのか上半身裸の男の姿もある。とてもではないが、王女へ謁見している風ではない。

そして、セントポリアもまた、王女としてここにいるつもりはなかった。

「おや、御大将自らですか？」

声をかけてきたのは女性である。特務騎士の一人。七人の魔女でもなければ、剛種武器を与えられてもない。で、スレイプニルのハンターたちの実質的なまとめ役である。左頬を走る傷跡を勲章だと隠しもしない剛毅な特務騎士は戦士の群に迷い込んだ小娘に笑いかけた。

「みんながしっかりと働いてるか見に来たよ。だから、さぼったりな

んてしてるとその分給料からさっ引くからね」

セイレムの里で体得したのは何も狩りの術ばかりではない。からかわれた時のあしらい方もその一つだ。

特務騎士は笑うと、ハンターたちへと向き直り、その大声を響きわたらせる。

「いいか、おまえ等！ 冗談だとは思うな！ 無様なまねを見せればうちの姫は本気で給料を引くぞ！」

ある者は頭を抱えて怯え、またある者は今にも泣き出しそうな様子で、そしてある者は抗議の声を上げた。どれも本気ではない。

「嫌なら覚悟を見せろ！ 古龍の一頭でもしとめてみせる！」

ハンターたちが一斉に腕を突き上げ雄叫びを重ね合う。それは闘いの声となって甲板に響いた。

まったく、セイレムの里といい、ミスカトニックといい、どうしてもこつても悪い冗談が好きなのが多くのだろう。セントポーリアは呆れながら、しかし、その耳は確かに古龍の声を聞いた。

「クシャルダオラ！ 左だ！」

誰かが発した言葉に、ハンターたちは一斉に行動を開始する。すでに船側からはバリスタの矢が放たれ、クシャルダオラを狙い撃ち、大砲は古龍の群の間を縫うように突き進む。

しかし、これで十分ではない。

元々速度重視の設計がなされているスレイプニル級では重量の關係からバリストタなどの大型兵器の搭載が制限されている。弾幕は必然的に薄く、突破されることは目に見えていた。

そのためにハンターたちがいるのである。

「迎撃しろ！」

バリストタを器用にかわしながら接近する風翔龍に対して、まずはガンナーが攻撃を仕掛けた。使用される玉は徹甲弾。実に地味な攻撃で、直撃を食らわせても一瞬不発かと思えるほどクシャルダオラにダメージを与えない。しかし、ほんの数秒後、突如古龍体表に残された弾丸が爆発する。時差式の爆弾。それが徹甲弾の性質である。

衝撃そのものは堅い甲殻であろうと衝撃として古龍を苛み、それを幾人ものハンターが一齐に行うのだ。体を埋め尽くすように生じた爆裂はクシャルダオラを怯ませ、体勢を崩した古龍。さしもの風翔龍とて。は木片を飛び散らせながら甲板へと叩きつけられた。

もちろん、この落下に巻き込まれるほど間抜けなハンターはいない。それどころか、落ちた衝撃から回復しきれないクシャルダオラを取り囲み、すぐさま剣士たちが攻撃を開始する。すでに弾かれることが前提の戦いを心得ているハンターたちはそれぞれの武器でも弾かれにくい型を用いて攻撃を繰り返す。

社会の発展に寄り添うように発達してきた狩猟という技術は、ちよつとやそつとのことば揺らぐものではないのである。

たとえどれほど強力な相手であろうと、人は挑み、そして生きて



きたのだから。

そして、セントポリアもまたハンターであった。

「一頭抜けた！」

弾幕もハンターの猛攻さえも潜り抜けたクシャルダオラが選んだのはセントポリアであった。

さて、どうしてだろう。最も小さい相手と見くびられたのだろうか。それとも、全身の白さの割に赤い瞳が目立ってしょうがなかったのだろうか。そうではないとすると、古龍特有の習性ゆえかもしれない。

古龍は、自身が龍毒を持ちながら、龍毒を持つ存在に対して強い敵愾心を抱く。峡谷で龍毒を持つ舞雷竜ベルキュロス、冥雷竜ドラギュロスを襲撃するクシャルダオラの存在が確認されている。

もしこの報告が確かであるのなら、セントポリアが狙われることは仕方がない。

「姫！」

ハンターが叫ぶ。クシャルダオラは鋭い爪を振りかぶったまま、セントポリアを目指し降りしいていた。

古龍は龍毒を狙う。それなら、そして、この船で最も強力な龍毒を持っているのはセントポリアに他ならない。

意識し始めた途端に、まるで武器がその意を察したかのように背

中に弱い痛みが走る。龍毒に触れた特有の痛みである。

徐々に視界の中で大きさを増すクシャルダオラ。獲物を捉えたという確信に歪む顔を確認できるほどの距離まできたところで、セントポーリアは包む布ごと武器を抜き放つ。

すると、雷が落ちた。その色は赤と黒。赤黒い輝きが布を突き抜け、振り上げた一撃がクシャルダオラの顔を打ち、強打が角を砕く。

古龍はその龍毒を角で制御している。もし角を失えば、体を龍毒の奔流が襲い、自らの毒で自ら焼くこととなる。

クシャルダオラの爪はセントポーリアの頭上を素通りし、角を起点として発生した赤黒い光は古龍の全身を包んだ。もはや痛みは何も見えてはいないのだろう。降下の勢いを消すことにさえ考えが及んでいない。慣性のまま、甲板をすべり、手すりを砕いて船外へと落ちていく。

セントポーリアの手には一振りの狩猟笛が握られていた。

くすんだ褐色であり、その姿は巨龍の横顔である。ミスカトニツク王国王立図書館の奥に安置されていたこの狩猟笛はその経緯さえ明らかでない。何らかの古龍の素材を用いた、故に膨大な龍毒を放つ狩猟笛は、わずか一振りしただけで巻かれていた布を焼ききってしまった。

「私はセントポーリア。セイレムの魔女とともに悪魔を打ち倒した、七人の魔女の一人！ あんたたちなんかは、負けるつもりはないんだからね！」

主の挙げた功績にハンターたちが沸き立つ。

しかし古龍たちもまた、湧いてでてくるかのように次々とスレイプニルへと飛びかかろうとしていた。左舷からはクシャルダオラが風を巻き起こしながら、右舷ではまもなく炎王龍テオ・テスカトルが炎とともに到着を果たす。

「みんな、一度くらい自分の死に場所って、考えたことがあるでしょ？ こんな死に方は嫌だとか、愛する人に看取られたいだとか、かつこよく散りたいだとか。だからみんなここで死んで！ これは誇り高い戦いだから。世界を守る戦いだから。誰に対しても誇れる戦いだから！ 王龍への道は、このスレイプニルが切り開く！」

その胸には不退転の決意。その手には狩猟笛の剛種武器、巨龍笛「須弥山」を握り締める。

世界は、英雄を必要とはしていなかった。たった一人の勇者で救えるほど世界は狭くはなく、また、各人の奮闘こそがこの世界を支えているからである。

一人の勇者よりも、百人の名もなき戦士たちの戦いこそが、この世界を守っているのである。

ここに、嵐に挑む人々の姿がある。

「もうバリスタが持ちません！」

ミナガルデ王国フギンムニン級大型輸送船フギンムニン。嵐に打

ちつけられながらまだ空を飛ぶことをやめようとしなない頑固者の甲板では、幾本ものロープが張りつめられていた。

「人の手でやれ！ 何としてでも第一区画に釘付けにする！」

「了解！」

漆黒で禍々しい衣を染める巨体がロープによって甲板に縛り付けられようとしていた。バリスタ用拘束弾は、すでに多くのバリスタを破壊されているフギンムニンでは十分な数を確保できず、よって嵐龍アマツマガツチを捕縛できるほどではない。

よって、人の手でロープをかけ、それを綱引きの要領で必死に押さえようとしている人々の姿がある。

何とも危険な作業である。絡まることを恐れ、命綱は使用できない。アマツマガツチが首を大きく振れば、押さえきれなかった人々はロープに振り回される形で宙へと投げ出された。

しかし、誰にも怯えの色はない。誰もが、ここでこいつをしとめなければならぬと理解していた。

天井を挟んで人々の死闘が繰り広げられている間、船内では静かなものであった。分厚い天井は嵐の音を消し、人と古龍の戦いが行われていることを忘れてしまうほど、穏やかでさえある。

ここにいる三人の女性は、思い思いの姿勢で休みをとっていた。

黒角竜の大剣背負うティルテュは地べたにあぐらをかいて座っている。目を閉じ、これからの戦いに思いを巡らせているかのようである。

響狼の弓のスノードロップは壁に背をつけて立っていた。その目はやはり閉じられ、人と顔もあわせられない気弱な魔女を寡黙な射手へと演出している。

毒怪鳥の毒を含む太刀は床におかれている。シギユンは正座の姿勢のまま、その視線は時折心配げに上を、戦いが行われている甲板の方を向く。今、自分たちにはできないことはないと知りながら。

沈黙が重苦しく、船の歪みが木材を軋ませる音が響く飲みである。この沈黙を破ったのは、意外にもティルテュであった。

「君にはお姉さんがいるんだっただな」

目を開け、スノードロップを見る。スノードロップも目を開けたが、視線を合わせようとはしなかった。

「はい。アマランサスと申します。凜々しくて精悍で、自慢のお姉さまです」

静かな表情のまま、ティルテュは小さく笑う。

「奇遇だな。私がこの装備を作る時協力してくれたハンターの名前もアマランサスだった。最も、いつも笑ってふざけた調子の奴だった。偶然というものはあるものだな」

外套として使用されている古びた布をティルテュは掴んで見せた。

「初対面の印象は決していいものではなかった。今でもあいつの格好は理解に苦しむ。おまけに変なところで鋭くて嫌なところばかりついてくる奴だった」

「そろそろ、誉めて上げた方がいいと思いますけど……」

シギユンの言葉に、やはりティルテュは小さく笑う。

「そうだな。だが、頼りになる奴だった。街の大事に、一人クエストに行こうとしていた私に、よくよく考えてみるとつき合ってくれたのはあいつだけだった。妙な安心感があって、今ここにいてくれたらと思う。そんな奴だ」

「ティルテュさんも、怖いんですね……」

「さすがに、嵐の化け物と戦ったことはなくな」

「何を弱気なことを」

人見知りの激しいスノードロップにしては珍しく、その声には怒気が含まれていた。

「あなたが頼りにしている人がここにいないということは、他の誰かがその助けを受けられているということ。総合力で見たなら何ら目減りはありません」

「面白い理屈だな。だが、あいつなら、アマランサスならきつと、この砂漠のどこかで戦ってるんだろ。へビィボウガン担いで、いつもの格好で。あいつはきつと今も誰かを支えてるのなら、私は

私の戦いを終わらせなければな」

ティルテュは立ち上がる。まるで、そろそろその時が近いことを確信しているかのように。スノードロップもまた、壁から背を離した。

「君のアマランサスにも会ってみたいものだ」

スノードロップは弓の調子を確認するように弦を引き、ティルテュには応えようとしない。ティルテュとてそれを期待していた訳ではないらしく、すでに気は外の戦場へと向いている。

その中、まるで小さくなってしまったように座ったままのシギユンは、ある恐ろしい疑惑に駆られていた。

「ティルテュさんて、確かアマランサスさんの報告書に名前のあった現地の協力者だったような……。お二人のアマランサスさんて、同じ人なんじゃ……」

だが、シギユンにこのことを指摘する勇氣はなかった。敬愛する姉のことを目の前でぼろくそに言われて、スノードロップが怒り出さない保証がないからだ。

そして、喧嘩などしている暇もないうちに、一際大きな揺れがこの区画を襲った。

「どつやら、準備ができたようだ」

フギンムニンを想像する場合、ホール・ケーキがとてよく似合う。それを六等分にカットして、時計回りに番号をふるのである。合計六区画がそれぞれ独立して機能する。ただし、中央には円形のブリッジがおかれているため、それぞれのピースはすでに誰かにかじられてしまったかのように扇型の中心が丸くくり貫かれた形状をしている。

フギンムニンはこれらのピースを切り離すことで、損害が他の区画に及ばないための安全装置として使用していた。

すでにこの半分が古龍に喰い散らかされてしまった。一番から四番までの区画はすでに切り離されている。

そして、今また切り離されようとしている区画があった。第一区画である。

それぞれがある程度の自立性を持ち、独自に浮遊することができると。そのため、敢えて気嚢内に軽量気体を満載した第一区画は、切り離されるなり上昇を開始する。

まだ作業が続いていた人々が急いで隣の第六区画へと飛び降りる。甲板に降り立つことができたものは幸いである。中には縁にぎりぎり立つことができただけで、あわや転落というところを仲間に救われた者もいた。

熱心な者ほど待避が遅れるのである。よって、最後の一人が最も責任感の強いものとなることは必然であった。

テイルテュにこの詳細を伝えた特務騎士が、まだ第一区画に取り残されていた。仲間が呼ぶ声がする。しかし、まだここを離れる



わけにはいかない。ロープを甲板に飛び出した突起に結びつける必要があった。これを欠いても状況に影響はないかもしれない。しかし、一つの手落ちで古龍を束縛から解き放つなどあつてはならない。全力を傾けなければならなかった。

雨水が目当たり、湿ったロープは扱はずらい。それでも固く、固くロープを結びつけることに成功した。

その間、第一区画はどれほど上昇しただろうか。確認している余裕はない。特務騎士は嵐の空へと身を投げ出した。雨粒の先に第六区画の甲板が下に見える。その縁に届いてくれることを願いながら、手を伸ばす。

届かない。そう確信しながらも、落下は止まらない。無理矢理右手を伸ばし、ただ伸ばす。すると、その指先が、甲板の縁へと触れた。

右手が甲板に触れると、それでも止まらない落下の運動エネルギーは右手を基点としてフギンムニンの側壁 第一区画と接続されていた面である へと特務騎士の体を叩きつける。

全身を打つ強い痛み。口の中に血の味が広がったのは、口を切ったか、鼻が折れたかのどちらかであろう。意識が遠のき、腕から力が抜ける。支えなければ駄目だとわかりながら、すでに右手に体を支えるほどの力はなかった。

指が、甲板から離れた。

体が落ちていく。その落下速度よりも速く伸ばされた誰かの手が

特務騎士の手を掴んだ。

臆気な意識の中で見上げると、ハンターの一人が縁に体を乗り出してまで特務騎士を掴んでくれていた。

「古龍は……、古龍はどうした？」

無精髭の奥でハンターの口が笑う。

「まずはご自分の心配をしてください、特務騎士殿。作戦は成功です。古龍は第一区画とともに浮上を続けています」

はじめに感じた体全体を押さえつけるような加重は次第に減少を始めていた。上昇する第一区画が徐々に等速となり、上方向への加速を体を感じなくなったからだ。

このことを準備が整ったと判断し、ティルテュたち三人は甲板への階段をあがった。

相変わらずの嵐のただ中である。ちょうど扇型の中央部分から出ると、基部の側に目当ての古龍の姿はあった。

浮遊しているわけではない。甲板に文字通り縛り付けられていたロープが巻き付き、あるいは上から押さえつけるように張られている。中にはちぎれ、束縛の用をなさないロープもあり、作業に関わった人々の奮闘ぶりが伝わってくるほどである。

古龍の動きを完全に封じるほどではないにしろ、しかし嵐の中を自由に飛び回る古龍の体は甲板に完全に固定されていた。

「あの特務騎士、名前くらいは聞いておくべきだったな」

「すごい、こんなにしっかりと……」

想像外の仕事ぶりに、ティルテュとシギユンはそろって感嘆する。その間にも、スノードロップだけはすでに矢を弓につがえていた。

「二人はアマツマガツチの動きを止めてください。そうすれば、私が奴をしとめます」

アマツマガツチの長い首はもがくように動き周り、その動きの激しさは正確な狙撃を不可能とする。また、張られたロープの軋む音が耳に届き、ロープが固定された甲板の木材さえ、悲鳴を上げていた。

何であれ、戦いはすぐに終わることを意味していた。

アマツマガツチの轟く咆哮。今なお戦う力を残すことを意味している。

「昔こんなお話を聞いたことがあります。絵の中のティガレックスを捕まえてみなさい。わかりました。では、まず絵からティガレックスを追い出してください。それができたなら、捕まえてみせます」

この頓知話は、絵から出すことはできないため、ティガレックスを捕まえることができなくとも問題はないというオチになる。古龍の動きを止めることができないなら、倒せなくても仕方がない。そ

んな言い訳が成り立つ。

「どちらも無理難題だな。だが」

テイルテュの目に諦観や恐怖の色はない。シギユンとて、絵のテイガレックスを動かすつもりでいた。

「始めます!」

スノードロップの言葉とともに、二人のハンターが跳び出す。

嵐の空では多数のクシャルダオラが旋回している。王の危機にかけたのか、その動きは明らかに第一区画を狙っている。たった三人のハンターで対処できる数ではない。だが、戦っているのは人間だけではない。

舞雷竜ベルキュロスが雷とともにクシャルダオラに襲いかかる。

風翔龍クシャルダオラは風を巻き起こし、それを迎え撃つ。

上昇を続ける第一区画を中心に円をなす風と雷の戦い。古龍とは今を生きる命のすべてを敵として、故に命は立ち上がった。それぞれの全力を持ち寄り、それぞれにできることを全力で。

結界の魔女が弓を放つ。

響狼の上質な真紅の毛で作られた弦が張りつめ、爆撃ピンを取り付けた矢が嵐を裂いて突き進む。

これは様子見にすぎない。

精密な狙いを与えられなかった矢はアマツマガツチへと突き進むも、しかし、巻き起こる風がその軌道を曲げ、矢は後方へと通り抜ける。そして、虚空で爆ぜた。

「軌道の曲げられ方が毎回違う……。偶然ではなく意図的に曲げられているということですか。厄介な……」

この古龍は風任せに矢をそらせるに任せるのではなく、矢を見て意図して風を起こしているのだと考えられた。峡谷で戦ったクシャルダオラはこんな器用な真似はしなかった。

さしずめ、このアマツマガツチは風翔龍の王。

「それでやるしかないだろう。でなければ、我々に託してくれた皆や、ベルキユロスたちに申し訳が立たん！」

テイルテユの大剣は甲高い音を立てて弾かれる。シギユンの太刀も同様である。

剛種武器でなければ、古龍の甲殻の直接の破壊はできない。そして、ここで剛種武器を持つ特務騎士はスノードロップしかない。そもそも七人の魔女に与えられた分を含めても総数で一三しかないような希少な武器なのだ。

すべてはこの弓にかかっていた。

「私、毒を与えてみます。毒にすれば、もしかしたら風が消えるかもしれません。疲れればモンスターも攻撃がおかしくなったりしますから！」

ベルキユロスの鎧に身を包んだシギユンがその太刀を見せびらかすように振り回す。弾かれながら、それでも諦めず古龍の手へと攻撃を繰り返す。鎌の形をして並ぶ刃からは毒が滲みだし、攻撃の度に古龍の体へと毒が刻まれていく。

「私は麻痺させる。その隙に、狙ってみせる！」

角竜の防具に禍々しい布の外套を羽織ったティルテュは大剣というよりはハンマーでも振り下ろしているような勢いでシギユンとは反対側の腕を叩く。雷光虫の発電器官から生じる微弱な電流が古龍の体へと染みいる。

水掻きのように飛膜を生やし、決して頑強には見えないような手でさえ、人の刃を寄せ付けようとはしない。

古龍とはあまりに規格外の存在である。

果たして毒が効くのだろうか。現在の生命と同様の代謝機構を有している保証はない。そして、毒が風を起こす器官を機能不全に陥れるという保証も。

麻痺を起こすのだろうか。筋肉の伝達に、電氣を用いていなかったとしたら。筋肉のある種の誤作動である麻痺　黒縛王斧の麻痺は麻痺毒性ではない　は起こらないことになる。

古龍という存在を相手にするには、あまりに都合のよい仮定が多すぎた。

「マルス艦長の言葉通り、相討ちも覚悟しなければならぬかもし

れませんね」

矢筒には爆撃ピンを装着した弓が九本残されている。このすべてを一度に使えば、恐らくアマツマガツチを爆破できるほどの火力を得ることができる。

ただし、古龍との戦闘で傷ついた甲板は、その衝撃に耐えることはできないだろう。第一区画は崩壊してしまう。これまでこんな思い切った手に出ることができなかったのは、フギンムニンそのものを撃沈してしまう恐れがあったからだ。

だが、これはあくまでも最後の手段である。命が惜しい訳ではない。ただ、挫けぬ心を持つ仲間たちに応えなければならなかった。ただ一人、諦めているわけにはいかなかった。

アマツマガツチが爪を払う。それはシギユンの頭上をかすめ兜を弾き飛ばすが、シギユンはその隙にアマツマガツチの懐へと入り込んだ。

「私はあなたたちに大切な人を奪われました。私のたった一人のお姉さんでした！」

太刀のみが行うことのできる気刃斬り。本来攻撃毎に呼吸し、次の攻撃に備えるハンターの攻撃法に逆行して一息に多数の斬撃を叩き込む奥義である。

右から左から、毒を含んだ刃が踊る。アマツマガツチの胴体に叩きつけ、本来は弾かれるところを太刀筋をうまく選び、滑るように体表を移動する。そして淀みなく次の太刀へと繋げる。振り下ろされる刃。それは首筋に沿って体表をなぞり、そして、シギユンは体

を大きく回す。刃に全体重と遠心力さえ加えた大回転斬り。

峡谷で古龍に姉を奪われたハンターの放った渾身の一撃はアマツマガツチの巨体さえ怯ませた。

「この毒は、命奪われた人の涙です！」

そして、漆黒の体のところどころに浮かぶ黒ずんだ紫の斑点模様。毒が効果を現し始めた証である。風が止み、アマツマガツチは苦悶にうめいた。

その隙をティルテュは見逃さない。すでに足を踏ん張り、大剣を肩越しに構え待ちかまえていた。

「私には仇をとってやりたい奴らがいる。立派なギルドナイトたち、母さん、その他大勢の人たちだ！」

溜め斬り。大剣の重たい刃を思い切り振りかぶり、全身の筋肉を一気に緊張させる。そうして放たれた一撃はハンターが使用するすべての武器の中で最強の破壊力を誇るとされている。その下馬評通り、風そのものを叩き斬らんばかりの凄まじさで大剣がアマツマガツチの額へと叩きつけられる。さしもの甲殻とて砕け、目に見えた破片が散った。

「この束縛は、無辜の命の嘆きと知れ！」

そして、その傷から流れ込んだ弱い電流が嵐龍の自由を奪う。体を不自然に震わせ、ひきつったように四肢が張りつめる。首も動きを止め、風はない。



準備はすべて整った。

「結界の魔女スノードロップが一射。行きます！」

ハンターの弓は原則大型である。何故なら、ピンポイントの狙撃を必要とせず、命中精度よりも威力が優先されているからだ。よって、狩猟法でも急所を一撃で射抜くような方法は想定さえされなかった。それはことを対モンスターに限ればの話である。ミスカトニツクの特務騎士には対人を想定した暗殺術が存在する。一射で、相手の視力を奪うとともに生命の根幹を担う脳幹部を破壊する一撃必殺の暗殺術。相手の眼球を狙い、深く貫くこの技を、スノードロップも体得している。

アマツマガツチの大きな瞳なら対モンスター用の矢でも甲殻に邪魔されることなく貫通させることができる。狙いは左目。すでに風の鎧は存在しない。たとえ見えていたとしても麻痺した状態ではかわすことなどできない。

振り絞られた弦が水を弾き、矢は正確に嵐龍の目へと向けられている。対人用の暗殺術が人を救う。そんな皮肉を願いながら、スノードロップは矢を放つ。

時間が間延びされたような錯覚は、命中がそれほど待ち遠しいから。同時にそれは、アマツマガツチが見せた最後の抵抗を目の当たりにするきっかけとなった。

麻痺しているはずのアマツマガツチがかすかに首を捻ったのだ。麻痺が完全ではない。

矢は眼球をかすかにそれ、左のこめかみのあたりに命中する。爆

発する爆撃ビンは確かにダメージを与えた。左の角が中腹で折れ  
まだ右が残されているからなのか、龍毒が暴走する様子はない  
、古龍がうめく。

しかし、致命傷ではない。

「かわされた!？」

分量の問題なのか、それとも体の構造が違うからなのか。麻痺は  
完全ではなかった。毒こそまだ効いているようだが、アマツマガツ  
チはすぐに体を大きく伸ばす。甲板と繋いでいるロープが不気味に  
しなる。

アマツマガツチは水を吐き出そうとしていた。長くしなやかな首  
が下向きに曲げられ、水を吐き出すとともにそのまま首を前へと戻  
していく。刃のような高圧の水が甲板を縦に引き裂き、木材と水と  
が飛沫を上げて飛び散る。元から損傷していた甲板は耐えられず、  
また、船内に放たれた水が床にぶつかり甲板へと吹き返る。水が噴  
水のように各所から吹き出た。

スノードロップは体が浮き上がる感覚を覚えた。直撃は受けなか  
った。しかし、崩壊する甲板に吹き上げられる形で体を飛ばされた  
のだ。

幸い、甲板から投げ出されることはなかった。床に叩きつけられ  
た衝撃で矢がこぼれ、運悪くすぐ側の穴から落ちていく。

しばらくして、爆撃ビンが無為に爆発した音が下から響いた。

甲板は大きくえぐられていた。古龍と向き直って右側半分ほどが

崩落しており、甲板から船底に渡って大きくかじりとられたような穴が開いていた。その穴の間近にスノードロップの体は倒れていた。

見ると、ティルテユとシギユンの体は甲板の上に転がっている。うまくかわし、放り出されることだけは回避したのだろう。だが、スノードロップ同様、痛みに体が動かせないでいるらしい。

痛んだ甲板からロープが一つ、また一つと引き剥がされていく。この第一区画から早く解放されようとアマツマガツチは足掻いていた。そして、それは決して遠くはない話になってしまっだろう。

矢はすでにない。かわされたと気づき、慌てて掴み取った一本を除いて、皆落としてしまった。そして、ただ爆発させただけでは古龍は倒せない。

毒はまだ利いているのだろう。風はない。だが、かわされてしまえば意味がない。アマスマガツチの目がスノードロップを捉えている限り、矢は、決して届かない。

「お姉さま……」

万策尽きた時、いつも思い浮かぶのは悪魔さえ打ち破った姉の顔である。昔と今ではずいぶん変わってしまったが、それでも、あの瞳に宿った強さだけは何も変わってなどいない。

そんな姉の姿であった。

セイレムの里。この里ではセイレムの魔女と呼ばれる己の耳を頼

りに闇の中で狩猟を行う女性たちで知られている。この里に生まれた女性は皆、優れたハンターになることを期待される。気候に恵まれない凍土では作物が育たず、狩猟で得たモンスターの素材が貴重な資源であるために。

しかし、誰もがハンターになることを宿命づけられているわけではなかった。ハンターにはなりたくないと思退する者もいれば、あるいは他の理由からハンターになることができない者もいる。

この里には二人の姉妹がいた。

二人はいつも比べられていた。優れた妹と、そうではない姉として。

妹は優れていた。希有な才能に恵まれ、音だけでもの輪郭を掴むことさえ可能であった。希代の天才として皆の期待を一身に受け、やがてはハンターに、里を襲う悪魔と戦う八人目の魔女となることを切望されていた。

姉はそうではなかった。姉は才能には決して恵まれなかった。この里のハンターとなるにはあまりに大きなハンデを抱えていたのである。

左耳が聞こえないこと。

日常生活では何ら支障をきたさず、気づく者がどれほどいるかも疑わしいこの障害は姉がセイレムの魔女には慣れないことを決定付けていた。片耳だけでは音の発信源の方向がわからない。闇の中で相手の位置を掴むことはできない。深い洞窟が多く、闇に閉ざされるセイレム山で、光に頼った狩猟しか行えない者に居場所などない。

妹がハンターとなり、姉は村ですごせばよい。そう、誰もが考えた。ただ一人、姉を除いては。

姉はハンターになることを望んだ。

闇の中でどう戦う。意地を張っているだけではないか。危険な狩猟に、足手まといは連れていくことはできない。

それでも、姉は周りの言葉を聞き入れようとはしなかった。片耳しか聞こえないということは、人の言葉を半分も聞くことができないということなのか。心配してやっている。そんな、善意に満ちた心ない言葉をつぶやく者もいた。

それでも、姉はハンターになると言っていて聞かなかった。

毎日里を抜け出しては、暗い洞窟に一人籠もった。そして、家に帰ってくる頃には全身が冷えきっていた。それを毎日毎日、欠かすことなく繰り返した。五年以上の間。

そんな姉の姿を、妹は痛々しく見ていた。別に姉妹仲が悪いわけではない。姉は妹に気をつかってくれる。それでも、無駄なことを繰り返す姉の姿を、妹は見ていられなくなった。

それを言葉にしようと思ったのは、十年前のある日のことだった。

先頭を姉が歩く。ランタンの明かりを頼りに暗い洞窟の中を二人だけで。こんな何気ない光景にさえ、妹は表情を曇らせた。明かりがなければ闇の中を歩けないこと自体が、姉がセイレムの魔女にはなれないことを証明していたからだ。

「ねえ、お姉ちゃん……」

目の前に見える姉の髪に覆われた小さな背中が、立ち止まって振り向く。しっかりと見開かれた二つの瞳が、余計なものにさえ思える。

「どうした？」

「やっぱり、やっぱりお姉ちゃんにハンターは無理だよ。だって、お姉ちゃん、片耳が、聞こえないから……。それじゃあ、闇の中で戦えないよ」

みんなそう言っている。そこまで言おうとして、妹は口をつぐんだ。里の人が揃って姉のことを否定している。この事実を伝えるには、妹はまだ幼い。無駄な散歩だと揶揄されていると伝えることはできなかった。

「私がハンターになるから、お姉ちゃんは……！」

村に残っていてくれればいい。そう口から飛び出ようとした時、突然姉はランタンの明かりを吹き消した。突然降りる闇の帳。それでも、妹には姉の位置と行動が聞こえている。

「ずいぶん生意気になったな、スノードロップ」

服のすれる音から手を動かしたこと。空気を裂く音は何か 恐らく、小石のようなものが放り投げられたことがわかる。大した強さではないとかわさないと額を氷の欠片が軽く叩いた。

「痛いよ、もう」

意地悪をして、少し横へ歩く。片耳の聞こえない姉には左右どちらかに動いたのかわからない。それなのに、氷の投げられる音は正確に妹の額を指し、そして命中する。

「どうして……?」

単純に確率の問題で五分五分ではある。しかし、姉は確信を持って氷を投げたようであった。

「もうこの地形は覚えたからな。お前の右側には壁があるから左にしか進めない。それに、そこには小さな窪みがあってそれに足が滑る音がした」

「覚えたって、ここ、初めて通る道だよ……」

壁の位置まではともかく、足下の凹凸まで覚えている時間はなかった。少なくとも、妹には今ここで地形の様子を描写してみせると言われてもできるはずがない。

歩きながら記憶する時間くらいしかない。

「見ただけで十分だ。知つての通り、私の片耳は聞こえない。それでは物の輪郭を掴むことや獲物との距離を知ることができない。だが、私は幸い、両目とも見えている。だから私は目を鍛えた。一度見れば覚えることができるようになる。地形もモンスターの姿も、完全に記憶できれば、たとえ見えていなくても見えていると同じように戦うことができる」

今度は手を狙おうか。そう言うと、妹の腕に氷がぶつかった。ただ相手の位置がわかるだけではない。相手の足の位置を音で確認して、記憶の中の妹の映像が現実と完全に重ならなければできない芸当である。

「かすかでも相手の姿を確認できればそれでいいんだ。後は頭の中で映像を正確に投影できるからな」

視界を奪う闇の中を、姉は視力の力で切り開いた。

「すごい……、お姉ちゃんすごいよ!」

「無駄な散歩を繰り返していたわけではないということだ」

笑いながら告げられる事實は、妹の心胆を凍えさせた。

「知ってたの……?」

村人が姉の努力を笑っていたことを。それでもなお、姉は笑う。

「右耳は聞こえているからな。距離こそわからないが、聞き分ける力は人一倍あるんだぞ」

火をつけようとしているのだろう。火打ち石を鳴らす音が聞こえ、灯されたランタンはしゃがんで作業していた姉の姿を照らす。両手で石を打ちつけるため、ランタンを地面においていたのだ。

「スノードロップ。私はハンターになる。周りがどう言っていようが関係ない。不可能だと周りに決めつけられてしまうのは癪だろう。不可能かどうかなんてことは自分で決めるものだ。そして、自分の



可能性をすべて試しもしない内に不可能だと決めつけることは妥協ではなくて諦めにすぎない」

立ち上がる姉は妹に微笑みかける。その瞳は特別な力を宿して妹を見つめる。この顔が、妹には忘れられないものとなった。

その後、姉はハンターになり、里を襲う悪魔と戦う魔女に選ばれることとなった。その時偶然里を訪れていたミスカトニツク王国第二王女とともに悪魔と戦い、これを打ち破った。

姉は、正確にはセイレムの魔女にはなれなかった。聴覚を頼りに戦う伝統の狩猟法を体得できなかったからだ。だが、姉は魔女と呼ばれている。ミスカトニツク王国に仕え、古龍から人々を守る七人の魔女の一人、見たものすべてを写し取る瞳持つ凶眼の魔女として。

凶眼の魔女アマランサスとして。

あれから、姉の真似事をしてみようとして、結局近づくことさえできなかつた。なまじ聞こえてしまうということが邪魔をして、どうしても目に頼るといふことができなかった。

スノードロップはアマランサスにはなれない。アマランサスがスノードロップにはなれなかつたように。

体の節々が痛みを残す。甲板に叩きつけられた痛みから解放されていないのだ。

アマツマガツチは必死に体を揺り動かし、その度にロープがちぎ

れ、古龍の体が自由を獲得していく。

どうすればいいのかわからない。残された爆撃ピンは一矢のみ。時間をかければ毒が消え風の衣が再生してしまう。焦って放ったところで、矢はかわされてしまうだけだろう。

必要なのは、爆撃ピンで正確に眼球を貫き、脳の至近距離で爆破させ即死させる、そんな都合のよい方法を実現するための手段であった。

できる気がしない。不可能であるという思いがスノードロップを支配する。

こんな時、姉なら、アマランサスならどうするだろうか。こんな考えしか思いつかないことが、スノードロップをより絶望させる。

姉は誰からも理解されなかった。それでも自分の可能性を信じ、類稀な力を手にした。それなのに、スノードロップは、妹は何をしているのだろうか。理解ある姉がいる。セイレムの魔女の力を持っていてなお、スノードロップは前に進むことができない。

姉を尊敬している。そう言うっておきながら、ただ憧れの存在として遠くで眺めているだけで満足していた。隣に立って支えになりたい。そんなことを願っているふりを演じて。

「私、だって……」

こんなところで寝ているわけにはいかない。姉は乗り越えてきたのだ。無力感と絶望を。

こんなところで逃げてしまったら、姉の努力を愚弄することになる。どうせできないと遠目に眺めていたかつての自分と同じことをしてしまう。姉の可能性を信じきれず、早く諦めるべきだと考えていたかつての自分と。

手を湿った甲板に突き立てる。痛みは残っているが、心を苛むよりもましである。糸が切れてしまった人形のようにぎこちない動作で、しかし必死に立ち上がる。

「私だって、魔女です。七人の魔女、結界の名を与えられた魔女です……！」

アマランサスになることはできない。しかし、アマランサスもスノードロップになることはできない。自分の可能性を信じる。かつて姉がそうしたように。

スノードロップには結界とまで呼ばれた聴覚の力がある。

探る。音を聞く。嵐の音。ベルキュロスの声。クシャルダオラの息吹。嵐龍アマツマガツチのうなり。そして、嵐の息づかいが。

一つだけ、針の穴を通すような可能性が残されていた。

だが、時間が必要であった。

アマツマガツチはすでにスノードロップに狙いをつけていた。鋭く尖った口から細いながらも剣のような水流が吐き出される。すでにかわすほどの力は残されていない。直撃をくればたやすく船外へと放り出されてしまうことだろう。

不思議と諦めるつもりにはなれない。覚悟が決まったから。それとも、まだ戦う力を残しているという確信であるうか。

立ちふさがるたった一人の女性。しかし、その女性は角竜の鎧でその力強い体を包み、膨大な水流に身をさらしても動じることはない。黒角竜の分厚い刃を盾として構えると、ティルテュは水のブレスを受け流す。

水は甲板の一部をえぐり黒角竜の甲殻にひびを走らせる。しかし、スノードロップもティルテュも無事である。

「正直に答える。何か策はあるかの？」

大剣を盾として構えたまま、アマツマガツチを睨みつけたまま、ティルテュは問いかける。

たった一つだけ、嵐を撃ち落とす方法があった。

矢をつがえ、弦をしならせる。

「時間を稼いでください。大体、一〇秒強！」

「了解です！」

返事はティルテュからではなく、先程まで倒れていたはずのシギユンから。兜を破壊され、あどけなささえ残す顔を露出しながら、その顔には決意の光を宿す。

わずか一〇秒。それが、この戦いの結末を決定する。

シギユンが斬りかかる。その動きは目に見えて遅くなっている。ダメージから回復しきれていない。鎌の刃が古龍の体を打ちつけるが、反応の鈍さは致命的な形で現れた。普段ならかわせるはずの攻撃をかわし損ねたのだ。

アマツマガツチの爪が風を纏いながら振り抜かれる。風は太刀を捕らえ、爪が刃を打ち砕く。この勢いに引つ張られる形でシギユンは甲板へと引きずり落とされ、額を強打する。額が血で覆われ、シギユンは意識をなくす。

まだ五秒と稼いではない。

アマツマガツチが再び吐き出す膨大な水。ティルテュが黒角竜の刃で受け止めようと構える。大剣は太刀に比べ刃が太く厚く、盾としても使用できる。しかし、これは可能であるというだけであって、推奨されている使用方法ではない。受ければ刀身が損傷し、切れ味が落ちる。ただこれも、モンスターとの戦いでの話である。

古龍は、あくまでも規格外であった。

抑えきれなかった水がティルテュの脇をかすめるように通り抜けては甲板をえぐる。貪欲な水はそれだけで満足しようとはしない。水に押された何かが甲板に突き刺さった。黒いその塊を大剣の破片だと気づくにはさして時間を必要とはしなかった。

それなのに、スノードロップが仲間の身を案じて視線を戻した時には、すでにティルテュの体は砕けた大剣の欠片とともに吹き飛ばされていた。

甲板に叩きつけられた音はしたが、うめき声も聞こえなかったため、生

きてはいる。すでに安否を目で確認している余裕なんてなかった。

シギユンは気を失い、ティルテュはその武器を失った。アマツマガツチはなお健在にスノードロップを睨みつけている。その口はすでに雨水を吸い込み始めている。

一〇秒経っただろうか。不安が悪い方への的中した。まだ足りていない。

矢をつがえたまま、古龍は今にでも水を吐き出そうとしている。今放たなければ二度と射る機会は訪れない。放てばかわされてしま

う。  
射ても無駄という理屈と機会を失すると判断する思考。どちらも論拠を持ち、射るべき射らぬべき。相反する考えはどちらも論拠を持つ故にどうすることもできない。

腕が震える。万が一にも当たる可能性を頼りに矢を放ってしまいたいと指先が意志に反して動こうとする。

今放つてもかわされるに決まっている。今しか放つ機会は無い。

恐怖が力に作用する。ただ力を抜いてしまえばよい。そうすれば、矢は放たれる。当たりもしない矢が。

腕が力を取り戻す。指が矢をしっかりと保持する。まだ射るべき時ではない。思いは取り戻した。やがて訪れる機会を待つのだと。

そう思わせてくれたのは、小さな、あまりに小さな音であった。甲板に使われている木材を踏みしめる音。古龍が鳴らすにしてはあ

まりに小さな音がスノードロップを奮い立たせた。

もう武器なんてない。体力とて、限界を迎えているはずである。古龍なんてついこの間まで知らなかったはずの村ハンターがこれまで戦い続けた。仲間を失って、戦う術を失ってもなお。

嵐にくたびれた布がなびく。古代の残り香を纏い、その背をスノードロップに見せるように、ティルテュが古龍の前に立つ。

「この布が何か、お前にはわかるか？」

ティルテュが力強く外套を掴み上げ、高らかに声を上げた。

古龍は意に解しようとはしない。押し流す獲物が一つ増えた程度にしか考えていないのだろう。十分な水を吸い込んだ嵐の魔王が、激流を思わせるほどの水量を放つ。

鉄砲水が襲ってくる。すべてを呑み込み、押し流す恵みの暴力が。

ティルテュは逃げない。禍々しい布で作られた外套を体に巻き付け、川に突き立てられた柱のように流れを受けとめんと立ちほだかる。

水が、二つに裂けた。

「ハイパーボリア文明の王墓で発見された骸布だ。お前たちが滅ぼした人々が生み出した布だ！ 死にたくなどなかった！ しかし殺された人々の遺したものだ！」

激流は甲板を引き裂く。木材が飛び散る。それでも、スノードロ

ツプの足下を侵すことはない。ティルテュを突き破ることもない。

瀑布に挑むたった一人の人間。その光景は荒唐無稽でいて、しかし勇猛果敢。

ティルテュは決して逃げなかった。勢いに負けまいと踏ん張る足は甲板を踏み抜いていた。左右に切り開かれた水にはかすかに血の色が混じる。

それでも、ティルテュは決して逃げなかった。太古に織られた布は、決して裂けることはなかった。

情念、執念、怨念じみてさえいる。かつて滅ぼされた文明と、今なお戦い続けるハンターの思いがない交ぜとなつてすべての命の敵へと挑んでいる。

殺戮の願望と生きることへの渴望。

その両者の争いは、必ず生きたいとの願いが勝利を収める。

吐き出される水が途切れた。負荷をなくした途端、ティルテュの体は前のめりに倒れた。気を失っていた。いつから意識がないのかわからない。

ティルテュの捨て身の戦いは確かにスノードロップを、剛種武器である天狼弓「村雨」を守り抜いた。

そして、世界に光が満ちる。

まるで天の国に迷い込んでしまったかのような膨大で甚大な光が



視界のすべてを埋め尽くす。嵐の暗闇から突然放り出されたにしては、この光はまぶしすぎた。

まさに光の闇の中。

スノードロップが深い絶望の中、仲間の死力を尽くした戦いによって掴みとった瞬間であった。

聞いた。上昇を続ける第一区画の行く先には雲の切れ目が開いていると。嵐が裂けているのだと。

信じた。そこには陽光が燦々と降り注ぎ、光に満たされた世界があるのだと。

そして、その光は暗視に慣れた眼から一時的に視力を奪うことを知っている。嵐龍アマツマガツチもスノードロップも条件は変わらない。視界がすべて光に塗りつぶされ、何も見えていないのだ。

セイレムの魔女。視力に頼らず、音を頼りに相手の動きと様子を掴みとる技術に長けたハンターがいる。

スノードロップにはアマツマガツチが視力を失いうめく様子が聞こえていた。どこを狙うべきかも聞こえていた。

「一射、一生」

光の中を一直線に進む一矢。セイレムの魔女は音を追う。矢が突き進み、目標に違わず皆中することを。それはすなわち、嵐の魔王の左眼球を差し貫き、その奥底の脳をめがけて炸裂したということ。

炸裂音が一際大きく轟き、しかし、後から生じた古龍の断末魔がそれを呑み込んで、その慟哭が終わった時、もう、何も聞こえるものはなかった。

次第に視界が晴れてくる。

ここは天の回廊である。嵐が壁を作る巨大な円柱は降り注ぐ光で満たされていた。このただ中を第一区画は上昇を続けていた。光がこんなに美しいものとは知らなかった。空がこんなに神々しいものと考えたこともなかった。

アマツマガツチの首は天を向く。まるで何かに焦がれているようなその姿は、顔の左半分が消し飛び、残された右の眼にすでに光はなかった。ゆっくりと傾いて古龍の巨大な体は甲板の縁へ引きずり込まれるように落ちていく。その体を支えていたはずのロープは薄情にも破断を繰り返し、その体を支えようと名乗り上げる者はないに残らない。

嵐の魔王が落ちていく。天の回廊をまっすぐに下に。その先にある、地獄の嵐へと。

第一区画を中心として、回廊の壁に沿うようにクシャルダオラとベルキュロスは戦いを続けていた。その様子は、さしずめ鋼の悪魔と雷の天使の戦い。

ここは天使と悪魔の戦争の舞台を思わせた。かつて、天の国を二つに分ける戦いが行われた時、悪魔の王は天を追放された。天にすることを許されず、地の底へと墮とされた。

嵐龍アマツマガツチが落ちていく。光降り注ぐ回廊。ベルキュロ

スとクシャルダオラは天使と悪魔の化粧する。天に逆らった反逆の王が堕ちていくように、アマツマガツチは落ちていく。

その光景は美しく、そして残酷に、人と命の勝利を告げていた。

### 第三話「それぞれにできること」As a Person」

セクメーア砂漠の各地で古龍と命との壮絶な争いが繰り広げられている。三つの王国すべてが参加するほど壮絶な争い決着へと向け、大きく動き出すとしていた。

そのためには準備が必要であり、準備とは得てして退屈であることが多い。特に、前線で陣頭指揮を執ることになるヘリオスには何一つとしてできることがないのだ。

シュレイド王国が誇るグングニル級機動要塞は王龍テラドミヌスとの戦いで傷つき、左舷を大きく損傷した。現在では応急処置として厚手の幕が張られ、これ以上の崩壊を防ぐ処置が施されている。この修復に、しかしヘリオスが立ち会った訳ではない。修理工に任せ、ヘリオスは上がってきた報告書に目を通しただけである。大型飛行船はその設備が複雑化し、艦長と言えどもそのすべてに関わることはできない。

よって、弾薬や人員の配置など、来るべき決戦に備えた準備は他のクルーが行い、ヘリオスはその報告を待つばかりであった。

できることなどないと知りながら、何もしていないことに気疲れを覚えないわけではない。ただ艦長席にふんぞり返っているだけではないはなかった。これは、そんな自分への言い訳であったのだろうか。ヘリオスは艦長席すぐ脇に立つミスカトニツク王国の特務騎士に声をかけた。

「姫君には心苦しいが、私はどうしても腑に落ちんことがある。貴殿なら答えてもらえるものと考えている」

「お話の内容にもよります」

首を曲げることが億劫で、見もせずに話しかけたが、グラジオラス特務騎士は気にした様子はない。

「古龍のことについて聞きたい。私が知りたいのは、そう、古龍は何故人を襲うのか、これに尽きる。貴殿は言っていたな。古龍はこの大地の旧支配者であり、環境の変化についていくことができなかった落第者でもあるのだと」

かつて、大地が現在よりも熱く、あるいは極寒であった時代、他の生物が隠れ住むしかない環境を頑強な体で隆盛を極めた種があった。

それが古龍。

しかし、環境はより安定し、他の生物にとっても過ごしやすい環境となった時、古龍の強すぎる体は負担でしかなく、やがて駆逐され、極地へと逃げ込むしかなかった。

ここまでは以前聞いた話である。

「だが、それでは説明がつかん。では何故古龍どもは今更になって極地を離れたのだ。ここにはすでに他の命が息づいている。この生命との接触を恐れて極地を生活の場にしたのではないのかね？ 食料不足でも説明はつかん。満腹のティガレックスは目の前をケルビが素通りすることさえ許すはずだ。だが、古龍はただ殺戮に興じようとしている。これを説明する方法があるのかね？」

「これは、まだまとめ切れていない、身内の間での仮説なのですが、よろしいでしょうか？」

「聞かせてもらえるかね？」

「私はかつて、ルルイエ山脈に登ったことがあります。酸素不足に過酷な冷気。古龍が好んで生息する場所はまさに地獄です。そこで私が目撃したのは、古龍同士が争う姿でした。無論、死闘というほど激しいものではありません。互いに睨み合いながら龍毒を放出し合う。時には体のぶつけ合いにまで発展することがありましたが、我々が注目したのはその程度ではなくて頻度でした」

「と言うと何だね？」

「繁殖期に雄同士が雌を巡って争うことは自然界ではよく見られる光景です。また、縄張り争いとも考えられました。ですが、繁殖期にしては幼龍をただの一度も見つけることができず、巢の痕跡さえ見つけることはできませんでした。また、縄張りを確信できる証拠も集まりませんでした」

悪魔の山とまで呼ばれるルルイエ山脈に登ったということは驚嘆に値するが、ヘリオスは失望を禁じ得ない。露骨にため息をつくようなことはなかったが、しかし、声には不機嫌な調子が混ざり込む。

「それでは答えになっていない。古龍が争いを好むと言い直しているだけだ……」

「仮説はこれからです」

言うが早いのか、グラジオラス特務騎士はすぐさま言葉をかぶせた。

何やら、話に横やりを入れられることに慣れている様子である。

「私たちは古龍のあまりに特異な習性をとく手がかりを求めました。それが露骨なほどに示されていると気づいたのはいつのことだったでしょうか」

わかるはずがない。わかるうはずもないことを相手に尋ねる話し方は冗長になるだけではないか。そう、言い出そうとした時、それを見計らっていたようにグラジオラスは続ける。

「古龍は、龍毒を持ちます。それはあまりに常識外れたことです。確かに、火竜とて火球を受けて無傷ではありません。毒を持つ多くの種も毒に侵されます。ですが、火竜が火を吹く度にのたうつことがあるでしょうか？ 毒を体内で生成する度に自家中毒に陥る毒怪鳥など聞いたこともありません。それらは、皆耐性を獲得しているからです」

確かに、毒怪鳥ゲリヨスが自らの毒で万年苦しめられているとは聞いたことがない。火竜が息を吐く度に頭の甲殻が弾け飛ぶということもだ。

「しかし古龍は違います。言ってしまうなら、雪獅子ドトブランゴがその両腕に火をつけて暴れ回っているような不自然さがどうしても拭えないのです」

「自らの巣にかかる蜘蛛ということか」

ろくな耐性もなしに力を使う生物などいないということだ。人間とて胃酸に塩酸を使用しているが、通常、これに胃そのものが破壊されることはない。

「我々はその謎を解明しようと思いました。その仮定で、一つの結論を導きました」

つい首を振り向かせ、グラジオラスの姿を求めたのはそれほどその結論とやらに興味があったということなのだろう。

「龍毒とは、古龍が古龍と戦うために得た毒なのではないかと」

「口を挟むようで恐縮だが、何故古龍同士が争う謂われがある？」

「その訳を、私はすでにお話したはずです。かつて、この大地が今よりも過酷であった時代、そこは古龍たちの楽園でした。そう、古龍に対抗できる相手など考えもしない時代であったのです」

確かに、地獄のような古龍の楽園の存在はすでに聞かされている。

「古龍にとって最大の競争相手とは、他ならぬ同族の古龍に他ならなかったのだとしたら。古龍が龍毒を持つに至ったことも説明がつく。そうは考えられませんか？」

「己の敵は己か。妙な含蓄がある話だ」

確かに、古龍以外の生物が小さく隠れているしかできないなら、種間の競争は古龍の間で巻き起こることになるのだろう。しかし、未だに謎は払拭されず、ヘリオスは胸にわだかまりを残したままグラジオラスの言葉に耳を傾ける。

「古龍は古龍を倒すために龍毒を得たのだとしたら、何故、古龍に龍毒が有効であるのかの説明ができません。古龍に龍毒が効くのでは



なく、効くからこそ龍毒として古龍がそれを持つに至ったのです」

わだかまりの一つが言葉としてこぼれ落ちる。

「しかしわからん。そんなに危険なものならば何故古龍どもは今の今までその形質を放置してきたのだ。進化の過程で何らかの対抗策を持つべきではないかね？」

「そのことも、すでにお話しています。古龍は、あまりに個々の力を強めすぎ、その反面繁殖能力が極めて乏しくなってしまった種です。はつきりとはしませんが、繁殖期が十年のような長期のサイクルになっているのでしょう。子どもを滅多にもうけることがないのです。そのことは、遺伝子の組み替えを遅らせ、進化の歩みを自ら進んで遅らせることと同義です。古龍は、進化の袋小路に陥ってしまったのです」

そのことも聞いていた。しかし、環境が代わり、強力な体を持ちながらも他の種に駆逐されなければならなかった理由としてだが。

生物学というものは厄介なものだ。すべてが繋がり、利点が欠点にもなる。古龍はその強さ故に栄え、そしてその強さ故に弱点を抱えていた。その事実がそのまま龍毒の説明へと繋がっている。

「大変面白い話を聞かせてもらった。しかし、貴殿はまだ私の質問に答えていない。古龍は何故、喰らいもしない人を襲うのかね？」

元々答えてもらいたいことは何一つとして解決してはいないではないか。古龍が古龍と戦うために龍毒を持つに至った理由はわかった。そして、古龍が進化の袋小路に陥っていたこともだ。

しかし、それがどう古龍の特異な行動と繋がるというのであろうか。

グラジオラスはややしわが目立ち始めた口元をつり上げて笑った。

「この質問も、すでにお答えしているはずです。ヘリオス艦長」

「古龍って、本当にタフね……」

日が傾き始めたモガ孤島の空を見上げながらつぶやいたのは、凍り付く凍土のハンターであった。青い体表に揺らめく陽炎を宿した炎妃龍ナナ・テスカトリがゆっくりと降りてくる様を眺めていた。

滝の音、川のせせらぎが穏やか。慌ただしく生きることのばからしさを皮肉っているようでさえある。

イシュタルの全身を包んでいるベリオGはすでにところどころが焦げていた。同じベリオロス素材を用いたスラッシュユアックスも刃に痛みが目立ち始めている。

古龍との戦いはそれほど過酷なのだ。

ことの経過をおさらいしてみよう。初めに、村のハンターであるアポロと、凍土から出張していたアルルとがドスジャギイの狩猟に出かけた。ところが、待っていたのはターゲットであるドスジャギイの屍であり、狗竜を殺害した古龍の姿であった。

二人は河にそって北上し、海岸線で古龍との戦いに臨んだ。その

後、海竜ラギアクルスという思いもかけない援軍を得ながら、イシユタル、ヒュプノスが合流したことで四人パーティで古龍との戦う体制が整ったのである。

しかし、村が襲われたことでアポロが離脱。結果、三人でナナ・テスカトリと戦うこととなった凍土のハンターたちは、決して楽な戦いをさせてもらえた訳ではなかった。

ここは海岸線から河を遡上した区画であった。村に通じる丘がすぐ側にあるような場所にあり、小さいながらも滝が存在する広間となっている。その滝から広間を二つに分けるような河が下っていた。もう一つ特徴をあげるとすれば巨大な枯れ木が広場を覆うように枝を伸ばしていることであろうか。

それほど、特徴というものを持たない場所であった。

古龍が突如飛行を初め、ここに着地するのでもなければ、凍土のハンターたちは記憶の片隅にもとどめることはなかっただろう。

三人はそろって空を見上げる。もったいぶるようにゆっくりと、古龍は翼をはためかせて降りてくる。その体には、少なくとも目に見えるような傷はない。

「里じゃ、七人の魔女が命がけて傷を与え続けていたからね。当時と比べて狩猟の道具は目覚しく発展はしたけど……」

大柄な体に似合わない弱気な態度で、ヒュプノスは自分の肩越しに愛刀を見ようと首を回す。柄の端がせいぜい見えた程度であった。ヒュプノスの武器はアグナコトルと呼ばれる炎の川に棲む竜の素材から作られたもので、刀身から高熱を発する特徴を持つ。炎を操る

古龍と戦うには、あまりに相性が悪かった。

炎を焼くことができる炎などないのだ。

同じことは、反対の理由でイシュタルにも当てはまる。

氷牙竜ベリオロスの素材を用いることで刃そのものを低温に保つスラッシュアックスは冷気に弱い相手には有効ではあるが、初めから高熱を帯びている相手を冷やしきるほどの力は持たない。

「まさか火の古龍が出てくるなんて思わなかったから、あたしたち、完全に当てが外れてるしね」

凍土において、古龍と言うと霞龍オオナズチのことを意味する。イシュタルもヒュプノスも炎の古龍は想定外であった。

「何か必殺の一撃とかないかな？」

「ハンターにそんな手があるわけないでしょ」

手をひらひらとさせて否定するのはアルル。猛毒を体のため込む古龍との戦いを想定していたにしては毒の片手剣を武器に選んだこのハンターはどことなく焦りというものが感じられない。

「じゃあ、ラギアクルス以外のモンスターが助けに来てくれるとか  
！」

「そんな都合のいいことを戦術に組み込むわけにはいかないだろ」

ため息をつくヒュプノスに目に見えて落胆するイシュタル。アル

ルは笑っている。

「何にせよ、この子はここで終わってもらわないといけないわ。もし私たちが敗れたら村を襲うでしょう。そして、村を片づけたら次の村を襲うでしょうから」

笑いながら言うことではない。

「こんなところになんて来なきゃよかった……」

「先輩の願いを拒む訳にはいかないでしょ。それに、私たちの中で唯一古龍と戦ったことのある勇者はどうしたの？」

いたずらっぽく笑うアルルの姿に、イシュタルたちはある女性の姿を思い浮かべていた。

何かと余裕のある人で、そして強い人だった。しかしその余裕があるから強いのではなく、強いから余裕を持つのもない。言葉で説明するのは難しいが、ある種の責任感がとても強く、どれほどの強敵が相手でも、どんなに困難なことでも成し遂げるという覚悟がその人の余裕を作り出していた。

アルルが先輩と呼び憧れる女性は里を襲っていた悪魔を、何よりも確実にしとめるという気概でもって打ち払ったのである。

余裕があるわけではない。ただ、自分のすべきことを知り、それを成し遂げる覚悟を固めること。アルルもまた、それを必死に実践しようとしているにすぎない。

古龍はここでしとめなければならぬ。

「一撃必殺になるかどうかはわからないけど、奥の手がない訳じゃない」

女性二人と比べると頭一つ分優に高いヒュプノスは視界の確保に苦勞することはない。首を回すと、目的とするものはすぐに見えた。

「あの巨木を倒してみないか？」

薄く張った水を踏みにじって、古龍が降り立った。

モガ村。モガ孤島の南部に位置するこの村は崖に面した海岸線に存在している。孤島からは小高い丘に守られるように、海からは水没した遺跡が大型モンスターの進入を阻む位置に存在している。モンスターが村に迷い込むことがないよう、そもそもそのような条件を満たす場所でなければ村は築かれない。注意が払われていた。

人でさえ孤島側から村に入るには高い丘を乗り越えなければならなかったため大変な苦勞を強いられる。しかし、この苦勞が村の安全を守っているのだと、アポロは坂を登る度感謝さえしていた。

それが今は苦痛以外の何者でもない。

丘を登りながら、その行く先には煙が立ち上っていた。明らかに村のある場所から登る煙である。

「村が……」

少しでも早く村にたどり着きたい。そんな思いが普段通り慣れた道のりをひどく冗長で無為なものへと錯覚させていた。

いつもより早いぐらいの時間を、普段の何倍もかけてしまったように感じながら、アポロは丘に登りきる。やや急な坂の下、遠目には村の様子は普段と変わりないように見えていた。しかし、確実に火の影がちらつき、立ち上る煙は今や確かに村を基点としている。

いてもたってもいられないとはこんな時に使うべき言葉なのだろう。アポロは坂を転がるほどの勢いで走り下る。

すぐにモンスターよけの門が見えた。とても大きな　少なくともアポロはそう考えていた　その門は、しかし今はまったく何の役にもたっていない。

古龍とはそんな存在なのだ。人の努力や想定をあざ笑い、身勝手に蹂躪しようとする。歯を強く噛んだのは、自分の歯にさえ当たり散らしたいという思いがあったからだろうか。

門なんて、一体何の役にたっただろう。そう、門さえも憎々しげに見つめようとして、アポロは門が開け放たれたままであることに気づいた。普段、ここは閉じられているはずなのだ。

そして、その門に寄りかかるように座っている老人の姿にも。

「村長！」

気づいたから声を発したのか、声を発して確認を促したのかわからない。アポロは反射的にその人物を理解し走り寄っていた。

白く染まった髪に、これまで老いだとか衰えを感じさせられたことはなかった。しかし、力なく座る村長の姿には、老人という言葉があまりにふさわしく思えてしまった。

背もたれがなければ座っていることも難しい。そんな緩慢とした仕草で、村長はゆっくりと顔を上げた。

「おお、アポロか……。無事なようだな」

しわがれた声。どこか、傷でも負っているのだろうか。

「何があつたんだよ？」

「古龍だ。戦えない者を逃がしていた交易船がまず襲われた。交易船が戻ったことで、次は村を古龍が襲った。ラギアクルスが戦っていたようだが、同数では分が悪いらしい……」

アポロが島の北側で目撃した光景がそのまま村でも展開されていたらしい。

わかったことは、村が古龍に襲われたということと、誰一人として逃げ出せていないということだ。

「みんなは、まだ村の中なんだな!？」

立ち上がるや、体はすでに村の方を向いている。

「待て、アポロ!」

老人にしては、不似合いなほど力強い声は、普段の村長を彷彿と



させる。アポロを引き留めるに十分な力を持っていた。

「村長である儂がどうしてこんなところで生き恥をさらしていると思う？ それはな、お前を止めるためだ」

「止めるって、何言ってるんだよ……？」

村長の声には、時折咳きか混ぜる。

「考えてもみる。あのような怪物を、新米同然のお前がどうにかできるはずもない。逃げる。モガ村はもう終わりだ」

「何、言ってるんだよ……」

この人は本当に村長なのだろうか。アポロが弱音を吐いた時にはそれを慰め、励ましてくれた人なのだろうか。

「村が危ないとわかれば、お前なら必ず帰ってくると思っていたよ。だが、お前では何の力にもなれない。若い命を無駄に散らせる必要はない。逃げる。逃げ延びろ」

村の仲間を見捨ててまで。そんなこと、できるはずもない。

「俺は、俺はこの村のハンターなんだ！」

「お前に何ができる！？ 太陽を落とせるのか？ 海を割れるのか？ できるものなら大地を砕いて見せる！」

その剣幕は、アポロをたじろがせるには十分であった。別に言うことを聞く義務なんてないだろう。無視して村に入ろうとしたとこ

るで、今の村長に止める力なんてあるはずもない。

それでも、アポロは村長を振りきることはできなかった。それは、激昂した村長の息から、血の臭いを嗅ぎとることができたことと無関係ではないだろう。

村長はすぐに息を切らせてしまった。

「人はな、特別でも何でもない……。この大地に芽吹く命の一つにすぎんし、我々はそんな何でもない種の一個体にすぎん。もし神様なんて奴がおつたとしても、助けてなぞくれんぞ。人なんぞ、特別でも何でもないんだからな」

勇敢なケルビは臆病なりオレウスに勝てない。

村長の言っていることは正しいことのように思えた。どれほど子を慈しむ草食種でも、捕食された我が子の亡骸を取り戻そうとはしない。そんなことをしても意味がないばかりではなくて、自らを危険にさらしてしまうから。生き延びればまた次の子を育てることができるかもしれないから。

「でも……、それでも……」

人は特別ではないかもしれない。でも、特殊な存在なのではないだろうか。

危険なことはわかっていた。命を失う可能性の方が高いこともわかってる。古龍の獲物を増やすでしかないこともわかっている。

それでも仲間を助けたいという思いを抑えることができない。

涙がこぼれた。今になって、自分がアロイ装備の兜をかぶったままであることに気づいた。今更脱ぐこともばつが悪く、また、泣き顔　声で気づかれているのだろうか　を見せたくもない。

すると、村長は優しく息を吹いて、荒々しくアポロの頭を撫でた。兜の上からだというのに、痛いと思えるほどである。

「まったくしょうがない奴だ」

何があっても知らんぞ。そんな軽口を言いながら、村長は頭から手を離れた。

「儂の家に行け。戦えない者はみなそこに集まっている。あの娘もそこにいるはずだ」

あの娘。この言葉に思いついたのはたった一人だけであった。

「お、俺は別にあいつのこと……！」

ムキになって言い返そうとして、畏にかけられたことに気づいた。村長はギルドの受付嬢のことだとは言っていないし、そうだとしてみ形式上他意を含ませてはいない。アポロが勝手に勘ぐってしまったのである。

村長はそれはそれは楽しそうににやけていた。

「男が命をかける理由なんぞせいぜいが三つだ。名誉か金か女だ。新米ハンターに守りたいような名誉があるとは考えられん。こんな村を救ったところで金になんぞなるものか」

老獺。こんな言葉もある。もう、老人相手に隙を見せてはならないと、若者の心に深く刻まれる。

「行ってこい。たった一つしかない命だ。惚れた女のために使うのも悪くはあるまい」

鎧の上からだと言うのに、村長はかまわずアポロの背中を叩いた。痛くはないが、村長の豪気さは伝わってくる。

「アポロ、無理難題とは思うが、死ぬな」

「村長、俺行ってくる！」

涙は、いつの間にか止まっていた。

西日が鋭い光で孤島を照らしていた。

若者は行ってしまった。送り出してやるべきだったのか。それとも、心に深い悔恨を残してでも逃がすべきであったのか。今となってはどちらともつかない。

「アポロ、弱いことを恥じる必要はない。どのようなハンターとて、はじめは弱いものだ。そしてお前にはハンターがなくてはならない心を持っている」

自然を慈しみ、人々のために戦うことを誇りと感じる事ができる心を。体は鍛えれば誰でもある程度の強さを得ることはできる。

しかし、志はその限りではない。アポロは将来、優れたハンターになることだろう。ここで死なせてしまうにはあまりに惜しい存在なのである。

「神よ、もしいるのなら聞いてほしい。あなたの名前も知らないよ。うな不信心の老いぼれの言葉だが、あなたにすぎるしか方法がないのだ……」

人が神にすぎる。それは、人としてできることのすべてをしてもなお及ばぬ存在を前にした場合の反射行動であるとも言える。

老人にはすでに立ち上がる力も残されてはいなかった。情けないことに背中を切られ、流れ出る血は背もたれ代わりに使っていた門を汚していることだろう。

「あの若者を死なせないでもらいたい……」

アポロには傷のことを知られずにすんだ。それだけでも、無様に座り込んでいた甲斐があったというものだ。

「あの若者の未来を奪わないでもらいたい……」

だが、もうそれも時間切れであるらしい。

太陽が沈む。世界から光が失われ、夜が空にとって代わる。

「頼む……」

こと切れた老人の頭は深く垂れ、それは、深く深く、祈りを捧げているかのようであった。

「古龍は龍毒を持ちます。そして、古龍にとって龍毒は猛毒です」

「そんなことはわかっている」

七人の魔女と要塞の主との会話は続く。七人の魔女の一人、博識と呼ばれるグラジオラス特務騎士と、シュレイド王国グングニル級機動要塞グングニル艦長ヘリオス。

「もし、艦長が焼けた石を握らされていたとしたら、どうしますか？」

まるで焼けた石を差し出すような仕草で、グラジオラスは手をさしのべる。ヘリオス是对して、石を取り落とすように手首を曲げて見せる。

「少しでも早く手放したいと考えるだろう」

「古龍にとっても同じことです。古龍は、龍毒を必要としながら、同時に長時間大量に持ち続けることを嫌います。ある程度ごとに体外へ放出しなければなりません」

龍毒が古龍の体内でどのように生成されるのかは明らかではない。独自に作り出すのか、あるいは龍殺しの実のような龍毒を含む食物に由来するのか。

「我々はこう考えました。古龍は龍毒を得るとともに、同時にその排出を促す機構を備えたのではないかと。それは本能です」

「言っている意味がわからん」

グラジオラスは笑いながら言葉を続ける。

「古龍は恐らく、龍毒を排出することを快楽と感じるのでしよう。本能は元々、個体に種としての利益を守らせるために仕組みられた生命維持装置のようなものです。利益のあることをしようとするとか快楽を与え、不利益なことに及ぼうとすると苦痛を与えてそれを回避させようとする。食欲、睡眠欲、性欲。どれも動物的で根元的な種の保全のための本能であり、それはどれも快楽を伴います。反対に傷つくことや仲間を失うことは避けるべきこととして苦痛や悲しみを本能は与えます。命は生まれながらにして種としてあるべき生き方に誘導されるよう、本能に仕組まれているのです」

「だが……」

それが古龍が龍毒を放出することを快楽と感じているとするには突飛ではないのか。そんなヘリオスの指摘を、グラジオラスは先回りしていた。

「人がはじめに知る快楽とは、汚いお話で恐縮ですが排泄の快楽だというお話もあります」

どちらも、余剰な毒素を排出する行為に他ならない。

「では、古龍が本能として龍毒を放出したがっているということは認めよう。だが、それが残虐な行いとどう関連するのかね？」

「龍毒は、元々敵を打ち倒すための機構です。そして、放出するこ

とは快楽を与えてくれます」

言葉に少し間をおいたのは、考えるための時間を促すためであろうか。そうであるとしたら失敗である。ヘリオスには、グラジオラスの意図することを知らずにはできなかった。

「繋がってしまうとは考えられませんか？ 毒を放つことは気持ちがいい。そして、この毒は敵を倒すべきものだ。敵を倒すための毒を使うことは気持ちがいい。それがやがて、敵を殺すことは快楽である」と

獰猛な古龍の叫び声が耳に呼び起こされる。

「何ということだ……」

「まさに本能の誤作動とも言える悲しい進化の末路です。古龍とは、もはや怪物なのです。命を殺すことに快楽を覚え、喰らうでもなく殺戮に及ぶ」

古龍は地獄の時代を生き抜くために強力な体を得た。その結果、世界は古龍の楽園となり、古龍は古龍同士で争いを始めた。それは古龍に龍毒と呼ばれる毒素の蓄積を促し、同時にそれを適度に排出する機構が求められた。それを本能に求めたことで、古龍は命を奪うことに喜びを覚える怪物と化した。

「無論、これはあくまでも仮説です。しかし、この説は最も矛盾なく古龍のすべてが繋がってしまう」

「殺戮そのものが本能だと言うのか、あの化け物どもは……」



「だから我々は、古龍をすべての命の敵であると考えています。古龍とは、地獄の時代を生き抜いた代償に存在そのものを猛毒としてしまった、呪われた種族なのです」

グングニルのブリッジはいつの間にか静まり返っていた。優秀なクルーたちも聞き耳を立てぬわけにはいかなかったのだろう。

人が、いや、今を生きる生きとし生ける者すべてが対峙せざるを得なかった呪われた怪物の正体が語られる様を。この戦いは、種の生存競争を超え戦争と化していた。そして今、戦争を超えた殲滅戦の様相を呈していた。

戦いは、どちらかが滅びるまで、終わることはないのである。

## 第二四話「ある晴れた冬の日に My Mind、My Wish」

古龍とは何か。

四肢を持ちながら翼を持ち、その力は今なお人知の及ぶところではない。竜と同程度の体躯ながらその肉体は鋼の強さを持ち合わせ、風を操り光を転がし、炎を纏う。

まさに怪物であった。

地上に現存するどのような種よりも強靱であり、命を寄せ付けない極地に生息する。

その姿は古代ハイパーボリア文明の壁画に描かれるなど、人の歴史とレムリア大陸の営みの影に決して離れることなく潜んでいた。

そして、その性質は邪悪にして残忍。殺すことを喜びと感じ、壊すことを愉悦とする。

古龍に種という概念は存在しない。殺しやすい相手かそうではない相手かの区別しかないのである。彼らは極地に住まう。それは、種としてあまりに脆いその体が傷つけられてしまうことを恐れて。しかし、尽きぬことない殺戮衝動に絶えずさらされていた。

それはごく当たり前のこと。夜が来たなら眠くなる。動けば腹が空く。成熟を果たせば異性に興味を抱くようになる。命がすべて持つ本能という宿命。古龍は、その宿命に従い、生きとし生けるものすべてを殺戮したい。殺したい。

しかし、傷つきたくない。壊されたくない。

だから、古龍は狡猾に戦場を選ぶ。ある時は吹雪荒れる冬の日にある時は嵐を引き連れて。そして、王の行進に合わせるように。

これもまた、ありふれたことでしかない。大型の捕食者の食べ残しを狙い、小型の捕食者が付きまとうことはよくあることなのだから。

セクメーア砂漠はまさに五〇〇年に一度の宴の舞台であった。

王龍テラドミヌスが目覚め、行進を開始する。行く手を塞ぐすべでは蹂躪され、古龍たちはおこぼれに与ろうと我先に極地を抜け出す。これは宴である。五〇〇年に一度繰り返されてきた宴である。多くの命を主菜に、人の文明をその会場に、幾度となく繰り返されてきた宴である。

そう、幾度となく繰り返されてきた。

そしてその度、人は、命は儚い抵抗を繰り返した。

ハイパーボリア文明の壁画には、古龍と戦う人々の姿が鮮明に残されているように。今なお、この大陸で生態系を育むあらゆる種が垣根を越えて立ち上がったように。

命は、一度たりとも戦うことを、生きることが諦めようとはしなかった。

「まずいわ。火力、二割を消失！」

青い服のデメトリアが叫ぶ。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦が激しく揺れ、ブリッジのような安全とされる場所でさえ、クルーたちは苦悶の声を上げさせられるほどであった。

元来古龍との戦闘を想定して設計された訳ではない　　言っ  
てしまつのならば、古龍との戦いを想定した飛行船など存在しない  
スレイプニルが多数の古龍と戦闘をすること自体、無理があるのだ。

火器管制を司るデメトリアの報告は正確であり、弾幕が薄くなる  
ということとは船の損傷が加速することを示していた。

すぐさま、白い制服のヒルダの声が聞こえてくる。

「損害、拡大してるよ！」

「航行に支障……」

すでに舵がききずらくなっているのだろう。黒い制服を着たユニ  
スは寡黙な様子を保ちながらも、その操舵の手は震えている。

古龍の群と会敵してからすでに一時間以上経過していた。それで  
もなお、敵は数を減らす様子がない。

「グツフルファクシ級もどんどん数を減らしてる。やっぱり、速度  
を出しながら戦うなんて無理が……」

スレイプニル級を動かすわずか五名のクルーの内、四人目に数えられるアネット 桃色の制服である がつい弱音を吐く。管制を担当する者として、アネットには仲間の船が次々と脱落している様子を手に取るように確認していた。

これまで多くの文明が、幾多の命が挑みながら打ち破ることができなかつた古龍の力は人の心にたやすく絶望を刷り込もうとする。五〇〇年前、ハイパーボリアの人々が住み慣れた故郷を離れ、環境険しいドリームランド峡谷に逃げ延びるしかできなかったように。

それでも、命は一度たりとも生きるということを諦めようとはしなかつた。

四人のクルーを見渡す位置。それは艦長席に他ならない。しかし、そこに座っているのは艦長ではなく、代理を任せられただけの少女である。それは、艦長であるセントポリア王女のすべてを引き継いだ者であるということの意味する。

「ここは姫様の帰る場所です。安心できる場所であればいけません。そんな私たちが先に諦めてしまつてどうします!？」

艦長席に座るは紫の少女エフィー。その目はまっすぐ前へと向き、伸ばされた手は今ここにはいない主へと捧げられる。

「死ぬのも諦めるのもセントポリア様の許可が出てからです」

デメトリアが笑つた。ヒルダもアネットも笑つた。表情に乏しいユニスさえ、その口元を綻ばせる。

どう表現しようか。生きた人とは、どんな絵画よりも鮮やかで心

躍らせてくれる存在であるとしてもどうか。一瞬で色を変える絵の具などまだ存在しないが、人はたった一人の志で鮮やかにその色を蘇らせる。

「デメトリア、右が重い。大砲を少し左に移動させて……」

舵を左に回しながらユニスはその細い腕に力を込める。しかし、その顔にはすでに苦痛の色はない。ヒルダとて、持ち前の明るさを取り戻していた。

「でも左舷第七区画は駄目だよ。床が相当痛んでるから」

「任せておいて」

デメトリアが送声管に手を伸ばすその横では、アネットがそのすぐ前に置かれた海図に膨大な数の情報を書き出していく。

「代わりにグツフルファクシの皆さんに弾幕の穴を埋めてくれるようお願いしておきます」

エフィーは以前、セントポリア王女の着替えを手伝っていた時のことを思い出していた。あの人は、かつて古龍と戦ったことがあるながら、その恐ろしさを誰よりもわかっていながらそれでも、抗うことを諦めようとはしなかった。

「ここで諦めたりなんてしたら、姫様はきっと、許してなんてくれません」

赤い瞳に白い髪。まるでお人形のように可愛らしいお姿ながら、その胸には誰よりも熱い志を秘めている。ここにいる誰もが、等し

く同じ人を思い浮かべている。

「だよね〜。だって、まだまだ戦う気で、世界を救う気で満々だから」

ヒルデにとって、セントポーリアという王女は気の置けない友人のようなものだろう。

「正直、わがままな人なのよ。何でも自分の思い通りにならないと気が済まないタイプだから」

デメトリアは主である王女をこき下ろそうとするも、その顔に悪意は浮かんでいない。ユニスも、乏しい表情なりに微笑みを作ろうとしている。

「唯我独尊……」

「何となくわかります。自分のことも大切にして、だからみんなのことも大切にする。そんな人ですよね」

みんなの気持ちを、アネットはとてもよくまとめているように思われた。

セントポーリア王女はひどくわがままである。会議の場では、多少の犠牲に目を瞑ってでも王龍をやり過ぎそうとしていた人々に対してそれでは満足できないと突っぱねた。古龍と戦うためには必要だからと大型飛行船さえ引っ張りだしたほどである。

自分の思い通りにしなければ気がすまない。そしてその思いは、多くの人を救いたいという善意と重なっている。

だからみなでそろって姫様を甘やかそうとする。わがままに付き合おうとする。

本当に、あの人は変わっている。願えば、安全な場所で安寧な生活を送ることもできる人なのに。

クルーたちが皆で笑みをこぼしたのは、おかしさではなくて優れた主をもてたことへの喜びにも近い賛美であるのあらう。

「先にその癖の強さが話題になるなんて、姫様もアマランサスさんも似た者同士よね。そう言えば知ってる？ アマランサスさん、今ではちよつとあれだけど、昔は姉御肌の人だったそうよ」

他愛ないお話をしながらも、デメトリアは送声管から届く言葉に耳を傾け、すぐさま手元の模式図に情報を更新していく。それはアネットも同じであり、その手は止まることはない。

「初めて会った時、妙にかわいらしい人だと思ってましたけど、実は年上だって聞いた時は驚きました」

「何でも、姫様が無茶な新人教育してあんなっちゃたんだってね」

「洗脳……」

「でもすごい人ですよ。一目見ただけで何でも覚えちゃうなんて私なんて少し太ったら一発で見抜かれました……」

人の脳は徐々に変わっていくものを見ても変化には気づけないようにできているらしい。そのため、毎日のように会っている人の体



型変化には気づけなくても、一年会っていない人の変化には気づくことができる。

ただし、それは一般の人のお話である。

アマランサス特務騎士の場合、姫様が凶眼と呼ぶ力を持っている。一目見たものの形を瞬時に記憶する力で、それは極めて正確。そのため、一月前の体型を完全に覚えられた場合、少しでも変化が生じると見抜かれてしまうのである。

「それは、私も身に覚えがあるわ……」

「天敵……」

すっかり空気が沈んでしまった。慌てたようにアネットがフォロ―を入れようとすも、効果があるようには思われない。

「今度、セントポーリア様からダイエット方法とか聞いてみましょうか……?」

「やめといた方がいいよ。腹筋と腕立て毎日百回すればいいとか言われるから」

ダイエットとは無縁のお姫様は、そもそも太る暇がないということになる。そんなことができるならばじめから誰も体型で苦労はしていない。

「戦う、お姫様ですものね」

今なお戦っているであろうセントポーリア王女のことを思い浮か

べながら、エフィーはそつと微笑みを送った。

スレイプニルは一見すると儀礼用かと思紛うほど美しい船である。整った流線型に船側には飾り彫りが施され、しかしそれは風をうまく捉えるための空力学的な見地から施された機能美のたまものである。

美しいばかりの船では決してない。

それはどれほど傷つこうと汚れることのない誇りを有しているということに他ならない。

美しい彫像は汚れてしまえば台無しである。それは、単なる鑑賞用でしかないからだ。だが、どれほど汚れようとも、スレイプニルは美しい。

その甲板は夥しい死が敷き詰められていた。倒れるハンターたちの血が流れ、しかし、古龍の亡骸からこぼれる血とは混ざり合うことはない。古龍の血は龍毒を含んでおり、強烈な腐食作用を有する。強力な錆落として使用できるのではと期待されるほどである。を有している。そのため、甲板を焦がし、人の血に触れると血液が煮立ったように白い湯気を上げた。

古龍はあらゆる命と相入れない。

ここには死が満ちていた。焦げた肉が吐き気を催すほどに香ばしく、血の臭いは鼻腔をくぐり抜け、脳髄にまで死を確からしめる。

甲板は肉と血を乱雑に盛りつけた地獄の皿であった。

それでもなお、スレイプニルは美しい。どれほど血にまみれようと。その船は空を駆け、他の何よりも速く迅く突き進む。

この空ある限り、スレイプニルの美しさは損なわれることはない。

それは、一人の少女にも当てはまる。

風翔龍クシャルダオラ。炎王龍テオ・テスカトルが甲板へと降り立つ。まだ多くのハンターが戦いを続ける最中、一際大きな体を持つこの個体たちは同じ獲物に狙いを定めていた。

床にこぼれた古龍の血が恨めしく赤黒い光をほとばしらせている。頭を砕かれたいくつもの古龍の屍が輪を描くように並んでいた。

血と死と猛毒に彩られた円の中央に、その主は血で汚れきった姿をさらしていた。

純白であった法衣はもはや血を浴びていない場所を探す方が億劫である。同じく白かった髪は、その艶を古龍の血に汚されていた。血塗れのお人形を美しいと感じる者は乏しいだろう。しかし、セントポーリア王女は人形ではない。その美しさは微塵も揺らいでなどいない。

その赤い瞳は、厳然と戦意を湛えている。大きな個体が二頭そろって目の前にいるとしても、前へ一步踏み出す足は恐れを克服した勇気を持つことを示していた。肩越しに担ぐ狩猟笛は、赤黒い輝きを獲物を前に舌なめずりするかのようにくゆらせる。

セントポリア王女の美しさは寸毫も欠けてなどいない。

古龍と戦う限り、その心折れぬ内には。

「あなたたちに、好き勝手させるつもりなんてないんだからね」

対峙する風翔龍、炎王龍。これらに比べればあまりにちっぽけな姫君は、しかしその心でもって龍さえも凌駕する。

西に落ちた太陽が未練がましい西日を、それでも捨てざるを得なくなった時、凍土のハンターたちの戦いが始まるうとしていた。

炎妃龍ナナ・テスカトリの体の回りには赤く揺らめく空気がまとわりつき、足を浸す浅い川からは湯気が上がっている。

炎の龍の名は伊達ではなく、夜闇の中でなお存在感を譲ることはない。

川下に立つハンター三人は、足下を流れていく水の温もりが得体の知れない気持ちの悪さを持って感じられていた。

だが、三人はともに熟練したハンターである。わざわざ凍土から支援に訪れ、古龍が怖いなどと言っていられる暇はない。

「作戦はこうだ。あの大樹の根本に虚がある。そこに大タル爆弾Gを隠してある。いざという時のために隠しておいた物だが、そのままあそこで爆発させれば木をこちら側に倒すことができる」

ヒュプノスは古龍から目を離さないまでも、首で樹の方を示す。その樹はすでに葉をつけていないほど弱った様子ではあったが、この広場を覆うように枝を伸ばし、見上げるほどの高さを有している。その重さたるや、相当なものであろう。

「自然破壊極まりない方法ね」

アルルはそうは言いながらも、古龍の頑強な甲殻を破壊するには有効な方法であると認めたとようであった。

「後で除去作業には協力させてもらおう」

それはすなわち、生きて勝利を収めることが前提となる。

話に参加することのなかったイシュタルは武器であるスラッシュアックスに新たな瓶を追加していた。柄の部分に追加の瓶を押しつけ、音がするまで押し込む。スラッシュアックスは内蔵された瓶から気化した蒸気の圧力で変形させ、その状態を維持する。このことは瓶に注入された溶液によって異なった性能を刃に付加できる他、刃自体が圧力によって支えられているため、堅いものに触れてもその衝撃を気体が柔軟に吸収し、手元に痺れが伝わらないという利点につながっている。ただし、剣を振る度に蒸気は漏れだし、剣の状態を維持できなくなってしまう。そのため、溶液が気化するのを待つか、新たに瓶を追加して無理矢理気圧を上げなければならない。

イシュタルが選択したのは後者であった。瓶の装着には時間がかかるため、戦闘中は避けることが賢明であるが、幸い、こちらに関心を示すことはなかった。

「古龍の注意は俺とイシュタルが引きつける。アルルは合図を出し

たら爆破してくれ」

「シビレ罨、一応あるけど使ってみる？」

「恐らく無駄だろう。アマランサスさんの話だと、古龍に罨は効かないらしい」

アルルが背中アイテム・ポーチに手を伸ばそうとして、それでも手を途中で止めてしまった。本人は気づかれないように振る舞っているつもりでも、背中に傷を気にしていることは、周りからは容易に知ることができた。

まだヒュプノスたちが到着する前、アポロを庇ってつけられた傷は、アルルの動きを鈍らせていた。

ヒュプノスの視線が明らかに傷を意識していると気づいたアルルは、一度古龍の姿を見据えてから答える。

「あなたたちに、任せるしかないようね」

「そう言うことだ。わかったか、イシユタル」

「要するに、広場の真ん中にいさせればいいんでしょ」

イシユタルがスラッシュユアックスを構え、ヒュプノスもまた太刀を抜き放つ。どちらも重心のバランスがよく、抜刀状態でもある程度走り回ることができる装備である。

「それじゃあ、作戦開始だ！」

かつて、イシュタルは悪魔と確かに戦った。姿の见えない相手に、気がつくまもなく喰らわされた一撃はイシュタルの体を軽々と跳ね上げた。その後、目が覚めた時には安全な村の中であった。

悪魔は村一番のハンターとたまたま里を訪れていたミスカトニツク王国のお姫様によって討伐された。

何もできなかった。

自分なら悪魔とでも戦えると考えたわけではない。慢心とか油断があつたわけでもなかった。ただ弱くて、だから倒された。それだけのことでしかなかった。

もしも、ただ一人気絶させられただけならどれほどよかつたことだろう。

そうでなかつた現実を思い出すことは辛い。その時、イシュタルは一人ではなかつた。もう一人、狩りを共にしていた親友がいたのだ。親友は、スノードロップは気を失つたイシュタルを担いで村まで運んでくれた。もしかすると悪魔に二人とも殺されていたかもしれない危険を省みず。

二人が無事に村にたどり着くことができたのはあくまでも結果ではない。たまたま今回はうまくいったというだけのこと。

それも、イシュタルがたつたの一撃で気を失つたせいだ。

スノードロップも、村の人もそのことを責めようとはしなかつた。

それがなおのこといたたまれない。でも、非難を真つ正面から受け止められるほどイシュタルは強くはなかった。

だから、いつも自分は古龍と戦ったと吹聴して回った。誰もが呆れて、でもお前はたったの一撃でのされたらうと指摘してくれたから。そう、柔らかい非難を促すことばかりしていた。

でも、それも今日で終わりでもいい。悪魔とは違って、相手も同じ古龍であることに変わりない。あの時の借りを、今ここで返してしまおう。

ここで、倒してしまおう。何としても。

意識を現実へと引き戻す。かつて見た 語弊がある表現だが 悪魔とは違い、炎妃龍は存在をこれでもかと主張していた。

揺らめく炎のような大気を纏い、顔色の悪い青い顔には鋭い歯が並んでいる。口にも炎がちらつき、まさに炎の化け物であることを見せつけていた。

水を踏みつけ、スラッシュアックスを突き出す。近づいただけで熱せられた空気がイシュタルの体にまとわりついてくる。まるで火事を桶一つで消しているかのような軽い絶望が頭を叩く。熱の大气を突き抜けたスラッシュアックスの冷却された刃が古龍の体に激突する。あまりに強固な体に弾かれ、イシュタルは大きく仰け反った。

「イシュタル、あまり無理するな」

「ちょっとくらい無理してるくらいが狩りにはちょうどいいのよ！」



ヒュプノスへの甘えを振り切るように叫ぶ。

ここで古龍をしとめることができる手段はすでに用意されている。それならば、何としてでもこの古龍を足止めしなければならぬ。たとえ、何があっても。

古龍が体の向きを変えた。人の胴体よりも大きな顔がこちらを向いて、これから如何にも火を吹きますと言わんばかりに口から炎が洩れていた。

火が吹き出されるとほぼ同時に横へと跳んだ。炎が背中をかすめるくらいにぎりぎりながら、体は無事、浅い川を転がることができた。

炎に弱いベリオロスの装備であんな炎を食らうことはご勘弁願いたい。もっとも、炎に強いリオレウスの甲殻を纏うヒュプノスとして喜んで浴びるとは思えないが。

火を吹き終えた古龍がすぐにイシュタルの方を向いてこないのは、古龍を挟んで反対側でヒュプノスが攻撃を仕掛けているからであるようだ。刃を振り下ろすかけ声が聞こえている。

同時に、甲高い音も。

攻撃がまともに届いてはいない。多くの生物にとって弱点である腹を狙って、スラッシュアックスを突き出す。ここからせめて攻撃が通るのではないだろうか。そんな淡い期待を打ち破って、古龍の腹は破れない。

それでもいい。何も武器で古龍を倒す必要はない。ただアルルの

準備ができるまで時間を稼いで、そして、樹が倒れてくるその瞬間までつなぎ止めておけばいいだけだ。

それまではどれほど長くても耐えてみせるつもりであったが、それは思いの他早く訪れた。鼻に独特の臭いが届いた。ハンターが遠く離れた仲間にサインを送るためのもので、ただ注意喚起にしか使えない不便なものだが、この場で誰が何のためにしたかくらい、容易に想像がつく。

アルルが準備を終えたのだ。

横目で樹の根本を確認すると、アルルがすでに点火　とは言うても、大タル爆弾めがけて石を放り投げようとしているだけだがの準備に入っている様子が見て取れた。一度設置された大タル爆弾は些細な衝撃でさえ爆発する。準備は整っていた。

イシュタルが目線を送ってしまったためだろうか。ナナ・テスカトリが首をひねる。その目は明らかに大樹の根本を見ていた。

「こつち見なさい！」

その顔めがけてスラッシュアックスを振り下ろす。相変わらず面の皮の厚い古龍には傷一つつけられないが、それでも注意を引くことはできた。煩わしい蠅でも払うような仕草で爪を振るう古龍の攻撃を川を転がるように回避してから、イシュタルは水に濡れた髪を拭うこともなく叫んだ。

「爆破して！」

突然響いた爆音が、無事、爆破が完了したことを教えてくれる。

風圧が巻き起こり、イシュタルの体を軽く押した。目に飛び込む風を、それでも瞬きもせず耐えていたのは樹が確かに倒れる様子を確認するためである。

倒れる角度も勢いも悪くない。これなら、古龍に直撃させることができる。

ただ、そのためにはあと一瞬の間だけ、古龍を足止めする必要があった。

古龍は慌てたように動きだそうとしていた。

ここで動かれては何にもならない。柄ではない。そう理解しながらも、イシュタルの足は動いた。スラツシユアックスの刃を、相手の鼻先に見せつけるように薙ぐ。甲高い音しか聞こえてこないも、古龍は苛立ったような顔をしてイシュタルを睨みつけた。

そんなことをしている場合ではないのではないだろうか。もうすぐここには大樹が倒れてくるのに。

古龍とイシュタルとに降りる影が次第にその大きさと濃さを増してくる。いくら古龍でもひとたまりもないだろう。もちろん、人も。

これで、今も遠くで戦っているであろう親友に、少しは報いることができるだろうか。

迫り来る大樹に死が現実のものとして意識され始めた時、イシュタルはおかしな音を聞いた。大樹が風を裂く音の中、通常なら決して聞き分けることのできない音を。

それは、自分の名を呼ぶ声と川を走る音。強く体を横へと押し出される感触に飛ばされて、イシユタルは水面に受け止められるような形で叩きつけられた。

そして、聞こえたのは大樹が大地を踏み荒らす荒々しい音。その轟音しか聞こえない音の暗闇であった。セイレムの魔女として、これまで音を聞き分けるということに注意を傾けてきた。それでもただ一つの音しか聞こえないという現実、ひどく恐ろしく、どこか夢のような出来事にさえ思える。

川に倒れていると、古龍の熱に当てられた体に水温が適度で気持ちがいい。だがいつまでもこうしてはいられないと、体を起こす。

雨が降っていた。大樹が水面を強打することで水が弾き上げられ、それが川に戻ろうとしている。樹は原形を失って巨大な軀をさらしていた。はつきりとは見えていない。土埃が邪魔をして、かすかな月明かりが輪郭が見えるに像をかすれさせている。

それでも、そこに人らしい影はなかった。代わりに樹が一部盛り上がった瘤のようになった部分がかすかに動いた。まっすぐに倒れるはずだった樹が何かに邪魔をされて、そこだけ盛り上がったようになっってしまったのだろう。

ハンターとして、たとえ突き飛ばされても離さなかった得物を握る手に力がこもる。

「何で……?」

理解できないのではなく、したくなかった。

「何であんたが生きてんのよ！」

晴れてきた埃の中から、鈍い動きで古龍がゆっくりとその姿を見せた。

立派であった翼は、骨格からへし折れているらしくいびつな形に曲がっている。折れたり裂けたり、傷だらけの全身から血が溢れ、王冠のように大きかった角は無惨にもへし折れていた。

しかし、古龍は生きている。

足を引きずるようにして歩き、潰れた片目からは時折血が吹き出すように川へと伝って落ちた。浅く、勢いもない川の流れに、それでも勝てないかのように体のバランスを崩すことがある。

それでも、古龍は生きている。

スラッシュアックスを起動させる。すでに基部には気化した気体の圧力が十分に溜まっている。通常はそれを押さえ込んでいるが、解放するとどうなるか。

気圧は刃を押し上げ、一八〇度回転させることで両刃であった刃二つを同じ側に、縦に並ばせる。斧から剣へ。左右でバランスをとっていた刃が片側によることで重心が崩れ、途端に扱いずらさを増す。しかし、この剣の形態は攻撃力を一カ所に集中し、気圧そのものを武器とすることで斧形態以上の力を発揮する。

「ヒュプノスは死んだのに、あんたが生きてて言い訳ないじゃない！」

すでに古龍は満身創痍であつた。それがイシュタルに憐憫の情を誘つことは微塵もない。

剣と化したスラツシユアックスを横に構え、額のあたり、古龍の碎けた角めがけて突き出す。

まだなお頑丈な甲殻に受け止められ、スラツシユアックスは額に突き立てられる形で押しとどまる。しかし、弾かれることなく、そして、イシュタルの憎悪もまたやむ気配がない。

イシュタルは第二の封印を解いた。

スラツシユアックスにとって、気体が洩れだしてしまうことは構造上の欠陥であると言つても差し支えない。どうしても隙間から洩れだしてしまい、そのため、剣の状態を長時間維持しておくことができない。ところが、どこかの馬鹿がさらに気圧の寿命を削り落としてしまうような戦法を考案した。

基部の気圧を敢えて高める　それだけ、気体が洩れ出すことを意味する　ことで、膨れた圧力を攻撃に使つてしまおうというものである。

俗に言われる属性解放斬りである。

イシュタルはスラツシユアックスを古龍へと押しつける。押しつけているだけでいいのだ。あとは、刃が勝手に戦ってくれる。刃を押し出す圧力が一気に膨張すると、刃は敵へと叩きつけられるように押し出される。ところが、古龍は堅い。刃はすぐに押し戻されてしまふ。すると、また気圧が膨張し、刃を押し出す。すると、古龍の甲殻がそれを押し戻す。この繰り返しである。こんな単調な繰り返し

を、人では数え切れないくらいの数を短い時間に繰り返す。

このことがどれほどの力を生むか想像がつくだろうか。刃は間断なく一点を、その膨大な圧力で苛み、甲殻が破壊されればさらに刃は深々と食い込む。

突き立てられたままのスラッシュアックスから洩れだした気体が爆発でもしているかのような大きな音をたてる。イシユタルはその圧力を抑えることに必死になり、身動き一つとることができない。それでも、その目は古龍の顔を睨んで離すことはない。

「死ねないなら……」

膨れ上がった気圧による文字通り爆発的な圧力が、気体の洩れる爆音があがる度、脆くなった甲殻にひびを入れていく。

「私が殺してあげる！」

そして、刃が先に限界を迎えた。高まりすぎた圧力に耐えきれず、隙間という隙間から一斉に気体が爆風となって吹き出した。まさに刃の中で起きた爆発はイシユタルの体を後ろへと押し退けるほどの力を持つ。

川の水を足が引き裂きながら後退する。内部の気体をほとんど消耗しつくしてしまったスラッシュアックスは音を立ててその形態を斧へと戻していた。

古龍は、動くことはなかった。一見すると、何も変わっていないようにも見える。額に円を描くようなひび割れが走っていることを除いて。どれほど頑強な甲殻であろうと、一点に膨大な圧力を集中

されて無事でいられるはずがない。それが大樹の衝突にさらされた体であればなおのこと。

ひびから、にじむように古龍の血が流れ出した。人が想像する鮮血とは違い、赤黒い黒ずんだ血が。やがて血流に負けた甲殻がほんの一片はがれ落ちると、一斉に吹き出た血が古龍の顔をなめるように流れ始める。その流れに出血と言えるほどの勢いはなく、そのことは、古龍の心臓がすでに停止していることを意味していた。

古龍は死んでいた。大きな体が、川へとゆっくりと倒れる。流れ出した血が川面を染め上げる。水が染まっていく。

水を意識したことで、イシユタルはある考えに思い至った。川へと突き飛ばされ、顔が濡れていることは当然である。それがいつまでも乾く気配がないのはどうしてだろう。

自分は泣いているのだ。そう気づかされた時、腕から力が抜け落ちた。スラッシュアックスが、血と水とが混じりあった川に音を立って落ちる。

武器を持つということに何の意味もなかった。勝利は何ももたらしてはくれない。ただ喪失だけが胸をつんざく。無意味な勝利を得るための道具に、何の意味があるのだろうか。

瓦礫と化した木くずを前に、アルルは適当に見当をつけた。

「この辺かしら」



水をすって重くなった木をどけると、お目当てのものはすぐに見つけることができた。掴みやすい場所、とりあえず両脇に手を差し込んで、引っ張りだそうと踏ん張る。

「ゆっくりにしてくれ」

「はいはい」

普段は頼もしいと思える男の大柄な体が今は恨めしい。とにかく重いのだ。とりあえず、瓦礫の下から引っ張り出すくらいで構わないだろう。大柄な男を川の中に寝かせることにした。

幸い、目に見えるほどの重傷は負っていない。兜をとって確認しても、頭部が強打されたような痕跡を見つけることもできなかった。要するに、問題なし。

大樹の一撃に耐えた男、ヒュプノスは、アルルの見立てを証明するかのようには上体を　多少億劫そうではあったが　起こした。

「お、とどめ、さしてくれただな」

倒れた古龍を見て、ヒュプノスは気楽な様子で手を振る。ただそれれも、イシユタルが泣いていることに気づくまでのことであつた。

落としたままの武器をそのままに、イシユタルは顔を伏せたまま二人の方へと歩いてきた。立ったままのアルルからでは表情をうかがいしれなくとも、座っているヒュプノスからはつきりとわかるのだろう。アルルからでも見える男の表情は苦虫を噛んでいるかのようにならわっていく。

「いや、別に俺は、英雄でも何でもないし、自己犠牲とか柄じゃないだろ。それに、その、古龍の体は頑丈だから下に潜り込めばかわせると思ってたし。まあ、破片に埋もれたことは、計算違いだったけど……」

自分がどれほど心配をかけたのか、ようやく理解し始めたのだろう。もつとも、アルルは何となく、ヒュプノスなら無事だろうと考えていたが。

「いや、すまない」

ヒュプノスは怯えていた。これまでの経験上、イシュタルにどれほど叱られるかわからないと。ただ、アルルに言わせれば、それも、まだ読みが甘い。

イシュタルはヒュプノスの側にひざまづくなり、その胸へと飛び込んだ。呆氣にとらえるヒュプノスの顔。自分の胸でむせび泣く仲間の扱いをどうしてもよいものかわからず、その視線は助けを求めるようにアルルへと向けられる。

それを、アルルは敢えて一笑にふす。

「それじゃあ、ここは若い二人に任せて、私は村に向かうわ」

手を伸ばしてきたのは、置いてけぼりをくうことへの抗議であるうか、それとも、イシュタルの扱いにそれだけ苦慮しているということだろうか。

「いくら何でも無傷ってわけじゃないんですよ。それに、まだ古龍がいるかもしれない状況下で一人にしておくことはできないわ」

それに、イシュタルは、もう少し泣かせて上げて欲しかった。仲間を危険にさらしたことを今の今まで責め続け、やっと償うことができるという矢先、仲間に庇われ、また仲間を窮地に追い込んでしまった。そう考えたとしたら、その心の苦しみは想像がつく。

「すまない」

「気にしないで。こちらは身軽な独り身だから」

軽く手を振ってから、アルルは歩き出すことにした。

ここから村までは丘を一つ超えなければならぬ。普段は決して苦痛と感ずることのない坂道も、今は不愉快なほど長い道のりのようにアルルの前に聳えている。

きつと、アポロも同じ心地でこの坂を登ったのだろう。

「アポロ、無事でいてくれるといいけど……」

セイレムの魔女として、通常では聞き分けることができないほどの小さな音を音として認識するような訓練をアルルも受けている。しかし、村の方角から聞こえてくる音は何もない。不気味なほどの静けさが行く先には待ちかまえていた。

新米ハンターがたった一人で古龍に挑む。そんなわかりきったなぞなぞに、アルルが望む答えが、果たして用意されているのだろうか。

## 第二五話「名前も知らない人のため」Miracle」

モガ村は決して大きな村ではない。かろうじて集落とは呼ばれないほど人口しかおらず、ロックラック諸島の外れに位置していることもあって、残念ながら急速な発展というものは望むべくもない。

古龍の襲撃に耐えられるはずもなかった。

水没した海底遺跡の上に板を張る形で海上に建設された特殊な構造をした村である。一見すれば不便なこの構造は、しかし大型モンスターが迷い込むことを拒んでいた。海底は地形が複雑で、海竜種などは入り込みにくい。島の側は崖になっており、複雑な気流は飛行できるモンスターを嫌がらせる。

それを、古龍はものともせず村を襲撃したのである。

お抱えのハンターは新米ハンターがわずかに一人。そして、凍土から応援にかけてくれたハンターたちが村を離れた時を狙うかのように、古龍は村に降り立った。

人々にできることはただ一つ。息を殺して怯えているしかなかった。

ここは村長の家である。村長とはいえ、贅沢な暮らしが保障されているわけでない。せいぜい村民の家よりも多少広さが感じられる程度でしかなく、床板の隙間には海が顔を覗かせている。寒さよりも暑さに悩むことの多い南方の島らしく大きく開けた窓には布がかけられ、かすかな月明かりの立ち入りさえ拒んでいた。

目を凝らしたならば、広くはない家の中、大勢の人々が物音一つ立てることなく座り込んでいる様子を確認できることだろう。見立てて二、三〇人は下らない。それほどの人 中には子どもも含まれている が集まりながら、話し声一つ聞こえてこないのである。

異常とも不気味とも言える静けさであった。

物音を立てることは、すなわち死を意味している。まだ古龍が村の中を歩き回っては獲物を探している。見つければ、皆が殺されてしまう。

普段は気にもとめない波音に怯える人さえいた。

そんな中、明らかに木を踏みしめるような音が聞こえてきたとしたらどうか。息をする音が漏れることさえ恐れて、人々が一斉に呼吸を止めた。

より鮮明となる音。それは確実にこの家を目指しているかのようであった。錯覚かもしれない。単に近づいてくるように聞こえてしまっただけかもしれない。では、ここにいる皆が皆、同じように聞き耳を立てていることをどう説明しようか。緊張が緊張を呼び、相乗的に高め合うように広がっていく。

泣きだそうとする子どもの口を、母親が震えた手で押さえた。

やがて、家の扉 しっかりとしたものではなく、垂れ幕一枚張られた程度のものである の前で足音は止まった。

この時、誰もが気づくべきであった。その足音は、古龍ほどの体重があるにしては小さすぎるものだ。垂れ幕が押し退けられると、

月明かりが室内に入り込む。闇に慣れきってしまった人々の目に姿は映らず、まず声が聞こえた。

「よかった、みんな無事だったんだな」

村民の多くが聞き慣れた声であった。やがて、姿が見えてくると、それは金属製の鎧を身につけた少年であった。視界を確保するためか、あるいは戦闘中ではないためか、兜はつけていない。

この村のハンターであるアポロの姿に、皆がそろって安堵の息をもらした。

アポロは人に埋め尽くされた足場を選んで進むしかなかった。誰かを踏みつけてしまわないように慎重に、しかも、鎧が音を立ててもならない。そうして注意しながら進んでいくと、お誂え向きに一人が座れるような隙間を見つけることができた。偶然ではなく、村人が開けてくれたのだろう。アポロが腰掛けると、そこには主な面々が周りに集まっていた。

村長の息子に、交易船の船長である。もともと、アポロはこれだけでは満足せず、その視線は次々と人を移っては、すぐそばに目当ての女性の顔を見つけることでしょうか。しかし、その顔は晴れ渡ることはない。ギルドの受付嬢の顔は表情がなく、どれほど怖い目にあってきたのか忍ばれたからであろう。

ここには笑っている人など誰もいない。

普段太い、はっきりとした声を出す村長のせがれも、どこか傷でも負っているのか、それとも声が漏れないように気を使っているのか、細い声しか聞こえてこない。

「お前だけか？」

「島の反対側でも古龍の襲撃を受けたんだ。ヒュプノスさんたちが今戦ってる」

あの三人なら大丈夫だろう。ただし、村に救援に駆けつけてくれるハンターがいないことにも等しい。村人の顔色は、この暗さでもはっきりとわかるほどにさえない。

アポロ自身、自分がたった一人で古龍と戦うほどの力がないことを理解していた。ただ、それを認めることはこそばゆいのか、一瞬の躊躇を飲み込むように、アポロは声を絞り出す。

「みんなで山に逃げ込もう。それなら、古龍も追って来にくいはずだ」

山には遺跡が残されており、うまく隠れることができれば少なくともここよりは安全なはずである。

「確かに、それが一番現実的な作戦だな。だが、古龍が見逃してくれるとも思えん」

「今、戦える人は？」

アポロが見回せど、元々この村にはハンターはアポロ一人しかない。漁の際、必要からモンスターと戦う漁師もいるが、その多くが体に包帯を巻いていた。古龍の襲撃に対し、真っ先に戦い、傷ついていた人たちだ。そして、アポロは気づいた。ここに、村人の全員が集まっているわけではない。正確に把握できるわけでないが、見

慣れた顔がないことくらいすぐに気づくことができちゃう。

戦えるのはアポロ一人。かと思いきや、一人が声を上げた。

「それがしも戦うぜよ」

言葉だけでそれが誰なのかわかる。交易船の船長だ。普段から太刀を背負い、それなりの腕前だと聞かされている。だが、船長も例に漏れず、額から左目にかけて包帯が覆っていた。壁に寄りかかって座っていることも、体力の消耗を感じさせる。

「無理するな。あんたはよく戦ってくれた。あのラギアクルスもな」

アポロには耳慣れない事実ではあったが、村人たちは海竜ラギアクルスのことを周知の事実として認めている。

「危険な賭だが、やるしかあるまい」

これほどの人数が誰一人かけることなく逃げ延びることは不可能に近いことを誰もが理解していた。そして、アポロ一人で守りきることができないことも。

「船長、俺たちを置いていってください。自分で歩けないんじゃない、いい足手まといだ」

言い出したのは、橙色のつなぎを着た船員たち。その多くが深い傷を負い、代表して発言した男の足は服が漕げ、包帯の間から痛々しい火傷が見えた。

「そんなこと、できるわけがないぜよ」



「でも、このままじゃみんなが……」

全員が助かる可能性がないのなら、誰かが犠牲にならなければならぬ。誰もが理解しながら、誰も認めることができない事実。

家は再び静寂に包まれた。

この時、アポロはふと、ギルドの受付嬢の顔を盗み見た。面と向かって顔を見ることは気恥ずかしくて、それでも、最後にもう一度だけ、見ておきたかった。

「船長、せがれさん、俺が囷になって古龍を引きつけるから、その間にみんなで逃げてくれ」

二人はそろって受け入れがたいと言いたげな顔をした。

「ここで戦うことができるのは俺だけなんだ。それにさ、俺、まだこの村で日が浅いし、家族なんていないから」

「馬鹿を言うな。一度仲間として受け入れた相手を捨て石にできるわけがないだろう。それに、お前が死ねば悲しむ奴がいる……」

「ごめん。でも決めたんだ。村長とも話をして、俺、決めたんだ。俺はハンターで、その、みんなのために戦うって。だから、これは相談じゃなくてもう作戦の説明なんだ。誰が何と言おうと、俺が囷になる」

声を大にはできないため、決意の表明は声の大きさに頼ることはできなかった。ただ伝わってくれることを願うほかない。

まず動いたのは船長である。胸の前で結ばれていた紐をほどくと、背負っていた太刀を鞘ごとアポロへと差し出す。

「持っていくぜよ」

「いいの、こんな大切なもの？」

「お前はこんなものよりも大切なものを仲間のために差しだそうとしている。何が惜しいものかぜよ」

「ありがとう」

受け取ると、太刀の確かな重みが心地よい。

「みんな聞いてくれ。まず、グループを三つに分ける。崖はしんどいだろうが、何としてでも駆け上がって山に逃げ込むんだ。もちろん、後になるほど発見される可能性が高まる。だから俺は女子どもから逃がしてやりたい」

村長のせがれの言葉に誰も声一つ上げず、しかし頷いて答えた。

「ありがとう、みんな」

もう細かいことはこの人たちに任せておけばいい。そう判断したアポロは新たに与えられた太刀を背負いながら立ち上がる。

「じゃあ、俺、行ってきます」

歩きだそうとして、すぐにそれが無理であることに気づいた。後

るから、少年の手を掴んでいる人がいたのである。ずいぶん小さな手で、振り切ろうと思えばたやすく振り切ってしまうほどの手が、アポロにはどんな鎖よりも断ち切りにくいものに思えた。

「アポロ……」

今にも泣き出しそうな顔をしてギルドの受付嬢の見ていることが辛い。笑ってもらいたくて、それでも、生きて帰ってくる約束なんてできそうもない。冗談混じりの言葉に逃げることを、許してもらえらるうか。

「俺さ、いつか、君が持つてきてくれたクエストでラギアクルスをしとめることが夢だった。絶対に見返してやりたくてさ。それまでは、まだまだ死にたくなんでないんだ」

一瞬手の力が緩んだ瞬間を狙い、アポロは受付嬢を振り切る。これ以上ここにいると未練が募ってしまいそうで、少年はたった一人の戦いを始めるために歩き出す。人々が道を譲ってくれる。その顔に、涙さえ浮かべて。

古龍は、炎妃龍ナナ・テスカトリは歩いてきた。村の床を構成する木材はその度にしなり、きしんだ音を立てる。体から発する高熱が木を焦がす臭いが充満する。

存在そのものがすべての命にとって猛毒に他ならない古龍が闊歩するだけで、モガ村は悲鳴を上げる。

しかし、ナナ・テスカトリは満足などしていなかった。もっと殺

したい。もっと壊したい。そう、本能がせかして落ち着かせてなどくれないのだ。

海上で交易船を襲撃した。壊し甲斐のある獲物だと思った。しかし、もう壊してしまった。海竜ラギアクルスに戦いを挑まれた。しかし、そいつももう浮かんでこない。背中 of 帯電殻を砕かれて、海の中に沈んでしまった。

まだ殺し足りないのに。まだ壊し足りないのに。

もっと遊ぶことができる獲物はいないだろうか。ナナ・テスカトリは爪を振り上げ、近くにあった家を切り裂く。木造の脆い家屋は簡単に屋根が落ち、村中を響かせた。

これでは物足りない。

龍毒は敵を倒すための毒であって、こんな物を破壊するためのものではない。命を奪うためのものなのだから。

炎妃龍ナナ・テスカトリは獲物を求め、モガ村をさまよっていた。

「古龍は……、いないな」

家の壁に隠れるようにして、アポロはそつと道をのぞき込む。幸か不幸か、古龍の姿はそこにはなかった。

自分が囷になると大見得きっておきながらこの様ではみつともなくも格好悪くもあるが、古龍の姿を確認しないではお話にならない。

アポロとて無策でいるわけではない。たった一つだけ、古龍に一泡吹かせてやれそんな策を思いついていた。

それは、この村の特徴と、あの古龍が高熱を帯びているということから思いついた。別に難しいことではない。暖めたお皿に水をかければ割れることがある。それを試してみるだけの話だから。

まずこの村は海の上であり、木の板を張っただけの構造をしている。場所によっては強度が脆く、古龍の重さに耐えきれない。要するに、この村の構造そのものが即席の落とし穴として機能することになる。脆そうな場所はすでに見当をつけている。後は古龍を発見して、そこに誘い込めばいい。

そのために、古龍の姿を探しているのである。狭い村の中だ。それはすぐに叶った。

家にして三軒ほど先に、妙に明るい場所が見えた。家に隠れてはつきりとしなが、月明かりが揺らいで、そこに古龍がいることを教えてくれる。

皆、そろそろ逃げ始めているだろうか。

囿を始めるなら、悪くないタイミングだ。

「こっちだ！ 俺はこっちにいるぞ！」

家の影から躍り出て、あらん限りの大声を振りまいた。すると、古龍は面倒なことはせず、家の壁を突き破りながらいきなり突進してきた。慌てて近くの家の窓から中へと飛び込む。とてつもない勢いで古龍はアポロがいた場所を通りすぎ、その振動は家の壁を揺ら

す。

正直怖くないわけではない。しかし、これだけの重さがあれば、畏はきつとつまきいく。

古龍が家の壁をその爪で引き裂くと、今度は同じ窓から外へと飛び出さなければならなかった。自分では普段と同じ調子でいるつもりが、緊張しているのだろう。足がもつれ、危うく転びそうになる。ここは先程古龍が通りすぎた場所であり、木がだいぶい痛んでいたことも足を取られた要因だ。

古龍が通った道は板が踏み抜かれ、砕かれ、まるで轍のように出来上がっていた。こんな化け物が暴れ回れば、この村なんてひとたまりもない。

アポロを捜し求める古龍の手が家の壁を突き破り、頭をかすめた。頑丈なはずの兜があっさりと脱げ、深々と切り裂かれた姿を、丁寧にアポロの足下にさらした。

ハンターの装備はモンスターの攻撃が人体には及ばないよう強度や構造が工夫されている。それが、こうもたやすく破壊されてしまうものだろうか。

「嘘だろ……」

振り向くと、引き裂かれた壁から古龍の大きな眼がアポロのことを見ていた。

殺される。

恥も外聞もかなぐり捨てて、アポロは悲鳴を上げながら走り出した。ただ一つの理性として、目的とする場所目指して走ることができたことは幸いであった。また、図らずも悲鳴を上げること古龍の関心はアポロに集中し、囷としての役目を結果として十分に果たすこととなっていた。

「そつだ、そのまま、こつちに来い……」

時折振り向きながら、古龍が床を踏み砕きながら、家屋を壊しながら追ってくる様子を確認する。

本当は震えてしようがなく、舌を嚙んでしまいそうでも何かを口にしないではいられなかった。これまで一人で狩りを行うことが当たり前であったのに、一人でいることがここまで心細いとは知らなかった。

気を抜けばすぐに恐怖に負けてしまう。

古龍の恐ろしい顔がつかず、離れずアポロに迫ってくる。

目当てとする広場に出た時、もはや緊張の限界を迎えていた足が完全にもつれ、アポロの体は木の板の上を転げ回り広場はずれの柱にぶつかることようやく止まった。

広場の入り口には、すでに古龍の姿がある。アポロは柱に寄りかかるように座って、広場を眺めた。

ここは、モガ村で一番広い広場で、普段は子どもたちが遊び場を使うような場所である。その特徴は広場の大きさに比べて床下で支える柱が少なく、強度が一番弱いというところにある。ここにはあ

まり重たいものを置くな。村に来た時、そんな注意を受けたことが今になって役に立とうとしていた。

古龍の体を支えられるはずがない。翼を持つ古龍とて、いきなり床が抜ければ体を支えることはできないだろう。古龍はゆっくりと広場に足を踏み入れた。

後少し。後少し足を前に踏み出せば床が抜ける。

「どうした、俺はここだぞ……」

額を冷たい汗が流れる。大丈夫。きつとうまくいく。

「急げ。みんな急ぐんだ」

大きな音を立てることはできない。そのため、村長のせがれは声を潜めて指示を送らざるを得なかった。

村から島に入るための道である勾配のきつい坂道を村人たちが列をつくって歩いている。皆、不安げな様子で、村から大きな音アポロが戦っている証である。が聞こえてくる度、どうしても村の方を振り向かざるを得ない。

それでも、人々は徐々に村を離れ始めている。

村はずれのこの場所。下は木の板ではなく、平らな岩石でできている。この村では珍しく頑丈な地盤を持つここは、普段村の出入り口として島に続く橋がかけられている他、港の役割を果たす栈橋を



一望できることから村長のせがれの定位置でもあった。

多くの漁師の出発と旅立ちを見守ってきたこの場所で、村人たちを送り出す。悪くはない話であった。

三つに分けたグループの内、すでに二つがすでに出発を果たしている。そろそろ最後のグループを送り出してもいい頃ではないだろうか。

そう判断したせがれは、隣に立つ船長へと声をかける。

「船長も早く」

「船長は最後に船を降りるものぞよ」

船長は、腕を組み、自分の下顎をさするような独特の仕草 余裕を表しているのだろう をしたまま、そこから動く様子はない。順番が遅ればそれだけ危険が増すというのに、仕方がない男であった。せがれは仕方がなく最後のグループの出発を促した。

すると、人々が徐々に減っていく中、最後までここを離れようとしない娘の姿が嫌が応にも目につく。

「君もか」

「はい。アポロのことが心配で……」

ギルドから派遣された受付嬢はうつむいたまま、村の方角には背を向けていた。アポロのことが心配なあまり、見ていることができないのだろう。

「アポロは律儀な奴だ。きつと帰ってくる。君をおいて行ったりなんてするものか」

だが、新米ハンターが古龍と戦ってどうして無事でいられるのか、説明してあげることができないでいた。口先だけの励ましが、心配や不安を取り除いてくれることはない。

受付嬢の少女は、目に涙さえためていた。

「神様つて、いらっしやるんでしょうか？」

「もしいるとしたら、横っ面をひっぱたきたくなるかもな」

この少女は後悔している。アポロがドスジャギイの討伐に出かけることなどなければ、少なくともハンターたちが分断されることはなかった、アポロがたった一人で古龍に挑むこともなかったと考えているのだろう。

それは事実であるかもしれない。だが、このくらいの若者にはよくあることではないだろうか。異性に芽生えた恋心に戸惑い、つい裏腹な行動に出してしまうことくらい、誰もが一度は体験することだ。これのどこが罪になる。しかし、少女の心を責め苛む罰はあまりに大きい。もしこれでアポロが命を落とすようなことにでもなれば、この少女は一生後悔を背負って生きていくことになるのだろう。

もし神とやらがいるのだとしたら、それはよほど残忍か、悪趣味かのどちらかと思えない。少なくとも、人格的に誉められるような人物ではないだろう。

「儂は、神様を信じちよる」

思いもかけず声を出したのは、船長であった。信心とは無縁と考えていたが、その言葉に、からかいや冗談のようなものは感じられなかった。

「いくら造船技術が発展しても船旅に危険はつきものじゃけえの。神頼みくらいしたくなるちゅうもんぜよ。嵐に巻き込まれて、もうどうしようもないちゅう時に、それでも死に物狂いにやっていると神様はお目こぼしをしてくださる。急に天候が回復したり、浸水が止まったりの。あれはきつと、頑張りを見ていた神様が、ご褒美をくれちよるんぜよ」

普段、神のことなど考えもせず生きてきた。この世界で、人だけが特別な存在であるはずもない。神とて依怙贖肩はできないだろう。

そうであったとしても、人の努力に報いてくれる神などという存在を、せがれはなかなか認めることができない。

しかし、少女は違うらしい。胸の前で手を組んで、祈りを捧げようとする。

「神様お願いします。アポロを、アポロを助けてあげてください」

人が人としてできることすべてをしつくしてなお届かないことがあるのだとすれば、人はそこに神を求めざるを得ない。

せがれもまた、この少女の祈りが届くことを願わずにはいられなかった。

古龍が床を踏み抜き、砕かれた木材が海へと音を立てて落ちた。

「何でだよ……」

しかし、アポロの顔は晴れない。口を震わせ、足は床を蹴りその背中を柱に強く押しつける。

ナナ・テスカトリは間違いなく広場の床を踏み抜いた。だが、その体は今なおアポロの目の前にある。

ほんの一步踏み出せば足下の木材が崩壊し、古龍の高熱の体は海に落ちてしまはずであった。それなのに、古龍は一步踏み出すことなく、ただ床を叩いただけであった。まるで、その足場の強度を確かめるように。

「何でわかるんだよ……!？」

古龍とてモンスターだろう。落とし穴を事前に察知して回避するモンスターなんて、一体どれほど いないわけでないが、例外的な存在である いるというのだろうか。

このナナ・テスカトリは明らかに広間の構造を、アポロの仕掛けた罠を見破っていた。

床が脆いとわかった以上、古龍は広間に入ろうとしない。

「ちくしょう……」

どうにかして広間に引きずり込む方法はないだろうか。そんなものがあるならとっくに使っている。何かあるはずなどなかった。

せめて立ち上がろうとして、膝が笑っていることに気づいた。そして、それをこらえて立ち上がったところで、柱から背を離すほどの勇気はわいてこない。

古龍が口を開いた。以前ここから吐き出された炎を危うくかわしたことがあった。あの時助けてくれたアルルはここにはおらず、逃げ出すことができるほど足に力が入らない。

目を強く閉じて、賢明に全身を焼かれる痛みを想像しないことに努めるくらいしか、できることはなかった。しかし、いくら待っても炎はやってこない。恐る恐る目をあけると、古龍は笑っていた。口の端を釣り上げ、明らかに笑っている。

「遊んでるのか……？」

小さな獲物をそのまま一のみにしてしまっただけではもったいない。そんな残忍な想像が、アポロを震わせる。

そんなアポロの怯えを満足そうにみつめ、古龍は翼を広げた。火の粉にも見える小さな粒子が翼のどこからともなく振りまかれ、周囲に散らばっていく。これも、以前見たことがある。可燃性の粒子を散布し、歯と歯を打ちつけることで着火する。すると、粒子の密度が濃い部分が爆発を起こす。これも、島の反対側で見せられた攻撃である。

どこが爆発するのかわからない。範囲外にまで逃げきる時間もな

い。

足から力が抜けて、立っていることもできなくなった。

その時、ナナ・テスカトリが歯を打ち鳴らした。口元から導火線よろしく空中を突き進んでいく火花。それはやがて粒子の塊に到着したところで爆発を巻き起こす。

直撃ではなかった。しかし、アポロの体はたやすく投げ出され、床へと叩きつけられた。まだ爆発は続く。大気が鳴動し、爆発の度放たれる衝撃波がモガ村を揺るがす。それは床を砕き、アポロの体は海へと落ちていった。

爆音の中、それでもけたたましい古龍の咆哮を聞きながら、ついさきほどまで自分がいた場所が爆発に包まれる様を眺めながら、アポロの体は昏い海へとたたき落とされた。

517

古龍の力は絶大である。その力を今更並べるつもりにはなれない。

誰もが体で、その命でその力を体験し、そして誰もが考える。こんな化け物に勝てるはずがない。戦えるはずがないと。

それを人は絶望と呼び、他の生物は恐怖だとか畏れとして体に刻み込む。

そこに人と他の種の区別は一切存在しない。両者とも古龍にとっては獲物にすぎず、多少の知能の違いなど些細なことではしかない。

人も竜も等しく餌である。

人も竜も等しく絶望を与えられる。

絶望の権化にして死を喰らう怪物。それが古龍。

だからこそ、人は何度でも戦ってきた。これまで幾度文明を滅ぼされようとも。だからこそ、モンスターは立ち上がった。種としての垣根を超え、同じ大地に息づく生命として。

何度でも。命ある限り。

ラギアクルスはその体を海底に横たえていた。その体は傷つき、見事であった青い鱗はところどころが白く向けている。象徴たる雷を操る蓄電殻はその多くが根本からへし折られ、背中からはまだ出血が止まる気配がない。

海竜は、ラギアクルスは負けたのだ。

炎妃龍ナナ・テスカトリにただ一頭で挑み、その力及ぶことはなかった。こうして、傷ついた体を休ませながら、死にゆく時を待っていることしかできなかった。

仮に誰かがこの姿を見たなら、その多くがラギアクルスを労うことだろう。それほどこの体は傷つき、海底の静けさにとけ込んでいた。そして誰もが驚かされるはずだ。

ラギアクルスが突如起きあがり、今なお衰えぬ戦意を示して尻尾

を大きく振るうその姿に。

その体軀からはかすかな稲光が見て取れる。蓄電器官を失いながらも、微々たる量を徐々に発電し、ラギアクルスはその力を取り戻していた。

傷は癒えてなどいない。それでも何故このラギアクルスは戦うのか。

その答えは、たった一人の少年が知っていた。

海は深かった。村の広場から突き落とされ、爆発はアポロの体を強く海底へと押しやった。本来ならば、海底遺跡に打ちつけられ、そのまま命を落としていたことだろう。

しかし、アポロは生きていた。暗い海の中を漂い、全身に痛みを覚えながら、それでも生きていた。

偶然にも、アポロの落ちた場所だけ遺跡がなく、衝撃を受け止める十分な深さがあった。考えてみれば何のことはない。遺跡がないのは当たり前だ。この部分だけ遺跡がないからこそ、広場は十分な柱を作ることができず、床の強度が低くならざるを得なかった。

遺跡がないからこそ床の強度が脆く、アポロは水面へと落とされた。遺跡がないからこそ、爆発から逃れることができた。

水面に月が浮かび、その先には村がある。それでも、アポロには浮かび上がるほどの気力を持ってないでいる。



新米ハンターが古龍に挑むなど、どだい無理な話だったのだ。アポロが駄目であったとしても、ヒュプノスや他の強いハンターがきつと古龍を退けてくれる。きつとそうに決まっている。きつと、他の誰かがあの子も助けてくれる。

でも、もし誰も来てくれなかったとしたら。

古龍は他の村を襲うかもしれない。アポロが古龍を止めることができなかつたから。それに、他の村も襲われているのだとしたら、古龍が新たに飛来してくるかもしれない。アポロのような誰かが諦めてしまつたがために。

別に自分の戦いがほかの人々を支えているのだと思いたいわけない。

ただ、恐れとも焦りともつかない感情が、アポロの手足をばたつかせた。

溺れているようにしか見えない無様な泳ぎで、それでもアポロは水面に顔を出した。焼け焦げた臭いと、燃えた木材が海の上に乗って散らばっている。しかし、古龍の姿はない。

アポロをしとめたとみてほかの獲物を探しに行ったのだ。村の人たちが見つかるとは時間の問題であった。

もし古龍が村人を襲えば、あの子が犠牲になってしまう。そんなこと、絶対に嫌だ。

勝てるはずない。負けるに決まっている。行っても死に行くだけ

だ。どれも現実的で、どれも正しい。

それでも、アポロは必死に柱をよじ登った。鎧の隙間から水がこぼれ落ち、熱を帯びた木材に触れると白い湯気がたった。爆発の衝撃は全身に響き、体を床に引き上げてみると倦怠感が強く、体に重りを巻き付けたかのように重くのしかかってくる。

それでも行かなければならない。あの子を失うことなんてできない。そう思って、自ら囿をかって出た。

負ければすべてを奪われるというのなら、すべてを賭けて戦いしかない。

今一度、アポロは奮い立つ。ラギアクルスがそうであったように、一切の甘えも妥協も許されない戦いへと舞い戻る決意を新たに。命にとつて敗北とは死ぬことである。そうであるのなら、アポロもラギアクルスも、まだ負けてさえないのだから。

「古龍だ！」

月夜を斬り裂いて赤い炎が揺らめく。青い色をして古龍は、それでさえ夜空をあからさまに飛行していた。

すでに発見されている。誰かが遠慮なしに叫んだ声に、皆が足を止め、つい空を見上げてしまった。

複雑な気流の中を力強く飛び回る古龍の姿を見上げてしまったのである。誰もが逃げきれると考えることができなかつた。もう終わ

りだ。そんな人々の絶望を喜ぶように、古龍は勇んで急降下を開始する。

坂を登るために縦に長くなっていた人々はまとまることができずあつさりと孤立してしまう。

古龍はそのまま降下し、地面をかすめるように地表を撫でると、古龍の爪に絡めとられた一人が断末魔の悲鳴とともに崖の下へと放り出されてしまった。

人々は懸命に逃げようとするも、古龍の飛行速度に勝てるはずもない。このままではたやすく追いつかれてしまう。

人々の悲鳴飛び交う中、せがれは必死に声をあげた。

「早く山へ逃げ込め！」

言われるまでもなく、人々は必死に逃げている。それでも古龍はまた一人、命をかすめ取っていった。こんなに大騒ぎをしている中でも、不思議と悲鳴と慟哭だけは耳に届くものだ。

このままでは皆殺しにされてしまう。せがれはとっさに近くの家へと駆け込んだ。この村の中で唯一堅い岩盤を必要としている施設がすぐ脇にあるのだ。鍛冶場。無人となった露天式の作業場から金槌ハンターが武器にするような大型のものではなく、片手で十分に振り回せる程度のものだ。を拾い上げる。近くには都合よく水を入れていたと思われる金だらいも置かれていた。

「こつちだ、化け物！」

外に出るなり、たらいを目一杯叩く。何とも耳障りな音がする。しかし、これが幸い、古龍にとつても不愉快な音であるようだ。

明らかに注目を引かれた古龍がこちらを目指して降下する。坂に沿うように降下して、地面すれすれの位置で体を浮き上がらせた。そのことで勢いを殺し、古龍は村外れの橋の上に降り立った。岩の上に立つせがれたたちのところまで、着地の振動が伝わった。

モガ村から島へ渡るには岩にかけられた橋を渡るしか方法はない。その橋を占拠されては、村から逃げ出す手段はないことと同義である。

すでに多くの村民は橋を渡り終えているため、残されたのはわずか三人。せがれ、船長、そして少女である。

ゆっくりと歩く古龍の足が、橋を渡り、岩にその爪をかける。すでに目の前にまで古龍は迫っていた。

「君は村に戻れ」

少女に退避を促すも、せがれとて後ずさる。小さな金槌とたらいで何ができるはずもない。

「何とも初心を思い出す太刀ぜよ」

アポロから交換する形で受け取った太刀は、骨を削って刃の形を整えただけのものである。船長は普段と同様に平静を装っているが、頬の緊張が明らかに見て取れた。

誰も古龍と戦ったことなどない。

古龍がうなる。威嚇というよりは嘲笑っているように首を無意味に揺り動かす。こいつはまだ何も満足などしていない。この場にいる誰もがそのことを理解し、だから動いた。

せがれが飛びかかる。金槌とたらいは、見ようよつてはハンターの片手剣のようではあるが、人を殺すことがせいぜいのこの武器で古龍を傷つけられるはずもない。古龍の額を狙った一撃は金属同士を打ち合わせたような音を立てて弾かれる。古龍はその腕を軽くひねると、わずかにかすめただけでせがれの体は大きく飛ばされた。工房へと投げ飛ばされ、工具が落ちる音を立ててその姿が見えなくなる。

古龍が注意を引かれている内に、船長は反対側へと素早く体を移動させる。古龍が首を戻そうとする動きに合わせて、繰り出すは突き。眼球へと狙いを定めていた。どんな生物も目は弱いものである。

船長の一撃は古龍の左目へと正確に突き進み、そして、甲高い音を立てた。

ほんのわずかな違いであった。太刀の切っ先は確かに古龍の眼球に突き刺さっている。しかし、わずかに先端が刺さるだけであり、出血さえない。ハンターが使用する大型武器で相手の眼球を正確に打ち抜くことの難しさは、少しでも狙いがそれてしまうと眼窩を構成する骨に塞がれてしまうことにある。太刀は、眼球には触れながらも、ちょうど瞼のあたりで引っかかっていた。これから押し込もうにも、勢いはすでに死んでしまっている。

「残念、ぜよ……」

重傷ではないとは言え、目を傷つけられた古龍は猛る。叫び声をあげながら首を振り回し、その大きな顔が船長の体を突き飛ばす。決して小柄ではない船長の体が、あっさりと宙を舞い岩から突き落とされた。聞こえてくる木が砕け、水しぶきがあがる音から栈橋を突き破って海に落ちたことがわかる。

残されたのは強靱な古龍と、震えていることしかできない少女が一人。

古龍はすでに次の獲物に狙いを定めていた。少女の体は小さい。ナナ・テスカトリは完全に侮った様子で、もったいぶっていると思えるほど緩慢な足取りで少女へと近づいた。

「あ、あ……」

悲鳴を上げることさえできない。自分の体を守るように胸の前で手を組み、足は持ち上げることさえできずに地面をこするようによろめく。岩の端にまで来たことも気づけず、少女の体は後ろに引かれるように滑り落ちた。

岩のすぐ下にはせがれが村を見回す際に足場として利用している大きな箱が置かれていた。受け身もとれずに背中から落ちたにも関わらず、衝撃を緩和される形で箱に背中を打ち付け、そのまま村の床へと転がり落ちる。

木の板が跳ね、少女の体を受け止める。板の隙間から暗い海が波立つ様子が見えた。

そして、木が砕けてしまわんばかりの衝撃が、体が浮き上がるほどの力でもって通り抜けた。

倒れたまま見上げた先、古龍が床に着地していた。

村長の家の前でもあるこの場所は、普段は人々が集まる憩いの広場であった。ギルドの受付所やハンターであるアポロの家が並んでおり、少女にとっても見慣れた、生活の中心であった。

落ち着きさえ与えてくれたこの場所が、古龍によって斬り裂かれている。

古龍は、炎妃龍ナナ・テスカトリがいる場所は、広場の外れである。岩の上から一跳びに少女の頭上を飛び越え、広場の反対側にまで進んだのだ。ちょうど、受付所のカウンターの前。そこはアポロとよく話をしていた場所である。にその後ろ姿を見せていた。振り向こうとその太い足が動く度、床の木が割れて、木片が海へと落ちていく。

まるで、アポロとの思い出そのものが踏みにじられている思いさえした。

せめて体を起こそうと床についた手には、涙が滴となって落ちた。

怖くて酷くて悲しくて、涙が止まらなかった。見たこともない龍が目の前にはいる。アポロのことを奪ったばかりかその思い出の場所さえ壊されてしまう。そして、ここに古龍がいるということは、アポロはもう。

「アポロ……、アポロオ……」

あんなこと、ドスジャギイを倒してみせろだなんて言わなければよかった。

凍土からハンターが来ていても、日常が何か変わるとは考えてもみなかった。いつもと同じような毎日が続くと信じていた。思い込んでいた。

アポロがいつものように帰ってきてくれて、いつものようにむきになって話に応じてくれる。そんな毎日がこれからも続いてくれると、信じていた。

流れ落ちる涙さえ乾いてしまうほどの高熱が頬を撫でる。木を軋ませる足音が古龍が近づいてくることを告げる。次第に熱が増し、徐々に、しかし確実に暖かさが痛みへと変わっていく。

それが突如和らいで、金属の滑る音がした。

ふと見上げた時、瞳から涙がこぼれ落ちた。

熱から少女を守るように立ちふさがった一人の少年の姿がそこにはあった。

「アポロ」

金属製の鎧はところどころがはげ落ち、兜に守られていない髪はずぶぬれ。対峙する龍と比べるとあまりに小さく見える一振りの太刀を構えた少年が、少女を守るためにそこにはいた。



「何とか、間に合ったな……」

濡れた鎧が、急速に乾いてく。古龍の放つ熱が頬に弱い痛みを感じさせていた。しかし、ここを動くことはできない。ここを離れれば、ギルドの受付嬢がこの熱を浴びることになってしまう。それだけはできなかった。

古龍から目を離すことができなくて、受付嬢の様子を確認することができない。でも、直前に見た時、その顔は泣いていた。許せなくて、太刀を握る手に力がこもる。

船長から託された太刀、南蛮刀と呼ばれる太刀は緩やかな弧を描いて月明かりを返す。

「他のみんなは？」

「みんな逃げる事ができたよ。みんな、アポロのおかげ……」

何となく、逃げきれなかった人がいたのだろうということは察しがついた。情けない。困になるといつておきながら、全うすることができなかった。

それなら、せめてこの子だけでも助けたい。

「じゃあ、早く君も逃げろ。古龍は、今度こそ逃がしやしないから  
さ」

「嫌!」

突然のことで、つい振り向いてしまいそうになった。

「もう嫌なの！ 私のせいでアポロがどこか行って、危ない目に遭うなんて、もう嫌！」

ギルドの受付嬢は泣いていた。この少女の声を聞いて、悲しくなることがあるなんて思ったこともなかった。そんなことを考えて、自分のことを責め続けていたのかと思うと、胸が苦しくさえる。

ドスジャギイを狩りに行くと決めたのは、少女に焚きつけられたからではなくて、少女に認められたかったから。罠を買って出たのは、少女が戦えないからじゃなくて、少女のことを守りたかったから。

「俺さ、君のせいだなんて一度も考えたことなんてなかったよ。違うんだよ。ほら、俺、君のこと見返したいっていつも言ってただろ。それって、裏返しなんだと思う。君に認めてもらいたいとか、君のために働きたいって言う気持ちのさ。俺が戦ってるの、君のせいじゃなくて、君のためなんだ」

だからこの子を守りたい。

「俺、君のことが好きだった」

一度は負けて、どうしようもないと諦めた。それでも、今もまだ前に進むことができる力を与えてくれたことに感謝したい。

ここに立つことを認めてくれた村長や、仲間だと言ってくれたせがれに、太刀を託してくれた船長。

アポロはこの村が好きだった。この村に居心地の良さを感じていた。それが今、灼熱の古龍の古龍に蹂躪されている。

今古龍がいる場所はギルドのカウンターの前。そこで、アポロはカウンターを挟んで受付嬢といろいろな話をした。その場所が、無惨にも踏みつけられ、炎がくすぶっていた。

この場所は棧橋に通じるため比較的強固に作られている。古龍が自らの重さで落ちてくれるような幸運を期待することなんてできそうもない。

それなのに、引き裂かれた床は、カウンターを維持することではできなかつた。裂けた床の隙間に吸い込まれるように落ちて、大きな水しぶきを上げた。村中に響いてしまうくらいその音は大きいものであるように感じた。

「お前たちは、一体何の権利があつて俺たちを脅かすんだよ……」

古龍が声を張り上げる。纏う高熱が膨れ上がり、木が張り裂けた。それでも、アポロを揺り動かすことだけは、決してできない。

ナナ・テスカトリが感じていたもの。それは戸惑いとも呼ぶべきものであったのかもしれない。

小さな獲物を殺そうとして、すると殺した考えていた獲物が急に現れた。どちらもちっぽけで、ナナ・テスカトリを脅かすことなどできない。

勝てるはずなどない。抗えるはずもない。では、何故獲物は逃げだそうとしないのだろうか。力の違いはわかっているはずだ。逃げ回ることしかできず、反撃一つすることができなかつたではないか。

この獲物がナナ・テスカトリと対峙することは死を意味する。では何挑んでくる。何故逃げだそうとしない。

仲間を守るためか。だが、守れるはずなどない。両方とも殺されることはわかりきっている。この獲物のとるべき行動とは、仲間を守るうとすることではなく、逃げ出すこと。そもそも、ここに現れるべきではなかった。

守れると考えているのだろうか。力の違いを理解できるのだろうか。

困惑していた。獲物のとっている行動がわからない。

何故逃げない。何故挑む。

ナナ・テスカトリは喉を鳴らし、咆哮を張り上げた。床の木々さえ揺れ、高められた高熱はあたりに焦げくさい臭いを充満させる。これが古龍の力。ちっぽけな獲物には及ぶべきもない力なのだ。

それでも、獲物は逃げない。逃げようとしなない。

かつてのようにみっともなく逃げ回り、絶望を顔に張り付ければよい。

何故そうしない。何故戦おうとする。

古龍には、ナナ・テスカトリには理解することができなかった。

逃げることもなんてできるはずがなかった。

守りたい村があった。託してくれた人がいた。

手に持つ太刀は船長に与えられた。金属製の刃は洗練され、表面を染み出した水が光沢として覆っている。アポロがこれまで手にした武器の中で最も鋭い力を持つ。

手に宿る技はヒュプノスに与えられた。最も基礎的な技を、ただそれだけを体得するために幾度となく太刀を振るってきた。それは確かな技としてアポロの力となっている。

そして、アポロの後ろには、誰よりも守りたい少女がいる。退かず、逃げず。前へと踏み出す勇気を与えてくれる。

強く床を踏みつけた。軋む木の感触。前へと跳び出す勢い。

「俺はこの子が好きなんだ！ お前なんかに渡すもんか！」

狙いは左目。誰かがつけた傷跡に導かれるように突きを繰り出す。

何度も練習してきた。ただ突きだけを学んできた。鋭く素早く。刃に体重が乗り、引つ張られるではなくて押し出すように鋼鉄の輝きが灼熱の龍へと突き進む。

古龍はかわそつと顔をうごかす。首を曲げ、その軌道上から眼球

を逃がそうともがく。それでも、刃は止まらない。追ってくる。アポロは古龍の動きに反応し、刃をひたすら追いすがらせる。

刃は、そのまま古龍の左目へと吸い込まれていった。

アポロは叫ぶ。床を強く踏みつける。勢いが加速され、鎧の重さに加わり、刃の鋭さが研ぎすまされる。古龍の眼球は貫かれ、吹き出す血が返り血となってアポロの顔を汚す。

だが、攻撃もここまでであった。

左目を潰され、古龍は怒り狂う。太刀が突き刺さったままであることかまわず暴れ周り、木くずが舞った。振り回された腕がアポロの胸をとらえたかと思うと、まず感じたのは口に満ちる血の味とぼやける視界。鎧は歪み、アポロの体は床に叩きつけられると、そのまま少女の場所にまで跳ねていく。

苦痛のあまり体を動かすことができない。古龍が暴れ回っている音は聞こえていた。

「アポロ！」

ギルドの受付嬢が体を抱き起こしてくれた。そのおかげで首が動かせなくても古龍の様子を見ることができるようになる。

古龍は片目を潰された痛みにかむしゃらに暴れていた。ただ苦痛に暴れているだけで、村が破壊されていく。もはや少女と言葉を交わした場所は、その跡形すら残されてはいない。古龍の目から抜け落ちた太刀が床を転がる。それはアポロのすぐそばにまで転がってくるも、もう拾い上げることができないほどの力も残されていない。

このまま古龍が床を踏み抜いてくれないだろうか。そんな淡い期待は、唐突に終わりを迎える。

古龍は片目を強く閉じ、痛みにくらえて床を踏みしめた。後一息で壊れそうな床は、無慈悲にも古龍の体を支え続ける。

健在である右目を怒りで血走らせて、古龍はうなっていた。前足を大きく広げ、今にも飛びかかってきそうな前傾姿勢でアポロのことを睨んでいた。弄ぶ獲物から自分に傷を付けた敵へとその認識を改め、その目に映るのは完全な憎悪である。

「逃げる……、逃げてくれ……」

少女は泣きながら動こうとしない。それどころか、アポロのことを強く抱きしめてくる。鼓動が聞こえてくるほど顔が胸に近づいたら、少女が震えていることがわかる。

せめてこの少女だけは。その思い出で必死に手を伸ばそうとあがいた。太刀はすぐそこに転がっている。あと少しで床が抜け、古龍を海へと落とすことができる。

あとほんの少しで。

どうしても手に力が入らない。こんなところで倒れる訳にはいかないのに。守りたい人がいるのに。

「アポロはたくさん頑張りました……。だから神様……。お願いし

ます。だから……」

少女の胸の中で傷つきながら、それでもまだ戦おうとしているのだから。

古龍は二人に飛びかかろうと床を強く踏む。

「アポロを助けて！」

奇跡は決して起こらない。

アポロと少女に向かって飛びかかろうとしていた古龍の首に“海”が食らいついた。突如海が吹き出し、それはモガ村の床板を貫いて古龍の首へと飛びついた。

水が剥がれ落ちる。すると、そこには海竜ラギアクルスがその牙をナナ・テスカトルに突き刺している姿があった。

突然の奇襲に狼狽える古龍。首にかみつかれ、その重さを支えきれず、顎が床へと擦りつけられる。前足で踏ん張ろうとするも、床が悲鳴を上げて古龍を海中へと引きずり込もうと張り裂ける。

ふりほどくことはできない。ラギアクルスもまた死にものぐるいで口を堅く閉じようとしていた。

ラギアクルスは以前の戦闘で傷だらけである。この死にぞこないが。ナナ・テスカトリはふりほどこうと前足を叩きつけるとも、海竜は決して離れようとしなない。それどころか、海上へと体を躍り上



がらせた。強靱でしなやかな体が床を砕き、そのまま古龍へと巻き付く。

その重さに耐えきれず、ナナ・テスカトリが片腕を折る。顔面から床に激突し、床が目に見えて陥没する。

このままでは海中に落とされてしまう。古龍は必死であった。翼を広げ、飛び立とうと力強くはためかせ始めた。

そして、ラギアクルスもまた必死であった。アポロがそうであったように。

大気が弾けた。破裂するような音が響く。海竜ラギアクルスの体が青白く発光していた。海竜が海竜である所以。食物連鎖の頂点を占める理由。海竜はその最後の切り札を切った。

傷つき、死に向かう体を、それでも必死に休ませた。何よりも貴重な時間をただこのためだけに賭けてきた。海さえも沸き立たせるその一撃を、人は大放電と呼ぶ。

蓄電殻を失いながらも決死の覚悟でため込んだ電流を一度に放出する。

絡み合う二頭の獣を中心として光が爆発する。強烈な閃光が古龍の体を伝い床へと稲光を伴って落ちる。古龍の叫び声を飲み込んで雷鳴は轟き、雷がただただ放出される。

これまで古龍の体を支え続けた床がついに抜け落ちた。二頭の獣は絡み合った姿勢のまま海中にしぶきをあげて落下する。

しぶきがやんでもまだ海面は平静を取り戻すことはない。茹だつたようにあぶくが吹き出し、古龍の体に気化され続けた海水が水蒸気爆発を引き起こす。

絶えず高熱を維持している炎妃龍は急激な冷却に耐えることができない。そして、海竜の傷ついた体は爆発に耐えることはできないことだろう。

海竜の捨て身の攻撃は古龍を倒し、少年と少女を救ったのである。

奇跡は起きない。

すべては決まっていたことであつた。

仮にアポロが古龍の前に立ちふさがらなかつたとしたら、古龍は村をたやすく滅ぼし、ラギアクルスが必要な電力を蓄積するほどの時間はなかつた。

アポロが少女を見捨てて逃げていたとしたら、古龍はたやすく二人を殺し、この場所を離れることができただろう。

少女を守りたいという少年のひたむきな思いがなければ、果たして古龍はやすやすと首に食いつかれるほどの隙を見せることがあつただろうか。

いくつもの偶然が、しかし少年の諦めない心によって繋ぎ合わされていた。

アポロが戦っていたからこそラギアクルスは力を蓄えることができた。

アポロが諦めなかったからこそ、ラギアクルスに数少ない好機を残すことができた。

アポロが少女のために戦ったからこそ、ラギアクルスは最期の戦いを始めることができた。

すべてが偶然のようで、それでも必然はすべてを繋ぎ合わせている。

奇跡は起きない。起こすことはできて。

これは、少年の心が起こした、偶然でも必然である奇跡の勝利であった。

## 第二六話「未来の二つの顔」Crimson River」

古龍が群となつて突き進む。慈悲なく無慈悲に。心なく殺戮を。

かつてこの大地が地獄であつたその時代栄華を極めた。今の時代を生きるあらゆる生命とその性質をことにする。四肢に加え、その背には翼を持つ。それは人の背中に第五、第六の手が生えているにも等しい異形の姿である。

命と古龍はあまりにその性質を異にする。

この大地が始まつたばかりの頃、大地は今よりも熱かつた。世界のすべてを流し去つてしまふほどの雨が降り続き、大地は冷やされ海が誕生した。不安定な大気は雷を轟かせ、落雷は海をかき回す。ありとあらゆる成分が溶けだした海の中で、やがて一塊の有機物が形成される。

生命の誕生である。

あまりに原始的な生命は、天から降り注ぐ光を栄養に変える術を持ち老廃物として猛毒を吐き出した。

世界が毒で満たされていく。生命は二つの道を選び出さなければならなかつた。それは、喰うか喰われるか。

猛毒を自らに取り込むことを選んだ生命がいた。猛毒から逃れることを選んだ生命がいた。猛毒は極めて反応性が激しい物質であり、それを取り込んだ生命は機敏な動き回る力を得ることとなつた。同時に始まつたことは、一方的な搾取である。

猛毒を得た生命は自ら栄養を作り出すことをやめた。ではどうするのか。奪ってしまえばいい。猛毒から逃げるかつての仲間を、猛毒を得た生命は捕食し始めた。自ら作り出すことよりも、奪うことの方がどれほど効率的であったのか気づいてしまった。

それは食料に限られなかった。捕食しても消化せず、その体内で生かし続けることを選ぶ生命が現れ始める。器官を自ら作り出すことをよしとせず、それさえ他者から奪うことを選択したのである。その生命の融合とも合体とも言うことができる現象は、単細胞の塊でしかなかった生命の分業化、細分化を急速に促し、生命を大きく複雑に変えていく。

多細胞生命の誕生である。

爆発と表現できるほど多細胞生物はその種類を増やし、海は生命で満ちあふれることとなる。しかし変わることのなかったものもある。

それは、喰う、喰われるという関係。弱者は喰われ、不適格者はその種そのものが絶滅させられる。

太古の海は生命の壮大な実験場であった。あるもの堅い殻で身を守ろうとした。ある者は強固な顎ですべてを噛み砕こうとした。理解に苦しむ機構を選択した種もいれば、体内に細い破片を持つことで動き易さを高めようとした者もいる。

それぞれが未来を賭けて全力で生き抜こうとした。そこに機能したのは弱肉強食の理論ではなかった。適者生存。よりこの大地に受け入れられた者こそが未来を担うべく残された。

奇抜な性質を持つものの枝は潰え、かつて絶対強者の名を欲しいままにした食物連鎖の王者でさえ樹形図に伸ばした枝は手折られてしまった。その枝を伸ばしたのは、あまりに意外な種であった。鋭い牙はなかった。堅い鎧も持たない。ただ、体の内部に支えを持っていただけの種である。

その一見なんでもない性質は、やがてこの大地を埋め尽くすこととなる。脊椎動物の始源の姿であった。

火竜も海竜も轟竜も、そして人も皆同じである。背骨を持ち、四肢によって体を支えている。それは同じ祖先を持つ親戚のような間柄であることを意味している。

生命の爆発を生き延びた種の枝はさらに伸び、そして枝分かれを繰り返していく。その枝の先に、リオレウスもラギアクルスもティガレックスも人も芽吹いている。しかし、命は忘れていた。かつて枝の主流から分かれた別の枝が伸び、その先にまだ枝を生やしていたのだと。

脊椎動物に至る前、枝から離れた種があった。それは独自に脊椎を得たが、しかしその進化の流れは必ずしも命と同じには進みはしなかった。体を支える四肢とは別に翼を作り出した。

それらは古龍と呼ばれた。

かつて命とはあまりに遠い時代に道を違えた種がいたのである。それらは命と似た姿をしておきながら、しかし翼を持つ。異形である。かつて同じ祖先から生まれたことを忘れてしまうほど遠い時代に、未来は二つの顔を選び出していた。

かつて太古の海で猛毒を持つ者と持たぬ者がそうであったように。セクメーア砂漠では同じ起源から分かつ者が争いを繰り広げる。

未来は絶えず二つの顔を持つ。

砂漠に日が落ちた。古龍たちは不思議と夜間には攻撃してこない。それは習性なのか、それとも王龍テラドミヌスとの進行に合わせた結果が偶然昼夜と一致しているだけなのかもしれない。

どちらにしろ、夜という時間は何者にも代え難い恵みであった。

フィロソフィアは岩山の上に立ち、砂漠の夜を眺めていた。高すぎず、低すぎず、適度な高さの岩は山となって連なっている。インスマス火山帯の山々との狭間にあるこの地区は自然と岩が多い。

古龍が入り込めないような細い岩の裂け目を利用して人はここを最後の砦とすることを決めていた。

「そろそろ限界ね。人も、火竜たちも……」

岩山から離れた砂地の上には火竜たちが寝そべり眠っているらしく身動き一つない。こうして遠目に見ている分には、獰猛なモンスタの寝相も可愛らしいものだ。火竜たちはまるで人を協力者と理解しているかのように人を襲うことはなかった。何とも奇妙な協力関係が維持されていた。

夜風が頬を撫でる。今は静寂に包まれている砂漠も、明日の夜明

けを迎えれば再び戦火に覆われてしまう。

フィロソフィアが振り向くと、岩山を亀裂のように走る隙間にちらほらと明かりが見えていた。それぞれ明かりのそばに砂漠を必死に逃げてきた避難民の人々が疲れきった様子で座っていることだろう。

火竜は確実に数を減らしている。人は疲弊しきっている。明日、煌黒龍アルバトリオン率いる古龍の群に攻め込まればどうなるか耐えきれないとは思わない。しかし、消耗戦を強いられることになる。

川面に打ち捨てられた石と同じだ。削り取られ、やがて押し流されてしまう。

「覚悟の決め時かしらね」

フィロソフィアは岩山を慎重に下る。決して急でもない坂道を降りて、地面に足をつけるとそこは砂地であった。

岩山の一角がえぐられたように抜けており、流れ込んだ砂が地面を覆い尽くしている。広さは動き回るには適度で、まるで闘技場のように岩壁に包まれた一角があった。ここには避難民よりもハンターたちの姿の方が多く見られた。

武器の手入れをする者。体中を包帯まみれにして寝たまま動こうとしない者。それこれが焚き火を取り囲んで明日に備えていた。

ここを決戦の舞台としよう。



アルバトリオンを誘い込めば、周りの壁が邪魔をして他の古龍たちは入ってくる事ができない。広場の奥には岩の間の小径が開けており、そこは塞ぐ必要があった。バリケードが必要なのだ。壁をこしらえておけば上空からでは侵入しにくい岩の小径に古龍が入り込む可能性が減るとともにガンナーの隠れ場所としても利用できる。

広場　　ハンターたちの間を縫うように　　を歩きながら、しかしフィロソフィアはすぐさま問題に直面したことに気がついた。ハンターたちは明日の戦いに備え少しでも体を休めなくてはならない。労働力として期待することはできなかった。

そうなると、頼れる人は限られる。

そのまま広場を抜けて、小径の一つに入り込む。ちょうど街の路地のような幅に、避難民が座り込んでいた。すぐそばをフィロソフィアが通っても顔を上げようとはしない。それほど疲れきり服に焦げ跡がない人など一人もいなかった。

心苦しさを無理にでも飲み込んで、フィロソフィアは声を出す。

「みなさん聞いてください！　ここにバリケードを張ります。明日の戦いのためにどうしても必要なものです。動ける人は協力してくださいませんか？」

反応は鈍い。皆疲れきっている。ちらほらと顔を上げる人の姿もあるが、力の抜けきった顔をして立ち上がる気力さえ持たない様子である。無理強いはできない。彼らもまた続く戦いに疲れきっているのだから。何か代替案があるわけではないが、食い下がる気にはなれなかった。

広場の方へ戻ろうとした時、ふと視界の隅で誰かが立ち上がったような気がした。月明かりを頼りとした不鮮明な視界ながら、声に光は必要ない。

「何をすればいいの？」

まだ若い女性の声であった。決して精悍な足取りではない歩み。彼女もまた疲れていることに変わりないのだ。で近づいてくれたことでようやく顔が見えるようになる。

砂漠の住民らしい日焼けした顔に火傷の跡が見て取れた。服は砂にまみれどれほどの長い距離を歩いてきたのか想像に難くない。間違はなく、避難民の少女である。疲れきった動きをして、それなのに意志を感じさせる瞳が印象的であった。

たとえ一人でも協力を申し出てくれる人が出てきてくれたことはありがたい。ただ、少女一人が助けてくれたところでどれほどの助けになることだろう。気持ちだけ受け取っておく。そんな丁寧な断りを用意したところで、また他の誰かが立ち上がった。

今度は少年のようだ。そう確認するまもなく、別の場所では男性が、また他の場所からも人影が立ち上がる。それは次第に数を増し、十分な人数の人が名乗りを上げてくれた。

作業はすぐに始められた。

フィロソフィアは有志の避難民とともに広場に戻るなり、いくつかある小径の前にバリケードを築き始めた。城塞に見られるような立派なものを想像してはならない。そこらに落ちていた廃品を組み立てただけでゴミ山とほとんど変わらない。

「何でもいいわ。飛行船の残骸でも壊れた武器でもいいの。何でも  
いいから手当たり次第積み上げて」

返事はない。黙々と手を動かし、瓦礫の山が壁として築き上げら  
れていく。この調子であれば夜明け前にはバリケードを作り上げる  
ことができることだろう。

一人の少女が立ち上がってくれたおかげである。

フィロソフィア自身、拾った木片を瓦礫の隙間に押し込みながら、  
たまたま隣にいた少女へと声をかけた。

「ありがとう。あなたが動いてくれたおかげで、みんなもう少し頑  
張ってみようと思ってくれたみたい」

「エリス。エリスって言います……。その……」

エリスと名乗った少女は 豪快にも身長ほどもある木材をバリ  
ケードへと立てかけようとしている最中である どこか照れなが  
ら答えてくれた。

「私はフィロソフィア。ありがとう、エリスさん」

気のせいか、エリスはフィロソフィアの赤い髪を何やら気にして  
いるらしい。

「すみません、フィロソフィアさん。もしかして、お姉さんか妹さ  
ん、いませんか？」

「妹が二人いるけど、どうして？」

「その……、古龍に追われてた時、私のこと、励ましてくれた人がいたんです。そのハンターさんもフィロソフィアさんと同じくらい赤い髪をしてたから」

「そのハンターって、ちょっとボーイッシュな言葉遣いしてた？それともちよっとぶっきらぼうな方？」

「ぶっきらぼうな方です」

これは恐らく間違いない。上の妹の顔を思い浮かべながら、フィロソフィアは苦笑した。一体どんな励まし方をしたのか、大体想像が付きたからだ。励ましているのか脅しているのかわからない説得をした有様がありありと浮かんでくる。

「フィリアね。ごめんなさい。あの子、昔からがさつで、ちょっと人を怖がらせるような言い方しかできない子だから」

「そ、そんなことはありません！ 私、あの時もう駄目だって、思っていました……。古龍なんて聞いたこともない化け物が突然現れて、助けなんて来ないって思いこんでた時、フィリアさんは真っ先に駆けつけてくれました」

ドンドルマの街で進まぬ会議に業を煮やしたフィリアは猟団仲間を引き連れてセクメーア砂漠へと乗り込んだ。その時砂漠の民は古龍の襲撃にさらされており、結果としてフィリアの行動は多くの民の命を救った。そればかりか、生きることへの希望さえ与えていたらしい。

「私も負けてられないわね」

災害において怖いのは精神的に負けてしまうことである。今の今まで避難民が古龍の恐怖にもめげずに生き抜いてくれた一因に妹の努力があつたことを思うと、誇らしくも面はゆい。

「フィロソフィアさん……？ あんな化け物が相手でも、フィリアさんは、ハンターみんなは負けませんよね？」

尋ねるエリスの声に疑問や恐怖は含まれてはいなかった。答えなですでに持っているのだろう。フィロソフィアは決まりきった言葉を返すだけでよかった。

「ええ、もちろんよ」

砂漠の夜は冷える。熱を保つものがないため、昼間とは打って変わって急速な冷気が降りるためだ。岩の上に直に座しているとあつては焚き火を欠かすことができない。

フィリアは赤いドレス ヒメロスF を着たままで暖にありついていた。昼間の戦いが嘘のような静けさの中、焚き火のそばに座りながら、コーヒーを軽く口に流し込む。

多くのハンターたち、避難民が休み、明日の決戦の舞台にしようとしたのが岩山である。フィリアはまず首を右に曲げた。すると砂地で覆われた広場が闇の中に沈んでいる様子が見える。ここは高台になっており、見渡すことに苦労しない。

首を左に曲げると、フィリア率いる聖堂騎士団の面々が死んだように整然と並んで寝ていた。本当に死体安置所のようにで気味が悪い。そして、首を正面に戻す。焚き火挟んだ場所に副団長殿が優しげな笑みを浮かべて座っていた。今起きているのはこの二人だけである。

「エールとは、何だかんだ長いよな」

「ええ。知り合ってからもう五年になります」

「五年か。私が特務騎士なんて偉そうなやつじゃなくて、獵団作るなんて考えもしない時の話だったな」

「私がまだ希少鉱物目当てに旅を続けていた時のことでした」

この鉱物マニアは、ハンターとして身につけている装備も鉱物をふんだんに用いたものである。そして、獲物のハンマーは尾晶蠍の体液が固まった結晶を用いたものである。彼なりの遊び心であるのだそうだ。

エールの言葉通り、二人の出会いには鉱物目当ての旅人と迎え入れた村人という関係から始まった。自然と、その時の光景とともに故郷の村のことが思い出される。

「私は故郷の村が嫌いだった。火山がなまじつか近いもんだから火山灰がすぐに積もって作物なんてまるで育たないような場所だった。花が欲しくても行商人に頼み込まないとまともに手に入らないような場所だったからな」

「団長が花ですか」

「何が言いたい？」

明らかにからかうような口振りに、フィリアはこめかみに力を込めた。

「言いたいことは特に何も。すべて私の胸に秘めておきます」

この飄々とした副団長は悪びれることがない。笑いながら自分のカップをすすっている。中身は紅茶である。何か気取っているような気がしてならない。エールとは、出会った時からこんなつきあいであった。

いちいち取り合う方がおかしなことなのかもしれない。

「だから不思議だったよ。こんなところに好き好んで来る奴がいるなんてことが」

「私には大変魅力的な場所でしたよ。流れ出る溶岩には地中奥深くにしか存在しない良質な鉱物が含まれています」

「そうだろうな。だから、私の村も存在することができたんだ。この世界は人の支え合いでできてる。悪く言えば利用しあっているとも言えるが、それでも、人がそれぞれに自分の生活を守ろうとしていることが結果として他の人を支えている。あんな村だったが、そんなところだけは嫌いじゃなかった」

故郷のこんなところはアマランサスとスノードロップの故郷であるセイレムの里とよく似ている。どちらも作物を育てることができず、自給自足の生活を営むことができない。そのため、極地でしか得られない様々な物品と交換して他の里に生活を支えてもらっている

ることなど特に。

そして、どちらもともに極地であるということが上げられる。その意味することは明白だ。

「今から二年前の話だ。火山が大きな噴火をしてな」

「聞いています。大小五つの里が避難しなければならぬほどだったとか。そして、里が一つ壊滅した」

そう、そこまでは今までに話したことがあった。問題はここからだ。

「エール。ここから先は、まあ今更極秘も何もないな。実は、里が壊滅したのは噴火が原因じゃないんだ」

「古龍ですか？」

「そうだ。炎王龍テオ・テスカトル。今ここで暴れ回ってる奴だ。そいつが火山の噴火に乗じて人里を襲ったんだ」

火山と凍土のもう一つの共通点。それは、人の世界の外れに位置することから、古龍と生息域が近いことが挙げられる。

古龍は、里のすぐそばに潜んでいた。

「私と姉さんはその時ちようどミスカトニック王国に依頼されて輸送隊の警護をしながら避難していた」

思い出すのは山が火を噴き、火の粉が降り落ちてくる光景。そし



て、肌を苛む熱。

「はい。そのことは聞いています。ただ、あの火山噴火と古龍の襲撃が同じ時期だったとは初耳です」

「時期なんて大した問題じゃないし、箝口令が敷かれてたからな」

古龍を撃退した後、フィリアは姉と妹の三人そろってミスカトニツク王国特務騎士に、七人の魔女に加わることが許された。ただし、その対価として口を噤むことが義務づけられ、その窮屈さからフィリアは特務騎士をやめることになった。

それからの二年の間、古龍のことが頭から離れたことはなかった。ドンドルマの街で結成した獵団を特務騎士たちの拠点として利用することを許したのも、古龍の恐ろしさを知っていたからだ。

吼える声が耳に残る。鋭い爪に引き裂かれることは夢にまで見た。火山に覚えていた恐怖や畏怖がそのまま襲いかかってきたかのよう。な錯覚さえあった。

「あいつらは異常だ。罨を見破るくらい賢いのにあまりに残忍で残酷だ。いや、賢いから残忍にも残酷にもなれるのか？ もしもここで私たちが負ければ王龍はドンドルマの街に到達する。そうすれば街を中心に古龍どもが大陸中を闊歩するようになる。レムリア大陸は終わるな。古龍たちが殺戮に飽いて巣穴に逃げ込む頃には生態系はずたずたにされて、命の空白帯が生まれることになる。再生には一〇〇年くらい優にかかるはずだ」

そのため、この大陸では文明が断続的である。現在住み着いている人々は大陸東の海を越えて移住してきた人々の子孫であり、古代

ハイパーポリア文明人と民族的、文化的な繋がりを持たない。それもそのはずである。一〇〇年もの間セクメーア砂漠を中心として大陸西側は不毛の地であった。

「我々がおとぎ話でさえ王龍のことを知らなかったわけですね」

エールの言葉は正しい。結果として、王龍テラドミヌスの恐ろしさは現在に伝えられていない。

五〇〇年前はそれでも王龍の侵攻はセクメーア砂漠の真ん中で終わった。今回は被害が大陸全土に及ぶ。それがどのような結末を迎えることになるのか、想像したくもない。

「明日が勝負だな。私たちが勝つか古龍が勝つか。賭けないか？ 私はこちらが勝つに有り金賭ける」

懐から硬貨の入った袋を取り出すなり固い岩の地面に投げ落とす。軽い音がして、大して入っていないことがよくわかる。

「それは卑怯ですよ。負けたらどうせ死んでます。それでは、お金なんて持つていても仕方がない」

どう転んでもフィリアは損をしないわけだ。エールは手を上げておどけた様子で口の端を持ち上げた。

「生憎、勝てない賭けには乗らない主義だ」

明日の戦いとて、煌黒龍を開きにして終えるつもりなのだから。

夜の帳が降りると、鳥もその翼を休めるように飛行船もその多くが停泊していた。高度を下げて砂漠に碇を降ろす。すると、船底が手を伸ばせば届くほどの高さで浮く状態を維持する。壁を倒して足場とすれば、歩いて飛行船に入ることができる。

ソフィアはそうしてグツフルファクシ級飛行船に足を踏み入れた。ブレシスFと呼称される黒いドレス様の鎧は船の最下部に設けられた倉庫の薄暗さに溶け込んでいた。床に散らばる物資を踏みつけないように気をつけながら歩くと、隙間から光を漏らしている扉をあつさりで見つけることができた。

まだ誰か起きているのだろうか。多くの人はすでに寝ているはずである。扉をゆっくりと、音を立てないように開く。

ランプの滲んだ光に照らされた小さな部屋は、普段談話室として利用されている。わずかなテーブルに備え付けられた椅子。平時には必ず誰かしらの姿を見ることができのだが、今はたった一人がテーブルを守っているだけであった。

予想していた人物と違っていると、ソフィアは笑いながら口を尖らせた。

「ジェイナスが待っていてくれると思ってたのになあ」

「もう寝てますにゃ。明日の戦いに備えたいそうですにゃ」

「ひどいな。僕を放っておくなんて」

ただ一人寝ることなくソフィアのことを待っていてくれたのはかわいらしいアイルーが一人。面と向かってそう誉めて上げられない

言うところの妻子持ちの大黒柱は気分を悪くする　ことが残念でならない。ジェイナスが起きていてくれなかったことは、メタトロン機関士のかわいらしさに免じて許して上げることによろ。

ソフィアが真向かいに座ろうと椅子を引いている間にメタトロンは話し始めていた。

「ジェイナス殿は気を張りすぎてますにや。この頃の戦いぶりを見ていると、どこか危うささえ感じられますにや」

「ジェイナスが以前婚約者を亡くしたことは？」

メタトロンが頷くこととソフィアが腰を落とすタイミングは偶然一致した。ジェイナスが話したのだろう。この生真面目な機関士は何かと話を聞いてもらいやすいことはソフィアも理解できる。

ドリームランド峡谷で起きた悲劇を知っているのなら話は早い。あまり面白い話でもないが、何にせよこのアイルーは話がしやすいのだ。フィリアは思ったよりも抵抗なしに話し出すことができた。

「その原因は古龍に追われたモンスターが村に逃げ込んだせいだったんだ。ジェイナスはどうしたらいいのかわからなくなってしまったんだろうね。ハンターとして優れた力を持ちながら好きな人一人守ることができなかったから。それでもジェイナスは復讐心をよりよい方向に生かそうとしていた。婚約者、ヘスティアさんと言うんだけどね、ヘスティアさんみたいな人をこれ以上作らないことが自分の復讐だつて言ってたよ」

ヘスティア殺害の直接の原因を作った古龍を殺すことではなくて、同じ様な悲劇の芽を潰すことで復讐するという代償行為。だからジ

エイナスはミスカトニツク王国に仕えることを、特務騎士になることを決めてくれた。古龍と戦うことを誓ってくれた。

溪谷でかつて見たジェイナスの瞳は輝いていた。かつて恋人を奪った古龍たちが今なお人々を殺戮している風景を見せられ続けたとしたら、その光景はジェイナスの瞳にどのように写ったことだろう。

「正直、少し不安だね。人を守るために古龍と戦うことと、古龍と戦った結果人が守られるじゃ意味が違う」

テーブルに肘をついて両手を口元に当てる。眉間には自然としわが寄った。

ジェイナスは人としてとても優れている。人のことを思いやる心を知っている。義憤に奮い立つこともできる人である。その分思い込むとことん思いこんでしまうタイプでもある。それでもあまり深刻になれないのは、きつと心のどこかでジェイナスのことを信じている証左だろう。

ソフィアはつい笑ってしまった。手が口を隠す形にはなっていない。メタトロンにはばればれであろう。

「じ、じゃあ、僕も寝ようかな。明日は忙しくなりそうだしね！」

照れ隠しに立ち上がろうとするとメタトロンは思ったよりも強い調子でそれを遮った。

「少し、お付き合い願えませんかにゃ？ まだ一つお聞きしたいことがありますにゃ」

別に真剣な話の最中に笑ってしまったことを起こっているわけではないらしい。座りなおして、ついいたずら心がわいてきた。

「その前に言うことはないかい？」

猫特有の丸い目を瞬かせて、メタトロンはわかりやすくわからないという表情を作る。

「ほら、お約束の台詞があるじゃないか。実は、妻とはうまくいってなくてね、てさ」

「生憎、妻とはまだまだラブラブですよ」

既婚者が不倫相手を探す時の常套句であるのだそうだ。もっとも、身持ちの固い機関士は胸を張って鼻息が荒い。

「話とは他でもありませんにや。古龍のことですよ。あの大きな古龍……」

メタトロンは恐らく名前を知らない。漆黒の鱗にいびつな角。体のすべてが他のモンスターのすべてからずれた偉業の姿をした古龍が砂漠の南には姿を現した。

「アルバトリオンだね。元々は僕たちの故郷で語られる伝説がその由来なんだ。話したことはなかったと思うけど、僕たちの村は自然環境が厳しいせいか迷信深い人が多くてね。実際、飛行船事故が多発する難所もあるくらいだしね。生存者の証言がいつも違って、みんな結局あそこにはあらゆる災害があるって言い出したんだ」

実際、火山活動が活発な高山では様々な災害が重なることは珍し

くはない。溶岩が吹き出ていることは当然。噴火の際には火山雷が確認されることもある。そして、高所ともなれば気温も下がる。火と雷と氷。そのどれも火山では珍しいことではない。それでも誰もが理解していた。火山には、ルルイエ山脈へと通じる山脈には何かがある。

「観測隊の方でも何らかの古龍がいることくらいは掴んでたよ。だから僕たちの地方の伝説の名前をそのまま命名に使ったんだ」

「飛行船落しですかにや。まったく、機関士の天敵ですよ」

「大丈夫だよ。ここには剛種武器を持った特務騎士が四人もそろってるんだよ。古龍になんか負けたりなんてしないよ」

フィロソフィアの持つライトボウガンは蛮竜グレンベブルから作り出された怒髪髻級「海猫」。古龍の頑丈な素材で強化されており、通常のボウガンならば銃身が焼け付いて使用できなくなるほどの速射を可能とする。

フィリアの振るう双剣は吞竜パリアプリアの貯水性に優れた素材が用いられたドドンシザー。狩猟に用いる刃にしては規格外の鋭さを誇る一対の剣は古龍の頑強な体と手たやすく斬り裂く。

ジェイナスは冥雷竜ドラギュロスの加護を受けた大剣、真冥雷大剣「金鷲」が得物である。セントポリア王女の使用する巨龍笛「須弥山」を除けば、現在唯一龍毒の再現に成功している龍殺しの剣である。

そしてフィリアもまた大剣を使用する。舞雷竜ベルキュロスから雷の力を借り受けた真舞雷大剣「金鷲」。もはや落雷と呼ぶべきほ

どの電圧を発生できる。

すべてで一三の剛種武器の内四つが同時に使用されることなんてこれまでに一度もなかったことである。どんな敵にも負ける気がしない。それがどこかしら強がりを含んだものであることを白状せざるを得ない。

「だから大丈夫だよ。明日にはアルバトリオンの角をここに飾ってあげるよ」

談話室の壁に、ちょうどよく開いた場所がある。ここに飾るイメージを思い浮かべながら手を広げてみた。ちよっと明るさを無理に演出し過ぎただろうか。

「妻子ある者として、ドンドルマの街にだけは行かせたくありませんにゃ」

幸い、メタトロンはそれに乗ってくれた。猫特有のぴんと張った髭を手で弄んだ。その仕草は本当にかわいらしい。子どもともなればどれほど心くすぐることだろう。この戦いが終わったら家族を紹介してもらおうか。

「明日はがんばろう、お父さん」



## 第二七話「殺戮こそが本能」Ultimate Evolution「

砂漠を朝日が染め上げる。

代わり映えのしない砂の海に岸边のように打ちつけられる岩山を背にして大勢のハンターが横に布陣を組む。油断なく正面を睨みつけていた。空に並ぶ飛行船に寄り添うように火竜たちが翼を羽ばたかせる。

天を焦がさんと眠りから覚めた太陽に見守られるのは地上の太陽。大地に炎王龍。天空にテオ・テスカトル。灼熱の権化が人と竜とに対峙する。

軍団と軍団の睨み合いであった。

張りつめた糸のような緊張感。テオ・テスカトルが唸り、吠える。するとハンターが吠え返す。戦場の片隅で始まった威勢の応酬は次第に全域へと伝播していく。

獣の咆哮と人のときの声とが混ざり合う。大号令が戦いの始まりを演出していく。今まさに力と力の激突が繰り広げられようとしていた。

戦いが始まる。一番槍をはやるテオ・テスカトルの一頭が砂を踏み、その力強さに煙が巻き起こる。

だが、飛び出すことはなかった。

先程までの大音量が嘘のように静まり返る。冷や水を浴びせられ

たような嫌な汗が人の肌を伝い、火竜たちも唸るばかりで前へ出ようとするものはいない。古龍たちもまた、息をのんだような静けさを受け入れていた。

誰もが同じ存在にそのすべての意識を奪われていた。

砂を踏む。その足はテオ・テスカトルを遙かに上回る力強さ。広げた翼は白日の下にさらされてなおその形容しがたい禍々しさに包まれていた。

煌黒龍アルバトリオンは歩いていった。悠然と、何に関心を示すこともなく進む。テオ・テスカトルたちは道を譲る。恐れおののいたように王の道を作る炎王龍の姿は、アルバトリオンが倍ほどもあるその大きさと比べるならば子犬のようでさえあった。古龍の軍団から前に出て、アルバトリオンは胴の上に持ち上げた長い首をくると回す。

敵の力量を計っているわけではない。それは、獲物の品定めを行っているでしかない。長い舌が口を出入りする。

アルバトリオンは存在自体が脅威であった。これまで姿を見せることはあるうと、決して自ら戦うことはなかった。まるで戦いの様子を楽しんでいるかのように古龍と命の争いを離れた場所で眺めていた。

戦ったことなど一度もない。いつ戦うのだ。そんな疑惑と不安が煌黒龍がその姿を見せる度に人の心をかき乱した。

それが初めて前に出た。戦いのただ中に躍り出た。

これまでの戦いを戦い抜いたハンターたちでさえ浮き足立たざるをえない。早く戦いたいと足が前へと出るハンターもいれば、思わず砂を擦る者もいる。どちらも未知の敵への恐怖につき動かされていた。

「指示あるまで動かないで！」

ミスカトニツク王国特務騎士フィロソフィアは手を振り上げ指示を飛ばす。白いドレス調の防具にどのハンターも手にしたことがない蛮竜のライトボウガンが注目を集めることは難しくはなかった。フィロソフィアの声を聞いたハンターたちは再び横並びの隊列を維持しようと努める。

唯一隊列を構いもせず前へ出たのは、赤いドレスに双剣を握りしめた魔女である。フィロソフィアの妹であり、七人の魔女であるフィリアが、古龍の壁と人の壁に挟まれた緩衝地帯へと足を踏み入れる。

ここには他にアルバトリオンしかいない。高さだけで人の倍を超える巨大な古龍の前にフィリアの姿はあまりに小さい。

「御大将自らご出陣か」

古龍に見上げるフィリアのことを気にとめた様子はない。いびつに突き出た二本がほのかに輝き始めた。平行する角の間に弾ける音。

その輝きを、フィリアは目を大きくしてしっかりと確かめた。

「伏せろ！」

その声をかき消しす音が空気を引き裂く。アルバトリオンの角から落雷する。雷狼竜ジンオウガのように超電雷光虫を頼りに雷を落とすこととは違う。高められた電圧が無理矢理大気を斬り裂いてあたりに降り注ぐ。アルバトリオンの頭の角から放たれた雷が不規則に矢のように砂を穿つ。

雷は大気中を通過する力が弱いため長い距離を飛ぶことはできない。そのため、少しでも近いものへと落ちようとする。

フィリアは砂漠に伏せていた。周りの砂地と高さを同じにするこゝとで落雷にさらされる確率を少しでも抑えようとしているのだ。ハンターたちも姿勢を低くしていた。

隠れ場所のない空では明らかに行動が遅れていた。飛行船は舵を動かし、火竜は翼を傾ける。稲妻はそのどちらよりも早かった。

しなる鞭のように、それともまるで生きているように表現しようか。アルバトリオンを離れた雷はそれ自体が意志を持つかのように空へと駆け上がる。人の感覚を遙かに超える速度で、それは光の炸裂と音の爆発としか認識できない。何か苛烈なことが起きた。

アルバトリオンが雷の照射をやめた時、空には二つの火の塊が誕生していた。火竜が燃えている。内から生じる火が体を包み、火の玉に飛竜の翼が生えているように見えていた。飛行船は船体を中腹から裂かれ、切断面を中心に炎が猛る。

飛行船は炎が気球と船体とを繋ぐ綱を焼き払うことで支えをなくしてしまった。焼け落ちる。そんな表現に見合う様子でこぼれるように船体が落下した。慌てて逃げる人々の間で火のついたままの破片をまき散らせる。

焼け死んだ火竜の亡骸は空を大きく滑り落ちた。緩衝地帯へと落下すると砂を大きくえぐる。そこは、アルバトリオンの目と鼻の先であった。さも、王に捧げられた供物のように砂の上を火竜がくすぶる。

命を喰らった王は満足げに喉を鳴らす。

配下の古龍が再び吼える。王はそれを止めることはなく、古龍全体がその声を轟かせる時、炎王龍は我先に跳び出した。

戦闘が始まった。アルバトリオンの一撃は確かに強力ではあったが全体としてみれば微々たる被害しか与えていない。それは都合のいい言い訳であって、同時に大きな足枷である。古龍が自由に攻撃を繰り返すことができるのに対して、人はアルバトリオンを警戒せざるを得ない。

「メタトロン、動きをとめないで！」

自らの翼で炎王龍が飛び回る空の中を、人は飛行船の力を借りて迎え撃つ。

グツフルファクシ級の決して小さくはない甲板の上ではソフィアがブリッジ 甲板からでは小屋のように見える の中へと声を張り上げていた。少しでも気を抜くと古龍の声にかき消されてしまふのだ。

「了解にゃー！」

まずはアイルーの声がして、続いて飛行船が傾きその方角へと曲がっていく。

アルバトリオンの攻撃を警戒せねばならず、そのため動きを止めることができないのだ。同時に、古龍にとりつかれないためでもあった。アルバトリオンの動きに注意しながらでは限界がある。

テオ・テスカトルが甲板へと飛び乗った。甲板から木片が弾け、船体全体が揺らされる。体勢を崩されたソフィアは思わずブリッジ外側の壁に体を預けるように手をついた。

「ジェイナス……！」

この声は同じ特務騎士であるジェイナスを気遣ったものであったが、途中から戸惑いを含んだものへと変わってしまった。

ジェイナスは動じることなく立っていた。古龍の目の前で赤黒い光を放つ大剣を背負ったままで。背中からでもわかる。剣の放つ龍毒がそのままジェイナスの殺気を示しているかのような危うさを放つ。

炎王龍は目の前の獲物を引き裂く程度のもりだったのだろう。手を伸ばし爪を振るう。七人の魔女ではなくとも剛種武器を与えられるほど実力を認められた特務騎士はかわそうとさえしなかった。わずか、ほんのわずか体を後ろに下げた。それだけで古龍の爪は空を裂き、そして、古龍の運命は決定する。

真冥雷大剣「金鷲」が自ら進んで襲いかかるように無駄のない動きでジェイナスは肩越しに抜刀した。軌跡に赤黒い光が混ざり、そ

の刃は人がかつて得たどの刃よりも鋭い。テオ・テスカトルの大きな顔を、古龍の頑丈な体を斜めに斬り裂くと傷口から龍毒と混ざり合った血が吹き出した。

傷つかぬはずの体を斬り裂かれ、猛毒である龍毒を深々と打ち込まれた古龍はのたうち回る。痛い。苦しい。熱い。暴れ回るその体には、グツフルファクシ級の甲板はせますぎた。片足が甲板の縁を外れると、踏み外した足に引きずり降ろされるように落ちていく。

その様子は、返り血を浴びてなお落ち着き払ったジェイナスの様子とあまりに対照的に見えた。

「ジェイナス……」

優男で、周りへの気遣いを忘れないジェイナスは、それでもフィリアの声に応えてくれることはなかった。その目は遠く離れた空を見ているように首を上へと曲げている。そんなところに一体何があるのかわからない。それでも、ジェイナスの確信じみた行動にソフィアもつい釣られて同じ空を見る。

雲一つない空に錆が浮かんでいた。それは他の飛行船なんて目もくれることなくグツフルファクシ級を目指して急降下してくる。全身を錆び付かせたクシャルダオラがわき目もふらずにこの飛行船へ、より正確にはジェイナスを目指して降りてくる。

本来クシャルダオラは鋼色をしている。ところがこのクシャルダオラは茶褐色。まるで錆びたような色が体表を覆っていた。

「あの時の……！」

ソフィアには見覚えがあった。かつて峡谷でジェイナスの婚約者の死のきっかけを作り、ジェイナスに角を折られたクシャルダオラがいた。古龍は角で猛毒である龍毒を制御しているらしく、角を失ったクシャルダオラが自らの龍毒に全身を焼かれ錆び付いたような体になった。

そんな古龍が二頭といえるはずもない。そもそも、ここには他のクシャルダオラの姿はない。

ではクシャルダオラは復讐のためにわざわざジェイナスを探していたのだろうか。まさかそんなことはあり得ない。ソフィアの考えは、しかし現実の前に否定される。

「君がヘステイアを殺した〜！」

クシャルダオラが明らかにジェイナスを狙って気弾を放つ。巻き起こる風がソフィアの目を塞ぐ。船全体を伝わる振動と木片がまき散らされる音にどれほどの被害が生じたのか想像に難くない。

急いで目を凝らすと、いつの間にやら甲板の上でジェイナスと錆びたクシャルダオラが対峙していた。

「君は〜！」

気弾をうまくかわしてジェイナスは大剣を翼へと切り込ませる。翼膜が裂け、クシャルダオラがうめくとも体表を龍毒の輝きが走る。しかし、放たれた気弾は甲板を大きくえぐると船が大きく傾き始める。どうやら、船体に搭載された気嚢が破損したらしい。

「ジェイナス、早くそいつを船から引き離すんだ！ これ以上は船



「がもたない！」

ソフィアの言葉は届かない。

龍殺しの大剣が振り下ろされ、クシャルダオラは爪で受け止めようとす。まるでジェイナスの憎悪の大きさを証明するように激しさを増した剣の龍毒は古龍を焼き、こらえ切れずに古龍が引いた。振り抜かれた剣に炙られるクシャルダオラ。それでもまだジェイナスの攻撃はやまない。

「君が殺したんだ！」

溢れるばかりの龍毒は甲板さえ焼き払う。木が黒ずみ、焦げたと違う、朽ちた容貌へと成り果てる。

距離を開けようと身を翻す古龍の体はそれ自体が重しとなって船を大きく傾かせた。本来水平になっていなければならない気球と船体とをつなぐロープに異常な負荷　持ち上げられた方のロープが緩むことでもう片方の負担が激増する　がかかった。嫌な音を立ててロープが破断していく中、それでもジェイナスは戦いをやめようとしなない。

「墜落しますにや〜！」

距離からすると、メタトロンの声がジェイナスにも届いているとは考えにくい。そうであったとしても、船の尋常でない様子を見れば墜落の危機に瀕していることくらいわかりそうなものではないか。

ロープの数が減ったことで気球に不均一な圧力がかかってしまう。火竜の翼膜で作られた気球部分はともかく、気嚢を作る貯水袋は脆

い。漏れだした気体が翼膜の隙間から吹き出し、浮力が急速に低下していく。

「ジェイナス！」

ソフィアの声は届かない。グツフルファクシ級は急速に浮力のバランスを崩し高度が目に見えて低下していった。

飛行船の残骸がまき散らされる最中でさえ、ジェイナスの復讐は続いていた。

「君は、生きていてはならないんだ！」

ここはどこだろう。飛行船が落ちたどこか。地面は砂であり、目の前には錆びたクシャルダオラが存在する。それでいい。それだけでジェイナスは満足していた。

古龍はその性質上、傷の治癒が極端に遅い。峡谷での戦いから決して短くない時間がたっていたが、クシャルダオラの体に刻まれた傷は錆び付いた顔を見せて今なお残されていた。

墜落の衝撃に足でも痛めたのだろうか。錆びたクシャルダオラは後ろ足をかばうように立っていた。

広翼が以前はとてつもなく大きく見えた。だが、単に大きさだけならベルキュロスと遜色ない。

「君がヘスティアを殺したんだ！」

今のジェイナスには力があつた。龍毒をまき散らす大剣を振るう。赤黒い軌跡が古龍の顔をかすめると、その細長い顔に目から口に至るまでの深い傷跡が刻まれる。傷跡に龍毒の毒々しい輝きがまとわりついた。

クシャルダオラは苦しげに首を振る。反撃しようともがくが、ジェイナスはそれを見切っていた。気弾を最低限の動きでかわす。

体を叩く風の余波をもともしていない。怯えた古龍が声を張り上げようと一切の身じろぎさえない。どれほど拒もうとあらがうこと許されない死そのものであるかのように。

ジェイナスは大剣を構えた。肩越しに担ぎ、腰を低く落とす。筋肉を極限まで緊張させ、呼応するかのようには龍毒が激しく刀身を取り巻く。錆びたクシャルダオラがすべてを諦めたようにほうこうを止めた。諦めた。そう見えたことは仕方がない。用意された結末は破滅であり、それは急速に近づいているのだから。

龍殺しの剣を構える剣士は大地を蹴り一気に大剣を振り上げた。大剣が高くかざされ、そのまま天から落ちてくるような勢いとともに錆び付いた顔へと落とされる。

黒い落雷が瞬いたような輝きと、地獄の門が開かれる銅鑼の音。

赤黒い光がクシャルダオラの全身をのたうち回る。振り下ろされた剣は砂の大地を深々えぐる。錆びたクシャルダオラの顔は左右に斬り裂かれ、血が流れ出る余地がないほどその肉を焼き尽くされていた。

恋人を殺した古龍の軀を、ジェイナスは兜の奥で冷たい視線を送る。

「ヘステイア、君の仇はとつたよ……」

無論、満足感などない。復讐を果たしたところで愛しい人が帰ってくるわけでもない。また、ジェイナスは大きな思い違いをしていた。かつてのジェイナスなら気づけたことであった。錆びたクシャルダオラは仇ではあっても、仇の一つにすぎないということ。

「いい加減にしないか、ジェイナス！」

鋭い声とともに、ジェイナスの顔を鋭い拳が打つ。突然のことに満足な受け身さえとることができず砂地に倒れると、すぐさま馬乗りになったソフィアの顔がジェイナスを覗き込んだ。

「ソ、ソフィア……」

明らかに怒りを湛えた様子で、鎧の胸元を掴み上げてまでソフィアはジェイナスに顔を近づける。

「君が婚約者を失って悲しんでいることは知ってるよ。でも、でもそれじゃあの時と同じじゃないか。同じことを繰り返しているだけじゃないか!？」

峡谷でヘステイアの葬儀に参列することもなく仇を探して舞雷竜ベルキュロスを殺していたことを言っていることはすぐにわかった。あの時、ジェイナスは間違っただけをしていた。勝手な理屈を並べて自己を正当化してまで憂さを晴らそうとしていたのだ。

怒っているソフィアの顔は、同時にどこか悲しげに思えた。

「周りを見てごらん！　いつもの君なら周りのことも見えていたはずだよ。周りのことを考えて戦っていられたはずだよ！」

別段、大きく首を回したつもりはなかった。それなのに、これまで見えていなかったことが、視界が一気に広がる様子がわかった。

ここは岩山の開けた場所である。どこか闘技場のようなところで、ここにアルバトリオンを誘い込むことが作戦として決まっていた。ジェイナスはその端でソフィアに馬乗りになされていた。

どうして気づくことができなかったのだろうか。

二人が乗っていたグツフルファクシ級はちょうど闘技場の壁を作る岩山の上に落ちたらしかった。後部が平らな岩山の上に、前部は闘技場の砂の上に残骸として横たわっていた。それも、ジェイナスのすぐそばで。ジェイナスが構いもせずかわした気弾はバリケードとして組まれていたとおぼしき瓦礫の山を一つ崩して、小径に至る入り口を露出させていた。そこには、不安げに広場を見つける避難民の顔があった。

「君は古龍を倒したいんじゃないんで、人々を守りたいって特務騎士になっただけだ。手段と方法を履き違えてるよ。僕たちは、古龍を倒すためじゃなくて、人を守るために戦わなくちゃならないんだ」

そんなことはわかっているつもりだった。

復讐は死んでしまった人のためにするものではない。今生きている人が行うものだから。自分の大切なものを奪った相手を危険

な存在と認識してそれを排除しようとする防衛本能のなせる業にすぎない。それを人は亡くした人のためだとか、愛のためだとか美辞麗句を持ち出して本来の目的を曇らせてしまう。

先程までのジェイナスがそうであったように。

復讐を果たしたいのなら、これ以上誰かの死が見たくないのなら、ジェイナスが倒すべきは錆びたクシャルダオラではなくて古龍と戦わなければならない。それなのに、ジェイナスは錆びたクシャルダオラとの戦いに意識を奪われてしまった。

かつての過ちを繰り返してしまった。

「ごめん……。僕はまた、戦うべき相手を見誤ってしまったんだね……」

「わかってくれれば、今はそれでいいよ。僕たちの戦いも、君の復讐もまだ終わってなんかいない。そのことはわかるよね？」

ソフィアはジェイナスの上から降りるなり、手を差し伸べてくれた。それを文字通りの手がかりに起きあがる。不思議なことに、気分が晴れたような気がする。錆びたクシャルダオラを殺しても得られなかったものが、今は胸に得られたような気がしていた。

古龍はあくまでも古龍であった。

山を一つ乗り越えてもその先には幾多の山々が連なっている。木を切り倒しても森は果てしない。古龍たちはそんな、人が自然に抱く畏怖の奥深くに潜んでいた。

一つの山を越えられたところで、その存在は果てしない。

戦いは古龍優位に進んでいた。それは仕方がない。アルバトリオンを闘技場に誘い込むため、意図的に防衛線を後退させているのだから。すり鉢状に陣形を尖らせ、闘技場への道を形作る。

そのためには、各人の死闘を必要とした。どこか一角でも途切れてしまつてはならないのである。

炎王龍テオ・テスカトルの突進をランスを持つハンターが四人がかりで押しとどめる。砂に轍を刻みながら巨大な古龍の体がそれでも止められる。一人では古龍を止めることはできなくとも数を揃えれば対抗することができる。この南の戦場において、人々が必要から編み出した戦術であった。

防衛線を突破されてはならない。

空では地上の防衛線を飛び越えようと画策する古龍を飛行船がその船体で無理矢理に押しとどめた。軽量化のため、決して頑強とは言えない木材が大きく陥没し、船体が大きく揺れる。

誰もが理解していた。ここでアルバトリオンをしとめなければならぬ。そのためには、たとえ命を賭けても防衛線を維持しなければならぬ。

それを、炎の霸王は嘲笑う。

煌黒龍アルバトリオンはゆっくりとした足取りで闘技場の方へと

歩いているようでありながら、前触れなしに首を曲げた。その口から炎が漏れだしているかと思うと、おもむろに防衛線の一角へと火球を放つ。

火竜リオレウスのプレスがそよ風に思えはしないだろうか。火竜の倍を超える体躯。それだけでは説明がつかない。着弾した火球は炎を竜巻として立ち上らせ、爆心地はたちまち火柱に包まれた。

人は吹き上げられ燃やされる。空の飛行船さえ揺るがし、やはり燃やされる。

炎がやんだ後、そこには焼き尽くされたクレーターと、その周りに散らばる夥しい数の黒こげの何かが残されただけであった。

一角があつさりと崩された。人は、火竜でさえ、その穴を埋めようと殺到する。どこも余裕などないはずなのだ。それでも、人も火竜もどのような苦労や覚悟も担うつもりでいた。古龍の群が人々へと襲いかかる。

古龍は怒号。命は抗う。

崩された防衛線のすぐ側でもそれは繰り広げられていた。古龍の追い立てる声をあたりを包みながら、それでも戦うことを諦めようとはしていない。

「副団長……、すいませ……。俺、も……う」

聖堂騎士団副団長エールに手を取られながら、ハンターが一人砂に背中を押しつけていた。口からは血が溢れだし、言葉は途切れ途切りに聞き取ることさえできないこともある。もはや助からない。



アルバトリオンの攻撃の直撃を受け、ハンターの下半身は原型がわからぬほど焼き尽くされていた。

「ゆっくり休んでくれ。後は僕たちに任せてくれていい」

エールの言葉に、返事をする者はいない。事切れてなお苦悶の表情をはりつけたままの顔にそっと手を当てて、開かれたままの瞼を閉じる。それだけでも、ハンターの表情が和らいだように見えた。

ハンターとしてこれまで人の死に直面したことがなかったわけではなかった。それでも、なかなか慣れることができないものとは存在する。

エールは立ち上がった。悲しみにくれている余裕などない。ここで防衛線を維持しなければ、アルバトリオンを野放しにしてしまうことになる。

ハンマーを手に立ち、その目にはこちらへと突撃するテオ・テスカトルの群が映し出されていた。

「こらえるんだ！　ここで防衛線が途切れてしまえばアルバトリオンを誘い込むことができなくなってしまふ。何が何でも止めるんだ」

殺戮衝動をつき動かされる古龍と、生きたいと望む命。人が欲望と呼ぶ力と、人が願いと尊ぶ思いがその雌雄を決せんとぶつかり合う。

戦場が歪む。アルバトリオンの気まぐれな攻撃はたやすく防衛線の足並みを崩す。飛行船、火竜の間を縫うように飛び抜けたテオ・テスカトルが眼下の岩山へと狙いを定めた。

平らな岩山に亀裂のように見えるのは小径であり、そこにはたくさん獲物があることを見つけた。顔を邪悪に歪ませてから、古龍はたやすく岩山の上へと降り立った。

亀裂は内部は広くとも上部ほど狭い。満足な幅の開口部がなく、テオ・テスカトルは片手を亀裂の間に差し入れ、顔を無理に押しこむようにして避難民を斬り裂こうと手を伸ばす。

逃げまどう人々。悲鳴を心地よく聞きながら、しかし古龍には不満であった。獲物にうまく爪を届かせることができず、わずかに爪の先を血に濡らすことしかできない。

もっと殺したい。もっと壊したい。

しびれを切らせ、古龍は一息に灼熱の息吹を亀裂の中へと吹き込んだ。小径いっぱい炎が広がり、収まりきれなかった炎が亀裂から上へと吹き出すほどである。小径の複雑な形状が炎を分散し、思った以上に温度を上げることができなかった。それでも、古龍は黒こげの死体が見える範囲に並んでいることを確認すると、満足したように次の獲物を探して飛び立った。

古龍が飛び立った後、小径の上で動きがあった。焦げた服が持ち上がる。その服を着た少女が痛む体を、それでも必死に起きあがらせようとしていた。

「死んで……、たまるもんか……」

少女は、エリスは魔女たちに誓った。生き抜こうと。生きるとい  
うことを諦めない。

生きると言うこと。それ自体が、命の戦いである。

アルバトリオンは宴に招かれた不躰な王である。

誰かと歓談するでもない。宴を盛り上げようとするでもない。た  
だ勝手気ままに歩き回り、目に付いた料理を誰に構うことなく平ら  
げていく。

戦うことはテオ・テスカトルに任せきりで、気が向いた時にだけ  
その圧倒的な破壊力を公使する。気まぐれな天災のようなもので運  
だめしにも等しい。目を付けられれば死。注意をひくことができな  
ければ関心さえ抱かれない。

すぐ脇で傷ついたテオ・テスカトルがくずおれようと、一瞥さえ  
向けることはなかった。ただ歩きたいように歩く。

興味がないのだ。殺すことにしか。壊すことにしか。だが、目障  
りという感情も持ち合わせている。

アルバトリオンに、炎の霸王へと小賢しい攻撃を繰り返す存在が  
あった。岩山に開けた口に陣取って、隊列を組んだガンナーたちが  
一斉にアルバトリオンを狙い撃っていた。

拡散弾と呼ばれる弾丸が、アルバトリオンに命中すると小爆弾を

あたりにまき散らせ、それぞれが小規模の爆発を起こしてアルバトリオンの体を包もうとする。それが一斉に行われるのだ。アルバトリオンの巨大な体は爆発に包み込まれた。

うっとおしい。煩わしい。

アルバトリオンは駆けだした。溢れでる膨大な龍毒はその漆黒の体を赤黒く輝かせる。炸裂した拡散弾から小爆弾がばらまかれるも、アルバトリオンの速度についていくことができず通り抜けた場所を無為に爆発させるだけであった。

巨龍の体躯に踏みつけられ、龍毒で炙られる。極めつけに拡散弾の爆発にさらされて、炎の霸王が通り過ぎた場所は地獄の光景に包まれていた。

さも、煌黒龍が地獄を引き連れているかのように。

地獄の行軍がハンターの射撃などもとせず突き進む。

その巨大な体に似つかわしくないほどの素早さでアルバトリオンはハンターの隊列へと飛び込んだ。踏みつけ、踏み砕く。焼き焦がし、焼き尽くす。

人に止めることができず突進ではなかった。アルバトリオンはたやすくハンターの布陣を突き抜けると、そこは闘技場であった。

適度な広さに岩山が開かれており、地面には砂が敷き詰められている。客席などない無骨な岩壁がそそり立つ。空には飛行船が群をなし、霸王と人との戦いを見守るうとしていた。

アルバトリオンを誘い込むことができた。しかし人々に喜びの声はわくことはない。

闘技場内にいくつも用意されたバリケードの後ろで、大勢のハンターがいながらも、声一つたてることができずにいた。

炎の霸王は、あまりに巨大に見えた。これまで戦った何よりも大きい。これまで死闘を繰り返した何よりも残忍。誰もが声を必要としていた。

必要なのは指示ではない。ただ一言で構わない。勇気を与えてほしいのだ。こんな化け物にも、挑もうとする者が一人でもいるという事実を、奮い立つきっかけを与えてもらいたいのだ。

静まり返った中を音が響いた。弾丸を充填する音である。誰かが、攻撃を開始しようと、巨龍に挑もうとする音である。

純白のドレスを着たハンターが、神託の魔女と呼ばれる特務騎士が動いた。バリケードの脇から顔を出し、その声を張り上げる。

「撃て〜！」

砂漠がくしゃみをしたように突如砲火の音が鳴り響く。それぞれのボウガン固有の発砲音を響かせ、音が重なりあう。すべてのバリケードから一斉に攻撃が開始された。

狩猟の場では決してお目にかかることができないう過剰火力による攻撃は、しかしアルバトリオンをひるませるほどではない。砕け散

る弾丸が、落ちる空薬莖が闘技場の地面を埋めていく。

人は傲慢でもなければ絶望もしていない。ガンナーの攻撃のみでこの怪物を倒せるとは考えてはいなかった。

射撃そのものを隠れ蓑として、バリケードからハンターたちが飛び出した。それぞれ思い思いの武器を構え、射撃音に負けないほ声を張り上げる。

アルバトリオンは煩わしげに爪を振るった。砂が弾き飛ばされ、その腕を中心に龍毒の光が一気に広がる。向かっていたハンターが数人まとめて吹き飛ばされた。

「この、化け物が……！」

赤いドレスのフィリアが双剣を構え腹下に飛び込もうと走る。前足をすれ違いざまに斬りつけ、水をほとばしらせる双剣が苛烈に振るわれる。古龍の体を唯一破壊できる剛種武器でありながら、その攻撃は目に見えた成果を上げてはくれない。

足も体も腹も、そのすべてが異形であった。通常の生物と鱗のつき方が正反対なのである。鱗のすべてが逆鱗であるという事実は、通常のモンスターとの戦いに慣れたフィリアを大きく困惑させた。刃の滑りが思うようにいかず、今一步深く刻むことができない。

アルバトリオンが上体を持ち上げ、下の虫を潰そうと前足を振り降ろした時、フィリアとて慌てて逃げ出す他なかった。

「クシャルダオラが可愛く見えてくるね！」

入れ替わり、黒いドレスのソフィアが大剣を前足へと叩きつける。舞雷竜の素材を利用した剛種武器は雷を漲らせアルバトリオンの胸部を確実に捉えた。

「二人とも離れて！」

続くジェイナスは龍を蝕む龍毒にたぎる大剣を前足に叩きつける。

輝きの雷と黒い雷の一撃は、アルバトリオンの体を斬り裂くには至らない。

すべての鱗が逆さまに生えている。それが古龍ほどの強固な鱗ともなれば、ナイフを上向きに敷き詰めているにも等しい。刃は受け止められ、突進を受ければ体中を切り刻まれることだろう。

姿そのものが凶器にして悪意。

ジェイナスもソフィアも、満足な傷を与えることもできずに距離を開ける他ない。

剣士たちが一度攻撃を中断したことを確認したガンナーがまた一斉射撃を再会する。堅いはずの弾丸が逆鱗に裂かれ、砕かれていく。

どれほどの熟練ハンターでも味わったことなどない。身を竦ませるほどの恐怖と見上げるほどの絶望に睥睨されることなど。アルバトリオンは、炎の覇者は灼熱をバリケードの一群へと向けて吐き出した。

たちまち立ち上る火柱。避難民が必死に築き上げたバリケードは瞬く間に吹き飛ばされ、炎がハンターたちを吹き上げる。

地上の窮地に、上空の飛行船が高度を下げようと試みる。それを待ちかまえていたように、アルバトリオンは第二の災いを解き放つ。あまりにいびつな形をした二本の角の間に光が帯電し、雷として放たれる。空へと落雷していく大電流は飛行船を捉えると光となって一気に燃え上がらせる。

災いは終わらない。

甲高い音がした。アルバトリオンが翼をはためかせる。一体何をしようというのか。そう、誰も疑問に感じた瞬間には、すでに死が粛々と執り行われていた。

逆鱗に包まれ刃としか思えぬほど鋭い突起を持つ尾を、アルバトリオンが振り回したのである。飛竜のように足を軸に回転するようなことはしない。翼で体を持ち上げ、開いた足下を払うように尾で薙ぎ払う。

瞬きなどできないほどの一瞬で、尾は地上を払った。誰も何が起きたのか正確に把握できたものはいない。

冷気が通り抜けたように感じた。それは正しい。アルバトリオンの尾は太陽照りつける中でさえ低温に冷やされていた。それは物質の弾性を失わせ、軽々斬り裂く助けとなる。

何も感じない。それも正しい。あまりに早い攻撃は、ハンターに回避さえ許すことはなかった。払われ、地面に叩きつけられた者は幸運でさえある。中には、植えられた刃に斬り裂かれ、防具ごと胴体が泣き別れにさせられたものが立ったまま死んでいる姿もある。



災いは三つ。

炎はバリケードを破壊し、人々を焼いた。黒こげ、砂に横たわる屍をまだ陵辱し足りないと言がくすぶっている。

雷は飛行船を落とす。気球の浮力に支えられた飛行船が燃えている。それは地獄に灯るシャンデリア。

氷は人々を斬り裂いた。体そのものが凶器に他ならないアルバトリオンの体は触れることさえ命の対価を必要とする。尾を振るつた後、着地の振動は体を斬り裂かれたまま立ち尽くしていた屍を倒す。

人の力は、炎の覇者に及ぶことはできなかつた。

フィロソフィアは火山の麓の里の出身である。そのことは他のどこに暮らすよりも体に一つの考えを叩き込んでくれる。それは、人は決して自然には勝てないということ。

火山の噴火を抑えることはできない。流れ出る溶岩の向きを変えることはできない。必死に堪え忍び、災いが去ることを待つことだけ。だが、果たしてそれでいいのだろうか。犠牲者が出ることは仕方がないと諦めてしまうことが許されるのだろうか。

かつて火山の噴火に紛れ古龍が里を襲った時、フィロソフィアは必死に戦った。勝てる相手ではなかつた。それこそ自然そのもののような暴威であつた。それでも立ち向かうことができた。戦うことができた。犠牲になつてしまった人たちに、せめてその犠牲は無駄ではなかつたと言いたくて。

フィロソフィアの体は砂の上に投げ出されていた。幸い、火球の直撃を受けなかったことと、身につけたカリエンFの高い防御力に救われた。起きあがることはできる。武器とて破損した様子はない。

光景は地獄であつた。

空には飛行船が灯され、付近には焼け焦げた屍が香りを放つ。剣士たちは砂を血に染めて倒れていた。妹二人とジェイナス特務騎士は、言つてしまふなら無事である。無傷ではないらしくアルバトリオンから離れようとする足取りは重くとも、それでも生きている。

本当なら抱き合つて無事を喜びたいくらいである。

そのためにも、まずはアルバトリオンを倒さなければならぬ。剛種武器はまだそのすべてが健在。それは絵空事ではないはずだ。

ライトボウガンに通常弾を装填する。狙いはどこでもよかつたが、とりあえず頭を狙うことにした。ライトボウガンにはヘビィボウガンほどの攻撃力はないが、速射と呼ばれる連射機構が備わっている。剛種武器ともなればその速度は極めて速い。

一度引き金を引くと、弾丸が次から次へと飛び出しアルバトリオンへと向かつた。一点集中加重攻撃。さすがのアルバトリオンもうめいたように首を振つた。ただし、それだけである。角が折れることもなければ、もちろん倒れてくれることもない。

それでもいい。通常弾の威力は距離に反比例する。致命傷を与えらるには元々遠すぎる場所であつた。注意を引くことができればそれで十分。

アルバトリオンが突進を開始した。ここはライトボウガンの利点である。身が軽く、攻撃を回避することに長けている。素早く突進の射線上から逃れるとアルバトリオンは足を止め、大きく角を振り回した。勢いを止めるためなのか、あるいは攻撃のためなのか。前へと突き出た角にバリケードが突き崩された。同時に、普段高く持ち上げている首を低く下げてこらえるような仕草を見せたことから、勢いを殺す意味合いもまだ否定はできない。

タイミングを合わせることは至難の技だろう。突進後のわずかな隙に頭を攻撃する。そんな離れ業ができないわけがない。そんなことを無為に考えながら、フィロソフィアは次弾を装填する。

散弾である。

一度の攻撃で広範囲を攻撃できる反面、広い範囲に攻撃が散らばってしまうことから大型のモンスター相手には向かないとされる弾丸である。体が大きい場合、弱い攻撃を一〇回行つよりも数回の強力な一撃の方が深い傷を与えられるからである。

それでも、フィロソフィアは敢えて散弾を選んだ。アルバトリオンほどの大きさがあれば効果があると踏んだ。同時に、剛種武器である海猫は散弾を速射することが可能であるからだ。

蛮竜グレンベブルの猛々しい面構えを再現したような銃身をアルバトリオンへと向ける。古龍は首を曲げ、フィロソフィアの様子をうかがっていた。

姫様に与えられた剛種武器の力は、古龍を倒すためにある。

フィロソフィアが引き金を弾く。銃口から飛び出した弾丸が弾け、多数の弾丸が雨のようにアルバトリオンへと突き立てられる。まだ終わらない。次に、また次に、次々と散弾が銃口から我先へと飛び出した。一つ一つは小さくとも雨のように、豪雨のように、滝のように散弾はアルバトリオンへと降り注いだ。

弾が弾かれる甲高い音。被弾した箇所から龍毒が放たれアルバトリオンの体が赤黒く輝いていく。ライトボウガンの中でも極めて強力な剛種武器の掃射にさらされ、さすがのアルバトリオンもほんの一步ではあるが後ずさる。

効いている。アルバトリオンの爪が弾け飛んだ。前足の爪が剥がれ落ち、苦しげにうなる間も弾は降り注ぐ。

やがて全弾を撃ち尽くした時、アルバトリオンはまだ立っていた。それでもいい。またカートリッジに補充すれば射撃は可能である。今は仲間たちが体勢を整えるまでの時間さえ稼げればいいのである。

爪を砕かれた怒りに燃えるアルバトリオンがフィロソフィアへと向き直ろうとする。素早く位置を変えようとして、フィロソフィアはあることに気づいた。

ここはどこだろう。闘技場。その端にすぎない。しかし、フィロソフィアは確信じみてここが特別な場所であると気づいていた。

離れようと体を横にした時、横目に見えてしまったのだ。崩れたバリケード　錆びたクシャルダオラに吹き飛ばされた　と、その奥に見える小径の存在に。そこはエリスと名乗った少女が隠れていた場所である。恐らく、今もなお。

炎の覇者は、やはり炎吐き出そうとしていた。かわすことはできない。急いで走れば背中を熱が撫でる程度ですむことだろう。同時に炎が小径を直撃する。

すべきことは決まっていた。

小径を業火が通り抜けた。細く長く、奥に深い小径であったため、炎は瞬時に通り抜けた。亀裂から岩山の上へと吹き出し、弱った避難民を舐める。

それでも、エリスは無事であった。炎が小径に吹き込んで来た時には死を覚悟した。とてつもない化け物が広場の方で暴れていることを知っていたからだ。化け物の息吹は、しかし小径の人々を焼き尽くすほどではなかったのである。

どうしてだろう。すっかり煤けてしまった服を持ち上げて、エリスは小径を進んだ。広場の方へと近づくとつれて炎に耐えきることができなかった人の遺体が目に付くようになっていく。無事であった人が声にもならない声で広場に行こうとするエリスを制止しようとする。

どうしても知りたかった。何があったのか。どうして自分は生きているのか。

広場へと入る口は決して広くはない。門程度の幅の岩の間を慎重に覗き込むと、そこでは巨大な籠よりも何よりも真っ先にエリスの目に飛び込んできたものは一人の背中であった。

白いドレスのような防具は見覚えのあるものであった。それなのに、それが誰であるのかわからない。頭があつたはずの場所は黒こげになった塊が置かれているだけである。右手があるはずの場所には何もなく、残された左手が横へ伸ばされていることから、それが両手を大きく広げた姿勢で焼かれたことがわかった。

その足下を見たとき、エリスは頬を涙が伝う感触を覚えた。焼かれた砂が白い防具に切り開かれたように別れ、エリスの足下を敷き詰める砂は燃やされてはいなかった。

「フィロソフィアさん……」

あんなドレスみたいなき装備をしている人は他にはいない。ただ一言一言会話を交わしただけである。それでもわかる。こんなことを命をとってまで誰かを救うことができる人がそんなにいるはずがないことを。

綺麗に思えた赤い髪はもう一毛たりとも残されてはいない。たとえ防具が無事であつたとしても人間が古龍の高熱に耐えられるはずがない。

足に力が入らない。涙で何も見えなくて、膝が砂を強く蹴った。

とても見ていられなかった。防具はまだ人の形を維持していた。そこに、もう人の形なんて残されていないのに。白いドレスがそれぞれのパーツと化して崩れ落ちていく様を見ていることなんてできなかった。

「フィロソフィアさん……、フィロソフィアさん！」

## 第二八話「力と思いと」Ultima Ratio」

太陽に炙られた熱風が、頬を撫でる風がここまで冷たいと感じたことはこれまでに一度もなかった。

ハンターが用いる武器の中では比較的軽く振り回すことに労を要さない双剣が、今はフィリア 剛腕の魔女と呼ばれているのに、手には重い。両手を下げ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

目の前の光景を吟味しているのだ。

姉のフィロソフィアが命を落とした。

では何故。煌黒龍アルバトリオンが放った火球の直撃を浴びたから。ではどうしてかわすことができなかった理由は。タイミングは完全に見切っていた。かわせない理由を能力や実力に求めることはできない。

かわせなかったのではない。かわさなかったのだ。

姉はかわすことなく、灼熱の業火に身を焼かれた。

なまじっか頑丈な防具は焼き尽くされることなく人の形を残して立ち尽くしていた。と思うと、すぐに崩れ落ちた。古龍の放つ火球に人の体は耐えられない。防具だけが残って、肝心の人は焼き尽くされていた。崩れ落ちる前の防具の上、本来なら頭部があるべき場所には顔も判別できない消し炭だけが残されていたように。

フィロソフィアは死んだ。

「姉さん、あんたは、この世界で一番賢い大馬鹿野郎だよ……」

みんなわかっていたのだ。かわせなかったのではない。かわさなかった。

装備するカリエンFならば古龍の業火にも短時間であれば耐えられることがわかっていた。だから盾になることを選んだ。炎の激流に立てられた柱になることを望んだ。事実フィロソフィアがかわさなかったことで、本来ならば避難民がいるはずの小径に侵入するはずであった炎は激減した。多くの命が救われた。

「何が正しいかわかって……」

だから姉は選んだのだ。自らの命を犠牲にしても多くの命を助ける方法を。

口腔に広がる血の味は強く噛みしめすぎたせいだ。頬を伝う涙は姉が身勝手な真似をしたせいだ。

「格好よく決まりすぎなんだよ！」

アルバトリオンは焼き付くした相手にすでに興味はなくしてしまつたらしい。振り向く。その際、まるで足をかばうような仕草を見せたのは、爪が弾け飛んでいるからだ。フィロソフィアが命を懸けて遺したにしては、その傷はあまりに浅い。

「ジエイナス、ごめんよ。僕は、君のことをわかって上げられなか



った。こんなに辛いことなんだね。こんな悲しいことなんだね。大切な人を奪われるということが……」

立っていることができなかった。止めどない涙があふれた。ジェイナスに支えてもらわなければ立てないほど、ソフィアの心は消耗していた。

「でもね、そんな僕を支えてくれたのは君だった。今度は僕の番だよ。もしも君が憎しみに囚われそうになったら、たとえ叩いても君を止めるよ。もしも君が悲しみに押しつぶされそうになったら、たとえ何が起きても君を支えるよ」

まだ戦いは終わってなどいない。抱きしめてくれるジェイナスの手に、できることなら溺れてしまいたかった。そんなことできるはずがない。

自分の足で立とうとして、思わずふらついてジェイナスの腕にしがみく。視界に、唐突に打ち捨てられたライトボウガンが目に入った。蛮竜の素材を用いた剛種武器。主である姉がいなくとも、それは遠目には無傷であるかのように見えた。焼かれた砂に埋もれてもなお、その銃口がアルバトリオンを向いているようにも見えた。

まるで、まだ姉の遺志を象徴しているかのように。

まだ戦いは終わっていない。ここでアルバトリオンを倒さなければもっと多くの人が犠牲になる。

「大丈夫……、もう大丈夫だから」

心にこびりついた悲しみがすぐに晴れるはずもない。それでも、

ジェイナスに支えられながらもなんとか立つことができる。まだ戦うことができる。

アルバトリオンは古龍であり、三つの災いを持つ。

その体からは龍毒が放たれ、吐き出す息吹は灼熱にして、角は雷を招き寄せる。尾に並ぶ剣は極冷にまでその熱を下けている。

炎と稲妻と冷氣。そして、それらを束ねる龍毒。

破壊力が尋常ではなかった。一撃で飛行船を撃沈する。息吹は人をたやすく焼き尽くす。

それでも人は、火竜は戦うことをやめようとはしなかった。

勝てるかと挑んだ戦いではない。勝たねばならないと臨んだ戦いなのだ。

岩山に開いたまさに円形闘技場へと炎王龍テオ・テスカトルが殺到する。灼熱の霸王の御足下へと集うためか、それとも、おこぼれに預かるうと舌なめずりしているのだろうか。

人は戦うことをやめない。地上では砂を血に染めながらなお激しい戦いが繰り広げられていた。ハンターたちが武器折れるまで戦いを続けている。武器が折れたなら命尽きるまで。人と古龍の屍の間を埋め尽くすように武器が散乱する。

傷ついたハンターが武器を杖代わりに立ち上がるうとする。それ

をテオ・テスカトルはにべもなく踏みつけた。何かが砕ける音がしてハンターは砂と足とに挟まれる。絶えず高熱を放っている古龍の体は焼きごてのようにあたりに焦げた臭いを充満させた。仲間が焼かれている。それでも、人は決して戦いをやめようとはしない。古龍の行く先に必ず立ちふさがり、誰もが傷つきながらも背中を見せる者は誰一人としていない。

人と古龍が睨み合う。

火竜は戦うことをやめない。天空では炎と炎が太陽に挑まんとばかりに翼を広げていた。

火竜リオレウスの炎がテオ・テスカトルの顔面を捉える。しかし炎の古龍は意に介した様子なく翼をはためかせると飛びつく勢いのまま爪でリオレウスの顔を斬り裂く。赤黒い毒が輝き、頭部の甲殻が弾けた。勝利の手応えを感じる間もなく、古龍は自らの体に影が落ちたことに気づいた。太陽を遮って、雌火竜レイアが空中で大きく宙返りをした。猛毒を含む棘を多数持つ尾を叩きつけられ、さすがの古龍も苦痛に顔をしかめる。

火竜は古龍に挑みかかる。

人と竜は戦う。それは、闘技場で灼熱へと挑む仲間のために。

古龍は戦う。それは、殺戮と破壊を命じる本能のままに。

あまりに悲しい消耗戦が繰り返されていた。

アルバトリオンが攻撃を仕掛ける度、ハンターの誰かが命を落とした。その体は破滅の毒を含み、その纏う力にはすべて致命的な殺意が宿る。

吐き出される火弾が大きな火柱を巻き上げると、そのすぐ側には原型を失った消し炭が転がっていた。

一度突進を開始するとその轍にはモンスターの攻撃では破壊されないはずの防具が破片となって散らばった。

煌黒龍アルバトリオンが攻撃を仕掛ける度、人の数が、命を輝きが目に見えて減っていく。

それでも戦いは続く。どちらかが滅びるまで戦いは続く。

剛腕の魔女フィリアが双剣を勢いよく前へと突き出す。ほとぼしる水に包まれた鋭刃はアルバトリオンのこめかみをかすめた。確かな傷を与えつつも、フィリアは誰にでも聞こえるように舌打ちする。

目標を外した。本来ならばもっと深く、前足の爪　姉が遺した傷跡がある　を狙うつもりであった。

アルバトリオンは明らかに傷をかばうような仕草を見せていた。容易には懐に接近させず、角を振り回し接近を阻害しようとする。すくい上げるように首を下から上に動かすと、角に突き上げられる形でフィリアの体は軽々と宙を舞う。

柔らかい砂地に受け身をとって落ちたフィリアの横をジェイナスが駆け抜けた。龍毒を持つ刃の騎士は直接頭に狙いを定めていた。足下へ踏み込まれまいと低く構えられていたアルバトリオンの頭は

剣士にも狙いやすくなっている。

龍殺しの特務騎士の一撃は的確にアルバトリオンの角を捉えるも、優れた切れ味を持つ剛種武器でさえ食い込むだけで折るには至らない。龍毒の輝きをもってしてなお、角は健在であった。

すぐさま他のハンターたちが射撃を開始した。鉄甲榴弾が次々とアルバトリオンに突き刺さり、一呼吸の間をおいて炸裂する。

その爆発に乗じてジェイナスはアルバトリオンからの離脱を果たした。

爆煙が晴れると、アルバトリオンは傷らしい傷を負った様子なく持ち上げた首で人々を見下ろしていた。

やはり届かない。決定打となる一手が存在していない。ここには剛種武器とその使い手が三人も集まっている。しかし大型飛行船がないことが、やはり大きい。壁となるものがなく、どうしても人が攻撃にさらされざるを得ない。攻撃力の不足も重要な問題であった。

「さて、どうしたもんかな？」

フィリアは双剣を振る。先程の攻撃で刃にまとわりついた古龍の血が勢いに拭われて砂へ落ちる。傷を与えられないわけではない。体が大きすぎて傷が希釈されてしまっただけだ。

こちらの様子をうかがうようにうなり声をあげているアルバトリオンの体にはすでに複数の傷が刻まれている。だがどれも人と言うなら擦り傷程度のものでしかない。

高さだけで人の倍を優に越す巨体を沈められるだけの説得力がどの傷にも存在していない。

フィリアのすぐ側でジェイナスは背中に背負った剣に手をかけたままアルバトリオンの顔を睨みつけている。

「急所を狙いましょう。それしかこいつを倒せる方法はありません」

「頭だな。だが、角が邪魔だ」

アルバトリオンの頭部に乗る一対の角　まるで異形再生をしたものであるかのようにいびつな形をしている　は脳を守るように鎮座している。剛種武器でさえ一撃では碎けない角を壊さなければならぬ。

こんな頑強な弱点を打倒の糸口としてよいものか。

フィリアの頬を冷たい汗が伝う。ジェイナスとて破壊する行程を思い描けなかった。

アルバトリオンはこちらの意図に気づいたかのように首を高く持ち上げていた。単にジェイナスの当てた傷をかばう行動であるのかもしれないが、古龍の行動はすべてにおいてほの暗い不気味さを禁じ得ない。

「それでも、やらなくちゃならないんだよね」

フィリアとジェイナス。その二人に見える位置にまでソフィアが歩み出た。砂に汚れた頬には涙が伝った後がまだ残っていたが、表情そのものは普段のソフィアを取り戻している。

「もう、大丈夫なのかい？」

「僕だって七人の魔女の一人だよ。泣いてなんていられないよ」

気遣うジェイナスには微笑み返して、しかしその手は背中の大剣をすでに握んでいる。ソフィアは大丈夫だろうと、姉であるフィリアは横目で眺めただけですぐにアルバトリオンへと視線を戻した。

たった一頭の古龍をハンターたちが取り囲んでいる。この内誰か一人でもいい。誰か一人でもアルバトリオンの頭を叩き割ってくればそれでいいのだ。

「お前たち！ これから……！」

フィリアが指示を飛ばそうとして、その途端にアルバトリオンが動いた。全身から龍毒を放ちながら突進してきたのである。仕方なくフィリアは声を中断してまでその場を離れるしかなかった。

砂が焼かれ、冗談のような破壊が轍となる。

本当にそうだろうか。フィリアが感じた違和感。それは、突進の勢いが以前よりも弱く感じることに。

「足をかばっているのか……？」

姉であるフィロソフィアが遺した爪の傷がアルバトリオンに確かにダメージを与えている。

「狙える奴は前足を狙え！ ジェイナス、ソフィア、私らは頭だ！」

ソフィアの指示の下、ハンターたちが一斉に動いた。弓を構えるハンターたちが一斉に矢を放つ。アルバトリオンは翼を下ろすと矢をたやすく弾き返す。足下に接近する剣士に対しては頭を大きく左右に動かし角を振り回す。鎧を裂かれたハンターが血しぶきとともに打ち上げられた。

アルバトリオンが動く度に人が死んでいく。

「君たちは、そんなに殺したいのか！」

普段おとなしげで声を荒げる様子なんてなかなか想像できないジエイナスが声を張り上げていた。兜をつけているため表情こそうかがえないが、心中穏やかであるはずがない。

龍毒をほとばしらせながらジエイナスの大剣は勢いよく叩きつけられる。狙いは角。アルバトリオンは明らかに攻撃を見てかわしている。首を上に入れられたことで大剣の刃は顎をかすめるだけで終わってしまった。

重たい大剣を振り下ろしてしまった隙を狙い、アルバトリオンが爪を振るおうと構えた。ご丁寧に損傷していない方の手である。

「ジエイナス！」

ソフィアの叫び声とともに弾ける雷の音。第三の剛種武器が稲妻を放ちながら振り上げられた古龍の手をうまく打った。鱗がわずかに弾け飛ぶ程度のわずかな傷ながら、攻撃の勢いをそぐことには成功した。古龍は攻撃を中断し、前足を地面に戻す。



「ジェイナス、動くな！」

相手の反応を待つこともなく、フィリアは古龍の目の前でたたずむ男へと飛び乗った。肩を踏みつけて 妹には後で謝っておけばいい 踏み台にすることで高く飛び上がる。持ち上げられた古龍の首に届くほどの高度を稼ぐことができた。

まるで睨み合うように視線の高さが合致する。古龍は反応しきれない。

ジェイナスがつけた角の傷めがけて両手の剣を力任せに叩きつけた。甲高い音。もはや古龍との戦いでは聞き飽きた音がして、傷は深くなったようにも見えた。勢いが消えていないためアルバトリオンの胸のあたりに着地し、蹴り付けるように距離を開ける。後ろ向きながらもうまく砂に着地する。

すぐさまアルバトリオンの様子を見上げると、角はまだ健在であった。確かに傷は深くなっているが、揺らせば折れてくれるようなことはなさそうだ。

そして、この攻撃は明らかにアルバトリオンを警戒させた。古龍は信じられないことに脚力だけで大きく後ろに跳び退いた。距離を離され、誰も対応できる距離にない。

アルバトリオンは角を輝かせ始めた。三つの災い、その内雷を放とうとしている。わかつてはいたが防ぎようがない。

「伏せる！」

姿勢を低くする。そうする他ない。稲妻は角から幾本も放たれた。

初めは上空へと向かうと思いきや、重力に負けたように文字通り落雷する。雨か何かのように降り注ぐ。

運だめしだ。稲妻がどこに落ちるかなんてわからない。避雷針となるものなど何も無い平らな砂地である。何に落ちても不思議ではない。ハンターが固まって伏せていた場所を直撃しても、悲鳴なんて雷鳴で聞こえることさえない。

ほんの一〇秒程度の照射が終わると、砂から幾本もの黒煙が立ち上り、そのすぐそばにはハンターたちの焦げた体が転がっていた。

「生きてるか、二人とも……？」

「何とか……」

「死ぬかと思っただよ」

特務騎士はしぶとい。幸い、三人がいた場所には落雷することはなかった。しかしこの雷で何人もついでにいかれたことか。煌黒龍アルバトリオンとの戦いはもう長くはない。勝つにしろ負けるにしろ、勝負は一瞬でつくことになるだろう。

アルバトリオンは闘技場の壁に背中をつけるような形でハンターたちの様子を眺めていた。接近さえ許さない腹づもりなのだろう。様子を見ようと足を前に出した剣士へとめがけて火弾を吐き出した。

人の命が一瞬で消し飛ばされていく光景は、そろそろ見慣れてもいい頃だ。

近づくことさえできない。

見回すと、ハンターたちは深刻なほど数を減らしていた。せいぜい一〇名ほどしか残されていないのではないだろうか。数に任せて突撃することもできそうにない。

「考えをまとめておくぞ。私たちには何ができる？」

「……ほんの一瞬でも、少しでいいんです。一度でも動きを止めてくれば、あいつの額を砕いてみせます」

「難しい注文だな」

大剣には力を溜めて一気に叩きつける技がある。しかし、力を溜めている間動くことができず、相手によってきてもらわなければならぬことになる。額こすりつけて頼み込めばアルバトリオンがその首差し出してくれるなら何度でも頭を下げてやる。

「僕が行くよ」

セントポリアから神速と呼ばれたソフィアなら確かに接近できることだろう。

「でも、これはほとんど奇襲に近いから、きっと一度しか通用しない。それでもいい？ 姉さん」

「ジエイナスには悪いが、確率で言えばソフィアが上だな。わかった。援護する。やってみる」

「何をするつもり何だい？」

「説明している時間はない」

ジェイナスの言葉を無視する形でフィリアは前へと足を踏み出した。攻撃されまいかと警戒したが、火弾は連射できないのか、それともこちらの様子を見ているのか、アルバトリオンはこちらを睨むだけで動こうとはしない。

恐らく、これが最後の攻撃になる。これで駄目ならもう人には反撃する余力は残らない。

「ジェイナス、まずソフィアが仕掛ける。私たちの出番はそれからだ。できるな？」

返事はなかった。代わりに、柄を掴んだ音がした。

フィリアを追い越してソフィアが前に出た。こちらはまだ柄に手をかけてさえいない。姉へと手を振ってさえ見せた。しかし、これは余裕の現れではない。本当に余裕があるのなら振り向いて微笑んでみせるのだろうから。

「じゃあ、行ってくるよ、姉さん」

ソフィアには二人の姉がいた。

フィロソフィアは昔から勉強ができて、特務騎士に入ってからグラジオラスの下で研究を続け、ドリームランド峡谷においてムー文明の遺跡から壁画を発見した。

フィリアは獵団長である。どこか人を引きつけることができる人であるようで、規模としては決して小さな獵団ではないそうだ。

この二人の姉を誇らしく思ったことはあっても妬ましいと感じたことはなかった。自分には頼りにある姉がいると思っていた。ただ、羨ましくはなかったかと聞かれれば、ないと答えることはできない。何か自分にしかないものが欲しいと考えたことは何度もあった。

どこかアマランサスとスノードロップの姉妹と似ている気がする。もともと、あの二人の場合、ソフィアたちとは反対の間柄である。妹の方がすごくくて、それでも姉は自分だけの力を持つことを諦めなかった。

いつか聞いてみたことがあった。アマランサスに、妹のことが妬ましいとか、嫌いになつたりしたことはありませんかと。あの人はいつものように笑って否定した。そんなことはありませんよと。その言葉を聞いた時、ソフィアはつい疑ってしまった。それはあなたが姉だから、余裕でいられるだけではありませんかと。

そして疑った分だけ恥ずかしくなった。アマランサスが姉だから余裕でいられるとすれば、ソフィアは妹であるというだけで負い目を感じていることになる。何ともみっともない。

アマランサスは一人で乗り越えた。凶眼という力を持ち、七人の魔女の中での人ほど姫様の信頼を勝ち得ている人はいないだろう。

その強さが純粹に羨ましく思えた。見たものをすべて記憶する。一見戦闘にまるで役に立たないような力を、あの人は思いもかけない方法で戦いに生かす。姉に対する嫉妬とは違って、純粹な羨望としてアマランサスに近づきたいと思った。凶眼の力を得ることはで

きなくとも、その強さに近づきたくて。

見るということ。誰もが持っていることを誰にもできないやり方に使うこと。そんな志だけはアマランサスにも負けていない気がする。

見るということ。この力で、ソフィアは古龍さえ超えてみせるつもりでいた。ひどく地味で、それでも誇りとしている力で。

姫様が神速とまで呼んだ速さで。

ソフィアの目の前には焼かれた砂が敷き詰められ、太陽がまぶしく照りつけている。まるで太陽そのものが大地を焼き払ったかのような恐ろしい光景のただ中に、それはいた。煌黒龍アルバトリオン。故郷のおとぎ話に登場する地獄の山の門番はたった一人で向かってくるハンターのことを睨んでいた。

ゆつくりと、歩幅は変えない。何か変化を見せてしまえば攻撃のきっかけを与えてしまうような気がしていた。ただ、古龍の方でも限界というものを設定していた。間合いとしてはまだまだ遠い。そんな距離にまで来た時に、アルバトリオンは動いた。

口から漏れ出す炎。火弾を吐き出そうとしている。

横にはなく前へソフィアは駆けだした。

火弾は着弾するとともに炎の竜巻を巻き起こす。着弾前なら火竜の息吹を多少大きくした程度でしかない。かわすことができるはず。体を低く上体を捻るようにして足は止めない。まるで太陽のそばを通り抜けているような熱が体の半身へと照りつける痛みを覚えなが

らソフィアは駆けた。後ろで轟音と灼熱とが弾けたことが肌でわかった。

回避に成功したのだ。目標であるアルバトリオンの角はすぐそこにあった。

走る勢いを殺すように砂を強く踏む。手は自然と大剣の柄を掴み、殺しきれない勢いをそのまま乗せるように肩越しに振り上げた。

アルバトリオンが爪を振るった。ちょうどソフィアの攻撃に対してカウンターのようなタイミングで、かわす時間はない。大剣を振りおろす勢いと止めることはできずに、古龍の爪はソフィアのブレスFを引き裂いた。

ただし、表面の布が裂けてしまった程度のことである。爪はフィリアの体を捉えることはなかった。

大剣をそのまま振りおろす。ベルキュロスの力を宿した剛種武器は雷とほとばしらせながら意趣返しのように古龍の角へと落雷する。確かな手応え。振り抜いた感触は角を叩き折ることに成功したことを伝えていた。

アマランサスの凶眼の力を真似することはできなかった。ただ、似たようなことができる。

ソフィアもまた、ものを見て覚えることができた。相手の動きを覚えて、間合いを完璧に把握することができる。凶眼のように完全な再現はできずとも、感覚として相手の動きを把握することはできる。

ソフィアにはわかっていた。アルバトリオンの爪がどこまで届くのか紙一枚程度の厚さで。

ソフィアは知っていた。自分の剣がどこまで届くのか。

端から見てみるとまるでアルバトリオンの爪がソフィアの体を通り抜けたように見えるかもしれない。だから姫様はこの力を神速と呼んだ。まるで攻撃をすり抜けるような神がかった速さであると。

片角を失ったアルバトリオンは目を見開いて首を動かし、足をばたつかせて戸惑っているようである。無理もない。勝利の確信が一転敗北という結果に終わったのだから。

何が起きたのか理解するだけの時間を与えてはならない。ソフィアは大剣を横薙ぎに残された角を打ちつける。角の欠片が舞って、雷の光が古龍の視界を潰す。

その際にハンターたちは動いた。ガンナーはそれぞれの弾を翼めがけて撃ち出す。ジェイナスとフィリアの二人は一気に間合いを詰めた。水をまき散らす双剣と龍毒を含む大剣が交互に角を強打する。

古龍のうめき声を聞きながら、角が破片を飛び散らせていく。

このまま、押し切る。角ごと頭蓋骨を砕いてしまうつもりでソフィアは力の限り大剣を振り落とす。完璧な間合いと確実なタイミング。それでさえ、アルバトリオンを倒すことができなかった。砕けなかったわけではない。それどころか、当てることさえできなかった。古龍の姿が消えていた。

霞龍才オナズチのように姿を消したのではない。一気に空へと飛



び上がってソフィアの視界から逃れたのだ。わかつてはいた。ただ飛んだだけなのだ。それも、常識ではありえないほど高速であれほどの巨体が空に逃げたのだと。

首を回す。上空へと飛び上がっていたアルバトリオンが急降下を始めようとしていることだけはわかった。一度も見たことのない攻撃はかわすことができない。神速と凶眼の欠点を自覚しながら、ソフィアは自分めがけて落ちてくる古龍の姿だけが見えていた。

迫りくる爪が最後の光景になってしまっただろうか。

視界が突然ぶれて、横へと押し飛ばされる感覚。何が起きたのか確認する前に強い振動が地面を揺らし、巻き起こる砂煙が視界を覆い隠してしまう。

ソフィアの体は地面に仰向けに寝そべっていた。よく見えないが、自分に誰かが覆い被さっていることくらい、体に感じる重さでわかる。

「ジエイナス……?」

かばってくれた誰か。一番可能性の高い人物の名前を　多少の期待も込めて　呼んでみる。すると、聞こえた声は予想通りの声音であった。

「大丈夫、かい?」

その声は苦痛に耐えているようでもある。

「ジエイナス!?!」

「ちよつと背中をひつかかれちゃってね……」

砂が目に入って痛い。それでも必死に目を見開いてジェイナスの姿を確認しようとする。ジェイナスはソフィアの上から体をどけてくれて、それでもすぐに立ち上がることができずに近くで膝を折つたままだった。背中には鎧が鋭く引き裂かれていた。決して致命傷ではないようだが、龍毒が痛みを喚起しているのだらう。ジェイナスは呼吸を荒くしている。

「大丈夫。大丈夫だから……」

幸い、アルバトリオンの姿は見えない。砂煙に隠れて互いに相手を見失っているのだらうか。

「これで、私に残された手は一つになったな」

姉のフィリアである。慣れてくると砂煙の中でも近くなれば問題なく人の顔を確認することはできる。ピアスをつけただけで容易くうかがえる表情は齒を噛みしめ悔しさを堪えているようであった。

ソフィアの策では届かなかつた。すると、残されたのはジェイナスの提案である。アルバトリオンの動きを止め、大剣の溜め斬りで角ごと頭蓋骨を破壊する。

「バリスタ用拘束弾は？」

ジェイナスがまず提案する。飛行船に搭載された牽引用ロープを古龍に巻き付けて動きを止めるといふ発想はとてジェイナスらしい。優秀で、でもどこか抜けている。

フィリアはにべもない。

「飛行船の大半がやられてる。それに、奴の大きさが中途半端だ。巻き付けられる縄の数にも限界がある。何から何まで不十分だ」

ソフィアとジェイナスが乗っていたグツフルファクシ級も撃沈させられ、この闘技場の隅で残骸をさらしている。

「突進を他のハンターにとめてもらうっていうのはどうかな？」

「無理だよ。もう、ここには立っていられる人さえあまりいないんだから」

それどころか、最悪の場合、ここに残った三人だけであるかもしれない。テオ・テスカトルでさえ防御力に優れたランス使いのハンターが四人がかりでなければ止めることはできない。

方法はただの一つと言えども残されてはいなかった。

まだ立つことができないジェイナスが思い切り砂を叩いた。その悔しさはよくわかる。たくさんの人が犠牲になった。それでもアルバトリオンを倒すことができなかった。そしてもっと多くの人が犠牲になってしまう。

その犠牲の中に、姉であるフィロソフィアが含まれている。また視界が曇り始めたのは、涙が再びたまってきたから。

「いや、悪くない考えだ」

一人立ったまま、フィリアは声を張った。

「フィリア姉さん？」

「ソフィア、ジェイナス。私がチャンスを作る。私があいつを止めてやる」

「姉さん無茶苦茶だ。たった一人であんな怪物を止められるはずがないじゃないか!？」

激流を両腕で止められる人なんているはずがない。

「止められるかどうかじゃない。止めるんだ」

「思いだけで力が止められるはずがない。君のしようとしていることは無謀でさえないよ！ 無駄死にするだけだ」

フィリアはそって右手をかざした。双剣を得物としているその手には何故か刃がない。不思議に見ていると、砂煙に隠された惨状がようやく目に届いた。指が二本足りなかった。残された指も形がゆがみ、あり得ない方向へと曲がっていた。

折れた関節部分から血が染み出して、砂へ滴となって落ちる。

「姉さん、その指……」

「私はもう戦えない。だが、奴は何が何でもしとめたい」

痛みがないはずなんてない。それなのに、姉はあまりにまっすぐにソフィアとジェイナスのことを見ていた。

「危険な賭けだよ。命を落としても、止めることさえできないかもしれない。君はそれでも……」

「私を信じて死にたいか？ それとも、私を信じないで死にたいか！？」

ジェイナスの言葉を遮ってフィリアは吼えた。ずいぶん意地の悪い聞き方だ。自然と顔が苦笑を作ることを自覚しながら、ソフィアは立ち上がった。

「本当に、姉さんは強引だよ。ジェイナスは付き合わなくてもいいよ」

兜に隠されて見えないジェイナスもため息を吐いた音を隠そうとはしない。

「嫌だよ。僕だって、どうせ死ぬなら、胸を張って死にたいからね」  
「瀑布を止めようと試みる人の戦いが始まるうとしていた。」

砂煙が落ち着き始めた。アルバトリオンの漆黒の体が煙の向こう側に見える。

フィリアはそちらへと歩き出す。

腕は痛んだ。血は止まらない。もう残された時間も手段もあまりに少ない。これが真正銘最後の戦いになる。

煌黒龍アルバトリオンは砂煙から遠く離れた場所にいた。そこは、弓を構えたハンターたちがいたはずの場所である。彼らの姿はない。古龍の足下に引き裂かれた肉片が転がっているだけで。

「こつちだ！」

怒鳴ると、古龍も耳は聞こえているらしい。フィリアに気づいてまずは首だけがこちらを向いた。正面向き合って右の角が根本から折れている。後は左を砕いて頭をかち割ってやればすむ話だ。

あと少し。あと少しで殺してやれる。

右手はもう物を掴むことさえできない。左手でアイテム・ポーチを探った。乱雑に突っ込んでいたため、少々手間取ったが、何とか丸薬を取り出すことができた。

摘めてしまえるほどの赤い丸薬で名前は怪力の丸薬。服用するとごく短い間なら普段以上の力を発揮できる。ほんの気休めだと笑いながら、フィリアはそれを口の中へ放り込んだ。

「おらこいよ！ それともこんなちっぽけな相手が怖いのか！？」

アルバトリオンが体ごと向き直る。全身の至る所から赤黒い龍毒が輝き始め、砂を踏む。煌黒龍がその全質量を傾けて突進を開始した。

炎王龍テオ・テスカトルの体が地響きを立てて倒れた。その屍に

寄りかかるように、聖堂騎士団副団長エールは背中を預けた。兜は無くしてしまった。額からは血が流れている。武器であるハンマーを手放すことなく握りしめているのは、遠目に古龍の群を確認できたからだ。

現在戦闘は小休止を迎えている。テオ・テスカトルたちが体制を整えようとしているにすぎない。もう一度総攻撃にさらされれば、果たしてどうなることだろう。

「エール副団長」

声をかけてきて、隣に立ったのは若い女性ハンターであった。

「何だい、アン？」

「団長は、どうして私たちをアルバトリオンと戦わせてはくれなかったんでしょうか？」

アンはかつて団長に救われたことがあったらしい。砂漠に連れてこられた時は文句を言っていたが、アンもアンなりに一緒に戦えることを喜んでいたのかもしれない。

若いからか、アンは表情を誤魔化すことを苦手としている。口を尖らせて不快感を明らかにしていた。

「特に何も考えてないと思うよ」

エールがつい笑ってしまつと、アンは脱力したように息を吹いた。

「そう言えば、そんな人ですよね……」

実際、戦術の組立だとか戦力の均衡だとかそんな戦略とは無縁の人なのだ。獵団の団長でそんなことができる人なんてそもそもいないだろう。もっとも、団長は輪をかけて苦手なのだ。

「まあ、僕たちは僕たちにできることをしよう。ここで古龍の群をくい止めるんだ。それが団長の助けにもなる」

気づくと、他の団員たちもエールの話に耳を傾けていた。誰一人無傷の人なんていなくて、それでもみんな武器から手を離そうとさえしていない。

みんな団長とともに戦えないことそれぞれ気にしていたのだろう。

「僕たちは確かにアルバトリオンと戦ってはいないよ。でも、僕たちの戦いが団長を、アルバトリオンと戦う人々を支えているんだ」

「今もなお闘技場で戦っているであろう団長のことを思い浮かべながら。」

「僕たちの戦いは、団長とともにある」

闘技場から岩山の間を亀裂のように伸びた小径に大勢のけが人が寝かせられていた。包帯やシートの数は決定的に不足している。ほとんどもが地べたにそのまま寝かせられただけである。

墜落したグツフルファクシ級から助け出された生存者たちである。決して広くない小径の左右に並べられた負傷者の間から一人のアイ



ルーが立ち上がった。

重量制限の厳しい飛行船にイルーが登場していることは決して珍しくない。

そのイルーは左腕が極端に短くなっていた。墜落の際に失ったのだ。その傷には汚れた布が巻き付けられているだけであり、痛むのか、足取りは重い。しかし、その動きに躊躇はない。目的とをはずきりと見据えたまなざしは闘技場の方を向いていた。

「メタトロン機関長……？」

小径の壁によりかかっていたイルーが目の前を通り抜けたその隻腕のイルーへと声をかけた。メタトロン機関長は部下である座っているイルーに軽く手を振る。

「世話の焼ける特務騎士殿がまだ戦ってるからにや。こんなところで寝ているわけにはいかないにや」

傷は痛み、体力は底を尽きかけている。

メタトロンの胸中に飛来したのはこれまでのことすべて。

ジェイナス特務騎士という不慣れな騎士殿を支えて王龍の監視を行っていた。実力の割に子どもっぽいところがあり、まるで弟のような騎士だった。

ソフィア特務騎士はその点すっかりとしていた。特務騎士としてもジェイナスの先輩であるこの騎士がいてくれたおかげでメタトロンの負担も大幅に軽減されたものである。

そして、ドンドルマの街に残してきた家族のこと。

「サンダルフォン、父さん、まだ負けるつもりはないからにや……」

息子の名前を呼ぶ。それだけで力が湧いてくる。ここで防衛線が突破されれば古龍はドンドルマの街にまで達してしまう。それだけは何としても阻止せねばならなかった。

小径を抜けると、闘技場ではハンターとアルバトリオンとの死闘が続いていた。散らばる人の遺体。残骸と化した武器。それでも、ジェイナスは、ソフィアは、特務騎士は戦っていた。

メタトロンは砂に足を引きずるようにして歩いた。闘技場の端には墜落したグツフルファクシ級の残骸が残されている。前半分が床に叩きつけられ、引きちぎれた後ろ半分が闘技場の壁に当たる部分に乗り上げられていた。完全な大破である。

幸いと言つべきか、徹底した破壊の様相は壁の亀裂を容易に見つけさせてくれる。メタトロンは亀裂から船内へと入り込む。

前半分に当たる場所である。機関士としてグツフルファクシ級の構造は完全に把握しているつもりであったが、崩壊した構造と散らばる残骸にそこがどの部分に当たるのかどうしても判断することができない。

平らな床など一切残されておらず、斜めに傾いた船床を蹴って進む。外からかすかに入り込む太陽の光が暗い船内に明かりを落とす。

そしてその光は、まるでメタトロンを導くかのように船内の一部

を照らしていた。そこには、まだ十分に可動すると思われるバリスタが残されていた。

すぐ近くに矢も落ちているはずだ。メタトロンは残骸を手当たり次第にどかすことから始めた。ただでさえ小柄なアイルーである。そして使えるのは右手しかない。何ともまどろこしい。

無理に残骸を引き抜こうとして、残骸が崩れてしまった。転がっていく割れた瓶をついで目で追うと、それは誰かの足下へで止まった。誰だろうか。乗員に見た顔ではない。若い娘で、褐色の肌やぼろぼろの衣服から避難民であることは容易に知れた。

何より、美しい顔をしていた。髪は潤いを失い、頬には火傷の痕が痛々しい。涙と鼻水を無理矢理拭いたように顔中が濡れている。この娘がどれほどの苦勞をしてきたかは想像に難くない。それでもなお娘の目は死んではいなかった。

それを美しいと呼ぶ以外どう表現できようか。

「私にも手伝わせて！」

少女の声は力を失っていない。エタトロンは微笑みかけた。

「私はメタトロン。お嬢さん、お名前は？」

「エリス」

古龍は絶大な力を持つ。その甲殻は堅く、その四肢は強靱。それ

は殺戮の本能につき動かされ、命を奪うことを最上の喜びとする。

人は弱く脆い。その肌はか弱く、肉体は脆弱。群れるほか身を守る術を知らず、群を守ることに多大な思いを傾ける。

古龍の力と、人の思いがぶつかり合っていた。

煌黒龍アルバトリオンが突進を開始する。首を低く下げ龍毒がその体を覆い隠すほどの光を放つ。

剛腕の魔女フィリアは駆ける。アルバトリオンが勢いに乗る前にその顔へ体当たりを食らわせ、そのまま受け止める。

それは、あまりにわかりきったことであつたのかもしれない。

その顔だけで人ほどの大きさがあるアルバトリオンを人の手で止めることなどできはしない。フィリアがどれほど強く地面を踏みしめようと砂に刻まれる轍が深さを増すだけである。

灼熱の霸王の行進は続く。

足がいつへし折れてもおかしくなかつた。力つき、突進に巻き込まれても不思議ではない。

勝算がなかつた訳ではない。フィリアの着るヒメロSFは対古龍を想定した装備。デザインは妙に気取っているが、である。装備そのものは頑強で、人の形を保つようそれぞれのパーツが動きを阻害しない程度に組み合わせられている。突進を受けても、足が砕けても外からヒメロSFが支えてくれる。まるで昆虫にでもなつた気分、フィリアは最後の戦いに臨んだ。

煌黒龍は強大である。

どこかの骨が砕けちったような嫌な音が耳に届いた。体中が痛くて痛くないところがわからない。堪えきれず吐き出したのは真っ赤な鮮血。肺でも突き破られたのだろうか。

「だめか……」

力が抜けていく。足が徐々に砂から浮き上がっていくことがわかる。苦しい。痛い。このまま力を抜いてしまえば楽になれるだろうか。

それでいいのだろうか。

「フィリアさん！」

どこからともなく声が届いた。突如アルバトリオンの勢いが衰える。首を動かすことなんてできない。眼球だけを動かして上を見上げる。アルバトリオンの翼に拘束用バリスタが巻き付き、ロープが張りつめていた。

ロープの先はグツフルファクシ級の残骸につながっている。そこにいたのは、以前自殺を思いとどまらせた難民の少女だった。名前は、確かエリスと言っただろうか。

「あいつ……」

まだ生きていたんだな。戦ってくれていたんだな。

ならば、負けてなんかいられない。

全身に力が戻ってくる。骨は砕けているかもしれない。それなら筋繊維だけでいい。筋肉が引きちぎればヒメロスFに丸投げすればいい。

フィリアは足を踏みしめる。力を込めて後ろへと投げ出す。全身でアルバトリオンのすべてを押しとどめる。

「負けてたまるか〜！」

木が軋む。床が震える。

「バリスタがもたないにゃ！」

元々撃沈された船の残骸である。バリスタ用拘束弾を発射できただけでも御の字とすべきところなのだろう。

だが、エリスはそれだけでは満足しなかった。バリスタの操縦桿から決して手を離そうとせず必死に押さえようとしていた。

「離すにゃ！」

「嫌！ 絶対に嫌！」

メタトロンの忠告に効果はない。

一際大きな音がした。床が弾け、バリスタが土台ごと船外へと勢

いよく引きずり出される。砂地に叩きつけられ、砂を盛り上げながらなおバリスタは引きずられていく。

それでもエリスは手を離そうとはしなかった。

緊張したロープに引きずられるままバルスタは砂を裂いてアルバトリオンに引っ張られていく。自分の重さが少しでも助けになることを願って。

口に砂が入ることもかまわず叫んだ。

「フィリアさんは〜！」

こんな古龍なんかには負けたりなんてしない。

バリスタの拘束が軽減し、アルバトリオンは勢いを取り戻した。このままうっとおしい虫けらを、フィリアを踏み潰してしまおうとその足に力を込めた。

アルバトリオンは失念していた。虫けらはもう一人いたことを。

フィリアには姉がいた。避難民を守るために命を落とした誇り高い姉が。

古龍にとっては取るに足らない虫けらが残したのは傷。フィリアにとってかけがえのない姉は、アルバトリオンの爪を確かに折っていた。

力を込めた瞬間、激痛が足から苛烈に立ち上る。

古龍の天秤を吊り下げる。殺戮の欲求か、それとも苦痛の軽減か。本能は優先順位を有している。死は何にも勝る苦しみである。そして痛みは死を近づけるものとして、本能は忌避を命じる。

アルバトリオンは踏み込むことができなかった。痛みに打ち勝つことができなかった。

一瞬の躊躇。加速の遅れ。

煌黒龍はそれを何ら問題とはしなかった。力では圧倒的なのだ。簡単に殺せてしまえるのだ。痛みを堪えながら顔を強く突き出す。

すると、フィリアの体はたやすく突き飛ばされた。砂の上を糸の切れた操り人形。手足がおかしな方向に曲がっている。のように転げていく。

また一匹殺した。

愉悦が脳から与えられる。アルバトリオンは満足し、ゆえに気づくことができなかった。突進の勢いがすっかり殺されてしまっていること。そして、大剣を構える二人のハンターがすぐ目の前にいるということに。

聖堂騎士団副団長エールは仲間を失いながらも戦った。それは、仲間を信じるという思いがあったからこそ。

神託の魔女フィロソフィアは煌黒龍アルバトリオンの爪を砕いた。それは、仲間を助けたいという思いがあったからこそ。



避難民エリスはどれほどの苦しみも乗り越えようとした。それは、命を助けてくれた人に応えたいという思いがあったからこそ。

剛腕の魔女フィリスは灼熱の覇者の動きを止める。それは、自分に託してくれた様々な人の思いがあったからこそ。

本能は死に向かうことを許さない。人は仲間のためならば時に本能さえ乗り越えることができる。巨大な力を持ちながらも古龍は本能に従うが故に、死の恐怖を乗り越えることができなかった。

そして、神速の魔女ソフィアと龍殺しの騎士ジェイナスはそんな人々の思いを信じた。

エールが戦い、アルバトリオンを闘技場へと追い込んだ。

フィロソフィアが砕いた爪は、最後に妹を助けることとなった。

エリスが立ち上がらなければ、フィリアは気力を保ち続けることができなかったかもしれない。

ソフィアとジェイナスがフィリアを信じたことが、今結実しようとしていた。

黒い雷が剣に轟く。輝きの稲妻が剣に瞬く。勢いを失ったアルバトリオンの首は、まさに差し出されたかのように二人の間合いにあった。

一気に解放される力。白と黒。二色の雷が混ざり合い高め合い、互いに手を取り合うように振りおろされる。太陽を押し退けるほど

の光が放たれ、付近の砂が下から炙られたように飛び跳ねた。

光が止んだ。静寂が取り戻される。

そこにはアルバトリオンの首があつた。角を両方とも失い、その目にはすでに光はない。裂かれた額から噴水のように吹き出した血が徐々に勢いを失うと、その全身が赤黒く輝き始めた。これまで抑えられていた龍毒が一斉に反乱を起こしたように古龍の体を内と外から焼いていく。

灼熱の覇者が、絶対的な絶望が赤黒い光のなか徐々に輪郭を崩していく光景は、思いが力を凌駕した瞬間であつた。

## 第二九話「真心を君に」Malice of Mountain」

北風が猛る。太陽が照りつける。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦が船側から煙をたなびかせながらも前進する。煙が縦ではなく横に伸び、その速度を証明していた。

甲板には夥しい数の古龍の屍。その間にひしめく人の死。スレイプニルがどれほどの速度を出そうと血の臭いは船にこびりついて離れることはない。

元は白かった。パールF?と呼ばれる対古龍の装備は全身が赤く返り血で染まり、かつての色を思わせる場所は少ない。

セントポーリアは王女である。ハデス国王の娘として生まれ、何に自由ない生活を送ってきた。それがここでは何の役にも立っていない。何も特別なことはなかった。皆と同じように傷つき膝をついている。その膝は血溜まりに浸り、それでさえ血糊一つ付着していない狩猟笛が印象的であった。

そして、王女の周りには炎王龍テオ・テスカトルが倒れ、風翔龍クシャルダオラが力を失っている。すぐそばには女性が光を失った目を見開いたまま倒れていて。

頬には傷がある。古い傷で、この甲板を守っていた特務騎士と同じ傷。セントポーリアはその開かれたままの臉にそっと指を当てて瞳を閉じてあげた。

北風が猛る。太陽が照りつける。

スレイプニルの左、それは北であり風が蠢く。風翔龍の群が黒雲を引き連れ飛行船を付け狙う。右側、南では太陽が轟く。炎王龍が群をなして王女の船を追う。

クシャルダオラが気弾を放つ。テオ・テスカトルが炎を塊として撃ち出す。木くずが飛び散り、火の粉が飛び散る。そして、空を揺るがすほどの音が響く。

スレイプニルが揺れる。傷だらけで、まるで血を流すかのように火と煙を垂れ流しながら。

傷だらけの女神はそれでも前へと突き進む。その船首に紅衣の女中に乗せたまま王国の船は進み続ける。

永久に平たい砂の海の上を。

砂に刻まれた巨大な轍の上を。

そして船はついに王の姿をその眼に捉えた。

巨大な砂原を引き裂きながら進む漆黒の王。その角はいまだ二本が深い蒼の鈍い輝きを放つ。五〇〇年に一度目覚める度に文明を滅ぼし、命を踏みにじった王の姿を捉えた。

メイドの瞳は、王をただただ眺め続ける。

巨大な炸裂音。一隻のヒミンブリユード級が撃沈された音である。

すでに戦場はンガイの森を通り抜け、その南、ドリームランド峽谷とドンドルマ地方の山岳帯を結ぶ名もない山脈へと移っていた。

狂ったような光景である。

天を憎むように鋭くそそり立つ山々が延々と連なる。その山肌は名状しがたい色に包まれ、いびつな突起が並ぶ。

何もかもが狂っていた。

狂気の山脈である。ここに、富岳龍ヤマツカミは潜んでいた。

ルルイエ山脈のように極地に存在するわけではない。ンガイ村からは遠く遠く見えていたかもしれない場所である。しかし、誰もが立ち入ることがない場所であった。

何らメリットがないのだ。

北側は深いンガイの森が広がっている。人は森の表層を切り開いて交易路として利用していたにすぎない。南側はセクメーア砂漠。オアシスが少なく、里は発展することはなかった。

立ち入る労力に比べ、その山脈で得られるものは何もない。地図に何気なく書き込んでしまうほどその山脈は人の世界に近く、だから誰もが思いこんでいた。ここには謎はないと。

それは思いこみでしかない。

すべてを知り尽くしたようできて、しかし、未知はそんな人の油断に入り込む。

狂気の山脈から現れた古龍はまさに狂気の具現そのものであるかのようである。

体中に苔を生やし毒々しい緑に覆われている。骨格など想像のしようもない。手でも脚でもない。太い触手四本を分厚い体に等間隔に取り付けられている。翼もなく浮遊しては、触手をだらしなくつり下げていた。

付近を飛び回る風翔龍クシャルダオラとも違う。古龍の中の異端それが富岳龍ヤマツカミ。

狂気の偽王がその触手を振りおろす。ヒミンブリユード級輸送船が気球ごと叩き潰され轟沈させられる。

セクメーア砂漠へと補給物資を運ぶヒミンブリユード級はその名の通り輸送船である武装を持たず、船速も誉められたものではない。

ヤマツカミとそれに率いられるよに飛び交うクシャルダオラの群。クシャルダオラがその機動力でヒミンブリユード級にまわりつきその動きを止める。ヤマツカミの一撃は動けない飛行船をたやすく叩き割る。

ンガイの森で古龍の群と遭遇してから何度も繰り返されてきた光景である。

古龍は狼である。ヒミンブリユード級は羊である。補給物資をその腹にため込んだ羊に狼が襲いかかる。

狼に襲われた羊にあらがうことは許されない。ただ逃げることのみが求められる。

ヒミンブリユード級は逃げていた。ただただ南へと。

ヒミンブリユードは羊である。振り向かず、省みず、仲間の下へと物資を届けるために全力で駆ける羊の群である。

「余計なものはすべて捨てる。最低限必要なものだけ持っていくんだ！」

ヴァルカンは声の限り指示を飛ばす。ンガイ村村長の息子は自らも携帯砥石　武器のメンテナンスに使用する　を箱から掴み上げては次々と放り捨てていた。最後に武器を抜いたのがいつかもわからないこのハンターの手には躊躇はない。

ほかのハンターたちもそれにならい、わずかでも必要でないと考えられるものを次々と放り捨てていた。

重量を削ればそれだけ船体が軽くなる。軽くなれば速度を上げることができた。

たとえ、焼け石に水であるとしても。

ヴァルカンの飛行船と平行して進んでいた飛行船があっさりとクシャルダオラの群に取り囲まれ空中で分解させられた。木材と積み荷、それに混ざって人が空へと投げ出される。

古龍の鳴き声と人々の悲鳴が狂気の山脈に木霊する。

仲間がまた命を落とした。携帯食料を投げ捨てようとした手のままヘルメスは固まっていた。ハンター装備しかしていないような新米ハンターにとって、その光景は壮絶の一言に尽きた。捨てなければならぬものを掴んだまま、ヘルメスの手は力なく垂れ下がる。

「なあ、ヴァルカン、俺やっぱ怖いよ。本当なら今すぐにも逃げ出したい」

もういい年なのに、その瞳には涙が溜まっていた。その目には日煙を上げながら高度を急速に落としていく飛行船や、古龍に首を噛みきられた怪鳥イヤンクツクの姿が映っていた。

そして、つかず離れず船団を追いかけてくるヤマツカミの姿は敢えて見ていない。

「でも、誰も逃げ出してくれないからタイミングがわからないんだ……」

飛行船も鳥竜たちも誰一人として戦線を離脱しようとする者はいない。ヘルメスにはわからなかった。みんなは怖くないのだろうか。もしかすると、自分だけが怖がっていて、たった一人だけ臆病なだけなのではないだろうか。

ただ立っていることもできなくて、ヘルメスはいつ後ろへと座り込んだ。座ったヘルメスに影が落ちた。誰かがすぐそばに立ったのだ。



首を上げると、そこには青い鎧を着たアレスがヘルメスが捨てるはずであった食料箱の前に立っていた。わざわざ一つ一つ投げ捨てるような面倒な真似はせず、一抱えもある箱ごとアレスは投げ捨てる。

その横顔には額から右目にかける傷が見えた。

「逃げ場所なんてないからな。古龍たちをここで引き留めなければ故郷の里が襲われる」

恐怖なんて無縁。船が唐突に揺れても、アレスは涼しい顔をしていた。ヘルメスは体を強ばらせているのに。

「アレスさんは特務騎士なんだろ。やっぱり、特務騎士ってみんなすごい人ばかりなんだろうな。俺みたいに怖くてどうしようもないようなくずなんかじゃないんだろ……」

アレスはヘルメスのことを見ようとはしなかった。ただ立ったまま、戦争が行われている空を眺めている。

「メイド服のまま狩猟に出向く特務騎士がいる」

唐突に投げかけられた一言。何度噛みしめても意味がわからない。メイドというと、給仕の女性が身につけている赤い制服のことだろうか。もっとも、ほかに思い当たる単語はない。

「何の話です……？」

「人と顔を合わせることができない特務騎士もいる」

慰めてくれているのだろうか。まるで独り言に興じているようにアレスはヘルメスを見ようとはしていない。

「特務騎士とて異世界の住人というわけではない。ほんの少し、乗り越えた壁が違うだけだ。赤眼の魔女と自らを呼ばせている七人の魔女の一人は以前古龍と戦った時怖くて怖くて仕方がなかったそうだ。逃げ出してくてどうしようもなかったそうだ。だが、そいつは戦いを乗り越えた。逃げ出したい気持ちを必死に抑え、最後の最後まで戦い抜いた」

ようやくアレスはヘルメスのことを見る。見下ろされてはいても見下されてはいない。

「特務騎士は強いから認められるわけでない。己の気持ちに打ち勝つたからこそ力を認められた。弱いことを恥じることはない。だが、弱さに負けることはこの上ない不名誉なことだ。お前はまだここにいる。逃げ出したい思いを必死にこらえ、たとえ腰が抜けていようとな」

ヘルメスへと差し出された手。そつと握り返すと、その手は力強い。片手だけで床から引き上げられてしまった。不自然に前のめりになる。それでも、足は震えていない。立っていることができた。

「皆同じだ。弱さを恥じるな！」

「は、はい…」

つい敬礼してしまう。もったも、敬礼の仕方を習ったこともないヘルメスの姿勢はいい加減であった。アレスはそのことを指摘しようとはしない。ただ満足そうに歩き出す。

残されたヘルメスは意を決したようにその両頬を自ら叩いた。すぐさま近くにあった箱に目をつけると、飛びつくように掴み上げ、空へと放り投げる。

アレスは再び視線を空へと戻した。いつの間にやら、隣では手すりに寄りかかるヴァルカンが笑いながらアレスのことを見ている。

「おっさん、俺の時はそんな優しい言葉かけてくれなかったよな？」

「その分アマランサスに甘やかされていただろう」

かつてンガイの森で行われた狩猟の光景。それをこの二人は記憶として共有している。

「お前は怖くはないのか？」

「怖いさ。でも俺だってハンターだ。この世界のために働く一人なんだ。ここが踏ん張りどころってことくらいわかってるつもりだ」

アレスは小さく息を吹いて微笑みを作った。以前はモンスターを前にして動くことさえできなかった若造もずいぶんと変わったものだ。

「モスに踏みつけられていた割に言うようになったな」

「それは過去の話だ。俺はすでにモスを超えた」

「気取って言うことか？」

アレスが小さく笑うと、ヴァルカンもまた含んだ笑いを返した。

針が落ちた音さえ響きわたる。そう錯覚させるほどの静けさに包まれていた。ヘリオスはその顔に走るしわに静寂を染み込ませる。

常時二〇を超えるクルーがグングニル級機動要塞のブリッジにはいる。今はそれに加え、ハンターたちが艦長席の前に整然と整列していた。

静寂と沈黙とを呼吸し、ヘリオスは席から立ち上がる。

瘦身であり、力強さとは無縁の男である。全飛行船中最大の攻撃力を誇るグングニルの艦長でありながら弱い。それは違う。肉体的な強さなど持つ必要がそもそもなかったのだ。

その声は力強い。

「諸君、私は自分を恥じている。ミスカトニク王国のスレイプニル級の艦長が王女様と聞かされた時は吹き出したものだ。小娘の道楽ここに極まったかとな」

ヘリオスは言葉を区切ると、再び沈黙と静寂に包まれる。発せられた声のすべてが居並ぶ兵に吸い込まれるように消えていく。

「私は自分を恥じている。客観的な事実をおざなりにしてまで姫を愚弄したことを。我々はすでに王龍テラドミヌスの姿が捉えられている。諸君等の体にはいまだ英気で満たされていることだろう。それはセントポーリア王女の奮戦と献身の賜物である」

誰も声を発することはない。その身にたぎる闘志を封じ込め、ヘリオスの言葉に耳を傾けている。

「諸君、私は自分を恥じている。姫への非礼、慚愧に耐えない。私は償いをしたい。姫の戦いに報いたいのだ。そのための機会を諸君等が与えてくれることを期待する。我らが祖国のため、この世界に息づく命のため、何より姫のために、諸君等の奮闘を期待する」

今まさに始まるうとしているのは王龍テラドミヌスを討ち滅ぼすための策。

「神の鉄槌作戦を、ここに開始する！」

王龍は突き進む。五〇〇年前のかつて、王龍テラドミヌスはそう呼ばれてはいなかった。ハイパーポリア文明の民がこれをどのように名付けていたか定かではない。まるで名を呼ぶことを忌避したかのように壁画にさえその名は刻まれていなかった。

水を求め目を覚ます太古の巨龍は文明すべてを滅ぼす。

ドルームランド峡谷のその地下で眠りにつき、地下水の枯渇に伴い目を覚ます。王龍が地下水を呑み尽くすのか、それとも周期的に減少するか定かではない。事実として地下水は枯渇し、その異変は群発地震として地表に現れた。

地震はドンドルマ地方の山岳帯の一部をつき崩し、砦蟹シエンガオレンがドンドルマの街をその行路としてしまった。

地下水の枯渇は大量の水を必要とするテラドミナスの目覚めを促す。

しかし、セクメーア砂漠は水を持たぬ大地である。翼持たぬ者には悠久の牢獄である。大きな河川を持たず、切り立つ山々に囲まれる。

狂気の山脈。ドリームランド峡谷。ルルイエ山脈。インスマス火山帯。そして、ドンドルマ地方。これらの山岳に囲まれる巨大な盆地。それがセクメーア砂漠であった。

王龍テラドミナスは水を求めた。翼持たぬその身で砂の海を泳ぐ。行く先はいつも決まっている。豊かな水を湛える湖である。砂漠の中央に横たわるハリ湖である。

命は水なくしては生存できない。それは人も竜も、古龍も変わらない。

人もハリ湖の水を恵みと感じていた。過酷な砂漠の環境であつても生活の場を求め、ハリ湖を水源として文明を作り出した。幾度も、何度でも。

王龍テラドミナスの旅路は殺戮と破壊そのものである。ハリ湖が枯渇すれば文明は生きてはいけない。人々は必死に抵抗した。文明のすべてを持ち寄り、命と知恵のすべてをとして。

その度に文明は踏みにじられ、ハリ湖は枯渇させられてきた。

王龍は殺戮と水に満足してドリームランド峡谷へと戻る。また眠

りにつくために。

それから五〇〇年。ドリームランド峡谷から地下を通って流入する水がやがてハリ湖を蘇らせる。そして、水がある場所に文明は発展する。新たな文明が興り王龍の殺戮が風化を始めた頃、五〇〇年の時が立つ。王龍が目覚め、文明が滅ぼされる。

幾度となく繰り返されてきた滅び。後にセクメーア砂漠に住み着いた人々は文明の残り香からその惨状を垣間見るほかない。現代、ハイパーボリア文明の壁画に古龍の姿を見たように。ピースの足りていないパズルを、それでも組み上げて全体を予想するように。

しかし、今回は何か違った。ハリ湖は再生していない。文明はセクメーア砂漠中央に再興することはなかった。

王龍テラドミヌスは止まらない。ハリ湖が再生されていないことを知るなり、初めてその足を砂漠東側へと伸ばした。これまでどの文明もどんな人々も体験したことのない異変である。

王なる古龍が砂漠を横断しようとしている。その先にはドンドルマ地方の山岳帯が、そしてその奥には肥沃な大地が広がっている。レムリア大陸の東側は豊かな自然と潤沢な水に覆われた大地である。

水を求めた古龍がその世界を初めて見た時どのようなことを感じるだろうか。永久の牢獄から抜け出した囚人は一体何を望むだろうか。

誰も知らない。誰にもわからない。

ただ誰もが理解している。王龍を止めなければ、大地の帝王を止

めなければ恐ろしいことが起こると。誰もが夢想だにしなかったことが起こると。

王は突き進む。その姿は威風堂々にして天変地異。その領域は急速に拡大を続け、古龍たちはその箱庭の中でのみ狩りを許される。

古龍が安全と判断する活動領域。王の領域がレムリア大陸の中央を目指していた。古龍たちは、この大陸を蹂躪することが許される。

誰もが理解していた。王龍をここでとめなければならぬ。人も竜もない。この大地に息づくすべての命が脅かされると。

王龍テラドミヌスはただただ砂を引き裂き突き進む。



### 第三〇話「龍に挑む蟻」Fortresses」

人も竜もない。この大地に息づく者すべての敵である。

命ある者は皆武器を取れ。負ければすべて滅ぼされてしまうのだから。

傷つき力尽きた者は翼を休めよ。いまだ戦いやめぬ者にすべてを託すこともよい。

敵も味方もない。古龍とそれ以外の区別のみが突きつけられる。

一切の妥協は許されない。完全な勝利か、でなければ徹底的な蹂躪。

恐怖を捨てよ。本能に従うべきではない。古龍は恐ろしい。希望をことごとく挫き、力はあらゆる生物を凌駕する。命を惜しんで対峙できる相手ではない。

すべてを捧げよ。すべてを捧げ、そして散っていた者、散りゆく者への手向けとして。

王龍テラドミヌスをとめよ。旧き支配者から奪い取ってみせよ。この大地を。新たな王者たる尊厳を。

砂へと突き立てられる巨大な槌。くすんだ光沢を持つ暗灰色の脚が砂漠を震わせ砂を吹き飛ばす。生気を失った巨大な龍の顔が後ろ

向きに足音を轟かす。

ドンドルマの街にいた者なら誰もが恐れおののいた光景そのものが砂漠を闊歩していた。

砦蟹シエンガオレンがその折り畳まれた四本の脚を器用に動かして砂を踏む。

ドンドルマ地方の山岳帯を徘徊しているはずのシエンガオレンが何故セクメーア砂漠にいるのか、それはもはや愚問である。

巨大な龍の頭殻を背負った巨大なヤドカリが進む先には砂嵐が吹き荒れていた。今この大陸を脅かす古龍の王がそこには潜む。砂嵐を突き破り二本の深蒼の角が突き出された。赤黒い龍毒の輝きが放たれたかと思うと砂が消し飛び王龍はその姿を現した。

文字通り砦ほども大きさがあるシエンガオレンでさえ王の威風の前には小さく思えた。せいぜいが王龍の頭程度の大きさしかないのである。その対比は巨大なことで知られる魚竜ガノトスと人だろうか。そして、ガノトスの突進を止められる人などいない。

シエンガオレンは一对の鋏を砂漠へと突き立てる。鋏が巨大な楔として打ち込まれる。四本の脚はしっかりと砂を踏みしめ、その姿はまさに堅牢な要塞である。

対する王龍は嵐そのもの。何よりも大きく、何よりも破滅。龍毒が砂を、大気を、すべてを苛みながら王の体を包む。

王は角を高く突き上げた。頑強な下顎が砂を受け止め、盛り上がった砂山は砂そのものがシエンガオレンへと向かっとうようである。

歩く砦と動く大地。

人とくらべたならあまりに巨大な両者は正面から激突する。巨大な銅鑼を巨人が力一杯殴りつけたような轟音が響く。飛び散った砂は霧のようにあたりに立ちこめた。

ガノトトスを止められる人はいない。

シエンガオレンをそのまま押ししてテラドミヌスは突き進む。上へとかざされていた角が押しつけられるようにして砦を潰さんとする。大木のような脚が悲鳴を上げながら砂の上を滑っていく。

砦では王を止めることはできない。何とも皮肉の効いた話である。ドンドルマの城壁では王龍を止めることはできないことを意味しているのだから。

だからこそ止めなければならない。今、この場所で。

シエンガオレンが鉄を振り上げる。その強度、質量、速度でドンドルマの街を脅かした楔が交互に王龍の背中へと振り下ろされる。風切る音が甲高い。衝突するは金属音。鉄は浅く　あくまでもシエンガオレンを基準として　突き刺さり、引き抜かれると甲殻の欠片が散った。

端から見れば緩慢とも思える蟹の一撃は、その実凄まじい速度で次々と王龍へと突き立てられる。

巨大な角笛を思い切り吹き鳴らしたような重い声が響いた。王龍の悲鳴である。

蹂躪されることは当然なのだ。それほど、王龍は果てしない。

最後まで抗うことは必然なのだ。人も竜も。負ければすべてを奪われるのだから。

人もまた、最後の戦いを始めようとしていた。最強の王国であるシュレイド王国が誇るグングニル級機動要塞グングニルが王龍の巨大な背へと向けて高度を下げていた。

「減速準備。 相対速度を合わせることを忘れるな」

グングニルのブリッジには艦長であるヘリオスの指示が飛ぶ。優秀なクルーの復唱が聞こえるまでにさして時間はかからない。

「減速準備！」

体を感じる前へと引きずり出されるような加重は、グングニルが減速を始めた証である。ヘリオスは艦長席の肘おきに掴まるようにしてそれに耐えた。

現在、ヘリオスは途方もなく馬鹿げた作戦を実行しようとしてた。王龍の背中に飛び乗り、直接爆弾を仕掛けようというのである。

対巨龍爆弾。 大型の古龍との戦いに備え急造された試作品である。通常の大タル爆弾との違いは、狩猟に用いることができないほどの爆発力を高めたことにある。その反面、非常に危険なものになってしまった。そのため、大タル爆弾のような起爆型を採用すること

ができず、時限式が採られている。設置後、一定時間で爆発するのである。

ここに、この爆弾の欠点があった。爆発力が高く設置型。そのため、設置者が逃れることが十分にできるだけの時間をおいて爆発するよう設計せざるを得なかった。結論として、起爆までの時間が長すぎる。これによって、王龍の進路上に設置するなどの使い方は安定性に欠くとして却下された。

確実に王龍の間近で爆破させなければならぬ。

こんな都合のよい話を実現可能な段階にまで引き上げてくれたのはグラジオラス特務騎士のお手柄である。もっとも、いつもうまい話には裏がある。

そう、王龍の背中にハンターが爆弾を運び、直接設置することが求められた。

そのことを聞かされた時、自分はどんな顔をしていただろうか。思いつくと、ヘリオスは自ら苦笑した。悪魔の山に登ったとされる魔女は、まさに怖いものを知らないようだ。

現在、グングニルは王龍と速度をあわせ、その背中に着地しようとしているのだ。

操舵手の緊張を伝わってくるようである。わずかでもタイミングが操縦が狂えば王龍の体に弾き飛ばされてしまう。シエンガオレンが抑えている間にすませなければ作戦の難易度は格段に上がったしまう。

ヘリオスは椅子に肘をつき、そのまま頬杖をついた。今指示すべきことなど何も無い。操舵手は自分のすべきことを理解している。

船が小刻みに震え、木が軋む音がする。そして、船を襲う一際大きな揺れ。歯を食いしばるうとも自然と漏れていく声がブリッジに浸る。

そして、操舵手が叫んだ。

「着地に成功！」

「降下用意！」

ヘリオスは叫ぶ。労いの言葉は必要ない。操舵手の努力と成果に報いることこそが最大の報償であろう。

「降下用意！」

クルーを通じ、左右　グングニル級は双胴船である　の武器床へと作戦開始の合図が伝えられる。

グングニル級はテラドミノスの背鰭に跨るようにして着地に成功している。王龍の背が揺り動かされる度、グングニル級もまた揺れる。いくら世界最強の飛行船とは言え、大型飛行船の構造など張りばて　軽量化のため　に近い。長くは持ちそうにない。

「グラジオラス特務騎士殿。後はあなたにお願いする他ないようだ」

興味深い話をいくつも聞かせてくれた女性へと、ヘリオスは独り言として話しかけた。

右の武器床　船底に位置する兵器の保管、及び降下を行う場所である　では、薄暗い中、異様な光景が広がっていた。集められた大勢のハンターたちが自分の胴回りよりも遙かに大きな黄色いタールを背負い、前傾姿勢のまま整列していた。

対巨龍爆弾とそれを運ぶ部隊の者たちである。その中に七人の魔女である、博識の魔女グラジオラスの姿もある。

その装備はハンター用の防具へと変えられている。キノス・シリーズと呼ばれるフィロソフィアたち三姉妹が身につけていたものや、スノードロップのルディア装備と同じドレス調のデザインは等しい。ただし、その色は紫と黒を基調とし、グラジオラスの雰囲気とあいまって落ち着いた印象を与える。クラフトFがその名である。

王龍が背を震わせると、その巨大な背がすぐ真下にあることを伝えて船体が大きく揺すられる。

爆弾のせいだけでだでさえ重心が高い。グラジオラスがつい後ろに倒れそうになって、横から若いハンターに支えてもらうはめになった。自分よりも一〇は若いであろうハンターに向けて、つい笑ってしまう。

「やっぱり私も歳ね……」

「いえ、そんな、まだまだお若いですよ」

「あら、ありがとう」

軽口に笑いながら応じてもいいだろう。周囲のハンターたちもこのやりとりには笑みをこぼしていた。まるで、これから始まる戦いを前に最後の息抜きを楽しむように。

「降下用意！」

誰かがブリッジからの声を伝え、その途端、笑い声が消え失せる。列を維持したまま壁へと向かって一斉に移動する。

壁が外へと向けて倒れ込む。すると壁がそのままリフトの役割を果たし王龍の背への足がかりとなる。

「作戦開始！」

この言葉を合図に一斉に走り出す。

グラジオラスはその先頭にいた。リフトを踏みしめ震える大地へと立った。近くで見る王龍の甲殻は黒曜石の輝きを放ち、寒気がするほど美しい。無論、見ほれているつもりはない。王龍の頭の方へと走り続ける。

その時であった。足に鋭い痛みがあることに気づいたのは。

この甲殻は龍毒を絶えず放っている。ブーツを通り抜けた龍毒が足にまで浸透し、痛みを与えているのだ。耐えられないほどの痛みではない。しかし、集中力は確実に削り落とされる。

後ろからの短い悲鳴をグラジオラスは走りながら聞き流した。



恐らく、龍毒に気をとられた誰かが足を滑らせたのだろう。すぐに悲鳴が途絶えたところを見ると投げ出されたに違いない。助ける術も時間もない。

「落ちた人は放っておきなさい！ 各員、持ち場へ急いで！」

グラジオラスは振り向こうとさえしなかった。非情であることを否定しないが、背負った爆弾が邪魔で後ろなどそもそも向きようがない。

追ってくる足音に乱れは感じられない。皆、何かを犠牲にする覚悟はできている。

少しでも早く、少しでも多くの対巨龍爆弾を設置しなければならぬ。

漆黒の大地は、ところどころ起伏が激しく、まるで畏か何かのように小さな突起が生えた場所が散見された。足下を確認しながらでなければとてもではないが走れた場所ではない。

足下に気をとられすぎると全体を見逃してしまう。テラドミヌスが軽く身悶えした。それだけで人には大きな衝撃である。体が軽く数mほど浮き上がり、そのまま背中へと叩きつけられる。

背負った大タルが押し潰してくるように重い。クラフトFのおかげで傷らしい傷はないが、危うくつき落とされてしまうところだった。地面の突起をとっさに掴んでいなければどうなっていたかわからない。

ハンターの中には振り落とされてしまったものもいることだろう。

「まさに動く大地そのものね……」

王龍の背中に両手をつけて立ち上がろうとする。その手にさえ、龍毒は痛みを与えてくる。

ここは人が走ることでできる場所ではなかった。

富岳龍ヤマツカミがその太い触手を勢いよく振り下ろす。飛んでいた眠鳥ヒプノックを巻き込むとそのままヒミンブリュード級輸送船の気球へと叩きつけられる。人の数倍もあるヒプノックは軽々と気球へと叩きつけられ、触手は気球ごと強打する。

気囊の破裂音がヒプノックの悲鳴をかき消す。哀れな鳥竜はその褐色の体毛を赤く染めて飛行船の残骸とともに狂気の山脈へと落ちていく。

こんな光景はすでに何度も見せられた。

「火竜の翼膜でできた気球を一撃とはな。鳥竜ではひとたまりもない」

アレスである。ただただプロペラを回転させ、少しでも距離を稼ごうとするヒミンブリュード級の上で憎々しげにヤマツカミを眺めたまま座っている。

剣士であるアレスにできることはない。

また一隻が風翔龍クシャルダオラの攻撃によって撃沈される。船体が限界を超え分解し、重しを失った気球だけが空高く上がって行った。

武装を持たないヒミンブリュード級は仲間を盾にしても進むほかない。

このヒミンブリュード級のすぐそばでも、一隻落ちようとしていた。すぐそば、やろうと思えば跳び移ることさえできる距離にまで無理に並んでいるのは、偶然ではない。

「その船は保たない。早くこちらに跳び移れ！」

ヴァルカンが声を張り上げていた。隣接する飛行船は側壁が剥がれ内部が露出するほどの損傷を受けていた。燃料の燃石炭が引火したのか、ところどころ火が噴きだしているほどである。

素人目にも損害が深刻であることは見て取れる。もって数分といったところだろうか。

乗組員たちは躊躇したように顔を見合わせている。一向に跳び移ろうという気配が見られない。

「何してるんだ！ 急げよ！」

ヴァルカンの言葉に声を上げたのはリーダー格と見られる男である。乗員の中で頭一つ分背が高く、単に目立つというだけかもしれないが。

「俺たちが乗ればその分船が重くなる。それはできない！ 誓って

くれ！ 必ず物資を届けると！ 何があっても届けると！」

アレスは座ったまま彼らの覚悟を聞く。死を恐れていないはずなどない。甲板に立つ彼らは決してこちらを見ようとはしていない。初めから助けなどないと思いきもつとでもしているように。

死の恐怖と使命感とが拮抗している。唯一声を上げる男だけがしっかりとヴァルカンを見つめ、その声に震えは感じさせない。

「何に對してもいい！ 誓っ……！」

ヴァルカンの見つめる目の前で、男は死んだ。ヤマツカミがその触手を容赦なく振り下ろしたのだ。上空の気球部分が甲板に押しつけられたかと思うと、彼らの姿を隠す。古龍の一撃は一切の手加減なく振り抜かれた。船体が炸裂したように崩壊し、巻き起こる突風はアレスたちが乗るヒミンブリュード級まで揺るがす。

飛行船のすぐ後ろには人の胴体ほどもある巨大な眼がこちらを覗き込んでいた。

この世のものとは思えぬ不気味な顔である。苔にまみれた異形の塊に張り付くように眼が埋め込まれ、髭を思わせる一對の細い触手が揺れていた。その姿はヒミンブリュード級 最小の飛行船とはいえ を凌駕するほどに巨大。

ヤマツカミは触手を持ち上げる。しなる手のように巨大な肉の塊が起きあがる。今度はこの船を沈めようと言うのだ。

「回避急げ！」

アレスは即座に指示を飛ばす。それを受け止めるべき操舵手  
ヒミンブリュード級には室内ブリッジはない　　はヤマツカミの姿  
を見たまま動けないでいた。遠目でもえていることがわかる。もは  
や抵抗することさえ諦めてしまったらしい。

古龍とはそれほど強大な存在なのだ。

このままでは船は沈められる。アレスは自ら舵を取ろうと立ち上  
がる。その時にはすべてが遅かった。

「諦めんな！」

この言葉とともに、操舵手を突き飛ばした者がいる。ヴァルカン  
だ。

「あの人たちそれこそ決死の覚悟で俺たちに思いを託してくれたん  
だぞ。そんな俺たちがあっさり命捨てちまったら、あの世で何て言  
い訳すんだよ！」

ヴァルカンが自ら舵をとり、ゆっくりとした動きながらヒミンブ  
リュード級が航路を曲げていく。

とてもではないが間に合うことはできそうにない。ヤマツカミは  
勝利を確信したことだろう。ヴァルカンとて、それがわかっている  
はずである。それでも、ヴァルカンは諦めなかった。

必死に舵を切り、その思いに答えるようにヒミンブリュード級は  
逃げる。巨大な触手が振り下ろされた時、誰もが計算違いをしたこ  
とに気づかされた。触手の振り下ろしは突風を巻き起こすのである。  
風が気球部分を横へと強く叩き、触手の狙いから船が押し退けられ

ていく。

迂闊にも縁のそばに立っていた一人が中空へ投げ出されてしまうほどの揺れがヒミンブリユードを襲う。アレス自身もまた、その場に踏みとどまることしかできなかった。

風がやみ、触手が通り過ぎた。船は無事である。

あのヴァルカンが風のことまで計算に入れていたとは考えにくい。だとすれば、絶対に諦めないという思いだけで動いていたことになる。

富岳龍ヤマツカミの暴威をその目にしたにも関わらず。

「お前がいつ化けの皮を剥がすかと期待していたが、どうやら根比べは俺の負けのようだ」

これ以上、動かないでいるつもりにはなれない。

「高度を上げる、ヴァルカン！」

アレスの言葉に、ヴァルカンは聞き返すこともなく高度を上げ始めた。気球にガスが補充され、同時にバラストが船側から放出される。ヒミンブリユード級は上昇を初め、ヤマツカミよりも上の高度を維持する。

古龍は獲物に逃げられたことがお気に召さないらしい。追いかけてようとして、しかし高度を上げることに手間取っている。結果としてヤマツカミは船の真下に潜り込む形となる。

ちょうどいい位置である。

アレスは歩いた。先程の揺れで甲板には物が散乱している。その中には足を滑らせたヘルメスが倒れたままであったが、構わず跨いで進む。そのまま甲板の後方へと。

ヴァルカンとは一瞬だけ目が合う。すぐにすれ違い、すると、そこはすでに船の最後部。縁から身を乗り出せば簡単に降りてしまえる場所であった。

「お前は何か何でもアマランサスに補給物資を届ける。いいな？」

「わかった」

こちらの意図していることをヴァルカンは生意気にも察しているのだろうか。アレス自身振り向くこともなければ、ヴァルカンが振り向いた様子もない。

「お前には話しておこう。俺はこれまで古龍と戦ったことがない」

ヴァルカンの返事を待たず、アレスはヒミンブリユード級から飛び降りた。その眼下、ヤマツカミの深緑の背が広がっていた。

高さは一〇mとない。肉厚の地面に受け止められるように両足を叩きつける。膝を折るような無様な真似は見せない。

まるで古くなったゴムのように足から伝わる感触は最悪である。ヤマツカミの方も自身の上に異物が置かれたことに気づいたのである。一面に広がる深緑色の地面が不規則に隆起と陥没を繰り返す。

そして、足に走る鋭い痛み。こいつも龍毒を持っている。

これが古龍か。

「七人の魔女は皆、古龍と戦ったことがあった。セントポリアとアマランサスは霞龍オオナズチと。あの三姉妹は炎王龍テオ・テスカトルと戦ったそうだ。スノードロップも風翔龍クシャルダオラと、グラジオラス殿にいたっては古龍の棲む山に登った」

これまで自分のため、誰かのため、王国の、セントポリアのために多くのモンスターを狩ったが、古龍と戦ったことは一度もなかった。

「初めての古龍狩りだ。堪能させてもらうぞ！」

アレスは槍を抜き放つ。何とも潔い槍である。氷狐竜デュラガウアの甲殻を鋭く加工し、それを縦に重ねただけの槍である。ただ突くということだけを追求した。長くなれば強度が落ちる。密度を高めればリーチが損なわれる。選ばれたのは後者。距離を離すことなど考えられてはいない。利便性など一切無視した剛種の槍は、緑の大地へと深々と突きたてられる。

「振り返るな！ 省みるな！ 誰が脱落しようかと放っておけ！ ただ進むんだ。前へ進むんだ！」

もはやこれは戦いではなく、しかし戦いである。

クシャルダオラという猟犬が哀れな羊の群を追い回す。追いつか



れば喰われる。殺される。羊には爪も牙もない。唾液を垂れ流す捕食者から 脂肪を貯めた重たい腹を震わせ逃げるほかない。

ただ一方的な殺戮を、人は決して戦いとは呼ばない。

しかし、これは戦いである。牙もない、爪もない弱者は必死に逃げる。ただ逃げる。逃げるということが、戦いそのものなのである。生きるということそのものが戦いなのだ。

「動力が焼きつくまで飛ばせ！」

ヴァルカンは決して振り向くことはなかった。舵を強く握り、その目はただ前を向いている。

### 第三一話「終わる世界」 Fog of Flammability」

何もかもが狂っている。

山は狂ったように並び立つ。天を憎む剣の峰。

空は狂ったように騒がしい。命を喰らう古の龍。

命は狂ったようにあらがう。諦めない人と竜たち。

狂気の山脈の上空ではありえない光景が繰り返されてきた。幻とされた古龍が群をなして飛び回り、人と鳥竜が協力しあうように立ち向かう。誰が考えただろう。古龍が実在すると。夢のような力を有していると。命を奪うことを喜びと感ずると。

夢のような悪夢を、人は狂気と呼ぶ以外の術を知らない。

そして、極めつけの狂気は巨大な古龍の姿をとる。

広く平たい体に太い四本の触手を四隅につりつける。他のどのよ  
うな生物種とも違う異形の名は、富岳龍ヤマツカミ。ミスカトニッ  
ク王国王立古龍観測隊によって名付けられた山の邪神を意味する古  
龍である。

船よりも巨大な生物が翼もなしに浮いている。異常な光景以外の  
何者でもない。

もしも、そんな怪物の上に人が乗っているとしたら、それこそ正  
気の沙汰ではない。

青い竜の鎧を身につけ、その手には氷狐竜の槍を持つ。特務騎士アレスはただ一人古龍を大地として戦いを続けていた。

膨れた緑の大地へと槍を突き立てる。古龍の背にこびりついた苔が剥がれ、裂けた傷口からは赤黒い光を纏う血が滲み出す。

ヤマツカミは招かれざる客を許しはしない。触手を器用に動かして背中を自らむち打つ。ヒミンブリュード級飛行船を一撃で破壊する触手が鞭のようにしなり、アレスを潰さんと叩きつけられる。

夢狩り人アレスはステップで体をうまく射線上から逃がす。触手がヤマツカミ自体を叩き、アレスは古龍の背中に乗り上げた触手目掛けて槍を振るう。触手に一筋の朱が描かれる。痛みには思わず身を引いた触手を無視するかのように床へと槍を突き立てた。

分厚い肉を貫く度、槍の周りに古龍の血が水たまりのように貯まる。アレスの周囲にはそのような血貯まりが複数出来上がった。

槍を引き抜く度、返しのついた槍が古龍の肉を引き剥がす。ただ、それはその分抜く放つことに余計な時間がかかってしまうことを意味していた。アレスが槍を抜いた時、触手が別方向から叩きつけられた。回避している余裕はない。

船を一撃で破壊する打撃が古龍自身の体を震わせる。古龍の血が飛び散り、その背は赤黒い薄霧が張りつめた。そこに、アレスの姿はない。

触手は叩きつけた状態のまま、わずかに身悶えした。いや、錯覚だろうか。それほど些細な動きで、確認したいとの欲求を喚起させ

る。その瞬間には、触手が飛び跳ねるように背中を離れた。血が空に筋を引く。緑の腕には明らかに刃物により切り傷が刻まれている。ランスの優れた防御力はアレスを守っていた。しかし、剛種武器の堅牢な盾でさえ、攻撃を完全に防ぎきることはできないでいた。槍を地面へと突き立てたのは攻撃ではなく、支えを必要としているからである。

傷ついた騎士がうつむくと、兜の隙間から血が滴となってこぼれ落ちた。かつてドスランポスにつけられた傷が、額の傷が開いていた。流れた血が右目を塞ぐ。身勝手な狩猟から受けた傷は消えることはなかった。今なお戒めから解放されていないことを示すかのように。

ヤマツカミがその体を大きく震わせた。思わず膝を折るアレス。それを狙いすましたように古龍はその体を大きく動かした。

空へとアレスはたやすく投げ出された。

理由はわからない。ヤマツカミが高度を下げていたことがアレスを救った。思いの外山肌が近い。獣の鱗のような山肌へとつき落とされると、蒼火竜の鎧が坂を転げて落ちる。浅い斜面に至るまでの数一〇mを転げ落ち、アレスの体は仰向けに止まった。

いや、動く。

全身が痛み、しかし武器は手放していない。戦いは終わってはおらず、休んでいる暇などない。

古龍がアレスが倒れていた場所を触手で強打する。自身を攻撃す

る訳ではないため、一切の手加減はない。岩が砕け、龍毒の赤黒い粒子が傷跡に塗り込められる。

ヤマツカミは明らかにアレスを狙っていた。

最も小型とは言え、ヒミンブリュード級を一撃で破壊する大きさを持つ触手が叩きつけられる。直撃を受けていないにも関わらず、その振動はアレスの体を吹き飛ばす。

頑丈なはずの蒼火竜の鎧がひび割れ、兜は脱げてしまっていた。露わとなったその顔は、額を覆う血で汚れている。必死に立ち上がろうとするも、ここはまだ斜面である。力を込めた足がすべり、斜面を体が滑り落ちていく。頭を守りながら武器は手放さない。ハンターとして培った経験がアレスを守り、蒼火竜の鎧は山肌からアレスを守る。

やがてアレスの体は勢いをもったまま平たい地面へと叩きつけられた。衝撃は小さい。山と山の間の谷間であった。そこには砂とは違う、黒い、雪のような何かが敷き詰められていた。それがアレスを救ったのである。

「何だ、ここは……？」

黒い雪をくぼませながら立ち上がる。すると、その谷間は見える範囲では細長い長方形をしていることが見て取れた。ちょうどスレイプニル級の甲板のような形である。特筆すべきは、黒い雪に突き立てられたかのように柱が立ち並んでいた。何らかの遺跡だろうか。そのどれもがまっすぐには立っていない。遠目にもその損傷の具合わかるほどである。

こんな名もなき狂気の山脈にも文明があつたのだろうか。

おそらく、セクメーアから逃れてきた民の末裔であろう。それも、滅ぼされてしまったようだが。

狂気の偽王は谷間へと降り立った。その瞳は赤く、怒りを湛えてアレスを見下ろしている。

「アマランサス、お前には最後の最後までプロポーズを受けてはもらえなかつたな……」

槍を構え、盾を前へ。体を動かす度こぼれた血が黒い雪に染み込んでいく。

ヤマツカミは高度を維持したまま、触手を振り回す。地表すれすれを撫でるように通り過ぎる度、突風に雪が舞い、地面に深い爪痕が刻まれる。人が直撃を受ければ軽く弾き飛ばされるほどの迫力を持つ。

夢狩り人はステップを繰り返す。重装であるランスは他の武器に比べ動きが極端に鈍い。そのため、移動は瞬発的に小ジャンプを繰り返すことで行われる。一度の跳躍で移動できる距離こそ短いが、達人ともなればそのステップだけで攻撃をかわすことも可能とする。

アレスは動く。触手の動きに合わせてるように位置を変え、するとそこは触手の軌道からうまい具合にずれていた。突き出す槍はその目の前をほんの一瞬通り過ぎるだけの触手を正確に捉えた。

偶然ではない。ヤマツカミが何度攻撃を繰り返そうと、アレスはかわし、そして剛種武器を突き立てる。苛立たしいことだろう。腹

立たいことだろう。山のように大きな古龍がこんなちっぽけな人間ごときに翻弄されるといふ事実は。

ヤマツカミはすべての触手を大きく広げたとしようと、体全体で落下する。その巨大さ、その重量すべてを利用した質量攻撃は、大地を震わせ、黒い雪を舞い上がらせる。衝撃に山がわななく。

かわされるならすべて叩き潰してしまえばいい。あまりに単純な殺戮の力は、アレスの姿を覆い隠す。

狂気の偽王の怒りはいまだ解けてはいない。その巨大な目玉は顔の脇から生える触手を睨みつけていた。

「どうした？ そんなでかい凶体をしておきながら、こんなちっぽけな人間が怖いのか？」

雪を押し潰す触手の縁が一部盛り上がっていた。その下、盾で触手を持ち上げるように触手を受け止めるアレスの姿がある。

ヤマツカミの攻撃は確実にアレスの命を削り落としている。だが、どれほど攻撃しようと、どれほど苛烈に責め立てようと決して倒れようとしなない。

雪に膝まで埋まっている足を引き抜き、強く大地を蹴る。槍を前に構え、突進を開始すると短く凝縮された刃が触手の表面を滑るように突き進む。頑強なはずの古龍の皮が引き裂け、血が雪へと線を描く。

ヤマツカミが飛び上がる。その動きは明らかに怯えと恐怖を含むものであった。簡単に叩き潰せてしまえるはず。現に、飛行船は何

隻も思いのまま潰してきたのだから。ではなぜこの青い生物は死なないのか。殺せないのか。

一方的な殺戮者が感じた恐怖は至極当然のものであった。古龍は本能に従い命を奪うことを愉悦とする。そして、生存本能を満たすこともまた本能である。殺したいと生きたい。それらはともに本能の上であり、そして、生きたいという欲求はすべてにおいて優先される。煌黒龍アルバトリオンがそうであったように、どれほど殺戮に興じていようと、死を意識した途端に古龍は驚くほど臆病な一面を見せる。

本能に従い殺戮を行う者が、生きたいという本能に抗うことのできる理由はない。

まるで小動物がするように斜め後ろへとその体を飛び退かせるヤマツカミ。体が徐々に浮き上がり、アレスから離れようとする意識が確かに感じられた。

好きなだけ殺戮を繰り返し、嫌になれば逃げ出す。そんなことが許されるはずはない。

羽音と鳴き声。羽ばたきではなくさえずりとも異なる。風圧と咆哮。巨大な鉤爪が飛来した。かつてンガイの森で異変に強く警戒を示していた巨大なヒプノックが上空より奇襲したのである。

軽量な鳥竜種として巨木ほどの大きさを持つ巨大なヒプノックである。その足がヤマツカミの背中を上から強く蹴りつけると、そのまま古龍の体を黒い雪へと叩きつける。

ヤマツカミは巨大なヒプノックに押さえつけられる形で雪の上か



ら動くことはできない。

奇しくもアレスとヒプノックは協力を約束し合うようにその視線を交わらせた。

アレスは全身傷だらけである。鎧はひび割れ、顔は血で覆われている。ヒプノックとて無傷ではない。ところどころから血を流し、褐色の体毛が焦げ茶色に変色していた。

殺戮のために戦うものと、生きるために抗うもの。

たとえ力では凌駕されていようと、思いは決して劣ることはない。

「狩猟は鳥に始まり鳥に終わるとはよく言ったものだ」

ドスランポスを狩ることに始まったアレスの狩りは、ヒプノックの協力を得て終わろうとしていた。

もはや立っていることさえ限界と感じる体に鞭打ち、アレスは槍を構え駆け出す。狂気の偽王へと突き進む。

「王龍、なおも加速！ このままでは振り落とされてしまいます！」

グングニル級機動要塞のブリッジにクルーの沈痛な報告が大きな音を立てるも、すぐさま船体を揺らす轟音にかき消されてしまう。

現在グングニル級は王龍テラドミヌスの背に直陸していた。ハンターを直接王龍の背に送り込み、大タル爆弾を設置するという作戦

を実行しているのである。艦長であるヘリオスはこれを必殺の手段と捉えていた。気むずかしげな顔にさらに眉間にしわをよせ、穏やかならざる心境を物語っている。

「対巨龍爆弾の設置はどうか!？」

指示を飛ばす間にも王龍が体を震わせ、グングニルが悲鳴を上げる。船体の歪みが、床が弾け、木片が飛び散るという分かりやすい形で現れる。人類が所有する最大の飛行船でさえ、古龍の王の力の前には脆い木くずの塊でしかないのだ。

「遅れています!」

「急がせる!」

対巨龍爆弾の設置は芳しくない。元々人の胴体よりも大きなタルを背負って走るだけでも一苦労なのである。それを不安定極まりない足場、王龍の背の上で運ばなければならない。うまく走れないばかりか、いちいち床の様子を確認しなければならないことさえできない。

グラジオラスは苛立ちながら歯を噛みしめた。振動に足が取られ、膝をついたのはこれで何度目のことだろうか。

まだ進まなければならない。爆弾は広く均等に設置しなければならない。定される効果を発揮できない。後少し、前に進まなければならない。

向かう先、そこでは砦蟹シエンガオレンがそ鋏みを王龍の背へと

突き刺している場所である。立ち上がり、まるでシエンガオレンへと向かうように走り出す。

すぐに地面の様子が変わった。隙みが突き立てられた後が深く陥没しており、即席の落とし穴と化している。それでも、先に進まなければならぬ。穴に落ちないよう、左右に体を振りながら走る。落とし穴の数こそ多いが、反対にシエンガオレンの攻撃自体は明らかに手数を減らしていた。

「シエンガオレンがもうもたない……」

王龍の巨大な体を小さな　それでもまさに砦のような大きさを持つが　体で抑えていてくれたのである。十分すぎるほど働いてもらっている。

同じ敵を共有している。そのことに甘えすぎていた。影がグラジオラスに落ちる。見上げると、隙みがグラジオラスへとめがけて振り下ろされていた。

王龍が砂をかき分け突き進む轟音に紛れて、嫌な音が響きわたった。誰もが聞いたこともない音である。それは、砦とさえ表される巨大なヤドカリの脚が砕ける音であった。人の攻撃では砕けもしなかった太い脚に真横一文字に亀裂が深々と走り、乾いた音とともに上下が左右へとずれる。破断した脚はもうシエンガオレンを支えることはできない。

砦蟹が大きく傾き、振り下ろしていた最中の隙みが大きく着弾点をずらす。

四本の脚があるとはいえ、四本であるから支えられていたことに変わりない。三本ではテラドミヌスの砂嵐のような突進を抑えることはできない。

王龍の角が力強く叩き落とされ、深蒼の角から放出される龍毒がシエンガオレンの甲殻を焼く。その強靱な足が砦蟹へと乗り上げると、甲殻種の殻が砕ける音が響く。容赦も慈悲もなく、王龍はシエンガオレンを踏みつけ、砕く。

乗り上げた分だけ王龍の背が大きく傾いた。それが何らかの原因であったのだろうか。

突如、巨大な爆発が王龍の背を包みこむ。はじめは小規模な爆発程度であったが徐々に連鎖し、後ろから前へと炎の道が突き進む。

背中に接岸していたグングニル級が投げ出され、炎はシエンガオレンさえ包む。爆音の最中、王龍の悲痛な声が轟く。

対巨龍爆弾の破壊力は確かに王龍テラドミヌスを苛む。悲鳴がその証拠である。同時に、まだ王龍が生きていることを示していた。

轟く声は止まらない。引きちぎれたシエンガオレンの巨大な鋏が宙を舞うも、王龍の漆黒の甲殻は欠片が飛び散っているだけである。

そして、王龍はまだその力を残していた。

巨大な爆煙が砂漠の空へと立ち上る。炎に包まれた甲殻の欠片が爆心地の周囲に散らばっていた。シエンガオレンの背負っていた巨大な龍の頭殻が半分に割れた姿で砂の大地にその亡骸をさらす。

城さえも吹き飛ばす爆発力を用いても、シエンガオレンほどの巨大な甲殻種の力をもってしてもまだ王龍は止まらない。

その背に爆発による煙をまわりつかせたまま、砂漠を東へ。ドンドルマの街を目指す。

煙ではない。もはや煙ではない。いつまで経っても明らかにならない王龍の背。白い霧が張り、煙が晴れ渡るほどの時間をおいてもまだその背を見ることはできない。

何かが王龍の背を覆っていた。それは白い霧のようであり、王龍の背を覆うようにたなびいている。

人はそれが何かを知っている必要はない。すぐに知ることになるのだから。

これまでにいくつもの文明を滅ぼした大地の主にして古龍の王。殺戮の先導主。文明の敵対者の真なる力が、今解き放たれた。

グングニルはこれまでになかったほど大きな揺れに見舞われていた。船体そのものが王龍の背から弾き飛ばされ、爆発の余波は双胴船の先端部分を吹き飛ばし、その内部を露出させていた。喰いちぎられたようにくり貫かれた断面には炎がまわりついている。

ブリッジでは壁が裂け、床は大きく隆起していた。椅子から投げ出されたクルーが幾人か床に転がったまま身動きをとれないでいる。

ヘリオスは意地で艦長席から投げ出されることに耐えた。

「何事だ!？」

「誤爆のようです。ハンターの安否、確認できません!」

歯と歯をきつく食いしばっているのは単に力むためばかりではない。  
い。

王龍の背に飛び乗ったハンターたちは生身と言ってよい。そんな彼らに対巨龍爆弾の衝撃にさらされたとしたら、その結果は予想するまでもなく一つである。確実な死だ。

人は古龍のように強くはない。

ヘリオスが思い浮かべたのはグラジオラス特務騎士のことである。聡明な女性で、度胸を兼ね備えている。これは知人を失った悲しみなのか、それとも惜別か。どちらにしろ、ヘリオスの胸中が締め付けられるような息苦しさがまとわりついて離れない。

「王龍、いまだ……、健在!」

クルーの絞り出すような声は、その悔しさを示すかのような涙声である。

グングニルが世界最強の飛行船であるということは奢りではなく誇りである。確実に最大の攻撃力を誇り、その力は王龍を確かに傷つけた。

不備があつたわけではない。及ばなかつただけなのだ。世界最強

の力を持ってしてもまだ倒すことができないだけなのだ。

「何故倒せん！ 何故届かん！」

艦長としてクルーを不安がらせてはならない。さもすべて予定通りに進行しているかのように振る舞わなければならない。

それは理屈である。老獪な指揮官をもつてしても古龍は、王龍の存在はすべてがあまりに規格を逸脱している。何から何まで予測がつかない。これほどクルーの報告が待ち遠しいと感じたことなどなかった。そして、グラジオラス女史にそばにいてほしいと考えたこともた。

「王龍に異変！ 霧が発生している模様です！」

「霧だと……？」

それが何を意味しているのかわからない。体から毒や炎をまき散らす生物は聞いたことがあるが、霧が発生させる種など聞いたこともない。つい首が左を向きかけたのは、そこにグラジオラス特務騎士がいた場所であるからだ。

そこにグラジオラス女史の姿はない。

誰も答えなど持っていない不気味な沈黙。白い霧がブリッジ内部にも浸透し始めた。毒性はないようだ。うっすらと霧がはっただけで体調不良を訴える者はない。

しかし、進んで吸い込みたいと思えるものではない。皆がそろって息を控え、呼吸音さえ響かないような静寂は自然と緊張の糸を張

りつめる。

ブリッジからでは見ることでできない先端の火災で、異変はすでに発生していた。くすぶっていた程度の火が突如炎となって燃え上がる。霧が炎に吸い込まれる度、炎が燃え盛る。

助燃性の霧。かつてンガイの森を覆った霧。

それはグングニルをたやすく包み、そしてより深刻な部位にまで浸食し、蝕んでいく。

「動力、及び燃料庫にて火災発生！」

「類焼、止まりません！」

動力の火は鎧竜グラビモスの甲殻を用いた炉壁によって完全に船内とは隔離されている。ところが小さな隙間から入り込んだ霧は動力へと入り込み、炎を過剰に育て上げる。炉から火が溢れだした。こぼれ落ちた火は床や壁を構築する床にたやすく燃え移り、補給される霧がさらに苛烈にはやし立てる。付近のクルーたちが冷却用の氷結晶を必死に炎の中へと放り込むが、炎の勢いは衰えることがない。

炎はブリッジの割れた床からもその顔を覗かせた。

「燃える霧だというのか……」

燃え盛る床に霧が吸い込まれ、さらに炎が育つ。

もはや手のつけようなどなかった。気づいた頃にはクルーたちの



姿は炎と黒煙、そして霧の中へと消えていた。炎はすでに艦長席を取り囲み、天井にさえ届くほどの火柱を上げる。

「馬鹿な……、グングニルが、シュレイドが破れるのか……」

しわを持つ手で顔を覆われているため、ヘリオスの表情はうかがい知ることができない。しかし、その眼は炎の眩しさなど構うことなく見開かれている。その目に映るのはグングニル最期の姿か、それとも古龍への怒りか、それを知る機会は永遠に訪れることはない。

立ちこめる濃霧の中、霞をまとった巨大な火の塊が赤い色で白いヴェールをうつすらと染め上げている。グングニルの最期の姿を、スレイプニル級高機動艦のクルーたちは呆然と眺めるしかなかった。

艦長席に座る副艦長である紫のエフィーは口元を両手で覆い、その瞳は震えている。

「グングニルが沈む……。そんな……」

クルーの誰もがその光景を受け入れきれずにいた。桃色のアネットは目の前の現実を見てさえ信じきれずにいる。

「そんなことあり得ません。だって、世界最強の飛行船ですのに……」

人類最強の力を持つ船が燃えている。一際大きな爆発が生じたかと思うと、双胴の船が左右で引き裂ける。左の船体はそのまま大地へと叩きつけられ巨大な爆発が砂を弾き飛ばす。宙に残された右の

船は燃え上がる炎に霧が殺到する度に火が膨れ上がり、やがて船体全体を呑み込むまでさしたる時間を必要とはしなかった。

人は火を使うことでその文明を発展させてきた。王龍から発せられる霧は火を炎に変え周囲のすべてを焼き尽くす。幾多の文明を滅ぼした王龍テラドミヌスの放つ霧は文明を焼き尽くす。

まさに文明の敵、すべての命を憎む王の力であった。

霧がグングニル級を後ろから追いかけていたスレイプニル級へと触手を伸ばす。霧は王龍の背を起点として広く大きく広がり、大型飛行船さえもたやすく絡めとろうと白く蠢く。

呆然とはしていられない。青いデメトリアは他のクルーに発破をかける意味を込めて大きく叫んだ。

「ヒルダ！ 動力炉閉鎖急いで！」

「動力炉閉鎖！ 何が何でもやって！」

白いヒルダが送声管に指示を飛ばす間、すでに霧はスレイプニルのブリッジを徐々に白く染めようとしていた。思わずクルーたちが息を飲む。まるで、霧に蝕まれていない最後の息を惜しむように。

霧はスレイプニルを包み込む。隙間という隙間から入り込み、火の気を貪欲に搜し求める。ほんのかすかなものでよかった。ランプの灯火でも、金属がかき鳴らす火花でも。そのすべてを炎へと変えていく。

スレイプニルが激しい揺れに見舞われた。送声管を通して船体各

地の被害状況が次々と報告される。

膨大な情報量の中に動力炉から火災が発生したとの報告はない。船体のダメージ・コントロールを担当するヒルダは複数の情報を素早く取捨選択する。声を聞き分け、情報を検分する。普段とは比べものにならないほど真剣な目つきは、一つの冷酷な決断を秘めていた。

「燃料庫、及び火薬庫で火災発生！」

「燃料庫、及び火薬庫を切り離して！」

現在スレイプニルの各所で消火作業が進められている。小さな火災程度ならば消すこともできるだろう。しかし、燃料庫と火薬庫は不可能だ。そう、ヒルダは判断した。

送声管からはまだ消火作業をしているクルーが残されていると沈痛な声が聞こえてきたところで、ヒルダの決意は揺るがない。

「切り離しなさい！」

船底からぬけ落ちるようにブロックが切り離される。船から得られていた浮力を失い、自由落下で落ちていく。断面には先ほどまで通路として使われていた横穴がそのまま開いている。そこには逃げ遅れた人の姿があった。無駄とわかりながらも必死に手を伸ばす姿があった。

スレイプニルを取り巻く霧の中、ブロックも叫ぶ人の姿さえもすぐにかすれて消えてしまう。

そして、霧に包まれて消えたところで爆発が生じた。赤い炎が膨れ上がり破裂する。霧を吹き飛ばすほどの衝撃は上空のスレイプニルを揺るがした。

ブリッジの中、クルーたちは持ち場を離れまいと必死に椅子にしがみついていた。このままスレイプニルは分解されてしまうのではないか。そんな恐怖は呆気なく通り過ぎた。

揺れたのはほんの数秒。後は、君の悪いほどの平穏が残される。

ブリッジは先程までの喧騒が嘘のようであった。火さえなければ無害な霧が立ちこめているだけであり、船は現在も無事に浮かんでいる。

スレイプニルは救われたのだ。まだ火災は発生したままであるが、小規模なものばかりである。やがて鎮火を終えることだろう。動力は完全に閉鎖し、燃料、火薬庫は切り離すことに成功した。そこにまだ残されている人々がいることはわかっていながら。

辛い決断を敢行したヒルダの咽び泣く声だけがブリッジには悲しく響く。

船は無事である。それでも、ここに喜びはない。

燃料を失ってしまえばやがてスレイプニルは自慢の速度どころか飛ぶことさえできなくなってしまう。武器がなければもう戦うこともできない。

エフィーは艦長席の上で口元に手を当てていた。この霧を吸い込みたくない。そんな意識の現れである。

「ユニス、高度を上げて。霧の上に出ます」

「了解……」

舵をとる黒いユニスは普段から寡黙な少女である。いつも感情をはっきりとしめすことのないこの少女は、それでも気を沈めていることを周りの誰もが察していた。

### 第三二話「潰えた命、繋がる想い」 Patchy Wings」

霧がセクメーア砂漠の空を覆う。王龍テラドミヌスから揮発した助燃性の霧は広がりを見せていた。火を炎に変え、周囲のすべてを焼き尽くす破滅の霧が世界を徐々に蝕もうとしていた。

セクメーア砂漠はドンドルマ地方への道を除けば山岳帯によって取り囲まれている。時計回りにインスマス火山帯、ルルイエ山脈、ドリームランド峡谷、狂気の山脈によって取り囲まれているのである。そのため、人が立ち入るにはドンドルマ地方から入るしかなく、故に、地図上ではあまりに狭い山と山の切れ目には人が集まり街が発展していた。

アーカムの街と呼ばれるセクメーア砂漠最大の都市はそんなセクメーア砂漠とドンドルマ地方との境目に発展した、まさに玄関口と言うべき街である。

石と粘土作りの街並みが整然と並び、道路には石が敷き詰められている。西側の道は砂に覆われながらも東側に砂は見られない。狭間の街としての景観はセクメーア砂漠を訪れる者ならば必ず目にすることとなる。

セクメーア砂漠を訪れる者にとっては厳しい自然に踏み入る前の心の準備を暇として与えてくれる街である。ドンドルマ地方に帰る者にとっては砂の大地を離れられることへの安堵の場である。

そして今は、人類最後の要塞であった。

上空にはグッフルファクシ級飛行船が多数浮遊し、地上ではセク

メーア砂漠へと向けて組まれたバリケードとその後ろにひしめくハ  
ンターたちの姿があった。

この街が突破されれば古龍の群はドンドルマの街を襲う。果たし  
てそれで済むのだろうか。ドンドルマのさらに東側には大都市も数  
多い。王龍の進行が止まらなかつたとしたら、古龍がなおも活動範  
囲を広げたとしたら。最悪の想定はこれまで次々と実現されてきた。  
もはや悪夢は悪夢ではない。

アーカムの街は砂漠東端に位置し、古龍の影はまだ見られない。

それがそれが人々の安寧を約束することはない。街を守る者すべ  
てが臨戦態勢を解くことなく砂漠の空から目をそらす者はいない。  
古龍の姿を決して見逃すまいと意識が先鋭化されている。

風が吹く。砂が舞いあげられ、砂粒となってバリケードを、街の  
城壁を叩いた。セクメーア砂漠から風が吹き付けるのはこの季節珍  
しいことではない。太陽によって暖められた空気が周囲に吹き出す  
際、周りの山脈に阻まれた結果この地方にそのはけ口を求めるので  
ある。

そう、珍しいことではない。風が、砂漠からの空気を運んでくる  
こと自体は。

風が運び、人々は西の空を見ている。よって誰もが気がついてい  
た。霧がアーカムの街に向かっているということには。

何故砂漠に霧が。人々の思考は疑問のままで止まってしまつ。そ  
して霧を防ぐ手だてなどない。

霧は太陽を遮りながら、急速に街を包み込んだ。多少薄暗くなつた程度で視界を遮るほどではない。

ハンターの一人が霧の中気分を害したように首を振る。ハンターは座りながら手にしていたボウガンから弾を抜く。鉾物がふんだんに用いられたボウガンから取り出されたのは拡散弾である。霧の中の誤射を恐れ広範囲で爆発する拡散弾を使用することは躊躇われたのだ。代わりの弾丸を送り込み、力強く送弾する。

鉾物同士がぶつかり合い、火花が散つた。

ボウガンから燃え上がる炎。装填されていた弾丸が暴発する。アイテム・ポーチにしまっていた弾丸がすべて炸裂し、大きな爆発が生じた。

ここばかりではない。かすかな火がある場所すべてから火の手が上がっていた。かまどの火。霧に備えともされた灯籠。あるいはちよつとした火花まで。

ありとあらゆる火が暴走し、狂い咲く。

街の各所で生じた火災は類燃し、霧はさらにそこへと吸い込まれていく。火が炎へ。炎が火災へ。火災がすべてを焼き尽くそうと栄える。

上空では動力、燃料庫を火の海に変えられたグツフルファクシ級がその船体を赤く染めていた。気球部分にまで燃え移り、浮力を十分に得られなくなった飛行船から順に街の上へと落下する。船の形をした火の玉が墜落すると、家が潰され、炎があたりへとまき散らされる。



体の飛び火した人がいた。すると霧が取り巻き、瞬く間に炎がその体を呑み込んでしまう。

人々の必死の消火活動をあざ笑うかのように火は激しさを増していく。王龍の息吹が吹き付けられ、すべて燃やし尽くすまで炎の従軍は終わりを見せない。

混乱と混沌。狂乱と恐怖。燃え盛る炎の音が聞こえる。人々の慟哭が痛々しい。

アーカムの街は地獄であった。

そしてこの地獄は、やがてはドンドルマのたどる未来である。

王龍テラドミノスが倒されぬ限り確実に約束された地獄の光景である。

スレイプニル級高機動艦が空を飛ぶ。極端な高度ではないが、眼下には雲が広がっていた。王龍テラドミノスが放出した霧は層を形作り、王の姿をそのヴェールの下に隠している。

もはや謁見することさえ許されない。

スレイプニルにもはや力は残されてはいない。度重なる戦闘によって船側は破壊され、大半のバリスタ、大砲を喪失している。加えて、弾薬もそれを扱う人員も決定的に不足していた。

そして、まもなく動力炉内に残された燃料が底を突く。

甲板の上はおびただしい数の遺体と屍。人と古龍が横たわり、その隙間は流れ出る血が補完している。

死者の船の上で、船首だけが異質な空間であった。先頭には赤いメイド服を着た女性が見通すこともできないのに霧を見下ろしている。その服には傷一つなく、澄んだ銀髪が風になびく。その足下はユクモ堅木の香りを残して死はなく、血で汚れてもいない。

多くのハンターたちがまるで壁を作るようにメイドの後ろで倒れていた。その壁の内側にあたる甲板だけが死と血から遠ざけられていた。ハンターたちが決死の覚悟で守り抜いたであろうことは想像に難くない。誰一人後ろを見せぬまま、メイドを守り抜いたのだ。

メイドは微笑みを絶やさないう。誰が倒れていようと構うことなく霧を眺め続けている。血に汚れていない甲板に立ち尽くしたまま。

代わりに、甲板は涙で汚れていた。

純白の鎧を赤くしたセントポリア王女が力なく座り込んでいた。頭を垂れ、甲板に手を突くことで辛うじて支えられているその体は、祈るように敬虔にして弱々しい。

「グングニルでも駄目だった。スレイプニルにはもう飛ぶ力も残されてないよ」

世界最強の飛行船はすでに墜ち、スレイプニルはまもなく飛ぶことができなくなる。

血で汚れていない甲板を、少女の涙が濡らす。

「ねえ、アマランサス、どうしたらいいの？」

メイドは応えない。

「私、どうしたらいいの、ねえ！ 答えてよ！」

あげられた王女の顔は涙で汚れ、古龍の大群に一步も怯むことのない。霸気はすでにない。

「王龍がこのままドンドルマの街に行けば街は踏みにじられる。それどころか、この霧が近隣の里に広がれば文明そのものが破壊される！」

そして、破壊された里に追い打ちをかけるように古龍の群が強襲することになる。会議で危惧された想定被害の比ではない。ドンドルマの街どころかその周囲の里、ミナガルデ王国のような人口密集地が焼き尽くされ、生き残った人さえも古龍がその餌食になってしまう。

どれほどの死者が出ることか。どれほどの命が踏みにじられることか。

セントポリアは泣いた。止めどない涙の向こうにメイドを、アマランサスを見つめたまま。

「でも王龍を止める方法なんて、一つも思いつかないよ！」

人類最強の力である三隻の飛行船はすでに潰えつつある。

ミナガルデ王国のフギンムニン級大型輸送船は嵐龍アマツマガツチとの戦闘で大破していることが報告されている。

シュレイド王国のグングニル級機動要塞は王龍テラドミヌスとの戦いで爆沈されてしまった。

ミスカトニツク王国のスレイプニル級高機動艦は燃料庫も火薬庫も失っている。飛ぶことも戦うこともできはしない。

「シュレイドの誇りも届かなかった！ ミナガルデの戦いもまだ及ばない！ スレイプニルだって、もう飛べない！」

大粒の涙が止めどない。

セントポールアが側近として信頼をおいていた七人の魔女の内、フィロソフィアとフィリアの戦死はつい先程聞かされた。グングニルに乗艦していたグラジオラスも生きているはずがない。

大切な人たちが死んでいく。セントポールの命じたまま戦い死んでいく。それなのに、今それに報いてあげる術を持たない。

王龍は止まらない。もっと多くの人が死んでいく。

「答えて！ ねえ、答えてよ！」

王女が最も信頼を置くメイドは、しかし主の望みに応えようとはしなかった。

いつまで経っても訪れない王龍討伐の報告に、ドンドルマの街は混乱していた。街は狭い路地に至るまで家財道具を引いた人々で溢れている。狩猟で栄え、交易で潤った街の様子はすでになく、王龍の見えない影に人々はいたずらに怯えるばかりである。

それはどこであろうと例外はない。会議のために集まった各里の代表たちが宿泊していたホテル群においても人々の避難が進められている。

廊下を歩く人々の足は早く、明らかに落ち着きを感じさせない。すれ違いざまの挨拶さえ忘れてしまうほど、人々は余裕をなくしていた。

そんな中、悠然と歩く、少なくともそう心がけている男がゆつたりと歩いていった。彼には、ディオニュソスには豊かな髭を手入れするほどの時間とゆとりが残されていた。王龍がこの街に迫っている。だからと逃げ出すつもりでなければ余裕などいくらでも生まれるものである。

街から逃れるための飛行船の時間を確認しあう二人組とすれ違った時、ディオニュソスはホテルのロビーに足を踏み入れた。

昼下がりのこの時間ならば憩いの一時を満喫する人々に埋め尽くされるはずの椅子がことごとく空席であった。なんとももったいない話である。窓際にでも陣取れば繁殖期特有の穏やかな日差しに心おきなく堪能できるだろうに。

無理もない。誰もが見たこともない古龍に怯えているのだ。ディオニュソスのような変人など、そうそう見つかるはずもない。

そう、ディオニュソスは歩きだそうとして、光の中、こちらに背を向けて座る何者かに気づいた。一体誰が。つい興味引かれて人影に歩み寄る。特に話しかけるべき話題を頭に浮かべていた訳ではなかったが、相手は見知った人物であった。

髪の長い男性で、全体として細い印象はまるでナイフを思わせる。しかし穏やかな光の中にいるせいか、雰囲気には尖ったものは感じられず、言うならば装飾された鞘に仕舞われた凶器のような人であった。

この人物をディオニュソスは知っている。

「まだおられたのですか、ハデス陛下」

相手が座る椅子の脇。近すぎず遠すぎず、無礼にならない位置を心がける。相手の名はハデス。ミスカトニック王国の現国王であった。

誰もいないことをいいことにテーブルを一つ占有し、その上にはワインボトルと何本かのグラス。その内の一つに赤ワインが並々と注がれていた。

「すまないが、君は？」

ディオニュソスよりも若いこの国王は静かな調子である。立ち上がろうともせず、しかしそこには不思議と横柄や傲慢は感じ取ることができない。

「ディオニュソスと申します。シュレイドでは事務次官を任せられ

ております」

恭しく頭を下げたつもりであったが、ハデス陛下はそのことにさしたる反応を見せない。噂では形だけの礼を自分にも他人にも求めることはないと聞かされていたことを思い出す。どうやら、事実であるらしい。

ディオニュソスの礼を見ようとせよ、ハデスはワインを含み、唇を湿らせた。

「娘から話は聞いている。意地の悪いおやじのせいで会議が進まなかった」

思わず呆気にとられて反応が遅れてしまった。確かにセントポリア王女とは会議で紛糾したものである。世界の命運を決する会議でのやりとりをまるで子ども 実際王女は子どもである のように父に語り、父もまた子どもとの距離間に悩む父のように語る。

五年任期の国王をすでに三期にわたって務める名君はやはり、常人とは考えることが違っていているようだ。

つい苦笑してしまい、それを隠すように笑うほかなかった。

「いやはやお恥ずかしい」

「椅子は開いている。好きなものを使うといい」

まったくもってペースというものが掴めない。最寄りの椅子

ちょうど、テーブルをはさんで座る形となる に腰掛けながら、

ディオニュソスはこの国王の人気の訳が掴めないでいた。悪い人間

とは思わないが、感覚があまりに違いすぎるのだ。」

質問したところで、その御心に近づくことができるとは考えがたい。何か話さなければ間が持たないことも手伝って、結局ディオニユスはミスカトニツクの主に訪ねた。

「陛下はまだここにおられるおつもりですか？」

「王龍を倒さねば、どこならば安全ということではない」

怜悯な横顔が再びワインを口に含む。なるほど、合理的で、理屈に殉ずる覚悟は持ち合わせているようである。

「私は、意地でしょうか。会議では、自分の意見こそ正しいと信じていました。しかし、正しいのはご息女でした。私はこのことを恥じてはいません。しかし後悔しています。せめて戦えないなりに、自分だけが逃げるような真似だけはしたくありません」

ハデスは顔色一つ変えぬまま、あいていたグラスにワインを注いだ。濃い紫色の液体にディオニユスのどこか憔悴した顔が映し出される。

「君も飲むかね？」

「いえ、不躰とは思いますが、自分だけ安全な場所できつろぐということは、気が咎めてなりません」

怯えている訳ではない。今も砂漠で戦っている人々のことを思うとやりきれないのだ。非礼ではないかと思いながらも、掌を向けて拒絶の意志を示す。



ところが意外にも、ハデスは口元を緩めた。

「よいことだ。君は、ここを安全と信じているのだらう。それは、今なお戦う者たちに信頼を寄せていることにほかならない」

「そついう、お考えもありますか……」

ドンドルマの街を安全な場所としてくつろぐということは、この街を王龍が襲わないことを、ハンターたちが止めてくれるということを確認していることと同義である。理屈のお遊びであり、あくまでも理屈である。感情とは切り離して考えることも必要だらう。

「ですが果たして、王龍を止めることができるでしょうか？」

砂漠から断片的に届く情報は劣勢を告げている。王龍ばかりではない。巨大な古龍が各地に出現し、ハンターたちと激戦を繰り広げているのだそつだ。

何とも分の悪い戦いである。人はすべての大型古龍を防がなければならぬ。しかし、古龍は一体でドンドルマの街を壊滅させることだらう。会議でセントポリア王女が危惧していたことが現実になるうとしていた。それも、最悪の形で。

目の前のグラスには、やはり触れる気にはなれない。

王はいつの間にかグラスをあけていた。無造作にボトルを掴みとると、やはり無造作にグラスへと注ぐ。注がれたワインを口に含みながら、ボトルをテーブルに戻す。まるで他意を感じさせない自然な動作である。

本当にこの男はセントポリア王女の父親なのだろうか。とてもではないが、娘を戦場に送り出した父には見えない。

ハデスはグラスをテーブルへと置いた。まだ残っているワインが揺れ、ついそのことに目をとられていると、国王がディオニュソスのことを見ていることに気づくことが遅れてしまう。

それは、思わず身をすくめてしまうほどの視線であった。

「王とは無力だ。何もできない。私よりも腕力に優れる者などいくらでもいる。私は古龍と戦ったことさえない。私よりも民のことを思いやることができる者も数多い」

言葉は揺るぎなく、態度は流麗。

「私が王でいられる理由は一つしかない」

真つ先に思いついた事実は、ハデスが国民の信任を受けた王であるということ。気恥ずかしさがそれに続いた。

「人を信じることだ。民を信じることだ。部下を信じることだ。娘を信じることだ。信じ、委ねることで私よりも優れた人々が国のために力を貸してくれる。この飾りものの王に国を支える力を与えてくれるのだ」

なんと澄んだ眼差しをしているのだろう。現実を知らない子どもが語る理想のように純粹で無垢で、しかし儚さなど微塵もない。

話が合わぬわけだ。捉えられぬわけだ。

ディオニュソスの想定した理屈と感情の問題ではないのだ。理想と信念をこの国王陛下は語っていたのだ。

話が合うはずがない。捉えきれないはずがない。

「私は、娘とその仲間を信じている。今なお戦う者がいる限り、私は彼らを信じる」

王は理想を語る。そしてそれは揺るぎない。部下を信じ信頼し、威風堂々たるその姿に魅入られぬ者がいるだろうか。

ディオニュソスは自らの凡庸を嘆いた。これほどの男を自らの尺度のみで捉えよとし、その誤りに気づかされた後には、信念の違いをまざまざと見せつけられる。逃げないことと、逃げる必要を感じないことは意味が違う。ディオニュソスは意地ではないが、ハデスは信念であった。

今なお戦う者たちを信じる者と、決してそうではない者。

ディオニュソスは自然とグラスを手にかけていた。形だけでも真似事を。仲間を信じるという思いを共有したい。

「陛下、」同席を許された榮譽、私は忘れはいたしません」

やや芝居がかった調子で杯を持ち上げ、ワインを口に含む。濃厚な葡萄の香りと、喉の奥に殺到してくる果糖。むせかえるような甘みに、ついせき込んでしまった。

「」、これは!？」

「葡萄ジュースだ。私は、下戸だ」

ハデス陛下は戸惑うディオニュソスをよそに悠々とグラスを傾ける。ゆっくりと一口ずつ。香りを鼻に通し、下の上で風味を転がせる。さも極上のワインを味わうかのように。

理想云々はともかくとして、やはり感覚が違うことは紛れもない事実のようだ。辛党であるディオニュソスは、この甘ったるい液体をどうしたものか苦慮にくれるはめとなった。

そんなディオニュソスを構うことなく、ハデスの態度は揺るぐことがない。その思いは遙か彼方の戦場に、戦士たちとともにあるように。

戦う者が誰か一人でも残されている限り、希望は潰えてなどない。

雪深い山道が延々と続いていた。太陽の光は分厚い雲に隠され、横殴りの風は吹雪として体を打ちつける。吐く息は白いのだろうか。確認する術などない。深く呼吸すれば冷気に肺を焼かれてしまう。数少ない酸素を必死に求めながら浅い呼吸を繰り返す。

雪が視界を遮り、足に絡みついてくる。厚手の防寒具を通してさえ体を突き刺す冷気。体は心臓を守ろうと末端から血液を引き上げさせる。待ちかまえるのは壊死。

人が知る中で最も標高の高いこの山は、酸素を置き去りにして天

に対抗している。一度酸素が足りなくなれば、体中の細胞が酸素を求めて暴れ出す。舌なめずりするの致死。

そして、遠く遠く響きわたる古龍の鳴き声。

ここは地獄である。冷気と低酸素、そして古龍が生息する地獄の山である。ルルイエ山脈と呼ばれる地上の地獄であった。

彼らはそんな地獄を歩いてきた。中型のそりを一〇名ほどの人々が引いている。後ろではその半分ほどの人がそりに積まれた荷物を押していた。

話し声が聞こえないのは吹雪のせいではない。誰もが話す気力さえ持ち合わせていない。彼らを動かすのはただ惰性であり、錆び付いたゼンマイ仕掛けの人形のように同じ動きを繰り返す。

荷を押す一人のゼンマイが切れた。つま先から膝、腰から胸、頭と順々に雪の上に倒れる。身動き一つとらなくなった仲間を気にとめる者など誰一人としていない。

ここは地獄なのだ。

仲間の屍を置いてけぼりにした先に、別の死体が転がっていた。防寒具を斬り割かれた死体がうつ伏せに倒れていた。かつて古龍に殺された彼らの仲間である。微生物さえ生息できないこの山では死体はいつまで経っても腐敗することはない。仲間は殺された時の姿のまま彼らを出迎えていた。

彼らは仲間が殺された場所を通り過ぎる。この道は間違っていない。ルルイエ山脈を登る過程で命を落とした仲間の屍があるという

ことは、ここは来た道であるということだから。

そして彼らは次の屍を目指して重い足取りを繰り返す。

仲間の死は単なる事実にすぎず、屍は目印でしかない。命を対価に、死が指し示す旅路は、まさに地獄への旅そのものであった。

これは夢。かつての記憶を思い浮かべた夢。

今から数えて一〇年以上も前のことである。博識の魔女グラジオラスは象牙の塔からの出向者として王立古龍観測隊のルルイエ山脈探検に参加した。仲間の半数以上を失いながらも生還することができたが、凍傷によって失われた足の指は両足で合わせて五本に及ぶ。

様々な意味で人生を変える大冒険であった。

夢の主は地獄の山からゆっくりと意識を現実へと戻す。

まるで夢の続きでも見ているように、視界は白一色に染まっていた。全身には冷気にあてられたにも似た痛みが走る。

意識を覚醒させながら、まず状況を確認しようとグラジオラスは視線を動かす。どうやら、白い霧の中をうつ伏せに寝ているらしい。胸を強く押す重みは、背負っていた対巨龍爆弾に間違いない。

とりあえず起き上がり、近くにあった壁を頼りに地面へと座り込む。床そのものが冷気でも帯びているかのようについに接した面が痛んだ。霧には毒が含まれているように呼吸を阻害し、浅い呼吸を強要される。

まるでかつての地獄を思い出させるような光景であった。場所こそ違え、ここも地獄であることに変わりない。

ここは王龍テラドミヌスの背なのだから。

その確かさを証明するように、大地が揺れ、古龍の鳴き声が霧の向こうから響いてくる。

グラジオラスはシュレイドのハンターたちとともに王龍を倒すべく対巨龍爆弾を背に王龍へと飛び乗った。作戦は失敗。設置を完了する前に皆蟹シェンガオレンが力つき、爆弾は恐らく誤爆したのだろう。十分な破壊力を発揮することなく爆発してしまった。グラジオラスの背に爆弾が背負われているままであることが、すべての爆弾が爆発した訳ではないことを示している。

爆発の間際、グラジオラスはシェンガオレンの袂が自分へと振り下ろされている光景を最後に意識を失っていた。

何故自分が助かったのかわからない。爆弾に秘密があるのかと一旦後ろへ置き、重さからの解放感を感じながら振り向いた。

確かに爆弾は遮蔽物となってくれたらしい。背負っていた場所とは反対だけが完全に黒焦げしていた。それよりも大きな発見は、グラジオラスが壁と考えていたものが、壁ではなかったということである。

王龍の背に突き立てられた巨大な罅であった。靄に隠されて見上げても根本は見えないが、折れてしまっていることは間違いない。直撃するはずであった一撃が狙いを外し、グラジオラスの後ろに突き立てられたところで折れてしまったのだろう。

まるで墓標のよう。

この墓標が偶然にも爆発からグラジオラスの体を守ってくれたらしい。おまけに背負った爆弾が誘爆しなかったことで盾になってくれたことのおまけつきである。

「つくづく、悪運が強いようね、私は……」

喉を焼く白い霧の中、つい苦笑してしまう。

ルルイエ山脈では半数を超える仲間を犠牲にしながらも生き延びた。今回王龍の背で生きながらえているのは恐らくグラジオラスだけだろう。

王龍はまだ生きている。この霧が何なのかはわからないが、テラドミノスが関与していることに間違いない。何故なら、この霧には龍毒が含まれているのだから。そして大地を震わす力は王龍の息吹そのものである。

思わずせき込むと、口を押さえた手には血が付着していた。この霧の濃度が濃すぎるのだろう。長くここにすることはできない。

逃げ出すこともできない。

王龍はなおも東へと大地を踏みならしはく進していることだろう。背から振り落とされれば、もはや波のように盛り上がる砂に巻き込まれて生きてはいられない。飛行船で救助してもらおうにも、この霧では王龍との接触の危険が大きすぎる。



できることは限られている。グラジオラスにとって幸いだったのは、それがすべきことと重なっていたことであった。

「最後の悪あがき、させていただくわ」

一度は置いた対巨龍爆弾を再び背負う。足りない足の指は踏ん張りがしにくい。変に踏みとどまろうとはせず、歩き出す。

白い靄は防具であるクラフトFを通しても痛みを与えてくる。呼吸のしずらさは雪山を彷彿とさせる。おまけに古龍の生息場所どころか、古龍そのものである。

これでルルイエ山脈を思い浮かべない方がおかしい。

漆黒の甲殻さえも靄は白く隠してしまう。不規則な凹凸は雪を踏みしめることと同じように足を取る。一步一步、足下を凝視しながらグラジオラスは進む。

風は向かい風。靄は正面から吹き付けていた。そこはグラジオラスの目標とする場所であり、王龍の顔がある方向であった。

うつすらと張った霧は、それでも王龍の体を覆い隠すには十分な密度を有していた。下にいけばいくほど、王龍の体に近づけば近づくほど密度が上昇し、地面すれすれともなれば完全な純白の世界である。

王龍の姿は、炎と毒を持つ霧に阻まれ見えないでいた。

それでも、メイドは下を眺めることをやめようとはしなかった。主である王女が涙にくれていようと構いもせず。

光は霧に屈する。しかし音は一度たりとも姫とメイドを裏切ったことなどなかった。かつて雪と闇に包まれたセイレムの里で二人を師と弟子として結びつけた絆はその弱々しい翼を精一杯に広げ、霧さえ突き抜けてスレイプニルへと届く。

「何、この音……？」

泣きはらした顔のまま、セントポーリアはアマランサスの脇から眼下を覗き込む。深い霧に包まれた視界はまったく役に立たない。それでも、音は確かに聞こえている。規則正しいリズムで、音を聞き分ける訓練を受けた二人でなければ聞き取れないほどかすかではあっても。

「モールス信号ですよ。きっと、グラジオラスさんからの」

まるで反応することのなかったアマランサスの突然の言葉にセントポーリアは慌てたようにメイドの横顔を見る。いつものように微笑んで、そしてセントポーリアのことを見もしないで下を眺めているだけであった。

「何て言ってるの……？」

「親愛なるお二人へ」

その時、音が一色に染まった。千を超える銅鑼を一斉に打ち鳴らしたような大音量が響く。大気を震わせるほどと形容できるその音は文字通り大気を大いに揺るがせた。

打ちつけられた霧が急速に晴れていく。眼下で生じた爆煙が霧を突き破りその姿をはつきりと見せているのだ。そこに、王龍の姿があった。

暴れている。痛いのだろう。体を左右に大きく揺り動かし、それで生じる風が霧の薄いベールを剥いでいく。

見えたのは傷だらけの背中。爆弾に焼かれ、砕かれた痕跡や、シエンガオレンに攻撃された傷跡。そして、霧の正体も。背中と顔の境目のあたり、人でいうところの後頭部に甲殻を失った穴が矢尻のように開いていた。そこから漏れだした霧が左右に広がり、まるで翼のようにまき散らされている。

グラジオラスは爆弾を噴出孔の側で爆破させたのだろう。それが霧に引火し、王龍に強烈な痛みを与えたのだ。暴れる王龍はついには残されていた二本目の角を自らの勢いで折ってしまった。根本から折れた青い角が砂漠に塔のように突き立てられる。

残された角は鼻先の一本のみ。

それでも、王龍は止まらない。一度は吹き飛ばされていた霧が再び空間に充満し、王龍の姿は次第に見えなくなっていく。

グラジオラスが命がけで行ってくれた最後の一撃さえ、王龍を止めるにはまだ至らない。

泣き尽くしたと考えていた涙がセントポリアの頬を伝う。もう立っていることさえ嫌に思えた。どれほど人が必死になっても、命をとんでも王龍は倒せない。人々が殺されてしまう。

崩れてしまいそうな体を、突然温もりが包んでくれた。

セントポーリアの血塗れの鎧を気にすることもなく、そしてその腕は鎧の上からでも温かい。涙をぬぐい去ってくれるように顔が胸に押し付けられると、とても優しいアマランサスの匂いがした。

「セントポーリア、もう大丈夫ですよ。すべての準備は整いました」

顔を上げると、メイドが微笑んでいた。セントポーリアのことをしっかりと抱きしめてくれる。雪深い凍土でセントポーリアの勇気を支えてくれた微笑みは、たとえどんな姿になっても変わることはない。水晶の森の悪魔と呼ばれた古龍を打ち倒したその力は微塵も費えてなどいない。

セントポーリアを抱きしめるアマランサスのすぐ後ろには、傷だらけのヒミンブリュード級輸送船が浮かんでいた。今すぐにでも墜落してしまいそうな輸送船の上では若いハンターが手を振っていた。会議の時に見かけたンガイ村の代表代理と似ている気がするが、本人だろうか。

「アマランサス姉ちゃん！ 燃石炭、もって来たぞ！」

スレイプニルは再び飛ぶことができる。たとえ継ぎ接ぎだらけの翼だとしても、人はまだ、この大空を飛ぶ力を失ってはいなかった。

### 第三三話「夜と霧」Amarranthus」

「私、いつもアマランサスさんのことが羨ましくて仕方ありませんでした。姫様の信頼をここまで勝ち取った人が自分ではないなんて」

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦スレイプニル副艦長エフィーは現在艦長席には座っていない。ブリッジ中央に置かれた机、その上に置かれた海図を挟んで、微笑むメイドと対面する。その顔は少し無理をしたように笑顔を作っていた。アマランサスがまるで屈託のない笑顔をしているのとは対照的に。

「セントポリアはエフィーのことも好きですよ」

姫は信じているのだ。メイドがたった一人である巨大な大地の主を止めることができるのだと。世界最強の飛行船でさえ不可能なことを成し遂げられるのだと。

親愛なる主にそこまで信頼される人物に、エフィーが怪気を抱いても無理らしからぬ。

アマランサスはブリッジの中央。艦長席とクルーの座席とに挟まれた位置に立つ。

エフィーのすぐ脇に桃色のアネットが立つ。視線を海図に落とし、指でスレイプニルの現在地　　ずいぶん東に来てしまった　　と王龍の予想現在地を指し示す。

「アマランサスさん、王龍は現在このあたりにいます。もしも、も

しもですよ。もしも、ここで阻止することに失敗すれば、ドンドルマの街を死の霧が覆うことになってしまいます」

クルーたちが一様に表情を暗くする中でも、アマランサスは笑顔を崩さない。そんなメイドに、今度は青いデメトリアが声をかけた。専用の座席に座ったまま、疑心に駆られていることを、その顔は隠せていない。

「ヘビィボウガンの準備はできています。恐らく、有史以来最強の火力を誇るヘビィボウガンです。それでも、王龍の甲殻を破壊することは難しいでしょう。それに、霧で視界を塞がれています狙いだつて満足につけられません……」

当てられない。壊せない。いくら見たもすべてを記憶する凶眼の力と言えども、一体何の役に立つことだろう。

エフィーは苛立っていた。姫様のことを信じたい。姫様が信じるアマランサスのことを信じたい。それでも、信じきれないことが腹立たしい。

ほんの一言、背中を押してくれる言葉が欲しかった。それでも、言ってもらえないかも知れない恐怖が先立ち、尋ねることはできない。アネットやデメトリアもそうなのだろう。

言葉が続かない。結局、エフィーを含む三人から尋ねることはできなかった。仲間の躊躇を見透かしたように、動いたのは黒いユニース。ブリッジにいる間舵から手を離そうとはしない少女は首を横に向け、横目でアマランサスの姿を見る。

「勝てるの……？」

声がブリッジに染み渡る、そのために必要な時間が終わった頃、突然扉が開いた。ブリッジ脇の、決して大きくはない扉から、どこか軽薄そうな若者が姿を現した。

「おう、邪魔するぞ」

補給物資を届けてくれたヒミンブリユード級の船長で、名前はヴアルカンと聞いている。ブリッジの重い空気をもとめていないのは、度量というより無神経という気がする。雰囲気を気にかけて様子もなく、手をあげて拳手を求めた。

「ダメージ・コントロールは誰だ？」

「私！」

勢いよく手をあげたのは白いヒルダ。先程から座席についたまま発言がないと思いきや、いざ話す時は元気がよい。

これで気づかぬはずもなく、ヴアルカン少年はヒルダへと話しかける。

「霧に飛び込むとどうしても動力が焼かれる。いつでも切り離せるようにしとけよ。そうじゃないと船そのものに飛び火するからな」

この若者も、アマランサスを信じている。まだ飛ぶつもりでいるのだ。こんな若者でもアマランサスを信じている。それで何故、エフィーは信じることができないのだろう。

気分が沈んでいる暇などなかった。すぐさま扉が再び開かれたの

だ。ただし、今度は甲板に通じている扉である。開かれるなり悲鳴のような声が聞こえた。

「ヴァルカン！」

飛び込んできたのは、やはり若い男である。ヴァルカンよりも多少年齢は上だろう、きつと。というのも、涙と鼻水を垂れ流す様子は、まるで子どものようにその男の印象を引き下げているからだ。

完全に狼狽した様子で、足がもつれて転んでしまった。立ち上がるよりもまず先にヴァルカンへと救いを求めて手を伸ばすほどに怯えきっている。

「助けてくれ！ こゝ、殺される！」

男は気づいてはいないのだろう。男が扉を抜けてすぐに少女がブリッジに入って来たことを。少女は男の襟首を後ろからむんと掴んだ。見間違えるはずもない。セントポリア女王がその顔に涙の跡を残しながらも、とても楽しそうに笑っていた。

「人聞きの悪いこと言わない。古龍の死体捨てるくらいでがたがた言わないの。ほら、人手が足りないんだから、さっさと来る」

ハンターとして優れた力を持つ姫君は大の男を片手で悠々と引きずり出そうとする。男は必死に抵抗するが、力ではかなうはずもなかった。床に必死に抵抗の爪痕を残しながら、二人の姿は元来た扉へと消えていく。

そんな二人の姿を見送って、ヴァルカンも甲板目指して歩き出す。



「覚悟決めろよ、ヘルメス。じゃあ、俺も掃除手伝ってくる」

扉をくぐり抜ける間際、ヴァルカンはアマランサスへと両手で大きく手を振った。アマランアスも手を振って返す。

「姉ちゃん、あの化けもんにきつい一撃、期待してるからな！」

ヴァルカンの姿がなくなると、途端に静けさが取り戻される。もう、誰もが話し出すきっかけを失っていた。

「勝てますよ」

突然の声は何の先触れもない。クルーたちが一斉に顔を上げて声の主の姿をうかがう。主はカフスのボタンを外しながら、やはり微笑みを絶やすことはない。

「私たちは勝てますよ」

この言葉が欲しかった。英霊たちの死が犬死になんかじゃなかったことを証明してくれる言葉が。今一度、戦う勇気を与えてくれる言葉が。

エフィーが敬礼する。アネットが、デメトリアが、ユニスガヒルダがともに立ち上がり、最大限の礼でもって最後の戦いに挑む戦士を讃えた。

姫様はまだその勇気を砕かれてはいない。ここで終わらせるわけにはいかなかった。

西の海に炎は消える。

ロックラック地方東。炎妃龍ナナ・テスカトリの猛攻をしのぎきったモガ村に乾いた音が響いた。

海面が朝の日差しを反射し、照り返された陽光は痛んだ床板を通り抜けてモガ村を照らす。そんな日差しの中、赤くなった頬を手で押さえたアポロの姿があった。叩かれたのはアポロであり、叩いたのはギルドの受付嬢である。

「ひどい！ 私の名前、知らなかったんですか!？」

ことの起こりはアポロがギルドの受付嬢の名前を呼べなかったことに始まる。ナナ・テスカトリの襲撃を首の皮一枚で退けた後、受付嬢の手当を受けていた時の話であった。お礼を言おうとして、アポロは名前を知らないことに気づいたのである。

そして、こともあろうくに、名前を直接尋ねてしまったのである。それが、受付嬢の怒りの原因である。

すでに上半身には装備をつけていない。巻いてもらった真新しい包帯は、どこか不格好であり、それでも丁寧に巻かれていた。受付嬢の初々しさが伝わってくるように。

「し、仕方がないだろ！ ギルドの受付嬢でみんなに通じてたし、そ、それに……、俺が話題にする女の子って、君くらいだったから、みんなわかってくれて……」

アポロは自分で言うっておきながら、途中から気恥ずかしさのあま

り視線が泳ぐ。受付嬢にしても、頬を真っ赤にしてうつむいてしまった。

見ている側に相当の忍耐力と精神力を期待する若い二人の沈黙は受付嬢のか細い一言で終わりを告げる。

「アイシャです……」

「その、アポロです……。あのさ、俺、君のことが好きなんだ……。それで、その、付き合ってもらえないかな……」

「その……、よろしくお願いします……」

カップル成立の様子を、眺める人々がいた。二人がいる村の広場を見下ろすに適した岩の上　ここに栈橋がかけられ、島へ渡ることができる　五人もの人が並んでいた。

岩に腰掛けるのは男三人。そろって女性二人に包帯を巻かれてい

る。

「若いつていいものぜよ」

交易船の船長がいつものように顎をさすりながら言つと、その横でヒュプノスが笑いながらため息をついた。

「俺たちのこと完全に忘れてるな」

「はいはい、動かないでよ、ヒュプノス」

イシユタルが強く包帯を巻き付けると、同じ凍土出身のハンター

はカエルが潰されたような音を立てた。その隣でアルルが丁寧な村長のせがれに包帯を巻いている様子と見比べると、同じセイレムの魔女でも一様でないことがわかる。

「あいつ、俺たちの名前も覚えてないんじゃないだろうな」

「ありえないお話ではありませんね」

せがれの言葉に、アポロから名前と呼ばれたことのあるアルルは余裕である。せがれは苦いものを噛んだような顔をする。

「ところで、お前さんらには正直に答えてもらいたいぜよ。砂漠の方はどうなっちやる？」

モガ村にさえ古龍が現れたということは、原因の大本であるセクメーア砂漠の現状を想像することはたやすい。交易船の船長の言葉に、ハンターとしてイシユタルは目を細めた。

「わからない。でもきつと大丈夫、だと思っけど……」

「アポロは本当に頑張りました。それでもやっぱり世界は滅びますなんてお話、誰も期待なんかしてません。だから、きつとアマランサス先輩がやってくれます」

「アマランサス先輩？」

アルルの言葉の中に耳慣れない人物を見つけざるなり、尋ねたのはせがれである。大したことを聞いてはいないはずだが、何故かハンターたちは途端に口ごもる。

「何と言うか、その……、ハンターで」

イシュタルは包帯を巻く手を止めながら。

「それが……、ヘビィボウガンの使い手で……」

ヒュプノスは頬をかきながら言いにくそうに。

「今はミスカトニツクの特務騎士をされている……」

アルルは手こそ止めないが、その視線は助けを求めるかのように仲間二人の間をさすらう。前に背中を見せて座るヒュプノスとは視線を合わせることはできないが、横のイシュタルとはアイ・コンタクトに成功する。二人のセイレムの魔女は互いに諦めたように息を吹き、同時に口を開いた。

「メイドさんです」

すぐに返事がなかったのは、その時間の長さの分だけ人々の戸惑いを示している。聞き間違えかと考えて、それでもそんなはずはないと思い直すだけの時間が必要であった。

「聞き捨てならん話せよ」

「メイドがどうしてヘビィボウガンを？」

船長とせがれの言葉はもつともであった。

「話せば長くなるんですけど、お話は三年前に遡ります。セイレムの里にある国のお姫様が訪れました」

アルルのこの言葉に、セイレムの里を故郷とするハンターたちは一様に一つの事実を思い浮かべる。かつて水晶の森の悪魔にたった二人で挑んだお姫様とメイドさんの物語を。

北の大地に嵐は終わる。

晴れ渡った空。青い空の中を扇形の飛行船が漂う。気球部分はひどく損壊し、甲板の上は無事な箇所など残されてはいない。大きくえぐれ、断ち切れたロープが残骸として散らばっている。

ここは人が嵐に挑んだ舞台であった。嵐龍アマツマガツチとの死闘を繰り広げたまま、ミナガルデ王国フギンムニン級大型輸送船から切り離された区画は風任せに空を漂っていた。

その甲板の上、三人の女性が思い思いの座り方で座っていた。

角竜ディアブロスの防具で手足を包み、背には太古の文明の残り香を纏っている。何ともたくましいティルテュは、あぐらをかいて座っていた。

「そうそう、私のアマランサスはとにかく変な奴で、メイド服を着ないかと勧められたこともあったくらいだ」

相手は緑のドレス、ルディアFのスノードロップ。両足をそろえて横に投げ出す座り方は着飾った姿に似合う。

「私のお姉さまはどちらかというとワイルドな装備を好まれました。

ティルテュさん同様、ディアブロスの装備がお気に入りくらいです」

そして最後の一人、シギユンは何故か正座をして肩を小さくしていた。

「だからですね……、その……」

「さっきからどうしたの？」

「用足しなら、どこか外れでしてこい」

あからさまに怪訝そうな顔をするスノードロップに対して、ティルテュは指で甲板の端を指す。まるで現状を理解していない二人に対して、シギユンはついに我慢の限界を迎えた。

「違います!」

小さくなっていた反動のように声を張り上げ、一人立ち上がった。

「もう言います! 言わせていただきます! お二人が言ってるアマランサスさんて、絶対! 同じ人ですよね!？」

必死の形相で見下ろすシギユンに対してさえ、ティルテュは明らかに鼻で笑う。

「馬鹿なことを言っな。世界のどこにメイド服を着た特務騎士がいるんだ」

「いつだって事実は小説より奇なんです!」

力強くシギユンは断言する。身振り手振りまで加わり、今まで如何に抑圧されていたかがうかがい知れる。

「私のお姉さまは聡明で凛々しいお方です。そう、凛々しくて聡明なお方です」

スノードロップは意識してシギユンから視線をそらしていた。現実を直視する事をおそれているかのよう。

「いい加減現実逃避はやめてください！ あなたのそのお姉さまはセントポリア女王の洗脳教育のせいで愛嬌振りまくメイドさんに変貌させられてしまっただんです！」

シギユンによって悲しい現実を突きつけられてなお、スノードロップは目を合わせようとはしない。

ここまで来てなお信じようとならないのはテイルテュも同じである。

「ちょっと待て。しかし私の知っているアマランサスは私より年下だぞ。確か、何かの折りに一七とか言っていたことが……」

「あの人は永遠の一七歳なんです！ でも、本当はもう二四になっています！」

一七ならスノードロップの姉であろうはずがない。そんなテイルテュの思いこみは脆くも瓦解する。

「ではあいつの方が私よりも年上なのか!？」



「テイルテュさんのお年は知りませんが、七つもさば読んでるです！」

慌てたように立ち上がるテイルテュへと、ずびしと突きつけられるシギユンの指。

一つの嘘が暴かれ、重なりつつもずれていた二つの影が一つに統合されていく。というのは大げさだろうか。しかし、シギユンはさも犯人を見破った探偵のように、テイルテュは見破られた犯人のような狼狽を見せていた。

「なんてことだ……。確かに、言われてみれば妙に共通点が多かったような……」

「同じ人だから当たり前です！」

テイルテュは驚愕に目を見開いて、そしてすぐに楽しげに笑った。

「名前が同じで、そういえば武器も同じヘビィボウガンのハンターだったな。それに、妙に信頼のおける奴だったことも」

「私は昔のアマランサスさんのこと知りません。けど、今のアマランサスさんも本質的なことは何も変わってません」

単純な暴力ではない強さを持っている人だから。たとえ姿が変わってもその性質は何も変わっていないのだから。

「そうか。あのアマランサスは特務騎士殿か。信じられないような気持ちだが、妙に納得できる」

ティルテュの視線にすでにシギユンは写ってはいなかった。その目は空高いフギンムニンの片割れから砂漠を空を通して、見えるはずもないかつての戦友へと送られている。

広大な砂漠の大地では、今なお戦っている人々が大勢いるのだろう。しかし、ティルテュたちには何もできない。何もできなくとも、焦りや窮屈さというものを、不思議なほど覚えることはなかった。

「では、アマランサスはやはり戦っているのだな。この砂漠のどこかで」

ようやく現実を受け入れる覚悟ができたのか、それとも姉が誉められたことに気をよくしたのか、スノードロップも立ち上がる。

「と、当然です、私の最愛のお姉さまですから」

二人と目を合わせることなく、ただ頬を赤くしている。その視線はティルテュと同じ方向を見ていた。南へと。姉が今なお戦い続けているであろう戦場へと。

王龍テラドミヌス。巨大な古龍がドンドルマを目指しているという事実は、三人に暗い影を投げかけることはない。

「たとえどんなに闇が深くとも、お姉さまなら必ず見つけてくれます。たった一筋の光明を」

文字通り、暗闇の中のわずかな光を力に変える。凶眼の魔女とはそんな力を持つ。

砂漠の中央は、狂気の山脈を抜けた先にある。

スレイプニル級の甲板は片づけが始められていた。人と古龍の死体がそのまま投げ出されていたため、このままでは船に余計な重量がかかってしまう。

人の遺体はともかく、古龍の屍だけでも投げ落とす必要があった。

目を見開いたまま、顔の半分を潰されているとは言え今にも動き出しそうな炎王龍テオ・テスカトルの死体を前に、動けないでいるヘリオス。恐る恐る手を伸ばそうとして、古龍の体毛が風に揺れたことを動き出したと錯覚して慌てて手を引っ込める。

その脇を荷台に乗せられた風翔龍クシャルダオラが運ばれていた。スレイプニルのスタッフたちとヴァルカンとともに来た仲間たちが混ざって荷台を押している。セントポーリアは古龍の首を抱えておののいた様子もなく死体を船の縁へと抱えていく。

船から無造作につき落とし、セントポーリアは装備が血で汚れることなどすでに気にした様子はない。

とても姫君とは思えない遅い様子に、ヴァルカンは手を叩いた。

「やるじゃんか、姫様！」

「当たり前でしょ。私の師匠はなんてたって凶眼の魔女なんだから」

髪を払いながら胸を張る王女の姿は、血塗れであることさえ除けば年頃の娘である。そんな小娘の言葉に過敏に反応するほど、ヘル

メスは追いつめられていた。

「凶眼の魔女〜！」

何故か頭を抱えて血塗れの床を転げ回る。まともに戦ったこともない古龍が、死体とは言えそこら中に転がっている光景はヘルメスの精神をすり減らすには十分であった。とにかく怖そうというだけで過剰に反応してしまうのだ。

「わかつてもない癖に驚くなよ」

さすがのヴァルカンもそんな後輩ハンターの姿に呆れ顔である。ため息をついて、とりあえず放っておくことにした。

ヴァルカンが視線をヘルメスから外すと、セントポーリア王女と目が合った。

「あなたがヴァルカン？ 報告書に書いてあるよりもずいぶん、何と言っか、たくましい？」

「姉ちゃんどんなこと書いたんだよ」

「ヴァルカンたらかわいいんですよ。ランポスに追いかけ回されたり、崖から落ちそうになったり、モスに意地悪して土まみれにされてました。そんなことだったっけ」

かつてンガイの森に二人の特務騎士が訪れた時のことだ。ヴァルカンはその時、失敗という失敗をやり尽くしてしまったことがあった。在りし日の光景をありありと思い出しながら、ヴァルカンは頭を抱えた。

「報告書とは思えない書き方に驚くべきか、失態が王国の記録に載せられたことに驚くべきかわからない俺がいる……」

「臆病でモンスターを見たら震えて動けなくなるとも書いてあったし」

「姉ちゃん……」

ありのままの事実が漏れなく記載されているところだけは、報告書らしい。

セントポリアはどこか楽しげに笑っている。

「でも、まあ、臆病だけど、とびきり勇敢だとも書いてあったよ」

この一言に勇気づけられた。アマランサスは自分のことを認めてくれている。

「いよっし！ ほら、ヘルメス、起きろ。船を少しでも軽くするんだ」

俄然張り切り切りだしたヴァルカンは足下に転がったままのヘルメスを軽く蹴る。ヘルメスはまだ立ち上がれず、頭を抱えたまま左右に体を揺らしていた。

「俺はな、少し前まで普通の村人Aだったんだぞ。それがどうして魔王の城の城壁の前の野営地の本丸にいくちゃならないんだよ！？」

見下ろす二人は微笑みを絶やさないうまま互いの顔を見合わせた。

「馬鹿なこと言うな。これからこの船で魔王に会いに行くんだぞ」

「城壁どころか謁見の間まで連れてってあげるよ」

「そして魔王をやっつけるのは我らがメイドさんで訊だ」

「嫌だ！ 勇者だ！ 伝説の勇者を連れてこい！！」

勇者なんて必要ない。

すっかり錯乱してしまったヘルメスは放っておいて、セントポリアとヴァルカン、かつてアマランサスに救われ導かれた二人は空へと視線を飛翔させていた。

傾きかけた日差しに照らされた深い深い霧の城の最奥に古龍の王は身を潜めている。霧は毒を含み、文明を焼き尽くす力を有している。もはや近づくことさえ容易ではない。

それが何の問題になろうか。セントポリアとヴァルカンが信じる凶眼の魔女は、どんな窮地にあっても安心と安寧を与えてくれる。そんな力を持つ魔女なのだから。

南の砂漠に、太陽は墜ちた。

煌黒龍アルバトリオンとの死闘が繰り広げられた砂の闘技場には、現在夥しい数の墓が築かれていた。太陽はすでに空の彼方をあかね

色に染めている。夜が徐々に人々の墓標へ覆い被さるうとしていた。

ハンターたちはそれぞれが使用していた武器が砂に突き立てられ、それが墓標の代わりである。刃は刃こぼれ、ボウガンは傷だらけ。どれ一つとして激戦を感じさせないものはなかった。

ハンターではないものには船の残骸、板切れが墓標の役割を果たす。ずいぶん見すばらしい墓である。だが、誰も文句など言わないだろう。人のために戦った船が、死してなお見守ってくれているのだから。

仲間を失った者、家族を亡くした者。死はそれを受け取る人の数だけ様々な残響を残す。墓にすがりついて泣く者もいれば、悲しみを必死に噛みしめる人の姿もある。あるいは墓を取り囲み、悲しむことさえできないほどに疲れきったハンターたちがいる。

猟団「聖堂騎士団」は、団長の墓を取り囲み、ただ副団長一人を除いて皆座り込んでいた。一人として無傷な者などいない。精根尽き果てた様子で座り込み、その虚ろな視線は砂に突き立てられた双剣に向けられている。

「団長は確かにアルバトリオンを倒してくれた。そうだろ、みんな」

副団長であるエールが団員たちへと語りかける。皆泣き出す力さえなく、体を震わせることしかできない。ほとんど力の残されていない手で、武器を握りしめる者もいる。

悲しみ方は人それぞれである。

聖堂騎士団団長フィリアの墓の横、団員たちの輪の外側にはもう

一つの墓がある。フィリアの姉であるフィロソフィアの墓の前に、一組の男女が立ち尽くしている。

ソフィアとジェイナス。ソフィアは立っていることさえやっこの様子で、ジェイナスに支えられていた。

「辛いなら、泣いてもいいと思うよ」

「まだ戦いは終わってないからね。アルバトリオンを討伐してテオ・テスカトルたちも引いたけど、王龍が侵攻してくればまた襲ってくることも考えられる」

ジェイナスの腕をそつと掴んで、それでもソフィアは決して泣くうとはしない。

二人の目の前にはライトボウガン。高熱にさらされ、形が大きく変形していた。剛種武器であるライトボウガン。ミスカトニツクの秘密兵器。そして、フィロソフィアの墓標。

まだ戦いは終わっていない。王龍が討伐されたという報告はいまだなく、そして、その領域は拡大を続けている。しかし、足となる飛行船がすでない。

「王龍のことは姫様たちにお任せするほかありませんにゃ」

後ろから聞こえたのは船を失った機関士の声。失った左腕に包帯を巻いた痛々しい姿ながら、悲愴感を微塵も感じさせない。そのアイルー族の小さな体の脇から歩み出た少女は、こんな砂漠のどこで見つけたのか、小さな萎れた花を大切そうに抱きしめていた。



少女はエリス。避難民としてフィリアに救われ、避難民としてフィロソフィアの死を悲しんでくれる少女である。

エリスはソフィアたちに軽く頭を下げると、その花をライトボウガンの根本に静かにおいた。

「こんなお花しか見つかりませんでした。フィロソフィアさん、ありがとうございます」

この小さな光景が、姉がどれほど立派な最期を迎えたのかを、ソフィアに教えている。悲しくないわけではない。それでも、涙を堪える力を与えてくれる。

四人は戦士の墓の前に並んで座った。ソフィアはまだジェイナスのそばから離れることなく肩を抱かれたまま、そんな二人をメタロンとエリスが挟んでいる。視線はともに、フィロソフィアの墓標へと向けられている。

「お二人は、特務騎士様なんですよね？」

視線を少し横へ曲げ、エリスは尋ねた。特務騎士様という言葉には、ジェイナスは照れくさそうに頬をかく。

「様なんて柄じゃないよ。元々、ただの田舎者だしね。君と同じように村が古龍の被害に遭って、それで戦うことを決めたんだ」

剛種武器の使用を許可されるほど希有な能力を持つ男のあまりに謙虚な態度に、思わず笑ってしまったのはソフィアである。体重をジェイナスに傾けたまま、その顔には徐々に微笑みが戻りつつあった。

「そもそもうちの王様リベラルな人だから、あまり偉い立場なんだって実感がわかないんだよね。姫様だって今頃狩猟笛担いで王龍を追いかけて回してるよ。正直、お姫様がハンターしてるのか、ハンターがお姫様してるのかわからないくらいだから」

「そ、そうなんですか!？」

村娘にとって、王国というものはどこか遠い憧れのようなものを抱いているのだろう。お姫様ともなればいつも着飾った綺麗な人だとか、そんなイメージを抱いて。

そんなことはないと強烈な実例を知る三人は揃って苦笑にも近い笑い方を見せる。

「免疫ない人には衝撃的ですよ」

国王の娘が前線に立って戦っているという事実は、よくよく考えてみると衝撃的である。そのことを思い出しながら、メタトロンはイルーらしく長い髭を残された右手でいじりながら何とも言いがたい表情をする。

「陛下もお姫様もすごい人なんだ。姉さんたちとそんな人に仕えられたことが誇らしいよ」

亡くなってしまった二人の姉のことを思い浮かべると、ついソフイアの目尻には涙が貯まる。

避難民であるエリスの顔には火傷の跡が残り、衣服もお世辞にも綺麗とは言いがたい。疲れているはずの手を、それでも力強く握り

しめた。

「こんなこと、何の慰めにもならないと思いますけど、フィロソフ  
イアさんも、フィリアさんも王様たちに負けないくらい立派な人で  
した！」

力説するエリスに対して、ソフィアはつい涙をためたまま戸惑っ  
たように瞬きを繰り返した。こんな見ず知らずの人がどうしてここ  
まで言ってくれるのだろう。そんな疑問が、やがてこんな人からも  
評価してもらえる姉であったんだという思いへと変わっていく。

「ありがとう、本当に嬉しいよ」

涙はこれ以上流れ出すことはなくなっていた。

ジエイナスはソフィアの肩を抱き寄せると、そっと頭を寄り添わ  
せる。

「だから大丈夫。姫様ならきつと何とかしてくれるよ。可愛いメイ  
ドさんもついでることだしね」

「ジエイナス、君は女を抱きながら他の女のことを考えてたのかい  
？」

「ちょ！ そんな言い方やめてほしいな」

冗談だとはわかっている。それでも場慣れしていないジエイナス  
は不必要に慌ててしまった。そんな初な男の腕の中でソフィアは笑  
っていた。いつもの微笑みを取り戻しつつあった。

メタトロンやエリスにまで笑われてしまい、ジェイナスは少し不機嫌そうに口を尖らせる。

「ごめんごめん。そうだね。僕も信じるよ。姫様とアマランサスさんなら、きつと王龍だって倒してくれる。姉さんたちの思いを継いでくれるって」

凶眼は目にしたものをすべてを記憶する。それは王龍テラドミヌスでさえ例外ではない。きつとこれまでに会ったすべての人の姿と思いとともに、凶眼の魔女は戦ってくれることだろう。

スレイプニル級の甲板は血が模様を描き、爪痕、傷跡が多数残されながらも、邪魔なものはすべて片づけられていた。古龍の屍は縁から突き落とし、人々の遺体は格納庫に納められている。すでに夜の時間が始まっていた。暗くなった空は月明かりと星明かりが煌々と灯る。

凄惨で血生臭い臭いが決してとれることはないであろう甲板の上には、セントポリアが一人でたたずんでいた。

パールFXの白い装甲に付着していた血は乾き、水分をなくした血液は被膜となって少しずつ剥がれ落ち始めている。

古龍の大群とすべてをかけて戦った。見えている範囲でさえ甲板は傷つき、スレイプニルはそれほどの激戦を潜り抜けながらもまだ飛んでくれている。

人々にしてもそうだ。古龍なんてつい最近まで伝説上の生き物だ

と考えていた人たちが、それでも必死に戦ってくれた。甲板を染める血は人々の命がけの戦いを言葉ならずも物語っている。

「ありがとう、みんな。後はゆっくり休んで。この世界は、みんなが守りたかった者はアマランサスが守ってくれるから」

空を吹き抜ける風がセントポリアの頬を撫でた。涙はもう乾いた。風の抜けた先を追いかけた方　船体の後ろ側、ブリッジの方へと体ごと向き直る。すると、一人の騎士が歩いていった。

防具が純白の輝きを放つ。左側に装甲が偏った左右非対象の構造はガンナーの装備の特徴である。肩に生える二本の角は角竜ディアブロスを思わせる。腰に巻かれた斜めのスカートの柔らかい質感は優しさや抱擁を連想させる。

その姿にセントポリアは二人の人物を思い浮かべた。

一人はアマランサス。かつて凍土で出会ったこの女性は、ディアブロスの鎧を身につけた力強い人であった。

一人はアマランサス。いつも微笑みを絶やさないうで、それでいて人を安心させてくれる大きくとも威圧的でない存在感を持つ。

二人とも同一人物で、二人とも何があってもセントポリアのそばにいてくれる。

身につけた鎧は力強さと優しさ。そんなアマランサスの二つの性質が混在しているかのように逞しくも流麗であった。

トルマリソFXと名付けられた、セントポリアのパールFXと

姉妹装備として開発されたヘビィボウガン専用の鎧である。背にはかつて二人で倒した古龍、霞龍オオナズチの素材を惜しげもなく用いたヘビィボウガン、ネブラグロブスが背負われている。

まだ無骨な兜はつけていない。髪が風になびき、そして、その微笑みはいつもセントポリアを支えてくれる。

「お着替え終わりましたよ、セントポリア」

メイド服を着ていないメイドさんは兜を脇に抱えて、余った手を振る。どんな姿をしていても、アマランサスはアマランサスである。

「ねえ、アマランサス？ 私にも王龍を倒す方法って教えてくれないの？」

「駄目ですよ。だって、教えたらきつと怒られちゃいますから」

「教えてくれないと後が怖いってこともあるけど、大丈夫？」

鼻歌交じりにアマランサスは笑うばかりである。

セントポリアの隣に並ぶと、少しは追いついたつもりでもまだ身長はアマランサスの方がだいぶ高い気がする。三年も前のことが昨日のように思い出される。

あの日も白が世界を埋め尽くしていた。かつては吹雪。今は霧。そのどちらも古龍の襲来を告げている。

「セントポリアが望むなら、アマランサスは戦います」

明日の夜明け前に、作戦を開始する。王龍テラドミヌスを相手にたった一人の力を頼りに挑みかかる作戦は無謀と言ってしまふことさえおこがましい。不可能と言う言葉さえ生やさしい。そしてその詳細な内容を誰も聞かされていないのだ。

それでも、セントポリアは作戦開始の許可を出した。人類の、いや、レムリア大陸に生きるすべての命と未来をかける作戦の実行を決めた。

明日の日の出とともに、世界の運命は決められる。命と龍の戦いが今まさに終わりを迎えようとしていた。

### 第三四話「たったひとつの冴えたやりかた」Evil Eye

夜闇の中を神馬が駆ける。

雲海の様相を呈する王龍の霧がたなびき、スレイプニル級の船側にぶつかっては絶ち割られていく。波をかき分ける、まさに船のように神馬の名を与えられた飛行船は進む。

王龍を倒す人と竜の最後の希望が夜空を疾走する。

人も竜も最後の戦いを見届けようと空に集う。傷だらけのヒミブリード級輸送船。飛ぶ力を辛うじて残すだけのグツフルファクシ級飛行船。北の空から舞雷竜ベルキュロスが飛行船の間を飛翔する。南の空から火竜リオレウスが憎々しげに霧を見下ろす。

誰も霧の迷宮に立ち入ることは許されない。

火を炎に変える霧はわずかな火花さえ爆発に変えてしまう。飛行船は動力を焼き尽くされる。竜はその身に雷と熱を纏っている。

大地の主は霧の迷宮に潜む。ただただ白い霧の奥底から王龍の呼び声が不気味に木霊する。まるで、地獄のそこから幽鬼が誘う声かのように。この声聞くもののみならず、この大地に生きるものすべてを地獄へと誘う声だけが霧を通り抜けることを許される。

まもなく夜明けを迎える。人類最後の戦いが始まるうとしていた。

スレイプニルは、人々の最後の希望を乗せて夜空を引き裂いて飛んでいく。



ここはスレイプニル級高機動艦スレイプニルの動力室である。外見はまるで儀礼船のように優美な飛行船であるが、高い機動力を約束する動力は無骨以外の何者でもない。

床には打ちっ放しの鉄板が突き詰められ、広くはない部屋には上半身半裸の屈強な男たちがひしめいている。肩にスコップを担ぎ、その目は部屋の壁一面を占める巨大な炉へと向けられている。

鎧竜グラビモスの高熱に耐える甲殻と爆鎚竜ウラガンキンの耐熱殻を組み合わせた巨大な炉は優雅とはあまりにほど遠い。岩石にそのまま穴を開けたようなその炉は内部から炎の下をちらつかせている。早く餌を寄越せとばかりに火と光が炉の外に溢れだしてきそうなほどである。

「いいか、野郎ども！　これが最後の攻撃になる！　しくじりは許されない。慎重に慎重を期していけ！」

男たちの中でも特にがたいのいい男が腕を大きく振りながら声を張り上げる。機関室長の言葉に、男たちは今にでも燃石炭を炉に投げ込みたいと熱気を帯びる。

そんな男たちを差し置いて少年が前に出る。ヒプノックの素材を用いた防具からハンターであることがわかる。ヴァルカンである。スコップを首の後ろに担いでどこか得意げでさえあった。

「この燃石炭は俺が運んできた。最初は俺にいかせてもらおうぜ」

機関長は止めようとはしない。何やら不適な笑みを浮かべてヴァルカンの様子を見守っている。

代わりにヘルメスが何故か妙に声を潜めてヴァルカンのすぐ後ろから話しかける。その手にはスコップさえ握られていない。

「いいか、ヴァルカン、慎重にだぞ。燃える霧なんだからな」

今はまだ霧の濃度が薄い。だが、スレイプニルのすぐ下には霧が広がっている。少しでも高度を下げれば瞬く間に動力は火を炎として垂れ流すことになる。

そのことがヘルメスには不安でならないのだ。

「わかってるっての」

気のない様子でヴァルカンは燃石炭がうず高く盛られたぼた山にスコップを差し込んだ。地面のスイッチを踏みつけると、炉の小窓が開き、炎と光が強烈な存在感を示す。そんなことかまいもせず、ヴァルカンはスコップ一杯の燃石炭を思い切り投げ込んだ。

「うおい！ 慎重、慎重！」

すでにヘルメスは涙目である。緊張の連続ですっかり精神をすり減らしていた。

「坊主！」

機関長の怒号。ヘルメスはその敵つい顔に救いを求めるように振り向いていた。この人ならならわかってくれる。慎重に、火力を調

整しなければならぬのだと。そう言っていたのだから。

では、どうしてこの人は急に笑い始めたのだろうか。

「わかってるじゃねえか。そうだ！　ここで王龍に追いつけねえじや目も当てられねえ！　全力だ！　全力で石炭叩き込め！」

男たちがスコップを一齐に頭上にかざす。威勢の良いかけ声が動力室内へと響きわたった。たくましい腕が遠慮なく燃石炭をスコップに乗せ炉の中へと次々と投げ込んでいく。炎が赤々と燃え上がり、生み出された力がスレイプニルを鳴動させる。

荒々しい鼻息が、力強い体躯がスレイプニルを徐々に加速させていく。大型飛行船と思えないほどに速度を上げていく。

力のグングニル。人のフギンムニン。そして、速さのスレイプニル。

だが、男たちは満足というものを知らない。ヴァルカンも機関長も燃石炭を際限なく押し込んでいく。

そんな中で一人の男の悲痛な声が響きわたっていた。

「嫌だ〜！　ここから出してくれ〜！」

男たちの筋肉に取り囲まれ、ヘルメスは身動きをとれない。ただただ泣き叫ぶことしかできないでいた。

「どうしたの、ヒルダ、そんな呆れたような顔して？」

「切り離し、今度は躊躇なくできそう」

ブリッジでは、送声管から動力室での一部始終を聞いていたヒルダの冷たい視線をデメトリアが指摘した。

スレイプニルは加速を続け、ブリッジ・クルーたちは皆椅子に体を押し付けられる加重を感じていて。

その力に舵を掴んで必死に耐えるのはユニス。クルーの中で唯一椅子についていない黒衣の少女は操舵を決して諦めようとはしない。

「全速、前進……！」

船体を震わせる振動が、ユニスの手によってしつつけられていく。力が集束していくようにスレイプニルは暴れ馬から俊馬へと変わっていく。

「ユニス、軽くなってるから感覚の違いに注意して」

「監視続行。あまり王籠に近づきすぎないでくださいね。もうこれ以上の損害はスレイプニルが保ちませんわ」

ダメージ・コントロールを担当するヒルダと管制を担うアネット。

艦長席に座る副艦長エフィーは強い調子でアネットの言葉を否定する。

「いいえ！ 極限まで接近してください。それがアマランサスさん

からの指示です」

クルーたちが示し合わせたようにエフィーへと振り向く。ある者は戸惑ったように、ある者は表情を変えないまま。ともに絶望していたはずのエフィーの変わりようをすぐに受け入れることができないでいた。

しかしエフィーは怯まない。

「アマランサスさんの願いは姫様の願い。姫様の願いは私たちの願いです。そして、この戦いにはこの大地の未来がかかっています」

エフィーはもう大丈夫。表情に乏しいユニスさえ微笑みを見せ、クルーは揃って頷いた。すぐに前を向き、自らの職務へと戻る。

人々の意識もまた、一つに収斂されていく。

砂漠を夜は終わりを告げる。闇は光に切り裂かれる。朝日が眩しいほどの輝きをスレイプニルの甲板に差し込んでいた。角度が浅く、気球では防ぐことができないのだ。

セントポリアの色素を持たない体は日光を浴びることはできない。本来なら甲板に立っていることはできない。

それでも、セントポリアはここに立っている。甲板の上だっただけにだって、セントポリアは立つことができる。

アマランサスがそこにいてくれるのなら。

太陽の光を自分の体で遮って、セントポリアの肌を守ってくれる。絶やさぬ笑顔はセントポリアを支えてくれる。

アマランサスの作る日陰に守られながら、セントポリアは狩猟笛を構えた。巨龍笛「須弥山」を奏でよう。アマランサスをただ一人の観客として。

龍の横顔を模した笛を腰だめに構え、吹き込み口に唇を付ける前にアマランサスの顔を見る。鎧を身につけたメイドへと微笑み返した。

「始めるよ」

笛へと柔らかく息を吹き込んでいく。狩猟笛を吹き抜けた息が音へとその姿を変え、大きくとも大らかな巨龍のほうこうを轟かせる。楽器とは思えないほど大雑把な音を組み合わせ、赤眼の王女は演奏を始める。

はじめは追憶のプレリユード。

セントポリアは思い浮かべていた。三年前のあの日のことを。アマランサスと出会い、ともに古龍の脅威を乗り越えた。思いだそうと思えば昨日のことのように思い浮かべることができる。世界の裏側に潜む古龍という存在を知り、それが人々を脅かしていることを知った。

セントポリアは戦うことを決めた。かつてセイレムの里を守り戦った七人の魔女のように。

赤眼の魔女セントポリアと凶眼の魔女アマランサス。二人の魔女から始まった七人の魔女。セントポリアが王立古龍観測隊の責任者になった時、グラジオラスが博識の魔女として加わってくれた。続くのは荒々しいラプソディ。

古龍を探るということは、世界の裏側に潜む悪意と向き合うということ。時に古龍と戦い、古龍がこの世界に這い出すほどの災害とも遭遇した。

その最中に会ったのが燃える山の三姉妹。神託の魔女フィロソフィア。剛腕の魔女フィリア。神速の魔女ソフィア。七人の魔女はようやく六人となった。

その後、誰よりも姉に憧れを抱いていた少女は力付くで七人の魔女最後の椅子を得た。結界の魔女スノードロップ。

誰もがその力を惜しげもなくセントポリアのために使ってくれた。古龍と戦ってくれた。

新たな七人の魔女たち。

最後に愛しい人へのセレナーデ。

セントポリアのアマランサスへの気持ちは男女の愛とは違う。それでも信頼とするには他人行儀で、親愛では物足りない。結局、愛と呼びたい好意に他ならない。

暗闇の中で戦う術を教えてください、ハンターとして鍛えてください、人として側にいてください。

やがて曲が終わる。昼と夜との狭間に響きわたった音色は王龍の霧に染み込みながら消えていく。

セントポーリアとアマランサス。お姫様とメイドさんは向き合い、微笑み合い、互いに感じたことを伝え合う。

「角度、進行方向から見ても一時の方角」

姫は角度。轟いた音の反響具合から王龍といる方向を告げる。片耳が聞こえず、音の方向を掴むことができないメイドに代わって。

「距離、約三〇〇」

メイドは距離。より高度な聴覚を必要とする距離の測定はわずかな音の大きさを聞き分けなければならないため、力不足の姫に代わって。

互いが互いに補い合い、霧の海、その海底に潜む王龍の位置を探り当てた。

ここに、最後の戦いが始まりを告げた。

「一時の方角、距離三〇〇！」

姫とメイドが探り当てた王龍の位置がブリッジに伝えられる。管制のアネットが海図に真剣な眼差しで王龍の位置、スレイプニルの進行方向を書き入れていく。わずかな予想の外れも許されない。



「霧内部へ降下！」

龍毒と炎。まさに死と毒の海にも等しい霧へと、スレイプニルはエフィーの指示の下飛び込もうとしていた。わずかな躊躇もあつてはならない。

「降下……！」

ユニスの復唱とともに、スレイプニルは霧をその船底で大きく叩き割る。途端に霧に包まれる船。わずかな隙間から霧が船内へと入り込み、ブリッジに白く靄がかかる。息苦しさは霧に含まれる龍毒のせいである。だが、少しの怯みも見せるつもりはない。

霧を大きく吸い込んでしまうこともかまわず、ヒルダは送声管に目一杯の声を吹き込んだ。

「戒厳令発令。以後、火気厳禁！ 動力室より撤退急げ！」

突如船体が小刻みに震え始める。木の軋む音に、張り裂ける木の音。クルーたちは体に痛みを感じ始めていた。それが徐々に強くなる。

その思いを代弁したのはデメトリア。歯を食いしばりながら、気力だけで声を出す。

「龍毒の濃度が上昇してる！」

「スレイプニルが、痛がつてる……！」

ユニスが握る舵が震えているのは、操舵手の少女が震えているからではない。船そのものが龍毒に全身を炙られている。外から見たなら、まるで霧に喰い荒らされていくように表面から身をやつれさせていくスレイプニルの姿が見えたことだろう。

火を炎へと焚きつける霧。触れるものすべてを蝕む毒。

だが、決して暴走させられるものがあつた。決して蝕まれぬものがある。

「まだです。もっと近づいて！」

スレイプニルは霧の中を底へ底へと突き進む。どれほど龍毒が濃く増してこようと、どれほど死の奥深くに身を沈めようと、スレイプニルは霧を裂く。

死に挑み、命を輝かせ、旧支配者の潜む地獄の底へ。

その命ある限り。その意志潰えぬ限り。

人は群れる。それ故弱い。それぞれが独自の意志を持ち、まとまり切るできない。

人は群れる。故に強い。仲間を信じていることができるのは、信頼するということだけは人だけが持つ強さである。

スレイプニルの炉は炎を吹き出していた。すでに壁に火が燃え移り、床は高熱を帯びた色をしている。すでに多くの作業員が退避を

終えており、通路から心配そうに動力室の中を覗き込んでいた。まだ二人、残っている者がいるのだ。

いつ爆発してもおかしくはない。そんな環境下にありながらそれでも燃石炭をくべ続けることができるのだとしたら、それは信じるという思いに他ならない。

王龍を倒してくれると信じるからこそ、クルーたちが最後まで諦めないと信じるからこそ、ヴァルカンは、機関長はその場に踏みとどまることができた。

最後の最後まで全力を傾けることができた。

ヘルメスが通路の縁から動力室へと身を乗り出して叫ぶ。

「おい、ヴァルカン！ 急げよ。切り離されるぞ！」

炉から吹き出る炎の轟音の中でも、その声は確かに二人に届く。

機関長は口元を釣り上げながら隣に立つ若造に声をかける。無論、手を止めることはない。玉の汗が額から飛び散る。

「仲間はああ言ってるぞ、坊主」

「おっさんこそ早く逃げたらどうだ？」

「機関長がガキよりも先に逃げられるかよ」

ヴァルカンもまた汗が滝となっていた。炎が鎧竜の甲殻の隙間から体をかすめるように吹き出ようと、その顔は笑ってさえいる。

「こちとらアマランス親衛隊筆頭なんだよ。姉ちゃんが戦うつて時に及び腰でいられっか」

意地と意地の張り合いであった。どちらがより仲間を信じているか、仲間の勝利を信じているのか。かつて巨大な竜に怯えていることしかできなかった少年は世界を滅ぼすほどの災いにさえ立ち向かう。船の動力を預かってきたものが負けるわけにはいかなかった。

「だが……」

「ああ……」

炉はもはや限界であった。頑丈なはずの外装が目に見えて膨張し、炎は遠慮なく壁を突き破っている。王龍の霧に包まれた火はすでに動力室を埋め尽くしつつあった。

「逃げる！」

二人は同時に叫び、そして同時に後ろへと逃げ出した。

それを待っていたかのように動力が爆ぜる。膨れ上がった炎が部屋を埋め、霧がそれを助長する。炎が船体そのものを焼こうとした時、不自然な揺れ方をして部屋全体が押し下がる。切り離されたのだ。炎の塊となった動力室はスレイプニルを離れ、その遙か後方で巨大な火花を咲かせた。

霧をかき乱す爆風は冷徹なスレイプニルに当てつけるように船体にまで届く。その風は切り離されるまでは動力室の床があった場所にぶら下がる二人を揺らした。あらかじめ通路に逃げ込んでいた他

の男たちが慌てた様子で二人を引き上げようとする姿がある。

動力を失いながら、命を危険にさらしてでも、スレイプニルは前へ前へと進み続ける。すでに多くの犠牲を支払った。それでもなお、失ってはならないものがある。その掛け替えのないもののため、スレイプニルは王龍を目指す。

絶望を振り切り、希望を胸に、存在そのものが悪意である大地の王へと。

力つきるまで。力つきてもお。

死者の遺志を乗せて、生者の願いを乗せて暁の船は霧を分ける。

その体は満身創痍にして、質実剛健。どれほど傷つき、今にも墜落しそうな船体でありながらその動きに迷いない。霧は濃く、何も見えていなくともその針路は揺らぐことがない。

霧を、闇を決して諦めることなく切り開いたある少女のように。

片耳が聞こえないという障害を自らの努力と志で乗り越えた少女のようじ。

スレイプニルは霧を裂く。霧を切り開く。王龍テラドミヌスの下へと突き進む。

その背に凶眼と呼ばれた眼を持つ戦乙女を乗せて。

「ティルテユ。あなたはとても親不孝な孝行娘です」

アマランサスは甲板の先端に立っていた。すでに鎧を身につけ、その横顔をうかがうことはできない。霧に隠され、顔をうかがうことはできない。

吹き抜ける濃霧の中、言葉が紡いでいくのは親不孝な孝行者である一人の女性の姿と思い。

「だって、あんなにお父様のこと嫌ってるって公言していて、でも、お父様の思いをとても大切そうにしていましたよね」

女性は父を嫌いながら、しかしその父に最も真剣に向き合っていたのは間違いなく女性であった。ハイパーポリア文明の遺跡から、父が焦がれた壁画を見つけたしたのは、父の熱意を嫌いながらも信じた娘であった。

古龍と戦う人々と、赤く燃える雲の姿が描かれた壁画を見つけ出した女性はティルテユ。

「ヴァルカン。あなたはとても臆病な勇者です」

深い霧の向こうから聞こえてくる王龍の声に重なり合う言葉が導くのは臆病で、そして勇敢な少年の小さな物語。

「本当は怖くて怖くてたまらないはずなのに、自分が何をすべきかがわかっていて、そのために一生懸命になれるんですから」

恐怖を知らないことも、恐怖を感じないことも勇気とは違う。恐怖を乗り越えてこそその勇気。無謀であることは勇気ではない。少年はだからこそ勇敢だった。自分の力と、すべきこそを理解して、人

一倍臆病な自分の心さえ乗り越えた。

森を包む燃える霧の中で、ヴァルカンが見せたのは少しの勇氣と大きな思い。

「ジェイナスさん。あなたは心優しい復讐者です」

巨大な古龍の身じろぎは霧をかき回し、言葉さえいびつにねじ曲げてしまうように不規則に霧が吹き付ける。

「涙を流しながら、それでも誰かに優しくして上げられる人だからです。それはとても立派なことです」

大切な人をモンスターに殺されながらも、自分を見失うことなく真に戦うべき相手に挑むことができた。その強さがあつたからこそ、古龍と戦うことができた。思いで世界を変えることはできなくても、世界に潰されてしまうほど思いは弱くない。

地中から吹き出した霧がジェイナスを救ったのは、きっと偶然ではない。

「セントポリア。あなたはとてもわがままです」

一際濃厚な霧がスレイプニルを包み、吹き付けられた龍毒が船体表面から木片を舞い上がらせた。

王龍は近い。

「人が悲しむことに耐えられなくて、人が苦しい思いをすることが許せない。そんなわがままなお姫様です」

あなたと出会ったから、古龍と戦うことになった。凶眼に古龍の姿を写し出すことになった。

凶眼は魂さえも写し取る。

白い闇は、故郷である凍土の光景とよく似ている。セントポリーアと出会ったセイレム山とよく似ていた。あの頃と二人の関係は何も変わらない。志してきたことは何も変わらない。

ここに、すべての始まりと終わりとが集う。

「だから私は、そんなあなたのために戦います」

見開かれたアマランサスの眼。視線そのものが力を持つように霧が切り開かれる。

姿を現す純白の鎧。背負われた不気味な紫の皮張りのヘビィボウガンにまわりつく霧がかすかに火を発しながら通り過ぎる。銃身そのものがすでに高熱を帯びている証左である。

霧のその先に、王龍の漆黒の体が蠢いた。声のアマランサスの右耳に届く。

スレイプニルのその直下にて、王龍テラドミヌスは絶望と破滅をまき散らしながら突き進む。

スレイプニルのその上で、凶眼の魔女アマランサスはすべてを写し取る眼を古龍の王へと向ける。



毒と霧の王。凶眼の魔女。

最強であるが故に、王はすべてを蹂躪する。

最後であるが故に、魔女はすべての命の願いの受ける。

最強と最後が、この大地をかけてぶつかり合う。

スレイプニル級は限界を迎えていた。炉を切り離し、動力に残された余剰推力は底をつきかけていた。王龍の間近まで到達しながら、もう追いつがることさえできない。徐々に引き離され始めていた。

王龍の背から吹き出す霧は高密度の龍毒を保ったままスレイプニルへと吹き付けられる。度重なる戦闘を経たスレイプニル級に耐える力はない。

朝を迎えたとは思えないほど薄暗い霧の中、吹き抜ける風の中に細かく砕かれた木片が混ざり込むことはすでに常態化していた。

霧が苛み、風がまき散らされ、スレイプニルは身を擦り減らしながら王龍へと迫る。霧の中、視界は通用しない。そもそも飛行船は何かと接触するほど近くにまで移動することはまずあり得ない。

無茶をしようとしていた。無謀を試みようとしていた。

王龍の脇から、霧の最中を接近する。近づく。これ以上は不可能そう考えるさらに先へ。さらに傍へ。船体そのものが歪む音が響く。だが、まだ先へ。

神馬の脚が、王龍の背へとかった。

その瞬間、船体が巨大な揺れに見舞われる。木々の引き裂ける音が響く。船首とブリッジを引き裂くように甲板に亀裂が走り、横断する。破壊の悲鳴とともに、スレイプニルはその身を引き裂かれた。

引きちぎれた船首はそのまま王龍の背へと落下し、その膂力に巻き込まれながら破碎される。スレイプニルは大きくバランスを崩して王龍から引き離される。

人の誇る最後の大型飛行船が墮ちる。しかしそれは敗北を意味しない。勝利の瞬間である。何故なら、スレイプニルはその役割を過不足なく果たしたのだから。

砕け散る木片は、すぐに霧に覆い隠されてしまう。霧に含まれる龍毒に細かく破碎され、あらゆる意味でその姿を消してしまう。

王龍は突き進む。強靱な四肢で力強く大地を踏みつけ、山のように大きな体をつき動かす推進力を生み出し続ける。幾多の文明を滅ぼした王者の体にはいくつもの傷跡が残り、それが起伏と陥没、無数の突起と重なる形でその背を複雑な地形へと変貌させていた。

広く大きく、それはまさに大地であり、しかしそれは人々の足を支えてはくれない。

そこにはあまりに多くの危険を伴う。

足場が悪く、足下からわずかでも目を離せばたちまち足を斬り裂かれ、その背から投げ出されてしまう。グングニル級から対巨龍爆弾設置のために降り立ったハンターたちの多くがそうして命を落とした。

王龍はさらに速度をましている。進路上のわずかな起伏を踏み砕く度、背の上では激震とともに大地が大きく揺らいた。この力は皆蟹シエンガオレンさえ力付くで打ち破った。

そして、霧は龍毒と炎を潜ませる。飛行船は両面から砕かれ、動力は制御不能なほどに燃え盛る。飛行船では近づくことさえできない。

王龍は、すでに何もかもを寄せ付けない。

飛行船では、スレイプニルでは近づくことしかできなかった。王龍の正確な位置さえわからず、動力は燃える霧によって破壊されてしまう。

飛行船では駄目なのだ。

では、どうすればいい。

グングニル級機動要塞が行ったようにハンターを王龍の背に直接乗り込ませるのは如何か。

不可能。

飛行船さえ近づくことがやっとなのだ。どうやってハンターを乗り込ませる。危険が大きすぎる。

乗り込んだところで、その足場は危険きわまりない。どれほど慎重に歩こうと一度足を斬り裂かれれば終わりである。

霧に覆われている。ただでさえ危険な足場は完全に覆い隠され、手探りで進まなければならない。そして霧には龍毒が含まれる。時間をかければ全身を焼き尽くされる。

王龍をどう倒すのか。巨大な龍に致命傷を与えられるほどの火力を持つハンター用の武装など存在していない。

不可能。この言葉を幾度もなく重ねる必要があった。

奇跡が必要であった。

姿が見えもしない王龍に霧と龍毒をもともせず接近できる飛行船が必要になる。

王龍の背をもともせず疾走できる体術と、目隠しをしながら綱渡りを行える力を併せ持つハンターがなくてはならない。

そして、王龍を倒すほどの圧倒的な火力を。

そんなものがどこにある。

王龍の広大な背は大地のように幅広。それはしかし、霧に覆われ、毒をまき散らし、絶えず鳴動する地獄の大地である。

誰の姿もあるはずがない。こんな破滅の大地に、しかし神馬スレイプニルに跨った戦乙女は降り立つ。

霧を裂き、その純白の足に踏みつけられた大地は赤黒い輝きをほとばしらせる。王龍の大地にアマランサスは、普段通りの微笑みを絶やさずに、そして、その瞳は霧の奥底へと向けられる。

その足は確かに、軽やかな足取りで走り出した。

踏みしめる度大地が龍毒の輝きを放つ。まとわりつく霧はトルマリNXの純白の装甲に赤黒い光をまとわせる。

それでも、その足は王龍の背の複雑な地形をもともしない。霧はあくまでも濃い。見えてずなどないはずが、それでもアマランサスは体勢を一切崩すことなく走り抜ける。

まるで、見えているかのように。

王龍の背を前へ前へ。白い霧の中をアマランサスが駆け抜ける。

何故落ちない。何故走ることができる。

王龍は人のことなど意に介さない。ただ水を求めドンドルマの街を目指す。そのためにただただ突き進む。砂を踏みしめた。その足が小高い砂の丘を踏みにじると、爆弾でも仕掛けられていたように砂が飛び散る。

すると、その力は足を伝い、王龍の体を揺り動かす。その背から霧が吹き飛び、乗っていた岩石が軽々と放り投げられる。

人などたやすく弾きとばしてしまうほどの力が王龍の背を通り抜けた。

道は、死者によって拓かれた。

王龍の背をアマランススよりも以前に歩いた者たちがいた。グングニル級機動要塞から乗り込んだハンターたちは対巨龍爆弾を抱え不安定な足場を駆けた。

その結果は誤爆という最悪の事態を招き、王龍が霧を解放するきっかけを作ることとなった。

その中で唯一生き残っていたのはグラジオラスただ一人。霧の中を、爆弾を担いだまま歩いていた。

想像以上に辛い旅路である。龍毒の霧は吸い込めば肺を焼く。頭部に近づくほど、揺れが激しく足をとられてグラジオラスの体は強く王龍の背へと叩きつけられた。これまでに幾度も転倒している。振り落とされていないことは奇跡にも近い。

身につけていたクラフトF 対古龍を想定した装備であるのに、はすでに劣化している。これ以上歩いていくことはできそうにない。

グラジオラスは爆弾を横に置き王龍の背鰭を頼りに座り込んだ。ただ座っているだけでも龍毒が徐々に体を焼いていく。

隣に置かれた爆弾も表面が焼けて元の色を忘れてしまうほどである。これなら外から攻撃しても起爆できるかもしれない。グラジオラスは背中から片手剣を抜いた。

実を言うと、グラジオラスが使用する武器は砦蟹の素材を用いたものである。剛種武器。シエンガオレンと同じ光沢を持つ長身の刃を手前にもっていきこうとしていた時、先端が王龍の甲殻を引っ付けた。

飛び散ったかすかな火花に、霧が突然小さな火の玉となってすぐに吹き抜ける勢いにたち消えた。

「この霧、燃えるのね……」

それなら、もしかすると王龍を倒すことができるかもしれない。

霧が一気に燃え広がらないところを見ると、可燃性というよりは助燃性なのだろう。それ自体は燃えず、しかし火の粉を大きくする外から火をつけても仕方がない。

王龍の体内に着火できれば、王龍を倒すことができるのではないだろうか。

霧を噴出している開口部に高火力の攻撃を加えることができたとしたら。

本当ならグラジオラスがこの爆弾を直接噴出孔に直接設置できればいいのだが、グラジオラスも爆弾もこれ以上高濃度の霧に耐えることはできそうにない。

霧が助燃性なら飛行船も近づくことはできない。方法はあっても手段がない。

どこかに奇跡は転がっていないものだろうか。霧を突き抜けて王龍の背に立って、龍毒をもつともしないで、そして噴出孔を狙い撃つことができる奇跡のような人が。

突然せき込む。おびただしい量の血液を吐き出してしまった。

もう、長くは持たない。果たしてグラジオラスが先か、それとも対巨龍爆弾が炸裂するのが先だろうか。

もしも、こんな奇跡を揃えてくれる人がいるとすれば、それはアマランサス特務騎士しかない。あの人ならば、奇跡を起こしてくれるかもしれない。

そのための情報を是が非でも届けよう。あの方は、特殊な力を持っている。見たものすべてを記憶し、いわば、情報を力に代える能力を有しているのだ。

情報を届ければ、きっと何か方法を見つけてくれることだろう。

「アマランサスさんなら、気づいてもらえるかしら？」

片手剣の柄頭で王龍を叩く。金属同士をぶつけ合わせたほどの音が響く。リズムを刻んで、モールス信号を送る。誰か聞いていてくれる人がいるかわからない。いると祈って。

送る言葉は、親愛なるお二人へ。

セントポーリア様、もう、お仕えることはできそうにありません。



アマランサスさん、後はお任せします。

限界を迎えた爆弾が巨大な火花をまき散らす。それは王龍の放つ霧を一瞬の間だけ吹き飛ばし、王龍の体を空へとさらした。

道は、死者が切り開いた。

博識の魔女が残した最後にして偉大な情報を、アマランサスは空から見た。

王龍の背が現在どのような状況にあるのか。その最新情報を。そして、爆発にまき散らされた霧が、かすかに燃えているその有様を。

凶眼は見たのである。通るべき道を上空から。霧が燃えるという証明を。

王龍の体を通り抜けた衝撃の後、再び王龍は砂漠を進む。

アマランサスは、まだ王龍の背の上に残っていた。古龍が体を震わせた際、窪地に身を屈めてその衝撃をやり過ごしていた。

「これはグラジオラスさんたちが見せてくれました。命をとした人々の戦いを見せてくれました」

これは、グラジオラスが、以前乗り込んだハンターたちが残してくれた情報である。

凶眼の力は見たものすべてを写し取る。上空から、アマランサス

はグラジオラスが爆弾を用いて霧を吹き飛ばした様を逃さず眺めていた。王龍の背がどのような地形を構成しているのかを確かに見た。だからこそ窪地の場所が霧の中でも視えていた。どこに起伏があり、どこに突起があるのか、そのすべてが視えている。

再びアマランサスは走り出す。地上を走っているのと同じように駆け走る。その足は霧の中でさえ確かな足取りを保つ。

王龍が砂山を踏む度その背を揺らす。アマランサスはすぐに身を屈めて衝撃をやり過ごす。砂漠の地形は、スレイプニル級がセクメーア砂漠に乗り込んだ時から眺めていた。

皆がその命をとって戦っている間も、すがりついてくるセントポリアの手を払ってまで。

目標である噴出孔に近づく度、龍毒の激烈さは過激さを増す。霧の中に赤黒い輝きがほとばしり、アマランサスの体は始終龍毒の光に包まれている。わずかな情報でも逃すまいと見開かれたままの瞳は毛細血管を破壊され、血が涙となって頬を伝う。

対古龍用兵装として作られたトルマリNXを突き破って龍毒が激痛を投げかける。

それでも、アマランサスは走ることをやめようとはしない。その足は力強く、血の涙を流しながら微笑みを絶やさない。

地獄の大地を蹴りつけ、炎と毒の霧をかき分ける。

「思いは、生者によって支えられる。」

「アマランサスさんで、どんな人なのかな？」

砂漠を貫く朝日の中で、ジェイナスはソフィアと並んでいた。並んで、岩山の上に座っていた。その手は肩を抱き、ソフィアもそつとその体をジェイナスに預けたまま目を閉じている。

「ジェイナスは会ったことあるよね？」

同じくミスカトニックに仕える特務騎士として、顔を合わせたことがないはずがない。ジェイナスは現に、あの人の明るい笑顔に戸惑った記憶を持つ。

「いや、それはそうだけど、僕は君ほどあの人のことを知らない。姫様がどうしてあれほどあの人を信頼するのか知らないんだ」

「僕だってその場に居合わせたわけじゃないよ。でもね、姫様がアマランサスさんのことを好きだったことはわかるよ。二人はセイレムの魔女で名高いセイレム山で出会ったんだってさ」

ソフィアは目を閉じたまま、まるでおとぎ話でも聞かせるように語り出す。

「そこは水晶の森の悪魔と呼ばれる古龍に襲われていた。アマランサスさんはその里のハンターだったんだ。姫様と出会ったのはそんな時のことなんだってさ。当時のアマランサスさんは自信に満ちていて、それはそれは逞しい人だったそうだよ」

「話には聞いてるけど、ちょっと想像できないな」

ジェイナスが困ったような顔を見ると、見えてもいないはずなのにソフィアは軽く笑った。

今は愛嬌振りまくメイドさん。かつては凍土の戦士であつたと聞かされてもその姿を想像することは難しい。何でも姫様の過度なメイド教育の結果、あのような人になってしまったのだそうだ。

「アマランサスさんはね、とても責任感の強い人なんだ。軽はずみなことは言わないし、自分できることを理解してるからその実現に全力を傾けることができる」

そのことばかりは、今のメイドさんもかつての戦士も何も変わらないと、ソフィアは続けた。

本質となることは何も変わらない。どんな姿をしていても、どんな言動をするにしても。

「姫様は、アマランサスさんのことをとても信頼してる。アマランサスさんは信頼されてるからこそ、その期待に応えようとする。信頼されるから応えようとするのか、応えてきたから信頼されるのかはわからないけど、姫様とアマランサスさんの絆は強いよ」

ソフィアはそっと目を開いた。その先、砂漠の北側では白い靄がはっていることがはっきりと見えている。この期に及んであれが古龍と関係のない自然現象であると考え理由はない。

まだ王龍の進行は止まらない。それでも、まだ戦っている人々がいる。

「セントポリア様が古龍と戦う限り、アマランサスさんは戦ってくれるよ。たとえ、相手がどれほど巨大であったとしても。どれほど恐ろしくても、きっと」

セントポリア王女の思いが、アマランサス特務騎士とともにある限り。

思いは、生者によって支えられる。

身を包む膨大な龍毒に耐えられるものがあるのだとすれば、それは強固な鎧でもなければ強靱な肉体でもない。トルマリソFXの装甲は高濃度の龍毒によってすでに黒く変色し、疲弊している。瞳孔からは血が止めどなく流れ、足は骨そのものが軋んでいるような音を立てる。口からは喀血を示して、唇の端から血が垂れている。

鎧はすでに磨耗し、肉体はとうに限界を迎えている。

では何故アマランサスは走ることができるのか、微笑みを絶やさないことができるのか。

人々が遺した爆発の跡に足を取られぬよう、霧の中を凶眼は見通す。シエンガオレンの刻んだ痕に転んでしまわぬよう霧の中を走り続ける。

セントポリアは王龍を倒すことを望んでいる。メイドさんがご主人様の願いを叶えないわけにはいかない。

アマランサスは走り続けた。踏みしめる足下では龍毒が爆ぜ、霧は次第に濃さを急激に増していく。噴出孔は近い。

間に合わない。アマランサスには視えていた。この先、大きな砂山が存在する。王龍テラドミヌスはそれを飛び越えるであろうことを。

霧の中、上空からあたりをつけていた窪地に身を屈め、衝撃に備えた。

かつて、グングニル級との交戦時に見せたテラドミヌスの跳躍力が、砂を四方八方に炸裂させる。王龍の巨大な体は軽々と上空へと跳び上がる。霧を振り切り、その姿を飛行船へ、竜たちへとさらした。

強靱な四肢に、漆黒の体。最後に一つ残された角は不気味なほど深い蒼色をしている。幾多の文明を滅ぼした、王の姿であった。

その威光に耐えうるのは、頑強な装甲でもなければ強靱な肉体でもない。飛行船は吹き上げられた風に怯えたように船体を揺らす。火竜も舞雷竜でさえも威嚇する、そんな精一杯の強がりを見せることしかできない。

ただ思っただけが巨大な暴君へと挑む力を維持できる。

足がひどく痛んだ。一気に上空にまで持ち上げられた衝撃はアマランサスの体を容赦なく襲った。折れていないことを祈っても、骨にひびが入ったことは間違いない。

肉体ではない。

アマランサスは再び走り出した。その姿はあまりにちっぽけで、中空にわずかな時間停滞している王龍の背を走り抜ける様はあまりに絶望的な対比を見せつける。

噴出孔まで後わずか。見守る人と竜は、しかし理解していた。まもなく王龍は砂の大地へと戻る。重たいものほど早く落ちる。ならば、アマランサスの小さな体は空に取り残され、そして王龍の背に叩きつけられる。翼持たない人にあらがう術などない。

すべてが終わった。

一時的に停滞していたにすぎない王龍の体は、その大きさからずいぶんと緩慢に見える動きで落ちていった。砂が爆裂し、霧が再び王龍の体を包み込む。

人に空を飛ぶことはできない。人が大地にあらがうことさえ不可能な話だったのだ。

空を、絶望を包み込んだ。

道は、死者によって拓かれた。

思いは、生者に支えられる。

話はわずか前にさかのぼる。王龍の体が空を離れ、大地への回帰を開始した時のことである。

凶眼の魔女が大地を強く踏みしめた。すべての命の敵を踏みつけて、足を軋ませながら、アマランサスは、お姫様の大切なメイドさんは勢いよく前へと飛び出した。

王龍の背が急速に離れていく。アマランサスの体は空を滑空し続けていた。トルマリソFXがうまく風を掴み、アマランサスを前へと進ませる。飛ばしているのではない。滑空、ゆっくりと落ちていくにすぎない。やがては大地に叩きつけられることに変わらない。

道は、死者によって拓かれた。

凶眼は見たものすべてを記憶する。アマランサスの目には確かに道が視えていた。

思いは、生者に支えられる。

腰から剥ぎ取り用のナイフを取り出した。血の涙を流すその瞳から、その意志の輝きが失せたことなど一度もない。

空を緩やかに落ちていく先、あるはずのないものがアマランサスを出迎える。

深い蒼の尖塔がそびえ立っていた。

足を前に、アマランサスは尖塔の壁に降り立つ。叩きつけられるとしても過言ではない衝撃を受け止めた足は限界を迎えた。脚装備が砕け、走った亀裂の中から血が漏れだした。

尖塔は直角にも近い急な斜きをしている。もはや限界を超えた足をその表面に滑らせ、左手に構えたナイフを壁に強く突き立てる。



アマランサスは尖塔の壁を滑り落ちていた。ブーツから飛び散る火花。突き立てられたナイフはほとんど刺さることなどなくとも、滑落速度をわずかでも軽減してくれている。

そして、剛種ヘビイボウガン、ネブラグロブスを右脇に抱えるようにして構えていた。

尖塔を滑り台のように滑り落ちていく。アマランサスのその目は落ちていく先を確かに捉えていた。

蒼い尖塔の根本に輝く巨大な目玉。王龍テラドミヌスの目がアマランサスを見ていた。そう、尖塔は角。王龍テラドミヌスの角である。

これまで三度見た。グングニルとの戦いで、ハイパーボリア文明の跡地で、シエンガオレンとの衝突の際に。王龍がその勢いを止めるため、頑丈な下顎で砂を受け止める光景を、その角を高く突き上げる姿を。

だから視えていた。王龍が飛び上がったなら、その角を空へと橋渡すのだと。

角を滑り落ちることで落下の勢いを軽減しているのだ。剥ぎ取り用ナイフは根本から折れた。代わりに手を壁に突き立てると、高速で滑り落ちていくあまり発生した摩擦熱が防具の上から左手を焼いた。徐々に高度を下げるにつれ霧が再びアマランサスを覆い始める。

摩擦熱が火に変わる。

手が燃える。足が燃える。炎を中を、アマランサスは滑落する。

その体は炎に包まれ、霧に呑み込まれ、姿を消してしまふ。王龍が角を水平へと戻した。

再び、霧纏う古龍が砂漠を突き進む。

アマランサスの姿はどこに。それは王龍が知っている。

王龍テラドミヌスの最後の角は鼻先に取り付けられている。その巨大な両の眼は角の根本に火の塊がついて離れないことを見眺めていた。

火の塊は腕を持ち、霞龍オオナズチの皮を張り付けたヘビィボウガンをその手に、人々の思いをその背に、火に焼かれなお輝きを損なわない悪魔の眼を備え持つ。

凶眼の魔女と大地の主とが睨み合う。

大地の主の眼はアマランサスを見て、その先に踏みにじるべきドンドルマの街を、蹂躪すべき命そのものを眺めている。

凶眼の魔女はテラドミヌスを眺めながら、その奥、背中から膨大な量の噴出している孔を凶眼は捉えて離さない。

「昔の昔の王様さん。もう、この大地はみんなのものです。王様たちのものじゃありません」

ヘビィボウガンの安全装置を解除する。それだけで、古龍の力を借りたボウガンの周りには炎の渦が渦巻いた。

鎧竜グラビモスと炎戈竜アグナコトル。この両者に共通すること

は溶岩の中でも生存が可能であるということにある。炎に強い外殻で熱を防ぎ、主要な臓器を一部に集めてさらに断熱性の高い甲殻で包み込んでいる。さらに熱伝導性の高い物質を体内に循環させ、効率的な排熱することで過酷な温度に耐えているのである。

ここで問題となるのはその排熱機構そのものである。グラビモスもアグナコトルも体内に蓄積した熱を一カ所に集め、それを熱線として一気に排出するのである。

それはもはや攻撃と言って差し支えない。膨大な熱量による一点加重攻撃。その機構をハンターの武装として再現しようと幾度となく試みられた。銃身内部に発生させた高熱に耐えられる素材がこれまでになかった。

霞龍オオナズチ、その岩のように頑強な素材を用いることで初めてそれが可能となったのである。ヘビィボウガンがそれを再現する。

銃身内に膨大な熱量が発生する。その熱は霧を燃え上がらせ炎が膨れていく。血が乾く。体が燃える。

「だから諦めてくださいな」

炎の中から突き出されるヘビィボウガンの銃身はまっすぐに霧の噴出孔へと向けられる。銃から発した余熱だけで霧が火に変わり、炎が噴出孔へと伸びた。そして、引き金が引かれた。

一筋に伸びる太い熱線。霧を呑み込みながら巨大な炎の渦が突き進む。炎がすべてを包み、それでも狙いは誤ることは決してない。

凶眼は魂さえも写し取る。

霧と炎の向こう側に確かに噴出孔の位置を把握し、そこへと膨大な熱量を直接叩き込んだ。

噴出孔から吹き出す霧は即座に燃え上がり、霧は吹き出したそばから炎と変わって空を覆い始める。

甲殻の隙間、噴出孔から体内へ送り込まれた熱は王龍をその内部から焼いていく。

王龍は苦痛にうめいた。

体を揺り動かし、弾けた甲殻の隙間から炎が吹き出した。霧があらゆるところで炎に変わり、霧が赤い雲へと成り代わっていく。テラドミヌスが体を動かし、炎から逃れようと足掻く。それでも炎は、熱線は噴出孔から離れることは決してない。

王龍体を炎が包みこんでいた。

もはや砂漠を雄大に行進していた王の姿はすでにない。あがき、もがき、苦痛にのたうつように体を震わせる巨龍が暴れ回る姿があるだけである。

体中から炎を吹き出し暴れる古龍が焼き尽くされるのが先か、それとも炎に焼かれる凶眼の魔女が力つきることが先であろうか。

空を焦がし、炎が赤い雲を構成する大地の隅で、世界の命運が決しようとしていた。

文明を滅ぼしてきた巨大な古龍と、命と思いを受け止める凶眼の

魔女とが、互いの命と意地を比べ合う。

巨大な龍のその上に赤い雲が生じている。この光景に、ティルテユは涙を流していた。

不格好な飛行船の上で、その眼下には炎に包まれた王龍の姿が見える。

この光景に、泣かすにはいらなかった。涙を流さすにはいらなかった。

かつて父はハイパーポリア文明の壁画を捜し求めていた。それを見つけたのはティルテユとアマランサスである。二人で見つけた壁画は後に補完され完全な姿を取り戻す。

風の古龍クシャルダオラと戦う人々が描かれていた。炎の古龍テオ・テスカトルに挑む人々の姿があった。

そして、その中央には城のように巨大な古龍と、その上に描かれた燃える雲の模様があった。

「父さん、やっぱりあんたは大馬鹿者だ」

甲板の縁に両手をついて、滴となった涙が床を湿らせる。

「古代遺跡が見たいだって。かつての人々の姿が知りたいだって。そんなもの、わざわざ遺跡に潜る必要なんてないじゃないか」

ハイパーボリアの壁画には描かれていたのだ。古龍と戦う人々の姿が。王龍にあらがう命の光景が。

燃える雲。それは、己のすべてをかけた人々が見せた最後の意地。最期まで王龍と戦った人々が以前にも、五〇〇年前にもいたのだ。王龍の霧を燃やした戦士たちがいたのだ。

「人々が戦う姿なんて、必死に守ろうとする意志なんて……」

壁画に描かれた光景は。

「今、目の前にあるんだぞ……」

人は何度でも戦ってきたのだ。

「人は、今だって戦ってるんだぞ……」

王龍は幾度も文明を滅ぼしてきた。だがそれは、それでも人はその度に文明を興し、王龍と戦ってきたのだ。抵抗してきたのだ。何度も、何度でも。

「人を！ 竜を！ 命をなめるな！」

過去にしか目をむけようとしなかった父へと。

幾度も文明を踏みにじってきた暴虐の王へと。

ティルテュは叫んだ。

たとえこの身共になくとも。飛行船のその上で、人々はその心を捧げていた。人は敬礼し、直立不動の眼差しは王龍と戦う戦士へと向けられている。竜はその鳴き声を重ね、この大地とともに守る人を励ます。

人と竜。この大陸に生きるすべての命が肩を並べて、手を取り合っ  
つて戦った。

王龍テラドミヌスが戦っているのは一人ではない。大陸に住むすべての命が凶眼の魔女に寄り添う。そして、壁画に自らを襲った災いを記し、その滅びの光景を構成に託した古代の人々の思いもまた。

思いだけで世界を変えることはできない。しかし、世界に押し潰されてしまうほど弱くは決してない。

もしも力が等しく拮抗するならば、思いの強さが勝敗を分ける。

王龍が哭いた。砂を震わせ、炎を揺らめかせ、その体は吹き出す炎に完全に包みこまれていた。

最後の角が弾け飛ぶ。炎が爆発となって角を大きく巻き上げた。王龍の体が砂へと叩きつけられるようにその勢いを止める。

すでに霧の放出は止まっていた。炎は急速に消えていき、太陽はその日差しを砂漠へと降り注がせる。

その陽光を浴びる巨大な山。すべての角を失った王龍が天を仰ぐように体を反らせた。大きくともか細く響いていた慟哭が突然止んだ。そして、力つきた王龍テラドミヌスの体は、崩れ落ちるように

砂漠へと倒れ込む。砂の大地を震わせた地響きが、大地の主の断末魔であった。



## 最終話「大地を継ぐもの〜Monster Hunter」

砂の大地に打ち捨てられた巨大な消し炭。それが王龍テラドミヌスの亡骸である。助燃性の霧の噴出孔に直接ヘイボウガンによる熱線を撃ち込まれ、体を内と外から焼き払われたのだ。

霧は燃えつき、砂漠にはいつものような青空が戻っていた。幾度も文明を滅ぼしてきた王者の威光などすでにどこにもない。

ミスカトニツク王国スレイプニル級高機動艦が、その傷だらけの体を亡骸のそばに着陸させていた。クルーが揃って船を降りると、誰もが王龍のあまりの大きさに首を大きく上げてそれを眺めている。唾を飲み込む音、息を飲む音ばかりで、誰もが言葉を紡げないでいた。

そんな中で、ヴァルカンは小さく囁いた。王龍の亡骸を見上げながら、すぐ隣に立つセントポーリア王女へと。

「アマランサス姉ちゃんはンガイの森に張った霧のこと知ってた」

「ドリームランド峡谷で地中から霧が吹き出したことも報告されるよ」

ンガイの森の燃える霧。その出所を探りに行った特務騎士が危ういところを地中から突如吹き出した霧に助けられたという事実。

どちらも、王立古龍観測隊の報告書に記載されている。

「ドリームランド峡谷って、王龍が眠ってた場所だろ。それに、ハ

イパーボリアの壁画には、王龍と燃える雲の絵があった。古代の人は王龍の倒し方のヒントを遺してくれてたんだな。姉ちゃんはきつと知ってたんだ。燃える霧は、王龍の奴から出てたんだって……。やっぱ、姉ちゃんはずごいよ……」

セクメーア砂漠で、ンガイの森で、ドリームランド峡谷で得られた情報が、一見何ら関係のない事柄が一つの糸で繋がっていた。

「アマランサスは気づいてたんだね。王龍の倒し方を。だから戦おうとしなかった。凶眼に砂漠の光景や王龍のことを写し続けてたんだ」

セントポーリアは思い出していた。アマランサスの後ろ姿を。スレイプニルの船首に立ち、古龍に襲撃された時も、仲間が死んでいく時も決して船首を離れようとはしなかった。どうして戦わないのか。アマランサスのすることだから何か意味があるだろうと軽く考えてそれ以上何もしようとはしなかった。

足から力が抜けて、セントポーリアは膝を砂に打ちつける。それでもまだ体を支えられず、両手を砂地に突き立ててうなだれる。乾いた砂に湿った点がぼつりぼつりと描かれた。

「アマランサスは、たった一人の戦いを、ずっとしてたんだね。ごめん、ごめんなさい。気づいてあげられなくて。一人で頑張ってたのに、一人で必死に耐えてたのに……」

辛くないはずがない。そのすぐ後ろで仲間が戦い、倒れていく様子を耳にしても王龍と砂漠から目を離そうとは絶対にしなかった。セントポーリアがアマランサスを頼ろうとした時も振り返ろうとはしなかった。

あれは振り向かなかつたのではなくて、振り向けなかつたのだと、今ならわかる。霧の晴れる一瞬を見逃すまいと、心を鬼にしてセントポーリアに応えなかつたのだと。

それなのに、セントポーリアはその非情を責めた。責めてしまった。

「アマランサス！ アマランサス！」

今すぐに会いたい。会って謝りたい。セントポーリアの声だけが響いて、どこからも返事はない。涙が止まらなくて、手が砂まみれであることもかまわず顔を拭う。

そんなセントポーリアの手を誰かが脇から掴んで持ち上げようとする。顔を覆っていた手が無理矢理動かされ、セントポーリアは手を引いた人物、ヴァルカンの顔を見た。

ヴァルカンもまた涙を目の端に溜めていた。

「姉ちゃんがこんなことで死ぬわけねえだろ！ 探すんだよ！」

「みんな、手分けして探して！」

ヴァルカンばかりはない。エフィーの声も聞こえていた。セントポーリアが振り向くと、クルーたちがそろって動き出していた。みんな、アマランサスのことを探そうとしているのだ。

こんな時に、ただ座っているつもりにはならない。セントポーリアは顔に砂をつけたまま立ち上がった。

「アマランサス〜！」

名前を呼びながら、セントポーリアは王龍の亡骸に沿って歩き始めた。名前を呼んでも返事はない。そこかしこでアマランサスのことを呼ぶ声が聞こえた。

「姉ちゃ〜ん！」

ヴァルカンもセントポーリアのすぐそばで声を張り上げていた。

焦げ臭い臭いが鼻をつく。普段風に曝され平らなはずの砂の表面も炎に炙られたり、強い衝撃にさらされるなどして古戦場の景観を演出している。どれほど王龍との戦いが激しかったかがよくわかる。

こんな激戦の中を生き延びることなんて果たしてできるのだろうか。砂漠はすべてが均一に苛まれ、どこを探しても何かが見つかるとは思えなかった。どこから探していいものかわからず、どこにも手をつける気にはなれない。

すぐそばでは、ヴァルカンが砂を懸命にかき分けていた。

気が弱くなっているのか、それとも、かつての光景を思い出すからなのか、セントポーリアはついヴァルカンへと話しかけた。

「昔もさ、こんなことあったんだよね。その時アマランサスは雪の下に埋まっててさ、気づかず踏みつけてた。あの時はさ……」

同じようにアマランサスは古龍を倒して、同じように姿を消した。あの時は雪の中に埋まっていて、セントポーリアは気づかずに踏み

つけていた。そう、あの時は足下を掘るだけでよかった。

今回は違う。古龍の大きさがあまりに違いすぎる。搜索すべき範囲が広すぎて、早く見つけたいという思いばかりがつのる。思いが空回りして何もできない。

ヴァルカンはセントポリアの言葉など聞いていないかのように突然手を止め立ち上がった。その視線は王龍の亡骸に向いている。ちょうど、うつ伏せに倒れる王龍の頭のあたりである。

「王龍の顔から落ちたとするなら、近くに落ちた可能性が高い。それに、もし、生きてくれるとしたら、あのあたりだ」

ヴァルカンが指さす先には王龍の体と地面との隙間であった。王龍は体を左に傾けるようにして倒れている。右腕を支えとして斜めに持ち上がった体の下に隙間ができていた。そこは砂が複雑に起伏し、遠目でははっきりとは見えない。

起伏が激しいということは、衝撃にさしてさらされていないということの意味している。ヴァルカンの考えは、あながち間違っていない。

セントポリアは砂を蹴って走り出した。ヴァルカンの脇を抜けて、王龍の影の中を進む。

「姫様！ これ以上は無理です！」

「エフィーたちは下がって！」

王龍の手の支えがいつ外れるかわからない。元々偶然から支えて

いるにすぎないのだ。いつずれて巨大な屍が落ちてくるかわからない。

見上げると王龍の体が今にも落ちてきそうだ。

こんなところに好き好んで飛び込む人なんて、自分だけではないかと考えるセントポリアの横を、ヴァルカンがフォームなんて考えてもいない全速力で駆け抜けた。

「遅いぞ、姫様！」

「モスに蹴飛ばされてたくせに！」

こうなればセントポリアも意地である。あらん限りの力で王龍の下へ走り込む。

王龍の腕は目に見えて徐々に砂の上を外へと向けてずれていた。このまま勢いづけば王龍の体が一気に倒れることになる。クルーたちが腕を必死に押さえようとしていた。機関長をはじめとする動力室の男たちが体ごとぶつかって少しでも腕を押し止めようと尽力する。

「ほらほら、みんな頑張つて」

「男でしょ。根性見せなさい！」

「頑張つて……」

順にヒルダ、デメトリア、ユニスが男たちに声援を送っている。

男たちは歯を食いしばって踏ん張るが、それでも王龍の腕は止まら

ない。

止まらない腕と逃げ出す様子が見られないセントポリアとの間をエフィーの視線がせわしなく行き来する。

「姫様、急いでください！」

「アマランサスさんがいるとすればもっと前の方ですわ！」

アネットの言葉を受けて、セントポリアとヴァルカンは合図を交わすこともなく同時に走り出す。上からは焦げた粉が振り落ちてくる。

「アマランサス！」

どれだけ声を張り上げようと返事はない。いくら搜索範囲を絞ったとしてもまだまだ広い。砂すべてを掘り返すことができるほどの時間は残されていない。

何かヒントはないだろうか。首を回して痕跡を探そうとする。見つけたのは痕跡そのものではなく、手を振るヴァルカンの姿であった。

「こっちだ。ここに残骸がある！」

ヴァルカンのそばにはネブラグロブスの残骸が散らばっていた。すぐにその内の一つを拾い上げると、それはフレームの一部であった。破断面には熱で溶けた跡は見られない。それは、銃の発射によって損壊したのではなく、落下の衝撃で壊れた可能性が高いことを意味していた。

すなわち、アマランサスがこの近くに落ちた可能性が高い。

「この近くを掘って！」

セントポーリアが言うよりも早く、ヴァルカンはすでに砂を掘っていた。砂が盛り上がっていて、思いの外掘らなければならない量が多い。アマランサスがここに落ちたとしたらクッション代わりになるということだ。セントポーリアも懸命に砂をかき分ける。

「アマランサス姉ちゃん！」

「アマランサス、聞こえてる！？」

砂を掘って、埋もれていた残骸に指を切ってしまった。血が落ちて砂に染み込む。こんな傷、何とも思わない。セントポーリアは傷ついたままの手を砂の中へ突き入れようとした。

その時、傷に砂が入ることを気遣ってくれる人がいた。それは、あの日からいつもセントポーリアのそばにいてくれる人。

砂の中から突き出た手がセントポーリアの傷ついた手をそっと掴んだ。トルマリックスの装甲は砕け散り、よほど傷だらけの手が、セントポーリアの手を優しく包む。

「アマランサス！」

ヴァルカンと協力して一気に砂を掘り進む。場所さえわかれば人を掘り出すことはたやすい。まもなくアマランサスの姿を見つけた。することができた。



詳しい状況を確認することも、話することも後回しである。ヴァルカンがアマランサスを背負って、セントポーリアがその背を押す。

「待つてで、すぐにここから抜け出すから」

王龍の体はいつ落ちてきてもおかしくない。時間がなかった。

走って、そう急かすセントポーリアの言葉を受けてヴァルカンが走り出す。足場の悪い砂地を人を担いで走るためその足取りは遅い。こうしている内にも、王龍の手は確実に滑っていく。

「姫様〜！」

エフィーの声をはじめとして、クルーたちが心配そうに声を張り上げる。

「わがまま言っちゃだめですよ、セントポーリア。みなさん困っちゃってます……」

「わがまま王女なんて、周りを困らせてなんぼでしょ！」

アマランサスの声を聞いたことが嬉しかった。思わず顔が微笑んで、セントポーリアはアマランサスの背中をより強く押す。ヴァルカンはその力にこたえて雄叫びを上げながら全力で砂を踏みしめ速度を上げる。

支えとなる王龍の腕を人々が必死に押している。巨大な龍の体を

これだけの人で動かせるはずなどない。それは誰もが理解しながらも、誰もが諦めようとはしない。

もとより絶望的な戦いに、それでも人々は戦いを挑む。それはまさにこの戦いの縮図のようでもあった。

男たちに混じってヘルメスの生つちよろい体がある。龍の前にあつては、人は誰でも大差ない。ただ立ち向かうという思いだけがこの戦いを支えてきた。

「もつと押すんだ。少しでも時間を稼ぐんだ！」

果たして押すことに意味があつたのであろうか。王龍の手は砂を滑り、徐々に勢いづいていく。人を弾き飛ばして、なお抑えようとする人々をあざ笑う。

天の柱が抜け落ちた。空がそのまま落ちてくる。

王龍の巨躯が自らの影を押し潰さんと崩れ落ちた。地響きが轟く。吹き飛ばされた砂が津波となり、砂煙が瀑布となって地をさらう。

残されたのは王龍の躯と、砂を浴びたスレイプニル級の船体。そして、うず高く積もった砂の海だけが広がっていた。

それからまもなくして、砂から次々と人の頭が生える。埋もれていた人々が砂から這いだしていた。エフィーをはじめとするクルーたち、ヘルメスや機関長はそろつてある人物の姿を探す。

セントポーリア、ヴァルカン、そして、アマランサスの姿を。

誰も彼も首の動きがせわしない。誰も三人が無事に脱出できたことを確認したものはいない。名前を呼びながらそれぞれが独自にその姿を捜し求める。やがて、人々の声は聞こえなくなる。その視線は、一カ所に集まっていく。

スレイプニル級のすぐそば。船体と砂の境目に彼らはいた。

船側に寄りかかって座るアマランサスを、セントポリアとヴァルカンが不安げに見下ろしている。

龍毒の霧を抜け、巨体の強力にも耐えた。そして、全身を炎に焼かれた戦乙女の姿が、無事であるはずなどない。

現在考えうる中で最も頑丈であるはずのトルマリンFXの装甲は縦横無尽に亀裂が走り、指でつついただけでも崩れ落ちてしまいうである。左腕は、袖口から本来見えているべき肘から下がらない。失われた兜はその顔を隠すことはもはやない。瞳から流れ落ちた血の跡が、その煤けた頬に痕跡として残されていた。

凶眼の力が込められたその瞳は、開かれる気配を見せない。

「アマランサス、まさか目が……！」

膝をついた姿勢で、セントポリアはアマランサスの顔を覗き込む。その瞳は二度と姫君のことを見てくれることはない。

「ちょっと頑張りすぎちゃいました」

それでも、微笑みだけは、今でも変わることはない。

そのことが、セントポリアの心を苛んだ。涙は、いつまでも乾くということを知らない。

「ごめん……なさい。とても大切な力だったのに……。頑張っただけで得た力だったのに……」

二度と凶眼が世界を写すことはない。音を頼りに暗闇の中戦うことができないセイレムの魔女に、アマランサスはなることができなかった。それは、もうアマランサスは戦うことができないことを意味する。

セントポリアがアマランサスに頼りきってしまったから。あんな巨大な怪物を倒すことを望んでしまったから。

溢れる涙が多すぎて目を開けていることができない。アマランサスの姿を見ることができない。涙伝う頬を誰かの手が撫でるまで。

思わず目を開ける。すると、アマランサスの震える右手が、セントポリアの頬に優しく添えられていた。

「元々モンスターと戦うために得た力ですよ。王龍さんと引き替えなら、全然もつたいなくありません」

その顔に凶眼はなくとも、微笑みは、セントポリアを支えてつけてくれたハンターの顔はそこにある。たとえどれほど姿が変わろうと、アマランサスはアマランサスのままであった。

「だから泣かないでくださいな、私のお姫様」

「アマランサスは、まだ私の魔女でいてくれる。私のそばにいてく

れる？ それなら、私泣かない」

「もちろんです。アマランサスは、だってお姫様のメイドさんなんですから」

泣かないつもりでいたのに、泣かないと言っていたのに、結局セントポリアはその約束を守ることはできなかった。

泣いて泣いて、涙で顔を濡らしたままアマランサスに抱きついた。そんなわがままなお姫様に、忠実なメイドはそつと背中に手を回してしっかりと抱き止める。

すでに日は上がり砂漠の空を乾いた風が通り抜ける。

夜は、とうに明けていた。

人と竜とが手を取り合い、天災へと挑んだ戦いは終わりを告げた。この戦いは、古龍が世界の裏側に潜む限り、命が生き続けようとする限り避けることができない戦いであった。

後に、ハイパーボリア文明の言葉でファートウス・ベルム、運命の戦争と名付けられることとなる。

王龍テラドミナスと七人の魔女が互いの運命をかけた戦争はここに終焉を迎えたのである。

被害はセクメーア砂漠を中心とするレムリア大陸西側、ロックラック諸島を含む広い範囲に及んだ。被災者は五〇万を超え、死者、

行方不明者は五万人に届くほどの激甚災害であった。

人は知ることとなった。この世界には古龍が潜み、それは悪意をもつて人を襲うのだということ。

そして人は歩き出す。復興の足音は確かに聞こえている。人はくじけることはない。セクメーアの砂漠で戦ったハンターたちが、決して屈しなかったことと同じように。

王立古龍観測隊はその重要性を認められ、その権限の拡充が図られるとともに里、ハンターズ・ギルド、象牙の塔に次ぐ第四の独立機関として発展をみる。

その名は、この戦いで命を落とした魔女が設立した獵団の名にあやかり、「聖堂騎士団」と名付けられることとなった。旗には、人々を守るために戦った七人の魔女の功績に敬意を評する形で七人の女性の横顔がシルエツトとして描かれたものが採用された。

人は過去を振り返りながらも、前へと進むことができるのである。

人はこれからも戦い続ける。

聖堂騎士団の古龍を探る試みはすでに始められている。

石の扉が勢いよく引き倒される。部屋に飛び込んだ光が埃を浮かび上げらせ、悠久の時を経て送り込まれた外気の起こした風が土埃を立てた。

床に倒された扉を踏みつけ、部屋の内部を覗き込んだのは褐色の肌をした女性であった。背が高く、凜とした雰囲気纏う。遺跡に潜る考古学者にしては不釣り合いな覇気に満ちたその女性はティルテュ。

かつて嵐に挑んだハンターの一人である。現在は聖堂騎士団の一員として遺跡の発掘、調査に当たっていた。

室内に危険な様子はないとして一歩足を踏み入れるティルテュの後ろから二人の女性が続く。先に行く寡黙なスノードロップとは異なり、後続くシギユンは妙にテンションが高い。

「さすがはティルテュさん。そんなじゃそこの男とは逞しさが違います！」

拍手さえしているシギユンへと向き直りながら、ティルテュは口元を奇妙な形に歪め、困ったような笑い方を見せる。

「正直誉められているのか微妙なところだが、まあ悪い気はしないな。ところでシギユン、本当に結婚式に出なくてもよかったのか？」

たちまち固まるシギユン。スノードロップはというと、床に散乱する瓦礫を踏み越え、部屋の奥へと行こうとする。

「い、いいですよ。もうジェイナスさんなんて。ジェイナスさんって、本当にいい人ですよ。安い同情なんて私を傷つけるだけだろって考える人で、おまけに自分の気持ちに素直な人で！ だから他の女と簡単に結婚できるような人なんです！」

シギユンはかつて姉の恋人に思いを寄せていたことがあった。そ

の恋人はシギユンの思いに気づいていたが、同情と好意は違つと安易に応えようとはしなかつたとティルテュは聞いている。

要するに、シギユンは結局恋人の妹以上には決して見てはもらえなかつたということだ。

ティルテュは思わずため息をついた。

この振られた同僚はそのせいで妙に気分の浮き沈みが激しくなつてしまった。出会つた当初はもつと落ち着いた少女だと捉えていたが、やはり、恋は人を変えてしまうものらしい。

床を強く踏みつけ埃を舞い上がらせているシギユンの姿に、ティルテュはどうしたものかと途方にくれる。

「ティルテュさん。こちらです」

瓦礫の向こうから聞こえたスノードロップの声を渡りに船とばかりにティルテュは先を急ぐことにした。

崩れた瓦礫の中には大きなものもあるが、小さな瓦礫を足場とすることで容易に乗り越えることができた。一番大きなものを踏み越えると、部屋の奥は思いの外明るい。天井に開いた亀裂から光が射し込み、薄暗い部屋の中に光の柱を立てている。これで床を埋めているのは瓦礫ではなくて砂であつたのなら、アマランサスとかつて見たハイパーボリアの遺跡を思い出す。

光の柱の中に立つスノードロップのすぐ後ろにはかつてセクメーア砂漠に栄えた文明の残り香があつた。



「壁画があります。まだ未発見のものです」

以前の壁画を発見した時はアマランサスが両手を広げて教えてくれた。今はまるで印象の違うその妹が新たな壁画をみつけてくれた。何とも、宿命を感じずにはいられない。

本来ならすぐにでも壁画を眺めたいところだが、その気持ちを抑えて歩き出す。足下に注意しながら、スノードロップの横にまで来ることによってやく壁画を眺めることができた。

以前のようにディアブロスの巢にされていたわけではなく、状態は決して悪くない。

明るい色調の染料は鮮やかに残り、上部に描かれた太陽から幾本もの線が引かれている。日の明かりに満ちた光景であった。その光の中に立つ男女と思われる二人は互いに手を取っているようである。

その光景は、何というべきか、現代にも通じるある習慣を思わせ  
た。

「ハイパーボリアのものに間違いないな。それにしても……」

「平和な光景ですね。その……」

ティルテュとスノードロップが口ごもりながら後ろを向き、遅れてやってきたシギユンを迎える。妙に明るい足取りに、つい目をそらしてしまった。

「綺麗な壁画ですねって、これ、結婚式の光景じゃないですか！  
なんですか！ 神様ってそうまでして私をおちよくりたいんです

か〜!？」

地団太を踏んで、わめき散らして、こうなるとシギユンはもう手に負えない。とりあえず、放っておくことにした。

壁画を見上げると、やはり美しい。かつて古龍と戦う人々の滅びの光景ではなく、当時の人の生きている姿がそこにはあった。

「父さん、結局、私も父さんと同じことをしてみることにしたよ。何でかな。父さんのことを思い浮かべようとすると、いつも背中しか思い浮かばない。これまでは父さんが見送らせてばかりいたからだと考えていたけど、もしかしたら、追いかけたかったからなのかもしれないな」

聖堂騎士団では、主に古龍の探索を遺跡発掘の観点から行う部署に所属している。それはあくまでも考古学者でしかない父とは相容れないことであるのかもしれない。

「父さんとは少し違った道になりそうだけど、少し、歩いてみようと思う」

物思いに耽るティルテユの後ろで、まだシギユンは落ち着いていない。

「責任者〜! 出てこ〜い!」

すっかり輿の削がれたティルテユは、ただため息をつくしかなかった。

人は元の生活を取り戻す。

アプトノスが引く竜車が並べられた広間では、人だけが慌ただしい。草食種がのんびりと足下の草をはんでいる間、人は車に物資を次々と詰め込んでいる最中であつた。

そんな中でさえ、アプトノスの大きな体に背中を預け、くつろぐ少年の姿があつた。予定された行路が描かれた地図を鼻歌交じりに眺めている。周りの慌ただしさと無縁であるのは、鈍いというよりも余裕がある様を感じさせる。

物資を運ぶ。ただそれだけのことのために迫り来る山と対峙したヴァルカンの顔に、かつての臆病な少年のそれはない。商隊を率いる者の度量を備えていた。

「あのお、ヴァルカンさん……」

「お、新入りか？」

地図を降ろすと、ヴァルカンの目の前にはハンターが立っていた。武器は骨を削って作った片手剣に、防具はハンター装備。明らかに駆け出しの雰囲気纏う少女である。

髪を短くまとめているためか、それともまだ幼いためか、少年と少女の中間といった中性的な印象が素直さを感じさせる。少女は何故か不慣れな敬礼をしてから名乗り上げた。

「は、はい。シヨブニニグラスと申します！ ヴァルカンさんのご高名は聞き及んでます。ミスカトニツクの飛行船に古龍の群を突き

抜けて補給物資を届けた英雄だつて！」

「どうやら、ファートウス・ベルムの英雄だなんて言葉を真に受けているらしい。ヴァルカンに対して過大な人間像を抱いているのだろつ。世界を救った英雄を前にすれば、緊張しもする。ヴァルカンは笑うしかなかった。」

「そんなんじゃないさ。俺は英雄なんかじゃない」

「でも……」

目を大きくして口元から力が抜けている。シヨブは、若者らしく感情を隠すということに慣れていない。こつも分かりやすく戸惑われると、ヴァルカンの方が困らされる。どうしたものか。手で頭の後ろをかきながら、誰か英雄と思う人物のことでも話そうかと考える。すると、思いついたのは、船を逃がすために単身富岳龍ヤマツカミに挑み、戻っては来なかった男のことであった。

「もしも、あの人ならどんなことを話すだろう。あの人のことを思い出すと、自然と心は固まった。」

「星空つて、綺麗だよな」

「え………?」

余計に戸惑わせてしまったらしい。それでも、ヴァルカンの心は決まっている。

「でも、どんなに光る星でも、たった一つで夜空を作ることなんてできない。ちようど、そんなことなんじゃねえかって、俺は思うよ」

一人の英雄がいても世界は救われなかった。一〇〇人の名もなきハンターたちの活躍があったからこそ世界は救われた。そして、今も各地で自分の仕事を全うしているからこそ、世界の秩序は保たれる。

「一つ、二つ欠けたって星空は星空さ。でもな、全部が全部輝くとやめちまったら星空にはならない。英雄ってのは、もしかするとあの戦いに参加したみんなのことなのかもな。シヨブも、お月様になれないって嘆くより、自分は星なんだって誇れるような、そんなハンターになって欲しいな」

「はい！ 努力します！」

かつてアレスからヴァルカンへと伝えられたハンターとしての志は、ヴァルカンからシヨブへと伝えられた。そして、やがてシヨブからまた誰かに伝えられるのだろう。

この世界に、ハンターが必要とされる限り。

人は悲しみさえも乗り越える。

ジェイナスはベッドの上に腰掛けて、その腕に妻になった女性を抱いていた。二人で体を寄せ合わせているだけ何をしているでもない。

ただこうしているだけでよかった。ジェイナスは妻の、ソフィアの髪をそっと撫でる。ソフィアは夫の腕に何か怖がっているかのよ

うに抱きついた。

「幸せが怖いって、こんな感覚があるんだね。姉さんたちは亡くなったのに、自分だけ幸せになっていいのかな？」

「僕なんて一度は永遠の愛を誓った人がいたんだよ」

一体どんな顔をしているとも思われたのだろう。ソフィアは首を大きく後ろに反らして、ずいぶん器用な形でジェイナスの方を見上げた。

「ジェイナスは平気なの？」

薄情な男と思われたかもしれないとなると苦笑せざるを得ない。

「平気とは言わないよ。ヘスティアのこと、ソフィアには悪いけどきつと忘れることはできないと思う。でも、こうも思うんだ。もしも、死んだのが僕だったとしたら、きつとヘスティアには他の人を見つけてでも幸せになつてもらいたいと考えたと思う。自分のことを引きずって欲しくないって考えると思うんだ。フィロソフィアさんもフィリアさんも、きつと同じことを考えてると思うよ。ソフィアには、幸せになつてもらいたいって」

ソフィアは瞬きを繰り返した。

「ジェイナスって不思議だよ。義理堅いのかと思いきや、実は結構な合理主義者だよな」

「そっかな」

そうだよ、そう言いながらソフィアは笑う。その表情が少しでも柔らかくなつたと考えるのは、希望的な観測でしかないのだろうか。「でも、そんなところも嫌いじゃないよ。だって、これからのことに、一緒に前向きに歩んでいけそうな気がするから」

首を戻してから、ソフィアは体をジェイナスの腕の中より深くに入って、腕を掴む手に力を込めた。これはもつと強く抱きしめてもらいたいという意志の現れだと思う。

愛する人を抱きしめながら、愛する人に抱きしめられながら、二人は並んでこれからを歩いていく。

人はこれからも生き続ける。

深い海の中では光もまともに届かない。薄暗い水中を人影が一人漂っていた。全身をラギアクルスの素材を用いた防具で包む、ハンターである。力強い手足の動きで水をかき、水中を思うがままに進んでいく。

ここは海底洞窟の入り口。日の光が多少なりとも届いているにも関わらず、海藻の類が岩を被覆している様子はない。それどころか人が泳いで来ることが出来る程度の水深であっても、水棲のモンスターがまるで見られない。

生命の空白帯。

生物がすべて死に絶えた後、ただ一人取り残されてしまったよう

な言いしれない不気味さがハンターを包み込む。

ここは何かがおかしい。

ハンターの正面、巨大な口が開く。上下をつらら状の岩が伸び、それは巨大な怪物が口を開くよう。

後ろを振り返ると、海は外洋へと通じている。いくつもの岩の柱が立ち並び、海底洞窟の入り口と外とを隔てていた。一本一本が海竜の胴よりも太い柱が並んで、それはまるで牢獄の檻。

ではこの牢獄は内と外、どちらに咎人を閉じこめていたのだろう。

柱は、海底洞窟への入り口の前だけがごとごとくへし折られていた。巨大な怪物が通り抜けた跡であるかのように。

牢獄はすでに破壊された。もう咎人を縛り付けるものは何もない。

ここはすべてがおかしい。

モガ村、炎妃龍ナナ・テスカトリに襲撃されたこの村でも復興が進められていた。焼かれた家屋は再建され、海上に渡された木製の床にはもはや戦火の爪痕は残されていない。

漁船から積み荷が降ろされ、広場に並べられた魚の周りには村人が集まる。南国特有の日差しの中、新たな村長の声がよく通る。

そんな村の喧噪から外れた棧橋の先。海が波立っている。その波



の中から海竜ラギアクルスの青い甲殻に包まれた腕が伸び、棧橋を掴んだ。その背に青い太刀を背負ったハンターが一息に橋の上へとあがった。

水を滴らせながら村を歩く。鎧同士の擦れ合う音を響かせながらハンターは村の中を目指す。棧橋の先の小さなアーチ状の門を通り抜けると、そのすぐ脇にはカウンターが置かれている。ここでは赤い制服を着た受付嬢が退屈そうに欠伸をしていた。

受付嬢はハンターの姿に気づくなり、右手を大きく振る。

「ねえ、どうだった？」

ハンターは足を止め、兜を外す。すると、水に濡れた髪が陽光を反射し、その鮮やかな金髪を栄えさせる。最も暑い季節に生まれたことから、ハンターはこう名付けられた。

アポロと。

あの戦いから一年。まだあどけなさを顔には残しながら、アポロはすでにラギアクルスを狩ることができるほどの成長を見せていた。あの時交易船の船長から与えられた太刀はすでにその手に馴染んでいる。

「間違いない。遺跡の下で巨大な何かが暴れているようだ。この頃頻発している地震はそのせいだな」

カウンター越しに受付嬢、アイシャと会話する。そのことは以前から変わることのない。兜をカウンターの上に置くと、伸びた背はアイシャよりも高くなっていた。

「やっぱり古龍なのかな？」

「その可能性は大いにあるな」

あれから世界では古龍の発見が相次いだ。これまでは天災や天変地異として片づけられていたものの何割かに古龍が絡んでいることが判明したのだ。

アポロも最近モガ村を襲っている謎の群発地震の原因を探るべく、単身で海に潜っていたのだ。そこで見かけたのは、何か巨大な生物がモガ島の地下に通じる海底洞窟と外洋とを行き来しているという事実。

仮に古龍だとすれば、また未曾有の大災害にまで発展する恐れがある。

ついアポロが難しい顔をしていると、アイシャがそつと囁いた。

「ねえ、アポロ。ちょっと耳貸して」

「こっか……」

体を傾け、顔の横をアイシャの口へと近づける。すると、頬に何か柔らかなものが触れる感触があった。口づけされたのだとすぐにわかった。

「って、いきなり何するんだよ!？」

「いいでしょ。だって、私たち、恋人同士なんだし……」

頬を赤くして、恥ずかしそうにしているアイシャに釣られてアポ口もつい顔が火照ってくる。

「あのさ、じゃあ、俺からしても、いいかな……」

「う、うん」

カウンターが邪魔で身を大きく乗り出す必要があった。アイシャからも進んで身を乗り出してくれた。右手から手袋を外して、アイシャの頬に触れる。互いの唇が近づくに連れてもはや視界は必要ない。

ただ触れ合った唇だけで相手の存在を感じ合った。

それからどれくらいそうしていたのかわからない。どちらからともなく唇を離して、キスをしていた時は気にもならなかったのに、終わってしまったと気恥ずかしくて目も合わせられない。

「じゃあさ、古龍のことで話してくるよ。村長さん、いつものことだよな？」

「その必要はないわ」

聞き覚えのない若い娘の声。広場の方からだ。アイシャはカウンターから身を大きく乗り出して、アポ口は少し体の向きを変えただけで声の主を見つけることができた。

何とも特徴的で、綺麗な娘だった。白い髪が長く、瞳は澄んだ赤い色をしている。ゆったりとした服装に施された刺繍は見事で、あ

からさまに偉い人だと主張していた。それとも、傍らで少女を日傘で守るメイド服の女性を従えているからだろうか。何にしろ、普通とは違うオーラが放たれていた。

メイドの女性はとても好意的な微笑みをしている人で、そして恐らく目は見えていない。傘を持たない左手には義手がはめられていた。重度の障害を負いながらも、閉じられたままの瞳が置かれた顔は本当に笑顔が明るい。

二人とも、モガ村で目にしたことのない顔である。

「あなたたちは？ それより、いつからそこに？」

緊張の一瞬であった。

「ねえ、アポロ。ちょっと耳貸して、の辺りですよ」

メイドさんは、本当に、笑顔が眩しい。

「一番見られたくないところから見られてる！」

顔を真っ赤にしたアイシャが羞恥に耐えきれずカウンターの奥へと逃げ出してしまった。

「あゝ、アイシャ……」

特にこの場において欲しかったわけではないが、一人置き去りにもして欲しくはなくてつい無意味に手を伸ばしてしまった。

「大丈夫だって。私はあなたたちが盛ってる現場に興味なんてない

から」

少女の方はどうも言葉遣いが悪い。それに、態度が偉そうだ。

「言葉は選んでくれよ。つてかあんたたち何者だよ？」

メイドの女性が左手の義手 先端が爪状になっている 器  
用に使って背中から短めの棒を少女へと手渡した。先端部分に布が  
巻かれていて、少女は布を解くと一気に風に乗せて広げた。

そこには、七人の女性の横顔が描かれていた。七人の魔女の旗で  
あつた。

「魔女の戦旗……。じゃあ、あんたがミスカトニツクのお姫様！？」  
聖堂騎士団で赤い瞳をした人物なんてきつと多くはない。広く知  
られている人ともなると一人しかない。

「お父様が国王やめてお姉さまと政権交代が行われたから、正確に  
は王妹だけだね。それより、古龍が出たんでしょ」

「まだ正確な情報は掴んでないけど、恐らく間違いないと思う」

お姫様は後ろのメイドさんと二、三言葉を交わしてから、アポロ  
へと視線を戻す。そんな行動の節々にさえ威厳が感じられる。言っ  
てしまうなら、とにかく偉そう。

「村のハンター、あなた、名前は？」

「まず自分が名乗るのが礼儀だろ」

「私のこと知ってるんでしょ。それなら省いた方が効率的」

どこか不機嫌になって、お姫様は旗を畳み始めていた。アポロを見るその眼は、何のためにわざわざ旗を見せたと思っっているんだと言外に言っているようである。メイドさんはずいぶんおらかな様子だが、こうでもなければこのお姫様にお仕えすることはできないのかもしれない。

「アポロだ。アポロ」

頭痛がしてきたと錯覚して、アポロは額に手を当てる。メイドさんの微笑みだけが救いである。

「私はアマランサスと申します」

どこかで聞き覚えのある名前だった。人の名前を覚えることに自信を持ってないアポロであったが、言われてわからないことはない。

「じゃあ、あなたがヒュプノスさんたちが言っていた!？」

額から手をどけて見たメイドの顔は、瞳を閉じたまま微笑んでいた。

「ヒュプノスもイシュタルもアルルも、みんな頑張ってくれたみたいですね。お願いして助かりました」

対古龍の最前線に立ち続けたお姫様のメイドが、単なるメイドではないという訳だ。お姫様にしても単なるわがままな娘ではない。

ファートウス・ベルムの英雄たちを前にしているという実感がよ  
うやくわいてきた。

「古龍との戦いあるところに姫の姿ありか。さすがだよ、セントバ  
ーナードさん」

お姫様の不敵な笑みが、ほんの一瞬の間をおいて殺気を放つ。

「セントポーリア！ 誰、セントバーナードって！？ 犬種！？」

「あれ、違った……。いや、どうも人の名前覚えるの、苦手で……」

目が思い切り見開かれ、すごい剣幕でアポロのことを見ていた。  
幸い、日傘の下から出ることはできないらしく、飛びかかってはこ  
ない。

「今度の古龍は水の中みたいだけど、あんたを餌に釣り上げようか  
？」

「いや、ちょっとマジな目して見ないでくれ」

この人ならやりかねない。アポロの足がつい後ろの床を擦る。

「ほら、セントポーリア。お話が進みませんよ」

アマランサスの優しい声に、セントポーリアは次第に落ち着きを取  
り戻す。この二人、お姫様とメイドというより、猛獣と猛獣使い  
のようにも思える。

一度深く深呼吸をすると、セントポーリアはその赤い瞳をまっす

ぐにアポロへと向けた。ついカウンターの奥を見たのは、目をそらすためではなくてアイシャがないことを確認するためである。セントポリア王女は、黙ってさえいれば綺麗な人だった。

そう、黙ってさえいれば。

「じゃあ、詳しい古龍の話聞かせなさい」

傲慢で高圧的。地図を畳んだ旗を担ぐ様子など、どこか堂に入っている。まるで槍を構える戦士のように。王国のお姫様なんてみんなこんなものなのだろうか。

「海底洞窟の入り口に、巨大な生物が通った痕跡があった。でも、聖堂騎士団はこんな小さな村にも協力してくれるのか？」

「古龍の問題は里単位で区切れるような小さな問題じゃないからね。それに」

村の中を風が吹き抜けた。突然太陽が姿を隠す。雲でもかかったのだろうか。見上げると、船底が見えた。そう、巨大な飛行船の船底が見えていた。

「太古の巨龍と戦った戦旗の王女はね、古龍が命を脅かす限り、どこへでも出向くんだから」

影の中、王女は笑っていた。傲慢に思っていたものが自信に、高圧的に思えたものが使命感へとすり替わってしまったように、セントポリアは笑う。

古龍から人々を守ることができるの自分しか、自分たちしかないな



い。そんな自負と自信とがその顔からは見て取れる。

「たとえどんな戦いであっても乗り越えてみせるよ。七人の魔女の名に誓ってね」

戦いは終わった。世界は救われた。

古龍という強大な招かれざる客を、大陸の、世界の命が総出で迎え撃ち、勝利を収めた。

しかし、忘れてはならない。

古龍はかつてこの大地の支配者であった。それが主の座を逐われ、極地へと追いやられたのは初めてのことで決してない。

この世界が幾度となく経験した、ごくありふれた光景にすぎないのだ。環境が代わり、かつての支配者が放逐されることなど当たり前のことではない。

人よ、注意せよ。

ファートウス・ベルムは人に強力な力をもたらすこととなる。剛種武器、古龍の素材を用いた武器が兵器とまで呼べるほどの破壊力を持つことを証明してしまった。そして、セクメーア砂漠には大量の古龍の亡骸が用意された。

人は古龍の力を使い、より文明を発展させていくことだろう。やがては古龍さえ力でねじ伏せ、そして忘れてしまう。かつて肩を並

べて戦った友のことを。同じ世界を守っていたモンスターという存在を。

人はモンスターさえ、やがては競争相手とも、環境を守る友人とも思わなくなる時が訪れる。

その時人は気づくのだ。敵は、自分と同じ姿をしていると。人の敵は人なのだ。

かつて、その巨大な力で他種を圧倒した古龍が、その身に同族を殺すための毒を含ませたことと何ら変わらない。

人はやがて人を殺すための力を発展させていくことだろう。

その兆候はすでに現れている。

王国に仕える特務騎士は対人を想定した格闘術を身につけ、暗殺術さえもその武器としていた。

王国がそれぞれ所有していた大型飛行船は狩猟に使うには巨大すぎる。

どちらも、人が人との争いを想定して作られたものであった。

人は古龍と同じ道をたどる。人と人が争い、そのために特化した能力を開花させていく。そして、その末路もまた、古龍と等しい。

環境が変化し、人の時代が終わりを迎えた時、新たに台頭する種が人を脅かす。

そして戦うことになるのだろう。古龍と、人と竜がこの大地を賭けて死闘を繰り広げたように。人と、新たな世代の支配者が争うことになる。

これは宿命。これは定め。

この大地で幾度も繰り返されてきた、まさに運命の戦争なのだ。

だがそれでよい。たとえ人が駆逐されようと。この大地から追い出されようと。

それは宿命であり、太古の昔から脈々と繰り返されてきたこと。

生まれ、栄え、そして滅びる。

これこそが、この大地を継ぐということなのだから。

〈MONSTER HUNTER・太古の巨龍と戦旗の王女・完〉

## 後書き

如何でしたか。

全五章、六〇万字を超えて描いてきたハンターたちのお話もこれでおしまいです。

はじめは単に「死神」というクエストを独自解釈してみたいという思いから始まりました。本当にモンスターや世界観を題材に短編を書き連ねていこうかと考えていたのです。ただ、第一章の後半を執筆中について創作意欲が沸々と。

その結果、それぞれ独立したお話ながら世界観を共有し、同じ時代に生きるハンターたちが世界の危機に並んで立ち向かう、そんな群像劇を描こうと考えるに至りました。

私のハンターとしての生活はポータブル2に始まりました。弟が話題作が中古で安かった――当時、すでに2Gが発売されていました――からと二つ購入してきたことに始まります。

私としてはやりこみゲームということで凝り性の私が出すべきゲームではないと嫌な予感を抱えながら弟のすすめを聞いていました。初めは手を出すことさえ躊躇われたのです。

ところが、ある防具との出会いが私を動かしました。

そう、メイド服です。

こんなネタ装備もあるのかと、つい興味を抱いてしまいました。せめてこの装備を一式揃えるくらいはしてみようかな、そう考えたことが、すべての悲劇の始まりだったのです。

ご存じの方も多いとは思いますが、P2でメイド服を作るには訓練所のコインが必要です。そしてこの訓練所、訓練とは名ばかり、それはそれは恐ろしいところでした。

本来訓練とは実戦に備えて体を鍛えるための場所です。ところがここは、実戦を経験してからでなければ受けさせてさえもらえない

のです。早い話が、対象となるモンスターを狩ってからでなければ、訓練にメニューが追加されません。

素人ハンターがそこまで至るにはどれほど大変かわかりでしょう。

武器の種類もわからない。とりあえずイメージで大剣を選びました。攻撃後の隙を回転回避でキャンセルできることを知らず、また納刀での立ち回りが基本ということもわかりません。あまりに動きが鈍く隙だらけで、尻尾が切れるということも都市伝説のように感じていた時期もありました。大剣をあきらめ、ハンマーに移った時も、スタンなんて遠い遠い夢のお話です。

畏の使い方もわからない。調合の組み合わせも頭に入っていない。思い出しても、悲惨な戦いでした。イヤンクックに恐れおののき、リオレウスからは逃げ回りました。

それでもハンター生活を続けてこられた理由は、メイド服を作るという目標を最初に設定してしまったからです。

ダイミヨウザザミに下から突き上げられ、ガノトトスに眠らされようと、フルフルの攻撃力の高さに怯えてもなお狩りを続けることができたのは、メイド服を作って見せるという思いだけであったのです。

そう、私の狩りはメイド服とともにあったと言っても過言ではありません。

それから2Gに手を出して、フロンティアも始めました。トライ、ソードとモンハンを続けたことは、小説をこらんにただければわかりかと思いません。

特にフロンティアでは当然のようにメイド服を着込み、ヘビィボウガンを担いで野良での狩猟も幾度となくこなしてきました。その後、キノスなどのドレス調の装備は必ず集め、強化を終え、美しさはスキルに優先されるの言葉の下、テンプレと呼ばれるおすすめ装備をことごとく無視してきました。猟団内では、以前もどこかで書いたような気もしますが、「後藤さん、この装備なんていいと思う

よ。デザインも”ドレス”みたいだし」と言われるまでになったのです。

そしてトライ、ソードではもちろんスカラーを作り、特にソードでは捕獲用装備として使用しています。

このように、アマランサスというキャラクターは、複数の意味で私の分身とも言える人物でした。実際、第四章で使用している装備は、私がトライで愛用していたものです。

作品にしても私がしてきたモンハンを独自に繋ぎあわせたものになっています。

この全五章の作品群は、まさに私の狩猟の集大成とも言える作品であるのです。

さて、私がモンハンを書くために挑戦したかったこと、自らに科したことを並べたいと思います。

挑戦したかったことは、力と力のぶつかり合い、古龍という存在の説明、世界観や地理の設定、独特なキャラクターの使用、群像劇の構成、挙げれば切りのないお話ですが、だいたいこのようなことになります。

反対に科したことは、ファンタジーにはしない、伏線は丁寧に、ご都合主義を排斥せよ、原作は参考程度などになります。

#### ・力と力のぶつかり合い

私は以前ガンダムを題材に小説を書いていました。ところがガンダムというのはそもそも巨大ロボットの戦いが主題ではなく、価値観の衝突がメイン・テーマです。ロボットなんてあくまでも舞台装置にすぎません。

そのため、強ければ勝つというわけではなく、志の多寡がその人の命運を分ける、少なくとも私はそんな書き方をしてきました。そのため、双方が迷い、戦いとは立ち向かうことではなく己と向き合

うことにある、そんなお話に終始してしまいました。

これが悪かったとは言いません。では、私には果たして力に力で立ち向かうようなお話を書くことができるのだろうかと不安になりました。

その結果がこのモンスターハンターであったのです。古龍をRPGに登場しそうなモンスターにすることで巨大な敵を乗り越える人々の姿を描いてみたかったのです。

そのため、砂漠の北と南、狂気の山脈、孤島での戦闘は敢えて人も武器もその質を偏らせて、様々なパターンを研究しました。

アマツマガツチ戦では、ゲーム中でバリスタが散乱しているフィールドを飛行船の甲板と置き換えました。巨大な古龍と飛行船ならどう戦うか、空を飛ぶことができない人がどのようにして空を自在に飛び回る古龍と戦えばいいのか。そんな足場のない戦いというものの練習になったのではないのでしょうか。

ナナ・テスカトリ戦は、勝てるはずのない戦いをどう收拾をつけるかということに苦労させられました。真つ正面から戦えば古龍が圧勝します。それでも新米のハンターが必死に戦う様子を描きながら、最後の奇跡も偶然ではないと理由付けて、ご都合主義ではない奇跡というものを目指してみました。個人的にはまとめた気でいますが、やはり最後のシーンはご都合主義だと思われる方もいるのではないかと不安には感じています。しかし、私が恋する少年を描くと妙に一本気な若者になってしまいますね。

アルバトリオン戦はとても簡単。なるべく大型の武器を使わず、人の戦いを描いてみました。ここで大変であったのはダメージ・コントロールです。窮地を演出したければ、人には傷ついてもらわなければなりません。しかし、傷つきすぎてしまうと死んでしまいます。相手の攻撃を受けて適度に体力を徐々に減らしながら、かつ最

後の最後にはわずかばかりの力しかのこされていないことが望ましい。そんな体調管理に苦慮させられました。生身の人が戦うという戦いのいい練習になりました。

ヤマツカミ戦は、異色でした。ただでさえ足場がなく、おまけに飛行船には戦闘能力がありません。普通には戦うことさえできない状況です。また、飽きというものを意識したこともありました。これまで激戦が三つも続き、四回目も同じようにただハンターが苦しみながらも勝利を収めるというパターンではいくらなんでも重複がすぎます。そのため、ここでは敢えて逃げきることを勝利条件としました。よって戦闘そのものは途中で中断し、飛行船が逃げきった段階で終わらせたのです。納品クエストのイメージですね。戦わないうことの勝利という少々奇抜な戦いを描いてみたいというのもありました。

テラドミヌス戦が一番の気がかりです。たった一人のハンターが一〇〇〇mほどもある巨大な古龍を倒すというのは、果たして受け入れてもらえたのでしょうか。ただ、この戦いこそがまさに集大成であったと私は考えています。

第一章の主人公が見つけた壁画に、古代の人がどのように戦ったのかが描かれています。

第二章では王龍テラドミヌスが発する霧の性質をすでに明示しておきました。

第三章では、最終章に明かされる王龍が峡谷の下に眠っているという事実から霧がテラドミヌス由来であるということを示唆しています。

第四章で登場した凶眼の力は、一度地形を覚えれば見てなくとも歩くことができることをお伝えしました。

最終章でも、王龍は三度に渡って角を突き上げて勢いを殺すという事実を示し、また、ハンターたちがその背に乗っています。加え



てソフィアとスノードロップの二人の特務騎士が凶眼の性質を再確認しています。また、グラジオラス特務騎士の捨て身の攻撃によって、凶眼は情報を更新することができました。

このように、この作品は物語そのものが王龍討伐という一点へと向けて構成することを心がけていました。群像劇の完成形として、様々な人の思いと行為がより合わさって巨大な古龍を倒した、そんな戦いを示したかったのです。

#### ・古龍という存在の説明

これは自らに科したことも重なるのですが、ファンタジー要素は極力排斥することにしました。その理由として、ファンタジーは絵空事として、言ってしまうなら何でもできてしまうからです。人の手から突然火が放たれたり、窮地に陥った人が突然魔法の力に目覚めたり。それが唐突に行われるなど、言ってしまうなら伏線軽視になりかねません。

もちろん、ファンタジー作品がすべて荒唐無稽な展開ばかりと云うつもりはありません。ただ、私には原因があるからこそ結果が起きるといふ理路整然とした作品を描きたいという目標があります。

その点において、何故古龍はあのような姿をし、人を襲うのかを描く必要がありました。そのため、進化論っぽいものを持ち出してみたりしたのですが、私は別に進化論の専門家ではなく、また、様々な学説がまだ落ちていない分野のようですので、これでもいものか不安に感じています。また、本能という概念は、一度でも論理的に考えたことのない人には理論が跳躍して聞こえてしまっただけではないかとも危惧しています。

言ってしまうなら、ファンタジーでもSFの要素を。しかし、その狭間でおかしな位置に偏ってはいないかと不安にさせられてはいません。

・世界観や地理の設定

オリジナル作品をいまだ書き上げたことがないため、ここは私にも悩ましいところでした。特にモンハン世界は我々の世界とは異なった発展を遂げていることは自明です。ゲームの雰囲気崩さないままで、どうお話の展開にあわせて行くかが苦労させられたところ  
です。

政治制度はもっともらしく組んでみましたが、内部組織を表にまとめたことはなく、中身はすかすかです。作中に登場しないからと割り切ってしまうことも可能ですが、これでは政治劇を描くのは当分先のお話になりそうです。

ただ地理に関しては若干自信があります。まあ、これまでに登場した地名をお話の組み合わせで作りましたので、最初から全体像を描いていたわけではありませんでしたが。また、海からいきなり山脈がそそり立っているという構図もやや不自然に思えます。私自身地理に精通しているわけではないため、その点は調べておくべきかもしれません。ただ、セクメーア砂漠が山によって封鎖されているという事実と、そのためにドンドルマ地方が通り道になってしまうという現実の構成くらいは、うまくまとめられたのではないでしょう  
うか。

余談ですが、セクメーアやシュレイド、ドンドルマにミナガルデ、ロックラック、ユクモ、モガなどの地名こそモンハンに由来しますが、他はクトゥルフ神話から地名だけ持ってきた捏造の地名です。レムリア大陸なんてモンハン世界にはありません、ご注意ください。

・独特なキャラクターの使用

ガンダムではできなかった、とにかく癖の強いキャラクターを登場させてみたいと、そう、考えました。

正直やってみてよかったという思いと、やってしまったという後

悔が入り交じっています。その最たる例が当然アマランサスです。第一章でやりすぎて、慌てて章を経ることに設定を追加しキャラクターを修正した人物です。最後にはそこそこの味のある人物になってくれたのではないかと期待しています。やはり独特で独自のキャラクターを誕生させるということは難しいものです。

ただ、ガンダムでは登場させられなかった非現実的なキャラクターを多く描くことができたというのは収穫でした。

キャラクターを作るということは現実と非現実のシーソーゲームであるということがよくわかりました。

#### ・群像劇の構成

群像劇は、単に登場人物が多ければ群像劇になることはありません。このサイトではハーレムものが多いため、つい例にしやすいのですが、私はハーレムものを群像劇とは捉えていません。確かに登場人物は数多い傾向にありますが、しかしどなたも大概主人公が好きということと一致し、そのために思想性が偏っていることがままあります。

わかりやすく例を出すなら、料理店を想像してください。あなたは様々な料理を食べられると評判の店に行きました。メニューにはこう書かれていました。豚肉の焼き肉、豚肉の炒め物、豚肉のしゃぶしゃぶ、豚肉の刺身、豚肉の……。

確かに様々な料理が並んでいます。結局どれも豚肉にすぎません。なお、豚肉を生で食べてはいけません。

ハーレムもののメイン・キャラクターを占めるであろうヒロインたちも結局は豚肉です。主人公のことが好きで、容姿端麗、もちろん年齢はせいぜい一〇代から二〇代前半でしょう。キャラクターの根幹が一致せざるをえません。この娘はツンデレなんだ、この娘はお嬢様なんだ、この娘は剣の扱いがともうまいとは言って違いを強調しても結局は同じ肉をどう味付けるかの違いでしかないのです。

異性の嗜好が同じで、性別も年齢も近い美少女というだけ。ヒロインというものは記号化してみるとあっさり括れてしまうのです。

これでは人間は多くとも、人間像は数少なくなってしまう他ありません。それでは群れる人間像の劇、群像劇にはできないのです。

よって私がキャラクター作りにおいて注意していることは、様々な年齢や立場の人を登場させることです。様々な考え方や価値観を登場させることです。

たとえば会議で紛糾させたり、ハンター以外の登場人物を数多く登場させたのも、価値観というものを狩猟者、戦う者だけに固定しなくてはなかつたからです。どんなに強いハンターがいても、その戦いの隅には戦えず怯えている人が必ずいます。また、戦えなくとも影から支えてくれる人々の姿も必要になります。

私にとって世界観を作るということは全体のシステムを思い浮かべることであり、そのためには多様な人間像を必要とします。

ただ、今回は対古龍で比較的あっさり団結してしまいましたので、もう少し荒れてもよかつた気がします。しかし、やりすぎてしまつとガンダムになってしまいます。何にしても匙加減が重要という事です。

また、括ることができないというのは裏を返せばパターン化が難しいということであり、そのため印象の強い人もいれば弱い人もいるということになりかねません。登場人物が二桁を軽く超えました。果たしてその中のどれだけの人が読者の方々の印象に残っているかどうか、わからない状況にあります。

サブ・キャラクターの扱いというものの難しさですね。強すぎればサブではない。弱すぎれば登場させる意味がない。

この匙加減が、きつと私の作品作りの問題点となることでしょう。

では、科した点。

・ファンタジーにはしない

これは作品づくりのためのというより、モンスターハンターらしさを損なわないためです。モンハンの世界に魔法もなければ魔王一角の魔王はあくまで比喻です。もいません。モンスターとはあくまでも動物のことであり、ゲームのタイトルも正確に発音しようとするれば、実はアニマル・ハンターになります。

そのため、モンスターの生態は現実世界に存在する動物の習性などを参考に組み立てました。

たとえば、モンスターは村を原則襲いません。その理由は簡単です。メリットが何もないからです。村を襲つても食料が得られるかどうかわかりません。また、いるのは骨と皮ばかりの人間ばかり。

それならアプトノスの一頭でも狩つた方がよほど確実に効率的です。モンスターはとても合理的な生き物なのです。動けば腹がすきまです。腹がすけば何か食べなければなりません。しかし、餌を得るために一〇〇のエネルギーを使って、五〇のエネルギーしか得られなかったとしたら餓死します。

人間を見てください。ほとんどが骨と皮。一人殺してもせいぜい一〇程度としたなら、おそらくアプトノスは最低でもその一〇倍はエネルギーを得られることでしょう。人間を一〇人喰うよりもアプトノス一頭をしとめた方が遙かに効率的なのです。

村を襲う場合、人々も逃げますし、ハンターもいる。おまけに苦労して殺してもわずか一〇のエネルギーしか得られません。コストパフォーマンスは劣悪です。村を襲えば襲うほどモンスターはやつれていくかもしれませんね。

ハンターとコスト・パフォーマンスの悪さ。こんな二重の危険を冒すようなモンスターなんていません。

もちろん、まったくないとは言いません。たとえば、村のハンターがギルドの決まりを破つて周囲のアプトノスを狩り尽くしてしまつたとかあれば、自業自得です。また、不慮の事故という可能性もあります。たまたま村に迷い込んでしまつたモンスターが怖さのあ

まり暴れてしまった結果、人が殺されてしまうようなことも。私は以前父の仕事の都合でアフリカのケニアに住んでいたことがありましたが、そこで父の友人が村に迷い込んだ象から子どもを村の子どもをかばおうとして亡くなったという話を耳にしたことがあります。ただそれも例外的なお話。モンスターは敢えて村を襲撃することなんてありません。そんなこととしてしまったら、それこそドラゴンクエストの魔王に率いられたモンスターになってしまいます。

そんなこともあり、第三章では村人がモンスターに殺された原因を、敢えて事故ということ扱っています。

せつかくですので、モンスターが人を意図的に襲う理由を二つほど挙げておきましょう。どちらもケニアでのお話です。人を襲うことはコスト・パフォーマンスが悪い。でも、それを考慮してもなお狙うべき理由がある時があるのです。

一つは、人は簡単に狩ることができるということです。ケニアでサバンナのただ中に鉄道を通す計画があった際、従業員が次々にライオンなどに襲われたそうです。爪も逃げる足もない人は狩るだけなら簡単だからです。わざわざ村を襲うライオンはいませんが、自然の中に不用心に立ち入った人はそれだけ容易に狩れる獲物に成り下がってしまうのです。だからこそ、私はハンターという職業を単なる狩人ではなく、採掘や採取をも担当する便利屋のように描いたこともあります。第二章のお話です。モンスターと少しでも戦う術を持つものだけが自然の中に立ち入り、貴重な資源をいただいているという設定にしました。

続いて、ケニアでは一時期人喰いライオンによる襲撃が相次ぎました。村にまで入ってきて、軒先で襲われて捕食された人がいたほどです。後にライオンが殺害された際、ある特徴が見つかりました。牙や爪が先天的にいびつな形をしており、とてもではありませんが狩りに適してはいなかったのです。他の動物を狩ることができず、仕方がなしに人を襲っていたのだらうと推測されたのです。このお話は第三章に使用しました。

このようにモンスターとは非常に合理的です。何せ、食料のとり方一つとっても命がけであるからです。理由がなければ人を襲うこともありませんし、動物は血に飢えた猛獣ではありません。

この観点から、私はモンスターを怪物にはしたくありませんでした。古龍の残忍な性質には設定を盛り込みました。

ファンタジーにしたいくないという理由の中には、モンスターたちを人とともに生きる動物としての姿を追求したかったからという理由も含まれています。

ですからみなさん、今度からモンスターハンターではなくてアニマルハンター、モンハンではなくてアニハンと呼びましょう。

まあ、私はアニマルでは語呂と響きが悪いと考えますので、モンハンで通しますが。

・伏線は丁寧

後のご都合主義を排斥せよと重なるところもあるのですが、私は以下のような言葉を肝に銘じています。

「意表を突かなければ仕方がない。荒唐無稽では意味がない」

王道を突っ走り、誰が見ても展開が読めちゃうような作品は誰も見たがらないでしょう。しかし、まったく展開が急すぎる作品は品がありません。意表をつくだけなら簡単だからです。

山荘に閉じこめられた一〇人の若者。次々と殺されていく仲間と姿のない殺人鬼。名探偵が挑んだ最大のミステリー。犯人は一体誰だ？ 名探偵の恋人か、恋人の妹か、それとも口の悪い悪友、山荘の管理人？ 謎が謎を呼ぶ。

犯人はポロロッカ星人で、動機は暇つぶしでした。

ほら、意表を突かれたでしょう。でも、驚きよりは釈然としない

気持ちの方が大きいでしょう。そもそも宇宙人なんて登場していない癖にいきなり登場したからです。

このように伏線を張るということは単にお話の展開を丁寧にするということに加えて、それで納得してもらったための準備でもありません。

私の場合特にナナ・テスカトリ戦やテラドミヌス戦はかなり特殊な戦い方で勝利しています。そのため、そんな展開を納得していたくために伏線は小説の基本であるというよりも必須事項であったのです。

正直この戦い方をどれほどの方に納得いただけたかわかりません。

私としては展開を読まれたくはありません。読者の方々が読んでそうか、あれはこのための準備だったのだと、すでに展開を予想するための材料はすべて与えていたのにわからなかったと悔しがるような、そんな伏線と展開こそを理想としています。

しかし、ここが大変難しい。伏線を与えすぎると展開をわざわざ説明してしまうことになります。少なすぎると、上述の通り荒唐無稽な作品になってしまう。

やはり匙加減というものに苦労させられています。

・ご都合主義を排斥せよ

伏線の項とほとんど重複しますね。ただ、違う点はもちろんあります。

たとえば、グラジオラスただ一人が王龍の背で生き残っていたり、古龍の群を突っ切った唯一の飛行船に乗っていたのがヴァルカンであつたりなどしました。

これはご都合主義とのそしりを受けても仕方ありません。よつて、ここからは釈明としてお聞きください。

私は、最後にものを言うのは思いであると常々考えています。死



中に活を求めるといふように、どれほどの困難に直面しても前を向く気持ちがある人は強いものです。崖を飛び越えることと同じです。少しでも駄目かもしれないと思いこみ、腰が引けてしまつては飛び越せるものも飛び越せません。必ず飛び越すという強い意志を持った者が崖を越える権利を得るのです。そして、それは崖の幅が跳躍力ぎりぎりであればあるほど、越せるか越せないかの瀬戸際であればあるほど、絶対に飛び越えてみせると強く思った者だけがそれを飛び越えることができます。

ヴァルカンとグラジオラスも同じようなことだと思います。特にヴァルカンは何が何でも物資を届けるということにすべてを賭けていました。もしも古龍の群を振り切るために必要な条件というものがあるのだとしたら、それは意志と覚悟ではないでしょうか。

また、誰でもよかつたのです。物資を届けられるのだとしたら、王龍の霧を一瞬でも剥ぐことができるのだとしたら。そして、この戦いに挑んだ者は誰であれ同じ思いを共有していました。

必ず誰かが成し遂げたはずのことを、たまたまヴァルカンとグラジオラスが実行したにすぎません。そして、実行できる人物であったことから、この二人は名前を与えられ、登場人物として注目されていたにすぎない。そんな気がしています。

決して展開の都合ばかりを優先した訳ではない。そんな思いです。

#### ・原作は参考程度

これは主義というよりもキャラクターです。私は変に設定を組むことができるため、骨組みさえ借りられれば詳細な設定は必要とはしません。反対に、わざわざ調べる苦勞を背負い込むくらいなら、独自に設定した方がよほどいい練習になります。

私は、二次作家ではあつても、ファン・フィクション・ライターではありません。この作品が好きだから、この作品にもっと触れるための手段として創作しているのではなく、単に後に独自に描く

世界のための、いわば補助輪としか原作を捉えていません。

私の目的とする整然とした世界観を展開する上で、ハンターズ・ギルドの統治による管理された狩猟という構造はよい足がかりでした。

そのため、設定が込みすぎていて、他のモンハン小説とはずいぶん毛色が違う気がします。それはそんなところに由来します。確かにモンスターハンターの二次創作であることに違いはありません。しかし、そもそもの入り口からして異なっているからです。

独自設定がとにかく多い癖に、さもこれが公式であるかのように描いていたりなど、戸惑われた方も多いかもしれません。

さて、いろいろと並べましたが、これらはすべて私の独りよがりすぎません。果たして私が伝えたいと考えていることが皆様に伝わっているかどうかわかりません。

何故なら、感想を書いていただけないからです。

現在自分の作品がどのように捉えられているのかは本当に手探りの段階です。これまで荒らされたことや批判めいたものをいただいたことはあまりありませんが、そもそも絶対数が少なく、統計上有意な違いが生じている恐れがあります。

早い話がコメントを寄せてくれる人が少なく、相対評価を確定できない段階です。

こんなに長々と書きましたが、結論は一つです。

感想をください。

いい点から変えた方がよい点。設定上の不備を指摘してください。てもいいですし、忌憚のないご意見をお願いします。

どうせ一日に感想が一〇件も二〇件も来るような人気作ではありません。コメントは必ず - 作者が事故死した場合などはご了承ください - 返信する所存です。

作品の感想でなくても言いたいこと、聞きたいことありましたら

メッセージの方にどうぞ。

モンハンはこれで終わりますが、次はガンダムSEEDの完結編を執筆予定です。これからも（2011年3月時点）当分はこのサイトに出没しますからいつでもどうぞ。

では、六〇万字を越えて、大陸全土が危機にさらされるというモンハンらしくないモンスターハンターはこれで終わりです。

本当はもっと多くの方に読んでいただきたかったところですが、チートでも転生でもハーレムでもない作品です。おまけに露骨な一人称型でもありません。

このサイトは私の作風が合っていないこともわかっています。モンハンはガンダム以上に注目されてません。ガンダムではテーマが生命倫理と重く難しかったことを反省して、モンハンでは進化論と本能というより身近なテーマにしたのに。

チートで転生でハーレムで一人称で書けば一定数の読者の方がつく現状がちょっとくやしいので、きつとスケールだけならこの作品が一番だろうと考えて、キーワードにスケールなら一番と書き込んで他のモンハン作家の方々に喧嘩を売って最後としたいと考えています。

では、これにて後藤正人のモンスターハンターは終わりです。

ただ、設定資料集の方ではモンスターの生態考察はたぶん、しばらくは続けて、飽きたら完結させます。何かゲーム内で疑問に感じておられる点や、ご自身も独自に生態を考えたなどのご意見ありましたらお聞かせください。

場合によっては説に修正を加えますし、いただいた疑問からモンスターの生態を考察することもあるかもしれません。

もうモンスターハンターを題材に書くつもりはありません。ただ、心残りもありますね。泳いで行う狩猟をあまり描けなかったことです。元々ベースはフロンティアを進めていて、泳げるのはトライだ

け。水中戦を描くには伏線が少なすぎました。

余談ですが、最後に存在だけ登場した古龍は、もちろん大海龍ナバルデウスです。もしも書くとするれば、今度はトライをベースに水中での激闘を描きたいところですが、あまりならだらと続けても仕方ありません。

ここら辺が引き際でしょう。

大丈夫。きつとアマランサスなら思いも寄らない方法で戦い、ナバルデウスとて討伐してくれることでしょう。それを私たちが知ることができないだけで。

では、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0755p/>

---

MONSTER HUNTER最終章～太古の巨龍と戦旗の王女～

2011年8月12日21時30分発行